

博士論文

スリランカ紅茶セクターにおけるこどもの教育格差とその要因

福田祐子

目次

1 序章	1
1.1 問題意識と背景.....	1
1.1.1 本研究の問題意識.....	1
1.1.2 本研究の背景.....	3
1.2 目的と仮説と意義.....	6
1.2.1 本研究の目的.....	6
1.2.2 本研究の仮説.....	9
1.2.3 本研究の意義.....	10
1.3 研究方法と論文構成.....	11
1.3.1 こどもの活動調査.....	12
1.3.2 現地調査.....	12
1.3.3 論文構成.....	13
2 先行研究	15
2.1 歴史的背景.....	15
2.1.1 植民地支配とプランテーション経済.....	15
2.1.2 紅茶産業構造の変化.....	18
2.2 紅茶農園の生活と人びと.....	23
2.2.1 プランテーション開拓と人びと.....	23
2.2.2 季節労働者から定住労働者へ.....	26
2.2.3 こどもを取り巻く環境.....	29
2.3 紅茶産業におけるグローバル化の影響.....	37
2.3.1 グローバル化と経済発展.....	37
2.3.2 農園の社会発展と人間開発.....	39
2.3.3 社会的文化規範の変化.....	44
2.4 こどもの教育と人生の選択.....	46
2.4.1 スリランカの教育制度.....	46
2.4.2 こどもと教育.....	53
2.4.3 ケイパビリティ・アプローチと教育.....	55

3 居住地における教育達成状況	62
3.1 こどもの活動調査の概要.....	62
3.1.1 こどもの活動調査の目的.....	62
3.1.2 こどもの活動調査の特徴.....	62
3.1.3 本研究で用いる変数.....	63
3.2 対象地域の概要.....	65
3.2.1 都市・地方・農家・農園の特徴.....	65
3.2.2 本研究で対象とした地域の特徴.....	66
3.3 親世代の教育達成状況.....	69
3.3.1 親世代の教育環境と教育状況.....	69
3.3.2 教育達成状況.....	70
3.4 こどもの教育状況.....	72
3.4.1 教育制度.....	72
3.4.2 在籍状況.....	76
3.4.3 留年・中退経験.....	78
3.4.4 教育環境.....	79
3.5 こどもを取り巻く環境と教育.....	83
3.5.1 こどもを取り巻く環境.....	83
3.5.2 こどもを取り巻く環境と教育状況.....	94
3.5.3 こどもの活動と教育状況.....	103
3.5.4 親の意識と教育達成.....	108
3.6 居住地間の教育格差とその要因.....	109
3.6.1 在籍状況格差とその要因.....	109
3.6.2 留年・中退経験の格差とその要因.....	115
3.7 まとめ.....	119
4. 紅茶産業におけるこどもを取り巻く環境ー南部マタラ県コタポラ郡	121
4.1 調査地域の特色.....	122
4.2 調査方法.....	124
4.3 調査対象の特徴.....	125

4.4	子どもたちと取り巻く環境	129
4.4.1	世帯収入と世帯主学歴	129
4.4.2	住環境と生活環境.....	133
4.5	子どもの健康と1日のながれ	144
4.5.1	子どもの健康状態.....	144
4.5.2	子どもの1日の活動.....	149
4.6	子どもの教育状況と教育環境.....	155
4.6.1	在籍状況.....	155
4.6.2	留年・中退経験状況について	157
4.6.3	教育環境について	157
4.7	まとめ	165
5	紅茶産業:経営形態における教育達成の違い	166
5.1	子どもに望む教育歴と将来	166
5.1.1	教育の重要性と子どもに望む学歴	166
5.1.2	子どもの将来と教育	171
5.2	世帯状況と子どもの教育達成.....	176
5.2.1	世帯所得と子どもの教育達成.....	177
5.2.2	世帯主学歴と子どもの教育達成.....	185
5.3	生活環境と子どもの教育達成.....	191
5.3.1	住環境と子どもの教育達成.....	191
5.3.2	生活環境と子どもの教育達成.....	199
5.4	子どもの活動と子どもの教育達成.....	205
5.4.1	子どもの活動と教育達成—南アジア4か国比較—	206
5.4.2	子どもの経済活動	208
5.4.3	家事手伝と子どもの教育達成.....	211
5.4.4	子どもの活動と親の意識.....	214
5.5	経営形態間における教育格差とその要因	217
5.5.1	調査地域における教育格差とその要因.....	218
5.5.2	教育格差の要因とその背景	218

5.6	まとめ	242
6	終章	244
6.1	分析結果と考察	244
6.1.1	居住地間教育達成格差と農園部における課題－2次分析－	244
6.1.2	経営形態におけるこどもを取り巻く環境－現地調査－	245
6.1.3	半公営農園と民間農園における教育格差の要因－現地調査－	249
6.1.4	仮説の検証	251
6.2	教育格差の構造	253
6.2.1	紅茶産業の社会活構造	253
6.2.2	経営形態における生活構造	255
6.3	課題と提言	260
6.3.1	教育達成における課題	260
6.3.2	提言	262
6.3.3	まとめ	265
	参考文献	267
	謝辞	285
	付録	

表目次

表 2-1 茶葉生産農家数と耕作地.....	22
表 2-2 居住地域と農園における収入.....	31
表 2-3 居住地域における消費平均.....	32
表 2-4 児童労働の種類.....	36
表 2-5 コールブルーク来島時の学校数と生徒数.....	47
表 2-6 特定の機能に関する 5 か国のデータ比較表.....	56
表 3-1 各居住地域の人口.....	67
表 3-2 各居住地域の世帯数.....	67
表 3-3 こどもの数と男女比.....	68
表 3-4 25 歳以上の教育年数.....	70
表 3-5 学校数と生徒数.....	75
表 3-6 スリランカにおける学校数(1979 年当時).....	80
表 3-7 各居住地域における通学距離.....	81
表 3-8 居住地域における通学距離と通学手段.....	82
表 3-9 職業と教育歴.....	87
表 3-10 居住地域における各変数と在籍状況.....	99
表 3-11 居住地域における各変数と留年・中退経験.....	102
表 3-12 こどもの経済活動と在籍状況.....	104
表 3-13 こどもの経済活動と留年・中退経験.....	104
表 3-14 在籍状況格差とその要因.....	111
表 3-15 居住地域間在籍状況格差とその要因.....	113
表 3-16 留年・中退格差とその要因.....	116
表 3-17 居住地域における留年・中退経験格差とその要因.....	118
表 4-1 調査地域の概要.....	129
表 4-2 調査地域の貧困と平均収入.....	131
表 4-3 世帯収入と世帯主学歴.....	132
表 4-4 住環境と生活環境.....	134
表 4-5 こどもたちの健康状態.....	146
表 4-6 こどもの 1 日.....	150

表 4-7 こどもの経済活動(年齢別)	154
表 4-8 こどもの家事手伝活動(年齢別)	154
表 4-9 こどもを取り巻く教育環境.....	160
表 5-1 各経営形態における世帯所得と1人当たりの所得.....	180
表 5-2 こどもの活動に対する世帯主の意識とこどもの活動状況.....	215
表 5-3 こどもの活動に対する世帯主の意識と在籍状況	216
表 5-4 学校の概要と費用	220
表 5-5 1ヵ月当たりの教育費.....	221
表 5-6 世帯主学歴と教育の重要性.....	223
表 5-7 世帯主学歴とこどもに期待する職業に必要とされる教育歴.....	223
表 5-8 世帯主学歴と所得	224
表 5-9 世帯主学歴と家計に占める教育支出	226
表 5-10 通学距離と通学手段	231
表 5-11 住居における設備環境評価.....	235
表 5-12 調査地域における大腸菌調査結果	236
表 6-1 各経営形態の特徴	259

図目次

図 1-1 研究デザイン.....	8
図 2-1 居住地域における貧困率.....	30
図 2-2 児童労働の負のサイクルと児童労働撲滅による経済達成	37
図 3-1 世帯主の教育達成状況.....	71
図 3-2 教育制度.....	73
図 3-3 こどもの在籍状況.....	77
図 3-4 こどもの留年・中退経験.....	79
図 3-5 居住地域ごとの世帯の収入.....	85
図 3-6 居住地域ごとの世帯主の教育歴	85
図 3-7 居住地域ごとの住環境.....	90
図 3-8 居住地域ごとの生活環境.....	90
図 3-9 生活水準満足度	93

図 3-10	世帯収入と在籍状況	95
図 3-11	世帯主学歴と在籍状況	95
図 3-12	住環境と在籍状況	97
図 3-13	生活環境と在籍状況	97
図 3-14	世帯収入と留年・中退経験	100
図 3-15	世帯主学歴と留年・中退経験	100
図 3-16	住環境と留年・中退経験	101
図 3-17	生活環境と留年・中退経験	101
図 3-18	各居住地域におけるこどもの経済活動	103
図 3-19	こどもの経済活動状況と在籍状況	105
図 3-20	こどもの経済活動と留年・中退経験	105
図 3-21	各居住地域におけるこどもの家事手伝状況	106
図 3-22	家事手伝と在籍状況	107
図 3-23	家事手伝と留年・中退経験	107
図 3-24	親の意識とこどもの在籍状況	109
図 3-25	親の意識とこどもの留年中退経験	109
図 4-1	生活満足度	141
図 4-2	近隣の医療機関に対する満足度	147
図 4-3	こどもの在籍状況	156
図 4-4	留年・中退経験状況	157
図 4-5	学校に対する親の意識	161
図 4-6	教育環境と親の満足度	162
図 5-1	こどもの教育に対する世帯の意識	167
図 5-2	こどもに望む教育レベル	169
図 5-3	こどもに期待する職業と必要とされる教育レベル	171
図 5-4	こどもたちの塾通学状況	173
図 5-5	通塾する理由	174
図 5-6	各経営形態における世帯所得と在籍状況	178
図 5-7	各経営形態における世帯収入とこどもの留年・中退経験	179
図 5-8	世帯主学歴とこどもの教育達成(在籍)	185

図 5-9 世帯主学歴とこどもの教育達成(留年・中退経験)	187
図 5-10 住環境とこどもの教育達成(在籍)	192
図 5-11 住環境とこどもの教育達成(留年・中退経験)	193
図 5-12 生活環境とこどもの教育達成(在籍)	200
図 5-13 生活環境とこどもの教育達成(留年・中退経験)	201
図 5-14 南アジア 4 か国における不在籍状況.....	207
図 5-15 こどもの経済活動と教育達成(在籍)	209
図 5-16 こどもの経済活動と教育達成(留年・中退経験)	210
図 5-17 こどもの家事手伝と教育達成(在籍)	212
図 5-18 こどもの家事手伝と教育達成(留年・中退経験)	213
図 5-19 世帯状況と教育格差の構造.....	227
図 5-20 住環境と教育格差の構造.....	233
図 5-21 生活環境と教育格差の構造.....	239

地図目次

地図 1 紅茶産地.....	xi
地図 2 マタラ県コタポラ郡.....	126
地図 3 調査地域.....	128

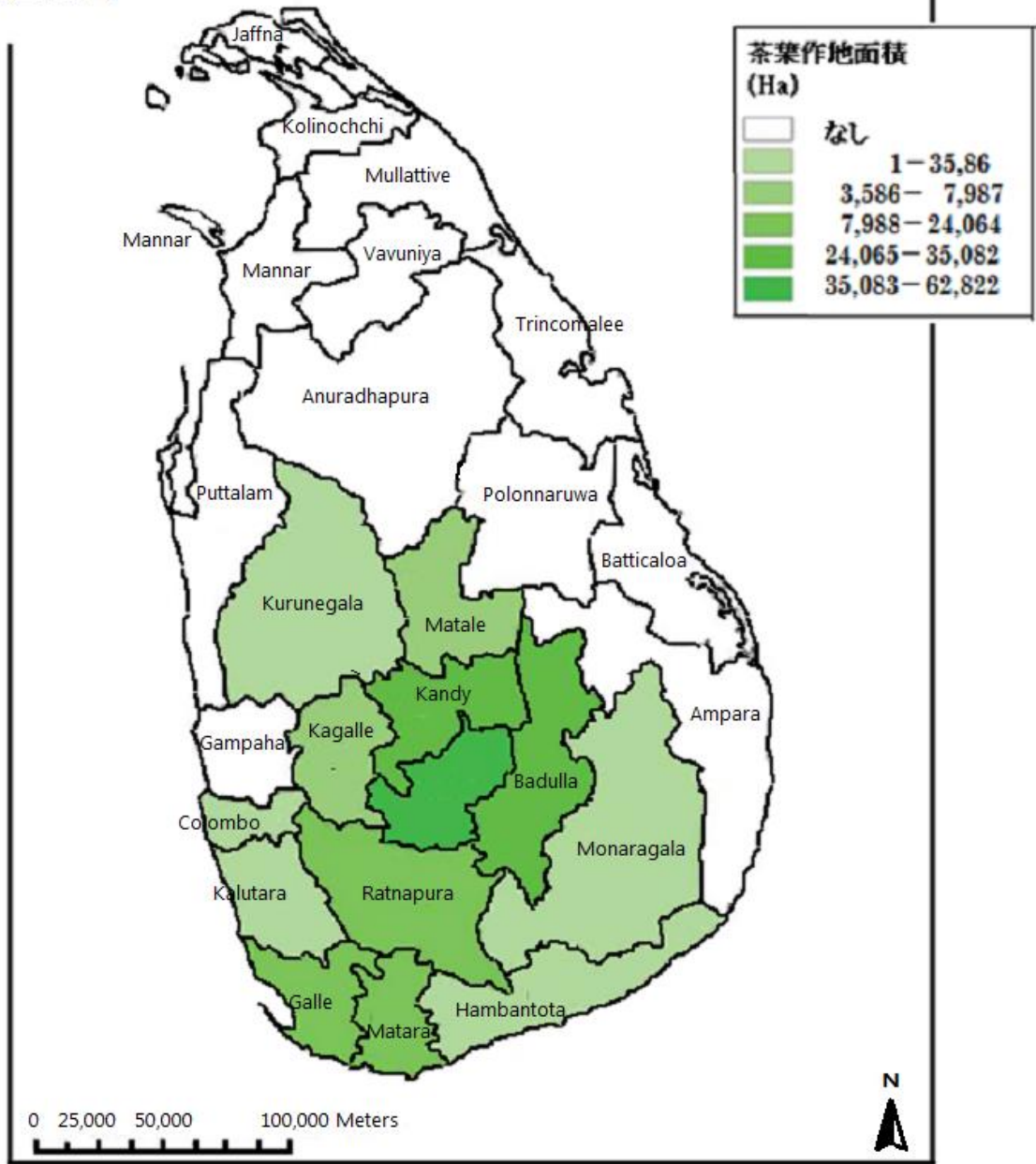
略 語

ADB	Asian Development Bank アジア開発銀行
CARE	Christian American Relief Everywhere 国際ケア機構(NGO)
CBSL	Central Bank of Sri Lanka スリランカ中央銀行
DCS	Department of Census and Statistics, Government of Sri Lanka 統計庁
EPF	Employment Provident Fund 被雇用者準備基金
HDI	Human Development Index 人間開発指標
HDR	Human Development Report 人間開発報告書
HIES	Household Income and Expenditure Survey 世帯所得支出調査
IMF	International Monetary Fund 国際通貨基金
ILO	International Labour Organization 国際労働機構
JBIC	Japan Bank for International Cooperation 日本協力銀行
JEDB	Janatha Estate Development Board 農園開発庁
JETRO	Japan External Trade Organization 日本貿易機構
JICA	Japan International Cooperation Agency 国際協力事業団
MDG	Millennium Development Goals ミレニアム開発目標
MPL	Ministry of Plantation Industries, Government of Sri Lanka プランテーション産業省
NHDR	National Human Development Report 国別人間開発報告書

NGO	Non-Governmental Organization 非政府機関
OCHA	The Office for the Coordination of Humanitarian Affairs 国連人道調整事務所
PHDT	Plantation Human Development Trust プランテーション人間開発トラスト
PHSWT	Plantation Housing and Social Welfare Trust プランテーション住宅社会福祉トラスト
RPCs	Regional Plantation Companies プランテーション会社(公企業)
SLSPC	Sri Lanka State Plantation Corporation 国家プランテーション公団
SLFP	Sri Lanka Freedom Party スリランカ自由党
UN	United Nations 国際連合(国連)
UNDP	United Nations Development Programme 国連開発計画
UFP	World Food Programme 世界食糧計画
UF	United Front 統一戦線
UNP	United National Party 統一国民党
WB	World Bank 世界銀行(世銀)

紅茶産地

紅茶プランテーション作地面積



出典 : Ministry of Plantation Industry 201

地図 1 紅茶産地

1 序章

1.1 問題意識と背景

1.1.1 本研究の問題意識

世界の国々は多様であり、国々を構成する社会や人びとはさらに多様である。19 世紀以降の技術や科学における発展は、利便性の追求に貢献し、長距離を短時間で移動できるようにし、地球の裏側のことを瞬時に知り得ることができるようにさせた。そして、地域や国単位の課題として考えられていた諸課題は 1 国の問題や傾向としてではなく、国境を超え、つまり我々にとって身近なものとなっている。平和な社会の構築や持続可能な環境発展には、天然資源の保存、環境の維持と回復、争いの解決や自由の維持と同様に、人びとのさまざまな能力を養成していくことが世界の重要な課題の1つである。人びとのもつ知識や能力を強化することは、グローバルな課題に対処するだけでなく、人びとに生存と生活を守る力を備わさせてくれる。センは 2003 年の英国連邦諸国の会議における「安全が脅かされる時代に (THE IMPORTANCE OF BASIC EDUCATION)」というスピーチの中で、教育と教育の格差を縮めることの重要性について述べ、特に、基礎教育を普及させ、その効果を拡大すれば、人間の安全を脅かすほとんどの危険に対して予防効果を発揮できるとしている(東郷 2006)。

スリランカは北海道の 8 割程度の島国であるが、その地理的立地のために、古来より貿易の中継地点であったため、多くの民族や宗教が共存しており、また、低所得国であったにも関わらず、社会政策に力を入れており、人間開発指数が比較的高く¹、スリランカの社会開発は開発途上国の成功した事例としてしばしば描かれてきていた(絵所 1999)。しかし、近年、年平均 5-6% の経済成長を続けつつも、所得格差や地域間格差が拡大しており(FOMA 2010)、貧困者数の多い農家を中心とする農村²や貧困率が高いと指摘される農園部の貧困問題がしばしば指摘されてきていた³。特に、貧困率が高い農園部ではこどもの労働やこどもを取り巻く環境がこどもの発達における懸念要素となっており(Willinges 2004、SOMO 2006、Wal 2008)、農園部の貧困削減が進まない理由の1つとして、教育へのアクセスが発展していないことが指摘されている(ADB 2008)。

1 2006 年の UNDP の人間開発指数では、177 か国中 93 位(2006 年)。南西アジアの近隣国であるインド、バングラデシュ、パキスタンよりも上にランクされている。スリランカは所得(経済指標)が低い、教育・保健等の社会指標が優れており、UNDP は人間開発の一つのモデル(スリランカ・モデル)として紹介された。2017 年は 189 か国中 72 位となっている。

2 スリランカでは、居住地を 3 区分(「Urban」「Rural」「Estate」)に分けており、日本語訳では「都市」「農村」「農園」と翻訳されることが多いが、『こどもの活動調査』における居住地域について記述する際には「農村」を「地方」と「農家」に分けて記述することとする。

3 貧困率は、1990 年から 2002 年にかけて都市部と農村部では低下する一方で、農園部の貧困率は 21%から 30%へと増加した(WB 2007b)。しかし、11 年後の 2013 年には、全体として 8.8%であるが、都市部世帯の貧困率が 1.5%なのに対し、農村部では 6.0%、農園部では 8.8%と地域間における格差をみることができる(CBSL 2015)。

一方、増加傾向にある農家では茶葉育成技術の経験不足や経営知識の欠如などにより、過酷な労働下にあるにも関わらず低生産であるとされ、小農経営者の生活をいっそう苦しくし、こどもたちの家庭内労働も常態化しているとILOは警鐘を鳴らしている(ILO 2003)。

スリランカ経済を支えるプランテーション作物は18世紀後半の大英帝国による植民地経済政策として発展した。スリランカはブラジル、インドに続き世界第3位の農園部労働力人口を持ち(Koudithuwakku and Priyanath 2007)、紅茶産業に従事する労働人口は全人口の6%(120万人以上)である(Williges 2004)⁴。大英帝国によって推進された紅茶産業はセイロンの独立以前も以後もセイロンの経済を支え、1世紀以上にもわたり、雇用と輸出により外貨を獲得してきている重要な産業である(Deepananda and Alfons 2007)。しかし、1972・75年の土地改革による農園(50エーカー以上)の国営化、1977年の市場型経済政策の導入、小規模経営(10エーカー以下)⁵による紅茶栽培の推進、1992年の大規模農園の再民営化により、紅茶産業の経営形態と労働従事者が多様化してきている。

紅茶プランテーションは学校・商店・病院などもある自己完結型のコミュニティではあるが、学校のレベルは初等教育・中等教育の義務教育レベルの学校が多い。教育は社会的不平等や経済格差を広げる要因として指摘される一方で、政治体制、経済・社会発展、民族や宗教、カーストや出自に関係なく、人びとが社会の中で健全な生活を過ごし、人生の選択の幅を広げるための力を獲得するために重要な役割を果たす。スリランカでは、1947年には小学校から大学までの無償教育制度⁶が実施され(Ministry of Education 2013)、1997年には学校教育の責任が農園主から政府となると農園部における教育の質改善もなされるようになった(UNICEF 2014)。1997年の教育改革は、1984年の女性・年少者・児童の雇用法改訂⁷や2001年における最悪の形態の児童労働の禁止法の批准とともに、多くのこどもに教育の機会を与えた。しかしながら、農園部におけるこども識字率・修了率は、全国レベルに比べると低く、中退率も高く、経済活動に従事しているこどもの学校欠席率は89.5%で、全国平均の46.6%に比べ高いことが指摘されている(Word Bank 2007)。

4 Central Bank of Sri Lanka の2018年データによれば2010年の農園人口は約60万人。

5 1957年に制定されたThe Tea Control Actでは、小規模経営とは10エーカー以下としている(Dent and Goonewardene 1993, DCS 2012)。

6 1945年に教育法(Education Act)が制定。1945年に無償教育制が承認され、1947年の教育法令(Education Ordinance)により、無償教育制が義務教育から大学まで実施されるようになった(Goonesekere 1983, 野上 1985)。

7 1956年のThe Employment of Women and Young Persons and Children Act(女性・若者・児童の雇用法「以下、「雇用法」と記述する。))において14歳以下のこどもの労働を完全に禁止。1984年、2003年、2006年に雇用法を改訂。

2009年の民族紛争の終結以降の経済や社会の発展は、農村部や農園部における社会基盤や、社会発展、人間開発の面においても変化を生じさせ、紅茶産業における働き方や生活環境、労働者の意識も変化させるとともに、紅茶産業に従事する人びとも多様化させている。このような経済的・社会的変化のなか、農村部や農園部における人びとの職業選択の幅は拡大し、生まれ育ったコミュニティを離れて生活をする上で教育達成は重要となってきている。しかしながら、紅茶産業の経営形態に着目し、こどもの生活環境や教育達成について考察した研究はあまりない。そこで、本研究では紅茶産業の経営形態に焦点を当て、紅茶産業の労働に家族が従事しているこどもを取り巻く環境やこどもの家庭内での状況がどのように異なり、また、これらの違いによりこどもの教育達成状況がどのように異なるのかについて比較分析する。

1.1.2 本研究の背景

(1) スリランカの概要

スリランカは赤道より少し北に位置し南北最長約435km²、東西最長約22km²、北海道の8割程度の面積(65,610km²)を有する自然豊かな島国であり、9つの州、25県、331郡、14,021郡卿、36,822村から構成されている⁸。人口は約2,077万人で、人口密度は1km²当たり324名である⁹。平均気温の変化が乏しい熱帯性気候であるが、近年は気候変動による影響を受けている。

この島国は北東モンスーンと南西モンスーンの影響により年間降雨量に差ができ、乾燥地帯と湿潤地帯(年間降水量2,000mm以上)¹⁰とに分かれる。また地形的変化に富み、高地(標高1,200m以上)/中高地(600-1,200m)/低地(600m以下)¹¹とわかれ、高度による気温の変化が激しい。コロomboなどの低地では高温多湿であるが、ヌワラエリヤなどの高地では涼しく、夜になると長袖が必要になるほどである。スリランカにおける紅茶の産地は、中心から南西部にかけての湿潤地帯に広がり、主に6つの地域に分けることができる。日本で好まれている紅茶は、清涼感のあるヌワラエリヤ地域や濃厚な紅茶にミルクを入れて飲むと味わいのあるウバ地域、ディンブラ地域からの紅茶である。スリランカの紅茶生産量は中国、インド、ケニアに続く世界第4位である。

1948年に英国の自治領セイロンとして独立したスリランカは、選挙のごとに2大政党(スリランカ自由党(SLFP)と統一国民党(UNP))が政権交代を繰り返してきた民主主義国家であり、SLFPは社会主義的政策を採用し、プランテーションの国有化、内向きの開発戦略、そして「セイロン化」

8 Department of Census and Statistics (DCS), Government of Sri Lanka (2013). Classification of Administrative Divisions by Quality of Housing. Department of Census and Statistics, Government of Sri Lanka.

9 World Bank (WB 2007b). Sri Lanka Poverty Assessment: Engendering Growth with Equity. World Bank.

10 国際農林業協力協会(2004)「スリランカの農林業－現代と現状の課題－」2004年3月

11 Sri Lanka Tea Board (2011). Statistical bulletin 2010. Sri Lanka Tea Board.

を進め、UNPは自由主義的な経済政策を作用し、市場経済の重視、および外向きの開発戦略を進めた。独立後も、農業部門と貿易が経済の主流であったスリランカにとっては、プランテーションは重要な産業の1つであり、1970年代前半のプランテーションの国有化後も変わらなかった。しかし、1970年代後半になると市場型自由経済が導入され、産業化により食品加工や繊維産業、観光業なども経済的に重要になりつつも¹²、茶や天然ゴムなどの農園作物の生産・輸出は重要な地位を占めている。

スリランカは歴史的・地理的背景から、複数の民族や宗教が北海道より小さなこの島に共存している。英国から自治領として独立した5年後の1953年の民族構成と人口(DCS 2013)は多数民族のシンハラ人が561.7万(69%)で、次いでプランテーション経済を支えてきたインド・タミル人が97.4万人(12%)、西欧の占領下で臨機応変に対応し重用されてきたスリランカ・タミル人が88.5万人(11%)、貿易商人であるアラブの子孫であるムーア人が51.2万人(6%)で、その他11万人(14%)と809.8万人であった。2012年の人口統計(CBS 2015)では、全人口数が2,077万人であり、シンハラ人が74.9%の1,555.8万人、次いでスリランカ・タミル人が11.2%を占め232.6万人、ムーア人が193.2万人(9.3%)であった。一方、インド・タミル人は4.1%の85.2万人と減少し、また、他の民族も10.3万人(0.5%)と減少した。宗教は主に世界3大宗教の仏教、イスラム教、キリスト教に加え、ヒンドゥ教を信仰する人びとがおり、民族によって信仰する宗教が異なる傾向にある。スリランカでは多数民族が信仰する仏教徒が多く、約70%の人びとが信仰しており、次いで多くのタミル人が信仰するヒンドゥ教徒が12.6%で、イスラム教徒は9.7%、キリスト教徒が7.6%となる多民族・多宗教国家である。しかし、1948年の独立後にはシンハラ語を唯一の公用語にするという政策を発端に、スリランカは長い年月、民族による対立や異なる宗教による紛争に苦しんできた。その民族紛争も2009年には終結し、民族共存の道を進んでいる。

(2) プランテーション経済と産業構造の変化

スリランカ農園部の代表的な作物は紅茶で、世界の紅茶市場ではセイロンティーとして有名である。大英帝国によって推進された紅茶産業はセイロンの独立以前も以後もセイロンの経済を支え、1世紀以上にもわたり、雇用と輸出により外貨を獲得してきている重要な産業である(Deepananda and Alfons 2007)。紅茶の生産はスリランカの主要輸出作物であった珈琲のさび病蔓延による衰退と宗主国である大英帝国や世界市場での需要から、19世紀中ごろから盛んとなり、輸出を目的とした紅茶プランテーションが英国人開拓者たちによって湿潤地帯に開拓されて

12 現在では、中東や韓国などへの出稼ぎによる外貨獲得もスリランカの経済に大きく寄与している。

いった。広大なプランテーションの多くは英国人が所有する農園であったが、1972・75年の土地改革により、50 エーカーを超える農園はスリランカ政府の管理下となったが、国営農園の運営は必ずしも成功したとはいえず、1980年代後半には再び民営化の検討がなされ、1992年に行われた経済政策改革以降、プランテーションの経営は国営から再び民営化へと転換された。いくつかの過程を経て、土地は政府によるリースとしながらも経営と運営は民間会社に任せるという政策に転換した(Suren, Bruijn & Rwegasira 2010)。このように大規模農園の経営主体が変化する一方で、1977年以降には社会主義経済政策に代わり市場型経済政策が導入され、紅茶産業における小規模経営(10 エーカー以下)による紅茶栽培の推進(MPI 2011)や民間による農園も増えている¹⁴。1951年から2005年の間に小規模経営の絶対数は368%増加するとともに、これらの農家による茶葉耕作地は296%拡大した。一方で、100 エーカー以上の農園数は57%減少し、農園面積は36%減少していった(Deepananda and Alfons 2007)。MPI(2011)によれば2002年の時点で紅茶栽培面積の44%が小規模生産者により耕作されているとしているとし、現在では紅茶産業の主な経営形態は公営農園、半公営農園、民間農園、個人農家の4形態である。

(3) こどもを取り巻く環境と教育達成

スリランカにおける紅茶の歴史は19世紀まで遡るが、農園部はもともと17世紀にオランダの占領下で珈琲農園として開拓された。スリランカは熱帯性気候に属し、季節風(モンスーン)の影響が強い高温多湿で、珈琲の収穫時期は季節的なものであり、農園部での収穫繁忙期には南インドよりインド・タミル人が出稼ぎ労働者として派遣されていた(中村 1976)。しかし、珈琲栽培の代わりに1年中収穫できる紅茶が栽培されるようになると、人びとは紅茶農園部内に季節労働者用に建てられた建物に定住するようになった(Bronkhorst 2008)。農園部内の住居は珈琲豆収穫時期に合わせて渡航する労働者のために建てられた建物であり、最低限の設備であったといわれている(鈴木 2008)。また、山岳地帯の森林を伐採して開拓した広大な紅茶農園は様々な設備を備えた1つのコミュニティを形成したとされているが、英国人経営者の私的な所有地であり、かつ周辺は広大な自然であるために社会基盤の整備も十分ではなかったものと推察できる。OXFAMによれば、農園で働く人びとの賃金は低く、労働者の多くは農園が提供する農園内の居住地区にあるライン・ハウスという長屋に住んでいる。しかし、上下水道やガスの設備が都市部と比較して普及しておらず、安全な水の確保が困難かつ衛生上の問題があるような生活環境

14 1972・75年の土地改革によって没収された耕作農地(11%)が農作耕地を持たない農村部の人びとへ再分配されたことも(Deepananda and Alfons 2007)、茶栽培農家が増えた1つの理由である。

(トレイや台所など共有)で生活おり、他の居住地域と比較してもより劣悪な生活環境であると指摘している(Oxfam 2002)。

プランテーションにおける教育の歴史はセイロンでは 1931 年のドノモア憲法制定により 1939 年に教育法令第 31 号が制定され、5-16 歳のこどもに対する 11 年間の教育を両親に義大英帝国による植民地時代である 19 世紀まで遡ることができ、特に、1830 年代のコールブルーク改革により、セイロンに学校が増加し、1931 年には宗主国(英国内)において人びとの権利への意識が高まり(クスマ 1999、Little 1999)¹⁶、セイロンにおける教育行政にも影響を与えたと考えられる。務付け¹⁷、1945 年には無償教育に関する法律を制定した。農園部の学校も公立初等教育学校となり、国の無料教育制度に組み込まれ、教材、衣服、通学などの経費を補助する制度が設立され、1947 年には小学校から大学までの無償教育制度が実施されたが(Ministry of Education 2013)、農園部における教育の質が改善されるのは学校教育の責任が農園主からスリランカ政府となる 1997 年である(UNICEF 2014)。1984 年のこどもの夜間労働禁止、2001 年の最悪の形態の児童労働の禁止とともに、1997 年の教育改革は多くのこどもに教育の機会を与えた。しかしながら、農園部におけるこどもの識字率・修了率は、全国レベルに比べると低いことが指摘されている(WB 2007b)。

1960 年から 70 年代のスリランカ社会構造に変化はないとする先行研究もあるが、海外支援や国内の政策により、経済や社会の発展は着実に進んだ時代であるとされており(中村 1978)、民間企業や個人経営による農園の増加、1970 年代の自由型経済導入、1990 年代のプランテーション経営の再民営化、そして小規模生産者の増加により、紅茶産業構造の経営形態が多様化している。イギリスからの独立(1948)以降、紅茶セクターにおける人間開発問題といえ、紅茶プランテーションにおけるインド・タミル人の問題に焦点があてられることが多かったが、本研究では、紅茶産業の経営形態と変化している生活環境に着目し、こどもの教育達成との関係を考察する。

1.2 目的と仮説と意義

1.2.1 本研究の目的

本研究では、紅茶産業における経営形態に着目し、紅茶産業の仕事に従事する人びとのこどもの教育達成に焦点を当てる。

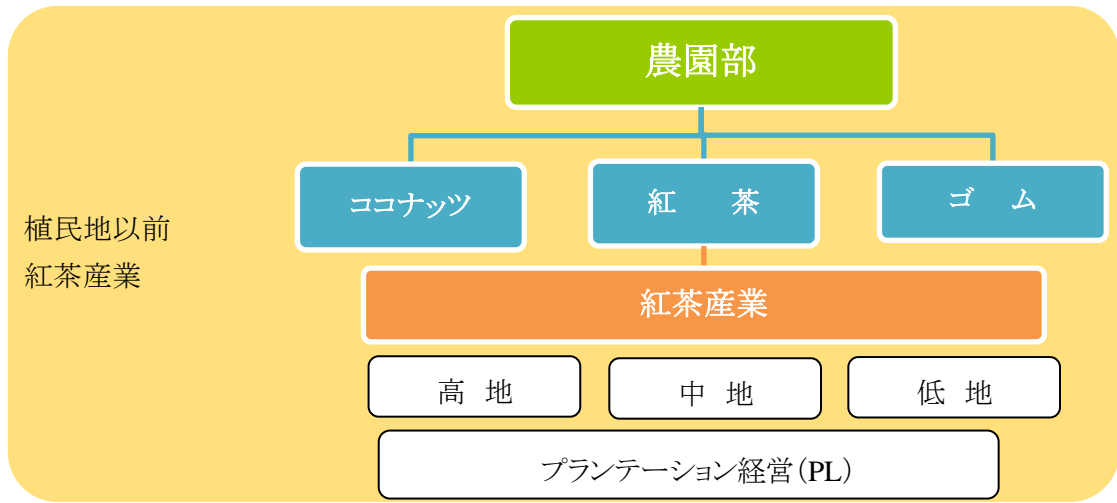
16 大英帝国における人びとの権利への意識が高まり、植民地における人びとの権利も議論されるようになっていた。1931 年にはセイロンでも普通選挙制度の制定がなされた。

17 実際の義務教育は 9 年。

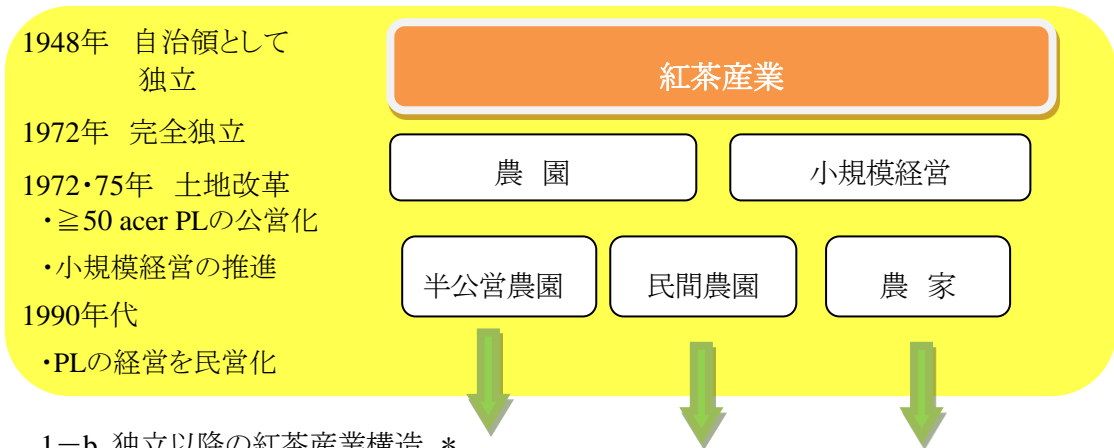
センはひとの生活の質は「生活の良さ」としてみることができ、個人が価値あると考える生活を選ぶ選択の自由を行使する機会や自己の選択の幅を拡大する重要性について述べている(セン 1992 p59)。しかしながら紅茶プランテーションの労働に従事する人びとは、近隣社会から隔絶され、自己完結したプランテーション・コミュニティで一生を終えるものも少なく(Willinges 2004、鈴木 2004)、人びとの人生の選択は限られていたものと推測する。

しかしながら、スリランカの紅茶産業は、1972 年・75 年の土地改革による農園(50 エーカー以上)の国営化と農民への土地分配、1977 年の市場型経済政策の導入、茶葉小規模経営(10 エーカー以下)の推進、1992 年の大規模農園の再民営化により経営形態が変化している。1990 年代の経済開放政策は地域間格差を拡大させたが、海外からの援助や IT 技術の普及を促進し、農園部においても閉鎖的なコミュニティから外の世界に踏み出す機会を増やした(Willinges 2004)。さらに、2009 年の民族紛争の終結以降、スリランカの経済や社会発展はますます進展し、小規模農園や農家も増加するなかで、紅茶業に従事する人びとも多様化し、生活環境や人びとの意識にも変化が生じていると推察する。このように経済や社会が変化するなか、人びとの職業選択の幅は拡大し、農村や農園部を離れる人びとが増えてきている。特に、農園部を離れて生活をする上で、教育達成は重要となってきたが、教育へのアクセスの拡大が課題であることが指摘されている(ADB 2008)。教育はこどもの将来における選択肢の幅を広げるために重要な役割を果たしており、こどもの教育達成は、スリランカ政府による重要な社会政策の 1 つである。

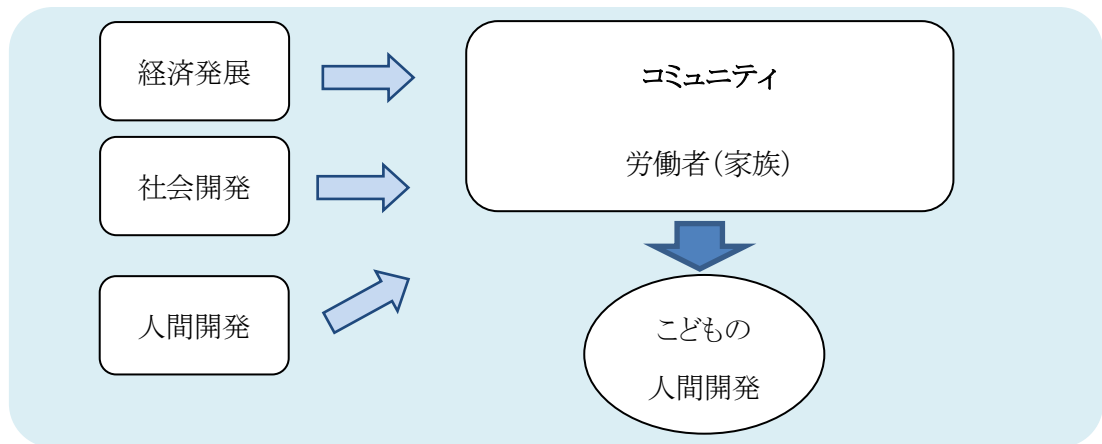
図 1 は研究デザインである。1-a と 1-b は本研究における紅茶産業の構造変化であり、1-c は紅茶産業コミュニティにおける経済・社会・人間開発によるこどもへの影響を表している。



1-a 植民地以前の紅茶産業



1-b 独立以降の紅茶産業構造 *



1-c 紅茶産業コミュニティにおける経済・社会・人間開発とこどもの人間開発

* 紅茶産業における主な経営形態は(1)公営、(2)半公営、(3)民間、(4)農家であり、本研究では(2)半公営、(3)民間、(4)農家の3形態間で比較するためここでは記載していない。

図 1-1 研究デザイン

農園部の教育達成については多く研究されているが、紅茶産業における経営形態の違いにより子どもを取り巻く環境や教育達成がどのように異なるのか、また、子どもを取り巻く環境と教育達成との関係についての比較研究はあまりなされていない。スリランカでは、紅茶農園は高地・中地・低地と分かれ、その歴史的背景から経営形態が異なる。中低地では、紅茶農園は農村や農家と隣接して形成されていたが、高地では農村や農家とは隔絶された場所で発展していったという特徴がある。子どもたちが自分たちにとって価値あると考える生活を選ぶ選択の機会の幅を広げるための政策を考えるにあたり、近年の紅茶産業の構造変化を反映させている半公営農園、民間農園、農家が混在している地域における子どもを取り巻く環境と教育達成に着目する。

本研究では「経営形態」と「子どもたちの教育達成」に焦点をあて、1) 居住地域間の教育格差を明らかにし、2) 紅茶産業における経営形態の違いにより子どもを取り巻く環境がどのように異なるのかを比較考察するとともに、3) 経営形態の相違により子どもの教育達成にどのような違いがあるか、また、4) 経営形態間の教育格差の要因の背景について、現地調査におけるアンケート調査屋やインタビューに基づき考察する。

1.2.2 本研究の仮説

本研究では農園部の代表的作物であり、労働集約的である紅茶産業に焦点をあて、経営形態の違いによる子どもたちの教育達成の違いとその要因を考察する。

近年の経済・社会の発展、小規模経営生産の推進により、紅茶セクターにおいても経営形態が多様化し、小規模経営も増加するなかで、紅茶栽培に従事する人びとも多様化してきている。また、外国の支援を受け、紅茶農園内外における社会基盤や人間開発は改善されており、農園内における住環境や生活環境に影響を与えている。さらに、ICT 技術の発達はいままでは遠い存在だった世界を身近にし、人びとの意識や考えにも変化が生じてきていると推察する。しかしながら、紅茶農園における生活環境や人びとの教育達成、教育の質の低さについては、ILO WB、ADB、UNICEF、NGO などによってたびたび指摘されている。そこで、下記の仮説を立て、本研究で比較分析していく。

【居住地域間における仮説】

仮説 1: 居住地域における教育達成の格差に着目すると、農園部の子どもたちの教育達成が他の地域と比較して最も低い。

仮説 2: 農園部のこどもたちの教育達成が低いのは、こどもたちを取り巻く環境(世帯状況・生活環境・児童労働)が他の居住地域のこどもたちよりも悪いからである。

【紅茶産業内における仮説】

仮説 3: 経営形態の違いによる教育達成の格差に着目すると、民間農園のこどもたちの教育達成が半公営農園と比較して最も低い。

仮説 4: 民間農園のこどもたちの教育達成が低いのは、こどもたちを取り巻く環境が農家や半公営農園のこどもたちよりも悪いからである。

1.2.3 本研究の意義

本研究は、こどもたちが自分たちにとって価値ある人生を選択するにあたり、選択の自由の幅をひろげるためには教育が重要な役割を果たしているという観点に立っている。

スリランカでは、居住地域によって民族やカーストの隔たりがあり、紅茶プランテーションに住する人びとは少数民族が多く、カーストも低いといわれていた(Hollup 1991)。しかしながら、こどもの教育達成についての政策を考える場合、民族やカーストに焦点をあてた政策は、優遇されている民族・カーストと優遇されていない民族・カーストとの間の不和の原因ともなりかねない。このことは独立後に新政府のもとで推進されたシンハラオンリー政策導入後にもたらされたスリランカ・タミル人との民族紛争を振り返ることによっても学ぶことができる。

本研究は、紅茶農園で働く人びとやそのこどもたちが変えることのできない民族やカーストによってこどもたちの未来の潜在能力が阻害されているという視点からではなく、多様化してきている紅茶業の経営形態の相違という新たな視点から分析・調査をおこなった。自然環境が同じ条件下でありながらも生じる教育達成の格差を、経営形態の違いにおける環境(世帯状況、生活環境、こどもの活動状況、親の意識)の相違という観点から比較考察することは、民族や生まれによる教育達成格差が存在する社会の問題発見や課題の解決に新たな知見を与えると考える。また、民族やカーストを地域社会の多様性の1つと捉え、人として尊重されるべき1要素かつ調和できるものと捉えることは、政策立案の際に、民族やカーストを起因とするさまざまな課題に対する平和的解決策を見出す糸口になるものと考えられる。

また、教育達成格差の要因の1つとして、経済的貧困が背景に潜んでいるのではないかと推察する。しかしながら、所得が同額であっても、十分であると考えられる人びともいれば、不十分で

あると感じている人びともいる。このことは経済的指数では測ることのできない人びとの感じ方や考えが含まれており、本研究では世帯所得だけではなく、人びとの生活満足度と教育達成との関係についても考察している。貧困を所得の額という経済的視点からだけではなく、人びとがどのように自分たちの生活を感じているのかという視点から教育の達成について考察することは、経済的指数では測ることができない貧困の多様性を考えさせてくれ、貧困政策を考えるうえでも重要であると推察する。

1.3 研究方法と論文構成

本研究は2008年から2009年に行われた『こどもの活動調査2008/9』（以下、『こどもの活動調査』と記述する。）データを用いた2次分析と事例研究としてマタラ県コタポラ郡で行ったフィールド調査の2段階構成となる。『こどもの活動調査』データの2次分析により、スリランカにおける農園と都市・地方・個人農家（以下、「農家」と記述する。）¹⁸のこどもたちを取り巻く環境と教育達成状況の関係を考察し、スリランカにおける居住地域間における相違点の全体像を明らかにする。先行研究では地域間格差が指摘され、農園部における生活環境や低収入が懸念される一方で、農家における貧困問題も指摘されている。また、公表データの多くは都市部・農村部・農園部のセクターレベル、または各郡によるデータ集積となっており、紅茶産業内における違いについては、経済成長政策的視点が主であり、産業内の経営形態の相違という視点から生活環境などの相違によるこどもへの教育達成への影響については研究されていない。紅茶産業の経営形態は主に公営農園、半公営農園、民間農園、個人農家であるが、コタポラ郡における紅茶産業内の経営形態に着目した事例研究では、半公営農園、民間農園、個人農家におけるアンケート調査とインタビューに基づき、親や家族が従事する経営形態の違いによるこどもを取り巻く環境と教育達成状況の関係を考察する。また、経営形態の違いによってこどもの教育達成状況に相違が生じる要因を考察し、その要因の背景を探る。

研究手法としては、量的研究手法と質的研究手法を用いて行った。量的手法は『こどもの活動調査』データを用いた2次分析が主ではあるが、事例研究においてもアンケート調査や飲料水の衛生調査実験を行った。同一地域における格差は、経営形態の違いによる文化・労働・住居・生

18 『こどもの活動調査』では、居住地域の日本語訳を「都市」「農村」「農園」としているが、本研究では「農村」を「地方」と「農家」に分け、「都市」「地方」「農家」「農園」の4居住地域とする。『こどもの活動調査』では、「都市」「農村」「農園」の定義は記述されていないが、国勢調査2011では「都市」は市政局(Municipal and Urban councils)によって運営されている地域、「農園」は10人以上の労働者が居住している20エーカー以上のプランテーション、「農村」は「都市」及び「農園」以外の地域と定義している。

活・教育環境の違いという社会関係的文脈から生じている可能性があり、対象者の立場や状況・考えなどを探求するため、質的手法としてコタポラ郡を事例研究し、グラウンデッド・セオリーに基づき、経営形態の相違による子どもたちの教育達成状況と格差を生みだすその要因を明らかにすることをアンケート調査とインタビューによって試みた。

1.3.1 こどもの活動調査

本研究では、『こどもの活動調査』データ(Child Activity Survey Data)を用いて、2次分析を試みる。『こどもの活動調査』の目的は、5-17歳のこどもの経済的活動や家庭における労働、これらの活動による子どもたちの状況を明らかにするために行われた調査である。

1999年に第1回目が行われた。本研究で用いたデータは第2回目の調査であり¹⁹、ILOとスリランカ政府が共同で2008年10月から2009年4月までに行った全国調査(Northern Province 除く)で、16,000世帯を対象にした調査である。スリランカは25の県に分けられるが、2009年当時は紛争終結前であるため、20県が調査対象となった。本研究では農園の代表的作物である茶園に着目している。茶葉栽培はウェットゾーンと呼ばれる地域に集中しており、紅茶農園が集中している9県を20県から抽出した。本研究では、紅茶栽培地域の特徴を記述する際には9県を対象となった6,631世帯29,069人すべてを対象とし、こどものいる世帯を記述する際にはこどものいる3,683世帯を対象とした。対象となるこどもの数は6,119人であった。『こどもの活動調査』では、「都市」「農村」「農園」の3つの居住地域に分けているが、本調査では、「農村」に居住している世帯を「農家」と「地方」に分けて4居住地域(「都市」「地方」「農家」「農園」とした²⁰。

1.3.2 現地調査

スリランカには紅茶産地が6つ²¹あり、中央中高地は植民地時代に森林を伐採して開拓した地域であるとともに、農民から土地を買い取り広大な農園を設立した²²。そのため、中央高地では大規模な(公営、半公営、民間)農園が多い。一方、中低地である南部では広大な敷地面積を半公営農園や様々な規模の民間農園があり、また、昔から農民による耕作地が多く、紅茶栽培農家の数も多い。しかしながら、農園部に居住する人びとにアンケート調査やインタビューを行う

19 第3回目の調査は2015年に実施され、2017年に調査結果が報告されている。

20 「地方」と「農家」の定義については第3章を参照。

21 Sri Lanka Tea Boardによれば、ヌワラエリヤ、ディンブラ、ウバ、ウダプセラワ、キャンディ、ルフナの6大産地。

22 1970年代、外国資本が経営していた農園が国有となるが、後の再民営化により2つの公社と23のRPCに分割され、半国営企業は民間会社によって運営・管理されるようになる。

ためには、回答者の承諾とともに農園を経営する企業や農園主の許可が必要である。そこで、事前調査で訪問したいくつかの地域の中で、親会社から許可を得られた半公営農園があり、かつ比較的1つの地域に大中小規模の民間農園、農家が混在する地域であるスリランカ南部のマタラ県コタポラ郡モロワカ (Morowaka) 地域とデニヤヤ (Deniyaya) 地域周辺で現地調査を行った。

1.3.3 論文構成

本論文の構成は第6章から構成している。第1章では第1項で本研究の問題意識と背景について述べ、第2項では本研究の仮説及び意義について記述した。また、第3項では本研究の柱となる研究手法と調査方法について説明した。

第2章では本研究に関わりのある先行研究について考察する。第1項では紅茶産業成立から構造の変化までの歴史的背景、第2項では紅茶農園の生活と人びとに焦点を当てた先行研究に基づき子どもたちを取り巻く環境を考察し、第3項ではグローバル化の影響によるスリランカ社会と農園内の変化を考察し、第4項ではスリランカにおける教育制度や教育達成状況とその課題について、また、本研究の問題意識の出発点である人生の選択肢の幅を狭める要因と広げる要素についての考察に重要な視点を投げかけているケイパビリティ・アプローチについての先行研究を記述する。

第3章ではスリランカの全体像を把握するため、農園が主に所在する9県のデータに基づき、居住地域間におけるこどもの教育達成の格差とその要因について分析する。第1項ではスリランカ全土(紛争地域を除く)を対象とした『こどもの活動調査』の概要を説明し、第2項では『こどもの活動調査』データから抽出した対象地域の概要を記述し、第3項ではこどもを養育する親世代の教育達成状況を先行研究及び本データから考察する。第4項では本研究の対象であるこどもの教育状況について記述し、第5項では量的手法であるカイ2乗検定により、居住地域間における「世帯状況」「生活・教育環境」「こどもの活動状況」「親の意識」の相違により教育達成がどのように異なるのかについて論述する。第6項では教育格差の要因について2項ロジスティック回帰分析を用いて考察する。

第4章では紅茶産業の経営形態に焦点を当て、現地調査におけるこどもを取り巻く環境と教育達成状況について記述する。第1項では、調査対象としたマタラ県コタポラ郡の特色について述べ、第2項では現調査における調査方法、第3項では調査の対象世帯やこどもの特徴について記述する。第4項では各経営形態の視点からこどもを取り巻く環境について記載する。具体的

には、親や家族が従事する紅茶産業の経営形態の違いによる世帯状況や住環境、生活・教育環境、こどもの活動状況を比較考察し、こどもたちを取り巻く環境の相違点を明らかにする。第5項では調査地域におけるこどもの健康状態と1日の活動について記述し、第6項では経営形態間におけるこどもの教育達成の相違と教育環境について記述する。

第5章では現地調査に基づき明らかになったこどもたちを取り巻く環境と教育達成の関係について比較分析する。第1項では親がこどもに望む学歴と将来の職業との関係について考察する。第2項以下では世帯状況や生活環境、こどもの活動とこどもの教育達成についてアンケート調査に基づき比較分析し、対象世帯へのインタビューや当該地域の行政担当者や学校の教員、農園のマネージャーなどへのインタビューに基づき、教育達成状況の差を生じさせている要因の背景について記述する。

第6章では各章の分析結果の比較考察に基づき、教育格差を生み出す構造を描き出すことを試みるとともに、教育達成に影響を与えている課題解決に向けた提案を試みる。第1項では第3章、第4章、第5章の分析結果を比較考察し、データ2次分析から得た知見と現地調査から得た知見から、本研究の仮説と目的の検証を行い、第2項では、いままでの分析に基づき、教育達成と関係のある要素がどのように関係して、教育格差の構造が形成されているのかについて考察する。第3項では、明らかとなった教育格差の課題解決に向けた提案を試みる。

2 先行研究

2.1 歴史的背景

2.1.1 植民地支配とプランテーション経済

スリランカは、第二次世界大戦後の 1948 年 2 月に英国自治領「セイロン」として独立し、1972 年には「スリランカ共和国」として完全独立し、1978 年には「スリランカ民主社会主義共和国」改称した。その歴史はやや不確定なところがあり、紀元前 3 世紀までとも、または紀元前 5 世紀まで遡ることができるともいわれている (De Silva 1981、鈴木 1997)。ポーク海峡をはさんでインド亜大陸から 30 キロの立地のため、香辛料やその他の資源をめぐって、古代からインド亜大陸からの民族の移住があった。16 世紀初頭から続く西欧諸国による植民地化の影響も加わり、多様な民族文化的要素をみることができる (足立 1987)。

(1) 植民地以前の社会システム

セイロンは地形が変化に富んでいるため多様な農林水産業が可能であり、国土の面積の 70% は乾燥地に属しており、30% は湿潤地帯に属している。乾燥地には人口貯水池を構築し、水路を開拓し稲作農業がおこなわれていた (中村 1964)。丘陵部では焼畑が行われ、山腹部では果樹園や菜園が多く、低湿潤地帯では水利施設を設けやすいため、水稻作が営まれていた (中村 1992b)。

シンハラ人の始祖であるアーリア人の渡来は神話の中に描かれており、紀元前 5 世紀にインド北部から移住してきたと描かれている (Bronkhorst 2008)。アーリア人の渡来から数世紀後に最初のタミル人²³がセイロンに渡来し、北部を占領した (Bronkhorst 2008)。最初にセイロンに渡来したシンハラ人は自由に経済活動に従事することを本来の性格とする商人を中心とする部族であったとされている (永井 1969)。シンハラ人は入植者でありながら、自分たちの起源であるインドとの関係を断ち切り、この島だけを生活の根拠としているのに対して、タミル人はインド本土とのつながりが強く、南インドのタミル・ナードウ住民と文化遺産を共有している (中村 1978、杉本 1987a)。

(2) 植民地支配とプランテーション経済の導入

1505 年、ポルトガル船が Maldiv 諸島に向かう途中、風に流されてセイロンに着いた時には 3 つの王国が派遣を争っていたとされている (De Silva 1981、中村 1964)。中村 (1964) はポルト

23 現在のスリランカ・タミル人、昔はセイロン・タミル人と呼ばれていた。

ガル人の渡来はセイロンの社会構造に変化を与えたと述べている²⁴。ポルトガル占領下では伝統的なシンハラ人のシステムによって統治する一方で、行政官をポルトガル人に据えた(中村 1964)。ポルトガルによる統治とこの時代におけるセイロンの父系的封建制度の広がりとは相俟って、農奴による大規模な砂糖生産が発達したとしている(Kurian and Jayawardena 2013)。

ポルトガルの渡来以降、セイロン特産のシナモン(肉桂)等の香辛料を求めて、ポルトガル、オランダ、イギリスの順で、それぞれが約 1 世紀半にわたり植民地として統治していった。オランダもポルトガルと同様にシナモン貿易を手中にすることが目的であったが、ポルトガルと異なる点は積極的にプランテーションにおいてシナモンを栽培し始めたことやペッパーなどの農作物も栽培を始めたことである(Bronkhorst 2008)。オランダ統治の 1700 年代は、海岸沿いにプランテーションを展開するにとどまり、いま紅茶産地として有名である高地においてはまだ開拓されていなかった(Bronkhorst 2008)。1780 年代になるとフランスや大英帝国が台頭し、1780 年代後半には大英帝国によるセイロンの統治が始まったが²⁵、1800 年代初頭まではシナモン、胡椒、シトロネラ、アレカナット等の香辛料や宝石類を独占するために、沿岸近郊を封鎖したのみであった(Vanden 1960 quoted by 中村 1964)。セイロンの植民地経済体制の構築は、ヨーロッパにおける産業革命の完成と産業資本の確立によってもたされたとされている(中村 1964)。

1850 年代になると、高地における広大なプランテーションは西欧資本を運用して開拓されていた。Bronkhorst(2008)は開拓時のことについて、セイロンの伝統であるラージャカリヤ制度²⁶をもちいて、森林を伐採し、道なき道を舗装し、湿潤地帯の高地にてプランテーションを拡大したとしている²⁷。プランテーションにおける珈琲栽培拡大の背景には、大英帝国内における人権に対する価値観の変化によりもたらされた植民地支配のありかたの方針転換とセイロン統治支配に対するコールブルークとキャメロン両氏による提言がある。中村(1976)によれば、セイロンにおけるプランテーションは、1830 年代における西インド諸国の奴隷解放に対応して西欧諸国の珈琲需要を満たすべく始められたものであり、大英帝国による植民地経営の必要から導入されたとしている(中村 1976)。また、Bronkhorst(2008)によれば、1830 年代のコールブレイク改革による政策が大きいと記している。この政策により、シナモンの単一栽培や貿易を廃止したため、大英帝国

24 ポルトガル人はシナモンや象牙貿易のため、当時の王国の 1 つであるコッティ王国との共存を試みたが、コッティ王国はムスリム貿易商追放というポルトガルの要求を拒否した。そのため、ポルトガルのコッティ王国への介入により王国は分裂した。

25 Bronkhorst(2008)によれば、大英帝国はインドにおける彼らの利益を守れればよく、セイロン自体はオランダ政府に返すつもりであったが、オランダは 1796・7 年の平和交渉の際の大英帝国からの申し出を断ったとしている。

26 必ずしも成功しなかったという説もある。

27 人びとが代々受け継がれてきた職業によって 1 年のうち一定の期間、国王に奉仕する制度をラージャカリヤ制度とよぶ。1883 年にラージャカリヤ制度は廃止。

の他の植民地で栽培されるシナモン価格と競合できなくなり、セイロンにおけるシナモン栽培と貿易は低下し、利益の高い珈琲栽培が栄えていったとしている。セイロンにおけるプランテーションは湿潤地帯で展開され、高地、中地、低地という標高によって経営形態やコミュニティの環境が異なる。高地では、プランテーションは森林伐採によって開拓されたため、シンハラ農村とは離れたところにあるが、低地の農園ではシンハラ農村経済に囲まれており、農家や村の人びとと共存している(Biyanwila 2006)。当時の湿潤地帯の農村では、プランテーション拡大のために農民の農耕地が買い取られ、一戸当たりの耕作面積が狭くなり、農民の零細化という問題が起きたとされる(国際農林業 2004)。1840 年代の経済状況はディプレッションであり、小さい農園は二束三文の値段で売却され、大農園の一部となった。当時、植民地政府の歳入は 10 万ポンドを超えていたが、その 3 分の 1 以上は珈琲の輸出によって得ていた(中村 1964、Bronkhorst 2008)²⁸。

(3) 珈琲から紅茶栽培へ

英国によって推進された紅茶産業は 1 世紀以上にもわたり、雇用と輸出により外貨を獲得してきた大事な産業である。プランテーション資本への投資は主に英国人によって行われ、プランテーションの大部分はヨーロッパ人によって所有された。1850 年から 60 年にかけて、珈琲は投資家や行政官の心をつかみ、1840 年から 75 年にかけて珈琲が単一文化を創りあげ、輸出は珈琲に依存した。このようにして珈琲は経済的価値を生み出す重要な作物となったが、次第に紅茶栽培がその地位に取って代わるようになる。紅茶栽培がプランテーションの主要な作物となる背景には 1800 年代半ばに起きた珈琲の葉のさび病と大英帝国における飲料嗜好の変化があると考えられる。

紅茶が最初にセイロンにもたらされたのは 1820 年代であるが、紅茶栽培の繁栄は 1880 年代であるといわれている。その理由としては市場における利益率という経済的背景がある。当時の茶葉市場では、中国茶が主要であったが、インドからのアッサム茶を移植して栽培していたセイロンでは、インドからアッサム茶栽培の専門家を招聘できず、セイロンでは利益をほとんど生むことができなかった。従って、珈琲によって利益を得ることができたときは紅茶を栽培する農園はなかった。しかし、次第に刺激ある紅茶が大英帝国内で好まれるようになると、インドとセイロンの紅茶は中国緑茶にとって代わるようになった。1885 年のイギリスで飲まれていた茶は中国茶が 62%

28 スリランカの農業は米作を中心とする伝統的農業とプランテーション農業の 2 部門が併存していった(高橋 1978、絵所 1999)。

を占めていたが、10年後には14%へと急落した(Bronkhorst 2008)。セイロンで最初の紅茶農園は1867年に設立されたキャンディのLoolkandura農園である。その後、ウェットゾーンの中央高地やウバ地方に多くの農園ができた。このように紅茶栽培はセイロンのプランテーションにおける主要な作物となり、現在においても経済と雇用を支えている。

2.1.2 紅茶産業構造の変化

近年、多くの先進工業国の多くでは、ミネラルウォーター、ジュースなど、他のソフトドリンクの影響で茶の消費量は減少しているが、紅茶は多くの国で多くの人に親しまれ飲料されている(河本 2008)。

(1) 土地改革と農園の国有化

前述したとおり、セイロンにおけるプランテーション経済構造の始まりは大英帝国が内陸部の高地に珈琲農園を開拓しようとした1830年代で(Hollup 1991)、1850年代には珈琲が主要産品となった。1860年代には紅茶やココナッツやゴムも栽培され始め(絵所 1999)、1880年代に珈琲に代わり、紅茶栽培が本格的に始まった(Hollup 1991)。スリランカではココナッツは海拔から標高300メートル、ゴムは標高300-600メートルで栽培されているが(川田 1978)、紅茶は高地、中地、低地のどの標高においても栽培され、異なった風味をもつ味わい深い茶葉を生産している。

プランテーションを開拓するに当たり必要とされた土地は、植民地政府が国土を取得し、破格の価格で白人たちに売却された土地である(Hollup 1991)。川田(1978)によれば、紅茶農園の総面積の約半分は公開会社によって所有されており、その半分ずつをルピー会社(セイロンで登録された諸会社)とスターリング会社(ロンドンで登録された諸会社)で所有していたとしている。また、セイロン人の個人および小規模所有は、両者合わせて、総面積のおよそ4割を占めていたが、紅茶産業に対するその影響力は決定的なものではなく、高地の紅茶農園のほとんどを支配していたのは大英帝国で登録されたスターリング会社であったとしている(川田 1978)。

セイロンは1948年2月4日ソウルベリー憲法に基づいて英国の自治領として独立した後も、植民地時代からのプランテーション作物(茶、ココナッツ、ゴム)を中心とする輸出向け農業依存型の経済が続いていたが、1972・75年の土地改革により、大規模農園は国有化され、プランテーシヨ

ン経営の構造に大きな変化をもたらした²⁹。この背景には経済的側面と政治的側面の背景があると考えられる。1948年の自治領としての独立は外国資本家たちのセイロンにおける影響力を低下させ、さらに多くの英国資本の多くに茶園が国有化になるのではないかという恐れを抱かせた。河本(2008)によれば1950年代後半になると、英国資本の多くはセイロン紅茶農園への経営投資額を減らし、「規模の経済」の追求が可能なケニア等に進出するようになった。また、プランテーション経済政策により土地を奪われた人びとの外国資本・経営・労働者に対する不満が国営化推進の背景となっていたとしている(河本 2008)。

1972年8月に「国有法(Land Reform Law No.1)」のもと実施された土地改革では農地保有の面積上限が課せられた³⁰。1975年の土地改革³¹では個人のみでなく公開会社所有の農地もその対象とされることになり、外国資本によるプランテーションを国有化した³²(川田 1978、平島 1989)。この土地改革において特徴的な点は土地収用の対象となった作物である。平島(1989)はこの土地改革により全農地の23%に相当する42万ヘクタール(981,357エーカー)が影響を受けたが、米作地への影響は1%にとどまる一方で、茶・ゴム・ココナツの栽培地のそれぞれ60%、30%、10%が土地収用の対象となったとしている(Berry and Cline 1979、平島 1989)。鈴木(2015)によれば第1次土地改革が実施された当時、紅茶栽培面積のうち71%は紅茶農園であり、そこには100エーカー以上の規模の農園が834あり、ほとんどは個人所有の農園だったとしている(鈴木 2015 p110)。このように、大規模農園は政府に収用されたが、土地を持たない農民に分配されたとしている土地面積は取得した土地の11%であった(Peiris 1984)。

このように、独立30年後に、スリランカはプランテーション農業構造の大きな転換期を迎えた。国有化された農園の多くは新たに設立されたJEDB(Janatha Estates Development Board)とSLSPC(Sri Lanka State Plantation Corporation)という2つの公社に管理・経営されるようになった。しかし、プランテーションの国有化は非効率な経営と植林・補填・近代化等を含めた生産性向上への努力不足(国際農林業 2004)や、プランテーション経営者の雇用をめぐる汚職、意思決定への政治介入などに加え、政府の農業政策(稲作重視)や輸出税の徴収、さらに世界市場における茶葉の価格低下も相俟って、土地生産性が低下し、生産量も減少していった(河本 2008)。紅茶農園の耕作面積や生産性は減少する一方で、小規模経営(10エーカー以下)による栽培面

29 英国人が農園主である紅茶プランテーションは民間の所有として広大な農園面積であったが、1970年代に行われた土地改革により、広大な農園は政府の管理下になり、外資本によるプランテーション経営に終止符を打つこととなった(Deepananda.H and Alfons. W 2007)。

30 米作地の場合には25エーカー、その他の農地の場合には50エーカー。

31 Land Reform Amendment No.35

32 農園は土地改革委員会に帰属することとなった。

積や生産性の向上は著しく、その後の小規模経営による紅茶栽培の推進政策や発展につながっていった(国際農林業 2004)。

(2) 国有から民営化

植民地時代に宗主国の利益を得るために設立された外国資本によるプランテーションは、1970年代の土地改革法によってほぼ消滅し、スリランカ政府のもとで運営されることとなった。Deepananda and Alfons (2007)は Binswanger and Elgin (1998)を引用し、発展途上国における土地改革政策は広大な農園主から農民への農地配分により貧困層の収入を増加させるポピュラーな政策であるとしている³³。イギリスでは19世紀の産業革命時に企業を国有化し、経済的に成功してきたという歴史があるが、発展途上国における企業の国有化が成功したとは言えないとしている(Suren, Bruijn & Kami 2010)。スリランカの1972・75年の土地改革により50エーカー以上の農園を国有化したものの、その運営は必ずしも成功したとはいえず、紅茶の土地生産性や生産量は停滞した。

プランテーション経営の新たな転換期は1970年代後半の経済政策転換である。1970年当時の政権である統一戦線(UF)はプランテーションの国有化を推進したが、1977年の新政権であるUNPは、市場型自由経済政策を導入した(Biyanwila 2006)。政策の転換により、農園の国有化以降の土地生産性や生産量が低下していたプランテーション経営の再民営化が検討され、1987年には国営企業の経営負担と経営改善のための効率化のため、プランテーション部門を含んだ国営企業の民営化がアナウンスされ、2つの法令が制定された(Salih 2000, Suren, Bruijn and Rwegasira 2010)。1つは政府所有ビジネス部門を公営株式に代える法律「Public Corporations Act No.22」、もう1つが公営株式と政府所有ビジネス部門を公営会社にする法律「the Public Company Act No.23 of 1987」である。本法令により、1992年に土地は政府によるリースとしながらも経営と運営は民間会社に任せるという政策に転換し(Wickramasinghe 2003, Nihal 2011)³⁴、紅茶産業の構造に大きな影響を与えた(Gaminda, Ganewatta and G. W. Edwards 2000)

1992年6月、JEDBとSLSPCの2つの公社によって運営されていた502農園のうち409農園が、政府が100%株式を持つ22³⁵のRPCs (Regional Plantation Companies)に移管された。各RPCは

33 Deepananda and Alfons (2007)は Binswanger and Elgin (1998)を引用し、発展途上国における土地改革政策は小規模農家を好むとともに、直接的に農場サイズの配分に影響を与えているとしている。

34 プランテーション経営難と世界銀行やアジア銀行からのプレッシャーも、プランテーション経営の転換する方針の背景の1つである。

35 当初22のRegional Plantation Companiesであったが、後に23となる。

12から29の農園と、両公社がもっていた11支部中の1支部から構成されており、再民営化の当初はイギリスからのコンサルタントが経営のアドバイスをした(Nihal 2011 p28)。1995年になると、政府は民営化に関する唯一権限ある機関としてthe Public Enterprise Reform Commissionを設立し、広大な農園は23のRPCsにリースされた(Nihal 2011)。1992年当時の農園は民間会社によって経営・運営されているものの権限移譲はなされていなかったが、1995年から1998年の間に選ばれた企業に順次、経営権が移譲されていった(Nihal 2011)。このことにより、世界においても最も大きな民間経営による農業となり、1995年には13のRPCsで利益がでるような運営経営になっていった(Wickramasinghe 2003、Salih 2000、Nihal 2011)。

民営化の検討段階当初では、外国資本による経営権を49%まで認めることも検討されたが、最終的には国内企業による経営権の所有のみということとなった(Shanmugaratnam 1997)。設立プロセスとしては、RPCsを運営するに当たり民間に呼びかけ、手を挙げた民間会社に運営を依頼した。その後、1992年のオーナーシップを更新する際に5年間の経営権限を委譲する契約をしたが、5年間の委託契約では短期的視点からしか経営をみることができず、長期的視点に立った経営戦略をたてることができないため(Salih 2000)、1995年に23RPCsのうち20RPCsの経営権を売却した(Suren、Bruijn and Rwegasira 2010)³⁶。リースされた当時は290,000人が260,000ヘクタールの農園で雇用され、働いていたとしている(Suren 2000)。

このようにして1970年代にプランテーションの国有化は、20年後の1990年代には再び民営化することとなったが、経営権は民間会社に委譲されたものの、株式の30%は公的機関に保有されるとともに、農園の土地については政府所有であり、50年間のリース契約となっている。本研究ではこのRegional Plantation Companiesを半公営農園として位置づけ、民間農園とは区別して、紅茶産業における経営形態に着目した分析を行う。

(3) 多様な経営形態の台頭

紅茶の栽培は珈琲栽培と異なり労働集約的で、手間暇のかかる作物ということもあり、セイロンで主要なプランテーション栽培作物となっても、稲作農業に従事しなければならないシンハラ人にとっては、珈琲やココナッツ、シナモン等とは異なり紅茶栽培はあまりなされていなかった。しかし、1970年代、農園の国有化にともなう貧農民への土地分配と、紅茶産業の市場競争力の強化は、プランテーションの民営化だけではなく、小規模経営に対する支援も充実していった。

36 3つのステップ: (1) 51-60%の株は投資家に譲渡され、(2) 30%は公的機関に売られ、(3) 10%は雇用者に無償で配分された。

1980年代以降、10 エーカー以下の小規模経営の茶葉耕作地と生産量が増加している(国際農林業 2004)。特に低地においては個人経営の小規模農園が増加し、高地から中地における半公営農園や大規模民間農園による紅茶農園経営とは異なる紅茶産業構造となっていった。

1911年の紅茶栽培における小規模生産者の割合は、ゴムは20%でありココナッツでは60%であったのに対し、茶葉については10%程度であったが、独立後に徐々に増加した(Lewis 1970)。小規模生産者の定義はいくつかあり、The Tea Control Act によれば10 エーカー未満となり(Dent and Goonewardene 1993、DCS 2012)、Tea Board では10-50 エーカーの間を小規模経営というなど、栽培面積による定義がまちまちである。紅茶栽培の小規模生産者は The Smallholders Development Authority (TSHDA) の管轄下にあり、すべての小規模生産者は Tea Shakthi として知られる Sri Lanka Federation of Tea Smallholder Development Societies に所属している。この連邦の管轄下には、村レベルのソサエティがあり、幅広い支援をメンバーに行っているが、辺鄙な村はこれらの支援にアクセスする機会が限られている。小規模生産者の紅茶生産における貢献は年々増加している。低地域における生産量の95%は小規模生産者によって栽培されており、中地域においては59%、高地においては15%となる(Prasanna 2014)。平島(1989)によれば小規模生産者の平均規模はわずか1 エーカーであるが、栽培面積に占めるシェアは、1934年に11.5%(22万6000ヘクタール中の2万6000ヘクタール)であったのに対し、その後緩やかにシェアを伸ばし(1960-69年は年率3%、70-84年は年率2%で増加)、77年には20%台(24万2000ヘクタール中の4万9000ヘクタール)となり、85年には24.3%までに達したと記している。また、Deepananda and Alfons(2007)によれば1951年から2005年の間に小規模生産者の絶対数は368%増加するとともに、これらの農家による茶葉耕作面積は296%拡大したとしている(表2-1)。一方、100 エーカー以上の農園は57%減少し、農園面積は36%減少したとしている。

表2-1 茶葉生産農家数と耕作地

年	紅茶農園数		紅茶作地面積	
	小規模 (<10 acres)	大規模 (>100 acres)	小規模 (<10 acres)	大規模 (>100 acres)
1951	84,363	939	67,414	456,746
1978	129,052	782	123,528	383,082
2005	394,892	404	267,253	293,935
1951-2005 変化	+368%	-57%	+296%	-36%

出典: Deepananda.H and Alfons. W 2007

かくして、植民地時代にはセイロンにおいて小規模経営による生産の比率の低かった紅茶生産であったが、2005年には栽培面積の2分の1以上が小規模生産者の経営にゆだねられているということは注目に値することであろう。スリランカの紅茶は世界第3位の生産国であり、輸出による収入は14%を占め、GNP比率の約20%を占める農業部門の70%が紅茶産業によって稼ぎ出されている(SOMO 2006)。マタラ県コタポラ郡で調査を行った2013年には、紅茶の生産量は34.03万トンに達した。小規模生産者の紅茶生産における貢献は、2012年には23.4万トンの生産量が2013年には24.8万トンとなったことからわかる(Prasanna 2014)。

2.2 紅茶農園の生活と人びと

2.2.1 プランテーション開拓と人びと

(1) 森林伐採とプランテーション開拓

スリランカの農業は、稲作とプランテーション農業が大きな柱である。平坦な部分ではおもに稲作がおこなわれるが、斜面では広大な農園が展開されている。スリランカでは、紅茶、ココヤシ、香辛料、ゴムの4大作物がプランテーション農業の中心で、このプランテーションは「世界の工場」として君臨した大英帝国の経済覇権のもとで、世界各地の植民地を宗主国向けの原料生産地として再編成し、19世紀に拡大された。このことは、単にこの島の農業や産業構造を変化させただけでなく、人びとの生活そのものに大きな変化を招くものであった(杉本 1998)

世界でも有名なセイロンティーは中高低地に広がる農園で栽培されているが、最初の珈琲プランテーションが設立した1820年代初期は後のプランテーション開拓地である中央高地の大部分は森林に覆われていた³⁷(杉本 1998)³⁸。

プランテーションの開拓には、主に西欧の投資家たちの思惑が背景にあったと思われる。当時の英国や世界では珈琲ブームであり、利益率の高い珈琲栽培のためにさまざまな人びとが土地を求めた。これらの土地を取得するために、英国占領下のセイロン政府は王室領土地法を制定するとともに、税制度を整えた。19世紀初頭以前のセイロンでは、農民は税金を現物納入することができたが、シンハラ王国以来からあるPaddy Tax制度³⁹を金銭で支払う制度に修正

37 このころの珈琲 PL の広さはほぼ 100 エーカーであったといわれている。

38 当時のセイロンの中央高地では、森林のまわりにはほとんど人が住んでおらず、1850 年代から 60 年代にかけて、珈琲プランテーションが拡大されるまでは未開の地であったともいわれている(Roland 2007)。

39 Paddy Tax の起源はシンハラ王国に遡る。ポルトガル・オランダ統治下時代には、この Paddy Tax の制度を修正し税

し、支払えない場合には農民から土地を徴収し、売却する権利を王室が有することとし、取り上げた土地は農園主に売却した(Roland 2007)。また、法的根拠を与えるために制定した1840年王室領土法(the Crown Lands Ordinance of 1840)により、すべて法的な所有権を立証できない人びとの領有地は、王室の領有地とみなされることとなった(Siri 1978)。プランテーションは無償に近い価格でプランテーション投資家たちに払い下げられた山地や平原のジャングルを開拓して新設された(中村 1976)。1833年から48年までの間だけでも、計258,072エーカーの土地が珈琲農園主によって購入された⁴⁰(Siri 1978)。

このようにして開拓されたプランテーションの土地の多くはセイロンの人びとが所有する森林であり、土着の農民が住んでいた谷あいの上の傾斜地にあるものであった。村落の人びとはこれらの土地で家畜に草を食させたり、狩りをしたり、たき木や木材を得るところであり、また、補助的な食品の栽培をするために用いられ、人びとの生活を支える源であった(Siri 1978)。

(2) シンハラ農民と農園における労働

先祖伝来の土地を村落の農民から徴収し、山頂を破壊し、土地を侵食し、湧き水を枯渇させ、稲作を侵し自然環境を破壊して発展したプランテーションにとって(Meyer 2003)、創成期から、利益を上げるために最も重要な要素は効率的に配置できる安定した労働力の確保であった。しかし、労働力を近在の農村社会に見出すことは不可能であったといわれている。シナモンや胡椒等の香辛料あるいは珈琲の場合も含めて、これらのプランテーション経営に特徴的なことは、必要とされる労働力がセイロン外部、主として地理的に近い南インドから移入されたことである。特に19世紀後半以降の茶園とゴム園の急速な普及に伴い急増する労働需要を満たしたのは、南インドからのタミル人労働者であった(中村1978、国際農林業協会2004)。

セイロンにおけるプランテーション労働需要を満たすために、海外に労働力を求めたことについて、多くの研究者によって論じられている。たとえば、Craig (1970)は当時のセイロンでは、低カーストが行う農園労働に従事することを疎んじたために、南インド・ナドゥからタミル人を労働者として渡来させたとしているが、中村(1976)によれば、人びとは自分たちに固有の社会関係を形成しており、「飛び地」で全く異なった労働組織に入る必要性はなく、森林の伐採や輸送労働など、一時的な出稼ぎには出かけても、既存の生活様式を放棄して農園に移住する理由は何もないとしている。また、Roland (2007)は、農園の近くに住む人びとは自宅から働いていたのでは

金を得ていた。オランダは庭からとれる穀物等には税金をかけていなかった。

40 イギリス人のプランテーション所有者が土地購入に払った金額は1エーカーあたり、1ルピーとも2ルピーとも言われるわずかな金額であった

ないかと推測しつつも、Peebles (2001) の文献を引用して、珈琲栽培の当初はシンハラ農村の人びとは雇用されていたが、農園主は十分な労働力を南インドから安い価格で確保できたために、シンハラ人を雇用する必要はなかったと考察している (Roland 2007)。そして、シンハラ人が珈琲プランテーションでの労働力を形成していたという文献は少なく、1820年代から30年代にかけて、シンハラ人が珈琲プランテーションでの労働力として構成しているとは考えにくいとしている⁴¹。

生活のリズムや既存の社会関係が存在する農村社会の人びとを農園労働に動員しようとするれば、人びとの生活や文化を崩さなければならなくなる。中村 (1976) はシンハラ農村の住民がインド系タミル人労働者より怠け者だから、農園の労働力として不適切だという説を否定し、シンハラ人は地元の社会の絆から様々な村落の共同生活に参加する必要があると、プランテーションが要求する労働規律に生活を合わせることができないのであるとし、それは同じ島内で農村社会を形成しているタミル農民も同様であり、海外のインドで雇用した人びとのみが基幹労働力として採用されたと論じている。

スリランカ滞在中にキャンディの民間農園でインタビューした農園主は、昔は、従順で勤勉であるといわれていたタミル人であるが、TVとインターネットの発展・普及は彼らの価値観と生活を変えたと言っており、いまでは、農園労働者をまとめるカンガーニにシンハラ人を任命することがあると言ってくれた。また、現地調査地の半公営農園では、シンハラ人の女性がカンガーニに任命され、茶摘み女性たちのまとめ役を果たしており、女性の進出とともに、民族の壁に変化が生じてきていると感じた。

(3) 人手不足と南インドからの出稼ぎ

Roland (2007) は南インドからの労働力の確保は大英帝国統治より以前から行われており、プランテーション経済を切掛けとして、植民地政府が働きかけて南インドから必要な労働力を確保する政策をとったとしている (Roland 2007)。Siri (1978) によれば、当初は、中国とアフリカから労働力を採用することも検討されたが、インド人労働者の方が好まれ、中国やアフリカから労働力を確保することにはならなかったとしている (Siri 1978)。

Hollup (1991) によれば、白人経営者たちはカンガーニ制度を用いて、インドからクーリ (インドからの労働者) と呼ばれる労働者を連れてきたとしており、これらの人びとの多くは土地なし労働者か貧しい農村の出身であり、そのうちの半数以上が最も低位のカーストに属していたと述べて

41 1833年 Cameron-Colebrooke 改革の1つであるラージャカリ制度の廃止により、賃金労働者を創出しようとしたといわれている。

いる。Siri(1978)はセイロン大学の「セイロン史」第3巻を引用し、南インドから渡来した人びとについて著書の中でこう記している。「貧困、農業労働者階級を生んできた、さまざまな形の農村的服従、低賃金、飢餓に近い状態がいっしょになって、南インド地帯の人びとに、スリランカのプランテーションでの雇用を受入れる気持ちにさせたのである。これと同時に、スリランカの農園主たちは、南インドの賃金より高い賃金をもって勧誘したのであった」(Siri 1978 p123)

英領セイロン島における珈琲プランテーション経営が設立して以来、今日のタミル・ナードゥ州の農村地帯は、これらの珈琲農園に対する労働力の供給源となった。1837年に来島したタミル人労働者数は1万名で、プランテーション的生産様式の発展とともに、1846年には8万名、1855年には13万名、そして南インドが飢饉に襲われた1877年には38万名へと急増した(中村 1976)。

これらの人びとが南インドからセイロン島南西部の産地にある珈琲農園に到着するまでには、苦難の多い長い旅をしなければならなかったが、それでもセイロンでの労働を決断させたのである(中村 1976)。Siri(1978)は「スリランカの渡航者」にある当時の大英帝国の役人の記述を次のように紹介している。「1833年と1845年のクーリのみじめな群れ、...満足な食べ物も与えられず、ぼろ着を身にまとい、目に留まれば、くずでも口に入れ、...ジャングルの道に分け入り、ときには行けども身のまわりには水一滴すらなく、かと思うと、時には水は氾濫して膝を没し、見渡す限りの沼沢地を往けば、日が一日は水につかって、働くところはジャングルを開墾したばかりの農園、あるいはこれから農園にしてこうとするジャングル地帯、住む家はそまつなあばら家、しかもこれらのことをすべて雇い主はほとんど知らないでいる」(「(原注)スリランカの渡航者 1 ページ引用」)(Siri 1978 p123)。このような危険で身震いするような旅程と農園での過酷で悲惨な諸条件のため、渡航者の死亡率は高かった。さらに農園における医療施設などはまったくの不十分であり、1841年から49年までに、コレラと天然痘が主な理由で、約7万人(移民の25%)が死んでいる(Siri 1978 p123)。南インドからの出稼ぎ労働者は、奴隷としてセイロンに連れてこられた人びとではなく、渡航するか否かの選択肢はあったとされるが、実際には借金のために出稼ぎ労働に従事しなければならない事情も記述されている(Bronkhorst 2008)。

2.2.2 季節労働者から定住労働者へ

(1) 珈琲から紅茶栽培へ

スリランカの紅茶の歴史はそれほど古くない。紅茶がセイロンに初めて紹介されたのは1820年代で、栽培され始めたのは1860年代であるが、プランテーション開拓時は、宗主国や世界では珈琲が好まれて飲料されているうえ、珈琲栽培のほうが手間はかからず、利益

率がたかいため、農園主には好まれていた。

セイロンで珈琲プランテーションが始まると、農園主はタミル・ナンドウの南部地域から土地なしで弱者的立場にある貧農民を好んでリクルートし、年季奉公労働者として連れてきた(中村 1976, Silva, Sivapragasam and Thanges 2009)。農園経営システムはマネージャーから始まり、アシスタント・マネージャー、フィールドオフィサーと労働者を管理するカンガーニ、そして、農園での労働に従事する労働者という管理体制である。このピラミッドの構成は必然的に民族、階級、カースト、性別というものとかかわっている階層システムである(Amali 2005)。

珈琲栽培は 10 月から 2 月までが珈琲豆の収穫期であり、南インドからの人びとは、収穫期のみ必要な季節労働者としてセイロンの珈琲農園で働いていた。1870 年代になると、プランテーション作物は珈琲に代わって茶葉が栽培され、必要とされる労働の内容が珈琲農園のそれとは著しく異なっていく。紅茶栽培は合理的かつ経済性にそった方法で構成され、珈琲栽培よりも労働集約であり、規律ある常用労働力を求めた(Siri 1978)。労働力が恒常的に必要ではない珈琲農園と比較し、茶農園は対照的であった。珈琲栽培においては 1 エーカーあたり 1 人の労働者が必要であったが、紅茶栽培では 3-4 人が必要であったとしている(Bronkhorst 2008)。その結果、移民労働の性格には根本的な変化が生まれてきた(Siri 1978)。

紅茶の収穫は 1 年中茶摘みができ、手をかける必要があり、一芯 2 葉を丁寧に農園の女性たちが摘んでいく⁴²。調査者がインタビューした農園主によれば、茶葉は新芽がでるのが速く、1 週間に 1 回茶摘みするため、茶畑を複数に分け、茶摘みすると話してくれた。このようにプランテーション作物が珈琲から紅茶に代わり、季節的な労働から 1 年をとおした労働となり、季節労働者として働きにきていた南インドのタミル人は、セイロンの農園に定住するようになった。同時に、植民地体制下におけるプランテーション運営構造の複雑さと新しい消費市場の創造により土着のエリートを産み出す新しいビジネスの機会を産み出した。(Bronkhorst 2008)

(2) 労働環境

紅茶農園での労働は過酷であったといわれている。茶摘みは朝の 6 時から夕方 4 時とも、また 6 時までともいわれ、長時間にわたり(Thondaman 1990, Bronkhorst 2008)、袋を頭にかけて、摘んだ茶葉をいれていく。茶葉が袋一杯になったころには 10Kg を超す重さとなっている。調査者も 2013 年に訪れたナトナプラの民間農園で、摘んだ茶葉の入った 10Kg 程度の袋を頭から掛

42 紅茶は労働集約的産物であるが、ヘクタール当たり必要されている労働者数はインドでは 2.5 人であり、バングラデッシュでは 2 人であるが、スリランカの農園では 3 人から 3.5 人必要である。しかしながら、小規模農家では 1.5 人となっている(Sivaram 1996)。

けてみたが、頭では支えきれず、足元もふらふらとなった。セイロンからスリランカへと国名が変わってから、労働時間や賃金など改善されたが、それでもなお、厳しい自然環境の中で、朝から夕方までの 8 時間、茶摘みをするのは非常に厳しい労働である。スリランカの農園における労働について、貧困に取り組む OXFAM や研究をしている SOMO、労働状況について調査や政策提言をする ILO などによって、その厳しい状況が報告されている。

1976年のILOの報告によれば、農園の労働者は過酷な気候条件の中で働いているとし、高地であればしばしば寒く、強風や湿気の気候の中で作業をおこなうことを余儀なくされ、他の地域では灼熱の太陽のなかで、仕事をしなければならず、急斜面から落ちる危険が高いとされている (ILO 1976c)。農園では茶摘みが重要な仕事であるが、そのほかにも土地の管理維持のため殺虫剤や肥料を散布したり、溝を作ったり、茶葉を集め運ぶ仕事などもある。現在でこそ、サンダルやエプロンなどを身につけているが、なかには裸足で茶摘みを行っている者もいる。斜面からの転落による大けがや茶栽培地における虫などによる病気やケガはいまでもごく普通に起こる。調査者も、調査中に樹木の樹脂により蕁麻疹が体中に広がり急きょ夜間に病院に行くことや、蟻や虫にさされ、顔や背中が腫れることも多々あった。調査中は、接骨を専門とする伝統医学医師 (アユーダベータ) であり、個人農家の自宅にお世話になったが、滞在中には脱臼した患者や骨折した患者が頻繁に訪れていた。患者は老若男女問わず、様々であった。また、茶園にて茶摘みしている労働者は散布した有害な殺虫剤や肥料にさらされ、呼吸器の病気や腰痛、斜面からの転落、そして農園に居る虫などによる病気やケガに苦しめられている (OXFAM 2002、Wal 2008)。散布した殺虫剤や肥料と健康との因果関係は不明だが、現地調査では、こどもたちが呼吸器系の不調を話してくれた⁴³。

(3) コミュニティの形成

プランテーションの労働者は農園主と労働者を束ねているカンガーニの意に従わねばならなかったとされている。Siri (1978) によれば、農園における規律は最も厳しく維持され、農園主もカンガーニも、労働者の生活のあらゆる面、すなわち、労働、賃金、食糧の配給から、信教、結婚のとりまとめに至るまで統制力を持っていたとしている。南インドから労働にきていた人びとは、自分を農園に連れてきたカンガーニから「前借」をして、出稼ぎにきており、労働者は「完済証明書 (トウンドウ)」を示す紙片を手に入れないかぎり、カンガーニや農園から離れていくことはできなかったとされている (Siri 1978)。人びとは季節労働者として渡来し、農園内にある居住地区に

43 2015年夏、10名のこどもに体調を聞いたところ、10名中4名がアレルギーで呼吸困難であると回答してくれた。

収穫期のみ居住することを目的としたライン・ハウスと呼ばれる長屋に住んでいた。農園部に居住する労働者は家を所有できず、また修繕したり、増築したりすることも許されなかった (Jegathesan 2013)。カンガーニの長とその労働者たちはそれぞれの農園に定着し、時の流れとともに、彼ら自身の慣習と崇拝する神を備えた 1 つの村落をそれぞれの農園で備えており、カンガーニの長は、その家父長的地位を保持していた (Siri1978)。

20 世紀初頭になると紅茶やゴムの栽培が急増し、永続的に農園に居住するタミル人口が増大した (以下「タミル人」と記す。)。彼らはタミル人ではあるが、紀元前より北部と東部に居住しているスリランカ・タミル人とは異なる。1946 年には全人口の 12% を占め、そのうち約 80% は農園労働者となっていた⁴⁴。タミル人の多くは高地の紅茶農園に集中しており、労働人口の 95% を占めていた。中地の農園は、シンハラ人の農村近くにあり、農園労働人口の 75% を占める。低地における農園は田を耕す村々に隣接しており、労働力人口はシンハラ人とタミル人が半々である (Hollup 1991 p196)。農園で働いている労働者は、タミル人は農園内部の住居に居住している場合が多いのに対して、シンハラ人は通勤している⁴⁵。

2.2.3 こどもを取り巻く環境

先行研究や多くの報告書では、農園で働く労働者の労働環境や生活環境が悪いと述べられており、また独立後においても、内戦状態の影響もあり、民営化された農園では団体交渉によって合意された取決めが守られず、人びとの労働環境と生活環境は悪化したと述べられている (Biyawila 2006)。プランテーション作物が季節労働しか必要としなかった珈琲栽培であった時には、労働者の家族は出身である南インドに残るといった構造であったが、年間を通して労働力を必要とする紅茶栽培では、家族とともにセイロンへ移住してくるということが一般となった。セイロンにおける生活圏は彼らが働き、かつ居住する農園部の居住地区であり、こどもも大人と同じ環境下にあったといえる。

(1) 世帯収入と貧困

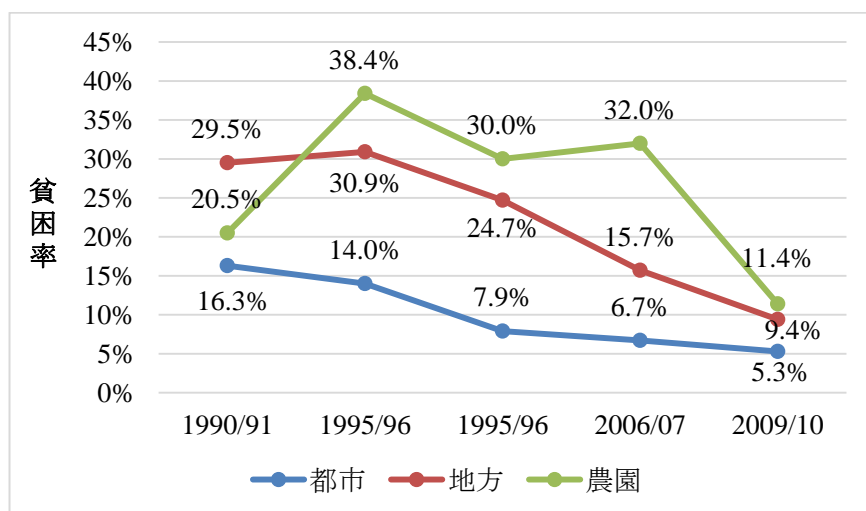
スリランカでは植民地時代に人びとから土地を取得するために、占領政府が税金システム

44 1971 年におけるタミル農園人口は全体の 9.5% であったが、1981 年においては 5.6% となっている。

45 先行研究によれば、農家の多くは 1 エーカー以下の作地面積で、副収入を得るために働いていた。農家の人びとにとって、紅茶の栽培は割に合わないと言われていた。プランテーションにおける珈琲栽培の衰退後は、珈琲の代わりにココナッツやゴム、スパイスなどを栽培するようになった (Bronkhorst 2008)。農家で紅茶栽培が一般的になるのは、1972 年・75 年の土地改革による耕作地の分配と小規模経営の推進政策によるものであると考えられる。

を現物から貨幣に変更したことは前述のとおりである。その後、貨幣はさまざまな形で、セイロンの人びとの中で重要な役割を果たしていった。貨幣による収入について、セン(1999a)は、「われわれには一般的により多くの所得や富を欲しがらる立派な理由がある。それは、所得や富がそれ自体のために望ましいからではない。私たちが大事だと考える種類の人生を送るためには、より多くの自由を得るには、所得や富が何の目的にもかなう優れた手段だからである。」(Sen 1999a 石塚邦訳 2000 p11)と述べている。センは所得の役割は人生の選択の幅を広げるものの1要素であるとしている。農園で労働の対価として得た所得が個人にとって豊かか、否かはひとによって感じ方が異なるが、アダム・スミスの言うところの「たとえ最下層の人びとでも、それがなければまともな人間としては見苦しい」という「まともな人間」としての生活を維持するだけの所得を労働者は得ていたのであろうか。

中村(1976)、Siri(1978)、Roland(2007)は農園の労働に従事する人びとについて、シンハラ人は肥沃な土地を持たない人びとや借金を持っている人びとであり、南インドからの移住者は渡航に当たって借金を抱えている労働者であり、彼らの生活の困難さを示している。Hollup(1991)は、農園労働者は低社会経済的地位という生活環境におり、低所得・土地不所有・不識字という境遇が同様の社会的グループに創り出されているとし、絵所(1999)は1975年の大規模農園国有化後も、農園の労働者は貧困に対してきわめて脆弱であったとしている。図2-1は居住地域における貧困率の推移を示したものである。



出典: Poverty Indicators, DCS, Government of Sri Lanka, 2011

図2-1 居住地域における貧困率

国有化された大規模農園は 2 つの公社によって管理・経営されていたが、経営改善のため、1990 年代になると再民営化された。農園民営化前の 1990 年と民営化後の約 15 年間を比較すると貧困率は悪化したが、内戦終了後の 2009/10 年には改善されたとスリランカ統計局は報告している(DCS 2011)。

表 2-2 は都市・地方・農園の所得推移とプランテーションの主要作物を栽培している農園における労働者の賃金の推移である。2002 年と 2010 年を比較して、農園の 1 人当たりの所得も世帯単位の所得も増加しているが、都市の世帯所得と比較すると半分程度となっており、他の居住地域より低いことがわかる。また、農園部内を比較すると 2002 年にはゴム栽培に従事している労働者の給与が低かったが、2010 年においては 3 倍となり、紅茶栽培に従事している労働者の給与が最も低くなっている。

表 2-2 居住地域と農園における収入

	一人当り購買力平価 (平均世帯所得/月)			主要PLセクターにおける日給 (2002年を100とする)		
	都市	地方	農園	ココナッツ収穫	茶摘	ゴム収穫
2002	11,625 (23,436)	6,554 (11,819)	3,602 (7,346)	419.49 (100)	176.89 (100)	146.28 (100)
2003				410.12	186.15	169.02
2004				464.74	199.07	192.53
2005				457.11	252.63	203.58
2006	9,653 (41,928)	5,993 (24,039)	4,589 (10,292)	481.63 (114.8)	273 (154.3)	231.64 (158.4)
2007				568.61	314.55	268.5
2008				726.54	360.91	354.37
2009				815.53	394.56	372.88
2010	11,245 (47,783)	8,916 (35,228)	5,782 (24,162)	875.34 (208.6)	353.06 (199.6)	432.65 (295.3)
2011				991.24 (236.2)	394.68 (223.1)	482.57 (329.9)

出典: Economic Statics of Sri Lanka 2012 (DCS 2012)から作成

表 2-3 は居住地域における 2012 年の消費の月平均である。セイロン中央銀行の統計データによれば、農園では、月消費平均は 23,998 ルピーであり、支出の半分以上が食糧に支出されていることがわかる。しかし、その支出額は都市よりも少なく、都市の 3 分の 2 程度である⁴⁶。

46 2013 年の現地調査では、農園部の物価の方が近隣の価格より少し高いところもあった。農園部内の居住地は郡卿

表 2-3 居住地域における消費平均

居住地域	都市	農村	農園
月消費平均(食料)	44,928 (15,904)	29,423 (12,857)	23,998 (12,209)

出典: Economic Statics of Sri Lanka 2012 (2012)から作成

(単位:ルピー)

政府は無償教育・無償医療の政策を施行しており、人びともこどものために良い教育や医療を受けさせたいと思っている。しかし、Economic Statistics of Sri Lanka (2012)によれば、都市では支出割合の 4%である 1,797 ルピーを教育に支出できるのに対して、農園部では 1.6%の 122.1 ルピーしか支出できず、また、医療についても都市部では 5.4%を支出できるのに対して、農園部では 3.7%となっている(CBSL 2012b)。もし、農園部の人びとが都市部で教育や医療を受けようとするれば、金額は農村・農園部出身だからという基準で設定されるわけではないため、都市部の世帯と同じ額の費用が掛かかる。したがって、所得の低い人たちにとっては、物価の高い地域のものや、居住市域の状況が加味されていないものを得るためには、所得における支出(負担)が大きくなる。

ここでいう農村には農家の人びとも含まれる。表 2-2からは 1990 年の農村の貧困率は農園より高く、その後、徐々に改善していることがわかる。1981 年時点の人口比率は都市が 21.5% (319.25 万人)、農村は 78.51% (1165.43 万人)となり、多くの人々が農村で暮らしていた。この傾向は 21 世紀の現在も同様であり、2010 年の人口は 2046.94 万人で、都市が 18.2% (370.45 万人)、農村は 77.4% (1575.91 万人)、農園は 4.4% (89.58 万人)である(DCS 2018)。農村の平均所得は農園よりも高いが、地方における貧困ギャップは農園よりも高く、貧困世帯の数は多い(DCS 2011)。

(2) 住環境と生活環境

スリランカでは、1930 年代から無償教育、無償医療、食糧配給は性別や宗教、民族やカーストと関係なく行われている(Silva, Sivapragasam and Thanges 2009)。しかし、人里から離れた大規模農園で働く人びとの多くは農園内に居住することが多いため、農園は労働者に住居や、飲水、

の中心地から離れており、運搬などにコストや時間もかかるためである。また、冷蔵庫を持っている家庭が稀である農園部の人びとが生活に必要なものを購入するために近隣の商業地区まで毎日行くには時間もコストもかかりすぎる。そのため、人びとは農園内部のお店で購入することが多いが、収入は近隣の農家の人びとより少ないというのが現状である。

衛生的な環境や医療、その他の社会政策プログラムを提供しなくてはならない(B.Sivaram 2001)。紅茶プランテーションでは効率的に茶摘みをできるように区画(以下、「ディビジョン」と記す。)分けされており、各ディビジョンに労働者の居住地区がある場合が多い。労働者の住居は各ディビジョンの居住地区にバラックスタイルの長屋で 1 列か 2 列に建てられており、ラインルームまたはライン・ハウスと呼ばれている⁴⁷。それぞれのラインには 5-10 位に区切られており、各ルームに 1 世帯が住んでおり、たいていは 10-12 フットの部屋と小さいベランダと料理する場所しかない。

Amali (2005)によれば、多くのライン・ハウスでは各家に水道設備がないため、女性は朝早くに起床し、近くの茂みを通り抜け川に水を汲みに行かなければならないとしている。また、洗濯や風呂も川でおこない、子どもたちも母親に従い、朝早くに家をでて川に行き、体を洗っているとしている(Amali 2005)⁴⁸。また居住地区における住居は設計上の構造のために各家にトイレを設置するスペースがなく、共有のトイレは修復や長蛇の列、プライバシーの欠如、尊厳の軽視、悪臭、体調不調などの状況を産み出しているとしている(Silva, Sivapragasam and Thanges 2009b)。ライン・ハウスが建設されて以来、農園部に住む人びとの居住スタイルはいまでも残っている。Silva(2009b)は 1970 年代まではこれらのライン・ハウスは農園主によって所有されていたが、1970 年代以降は居住者に長期間住む権利を与えている農園もあり、スペースの関係から家自体を改築することはできず、改善スペースも非常に遅いが(Dishan 2012)、アップグレードされてきているとしている。

農園の茶摘みは過酷な労働で⁴⁹、さらに殺虫剤や化学肥料が散布された栽培地の近くに居住する労働者や子どもの健康への影響が危惧されている。世界銀行(2007)の報告によれば、プランテーション労働者の女性の 30%が栄養不足に陥っているとしており、都市部の 13.7%や地方部 17.3%と比較すると高く、このことは胎児に影響を与えているとしている。スリランカは無償医療政策を取っているが、健康管理システムは植民地時代とは大きな変化がないとされており(MHNW 2003)、健康管理サービスの提供は農園会社に任されている。大きなプランテーション会社では救急車を所有しているが、出動するまでの手続きに時間がかかる。また、医療にかかるコストを削減するために、いくつかのプランテーション会社による合同医療サービスも推進され、このことが病院でのアクセスを妨げるという報告もある(MHNW 2003)。近年では PHDT

47 本研究では、長屋を指す場合にはライン・ハウスと記述し、個人宅を示す場合にはラインルームと記述する。

48 2017 年の補足調査時においても、川で体を洗うのは普通のことである。

49 農園労働者の摂取カロリーは 2,377kcal 必要であり、都市の 2,116kg、農村の 1,881kg に比較すると高く、1 日労働するに当たり多くのエネルギーが必要とされていることがわかる。

(Plantation Human Development Trust)⁵⁰が農園内における社会福祉に関することを担当している。(住居、保育所、トイレ、助産援助、医療)(Sivaram 2001)。一方、農村における農家の多くの家は土壁、木の柱、茅葺き屋根であり、当時のヨーロッパの基準と照らし合わせると不衛生であった。また、学校は鉄の屋根とタイルの屋根でできており、寺の中のいくつかの建物が学校であったとされている(Leach 1961)。農家におけるプランテーション作物が盛んになったのは1970年代の土地改革による貧農民への耕作地の分配にあったというのは前述のとおりである。紅茶は年間を通して労働力を必要とするが、一方で、収入をもたらし、小規模農家にとって魅力的な作物でとなる(OXFAM 2002)。Willinges(2004)は農家の人びとの生活について、平均的耕作面積は0.47haであり、60m²の家と24m²の納屋、12m²の動物小屋、そしてバイオガスパランのため4m²が平均であるとしている(Willinges 2004, P84)。調査地では小面積の茶畑を所有する農家では、新芽が摘める7日ごとに茶摘みをし、茶を集めにくる茶葉買取り会社に売る⁵¹。それ以外の日には、他の農家や農園に行き、その日ある仕事をして収入を得たりし、他の仕事をしている農家もある。

(3) こどもの活動

子どもたちがセイロンの農園に労働者として従事するようになったのは、まだ珈琲がプランテーションの主要産物だった1830年代であったが、当時は子どもたちを雇用主の搾取から守る法律はなかった(Barret 2015)。珈琲が栽培されていたプランテーション初期の50年間は男性が100人に対して女性2.7人であったが、作物が珈琲から紅茶に代わったことにより、家族による定住が増え、女性や子どもによる労働力が重要になっていった。紅茶の栽培は多くの働き手を必要とし、農園主は安価で従順な子どもたちも雇用し、その数は増加していったとしている(Kumar 1984, Weeramunde 1982, Barret 2015)

子どもは大人と同様の仕事を手伝ったが、労働の対価として大人が得ることができるコメの量は大人の半分であった(Bronkhorst 2008 p258)。女性・年少者・児童の雇用法(1956年)⁵³は14歳

50 1992年の民営化後、農園居住者の生活に関する社会福祉については、スリランカ政府とRPCによる拠出金によりPHSWT(Plantation Housing and Social Welfare Trust)が設立された。現在はPlantation Human Development Trust (PHDT)と名称を変更。

51 農家によっては、週2回程度収穫することもある。

53 スリランカは児童労働に関するInternational Commitments(1844年のInternational Conventions on Slavery)を受入れ、1923年に産業におけるこどもの雇用を制限するためのConvention(1919年)(No5)であるMinimum Age Convention上において最初のこどもの労働に関する法律が制定された。こどもに焦点を置き、12歳以下の労働禁止などが注目をされたのは1939年。1956年のThe Employment of Women and Young Persons and Children Act(女性・若者・こどもの雇用法「以下、「雇用法」と記述する。)において14歳以下のこどもの労働を完全に禁止。1984年、2003年、2006年に雇用法を改訂。

以下のこどもの仕事を禁じたが、自営農業や技術取得のための訓練という名目下においては働くことは許されていた。ILO とスリランカ政府が実施した『こどもの活動調査』では、こどものうち都市部では 6.8%が、地方では 7.9%が、農園では 8.5%のこどもたちが 1 日 3 時間以上の労働をしており、1 日 7 時間以上の労働をしている農園部のこどもたちの数は他の居住地域よりも高い。特筆すべき点は、農園部のこどもたちの課題は労働時間だけではなく、労働をする理由である。農園部の労働しているこどもたちのうち 44%が世帯の収入を助けるためであると回答しており、この割合は都市部の 23.8%や地方部の 17.7%と比較しても高い。厳しい気候の中で、農園における長時間にわたる労働に従事することは、こどもの教育の機会や達成を奪うだけでなく、こどもの健全な成長を妨げる。1980 年代のこどもの児童労働について研究をしていた Goonesekere は、スリランカ全体として 14 歳以下の危険な活動は禁じられているが、こどもが労働することは一般的であると記述している (Goonesekere 1983)。

こどもの労働形態として、1986 年の UNICEF の例は、表 2-4 のとおりである。現在では、こどもの労働もより多様な形態であることは推測できるが、本研究におけるこどもの活動における経済活動と家事手伝は下記の表にも記載されている。こどもの家事手伝については、A. 世帯内家族労働の「1. 家事労働」が当てはまり、こどもの経済活動については、世帯の外における活動に加え、世帯内における家族ビジネスや収入を得るための経済活動も含んでいる。こどもの手伝は、途上国・先進国問わず、一般的にあるが、ある一定の時間を超える場合には、児童労働と見なされる。児童労働はこどもたちが心身ともに健康的に成長するために必要であると思われるこどもとしての遊ぶ時間・学ぶ時間・取得する時間・経験する時間を奪い、ときには健康を害することもある。児童労働の負のサイクルにつき佐々木(1998)は図 2-2 を用いて説明している。

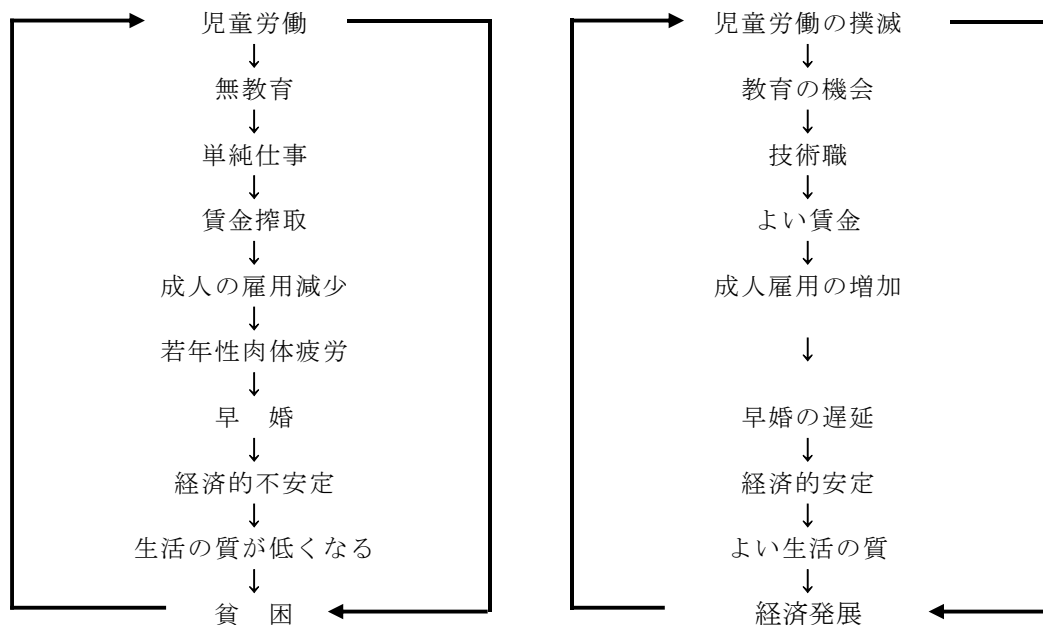
表 2-4 児童労働の種類

<p><u>A. 世帯内家族労働 (Within the family)</u></p> <p>1. 家事労働 (Domestic/Household task) …調理、掃除、子守り、水汲み、洗濯等</p> <p>2. 農業労働 (Agricultural/pastoral task) …耕作、種まき、収穫、家畜の世話等</p> <p>3. 工芸/家内工業 (Handicrafts/cottage industries) …機織り、籠編み、皮革加工、木工等</p> <p><u>B. 世帯外/家族労働 (With the family but outside the home)</u></p> <p>1. 農業労働 (Agricultural /Pastoral work) a. 季節労働 (Migrant Labor) b. 農業労働 (Local Agricultural labour)</p> <p>2. 家事サービス労働 (Domestic service)</p> <p>3. 建設労働 (Construction work)</p> <p>4. インフォーマルな経済活動における労働 (Informal economy) a. 雇用 (Employed by others) b. 自営 (Self-employed) …洗濯業、古物回収等における労働</p> <p><u>C. 世帯外/家族外労働 (Outside the family)</u></p> <p>1. 雇用労働 (Employed by others) a. 債務拘束労働 (Tied/Bonded/slave) b. 徒弟労働 (Apprentice) c. 熟練を要する労働 (Skilled trades) …カーペット生産、歯周、銅工芸等 d. 熟練を要しない労働 (Industries / Unskilled occupations /mines) e. 家事サービス労働 (Domestics) …メイドの労働 f. 商業における労働 (Commercial) …商店、レストランでの労働 g. 物乞い (Begging) h. 売春とポルノ (Prostitution and pornography)</p> <p>2. 自営労働 (Self-employed) …靴磨き、古物回収、新聞売りなどのインフォーマルセクターにおける労働</p> <hr/> <p>出所: UNICEF (1986) Exploitation of working children and street Executive board documents E/ICEF/1986/CRP (佐々木 1998 p75)</p>
--

UNICEF (2014) の 4 か国⁵⁴間比較では、スリランカではこどもが児童労働していても学校に通学しているこどもの割合は高いと報告されている。児童労働をしている場合、パキスタンでは 16%、インドでは 12%、バングラデッシュでは 9%のこどもたちが不在籍であるが、スリランカでは 3%であると報告されている。こどもの労働と教育達成の関係について、佐々木 (1998) はすべてのこどもの就学が義務付けられた学校教育制度が存在する社会においては、如何なる形態をとろうとも児童労働はこどもの義務就学を制限するという可能性をもっていると指摘している。そして、児童労働の最大の要因の 1 つとして持続する貧困を指摘し、貧困と児童労働の相関は貧困と児童労働の世代間循環の中にあるとするが、その悪循環において学校教育の果たす役割は大きいと述べている。図 2-2 は佐々木の指摘する「児童労働と貧困の負のサイクル」と「児童労働の廃止と教育による正の効果」を示しており、佐々

54 バングラデッシュ、インド、パキスタン、スリランカ

木は教育の改善が貧困と児童労働の世代間循環を断ち切る手段ではないかと提起している。



出典： UNICEF (1995 p63) The Progress of Indian State' India Country Office (佐々木 1998)

図 2-2 児童労働の負のサイクルと児童労働撲滅による経済達成

Global Campaign for Education (2002)は「万人のための教育の質：途上国政府とドナー、市民社会が優先すべき行動」の中で、教育の質が悪いことにより、こどもが学校から遠ざかるだけでなく、親がこどもを学校に行かせることを辞めさせる要因になると指摘し、教育の重要性について述べている。また、伊藤⁵⁵は貧困と児童労働の関係について、世帯が貧しいと、こどもは生計のために働き、学校に行かないという議論はすこし荒っぽいとし、人的資本論的視点から教育は将来の所得増加のための投資としてみなすことができるので、そのリターンが高ければ、貧富の差とは関係なく投資が期待できるとし、教育の効果について述べている。

2.3 紅茶産業におけるグローバル化の影響

2.3.1 グローバル化と経済発展

東インド会社の通商圏は、17 世紀中ごろには最大に達し、バタビアに中央政府、アムボイナ、

55 アジア経済研究所研究活動の紹介：http://www.ide.go.jp/Japanese/Research/Theme/Soc/Education/200608_ito.html

バンダ、テルナテ、マッカサル、マラッカ、セイロン、喜望峰には司法政府があり、一方において喜望峰、他方においては日本にいたる広大な領域まで広がった(揚井 1943)。当時、香辛料の生産は主にインド洋の島々に限られており、香辛料貿易独占を確保する究極的な方法は香辛料生産地域を占領することであった。ポルトガルが最初にセイロンを占領した当時はシナモンが主たる目的であり、オランダも同じであったが、大英帝国の政策下では、シナモンが価格競争に生き残ることができず、セイロンでは利益率の高い珈琲が生産され、プランテーション作物の中心になっていった。珈琲栽培が困難になると紅茶、ココナッツ、ゴムがその地位をとって代わった。

プランテーション経済を支えた茶とゴムはほとんど湿潤地帯で生産されている。乾燥地帯は米やココナッツが栽培され、米は9月から3月までのマハと呼ばれる時期と、3月から9月までのヤラとよばれる時期の2期作である。このようにして19世紀後半から、米作中心の小規模経済とプランテーション経済の2重構造が並立する体制になった(絵所 1999)。

絵所(1999)はスリランカが自治領として独立した1948年時点ではかなり高い生活水準であったとし、1950年代-70年代は他の途上国に比較して豊かであったと述べている。スリランカは1948年の独立以来、市場経済に対応すべく経済構造の改革に努力している。1977年には、それまでの社会主義的経済政策に代わって開放経済を導入し、市場型経済政策が徐々に取入れられ、伝統的な稲作と三大プランテーション作物(紅茶・ゴム・ココナッツ)を中心とした農業経済だけでなく、繊維産業等の工業化や産業の多角化が図られている(河本 2008, JICA 2001)。

鹿毛(2012)は経済開放政策によって、スリランカ社会は大きな変容を迎えたとし、開放政策は国家の貿易構造と産業構造の転換、経済の低迷から脱却することが目的だったとしている。そのため初期には量的輸入規制の撤廃、輸入関税構造の圧縮と関税率引き下げ、海外投資の開放、自由貿易地区(FTZ)の設立、信用市場の開放、市場メカニズム制度の導入、単一為替レートの新設、政府国有企業の実質撤退、政府の貿易占有の撤退、価格規制の引上げと高い補助制度の代替策、低所得層向け米の食糧配給などが段階的に導入された。さらに1990年代初頭にも開放政策は促進され、為替レートの再編成、通貨取引に関する為替規制の撤廃、民営化、海外投資とポートフォリオ投資のための政策的強化などが実行され(Athukorala 2009)、1990年代には、年平均約5%の経済成長率を維持し、その後も同様の経済成長を続けている(CBSL 2012b)。これら1977年以降に導入された自由化の大部分は、ワシントン・コンセンサスの経済政策改革の基準に則って進められたものである(Athukorala 2009)。

植民地時代にはプランテーション作物により、経済成長が発展したが、現在では第3次産

業である卸売業、運輸・通信業、金融業などのサービス業が拡大し、GDPの約6割を占める。主要な輸出品は繊維等の服飾も含む工業製品がGDPの約3割である。農業セクターは労働人口の3割が占めているが、GDPに占める割合は1割前後となる(JICA 2010、DCS 2013)。2012年の紅茶の輸出は農産物輸出品のうち6割以上を占め、輸出全体においては、繊維製品の4割に続き、1.5割を稼ぎ出している(DCS 2013、MPI2013)。

紅茶はスリランカの農園の代表的生産物であり、ブラジル、インドに続き世界第3位の大きな農園労働人口を持ち、紅茶産業に従事する労働者人口はスリランカ全人口の120万人である(Willinges 2004)⁵⁶。紅茶の作地面積は2008年から2014年時点で221,969ヘクタールであり、ココナッツの394,836ヘクタールより少ないが、2009年の輸出による収入は136,180(Million USD)である(MPI 2013)。1928年には紅茶の主な輸出国はインド(1位)、セイロン(2位)、ジャバ(3位)であったが(ITCB 1946)、1960年代になるとケニヤや中国なども輸出するようになり、2017年には40か国以上の国で紅茶が生産されるようになってきており(Worldatlas 2017)、輸出国の第1位は中国で、続いてインド、ケニヤ、スリランカとなる。スリランカの生産量は1990年234.1Mnkgから2009年には291.1Mnkgに増えつつも(MPI 2009)、価格競争においては苦戦をしており、茶葉の品質を高める戦略を取っている(現地調査)。

2.3.2 農園の社会発展と人間開発

(1) コールブルーク改革

セイロンの植民地体制の枠組ができるのは、1832・33年のコールブルークの改革である(中村1978)。ポルトガルおよびオランダの植民地支配は、農村のシンハラ人やセイロン・タミル人のルールを重用しながら統治され、生活様式が大きく変化することはなかったといわれている(Mendis 1957/1995)。しかし、イギリスの植民地体制は、セイロンにおける社会・経済生活をあらゆる側面に変貌させ⁵⁷、特に、1829年にギリス東部調査委員会(Royal Commission of Eastern Enquiry)より派遣されたコールブルーク(W.M.G.Colebrooke)とキャメロン(G.H.Cameron)の使節団による勧告書(1883年)に基づいた改革(以下、「コールブルーク改革」と記す。)は、経済、行政、司法のシステム構造を変化させるだけでなく、シンハラ人、セイロン・タミル人の社会システムも変化させた(Roland 2007)。

行政参事会と立法参事会を両輪とする植民地統治は、コールブルーク改革後の約100年間で

56 2018年の統計では約90万人。

57 イギリスによる植民地体制のもとでの制度上の変化は、通常憲法史(Constitutional History)として記述されている。

通じて、プランテーション農業の利益を守ることを中心に行われ、在地シンハラ農民やセイロン・タミル農民の声が行政に反映される余地はほとんどなかった(中村 1978)。また、本改革により、5つの行政地区が設けられるとともに、植民地以前は貴族でもなかったセイロン人が公職に就けるようになり、植民地時代をとおしてセイロン独自のエリート層を創りあげていき(Bronkhorst 2008)、この社会構造が独立後の民族紛争の1要因となる。

この改革により、シナモン単一栽培や貿易は廃止された結果、珈琲を主とするプランテーションが栄えた⁵⁸。広大なプランテーションの開拓は西欧的な排他的所有権の概念をもたないセイロンの土地所有制度に介入することによって、大々的に土地登記を実施し、多くの未開開墾地や所有権不明の土地を没収することで成功した。また、1840年代のデフレでは、小さい農園が二束三文の値段で売却され、大農園の一部となっていくとしている(Roland 2007、Bronkhorst 2008)。また、本改革により国王に奉仕するラージャカリヤ制が廃止されると、貨幣による税金制度と新たな年6日間の徴用制度が導入された⁵⁹。統治政府は、ラージャカリヤ制度の廃止により、賃金労働者が創出され、プランテーション開拓のための社会基盤整備に従事させることができるという予測していたが⁶⁰、この試みは成功したとはいえなかった(Bronkhorst 2008)。

(2) 植民地政策下における社会基盤の発展と人間開発

ポルトガル渡来以前のセイロンでは、商業的には香辛料貿易で世界に開かれていたが、多くの人びとは伝統的農業を営みながら生活していた。ポルトガル・オランダによる統治は主に沿岸近郊であり、プランテーションの創設も内地までは及ばなかった。しかし、統治国が英国となり、珈琲プランテーション経済が成功すると、さらなる利益を求めた投資家や農園主たちは中央高地部に居住する人びとから合法的に土地を獲得し、獲得した森林や未開墾地などを開発し、プランテーション農業拡大していった(Siri 1978)。プランテーションが海岸沿いの低地から中地、高地と拡大されるに伴い、未開であった地域には道が作られ、休息所なども設置され、輸出するための社会基盤が整備されていった。このように、プランテーション開拓初期である1820年代中ごろから、セイロンの中心であるキャンディから海岸沿いを抑えた植民地政府の拠点であるコロンボや東の港の中心であるトリンコマリとの間を

58 プランテーション資本への投資は主に英国の投資家によって行われ、プランテーションの大部分はヨーロッパ人によって占められていた。

59 1848年 道路法(Road Ordinance of 1848)により、18歳から55歳までの労働可能な全ての男子は、年6日間の道路の修復または建設の労役に服することとなった。

60 Roland(2007)では1つであるラージャカリヤ制度の廃止により、賃金労働者を創出しようとしたとしている。

つなぐ道路も整備されていった(Craig 1970)。このように、独立前のセイロンにおける社会基盤は主として、投資家や宗主国の利益を得るためのプランテーション経済を保護・推進するものとして発展していった。

コールブルーク改革によって大英帝国の植民地体制は確立し、海岸沿いから中心地を経由し、高地までの社会基盤が整えられていったが、本改革には宗主国内における人権に関する認識の変化が影響を与えているといわれている。当時の大英帝国内では奴隷制度が非人道的であるとし、廃止する動きの中で、セイロンにおいて国王に賦役を行う伝統的な制度であるラージャカリヤ制が人道主義的見地から受け入れがたい封建主義的遺産であるとみなし、廃止された(Mills 1933)。このラージャカリヤ制度の廃止には、賃金労働者を確保しようという思惑があった(Roland 2007)とされているが、この改革によってすべての人は法の前では平等であるとし、生まれやカーストによる束縛からの自由、移動や法廷への提訴、土地売買や職業選択の自由が認められ、民族やカーストの特権が廃止されたとしている(Mendis 1957/1995)。また、統治における必要性和社会政策の一環から、セイロンにおける教育制度の改善策が提出され、1841年から実施されることとなった。コールブルーク改革委員会では英語を重視し、より多くの英語学校が開校されるとともに(野上 1985)、政府以外の補助金システムにより英語学校以外の学校が設立された(Bronkehorst 2009)。主な内容は下記のとおりである(クマーラ 2006)。

- ① 国立学校の改革及び伝道学校との連携
- ② 宗教心を問わず、すべての子どもたちを学校に受け入れ
- ③ 自国語のための学校設立
- ④ 書籍の提供及び外国語の書籍の(国語への)翻訳
- ⑤ 教員訓練校の設立及び学校監視員制度の導入
- ⑥ 初等教育に関わる学校制度

これらが確立され、2カ国語教育のための学校、母国語のみによる教育のための学校、女子学生専用の学校が各地に設けられた。一方、中等教育に関しては、「拠点校」が新たに設立されたとしている(クマーラ 2006)。

(3) 無国籍から市民へ

コールブルークの改革から約100年間、植民地体制が維持されてきたが、農園に移住してきた人びとにとって、1931年の普通選挙法の導入は新たな局面を迎える契機となった。1931年は宗主国である大英帝国において普通選挙法が認められ、植民地であるセイロンでも導入された。大英帝国では植民地も含む大英帝国内地域に法的に定住しているインド人にも、大英帝国臣民としての権利が認められており、1921年のロンドンで開催された帝国会議 (Imperial Conference) では、セイロンはこの決議案を受諾し、移民インド人にもセイロン市民権を付与することとした (Shastri 1999、鈴木 2008)。本決議により、セイロンに居住するインド・タミル人も選挙権を付与されるかに思えたが、選挙権をもつセイロン人を規定する法令であるセイロン国家評議会 (選挙) 法令 (Ceylon State Council (Election) Order in Council (1931)) により「セイロンに居住し、セイロンに本籍を持つ人」と規定された (Shastri 1999、鈴木 2008)。本法令に基づいて、選挙権を得るためには、必要書類を提出することが条件とされたため、書類を持たないものや、字が読めなかった人びとの多くには選挙権があたられず、多くのインド・タミル人に選挙権は与えられなかった (Thondaman 1994)。

Siri (1978) はプランテーション労働者のおかれている環境について、厳しい労働・生活環境におかれていたが、この国をとりまく一定の情勢の発展に助けられて、1931年ごろまでには、労働者は強制された半奴隷状態から部分的に解放され、この国 (セイロン) の国民社会の成員として、その権利を主張することができるようになっていったとしている。しかし、すべての大英帝国臣民に認められた普通選挙法では選挙権を得ることができず、また、独立後 (1948) のソウルベリー憲法のもとで出発した新しい国会では、インド人の大半をセイロンの市民権、選挙権から排除されるという法律を制定し (Siri 1978)⁶¹、インド出身の人びとから、彼らが 1931 年以来行使してきた政治的諸権利を剥奪した (Siri 1978、Swarna 1997)。

インドとスリランカが政治的独立を達成した後も、これらのタミル人労働者らは、双方から市民権を認められず、事実上無国籍とみなされる状態が続いた (中村 1976)。インドとスリランカ両国間に協定が結ばれたのはようやく1984年のことであり、これによって53.5万人にインドの市民権を与え15年間に帰国させること、また、30万人にスリランカの市民権を与えることなどが取り決められた (川田 1978)。1973年までにインド政府によりパスポートの発行を認められた人びとは約18.6万人、このうち約10.4万人がインドへ帰国し、またスリランカより市民権を与えられた人びとは約6

61 1948年市民権法 (Citizenship Act of 1948)、1949年第3号パキスタン人住民法 (Indian and Pakistan Residents (Citizenship) Act of 1949)

万人となっている(川田 1978)。プランテーション経済の発展のために移住してきたインド・タミル人の市民権問題は2003年に政治的解決を得たが、それまでは、選挙権や福利厚生等の対象から除外された他、身分証明を受けられず、移動の自由も制限された(磯邊 2009)。このように市民権がないために保障を受けられなくなったインド・タミル人が多く居住する農園部は、民間による経営であることに加えて、政府の社会保障の対象とはならず、独立後は取り残されていった。

(4) 海外からの支援と人間開発

2018年1月、中国の援助で建設されたスリランカ南部ハンバントタ港が、中国国有企業に99年間貸与せざるをえなくなり、リース料として11億2千万ドル(約1,240億円)が支払われるが、事実上の“売却”といえると1月18日の産経ニュースなどで大々的に報じられた⁶²。海外からの援助は日本も含め、多くの国々や国際機関からも行われている。国際開発協会(IDA: International Development Association)は1954年に水力発電の開発の支援を切掛けに、182のプロジェクトを支援し、アジア開発銀行(ADB: Asian Development Bank)は1968年の紅茶工場の近代化のための支援を始め、431のプロジェクトをおこなっている⁶³。日本もスリランカのパートナー国として、1952年の国交樹立後の1958年より技術協力を行い、1960年代からは有償協力を開始し、いままでに社会経済基盤開発や産業開発、社会サービス整備など幅広く実施している(JICA 2012)。

スリランカでは1972・75年の土地改革などによって、多くの企業を国有化してきたが、その経営や運営は必ずしも成功したとはいえず、グローバル化する世界経済の中で、効率的な経営の必要性に迫られた。1977年に政権を奪取したUNPは開放経済政策へと転換し、社会基盤の整備と雇用を創出する工場の施設建設のために海外からの援助を呼び掛けた。農園部における援助だけでも多くなされ、農園部門経営の近代化から、小規模農家の開発事業、樹木作物や農園開発支援プロジェクトまで幅広い支援が行われるとともに、UNICEF(United Nations Children's Fund)やSIDA(Swedish International Development Cooperation Agency)やJICA(Japan International Cooperation Agency)などによって、農村開発支援や、農園の学校開発支援、住環境の改善、健康や予防に着目した様々な支援等が行われてきている。

第2次世界大戦後、国際機関である国際労働機関(ILO)は世界における農園における人びとの労働状況について注視し、1948年には農園労働に関する委員会(Committee on Work of

62 スリランカはハンバントタ港の建設のため、2010年から中国から借款をしていたが、中国側が設定した金利が6.3%と高く、返済ができなかった。

63 IDAは世界銀行の下記のサイトを参照

http://www.worldbank.org/en/country/srilanka/projects/all?qterm=&lang_exact=English&os=180

ADBは次のサイトを参照: <https://www.adb.org/projects/country/sri?page=21>

Plantations)を設立し(鈴木 2008)、農園で労働している人びとや子どもに対する労働・生活環境の調査報告や改善政策の提言も行っている。スリランカにおいても宝石産業や農園部における子どもの児童労働について勧告を行っており、近年では子どもの児童労働は減ってきている(UNICEF 2014)。

Wickramasinghe(2001)は、1980年代後半からスリランカの民族問題が世界で着目されるようになり、国際機関や国際NGOが人権問題に介入するようになってきたとしている。調査者が調査地の選定のために、高地のヌワラエリヤやハットン、中高地のキャンディ、中低地のルフナ、デニヤヤにある大規模農園を訪問した際には、必ずといっていいほど所属先はNGOであるか否かの質問を受けた。そこで大学院生の研究であることを説明し、その質問の理由を伺ってみたところ、「農園労働者の労働や生活環境の改善に取り組んでいるものの、国際NGOによる農園労働者の扱いに対する批判により農園の立場が悪くなっている」と話していた。

2.3.3 社会的文化規範の変化

「グローバル・ビレッジ」(Global Village)とは、現代世界に生きる我々になじみ深い言葉である(クスマ 1999)。戦後は科学と技術、マスメディアやインターネットの進歩によって、世界のできごとがごく近い関係になり、どの国においても社会のあり方がかわりつつある。クスマはいまから20年前の1999年に、いまや異なる国々の諸文化は互いに切り離されてはいないとし、異文化間ほどの社会においても影響を与えているとする。一方で、社会や様々な変化の渦中にあっても、豊かな文化伝統をもつ多くの社会では、固有の文化的アイデンティティを守り続けるとし、スリランカもこれらの国々のひとつであり、文化変化のかたわら、伝統的諸価値も堅持されていると述べている(クスマ 1999)。

スリランカは他民族国家ではあるが、住民の約7割弱はシンハラ人であり、約3割弱はタミル人が占める。スリランカの人びとの生活にもとづく社会制度や諸慣行は、その起源をインドから由来するものが多いが(中村 1978)、シンハラ人は北部インドの出自であるものの、出身地との関係は薄く、一方のタミル人は南インドのタミル・ナードウ住民と文化をいまだ共有していると云われている。シンハラ人とセイロン・タミル人はセイロンにおける覇権獲得のために争っていたが、民族対立というよりは諸勢力間の権力闘争的なものであった(杉本 1987a、Meye 2003)。シンハラ人とセイロン・タミル人との民族抗争は大英帝国統治下の19世紀後半における新たなエリート層⁶⁴の

64 渋谷(1998)によれば、プランテーション経済の形成により地元の人びとの中から、ココナツ・珈琲農園主や酒類業者、家具職人などの商業資本家が現れ、新興のエリート層を形成されたとしている。また、石井(1969)は政府の行

形成から始まり、20世紀中頃になると顕在化し、独立後においては政策の面においても現れるようになってきた(KHANAM 2004)。

1931年には、参政権⁶⁵が農園部の労働者にも認められ、また無償教育、無償医療、食糧配給が性別や宗教、民族やカーストと関係なく行われているが、独立以降(1948年)の農園では、植民地時代に形成されたピラミッド構造を維持しながら、農園の管理者ポストなどが英国人からシンハラ人に移行された。1960年代以降には、無償教育の一般化やラジオ・メディアの発達により、閉ざされていた社会がより開かれ、大衆文化も興隆していく(渋谷 1987)。さらに、1977年にUNPが政権につくと、当時の課題であった失業問題の解決に向けて、プランテーションでの雇用増大政策を取り、農園におけるシンハラ人の労働者が増えていった(絵所 1999)。1980年代にはインド・タミル人の市民権も回復され、農園部外への移動もできるようになり、2009年の内戦終了後は自由な移動ができるようになった。近年では、携帯やインターネット、衛星放送テレビなども普及し、国内外のさまざまな情報を容易に取得できるようになり、また、外国に職を求め、海外での仕事に就く人びとも増えている。また、観光業にも力を入れているスリランカでは、7つある世界遺産や美しい海岸沿いのリゾートには多くの外国人が訪れるようになり、直接的に多くの文化や価値観、知識や習慣に触れる機会が増え、人びとの価値観も変化しつつある。

価値観や意識の相違が、人びとの意思決定にどのような影響を与えているのかについて、セン(1988)は『アイデンティティに先行する理性』の中で、マイケル・サンディルの主張である「共同体は、その同じ共同体の市民として成員が持っているものだけではなく、さらには彼らが何者であるのかも表しているのだ」とし、共同体とアイデンティティの関係は、アイデンティティがまず先にあり、その後選択に必要な合理的判断がくることになる」と述べている(セン1988 細見訳 2003)。このことは合理的判断に対する基本的な文化的態度や信念がまず影響を及ぼすことを述べるとともに、必ずしもそれらがすべてを決定してしまうわけではないことを意味していると考えられる。青木(1985)はスリランカの文化は民族・言語・宗教の3つから成り立ち、スリランカ滞在中にこの文化がハードな役割を果たすということを実感したとしている。戦後のスリランカでは、他国の支配から解放され、開放経済と失業対策から労働力の流動化が活発となり、さらに技術の発展と海外の人びととの直接交流により農園内外において生活様式や価値観が変化してきているもの

政官に英語ができる地元民が雇用され、物質に恵まれた地位を保ちそれまでとは異なった上流階級を形成していたとしている。

65 インド・タミル人については、セイロン島に5年以上居住しているなどの制限はあった。1948年市民権法(Citizenship Act of 1948)、1949年第3号パキスタン人住民法(Indian and Pakistan Residents (Citizenship) Act of 1949)により、インド出身のすべての人びとから、政治的諸権利が剥奪された。

と推察できる。外国の支援による生活環境と労働環境の改善や経済の活性化政策の1つである小規模経営の奨励による紅茶産業内の構造変化は紅茶栽培の労働や生産に従事している人びとの意識に変化を与えているものと推測する。

2.4 こどもの教育と人生の選択

2.4.1 スリランカの教育制度

(1) イギリス統治下の教育政策

スリランカの教育の歴史は古く、2500年以上遡ることができるとされている(野上 1985)。紀元前 314 年には仏教が導入され、仏教教育を目的とした教育施設が設立されたといわれている。仏教の教えでは、教育は上層の者にだけ限られておらず、7 世紀においてはすべての人びとに開かれており(Goonesekere 1983)、1073 年からのボロンナルワ時代にはよりひろい分野にわたる高等教育、技術専門教育に関する学校が設立された(クマーラ 2006)。スリランカがアジアの発展途上国の中でも基礎教育が最も発達しているといわれる所以は、古来よりの教育に対する意識の高さも 1 つの理由であると考えられる。

教育に新たな目的が加わるのは 1505 年以降のことである。1505 年から 153 年の間、ポルトガルはセイロンを支配下におき、海岸地域を占領し、キリスト・カトリック教を普及させる目的で海岸地域(コーツテ、ジャフナ)において教育施設を設立した。教育内容は、カトリック教、言語、数学であった(クマーラ 2006)。ポルトガルに代わったオランダは 1658 年から 1796 年の間セイロンを統治し、ポルトガル占領下時代と同じく、キリスト教普及のための教育が行われた。男子は初等教育期間の終了後中等教育を受講できたが、女子は初等教育のみの受講に限られていたとされている(クマーラ 2006)。イギリス統治下である 1796-1867 年の間は、政府の財政難から教育の拡大は推奨されなかったが、キリスト教の普及目的のために、フレディック・ノースが 1798 年にキリスト教徒学校を復活させ、1800 年にはイングリッシュ・アカデミーを設立するなど、つぎつぎと学校が設立されていった(Bronkhorst 2008)。1805 年から 1824 年の間は「伝道時代」とよばれ、この間、全国にわたり多くのキリスト教学校が設立された(クマーラ 2006)。

占領下におけるセイロンの教育を大きく変化させたのは 1831 年のコールブルックによる改革であった。当時、学校は政府立、教団立、私立の 3 種であった。政府立では行政官養成を目的とし、主に英語での教育となり、上級コースはもたず、生徒構成もこの目的を反映してバーガー人

と新上流層に偏っていた⁶⁶。表 2-5 はコールブルーク来島時の学校数と生徒数を示している

表 2-5 コールブルーク来島時の学校数と生徒数

	学校数	生徒数	生徒数/学校数
教団立	236	9,274	40
政府立	97	1,914	20
私 立	640	8,424	13

出典 石井「セイロンにおける言語問題の政治的展開」(1969)

1831 年に発足したコールブルーク委員会が、セイロンの教育制度に関する改善案を提出し、政府立学校改革のための中央教育委員会を設置(1834 年施行)(佐藤 1969)。それらの提案は実施され、1841 年にはすべてのキリスト教徒のこどもに学校の門戸が開かれるとともに、政府によらない補助金システムにより、英語学校ではない学校が設立された(Bronkhorst 2009)。

「コールブルーク改革委員会」(Colebrooke Commission on Reform)では英語の教育が重視され、より多くの英語学校が開校された(野上 1985)。初等教育に関わる学校制度が確立され、2カ国語教育のための学校、母国語のみによる教育のための学校、女子学生専用の学校が各地に設けられた(クマーラ 2006)。一方、中等教育に関しては、「拠点校」が新たに設立された(クマーラ 2006)。これらの政府補助の全ての学校は1886年までは、キリスト教伝道団体によって開校させ、運営されていた(野上 1985)。

その後、1865年にモルガン委員会が発足した。1869年-70年のモルガン報告では島全体において普及すべきだという意見を表明し、学校教育は原則として政府の管理下で行われるべきという提案が行われるとともに、初等教育の国語での実施、中等教育の英語での実施、技術専門学校及び技術系教員養成学校の設立なども提案された。その結果、高等教育分野を対象とした学校が設立された⁶⁷(アーナンダ 2006、Bronkhorst 2008)。

66 私立は1818年以後住民の要求から英語学校として発足したものであり、政府は黙認の形をとっている。

67 Bronkhorst(2008)によれば1869年には学校数は64校であったが、1881年には347校に増加し、また、当時においても英語学校は有料であったが、国有学校は無料であった。

(2) 無償教育と児童労働の禁止

コールブルック勧告後の 1840 年以降、スリランカにおける教育の発展は、Little (2007) によれば 5 期に分けられるとしている。

- 1 期:1840—1869 ライン・ハウスやミッションスクールでの教育開始
- 2 期:1869—1900 ライン・ハウスやミッションスクールにおけるゆるやかな進展
- 3 期:1900—1948 農園部における学校の創設期
- 4 期:1948—1977 緩やかな統合
(農園における学校の教育の質の低さと、さらにその質が低下していた時期)
- 5 期:1977—1994 政府による運営と入学者の拡大期

1840 年から 1869 年はこどもたちのために学校が設立された時期であったが、経済的には原始的経済時期であった。植民地の輸出経済のもとで、農園で必要だったのは、従順で、低賃金の労働者であり、労働者に技術は要求されていなかった。この時代の輸出経済を支えていたのは珈琲プランテーションであり、労働者の多くは季節労働者であった。多くの労働者は非識字者であったが、労働者の雇用目的は学ばせることではなく、農園で働くことであり、農園主にとってはどのような教育も労働供給への脅威に他ならなかった (Little 2007)。

第 2 期である 1869 年から 1900 年は、経済基盤の要となっていたプランテーション作物が珈琲から紅茶に代わり、農園で必要とされる労働者は季節労働者より定住者となった。家族を伴って出稼ぎに来ていた世帯では、次第に女性やこどもも紅茶栽培の仕事に従事するようになった。母親が農園で働くことにより、こどもたちの面倒を見るための保育施設が機能するようになり、教育の対象が大人ではなく、こどもになされることが多くなった。また、プランテーション経済とは関係なく、社会的要求としての教育の普及が求められる時期でもあった。この時代、宗主国である大英帝国において中流階級の人びとによる教育の大切さが意識され始め、セイロンにおいて宗教の普及活動もあり、キリスト教団体は資金援助を得て活動した (Little 2007)。

第 3 期である 1900 年から 1948 年は、1831 年以降のコールブルックの改革により、教育は広がりを見せたが、セイロンにおける農園のこどもたちは 4 分の 1 しか学校に在籍しておらず、ヨーロッパ人やバーガー人、シンハラ人の子弟との差があった。1900 年代前半は、大英帝国において植民地のプランテーションにおける学校設備の欠如が問題視された (Little 2007)。1931 年、初代教育大臣であったカンナンガラ博士は、幼稚園から大学までの学校は無償であるべきであり、母国語による教育をこどもたちに受けさせるという考えを取入れた (クマーラ 2006)。現行

教育制度の出発点は 1941 年の「カナンガラ特別委員会」(Kannangara Special Committee)が出した教育改革の提案が基盤となっている(佐藤 1969、野上 1985)。この改革の目的は教育における特権の排除とすべての地域のすべてのこどもに、教育の機会を平等に保障することであり、無償教育と母国語による授業は、当時のセイロンの教育のあり方に大きな変化をもたらした。とりわけ、長い間教育の機会が十分でなかった農村地域においては、その効果は顕著であったといわれている(野上 1985)。

1941 年の「カナンガラ特別委員会」に先立ち、1939 年に制定された教育法 (Education Ordinance No.39) は、こどもたちの教育状況の改善とともに 11 年間の義務教育を導入した。当初の規則にはそれに従わない者に対しては、親や雇用者だけではなく、こどもたち本人にも罰則規定があった(Goonesekere 1983)。1945 年には小学校から大学までの無償教育制度が施行され、1948 年の独立後も学校教育は政府の関心事項として取り上げられた。様々な改善策が実施されるとともに、教育面で男女差を設けなかったことが、現在のスリランカにおける女性の地位向上を促したといわれている(クマーラ 2006)。無償教育は全国に広がり、家族の経済援助を受けられない農村地域のこどもたちにも、教育の機会を提供した(クスマ 1999)。現在においても、全国民対象の教育制度は少年少女の区別なく適用され、大学入学と就職の機会も性差別なく門戸が開かれる(Goonesekere 1983)。

こどもの通学を妨げる要因の 1 つとして、しばしばこどもの労働が指摘される。セイロンで児童労働という考えが認識されるようになったのは 19 世紀の初頭である(Goonesekere 1983)。こどもたちはプランテーション労働者として南インドからの出稼ぎ労働者の扶養者という立場ではあったが、安価な労働力を求める農園労働力として次第に吸収されるようになった。Goonesekere (1983)によれば、児童労働に影響を与えた最初の社会福祉政策は農村コミュニティと農園におけるこどもたちに対する教育政策であったとされている。当時の教育政策に対する農園主の反発は大きく、Goonesekere (1983)は下記のように記し、政府は農園主に労働規則と他の規定を守るようにプレッシャーを与えたとしている(Bandarage 1983、Wright 1951、Wickremeratna 1973、Goonesekere 引用 1983 p23)。

「農園主は島の繁栄は労働力にかかっており、教育をこどもたちにすることは両親から両親を支える源を奪うことになり、労働者一般に高いレベルの教育が必要であるということを主張することは合理的ではないと反対した。この様な農園主の反対にもかかわらず、政府は 1907 年に農園と農村のこどもに対する教育システムを導入し、母国語によって教えられる学校において 6 歳か

ら 12 歳までのこどもを学ばせなければならないという法律を制定した (Goonesekere 1983)。」

20 世紀になり、スリランカは児童労働に関する国際公約 (1844 年の奴隷に関する国際会議) を受入れた。農園労働者における最初の労働最低年齢に関する規則が紹介されたのは 1927 年⁶⁸ であったが、こどもに焦点を置き、12 歳以下の労働禁止は 1939 年まで待たなければならなかった。雇用年齢を 14 歳ではなく 12 歳にした理由は強制的に禁止するよりも 14 歳以下で働いているこどもを保護することと、こどもの労働を管理することに重点を置いていた労働政策によるところが大きい (Goonesekere 1983, Barret 2015)。1939 年に制定された教育法により、学校時間帯の労働も禁止されたが (技術訓練や学校行事による労働は除く)、その後もこどもの労働が課題とされた。

1956 年にこどもの児童労働に関する規則として、The Employment of Women and Young Persons and Children Act (1956) が制定された。しかし、こどもの労働を必要としている貧困家庭の状況に柔軟に対応できる政策が必要であるとの認識から、12 歳以下のこどもの労働に対する全面禁止規定は削除されたが、14 歳以下のこどもの労働を完全に禁止するにはならなかった⁶⁹ (Goonesekere 1983, Barret 2015)。その後の主な国際法の批准や法令の制定は下記のとおりである。

1991 年 国際法である『こどもの権利』を批准

2000 年 最低年齢に関する法律 No.138

2001 年 最悪の形態の児童労働の禁止 No 182

『こどもの活動調査 2008/09』では、スリランカにおける児童労働の定義は「経済活動に従事するこどもで、以下の場合を除く」としている。

5-11 歳: 農業以外のセクターで危険な活動に従事せず、家族従事者として週 5 時間以下の労働をする場合
農業セクターで危険な活動に従事せず、家族従事者として週 15 時間以下の労働をする場合

68 10 歳以下のこどもの労働を禁止 (Barret 2015)

69 夜間労働や産業、海関係の職に 14 歳以下の雇用することを認める規定は含まれていない。

12-14 歳: 農業以外のセクターで危険な活動に従事せず、労働時間が週 15 時間以下の場合
農業セクターで、危険な活動に従事せず、家族従事者として週 25 時間以下の労働
をする場合

15-17 歳: 危険な活動に従事せず、週の労働時間が 43 時間以下の場合 (43 時間以上の労働
は Hazard work とみなされる)

Employment Act: 14 歳以下の児童労働は禁止しているが、家族経営農業や技術トレーニング
などの場合には 14 歳以下でも従事できる。

しかしながら、佐々木(1998)が指摘するように、過度な労働時間はこどもの就学機会を制限す
ることから、本研究では経済活動と家事手伝いにおける「児童労働」を下記のとおり定義する。

5-11 歳:

- ・経済活動: 収入の有無とは関係なく、週 5 時間を超えて労働している場合。
- ・家事手伝い: 週 15 時間を超えて家事手伝いをする場合。

12 歳以上:

- ・経済活動: 収入の有無とは関係なく、週 15 時間を超えて労働している場合。
- ・家事手伝い: 週 25 時間を超えて家事手伝いをする場合。

(3) 教育政策の変化と教育機会の拡大

第 4 期の 1948 年から 1977 年では、多くの学校が閉鎖・統合される時期であった。しかしながら、
農園部にある学校を統合することは言語の問題から困難であったと Little(2007)は述べている。
また、農園部の多くの子どもたちは、1948 年に市民権を剥奪された南インドからの移住者であり、
セイロン政府にとっては社会政策の対象と見なすことができないなどの複雑な政治問題も絡んで
いたと推察する。

1950年代には、学校の国営化は事実上の確立をみていたが、1957年以後になると私立補助
学校の設置禁止と60年から始まった政府補助学校の国営化政策により、国内のほとんどすべて
の学校は中央政府の管理のもとに置かれることになった。1960年には、学校のおよそ53%は政
府、47%が私的宗派団体により運営されていたが、ごく少数の非補助学校を除くすべての学校で

は、学校運営費のほぼ全額と教員給与の全額が政府資金で賄われていた(野上 1985)。1961年には各宗教によって運営されていた学校は計画性がないなどの問題があり、多くの学校が政府の管轄になるとともに、ある程度の合理化が図られた。そして、1970年代になると、プランテーションなどの国有化の動きと同じくして、1970年代半ばには農園部の学校の国有化の動きが始まり、施行が行われるようになった(Little 2007)。

1977年の教育制度の改革では現行制度の原型となる教育制度が確立され、それまでの教育制度が6年制の初等教育(1年間の幼稚園と5年間の小学校)、5年制の下級(=前期)中等教育(第6学年—第10学年)、2年制の上級(=後期)中等教育にそれぞれ改められた。また、1978年には、スリランカ憲法の27条5項で、「国は、人種、宗教、言語その他の集団を含むスリランカ国民のすべての階層間の協同関係および相互信頼を推進することにより、国家の統一性を強化しかつ差別と偏見を排除するため、教授、教育、情報の分野で効果的な措置をとらなければならない」と定め、憲法にもとづき地方教育局も設立した(野上 1985)。この1977年の改革と憲法により、多くの子どもたちに教育の機会がより平等に認められるようになった。

義務教育は1939年の教育法で制定されていたが、まだ、多くの子どもたちが学校に通学していなかった。しかし、上述のような教育改革などにより、制度が整いつつあり、1970年代の教育改革は制度をより成熟させた。1980年代には紅茶農園における労働供給の必要性が低下し、子どもたちの労働力がなくなるとともに、学校経営の経済的負担も政府に移行したため、子どもたちが学校に通学するように変化していった(Little 2007)。さらに、1980年代になると、農園における教員を確保するために、政府はPlantation Sector Teacher's Programme を設立し、GCE O Level⁷⁰を取得すれば農園の学校における教員になれる資格があるとした(Little 2007)。一方、O Levelの知識と経験では、子どもたちに質の良い教育を提供することや、より上を目指す子どもたちの支援をするには十分ではないとされ、教員の質の問題が今日でも課題となっている。

1997年にNational Education Commissionによる教育改革が行われ、義務教育規則と現行制度が国会で承認され、「5—14歳の義務教育の施行(親に義務化)と9年間の初等教育と4年間の中等教育の制度となった(UNESCO 2011)。農園にある学校も、農園主の責任から国の責任となった。就学を促進するため、制服や教科書は無償で配布され、子どもたちが自宅から通学できるように学区制度を導入するとともに、小学生の90%が自宅から2マイル(3.2km)以内で通える学校を作るなどの取組がなされている(服部 2010)。近年では、その政策導入の結果として、初

70 第11学年の修了時に行われる「普通教育修了証書試験」兼「進学テスト」(General Certificate of Education Ordinary Level Test:略して O Level Test)。

等・中等教育レベルの就学率が増加し、ドロップアウトの割合が減少してきている。しかし、多くの学校が建物、実験設備、都市間、教育関連の備品や教材などの基本的な設備・備品不足の問題を抱えている。それらの現状を改善するために世界銀行などの国際機関や NGO が大きな支援活動を行っている(UNESCO 2011)。

2.4.2 こどもと教育

(1) 教育の意義と役割

教育の重要性や役割については多くの研究がなされている。アインシュタインは「教育とは学校で習ったすべてのことを忘れてしまった後に、自分の中に残るものをいう。そして、その力を社会が直面する諸問題の解決に役立たせるべく、自ら考え行動できる人間を作ること、それが教育の目的といえよう。」とし、教育自体の大切さではなく、自ら考えて行動を選べる人を育成することが教育であると述べている。また、センとヌスバウムは健康から法的権利までのさまざまな場面における教育の役割を述べている。センは、より良き社会を追求するうえで、まず人びとの特徴や境遇や考え方の多様性を受け入れることが重要であるとし、所得ではなく、人びとは何ができるのかによって暮らしの良さを捉えている(ケイパビリティ・アプローチ)。ケイパビリティ・アプローチは自分が良いと思う人生を選択できることが重要であると考えているが、こどもは自分にとって良いと思う人生を選ぶために必要となるケイパビリティを持っていない。そのため、センとヌスバウムはケイパビリティの獲得のために、教育は重要な役割を果たしているとしている。

UNDP(2012)は、教育は、政治的、経済的、社会的、個人的視点から、国家経済を拡大し、社会経済的かつ政治的可動性を高め、性別の壁を打ち破り、健康やこどもの栄養状態などに正の影響を与えると報告している(UNDP 2012)。教育の効果については、特に人的資本理論において注目され、人間の経済的価値を決める重要な尺度はそのひとの生産的な能力や資質であり、その価値を高めるのに教育は重要であると考えている。そして、貧困層の教育への投資を増大させることは、貧困層の所得を上昇させ、その結果として、生活水準の上昇をもたらすとしている(Becker 1993、岡田 2005)。1993年の世界銀行(WB)の報告によれば、初等教育の普遍化等、教育機会へのアクセスの向上と教育投資の拡大に力を入れた国々は経済成長と所得の不平等改善を同時に達成し、貧困削減を実現したとしている(岡田 2005 p107)。

スリランカは歴史的に、医療や教育といった社会政策を重視しており、南アジア主要 4 개국⁷¹

71 主要4か国とはバングラデッシュ、インド、パキスタン、スリランカのこと(UNICEF 2014). *Global Initiative on Out-of-School Children-South Asia Regional Study: All Children in School by 2015, covering Bangladesh, India,*

内で比較すると、識字率はバングラデシュ57%、インド63%、パキスタン55%であるのに対し、スリランカは91%である。また、初等教育および前期中等教育における在籍率においても90%を超える学齢期のこどもが在籍しており、経済レベルと比較して高い教育指標を達成しているが、地域間格差や教育の質などの課題も指摘されている(UNICEF 2014)。

(2) 居住地域における教育達成格差

4か国比較では、こどもが不在籍傾向にあるのは地方(都市・農園以外)または都市のスラムである。しかし、スリランカでは農園部における若者がより不在籍傾向にあり、前期中等教育通学年齢(6-9学年)のこどもの10%が不在籍である(都市は3%)。2011年、農園部には768の学校があり、そのうち111校は農園内にあるが、その他の学校は農園外にある。2011年には187,243名のこどもたちがこれらの学校に入学し、内130,406名が農園内にある学校に通学していた(MoE 2011)。農園部における教育達成の課題として、農園近郊における学校のタイプ、距離や交通手段などの問題が指摘されている。農園内では多くの場合が8学年までの教育レベルの学校であり、他の地域では後期中等教育の後期(12-13学年)までであるのが一般的である。このことは農園に住むこどもたちが初等教育から前期中等教育(6-9学年)、そして、後期中等教育(10-13学年)への進学を阻む要因の1つとなっている。また、自宅から学校までの距離が1つの障害となっている。大規模農園では、居住地区は効率的に茶摘みができる区域ごとにわかれており、茶摘み区域によっては居住地区が公道からかなりの距離があることもある。UNICEFのSri Lankan Out of School Children フィールド調査では、中退したこどもの20%が交通機関の問題であると回答している(UNICEF 2014)。

農園マネージャーの管理能力評価へのインセンティブはさておき、居住地区が山の中や人里離れた高地の場合にはこどもたちの在籍や学校における成績、教育達成に影響を与えることは否定できない。山道や藪に囲まれた長距離の道程を女の子たちが歩く危険性は、こどもたちの家族を不安にさせ、遠距離にある学校に通学することに消極的にしてしまう。適切な交通手段のシステムがない状況において、こどもたちがよりもっと教育を得たい場合には、家族から離れた街に住む必要も生じてくるが、農園部のコミュニティ以外に住むことは家族に経済的負担をかけ、この教育費用にかかる家計支出は裕福な世帯にかかる負担よりも大きなものとなる。

このような物理的、経済的壁に加え、教育に対する家族や両親の認識の欠如は子どもたちが高等教育に進学する機会に影響を与えているものと推察する。その理由として、教育は将来農園で親と同じ仕事につくには重要ではなく、特に茶摘みをする女の子たちにとっては重要ではないと見なされがちであると説明されることがたびたびある(Chandrabose and Sivapragasam 2011)。

スリランカの識字率は非常に高いことで知られており、2009年における全体の識字率は90%であるが、農園部における識字率になると74.3%と低くなってしまふ。識字率が他の居住地域と比較して低い理由の1つとして、成人の教育課程への参加が低いことがあげられるといわれている。農園部門では25歳以上の成人の初等教育達成率は48%であり、中には教育の機会がなかった人々もいる。そのため、識字できない人の割合も多かったのではないかと推察する。

初等教育達成は後期中等教育(高校)や高等教育への機会とも連動しており、これらの教育機会は他の居住地域と比較すると低くなる。2011年の高校進学率は86.2%であったが、農園部では53.8%であった。さらに、後期中等教育への入学率は都市では45.8%であったのに対して農園部では12.8%となる。スリランカでは後期中等教育後期(13学年)を修了した子どもの多くは「普通教育修了証書試験」兼「進学テスト」(General Certificate of Education Advanced Level Test:略してA Level Test)を受験する。GCE A Level合格する子どもたちは農園部では2.3%となるが、都市の子どもたちは16.2%が合格し、地方でも10.8%が合格している(UNDP 2012)。GCE A Levelの合格はすべての子どもが大学への入学を許可されたということを意味しているわけではないが、大学以外の高等教育への機会を得るという点において重要である。

2.4.3 ケイパビリティ・アプローチと教育

センはスリランカの開発経験は途上国の中で社会開発に成功した事例としてしばしば触れ、スリランカは長期間にわたり、食料の流通、公共的な衛生基準、医療サービス、学校教育に的を絞った公共政策を極めて大規模に追求してきており、彼らがそのまいた種から豊かな収穫を得ていることを示す証拠は数多いとしている(セン 鈴村訳 1985/1988 p98)。センは、スリランカは1人あたりの国民所得はインドやパキスタンとほぼ同水準であるにもかかわらず、貧困削減や生活の質の達成という点において着目している。そして、絵所と川崎(2005)は、所得水準を与えられたものとする、貧困削減および寿命という点において社会福祉政策が機能しているとしている。セン(1985)は『福祉の経済学:財と潜在能力』(鈴村訳)の中で、1982年時におけるインド・中国・ブラジル・メキシコとスリランカの所得や平均余命、乳児死亡率や児童死亡率、そして識字率と高等教育率について比較をしている。

表 2-6 特定の機能に関する 5 か国のデータ比較表

(1982 年)

国	1人当たりの GNP	平均余命	幼児死亡率 (/10,000 人)	児童死亡率 (/10,000 人)	大人識字率	高等教育率
インド	260	55	94	11	36	8
中国	310	67	67	7	69	1
スリランカ	320	69	32	3	85	3
ブラジル	2,240	64	73	8	76	12
メキシコ	2,270	65	53	4	83	15

出典: 1988『福祉の経済学: 財と潜在能力』(鈴木訳)

表 2-6 は 5 か国のデータ比較である。1 人当たりの GNP はインド、スリランカ、中国ではブラジルとメキシコに比較して、所得水準は低い。しかし、平均余命・幼児死亡率などでみると、中国、スリランカ、ブラジル、メキシコはまったく別のグループを成し、その中でスリランカが少し優れている。従って、長生きするという潜在能力に関していえば、スリランカと中国は、1 人当たり GNP でいえば数倍豊かな国のグループに属している。

また、大人の識字率を指標としてみた基礎教育に目を転じると、再びスリランカが少し優れているとし、センは生死の問題と基礎教育に関していえば、スリランカと中国はインド(および同じ所得グループに属す他の全ての国)とたもとを分かち、もっと豊かなブラジルやメキシコに並び、あるいはそれらを凌駕さえすると述べている(セン 1985)⁷²。しかしながら、地域間における教育達成は已然あり、地域間における格差の要因を克服することはスリランカの社会政策の課題の 1 つである。

(1) ケイパビリティ・アプローチ

セン(1992)はひとの生活の質は「生活の良さ」としてみることができ、個人が価値あると考える生活を選ぶ自由を行使する機会や自己の選択の幅を拡大する重要性について述べている。ケイパビリティとはその人が何をできるかという選択肢の幅を示すものであり、人が行うことのできる様々な機能の組合せのことである(池本・野上・佐藤 1999 訳 p59)。

人は与えられた社会経済的条件下で何ができるかという様々な選択肢の組み合わせを持っている。選択肢をひとつのベクトルとして表現すると、人ができること、なれることの可能性は、その

72 センは大学その他の高等教育に目を移すと事態は一変するとしている。

様々なベクトルの集合として表されることになり、このベクトルの集合がケイパビリティ Capability と呼ばれるものである。その集合から、人は価値のある生き方だと判断するベクトルを選択するのである(池本 2007 p126)。

池本(2007)はさらに選択肢について、「選択肢が少ない方が、選択のために時間を浪費せず済むということもある。大事なのは、生きていく上で重要な選択肢が増えることである。そして、その重要な選択肢を欠いていることこそが貧困であると見なされる。もし差別によって社会的活動から排除されていて、それがその個人にとって重要な機能を欠いていると社会が判断すれば、それは社会が救済すべき貧困となる」(池本 2007 p126)とし、センのいうケイパビリティ・アプローチとは、人びとの暮らしの良さを判断するのに、所得ではなく、人は何ができるのか(読み書きができる、など)、どんな状態になれるのか(栄養が足りている、健康である、など)で判断しようとするものである。所得とは何かをするための手段にすぎず、大事なのは、その所得によって何ができるのかに注目することであるとしている(池本・松井 2015 p15)。

センは功利主義、総効用主義、自由主義、そしてロールズの正義論における、すべての基準も満足できるものではないとしている。なぜなら、これらの概念では人間のもつ多様性を認めることにはならないからだとしている。センは、より良き社会を追求するうえで、まず人びとの特徴や境遇や考え方の多様性を受け入れることが重要であると、所得ではなく、人びとは何ができるのかによって人びとの暮らしの良さを捉え(ケイパビリティ・アプローチ)、他者に対する共感や、アダム・スミスの「公平な観察者」の概念を用いて、討議や推論を経て、望ましい社会を追求する道を示そうとした(池本・松井 2015 p4)。

そして、人びとの「豊かな生き方」に着目するなら、「豊かさ」とは「本人が価値あるものとする生き方と選択する自由があること」である。豊かな生活は、単に物的に満たされていることだけではなく、精神的なもの、例えば自尊心のようなものも満たされていることを意味している。逆に、貧困とは、その選択肢の幅(あるいは自由)が制約を受けていることを意味する。この立場から出てくる貧困対策は、人びとから「価値あるものとする生き方と選択する自由」を奪っている要因を取り除くことであり、貧困の分析はそのような要因を明らかにすることである(池本 2007 p113)。教育はこの要因を取り除くために重要な役割を果たす。

(2) センとヌスバウム

センはケイパビリティを構成する機能を「基礎的な機能」と「複雑な機能」として例示する(フォスター・セン 1973、鈴木・須賀訳 2000)、人が満たすべき最低限の機能につい

てリストというものを提示しない。センは曖昧なものは曖昧なまま理解すべきであるとし、どのような人間の機能を重視すべきかについては、それぞれの問題に応じて異なるものがあり、事前に注目すべき重要な機能のリストを作成するものではないと考えている(池本2007)。センの「基礎的な機能」と「複雑な機能」とは下記のとおりである。

- 基礎的機能:
- (1) 必要な栄養を摂ること
 - (2) 避けることができる病気にかからないこと
 - (3) 早すぎる死を回避すること
 - (4) 必要な教育を受けていること
 - (5) 雨風をしのぐ住まいがあること

- 複雑な機能:
- (1) 社会の活動に参加できること
 - (2) 自尊心を持つこと
 - (3) 知的水準を向上させること
 - (4) 文化的アイデンティティを守ること
 - (5) 幸福であること

一方、小笠原(2008)によれば、ヌスバウムの主張は、ひとりひとりが自分の状況についてどう感じているかだけでなく、実際に何ができ、どのような状態になれるのかについても問う必要があるとしている。ヌスバウムのアプローチは、「人間の尊厳への尊重が要請するミニマムなものとして、すべての政府が尊重し施行すべき基本的な憲政原理に関する説明を哲学的に支援すること」にその目的がある。そしてヌスバウムは、「善き生」にとって最低限必要だと思われる結合的ケイパビリティをリスト化し、「多元的な実現性」(リストの内容)は地域の信念や状況に合わせて具体化されるものであり、リストで挙げられた1つ1つの要素は、トレード・オフの関係ではなく、それぞれが複雑に相互関連しあうものであり、これらのケイパビリティのうち、1つでも閾値以下に引き下げられることを望まないとしている(小笠原 2008 p172-173)。ヌスバウムがリスト化した「多元的な実現性」は下記のとおりである。

1. 生命: 正常な長さの人生を最後まで全うできること。
2. 身体的健康: 健康であること。適切な栄養を摂取できていること。適切な住居に住めること。

3. 身体的保全:自由に移動できること。性的暴力、こどもに対する性的虐待、家庭内暴力を含む暴力の恐れがないこと。性的満足のおよび生殖に関する事項の選択の機会を持つこと。
4. 感覚・想像力・思考:想像し、考え、そして判断が下せること。読み書きや基礎的な数学的科学的訓練を含む適切な教育によって養われた“真に人間的な”方法でこれらのことができること。自己の選択や宗教・文学・音楽などの自己表現の作品や活動を行なうに際して想像力と思考力を働かせること。政治や芸術の分野での表現の自由と信仰の自由の保証により護られた形で想像力を用いることができること。自分自身のやり方で人生の究極の意味を追求できること。楽しい経験をし、不必要な痛みを避けられること。
5. 感情:自分自身の回りの物や人に対して愛情を持てること。私たちを愛し世話してくれる人びとを愛せること。そのような人がいなくなることを嘆くことができること。一般に、愛せること、嘆けること、切望や感謝や正当な怒りを経験できること。極度の恐怖や不安によって、あるいは虐待や無視がトラウマとなって人の感情的発達が妨げられることがないこと。(このケイパビリティを擁護することは、その発達にとって決定的に重要である人と人との様々な交わりを擁護することを意味している。)
6. 実践理性:良き生活の構想を形づくり、人生計画について批判的に熟考することができること。
7. 連帯:
 - A. 他の人びとと一緒に、そしてそれらの人びとのために生きることができること。他の人びとを受け入れ、関心を示すことができること。様々な形の社会的な交わりに参加できること。他の人の立場を想像でき、その立場に同情できること。正義と友情の双方に対するケイパビリティを持てること。
 - B. 自尊心を持ち屈辱を受けることのない社会的基盤を持つこと。他の人びとと等しい価値を持つ尊厳のある存在として扱われること。労働については、人間らしく働くことができること、実践理性を行使し、他の労働者と相互に認め合う意味のある関係を結ぶことができること。
8. 自然との共生:動物、植物、自然界に関心を持ち、それらと関わって生きること。
9. 遊び:笑い、遊び、レクリエーション活動を楽しめること。
10. 環境のコントロール:
 - A. 政治的:自分の生活を左右する政治的選択に効果的に参加できること。政治的参加の権利を持つこと。言論と結社の自由が護られること。

B. 物質的:形式的のみならず真の機会という意味でも、(土地と動産の双方の)資産を持つこと、他の人びとと対等の財産権を持つこと。不当な搜索や押収から自由であること。

出典:池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳『女性と人間開発』2005年

(3) ケイパビリティと教育の役割

ケイパビリティ・アプローチは自分が良いと思う人生を選択できることが重要であると考え、こどもは自分にとって良いと思う人生を選ぶために必要となるケイパビリティを持っていない。センとヌスバウムはケイパビリティの獲得のためには教育は重要であるとする。

センは「人間の安全保障」を重要なテーマとして、人間の基礎教育の重要性を訴え、ノーベル賞の賞金を使って1998年にインドとバングラデッシュに「基礎教育と社会的な男女平等の達成を目的とした」財団を設立している。センは基礎教育と健康の関係にも着目している。『人間の安全保障』の中で、専門の保健教育が重要なのは「感染症の蔓延する経路や病気の予防法」をみれば明らかだが、一般的な教育でも「流行病問題」に対処する上できわめて重要だと述べている。さらに注目すべきは、基礎教育の欠如は「自分たちの要求を効果的に訴える能力」が制限され、政治的な機会を奪うと述べ、「自分たちに何をどのように要求する資格があるのか、読んで理解する能力がないために、彼らの権利は事実上、奪われている」としている点である(東郷えりか訳2006、伊藤2008)。

馬上(2006)は、ヌスバウムの下記のことばを引用し、こどもが大人になったときに自分で選択できる状態であるためには、諸々の機能への「内的ケイパビリティ」が発達した状態であればならず、そのためには実際に遊んだり、判断をしたりするという機能を充足することで発達するとし、学ぶことの重要性を述べている(馬上2006 p103)。

「リストに挙げたすべてのケイパビリティをもつ大人を育てようとするならば、こどものときに特定のタイプの機能を満たすことが必要となるだろう。なぜなら、こどものときにそれらの機能を満たしておくことが、しばしば大人になったときのケイパビリティを形成するうえで必要となるからである。従って、初等および中等教育が大人になったときの全ての選択において果たす役割を考えると、それを要求することは全く正当である。同様に、こどもの選択を考慮せずに、こどもの健康・情緒的福祉・身体的保全・尊厳を主張することも正当である」(ヌスバウム2000 p89-90.池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳)。

このようにヌスバウムは、こどもの将来という視点からケイパビリティを捉え、大人になったときのケイパビリティを形成する上での教育の重要性を述べている。

自らの人生にとって必要となる「ケイパビリティ」を自ら考え、養っていく力を蓄えるためには教育が大切な役割を果たす。しかし、こどもたちはこの力を備えてはおらず、自らの力で教育を得ることは困難である。自身の置かれている状況や条件を適切に判断するためには、他者との比較をする能力や、自己分析する能力も養う必要があり、また、所与の負の状況や条件を克服するためには、体験した経験だけではなく、知識や技術、克服するための理論的考える能力と実施力が重要となる。これらの機能を取得し、自身にとって価値ある選択をする際に活かすためには、自ら学ぶことや家庭教育、地域教育と学校での教育も包括した教育のあり方を考えていくことが課題ではないかと考える。特に、教育歴のない両親の場合、どのような教育をすればよいかわからない可能性も高く、こどもたちが自らの力で自己能力を高め、力を養っていくためには、まず学校教育が必要となる。こどもたちが所与の条件下で、将来、それらを克服し、選択肢を広げ、それらを活用して、自らが価値あると考える生活を得るためには、ケイパビリティとそれに必要な教育の関係をリンクさせていくことが人間開発の課題である。

3 居住地域における教育達成状況

3.1 こどもの活動調査の概要

3.1.1 こどもの活動調査の目的

『こどもの活動調査』は、こどもの経済的活動や家庭における労働、これらの活動によるこどもたちの状況を明らかにすることを目的に行われた調査である。本調査は ILO とスリランカ政府が共同で 2008 年 10 月から 2009 年 4 月までに全国を対象に行った調査である⁷³。スリランカは 9 つの州、25 の県に分けられるが、『こどもの活動調査』では北部州(5 県)が 2009 年まで内戦だったため調査対象とはなっていない。対象世帯は 16,000 世帯で、本調査では家族も含む約 66,000 人が対象となっているが、本調査はこどもの労働に焦点を当てており、対象年齢のこどもは 5 歳から 17 歳の子となり 14,180 人となる。『こどもの活動調査』報告書では居住地域間での比較分析を行っており、居住地域は「都市」「農村」「農園」に分かれている。

3.1.2 こどもの活動調査の特徴

本研究では、『こどもの活動調査』が対象としている 20 県のうち紅茶が主に生産されている県のみを抽出した。対象とした県はウェットゾーンと呼ばれる地域にある 9 県⁷⁴である。9 県で抽出した世帯は 6,631 世帯で、こどものいる世帯は 3,683 世帯であった。本研究では、紅茶生産地域の一般的特徴を記述する際には、9 県で対象となった 6,631 世帯 29,069 人すべてを対象とし、こどものいる世帯の特徴を記述する際にはこどものいる 3,683 世帯を対象とした。対象となるこどもの人数は 6,119 人であり、1 世帯当たり 1.65 人のこどもがいる。対象地域全体の男女比は、男性が 49.2%、女性が 50.8%となり、女性のほうが若干多いが、対象となるこどもの男女比を比較した場合には、男の子が 50.2%、女の子が 49.8%と男の子の方が多い。

『こどもの活動調査』では、「都市」には対象地域人口の 7.4%が居住し、「農園」には 14.9%が居住し、残りの 77.8%が「農村」に居住している。本研究では、紅茶業における経営形態に着目した分析となるため、「農村」に居住している世帯を「農家」と「地方」に分けて 4 居住地域とした。「農家」は世帯主のうち少なくとも両親のうち 1 人が働いており、一戸建と田畑の土地を所有する世帯を対象とした。また、家族で世話ができる範囲の家畜を所有している世帯を対象としたため、

73 第 1 回目の調査は 1998 年から 1999 年に行われ、本調査は第 2 回目である。2010 年にも第 3 回目の調査が行われている。

74 Kalutara, Kandy, Matale, Nuwara eliya, Galle, Matara, Badulla, Ratnapula, Kegalle の 9 県。Statistical Information on Plantation Crops-2009 (2001) P22 において農園の総面積が 1,000Ha 以上ある県を抽出。

牛または山羊は 10 頭以上、もしくは鶏 100 羽以上を所有している世帯は農家とはしなかった。「地方」は上記で定義した「農家」以外とした。

『こどもの活動調査』の構成は下記のとおりである。

Section A: Demographic Characteristics

Section B: Activity Status of Children (for children 5 – 17 years old)

Section C: Health and Safety

Section D: Perception of Parents / Guardians of the currently working child

Section E: All children 5–17years – living away from Household/family

Section F: Housing and Household Characteristics

3.1.3 本研究で用いる変数

本章では、居住地域におけるこどもの教育達成に焦点を当て、居住地域の違いにより、生活状況や環境がどのように異なり、それによってこどもの教育達成にどのような相違があるのかを分析する。居住地域間の教育達成に格差を生じさせている要因として考えることができるこどもを取り巻く環境を比較考察することから、こどもを取り巻く環境を(1)世帯状況、(2)生活環境、(3)家庭内における状況という3つの区分に分ける。また、こどもの教育達成については在籍状況と留年・中退経験の2変数を用いて分析することとする。

(1)世帯状況は、こどもの成長に大きな影響を与える家族に注目し、世帯の経済状況を示す「世帯所得」と世帯主の教育達成を示す「世帯主学歴」を Section A の Demographic Characteristics から抽出した。

(2)こどもの生活環境については「住環境」と「生活環境」に分け、Section A: Demographic Characteristics と Section F: Housing and Household Characteristics から抽出した変数から構成した。「住環境」は他者からみだりに干渉されない自由と安定した生活形態を維持できるかという点に着目し、1)他人の意向に左右されないで居住することができる権利や、自由に改装・増築できる権利があるか、2)居住する住居の形態により家族のプライバシーが侵害されず、こどもたちが他人から干渉されずにいることができるか、3)自分以外の人から干渉されずに自由に好きなことができる空間があるかに注目し、「住環境」は(1)自宅の所有権、(2)住居形態、(3)個人あたりの部屋数の3変数から「住環境」変数を構成した。「生活環境」はこどもたちが安全かつ衛生的な環境で健康的に生活できるかという点に注目し、(1)安全な飲み水へのアクセス、(2)照明源、

(3) 料理器具のエネルギー源、(4) 自宅内トイレ設備の有無の 4 変数から構成した。それぞれの変数の詳細説明については後述する。

(3) こどもの家庭内における状況は、『こどもの活動調査』の目的であるこどもの労働活動状況に着目している。こどもの家庭内または家庭外で労働や手伝をすることはすべてを否定的に捉える必要はない。こどもが家族の手伝をすることは家族とのコミュニケーションや愛情確認の 1 つとなりうるし、家庭外での労働や手伝は将来必要となる友人や同僚、上司や隣人とのコミュニケーション能力を醸成してくれる可能性も高い。しかしながら、長時間にわたる労働は 1 日 24 時間という限られた時間において、こどもが健やかに成長するために必要な時間を割くことになり、健康に害を及ぼすこともある。そこで、こどもの「経済活動従事」を Section B1: Economic Activities から、「家事従事」に関する変数を Section B3: Housekeeping Activities から抽出した。両変数は本調査実施の前週における労働状況についての質問項目⁷⁵に基づいているが、「経済活動への従事」については、前週に労働をしていなくとも、過去 1 年間に経済活動に従事していると回答したこどもについても「経済活動」に従事しているとした⁷⁶。本分析ではこどもが学校に通学できる時間等を考慮し、本研究で用いる児童労働の定義は下記のとおりとする。

5-11 歳:

- ・経済活動: 収入の有無とは関係なく、週 5 時間を超えて労働している場合。
- ・家事手伝: 週 15 時間を超えて家事手伝をする場合。

12 歳以上:

- ・経済活動: 収入の有無とは関係なく、週 15 時間を超えて労働している場合。
- ・家事手伝: 週 25 時間を超えて家事手伝をする場合。

従属変数であるこどもの教育達成については、調査時におけるこどもの在籍状況と留年・中退経験の 2 変数を用いた。「現在の在籍」は Section B: Activity Status of Children から抽出した。「留年・中退経験」は当時の年齢と在籍学年から計算しダミー変数を作成した。Section B には

75 Section B の下記の質問に基づいている。

B17. Did he/she engage in any work at least one hour during the last week

B18. Even if he/she was not working last week, did he/she have a job, business or enterprise from which he/she was temporarily absent

B25. In addition his/her main work did he/she do other work

B40. Did he/she attend to housekeeping activities during the last week

76 Section B の「**B35.** During the last 12 months did he/she engage for a substantial period of time in any work」に肯定的に回答したこどもは経済活動に従事しているとした。

通学時間・距離・方法、欠席日数・理由、不在籍状況・理由、退学年齢や職業訓練の経験有無などの質問項目が含まれている。本章における 2 次分析では「在籍状況」と「留年・中退経験」を従属変数として用い、世帯状況や生活環境、家庭内における状況を「子どもを取り巻く環境」として、独立変数として用いる。「通学時間・距離・方法、欠席日数・理由」については当時、在籍していない子どもには当てはまらないため、独立変数としては用いない。

なお本研究で統計分析の結果を示す場合には、5%水準を基準として、統計結果が 5%未満の場合には有意とし、5%以上の場合には有意としない。また、原則、パーセンテージを示す必要がない場合には、有意水準は記述しない。

3.2 対象地域の概要

3.2.1 都市・地方・農家・農園の特徴

『子どもの活動調査』では居住地域は「都市」「農村」「農園」の 3 区分であるが、本研究では「農村」を「地方」と「農家」に分け、「都市」、「地方」、「農家」、「農園」の 4 つの区分とした。

都市は商業・経済の中心として栄え、ポルトガル渡来以降には、コロンボより南の都市で行政府拠点地としても発展していった。現在においても都市は商業経済の中心であり、また行政の中心となっている。『子どもの活動調査』では 205 都市が対象であるが、本研究では 49 都市の人びとが対象となる。都市数が最も多いのはコロンボ県で、87 都市ある。コロンボ県は首都ではないが、スリランカ経済や政治の中心であるコロンボ市がある。コロンボ県には 2 農園あるが、栽培面積が小さいため、本研究では対象としていない。

『子どもの活動調査』では、「農村」の定義は「都市」と「農園」に属さない人びととしている。『子どもの活動調査』で対象となっている「農村」は 1305 地域であり、農村地域が多い県はコロンボの北にあるガンパハ県とクルネガラ県となり、それぞれの県に 125 地域と 123 地域の農村地域がある。農園はガンパハ県にはないため本研究では含まない。クルネガラ県には 2 農園があり、数はコロンボ県と同数ではあるが、栽培面積が広く、本データ分析に含めた。本研究で農園が主としてある 9 県には 549 地域の農村が含まれる。本研究では、紅茶産業における経営形態に着目し、子どもの教育達成格差を論じることから、「農村」を「地方」と「農家」の区分に分け、農家を前述のように定義⁷⁷し、抽出した。しかしながら、『子どもの活動調査』データからは作物の種類まで分けることができないため、稲作やその他の作物を栽培している農家も含まれている。スリランカでは

77 農家の定義：世帯主のうち少なくとも両親のうち 1 人が働いており、一戸建と田畑の土地を所有するが、牛または山羊は 10 頭以上、もしくは鶏 100 羽以上を所有していない世帯。

紅茶は1年中収穫できるが、栽培面積は0.5 エーカー以下の世帯も多く、自家用や副業として、稲作や野菜、穀物、香辛料などを栽培している世帯も多い。現地調査を行った地域においても、同様の傾向が見ることができた。

『こどもの活動調査』データ2次分析における「地方」の定義は、「都市」「農家」「農園」に属さない人びととなる。『こどもの活動調査』からは職業等の情報が記述されていないため、「都市」と「農園」以外にどのような職業の人びとが居住しているかについては特定できない。しかしながら、スリランカでは、農業、漁業、林業、繊維製造業、宝石発掘業、観光業などが有名な産業であり、これらの産業は「農村地域」に多く見られることができる。本研究における「農家」は個人農家という位置付けのため、「地方」には「農園」と「農家」以外の農業関係も含まれている。

スリランカでは紅茶栽培の経営形態は、公営会社2社、半公営会社23社、民間農園(大・中・小規模)、農家の4区分である。農園はプランテーション経済作物の栽培地として西欧諸国の統治下で発展した。『こどもの活動調査』で対象となっている農園の定義は記載がない。農園は政府が経営している公営会社、経営権を民間会社もつプランテーション会社(半公営会社)、民間企業や個人によって所有されている民間農園の形態がある。近年では小規模農園や農家の栽培数も増えており、定義が異なることがある。例えば、The Tea Control Act では小規模経営は10 エーカー未満としており、Sri Lanka Tea Board の定義では、栽培面積によって農園か小規模経営に分けており、50 エーカー以上の紅茶栽培面積を持つ場合には農園とし、50 エーカー以下の面積の農作物栽培については農園という位置づけにはなっていない。

3.2.2 本研究で対象とした地域の特徴

『こどもの活動調査』データ2次分析では、農園が主にある9県を抽出した。スリランカは自然が豊かで、地学的に変化の富んだ島である。南から中央部に連なっている高地には年2回の季節風がぶつかり、雨が複雑なパターンでこの島の各地に降水をもたらし、乾燥地帯と湿潤地帯を形成している。農業形態も土壌と地学的的高低による影響を受け、乾燥地帯では灌漑技術が発達し、多くの人びとの暮らしは農業活動を通じて支えられてきたといわれている(足立 1987)。また、上述のとおり、スリランカは古来より中継貿易としての役割を果たすとともに、この島の香辛料やその他の資源をめぐる海岸地域が西洋諸国によって植民地化され、英国が宗主国になると、降水量が多く未開の地であった中央高地ではプランテーション農業が展開された(Meyer 2003)⁷⁸。

78 大英帝国が全島を支配したのちには、プランテーション農業が在来文化と在来農業からある程度独立した形で導入されるようになり、1948年に自治領セイロンとしての独立後にもその影響は続き、この国の経済・社会・文化的な

現在のプランテーション農業では、紅茶、ココヤシ、ゴムの 3 大作物が中心であるが、胡椒、シナモンなどの香辛料も栽培されている。プランテーション形成の歴史はオランダ占領下時代に遡るが、広大なプランテーションが湿潤地帯である中央高地の斜面で拡大されていったのは、大英帝国植民地時代の 1830 年代になってからである(杉本 1998)。スリランカにおける紅茶栽培は歴史的には古くない。1860 年代から 70 年代に輸出主要作物であった珈琲葉に病害が蔓延し、さらに、ブラジルやコロンビアで栽培される珈琲の台頭に押されたセイロン珈琲産業界が、珈琲に代わるプランテーション作物として紅茶の栽培を始めた時期からであり、約 150 年程度の歴史である(杉本 1998)。セイロンの人口は 1871 年当時には約 240 万人であったが(国際農林業協会 2004)、1981 年の人口は約 1,485 万人となっていた。足立(1987)によれば、直接の農業従事者の割合は全就業人口の約 45%を占めており、そのうち小農部門に従事している者が 27%、プランテーション部門に従事する者が 18%という内訳としている(足立 1987)。

近年、スリランカでは観光や商業に力を入れ始めており、第 3 次産業に就業する人口も増加している。2012 年の統計ではスリランカの人口は約 2,036 万人で、都市には 18.2%、農村(都市・農園以外)には 77.4%、農園には 4.4%の人口分布となっている。本分析で抽出した人口分布状況は都市地域では 7.5%、地方地域では 64.3%、農家は 13.7%、農園には 14.5%であり、多くの人びとは地方地域に居住し、農業や畜産、漁業、家内工業やそれらに従事する人びとが生活するのに必要な商品やサービスを提供する仕事に従事している。表 3-1 と表 3-2 は各居住地域の人口と世帯数を示したものである。本研究で対象とした 6,631 世帯のうち、都市には 475 世帯 2,189 人、地方には 4,508 世帯 18,696 人、農家には 880 世帯 3,977 人、農園には 768 世帯 4,207 人が居住している。

表 3-1 各居住地域の人口

居住地域	男性	女性	計	
都市	1,091	1,098	2,189	7.5%
地方	9,192	9,504	18,696	64.3%
農家	1,962	2,015	3,977	13.7%
農園	2,066	2,141	4,207	14.5%
総計	14,311	14,758	29,069	100%

表 3-2 各居住地域の世帯数

居住地域	世帯数	割合
都市	475	7.2%
地方	4,508	68.0%
農園	880	13.3%
農家	768	11.6%
総計	6,631	100.0%

構造に色濃く反映している(足立 1987)。

表 3-3 は本研究で対象としているこどもの数と男女比を居住地ごとに示したものである。こどもの数は都市で最も少なく、全体の 7.7%に当たる 473 名であり、次いで農園の 16.4%に当たる 1,005 名である。農家は 21.1%の 1,289 名となり、地方は 54.8%の 3,352 名である。

表 3-3 こどもの数と男女比

居住地域	男	女	合計	割合
都市	240	233	473	7.7%
地方	1,678	1,674	3,352	54.8%
農家	664	625	1,289	21.1%
農園	496	509	1,005	16.4%
計	3,078	3,041	6,119	100.0%

家族構成の特徴的な点は、すべての居住地域では 4-5 人構成の世帯が 50%前後を占めている。しかし、3 人以下の世帯と 6 人以上の世帯では居住地域ごとの違いがあった。執行 (1998)によれば、多数民族であるシンハラ人は「核家族」が基本的であり、インドでみられるような数世代が 1 つの家に同居する合同家族や兄弟夫婦が同居する大家族は稀であると指摘する。スリランカでは居住地域における民族分布には傾向があり、農家の大多数はシンハラ人で、農園における人口が多いのは植民地時代にインドから渡来のタミル人である。そのため、文化社会的背景からすると農園では世帯人数は多く、農家では世帯人数が少ない傾向にあると推察していたが、「都市と農園」では 3 人以下の世帯と 6 人以上の世帯は 25%前後であった。また、「地方」地域では 3 人以下の世帯が 34%程度で、6 人以上の世帯が 18%と少ないのに対して、「農家」では 3 人以下の世帯は 8%程度であり、6 人以上の世帯は 34%と多かった。1998 年から 2008 年の 10 年間で文化的価値が大きく変わったと推測することは難しく、また、『こどもの活動調査』からは、家族構成の変化については考察することができない。このことから、因果関係を述べることは困難であるが、農家も親から子へ農地を継承していくことから大家族が多いと推察する。

スリランカではプランテーション形成における背景から、居住地域において民族構成が異なるという特徴を持つ。しかしながら、本研究では家族が従事する経営形態の違いにより、こどもたちの教育の機会や達成にどのような違いがあるのかを考察するため、「民族」を従属変数と

はしていない。しかし、教育機会における紅茶産業経営形態間格差の改善策を考える場合には、経営形態による生活環境や居住地域のもつ特色と同様に彼らの文化・習慣を多様性の1つとして考慮する必要がある。そこで、抽出した 9 県における民族構成について簡単に記述する。居住地域の特徴としては、「地方や農家」では人口の 92%以上がシンハラ人であり、「都市」でもシンハラ人の居住比率が高く 70%となった。一方、「農園」ではスリランカ・タミル人が 56.6%、インド・タミル人は 28.4%となり、タミル人口が 85%となっている。ムーア人の多くは都市に居住し、都市人口の 22.5%となる。

3.3 親世代の教育達成状況

教育の効果や重要性については、多くの研究者や政策策定者たちによって指摘されていることは第 2 章で述べたとおりである。センはケイパビリティを達成するための大切な機能の力を養うためのものとして、また人間の安全保障としても基礎教育の重要性を強調している(東郷 2006)。ひとは読み書きができないことにより自らの法的権利について理解をしたり、訴える能力がかなり限られてしまったりすると述べるとともに、教育が受けられないために負の連鎖に陥りがちであることを述べている(東郷 2006 p12)。

3.3.1 親世代の教育環境と教育状況

『こどもの活動調査』で対象とした 6,631 世帯の世帯主の平均年齢は 52.55 歳であり、中央値は 52 歳である。2008 年当時の 52 年前は 1966 年となり、多くの世帯主は 1960-1970 年代前後に生誕していると考えられる。1960 年代初頭について、斉藤(1964)はスリランカの社会構造や国のあり方は英国統治時代とは際立った変化があったわけではないとしている。しかし、教育と開発という関係からみた場合、1960-70 年代は貧困や飢餓といった問題の背景には何があるのか、南北問題の構造的原因を探るものとして進展していった時代であり(山内 2007)、先進国が教育において一定の情報・知識を一方的に与えるだけのものではなく、途上国における教育の在り方が考えられている時代であった。また、1970 年代のスリランカでは農園をめぐる改革がなされ、1972 年の土地改革で農園は国有化されたことに伴い、農園内部にある学校も国営になった。

スリランカ紅茶産業における教育の歴史は植民地時代まで遡ることができ、また、独立後の 1947 年には小学校から大学までの無償教育制度が実施されたが(Ministry of Education 2013)、農園部における教育の質改善には学校教育の責任が農園主から国となる 1997 年まで待たなければならなかった(UNICEF 2014)。大規模農園は学校・商店・病院などもある自己完結型のコミュニティで

はあるが、それらの設備は必ずしも十分であるとはいえず、学校のレベルも初等教育・中等教育の義務教育レベルの学校が多いため、後期中等教育機関に進む場合には農園外部まで通学しなければならないことも多い。

1974年に出版された報告書⁷⁹によれば、自治領として独立する以前である1946年は57.8%の識字率⁸⁰であったが、特に女性の識字率の向上により、1963年には71.6%の識字率となり、1971年には78.1%と上昇している(DCS 1974)。1980年代に調査したホラップス(1991)によれば、農園の多くの労働者、特に女性は読み書きができないとしている。『こどもの活動調査』では識字率についてのデータはない。表3-4と図3-1はこどもの成長に影響を与える世帯主の教育達成状況である。

3.3.2 教育達成状況

スリランカでは一般的に1学年(5-6歳)から9学年(13-14歳)の前期中等教育までが義務教育となる⁸¹。本研究では義務教育以下の教育年数を低学歴とし、義務教育を超えている場合を高学歴と定義した。表3-4は2015年にスリランカ統計局が全国調査を対象にした調査結果を発表した「Population and Housing 全国調査2012」(以下、「全国調査2012」と記す。)統計であり、25歳以上の人びとの教育年数も報告されている。本調査の報告によれば、25歳以上の人びとで初等教育以下は38.8%であり、前期・後期中等教育レベル以下は58.7%、高等教育以上の教育を受けている人びとは18.2%であった(DCS 2015 p170)。2012年当時においても、高等教育以上の教育機関に進学する困難さをみることができる。

表3-4 25歳以上の教育年数

無就学	初等教育	前期・後期中等教育			高等教育以上	
	1-5 学年	6-8 学年	9-10 学年	O Level Test	A Level Test	高等教育
4.7%	18.4%	15.7%	24.0%	19.1%	14.3%	4.0%

出典: Population and Housing 2012, DCS (2015)

79 The Population of Sri Lanka, DCS, Government of Sri Lanka.

80 1946年当時、男性の識字率は70.1%であったが、女性の識字率は43.8%だった。1971年当時は男性の識字率は85.2%、女性の識字率も70.7%となり、男女間における識字率の格差も縮まった。

81 義務教育期間は9年間であるが、学校によっては8年間しかない学校もある。Population and Housing 2012では、1-5学年、6-8学年、9-10学年、GCE O Level Test, GCE A Level Test(準備期間)、高等教育となっている。そのため、本研究で記載する場合には1-8学年までを義務教育とした。

図 3-1 は本研究で対象としているこどものうち第 1 子の世帯主の学歴を示したもので、対象世帯主は3,683 人である。低学歴以下の世帯主は2,201 人(59.8%)であり、後期中等教育に進むことができた世帯主は 40.2%の 1,482 人のとなる。また、小学校以下(1-5 学年)の世帯主は 1,053 人で、全体の 28.6%となり、親世代では小学校レベルで教育を修了する者も多かった。一方、高等教育以上の世帯主は 2%であった。

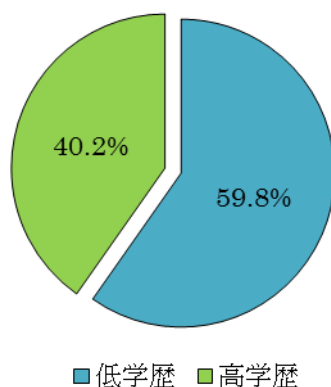


図 3-1 世帯主の教育達成状況

『全国調査 2012』と『こどもの活動調査』は対象範囲や対象者が異なるため、一概に比較することはできないが、大まかな傾向は捉えることができよう。両調査の間隔は 5 年間あり、『全国調査 2012』で対象となった親世代の方がより良い教育を受けている。義務教育レベルを基準とした場合には、義務教育を超えて進学できる割合にはあまり違いがみられないが、小学校を基準にした場合には、2012 年に行われた全国調査では改善されている。

親世代が生まれた 1960-70 年代のスリランカ社会構造自体に変化はないとする先行研究もあるが、海外支援や国内の政策により、経済や社会の発展は着実に進んだ時代であり、教育改革もなされてきた。大規模農園はプランテーション経済の形成過程から画一的な生活環境であったが、経済や社会の発展、義務教育の実施と児童労働の禁止、内戦の終結などにより農園内のコミュニティ構造を変化させている。また、1970 年代後半以降の農家の進出や 1990 年代の大規模農園の半民営化、民間農園の増加などによる産業構造変化の中で、紅茶産業における労働・生活環境を 1 つのものとして語ることは難しくなっている。そこで、本研究では、紅茶産業内の経営形態に着目し、こどもたちを取り巻く環境とこどもの教育達成の比較分析を試みる。本章では、『こどもの活動調査』データを用い、4 つの居住地域間における教育達成の格差について 2 次分析を行う。

3.4 こどもの教育状況

スリランカの教育制度は統治システムと政治システムと密接な関係にある。1928 年に大英帝国で普通選挙権がすべての成人に認められると、1931 年にはセイロンにおいてもすべての成人 21 歳以上の男女に普通選挙権⁸²が認められた(中村 1978、鈴木 2015)。ドノモア憲法(1931-1947)は、1927 年に大英帝国の指名によるドノモア委員会 (the Donoughmore Commission) の提案によって制定され、憲法にはセイロン国家評議会 (the Ceylon State Council) の創設による植民地自治制度の確立や国家評議会委員の普通選挙制による選出などが定められていた⁸³。この憲法は政治的参加の機会を人びとに認めたのみならず、社会政策の推進を促すこととなり、1931 年の教育法令第 31 号 (Education Ordinance No.31) の制定につながる。制定された「教育設備の改善とそれに関連した法律の改正および統合の法令」は、その後、数回にわたる教育改革されているが、現行の教育制度の礎となっている(野上 1985、岡本 2005)。このような宗主国による政治的背景が当時のセイロンにおける政策に影響を及ぼし、現行教育制度にも英国の教育制度の影響が色濃く残されている。図 3-2 はスリランカの教育制度である。

3.4.1 教育制度

スリランカの教育の歴史は古く、その起源を西欧の植民地下におけるキリスト教普及のための学び舎とするのか、ポルトガルが渡来する遙か以前の紀元前 4 世紀に始まったとされる仏教寺院における学び⁸⁴が始まったときとするのかはここでは議論しないが、宗教との関係において学ぶことは教養を高めるものであるとともに、政策の 1 つとしても価値ある宝物であると考えられていた (MoE 2013)。大英帝国から独立する前年の 1947 年には無償教育制度⁸⁵が導入され、小学校から大学までの学費が無償となった (MoE 2013)⁸⁶。1945 年の初等教育と 1950 年代の中等教育において、英語からローカル言語による教育への変化は教育の機会を拡大させた。1962 年には初等教育に代わり義務教育が提案されたが、義務教育の制度化までにはまだ時間がかかった。1960 年から 61 年にかけて教育制度は全国統一となり、1972 年にスリランカは完全独立するとともに新たな憲法を施行し、教育改革が行われた (MoE 2013)。1972 年と 1975 年は土地改革が施行

82 宗主国である大英帝国で男女普通選挙制度が採用されたのは 1928 年。

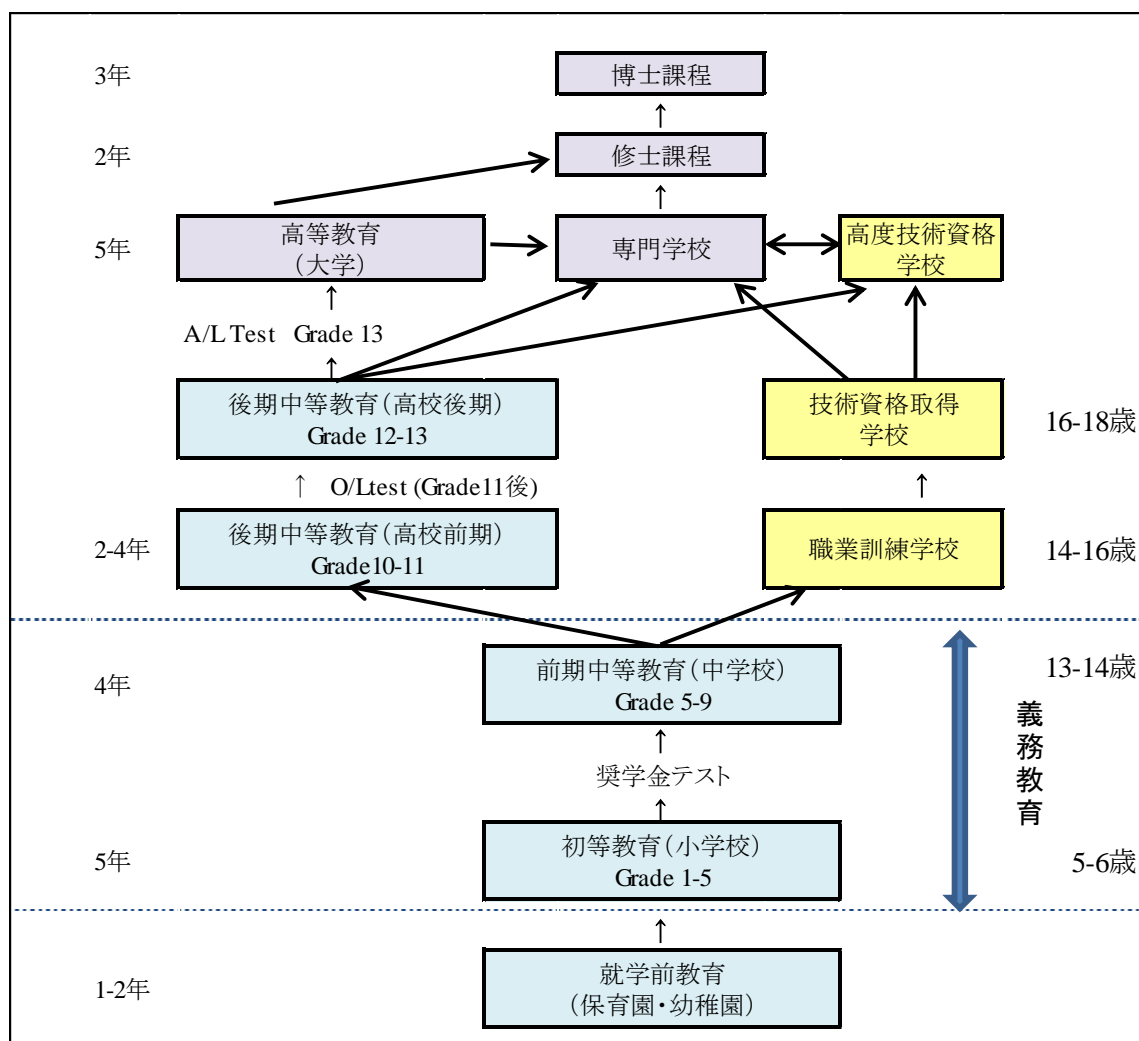
83 その後、1949 年に制定された「セイロン (国会選挙) 修正法」(Ceylon [Parliamentary Elections] Amendment Act No. 48 of 1949) が制定され、南インドから渡来したインド・タミル人やその他の民族の人びとの国籍や選挙権の剥奪が行われたのは上述した通りである(川島 2006)。

84 仏教寺院において「仏教」の教義や知識を学ぶことが教育の始まりであるという研究もある。

85 ADB (1999)、UNICEF (2014) など一部の文献によれば、無償教育制度は 1945 年とされている。

86 教材、衣服、通学などの経費について補助

され、20ヘクタール以上の農園は国有化された年でもあった。1992年には大規模農園の経営は民間企業に委託されることとなり、1998年には1学年から9学年までが義務教育となり、こどもをもつ親の責任としてこどもを9学年まで通学させることが義務付けられた(MoE 2000、2013)。2016年のサンデー・タイムズには義務教育年数を11学年まで引き上げる動きがみられた記事が掲載されたが、現在の教育制度は下記の図3-2の通りである。



出典: Education First Sri Lanka, Ministry of Education, Government of Sri Lanka (2013)

図3-2 教育制度

スリランカの公立学校は4つの段階と4つの分類に分けられている。図3-2は2013年に報告されたスリランカの教育制度である(MoE 2013)。日本では小学校は6学年制であるが、スリランカでは5学年制となり、5学年目に奨学金の授与と中等教育(6学年)に進学するための資格

を得るための統一国家試験が行われる。1951年の教育規則(Education Regulations)によると小学校は全日制の普通教育を行い(3条1項A号)、国立小学校の学年は1月初旬に始まり、12月初旬に終り、1年間に少なくとも180日間の授業日をもつことが定められている(野上 1985)。中学校の進学先は、第5学年次に行われる統一国家試験である奨学金試験によって決まる。本試験に合格したこどもは有名な学校に進学ができる。そして、一定の所得以下の世帯には奨学金が授与される⁸⁷。この奨学金制度は、もともと農村のこどもに中等教育の機会を保障するために設けられたものとされているが(野上 1985)、教育が重要視されるスリランカでは、裕福な世帯のこどもが有名学校に進学するための試験となっているのが現状である。

第2段階である日本の中学校に相当する前期中等教育は、4学年制(6-9学年)の学校であり、義務教育となっている。9学年終了時に後期中等教育への進学についての選抜が行われる。1951年の教育規則によれば、前期中等教育では年間200日以上授業日数が必要であり、1月に始まり12月に終る3学期制の学年編成を敷いている(野上 1985)。親世代では9学年までの就学と修了を義務付けておらず、教育達成状況は初等教育段階で終了するこどもも多かったが、1998年に義務教育となり、前期中等教育の修了状況がよりよくなっている。

第3段階である日本の高校に相当する後期中等教育は2段階に分かれ、前期2年間(10-11学年)と後期2年間(12-13学年)の計4年間である。進学するためには、第11学年の修了時に行われる「普通教育修了証書試験」兼「進学テスト」(General Certificate of Education Ordinary Level Test:略して O Level Test)に合格しなければならない。O Level Testに合格すると修了証明書が授与される。この試験の合格は約半数となるが、近年では11学年までの修了を奨励した政策をしているため、今後は後期中等教育まで進学できるこどもも増えてくるものと推察する(JETRO 2013)。

第4段階は高等教育課程(大学)であるが、大学に進学するためには「普通教育修了証書試験」兼「進学テスト」(A Level Test)に合格し、かつ好成績をおさめる必要がある。そのため、後期中等教育の12-13学年はこのA Level Testに合格するための準備期間となっている学校が多い。A Level Testに合格すると後期中等教育の修了証書が授与され、かつ試験の点数が良い学生は大学への進学ができる⁸⁸という制度になっている。スリランカでは15国立大学⁸⁹しかなく、

87 アーナンダ(2005)によれば、奨学金金額は月250ルピー

88 2018年の時点では、このA Level Testは最大3回までしか受験できない。そのため、大学進学を希望する学生は、13学年が修了後に数年勉強したのちに、受験を試みる学生もいる。

89 スリランカでは大学も無償教育であるため、大学といった場合には15国立大学を指すが、近年では、スリランカにある海外の大学や私立大学などに進学する学生も増えている。

大学進学は狭き門である。

このようにスリランカの教育制度は教育レベルという点で主に 4 段階にわかれており、この年齢に合わせた教育段階に加え、学問の分野も考慮した学校分類を行っている。下記はスリランカにおける公立学校の 4 つのタイプの学校である (MoE 2013)。

Type 1 AB(文系・理系併設) : Grade 1-13 (773 校)

Type 1C(文系のみ) : Grade 1-13 (2,004 校)

Type 2: Grade 1-11 (4,030 校)

Type 3: Grade 1- 8 (3,124 校)

スリランカの公立学校は、文系・理系のクラスが 13 学年までである「Type 1AB 校」、文系のみクラスが 13 学年までである「Type 1C 校」、また、分野は関係なく 11 学年までである「Type 2 校」、8 年生までである「Type 3 校」の 4 タイプである。上記は学校調査 2012 の統計である。13 学年までである「Type 1AB 校」と「Type 1C 校」は国立が多く、その他は公立である。農園部にある学校の多くは Type 3 が多い。基本的には自宅から近距離にある学校に入学するが、教育熱心な親や家族がいる世帯では、こどもが高校まで続けて進学できる 1AB 校や 1C 校に入学・転校させようとする傾向にある。表 3-5 は本研究で対象とした県の学校数と生徒数である (2011 年時点)。1979 年当時には農園部の学校は非(国)公立であり、246 校しかなかったが(野上 1985)、2011 年には 9 県だけでも 733 校ある。

表 3-5 学校数と生徒数

	学校数		学生数		規模平均/校	
	農園以外	農園部	農園以外	農園部	農園以外	農園部
Kalukara	362	37	209,933	5,264	580	142
Kandy	540	97	246,635	22,553	457	233
Matale	273	34	88,512	7,564	324	222
Nuwala eliya	243	274	74,201	83,322	305	304
Galle	416	7	216,786	629	521	90
Matara	353	5	160,107	1,920	454	384
Badulla	446	128	156,063	28,069	350	219
Ratnapura	491	91	188,176	19,234	383	211
Kegalle	463	60	152,694	7,640	330	127
総計	3,587	733	1,493,107	176,195	580	142

出典: Sri Lanka Education Information 2011, Ministry of Education, Government of Sri Lanka

スリランカでは教育は歴史的にも重要であり、19世紀初頭のコールブルークの改革により、教育の重要性が上流階級だけではなく、一般の人びとにも意識されてきていた。しかしながら、農園内部における教育についての議論が真剣にされるようになるのは20世紀の初頭になってからである。1905年に開催されたセイロン教育委員会では義務教育制⁹⁰の採用が勧告されると同時に茶・ゴム農園における貧困階級である労働者の子どもたちの教育についても議論され、農園の初等教育においては授業料を徴収すべきではないという勧告がなされた(野上 1985)。本勧告により6歳から10歳の男の子については1906年の都市学校法令と1907年の農村学校法令によって法的承認を得たが、女の子については得ることができなかった(野上 1985)。農園部における教育は農園主の責任であるとされ、農園部における教育状況の改善については、1947年の初等教育から大学までの無償教育の実施、1961年の学校制度の全国統一、1972・75年の土地改革による大規模農園の国有化、1998年にはすべての子どもに対する義務教育が施行され⁹¹、学校運営が政府の責任となるまでの年月を必要とした。

3.4.2 在籍状況

農園部における学校はType 3の8学年までが主であり、地域によっては初等教育までしかない学校もある。義務教育は前期中等教育(9学年)までであるが、農園部の学校が初等教育までを対象としていた場合には、前期中等教育からは農園部外にある学校に通学することとなる。農園部の学校は全体の約8%に当たる789校となり、初等中等教育全学生数の約5%に当たる187,243名が通学している⁽⁹²⁾。対象とした県(表3-3)では4,320校(表3-5)あり、農園部の学校は733校、農園部外の学校は3,587校となり、農園部の学校は約17%となる。農園部に通学している学生数も176,195人となり、9県における学生数の10.6%が農園部の学校に通学している。1校当たりの学生数は農園部以外の学校に比べ農園部の学校の方が規模は小さく、単純に平均化すると1校当たり142名の学生となり、農園部以外における580人(1校当たり)と比較すると少ない。

90 1939年の教育法令(Education Ordinance No.39)は子どもたちの教育状況の改善とともに11年間の義務教育を導入した。当初の規則にはそれに従わない者に対しては、親や雇用者だけではなく、子どもたち本人にも罰則規定があった。1945年に教育法(Education Act)が制定され、1947年の教育法令(Education Ordinance)により無償教育がさらに社会的影響を与えた。

91 植民地時代に移住してきた人びとの国籍や市民権が認められたこと、また、国際機関や各国の支援を受け、すべての子どもに対する義務教育が施行した。

92 2011年のデータ(MoE 2012)によれば、スリランカの後期中等教育までの全学生数は3,973,847名(男子1,968,832名、女子2,005,015名)。農園部の学校に通学する学生数は187,243名で、男子が93,405名、女子が93,838名である。

図 3-3 は、紅茶栽培が主になされている 9 県における 5-17 歳のこどもの在籍状況である。こどもの活動調査時である 2008 年から 2009 年において、6,119 名のこどもの内、5,147 名 (84.1%) のこどもたちが学校に在籍しており、633 名 (10.3%) が在籍しておらず、339 名 (5.5%) のこどもが不明であった⁹³。居住地域ごとに在籍状況をみると農園部以外の居住地域は 10% 前後の不在籍率であるが、農園部では 15.5% のこどもたちが在籍しておらず⁹⁴、農園部のこどもたちの在籍状況が他の居住地域と比較してよくないということがわかった。

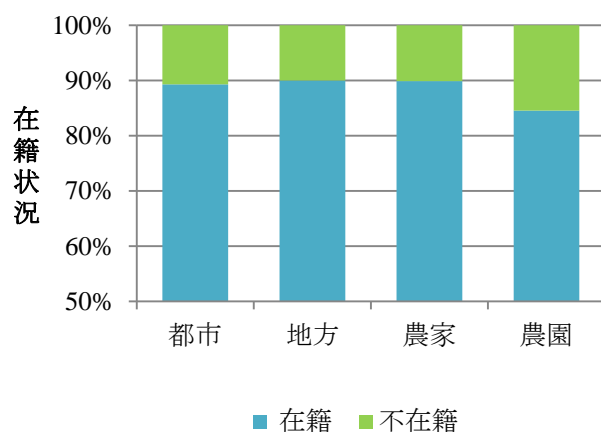


図 3-3 こどもの在籍状況

スリランカ政府と UNDP が発行した『Millennium Development Goals Country Report 2014』(以下、『MDG 2014』)によると、2006-7 年における初等教育入学率は 98% 弱であり、最も入学率が低い農園部においても 95% 弱のこどもたちが入学をしている (IPSS and UNDP 2010 and 2015)。修学した割合はスリランカ全体では 95.8% 前後となり、農園部においても 86.9% となる。また、義務教育である前期中等教育 (9 学年) を修了し、後期中等教育課程まで進学したこどもたちは、スリランカ全体では 70.7% であるが、農園部では 43.9% と進学率が下がる (DCS 2010)。『こどもの活動調査』で対象とした義務教育年齢 (5-14 歳) のこどもは 4,562 名⁹⁵で、対象地域全体では 96.8% が在籍しているが、農園部では若干低くなり 93.2% である。15-17 歳のこどもたちは 1,557 人⁹⁶で、後期中等教育課程まで進学したこどもは 1,027 人となり、66.0% となる。しかし、調査時に、学校に在籍しているこどもは対象県全体では 65.7% であるが、農園部では 56.0% と低くなっている。さらに、農園部では 15-17 歳のこどもは 216 名であるが、調査時に 9 学年以下の教育

93 339 名のこどもの在籍状況が不明であった。以下では回答を得ている 5,780 名を対象としている。

94 不在籍者: 都市は 48 名 (10.7%)、地方は 317 名 (10.0%)、農家は 124 名 (10.1%)、農園部は 144 名 (15.5%)。

95 回答を得られているこどもは 4,346 人。216 名は回答無。

96 回答を得られているこどもは 1,434 人。143 名は回答無。

歴のこどもは 119 名であり、一方、10 学年以上の教育歴をもつこどもは 94 名であった⁹⁷。調査時に、10-11 学年に在籍しているこどもは 59 名となり、後期中等教育課程に在籍しているこどもは 27.3%となる。『こどもの活動調査』と『MDG 2014』との調査期間差は 1 年ではあったが、本 2 次分析で対象とした地域は農園が主にある県のため、結果に差がでたと推察する。

3.4.3 留年・中退経験

スリランカでは初等教育に入学したこどもたちの多くが前期中等教育(6-9 学年)に進学しているとされるが、入学した後に様々な理由により学校を留年または中退していることが指摘されている。UNICEF(2014)は南アジア 4 개국間(インド、バングラデッシュ、パキスタン、スリランカ)の入学率、就学率、修学状況などについて国際比較し、スリランカは他の 3 개국と比較して初等教育に入学・就学するという最初の段階はクリアされていると報告する一方で、次の段階に進まないこどもたちに注目し、こどもたちの中退や留年についての懸念を示している。報告書によればスリランカでは留年割合が年間 1%とであり、他の 3 개국と比較しても低いと報告されているが、その年における留年割合が 1%であっても、5 学年を経たのちには 5%前後のこどもたちが留年経験をもつこととなる。2007 年において中学校(=前期中等教育)に適正年齢で進学できないこどもたちは全体の 4.2%となり、入学しないこどもたちも含めると 100 人に 6 人のこどもたちが日本ではいところの中学校に在籍していない、または遅れて入学したこととなる(UNDP 2015)。スリランカでは中学校の教育期間は 4 学年であるから、100 人中 96 人のこどもが進学したとしても、就学年数最後まで適正年齢で在籍しているこどもはおおよそ 92%前後となる計算である。

図 3-4 は『こどもの活動調査』で対象とした地域の 5-17 歳までのこどもの留年・中退経験である。留年・中退経験をしているこどもはどの居住地域においても、UNICEF(2014)の報告よりも高い。こどもの活動調査時において、6,119 名のこどもの内、5,056 名(82.6%)のこどもたちが留年・中退の経験をしておらず、866 名(14.2%)が留年・中退の経験をしており、197 名(3.2%)のこどもについて回答無であった。居住地域ごとに留年・中退の経験のあるこどもは、都市では 11.1%、地方は 12.6%、農家では 10.2%のこどもたちが留年を経験しているが、農園部では 4 分の 1 以上である 28.7%のこどもたちが何らかの理由で留年を経験している⁹⁸。民族的視点から教育達成を考察してみると、都市・地方・農家における民族構成はシンハラ人が多いが、農園部では労働者の 85%がタミル系の人びとであるため、タミル系のこどもたちの教育状況が他の民族と

97 3 名は不明。

98 都市では 51 名(11.1%)、地方では 407 名(12.6%)、農家では 129 名(10.2%)、農園では 279 名(28.7%)が留年または中退の経験をしている。

比較して良い状況にないとしばしば指摘されるのはこのためである。

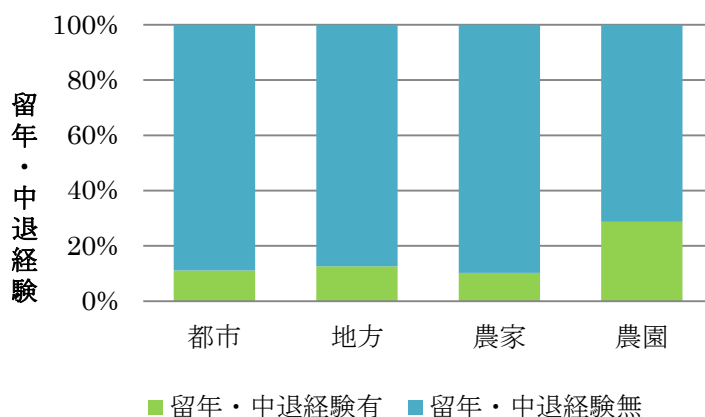


図 3-4 こどもの留年・中退経験

居住地ごとに民族間における在籍状況を考察してみると、都市と地方、農家ではシンハラ人と比較して、他の民族のこどもが不在籍傾向にあり、統計的にも有意であるが、農園部においてはタミル系のこどもたちが不在籍率は高いものの、統計的には有意ではなかった。また、留年・中退経験においては都市と地方では他の民族のこどもの方が留年・中退経験の割合が高い傾向にあり、統計的にも有意であるが、農園部においてはタミル系のこどもたちが留年・中退経験率は高いものの、統計的には有意ではなかったという結果だった。このことからいえることは、農園部においてはかならずしも教育達成状況において民族間格差があるとは言えないことであつた。そこで、農園部に居住するこどもたちの教育環境が他の居住地と比較してどのように異なるのかについて比較考察してみる⁹⁹。

3.4.4 教育環境

教育は家庭での教育、所属するコミュニティでの教育、職場での教育、社会における教育など、さまざまな場所や場面で使われる言葉である。教え学ぶことが日々の生活の中で行われるのが当たり前の時代には、専門的知識を備えた賢人から学べる人びとはごくわずかであり、特権であつたことは多くの国においても共通しているであろう。

学校という学び舎において行われた始期が紀元前 4 世紀ともいわれている歴史があるスリランカでは、現代の先進国に劣らず、教育に対する意識は高かつたものと推察することができ、そのことは初等教育における入学率の高さや就学率の高さからも明らかである。オランダに代わり

⁹⁹ 農園部では 10%水準で有意ではなく、他の居住地では 1%水準で有意であつた。

セイロンを治めた大英帝国統治初期には、セイロンは東印度会社の管轄下にあった。東印度会社はインドを拠点に世界中と貿易をおこない利益を上げることを目的としており、セイロンの統治にあたっては税収のみに関心があり、教育はインドと同様であったといわれている(佐藤 1969)。

セイロンの行政を担っている大英帝国において、すべてのひとへの一般教育の重要性が認識されるようになってくるのは19世紀初頭であったことは前述のとおりである。その背景には大英帝国内における人びとの間で教育の重要性が経済発展や社会発展に重要であるという認識が生まれたからである。このような宗主国における動きは当時のセイロンに影響を与えたことは多くの文献が報告している(佐藤 1969、Little 1999)。1831年に発足したコールブルック委員会が教育制度に関する改善案を提出し、現地行政府で働く人びとを育成するために、英語教育や英語による教育をするための学校が、セイロン政府によっても創設された(佐藤 1969、野上 1985、クマーラ2005)。一方、農園においては労働力維持のために、労働者の健康管理には注意を払ったものの(鈴木 2015)、農園主にとって労働者の教育は労働供給を脅かすものであり、必要ないものとされていた(De Silva 1981、Little 1999 and 2007)。1840年代から1900年までの農園での教育は主にキリスト教集団による教育か、こどもたちを心配するカンガーニによって始められた(Little 1999)。コールブルックが来島した時代にはセイロンには教団立校が236校、政府立校が97校、私立校が640校であった(佐藤 1969)が、1979年には小・中・高等学校あわせて、9,626校となり(表3-6)、2011年には9,731校が開校されている。農園における教育に政府が目向け始めるのは20世紀初頭になってからであった。

表 3-6 スリランカにおける学校数(1979 年当時)

(小・中・高)	学校数
国立学校	9,052
私立学校 (非国立学校)	39
農園学校 (非国立学校)	246
寺院学校	289

出典:野上(1985)「スリランカの教育法制と教育改革」『法律論叢』より

このようにスリランカにおける教育への意識の高まりは 19 世紀から強くなり、経済発展が進み、グローバルな社会になりつつある現在においては、なお教育が 1 つの社会経済的地位を築き上

げる重要な要素の1つとなっている。

表3-7と表3-8は『こどもの活動調査』から抽出した各居住地域におけるこどもの住居から学校までの通学距離と通学手段である。9 県全体としては34.1%のこどもたちが1km未満の通学距離であり、36.2%のこどもたちが住居から学校まで1km以上3km未満の通学距離範囲内であった。また、3km以上の距離を通学しているこどもたちは29.7%となる。居住地域ごとに通学距離をみてみると、都市や農園では3km未満の通学距離範囲内であるこどもの割合が、都市では85%、農園では78.7%であるのに対し、地方在住のこどもと農家のこどもでは68.3%と64.1%となり、地方在住と農家のこどもの方が遠距離の学校に通学していることがわかった。都市は人口密度が高く、地方にくらべて学校数が多い。また広大な農園では交通手段に限りがあり、農園外の学校に通学することは費用も掛かり困難である。多くの農園に学校が設立された経緯もあり、農園部に居住するこどもたちの多くは農園内にある学校に通学できることが1つの理由と考えることができる。

表3-7 各居住地域における通学距離

居住地域	1km 未満	1-3km 未満	3km 以上
都市	56.1%	28.9%	15.0%
地方	31.1%	37.2%	31.7%
農家	27.9%	36.2%	35.9%
農園	42.3%	36.4%	21.3%

出典:『こどもの活動調査 2008/09』より

表3-8は居住地域における住居から学校までの通学距離と通学の手段である。1km未満の通学距離の場合、都市以外では90%以上のこどもたちが徒歩はバイクで通学している¹⁰⁰。表3-7から1km以上離れた学校に通学しているこどもの割合は都市以外が高いことがわかるが、長距離であっても、3km未満である場合には徒歩で通学しているこどもたちが多い。特に農園部では87.1%のこどもたちが1km以上3kmの距離であっても徒歩で通学しており、また3kmを超えた場合でも26.2%のこどもたちが徒歩通学している。

100 調査地域では農家ではバイクを所有している世帯は多かったが、農園では限られた世帯のみが所有していた。

表 3-8 居住地域における通学距離と通学手段

居住地域	交通手段	通学距離			合計
		1km 未満	1km-3km 未満	3km 以上	
都市	徒歩またはバイク	82.2%	47.4%	10.3%	61.7%
	車	8.4%	27.6%	22.4%	16.0%
	バスまたはスクールバス	9.3%	25.0%	67.2%	22.3%
地方	徒歩またはバイク	92.5%	56.3%	8.6%	52.5%
	車	3.0%	9.0%	8.6%	7.0%
	バスまたはスクールバス	4.5%	34.7%	82.7%	40.5%
農家	徒歩またはバイク	95.8%	50.3%	8.3%	47.9%
	車	1.3%	11.3%	8.8%	7.6%
	バスまたはスクールバス	2.9%	38.4%	82.8%	44.5%
農園	徒歩またはバイク	97.3%	87.1%	26.2%	78.4%
	車		.7%	4.8%	1.3%
	バスまたはスクールバス	2.7%	12.2%	69.0%	20.3%
スリランカ全体	徒歩またはバイク	92.6%	59.2%	10.6%	56.2%
	車	2.9%	9.3%	8.8%	7.0%
	バスまたはスクールバス	4.5%	31.4%	80.7%	36.8%

2 次分析で用いたデータは調査時に在籍している子どもへの質問であり、不在籍の子どもたちのデータがないため、2 次分析からは在籍と通学環境との関係をデータ分析することができない。しかし、都市において近距離でも徒歩以外の交通手段を利用する理由として考えることができるのは、都市における富裕層が自動車を所有していることや公共交通機関が他地域に比べて発展していること、その発展による交通渋滞による事故率の高さや、子どもたちが安全に道を渡ることができる交通システムの社会基盤がまだ整っていないことが理由として挙げることができる。一方、都市以外では長距離の場合には、バスやスクールバスなどの公共交通機関を利用している場合が多い。農園部においては徒歩の割合が高く、その理由として、公共交通機関はあるものの時間やルートなど限られていることや財政的困難から毎日の公共料金を支出するのが困難で

あることがあげられる (UNICEF 2014、現地調査から)。広大な農園が多い高地では、農園の子どもたちが通う学校は農園内にあり、農園部の居住地区に住んでいる子どもたちが通学しているが、農園における学校は初等教育までしかない場合もあり、中等教育以上に進学したい場合には、農園によっては自宅から遠方の学校に通学する必要がでてくる。しかしながら、通学するためには日々の交通費など、教育に関する間接経費が多くかかり、所得が低い世帯や教育に対する親や家族の考えにより進学や就学を断念せざるを得ない場合もある (UNICEF 2014、現地調査から)。また、学校に通学させるインセンティブとして学校の質がしばしば指摘されるが、十分な設備や教員の知識・技術が整わず、子どもたちが必要な知識や経験を身につけられない場合には、親や家族の考えによっては学校に通えない子どもたちもでてくる。

3.5 子どもを取り巻く環境と教育

スリランカは人間開発において南アジアのモデル国として所得のわりに人間開発指数が高いと注目される一方で、地域間格差の問題などを抱えている。近年、経済成長を続けつつも、国民の収入格差や地域格差は拡大しており (MFP 2011)、特に貧困率が高い「農園部」においては子どもを取り巻く環境が子どもたちの発達における懸念要素となっていると指摘されている (Oxfam 2002、Willinges 2004、UNICEF 2013)。2000年、南アジアは東アジア、東南アジア、太平洋地域と比較して人間開発指数が低かったが、2013年には太平洋地域とほぼ同レベルとなった (UNDP 2015)。センは、人間的発展はその国が経済的に豊かでも手になんかできるという。人間的発展はその国が豊かになって初めて手になんかできるのではなく、豊かになるはるか以前に始まっており、経済発展は比較的初期において教育の普及を徹底するなど、さまざまなエンタイトルメントを拡大させるための政策によって、多くの人びとが経済活動と社会変革に参加することを可能にしたと述べている (Sen 1999b)。

3.5.1 子どもを取り巻く環境¹⁰¹

スリランカは医療や教育といった社会政策を重視してきており、南アジア主要4か国内で比較すると、バングラデッシュ、インド、パキスタンの識字率が55%から63%であるのに対し、スリランカの識字率は91%である (UNICEF 2014)¹⁰²。また、初等教育および前期中等教育における在籍率においても90%を超える学歴期の子どもが在籍しており、経済レベルと比較して高い教育指標

101 子どものいる世帯を対象。

102 UNICEF 2014によれば、2007年-2011年の各国識字率はバングラデッシュ57%、インド64%、パキスタン55%。

を達成しているが、地域間格差や教育の質における課題が指摘されている (JICA 2012、UNICEF 2014)。スリランカでは、「都市・地方・農家」と比較して「農園部」の貧困率が高く、また、農園部では化学肥料や除草剤・殺虫剤などが茶葉育成のために大量に使用されており、農園において働いている労働者だけでなく、農園部に居住することもたちの健康状態にも影響を与えているとされている (Oxfam2002、Willinges 2004、Wal 2008)。広大な農園は商店・医療施設・学校もある自己完結型の 1 つのコミュニティで、農園において働く人びとの多くは農園内のライン・ハウスという長屋に居住している。農園内の居住地区は、水道やガスの設備が「都市」に比べて普及しておらず、安全な水の確保が困難であり、かつ衛生上の問題があるような生活環境(トイレや台所を共有)で生活しており、労働者やこどものおかれている生活環境は他の居住地域と比較して良いとはいえないといわれている。学校のレベルも初等教育・前期中等教育である義務教育レベルの学校が主である (MoE、2013)。1998 年に義務教育がすべてのこどもたちを対象に施行され¹⁰³、学校の運営も農園主の責任から国の責任における教育制度となった。この改革は児童労働の禁止とともに、多くのこどもたちに教育の機会を与えることになった。しかしながら、農園部における識字率やこどもの前期中等教育の修了率は全国レベルに比べると低く、中退率も高いことが指摘されている (UNICEF 2014)。スリランカは ADB や WB の支援を受け 1977 年に市場経済に移行し、世界の各国の支援を受け、社会基盤や社会政策を充実させている。2009 年には、民族紛争が終結、人びとの往来は自由となるとともに、IT (Information Technology) の発達によるコミュニティ以外との交流は閉鎖された社会から外の世界へ踏みでる一步となった。1970 以降、生産性の向上と輸出拡大のため小規模経営による茶葉栽培拡大政策により¹⁰⁴、紅茶産業においても多様な経営形態に対応した構造となってきた。このような社会経済の発展、コミュニティの変化は、紅茶栽培に従事してきた人びとの労働形態や意識にも影響を与えていると考えられる。本研究は、農園の主要生産物である紅茶産業に従事している労働者や農家のこどもたちに焦点をあて、同じ自然環境である地域で、同じ作物を栽培しながらも、経営形態の違いによって、こどもを取り巻く環境がどのように異なるのか、こどもの教育達成に違いがあるのかについて比較分析するとともに、経営形態間の教育格差の要因の背景について考察する。

学校に通学していないこどもは、しばしば構造的な不平等や格差に深く根付いていることが指摘

103 1997 年に National Education Commission による教育改革が行われ、義務教育規則と現行制度が国会で承認され、その後実施された。

104 1980 年代以降、4ha 以下の面積による小規模経営の茶園に対する支援が充実し、これらの茶園の面積と生産が急速に増加している。特に植替・新植における改良品種の導入が単位収量の増加が大きく寄与している (国際農林業協会 2004 p 117)。

されている(UNICEF 2013)。教育学、社会学、心理学などのさまざまな研究分野で、家庭環境がこどもの教育成果に与える影響について分析されてきており、そのなかでも親の所得や豊かさが教育成果に影響を与える要因の1つであるとされている(阿部 2008、小原・大竹 2009)。親または世帯の豊かさがこどもの教育機会や教育成果に影響することは、さまざまな格差の連鎖を考えるうえでも重要であり、本研究においても重要な要素の1つである。下記の図3-5は『こどもの活動調査』における「農園部」がある9県の各居住地域の世帯所得であり、対象とした世帯はこどものいる3,682世帯である。

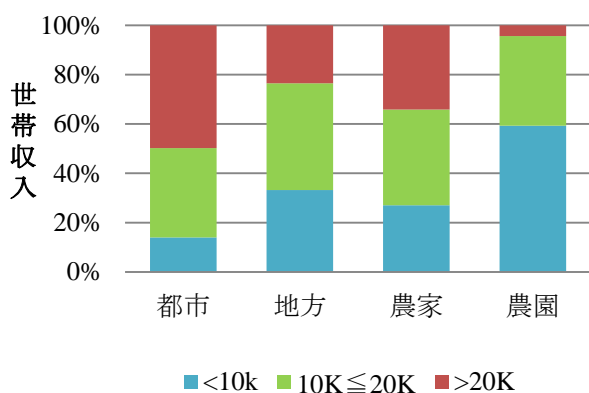


図3-5 居住地域ごとの世帯の収入

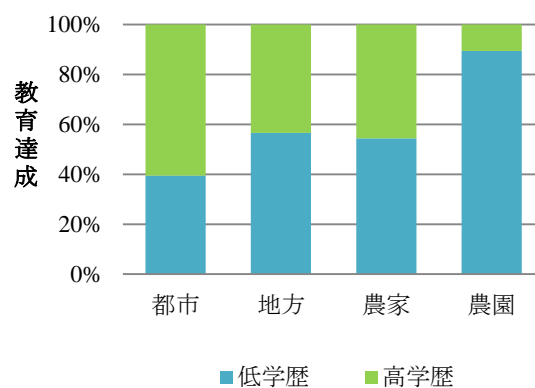


図3-6 居住地域ごとの世帯主の教育歴

対象世帯のひと月の平均収入は約16,000ルピーである¹⁰⁵。しかし、各居住地域における世帯収入には異なった傾向が見られ、「都市」では高所得を超える世帯の割合は50%と高いが、「地方」では25%、「農家」で33%となり、中所得または低所得の世帯が6-7割を占める。一方、「農園」では高所得である世帯は4%に過ぎず、86%の世帯が10K(低所得)以下(10K未満は59%)で過ごし、内12%が月当たり5Kルピーで生活しており、他の居住地域に比べ収入が低いことがわかる。

「都市」では他の居住地域よりも比較的高収入を得られる機会が多く、一方で「地方・農家・農園」では家畜や家庭菜園から得られた現物取引もあるため、収入だけで貧富の差を論じることができない。しかし、世帯収入だけをみるかぎり、居住地域によって世帯収入の差があり、統計的にも有意であった。世帯収入以外にも親の学歴や階層など社会的背景によってこどもの学歴習得は影響を受けるとされている(石田 1999)。『こどもの活動調査』では、親・世帯主の職業に

105 1,000ルピー=1Kルピー。ここでは、20K以上を高所得、10K ≤ 20Kを中所得、<10Kを低所得とする。

については明らかでないため、階層化することは困難だが、『こどもの活動調査』には対象となった人びとの教育年数と世帯における関係が含まれており、居住地域によって世帯主の教育歴がどのような違いがあるのか見ていきたい。

図 3-6 は各居住地域における世帯主の学歴である。世帯におけるルールは主に世帯主によって決められるため、こどもの育成についても世帯主の意向が大きく影響されることから、本研究では世帯主の教育歴とこどもの教育達成との関係も考察することとした。スリランカでは就学前教育の 5 歳から 16 歳まで学校に行くことが奨励されているが 2008/9 年時点¹⁰⁷では、6 歳¹⁰⁸から 14 歳までの 9 年間の義務教育としているため、上述したとおり 9 年間の義務教育以下を低学歴、10 年以上の教育年数を学んでいる場合には高学歴と定義した。「都市」では高学歴の教育を受けている人びとの比率が 60.5%になるが、他の 3 居住地域では低学歴以下の教育しか受けていない人びとの比率が高い。特に「農園」において、低学歴以下の教育しか受けられていない世帯主の比率は 89.4%と高くなっており、「地方」の 56.6%や「農家」の 54.4%に比べても高く、世帯主の学歴は居住地域間で違いがあることがわかった¹⁰⁹。

前述の通り、2009 年に民族紛争が終結するまでは、人びとの往来は限られており、ID を所持していない場合には検問を通れないこともあった(英国国境局 2008)。また、スリランカの学校の歴史は長いものの、「農園」における学校教育の責任が「農園主」から国となったのは 1997 年になってからであるとともに、「農園部」にある学校は義務教育までが主であり、後期中等教育機関に進む場合には、「農園」外部まで通学しなければならなかった(Chandrabose 2011)。近年、公共による交通機関が発達するようになったが、親世代が学校に通う当時は、民族紛争による内戦の影響や道路などの社会基盤の未整備、また交通機関の未発達は「農園」における親世代の教育機会へのアクセスに制限を加える要因の 1 つであったものと推察できる。

『こどもの活動調査』から、「都市」においては世帯所得と世帯主学歴は高く、「農園部」では世帯主の学歴も低く、世帯所得も低いことがわかった。人的資本論よれば学歴が高いとより高収入を得られるといわれており、『こどもの活動調査』においても、世帯主学歴と世帯所得の関係を 2 次分析したところ同様の傾向があることがわかった。

下記の表 3-9 は人間開発機構によって行われた教育歴と職業との関係を表した調査結果である(Chandrabose, A.S and Sivapragasam 2011)。

107 2018 年時点においても 6-14 歳までの 9 年間の義務教育。

108 5 歳から入学しているこどももいる。

109 カイ二乗検定では 1%水準で有意。

表 3-9 職業と教育歴

	不識字者・ 教育歴無	初等教育	中等教育 前期	O Level Test	A Level Test	合 計
農園労働者	71	315	295	95		776
	(9%) (83%)	(41%) (89%)	(38%) (72%)	(12%) (34%)		(100%) —
日払い労働者 (都市・地方)		28	10	27		65
		(43%) (8%)	(15%) (2%)	(42%) (19%)		(100%) —
月給(営業・ アシスタント)			38	32	35	105
			(36%) (9%)	(30%) (65%)	(33%) (65%)	(100%) —
中東への出稼 ぎ				18	17	35
				(51%) (6%)	(49%) (31%)	(100%) —
家 政 婦			19	38		57
			(33%) (5%)	(67%) (14%)		(100%) —
農 業	15			20		35
	(43%) (17%)			(57%) (7%)		(100%) —
失 業		12	47	51	2	112
		(11%) (3%)	(42%) (11%)	4(6%) (18%)	(2%) (4%)	(100%) —
	(100%)	(100%)	(100%)	(100%)	(100%)	(100%)

出典: Chandrabose, A.S and Sivapragasam 2011 (DHO 2011 p101)

本調査は 1,185 人が対象となっており、農園での労働や農業、日雇の労働に従事している人びとは教育歴が低い場合が多く、営業などのサラリーマンの仕事に就いている人びとは中等教育前期を修了している。また、中東などへの出稼ぎには O Level Test 以上であることがわかる。この表 3-9 から、教育歴がより高い方が、比較的収入の高い職に就いていることがわかる。

『こどもの活動調査』データ分析からはどの居住地域においても、世帯主の学歴が高い方が低い場合よりも収入が高い傾向にあるが、居住地域によってその割合は異なる。世帯主が高学歴の場合、「都市」の高所得層の割合は 65% であり、「地方」では 38%、「農家」では 51% となる一方

で、低学歴の場合には高所得の世帯は「都市」でも 29%¹¹⁰となり、世帯主が高学歴である場合に比べ低い。また、世帯主が高学歴であれば低所得の世帯は、「都市」では 5%、「地方」では 19%、「農家」では 14%であるのに対し、低学歴の場合には「都市」では 24%、「地方」では 41%、「農家」では 39%と高くなる。「農園」でも同様の傾向を示し、高学歴の場合には高所得を得やすいが、他の地域と比較すると高学歴でも低所得傾向にあり、30K 以上の所得を得ている世帯はおらず、20K 以上の所得を得ている世帯も 16%程度であり、10K 未満の世帯は 32%となる。このように、どの地域においても、学歴と世帯所得との間には、何らかの関連性をみることができた。一般的に所得は日々の生活にも結びついていると考えることができ、所得が高ければ、より良い地域や住居に住み、より便利で快適な生活をするすることができる。本項では住環境や生活環境が居住地域によってどのように違うのかについて見ていきたい。

居住地域ごとに住環境がどのように異なるのかを示したものが図 3-7 であり、生活環境が居住地域間でどのように異なるのか示したものが図 3-8 である。住環境は上記で説明したとおり、『こどもの活動調査』に含まれている 3 つの変数を併せたものである。第 1 に住居の所有の有無（所有していない=0、所有している=1）、第 2 に住居のタイプ（長屋または住居併設=0、戸建またはタウンハウス=1）、第 3 に 1 人あたりの部屋数（1 人あたり 1 部屋無=0、1 部屋あり=1）とした¹¹¹。澁谷（1988）によれば、スリランカ人にとって、住居や土地を所有することは歴史的に重要ことであり、キャンディ王国時代には土地との関係が地位の上下を決定した。王は全土の所有者とされており、すべての臣民には王に対する賦役の義務が課され、これをラージャカリヤと呼んでいた。土地台帳には村ごとに耕地名とその保有者が登録されており、これに基づいて、王室、帰属、寺院といった徴税権者に対する土地保有者の義務が定められていた。ラージャカリヤは人ではなく土地に付随しているので、義務を果たせない者はその土地の保有権を喪失するとしている（澁谷 1988）。さらに、土地は人びとの権利や経済的側面だけではなく、身分やカーストとも結びつき、社会的規範としても重要な要素となっていた。

土地や住居を所有できることは 1 つのステータスであり、他からの干渉を受けずに住居を管理運営できる。また、定住できる場所を確保できることであり、「農園」にとって必要な労働力でなくなった時にその土地や住居を追い出される心配が小さくなる。また、住居を所有することにより土地から土地へと移動することへの制限となり¹¹²、こどもたちが通学しやすい

110 世帯主が低学歴の場合、20K を超える収入を得る世帯は地方で 15.2%、農家で 18.2%である。

111 リビング・キッチンなども 1 部屋として含まれている

112 制度的制限ではなく、住居を所有することにより、他人が所有する住居へ、たびたび転居するという気持ちに制限がかかるという意味で使用。

環境を整える。『こどもの活動調査』で対象とした地域の特徴として、居住地域の違いによって住居の所有者に違いがあることがわかった¹¹³。住居の所有者は多くの場合が居住者である。「都市と地方」では 82%前後の世帯が住居を所有しており、賃貸の比率は「都市」で 10.7%、「地方」で 4.5%と低い。一方、「農園」では住居を所有している世帯は 15.1%だけで、80.5%の世帯が雇用主から提供される住居に居住している¹¹⁴。「農家」についてはすべてが住居所有者としているため、ここでは記述しない。

住居を所有していることと同様に重要な住環境は居住する家の構造である。住居を所有していても居住している家が隣人や他の人たちから干渉されやすい構造であるならば、人びとは周囲の目を気にして生活しなければならず、また落ち着いて勉強することやこどもの将来について話し合うことが困難である。スリランカではアパートに居住することは一般的ではなく、多くの世帯が一戸建ての住居に居住しており、「農園」以外の地域では 90%以上の世帯が戸建に住居している。一方、「農園」ではライン・ハウス/ルーム(Line House/Room)と呼ばれる長屋のような居住に 72.9%の世帯が居住し、戸建に住居する世帯は 26.7%程度となっており、居住地域の違いによって住居タイプに違いがあることがわかった。「農園部」にある労働者向けの住居であるライン・ハウスの歴史はプランテーション経済形成初期にまで遡り、もともとはセイロンに住居を持たない季節労働者のために雇用主(農園主)によって建てられた。1880 年代までの珈琲プランテーションでは、労働力が必要だったのは収穫時期のみであり、それ以外の時期には多くのインド・タミル人は南インドに帰省していた。しかし、紅茶が生産されるようになると労働力が 1 年中必要となり、季節労働していた人びとは家族をとめない移住するようになった(Siri 1978)。このように、ライン・ハウスは労働者のために一時的に居住するために建てられたものであり、1 棟を壁でくぎり、多くの家が隣接して住んでいる建物である。一般的に 10 フィート×12 フィートの 6 畳程度の 1 間とベランダがあるのみであり、トイレは多くの場合において室内にはなく、台所もライン・ハウスの外にあることがある。ライン・ハウスは気候に対応する構造になっているため、天井が繋がっていたり、壁に風気孔があったりと声や光が漏れる状況で、プライベートが守られにくい住環境にある(現地調査)。

2013 年の現地調査においてもラインルームに住むことによって、隣人との相互扶助ができて非常に助かっているが、ライン・ハウスの構造からプライバシーがないため、他の人の目を気にして生活しなければならず自由がないという話をする住人もいた。実際、聞き取り調査やアンケート

113 対象とした世帯は第 1 子のいる世帯のみで、3,683 世帯が対象。カイ二乗検定:1%水準で有意。

114 4.6%はその他と回答。

は人びとの自宅を訪問して行ったが、ラインルームの隣人だけでなく、そのコミュニティの人びとがわれわれに会いに、訪問住居に自由に出入りした。このように人びとが互いに関心を持ち、相互に助け合い、生活している一方で、家族にとって重要なことを決めたり、話し合ったりすることに近隣の目を気にしなければならない、または話し合うための場所がないなどの課題がある。また、スリランカでは家族が1つの部屋と一緒に眠ることや親戚や友人が泊まることがよくある。場合によっては見知らぬ人であっても、知り合いの知り合いだから助けてあげたいという理由で1晩の宿と食事を提供する親切な人びともいる。このように家というプライベートな空間を共有することに馴れているが、ラインルームのような1部屋か2部屋しかない場合、家族4名から6名と一緒に暮らすとなると集中して勉強する場所の確保が重要な課題となる。『こどもの活動調査』からも、部屋数は居住地域によって違いがあり、統計的に有意である。「都市・地方・農家」では2部屋以下の住居は17-34%であり、特に「農家」では約3分の1に当たる世帯が5部屋以上のある住居を所有している。一方、「農園」では2部屋以下の住居に住む世帯は72%となり、4部屋以上の住居は9%しかおらず、多くの世帯が複数人で1部屋を共有していることがわかった。図3-7はこれら3つの変数から生成したものであり、所有する住居に住み、住居が戸建であり、1人当たりの部屋数が1部屋以上ある場合には「高」となり、どれか2つ満たした場合には「中」となり、どれか1つあてはまる場合には「中低」とし、どれも当てはまらない場合には「低」とした。

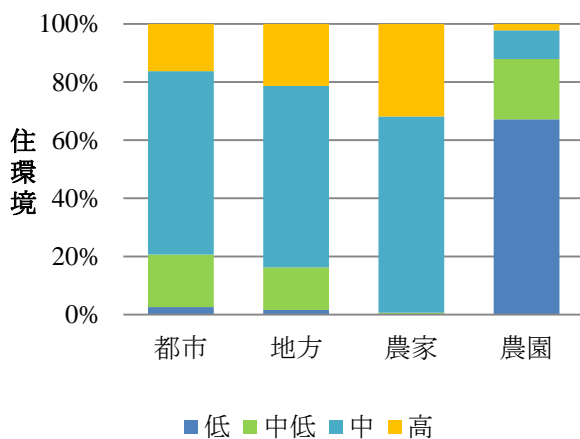


図3-7 居住地域ごとの住環境

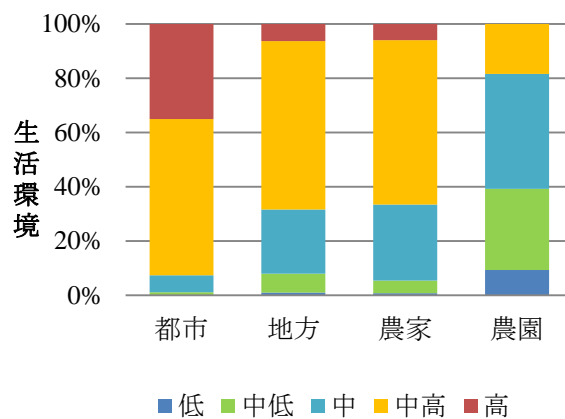


図3-8 居住地域ごとの生活環境

図3-7は居住地域と住環境の関係を示しており、統計的には有意であった。特に「農家」では戸建の住居を所有し、かつ1人当たりの部屋数が1部屋以上ある世帯は32%あった。次いで、「地方」では21.3%の世帯が、「都市」では16.2%の世帯が「高」レベルにあてはまった。しかし、

「農園」では所有する戸建の家に居住し、1人1部屋を所有している世帯は2.2%と低く、どれにもあてはまらない世帯が67.2%であった。

図3-8の生活環境は『こどもの活動調査』に含まれている4つの変数を併せたものである。第1の変数は飲料水の安全性(安全でない=0、安全である=1)、第2の変数はトイレ設備の所有の有無(共有または無=0、各世帯で所有=1)¹¹⁵、第3の変数は安全な照明源の有無(照明源なしまたは電気以外=0、電気=1)、第4の変数は料理する時のエネルギー源の安全性(ガス・電気以外=0、ガス・電気=1)である。スリランカでは大都会におけるマンションや農園における長屋形式のライン・ハウスを除き一般的には独立した住居である。大都会におけるマンションは日本とかわらず照明、トイレ、キッチンがあり、電気やガスがおもな原動力である。一方、農園の長屋では料理する場所やトイレが他の世帯と共同であったり、ときには住居の修繕がなされておらずスコールや大雨の際には屋根から水が漏れてくることもある(OXFAM 2002)¹¹⁶。また、都会での電気普及率が74%であるのに対し、農園では52%程度の普及率であり、農園部に居住する約半数の世帯が照明を得るために灯油に頼っているとされている(SOMO 2008)。

『こどもの活動調査』で、人びとが安全な飲料水にアクセスできているか否かについての定義は下記のとおりである。

安全な飲料水: •Protected well within Premises & Outside

•Tube well

•Tap within Premises & Outside

安全でない飲料水: •Unprotected well

•Stream Water Collected & distributed by pipe in

•River/Tank/Streams/Others

本定義に基づいた結果、「都市」に居住している場合には、98.9%の世帯が安全な水にアクセスでき、また、「地方」では80.4%が、「農家」では75.8%の世帯が安全な水にアクセスできていた。一方、「農園」では安全な水にアクセスできる世帯は38.7%である。「地方」や「農家」において5分の1、または4分の1の世帯が安全な水を飲むことができない状態にあり、「農園」では5分

115 『こどもの活動調査』では共有の場合は衛生的でない、各家に設置している場合は衛生的という区分である。

116 現地調査中、スコールに降られることがあり、ライン・ハウスで雨宿りをさせてもらうことがたびたびあった。屋根の修繕が適切になされておらず、雨漏りがしているラインルームもあった。住人は雨漏りで床が水浸しにならないようにバケツや食器をおき、雨水を貯めていた。

の3の世帯が安全な飲料水を得ることができない状況である¹¹⁷。ただ、『こどもの活動調査』で定義している安全な水へのアクセスについては科学的な検証がなされているわけではないという制限がある。

世界銀行(2007)は、安全な飲料水と衛生的なトイレ設備が人びとの健康状態と密接な関係にあるとの報告を2007年に行っており、その対策として飲料水を沸騰することと各世帯において独立したトイレの設置を推奨している。同様の報告はADBやOXFAM、SOMOなどによってもなされている。『こどもの活動調査』でも多くの報告書と同様に居住地域によって各世帯のトイレの所有状況が異なっており¹¹⁸、「都市・地方・農家」では、各世帯でトイレ設備を所有している割合が90%以上であるのに対して、「農園」では63%と低く、さらに「農園」では、公共施設トイレ利用世帯やトイレがない世帯は23.7%になる。一般的に、トイレ設備を世帯ごとに所有している場合にはより衛生的な状況をたもてるという考え方があてはまるが、「農園」では世帯に1つずつトイレがあったとしても、外に設置されている場合も多く、実際にはその居住地域の世帯数と同じ数のトイレを設置し、その居住地域の人びとと共有している状況も見受けられる。

農園では、居住地区が公道から離れている場所もあり、かならずしも電気のインフラ状況が整っているとは言えず、『こどもの活動調査』からも居住地域によって照明源の違いがあることがわかった¹¹⁹。「都市」では電気設備が整っており、ほとんどの世帯で電気が行き渡っており、98%の世帯が電気の照明を使用している。しかし、「地方・農家」では普及率は88%弱で、「農園」では70%となる。2008年時点では、調査対象であった「農園」における約30%の世帯が灯油等を使って照明を得ているうえ、一部の世帯では照明はなく、太陽光を照明がわりとしており、夜は公道などの電燈で光を得ている世帯も2%いる。このようなスリランカ全体における社会基盤の状況は照明だけでなく、料理する際のエネルギー源にも窺える。スリランカではまだ電気やガスによるキッチン設備が整っておらず、一般的に薪を使用して料理をしている。『こどもの活動調査』でも社会基盤が比較的整っている「都市」でもガスや電気を使用して料理をする世帯が35%であった。料理はキッチン内に火を焚くスペースがあり、そこに薪をうめてカレーや揚げ物をつくる。薪による火は、電気やガスよりも「熱や火」を止めることが容易ではなく、たびたび火傷の原因となる。

図3-8はこれら4つの変数を整合したものであり、安全な飲料水を得ることができ、世帯専用のトイレを所有し、照明や料理のエネルギー源が電気やガスの場合には「高」となり、どれか3つを満たした場合には「中高」となり、どれか2つを満たした場合には「中」となり、どれか1つあては

117 カイ二乗検定:1%水準で有意。

118 カイ二乗検定:1%水準で有意。

119 カイ二乗検定:1%水準で有意。

まる場合には「中低」とし、どれにも当てはまらない場合には「低」とした。「都市」では、「安全な飲料水を得ることができ、かつ世帯専用のトイレを所有し、照明や料理のエネルギー源が電気やガス」であるという世帯が 35.1%を占めた。しかし、「地方」や「農家」では 6%前後となる。特に「地方」や「農家」の生活環境に影響を与えている変数は電気・ガスの普及率であり、それらの社会基盤が 2008/9 年当時には整備されていなかったことがわかる。「農園」では「高」レベルに位置する世帯はなく、¹²⁰4 変数のうち 2 つ以上満たしている世帯は約 61%であり、どれか 1 つしか満たしていない世帯は約 30%となっている。生活環境は住環境と同様に住居を提供する「農園」の影響を受けるとともに、社会のインフラ整備からも影響を受けており、各居住地域において生活環境が異なることがわかった¹²¹。

このようにこどもの生活環境は「農園部」では他の居住地域と比較して良いとはいえないことがわかった。「農園部」に居住するこどもの世帯は経済的に恵まれず、また世帯の意思決定者である世帯主の教育歴も低く、住環境や生活環境もどちらかといえば「中」レベル以下の世帯が多かった。ここで疑問に思うことは、人びとは自分たちの生活についてどの程度満足しているのであろうかということと、同じ所得や学歴であった場合に満足度に違いがないのかというのである。下記の図 3-9 は世帯の生活水準に対する満足度を示したものである。

生活水準についての満足度は、「都市」では 89%の世帯主が満足と回答しており、「地方」では77%、「農園」では38%、「農家」では86%が満足していると回答している。「農園」では、現在の生活水準に満足していないと回答している世帯主の割合は 62%と高く、居住地域によって世帯主の満足度が異なる。

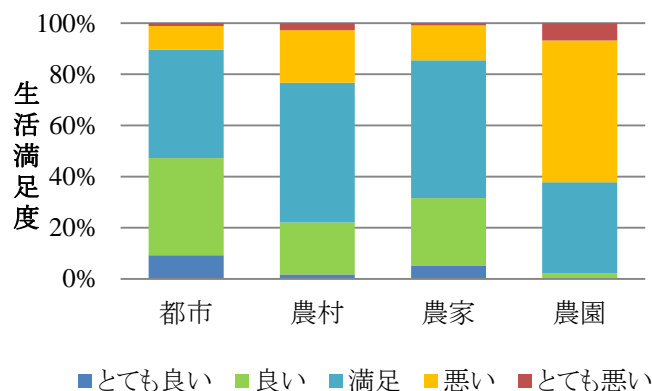


図 3-9 生活水準満足度

120 農園の生活環境レベル: 中高区分:18.4%、中区分:42.3%、中低区分:29.9%、低区分:9.3%。

121 カイ二乗検定:1%水準で有意。

また、どの居住地域においても高所得世帯の方が満足度は高い傾向にあり、所得が低ければ満足度が低い傾向にあった。しかしながら、注目すべき点として、同じ収入を得ていても、居住地域によって生活水準の満足度の割合に違いがあることであった。一般的には、都市の方が他の居住地域の世帯と同収入を得ていても「物価が高い」ために、地方と同水準の生活をするためには出費がかかり不満が高そうだが、本データでは農園居住世帯の方が不満足と回答した率が高かった。また、世帯主との関係では、世帯主の学歴が高いと生活水準に満足と回答する割合が高く、どの居住地域においても同じ傾向を示している。しかし、各居住地域における世帯主学歴による生活満足状況を考察すると、「農園」以外の居住地域では低学歴でも約 70%以上の世帯主が満足していると回答しているのに対し、「農園」では 34%程度の世帯主しか調査時の生活に満足していないことがわかった。「農園」の特徴として、同じ収入または同程度の学歴であっても、他の地域よりも不満足度が高いことである。このことから、個人の価値観や考えを 1 つの基準を持って論ずることはすべきでないと考えるが、世帯収入や学歴だけではない要素(生活環境、健康、社会的地位)などが生活水準不満足度に影響を与えている可能性があるかと推察する。

3.5.2 こどもを取り巻く環境と教育状況

(1) こどもを取り巻く環境と在籍状況

セン(1992)はひとの生活の質は「生活の良さ」として見ることができ、個人が価値あると考える生活を選ぶ選択の自由を行使する機会や自己の選択の幅を拡大する重要性について述べている。池本(2007)はセンのケイパビリティについて、人が与えられた社会経済的条件下で何ができるのかという様々な選択肢の組合せがケイパビリティであるという。本研究におけるこどもにとっての社会経済的条件とは、こどもを取り巻く環境であり、より具体的に言えば、世帯の状況や生活環境、家庭環境などであり、さらには親の意識や近所や雇用主との関係も含まれる。このように与えられた条件の下、人は価値あると思える生活を選ぶ選択の自由を行使する機会を増やすことが重要であるが、この選択の自由を行使する機会を拡大することとは、ひとが行うことのできる様々な機能の組合せを増やすことにほかならない。この機能の組合せを増やすためには、機能の数を増やし、機能を強化することが重要であり、それは長年培われたものによって増えていくのである。教育は将来必要となる機能を気づかせてくれるだけでなく、機能を増やし、強化する手伝もしてくれるものである。しかしながら、教育も与えられた条件(こどもを取り巻く環境)という制限によって格差が生じるものである。そこで、『こどもの活動調査』から「農園部」のある 9 県におけるこどもを取り巻く生活環境とこどもの教育達成について考察をしてみる。ここでは対象と

なるこどもは 6,119 人である。図 3-10 は世帯収入とこどもの在籍状況の関係が居住地域でどのような違いがあるのかを示したものであり、無回答をのぞいた 5,778 名を対象とした。図 3-11 は世帯主の学歴により在籍状況がどのように異なるのかについて居住地域ごとに示したもので、無回答を除いた 5,780 名が対象となる。なお、居住地域の特徴として、「都市・地方・農家」では、こどもの不在籍率は 10%なのに対して、「農園」では 15.5%と高くなる。

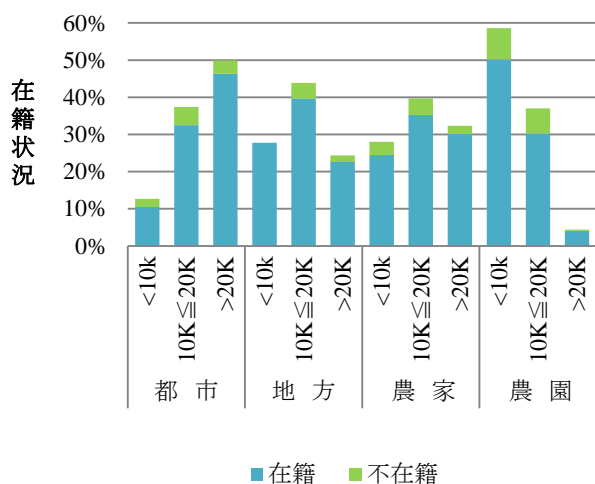


図 3-10 世帯収入と在籍状況

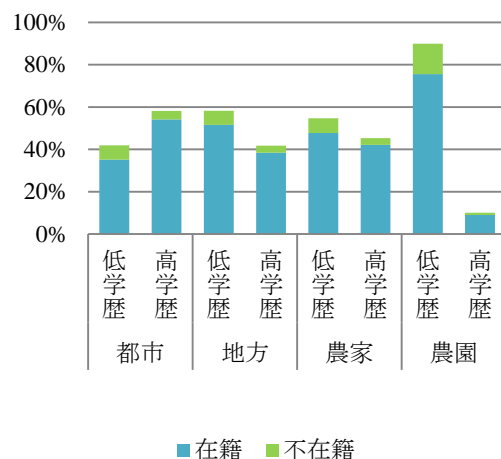


図 3-11 世帯主学歴と在籍状況

阿部(2008)は日本のこどもの貧困について、すべての親は一生懸命に「温かい家庭」を築こうとするであろうが、親の年収によって、子育ての環境が大きく異なっていることを述べ、こどものときの貧困が教育機会を限定的なものとし、教育が低いがために恵まれない職しか見つからず、その結果として低所得となり、低い生活水準につながるとしている。また、両親の学歴が高い場合にはこどもの学歴取得に有意な影響力を与えているといわれており(Coleman 1966、石田 1999)、これらの格差がこどもたちの教育達成に影響を与えていると考えられる。

こどもの在籍状況については、前節で記述したとおり、居住地域間において格差がみられた。そこで、世帯の所得が異なる場合と世帯主の学歴が異なる場合、在籍状況に違いがあるのかを居住地域間比較する。各居住地域における世帯収入と在籍状況の関係では、「地方」は統計的に有意であるものの、それ以外の居住地域では統計的には有意とはいえず、世帯所得によってこどもの在籍状況に違いがあるとはいえなかった¹²²。特に「農園」では最低所得層よりも中間所得

122 カイ二乗検定:「地方」では 1%水準で有意であったが、「都市」「地方」「農園」では 5%水準で有意ではない。

層の方が不在籍率は高くなっている¹²³。また、居住地域間で世帯所得と在籍状況を比較した場合には、居住地域間による違いがあったが、世帯所得によって居住地域と在籍状況を考察した場合には、低所得層と高所得層では居住地域の違いによって在籍状況に違いは見ることはできず¹²⁴、中間所得層においてのみ居住地域間に在籍状況の格差があった。

図 3-11 は世帯主学歴と子どもの在籍状況を居住地域ごとに示したものである。対象全体としては、世帯主が低学歴の場合には子どもの不在籍率は高く、世帯主学歴が高い場合には不在籍率は低くなる。居住地域ごとに考察すると「都市・地方・農家部」では統計的に有意であり、世帯主学歴の違いにより子どもの在籍状況に違いがあることがわかるが、「農園部」では統計的に有意でなく、世帯主の学歴によって子どもたちの在籍状況に違いがないことがわかった。

世帯主の学歴ごとに居住地域と在籍状況をみていくと、世帯主が低学歴の場合には子どもの在籍率が約 84-89%となり、且つ、在籍状況の居住地域間格差をみることができたが、世帯主が高学歴の場合には在籍率が 88-93%と高くなるが¹²⁵、また、居住地域間格差をみることができなかった。このことから、「農園部」では世帯主の学歴によって違いがなく、また、世帯主の学歴が高い場合には他の居住地域と比較して子どもたちの在籍状況は統計的に違いがないということがわかった。次に居住地域ごとの「住環境」および「生活環境」と在籍状況との関係をみていく。

図 3-12 は住環境と子どもの在籍状況を居住地域ごとに表したものである。住環境は上述と同じく 1)住居の所有、2)住居のタイプ、3)1人当たりの部屋数の3つの変数から生成した。1)住居の所有権を持つ場合には「1」とし、所有権がない場合には「0」とした。また、2)戸建の場合には「1」とし、長屋の場合には「0」とした。3)部屋については1人当たり1部屋以上ある場合には「1」とし、ない場合には「0」とした。これらを足し合わせ、すべて「1」の場合には合計「3」となり「高」とした、どれか2つ満たした場合には「2」となり「中」とし、どれか1つあてはまる場合には「中低」とし、どれにも当てはまらない場合には「低」とした。

123 最低所得層では 14%が不在籍、中間所得層が 18%の不在籍であった。

124 カイ二乗検定:5%水準で有意ではない。

125 不在籍率が「都市・地方・農家」が 7%前後に対して、「農園」では 12%となる。

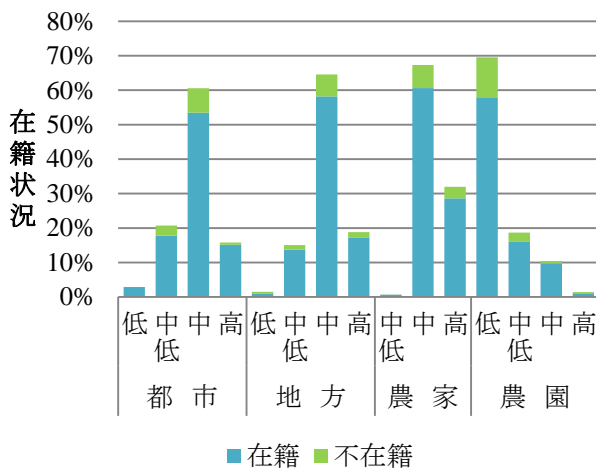


図 3-12 住環境と在籍状況

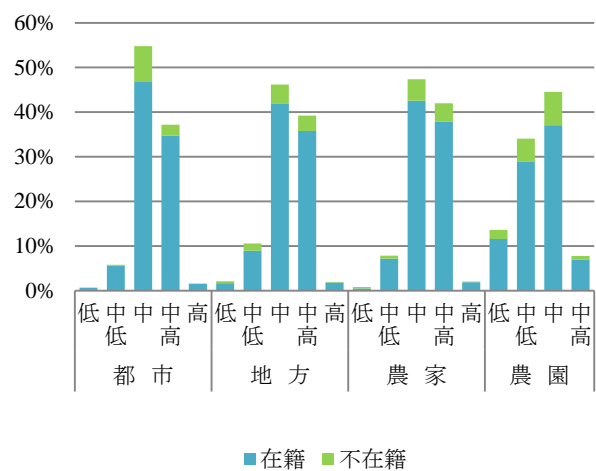


図 3-13 生活環境と在籍状況

上述の3つの変数を1つの変数である住環境として、子どもの在籍状況との関係を居住地域ごとにみた場合、統計的に有意であったのは「地方」に加え「農園」であり、「都市」と「農家」は有意ではなかった¹²⁶。「都市」と「農家」では住環境の状況によって子どもたちの在籍状況に差があるということとはできない。しかし、「地方」では住環境の状況が「中低」以上のレベルであれば、子どもの在籍状況は90%であるが、全くあてはまらない場合には在籍率が58%となる。「農園」もレベルによって在籍状況に違いがみられるが、「地方」とは異なった傾向を示す。最も不在籍率が高かったのが「高」レベルの世帯であり、不在籍率は23%となった¹²⁷。各居住地域において住環境構成3変数と在籍状況の関係を考察したところ、すべての変数において「地方」は統計的に有意となり、「住居の所有の有無」や「住居の構造」、「部屋数」によって子どもの在籍状況が異なることがわかった。一方、「都市・農家・農園」では統計的に有意ではなく、「住居の所有の有無」や「住居の構造」、「部屋数」によって子どもの在籍状況が異なることがわかった。このことから、農園部では1つの要素だけであれば、子どもの在籍状況に違いが生じていないが、いくつかの要素が集まった場合には違いが生じていることがわかった。

生活環境も前述と同じく4つの変数を併せたものであり、各変数が安全であるか、否かで「0」または「1」としている。第1の変数は飲料水の安全性で「安全でない」場合には「0」とし、「安全である」場合には「1」とした。第2の変数はトイレ設備の所有の有無であり、トイレを「共有またはトイレ設備がない」場合には「0」とし、各世帯で「所有」している場合には「1」とした。第3の変数は安全

126 統計的に有意であったのは「地方」に加え「農園」であり、「都市」と「農家」は10%水準で有意ではなかった。

127 農園では1人当たり1部屋以上の戸建を所有している世帯は少ないことが影響していると考えられる。

な照明源の有無で、「照明源なしまたは電気以外」の場合には「0」とし、「電気」による照明源の場合には「1」とした。第4の変数は料理する際のエネルギー源の安全性から、「ガスまたは電気以外」の場合には「0」とし、「ガス・電気」であれば「1」とした。これら4変数を足し合わせ、すべて「1」の場合には合計「4」となり「高」、どれ3つ満たした場合に「中高」として、どれか2つ満たした場合に「中」、どれか1つあてはまる場合には「中低」とし、どれも当てはまらない場合には「低」とした。これらの4つの変数を1つの変数である生活環境として、こどもの在籍との関係を居住地域ごとにみた場合、統計的に有意であったのは「地方」と「農家」であり、「農園」は有意でなかった¹²⁸。また、「都市」はサンプル数が少ないため統計的検証はできなかった。

各居住地域において生活環境変数を構成する4変数と在籍状況の関係を考察してみたところ、「都市」では、生活環境として総合的に見た場合、考察するにはサンプル数が少ないことがわかったが、各4要素と在籍状況との関係では、料理のエネルギー源の違いによる在籍状況の違いがあることがわかった¹²⁹。また、「地方」では、生活環境を構成する各々の要素¹³⁰の違いにより在籍状況の違いがみられ、かつ生活環境を総合的に見た場合にも、在籍状況に違いがあることが分かった。しかし、「農家」の場合には、生活環境を構成する各々の要素の違いにより在籍状況の違いがみられなかったが、生活環境を総合的に見た場合には、在籍状況に違いがあることがわかった。一方、「農園」では、「農家」と同様に生活環境を構成する各々の要素の違いにより在籍状況の違いがみられず、且つ、生活環境を総合的に見た場合にも在籍状況の違いをみることはできなかった。このように「地方」と「農家」では生活環境変数と在籍状況の関係は統計的には有意であったが、生活環境を構成する各要素と在籍状況の関係は異なっていることがわかる。また、「農園」では、生活環境の違いがこどもの在籍状況の格差と関係しているとはいえなかった。

下記の表3-10はこどもを取り巻く環境とこどもの在籍状況のカイ2乗検定の結果である。本分析では5%水準を基準とし、「×」としている変数は有意ではなく、「-」はサンプル数の関係から統計的検証はできなかったことを表している。下記の表からわかることは「地方」では各変数におけるレベルの違いにより在籍状況が良くなるが、その他の地域では変数によってこどもの在籍状況に相違がある場合と、ない場合がある。特に、「農園」では住環境以外の変数では在籍状況

128 「地方」では1%水準、「農家」では5%水準で有意あり、「農園」は10%水準で有意でない。

129 「都市」では「飲料水・トイレ・照明源」については安全性の有無によって、こどもの在籍状況に違いをみることはできなかった。

130 「地方」では、飲料水の安全性の有無によってこどもの在籍状況に違いをみることはできなかったが、それ以外の変数(トイレ・照明・料理)については安全な場合とそうでない場合によってこどもの在籍状況が異なっていた。

に違いはないという結果であった。

表 3-10 居住地における各変数と在籍状況

居住地	世帯収入	世帯主学歴	住環境	生活環境
都市	正	正	×	—
地方	正	正	正	正
農家	正	正	×	正
農園	×	×	∩	×

(2) こどもを取り巻く環境と留年状況

スリランカでは在籍しているこどものうち毎年約1%が留年または中退しているといわれている。本分析で対象とした留年または中退を経験しているこどもたちが退学した後に、再び学校にもどったのか、または学業が振るわなく留年したのか、その他の理由で進学または進級が遅れたのかは『こどもの活動調査』からは明らかではない。各居住地における世帯収入とこどもの留年・中退経験の関係を示したものが図の3-14であり、世帯主学歴とこどもの留年・中退経験の関係を示したものが図3-15となる。地域の特徴としては、前述したとおり「都市・地方・農家」では留年・中退経験をしているこどもの割合が10-12%なのに対して、「農園」では28.7%と高くなり、居住地間における留年・中退経験に格差があることである。

居住地ごとの世帯所得とこどもの留年との関係では、5,992人のこどもたちが対象である。すべての地域の傾向として、世帯収入が高くなると留年・中退経験があるこどもの割合が低くなる。しかしながら、「農家・農園」は統計的に有意ではなく、世帯収入の違いによってこどもの留年状況に変化はないが、「都市・地方」は有意であり、世帯収入の違いによってこどもの留年状況に違いがあることがわかった¹³¹。

131 「農家・農園」は10%水準で有意ではなく、「都市」は5%水準で有意であり、また「地方」は1%水準で有意である。
 (1) 都市では低所得層では20%のこどもが留年・中退経験をもつが、高所得層では8%となる。
 (2) 地方では低所得層では16%のこどもが留年・中退経験をもつが、それ以上の所得層になると11%前後の留年・中退経験率となる。
 (3) 「農園」では低所得・中間所得層のこどもの留年・中退経験率は他の居住地と比較して高く、両層ともに29%であり、高所得層になると15%になる。
 (4) 「農家」では低所得層・中間所得層では11%前後であるのに対して、高所得層では8%となる。

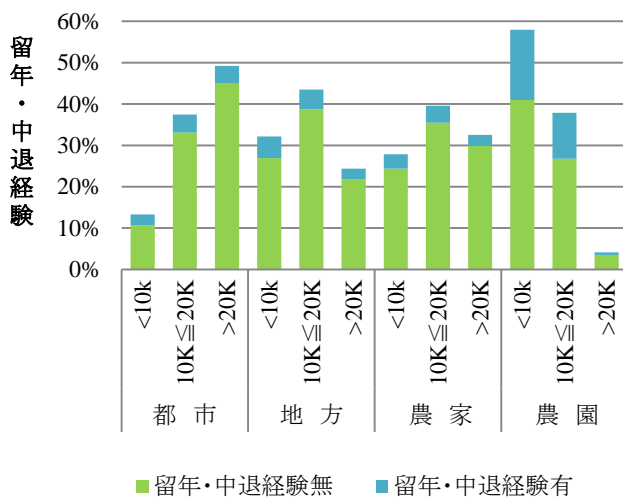


図 3-14 世帯収入と留年・中退経験

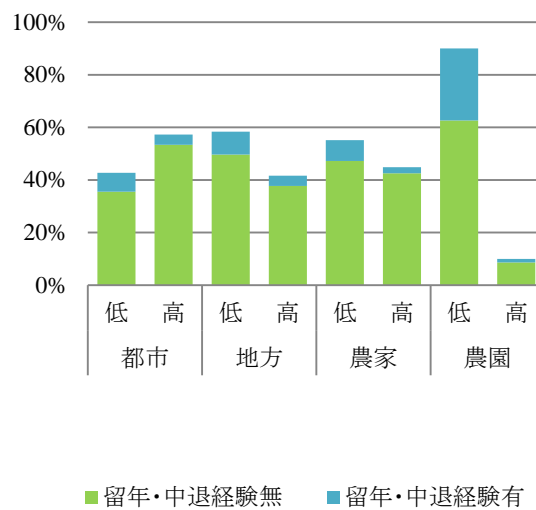


図 3-15 世帯主学歴と留年・中退経験

次に、所得レベルによって留年・中退経験の地域間格差があるかを考察すると、低所得・中間所得では統計的に有意であり、居住地域によって子どもたちの留年・中退経験の違いをみることができたが、高所得層では統計的に有意ではなく、居住地域によって子どもたちの留年・中退経験の違いをみることができなかった。所得による居住地域間のこどもの留年・中退経験の特徴は、低所得者層で「農園」では約 30%のこどもが留年・中退経験をしており、続いて「都市」在住のこどもたちが 20%、「地方」の 16%、「農家」の 13%となる。また中間所得層では「農園」のこどもたちが低所得層と同じく 30%のこどもが留年を経験しており、その他の居住地域のこどもたちは 11%前後の留年・中退経験となり、「農園」のこどもとその他の地域在住のこどもとの差が表れている。一方、高所得層になると、「農園」在住のこどもの方が 15%の留年・中退経験となっており、他の居住地域よりも高いものの、他の居住地域においても 10%前後のこどもたちが留年・中退経験をしており、統計的に差があるとはいえないことがわかった。ここから、農園では統計的には世帯収入によって、子どもたちの留年・中退の経験に大きな差はないが、高所得層の場合には、他の居住地域の留年・中退経験率とあまりかわらないレベルにあるということである。

図 3-15 では居住地域ごとの世帯主学歴とこどもの留年状況を示しており、「都市」では高学歴の世帯主が多いが、それ以外の居住地域では低学歴の世帯主が多い。本分析で対象となったこどもは 5,922 人である。各居住地域における世帯主学歴とこどもの留年・中退経験の関係はすべての地域において統計的に有意であり、どの地域においても世帯主の学歴によって子どもたちの留年・中退経験に違いがあることがわかった。各居住地域の特色として、世帯主の学歴が

高いほどこどもの留年・中退経験の割合は低くなる¹³²。世帯主学歴の区分ごとにこどもの留年・中退の経験を考察すると、低学歴・高学歴とともに統計的に有意であり、こどもたちの留年・中退経験の地域間格差があることがわかった。「都市・地方・農家」では世帯主学歴が低学歴だとこどもの留年・中退経験は 14－18%になるが、高学歴だと 5－10%未滿と低くなる。「農園」では、世帯主の学歴が低学歴だと、こどもの留年・中退経験は 30%を超え、高学歴であれば、こどもの留年・中退経験は 13%となる。

図 3-16 と図 3-17 は各居住地域における住環境および生活環境とこどもの留年・中退経験の関係を示したものである。

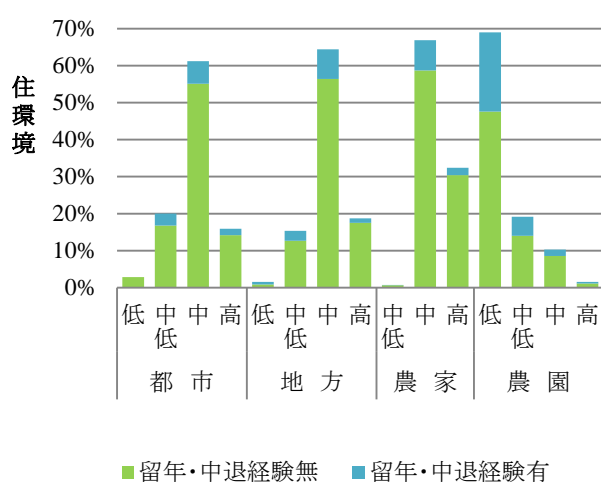


図 3-16 住環境と留年・中退経験

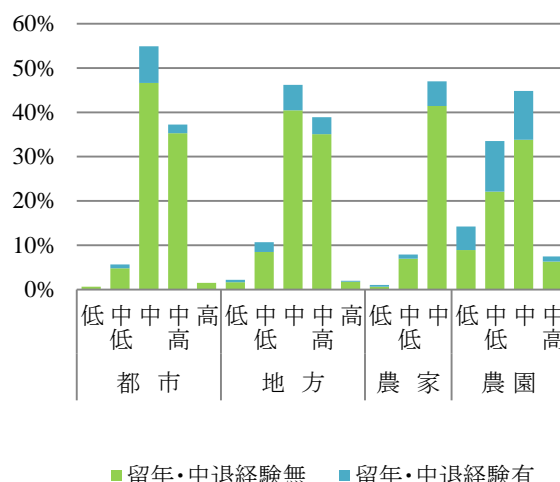


図 3-17 生活環境と留年・中退経験

各居住地域において、住環境レベルの高低によりこどもの留年・中退経験に差があるのか考察したところ、「都市」では有意ではなく、住環境の良さによってこどもたちの留年・中退経験の状況が異なるとはいえなかった。一方、他の 3 居住地域においては有意であり、住環境の違いによってこどもの留年・中退経験に違いがあることがわかった¹³³。

各地域の特徴としては、「農園部」以外の居住地域では、住環境のレベルが良くなるにつれてこどもが留年・中退経験をしている割合が低くなる。しかし、「農園部」に在住のこどもたちについては低レベルから中レベルまでは留年・中退経験をしている割合が低くなるが、「高」レベルになると、こどもが留年・中退経験をしている割合が高くなる。住環境が同レベルである場合の居住地

132 世帯主が低学歴の場合の各地域の留年・中退経験割合:「都市」:16.8%、「地方」:14.9%、「農園」:30.4%、「農家」:14.4%。

133 都市では 10%水準で有意ではなく、「地方」と「農家」は 1%水準で有意、「農園」は 5%水準で有意。

域間比較では、「中」レベルでは「農園部」在住の子どもたちの方が17%で留年・中退経験割合が高いものの、他の地域においても12%前後であり、地域間格差があると統計的にはいえなかった。しかし、他のレベル(中レベル以外)では「農園部」在住の子どもたちの留年・中退経験の割合が27%弱から31%となっており、他の居住地域と比較してかなり高く、統計的にも有意であり、地域間格差があった。

各居住地域における生活環境と子どもの留年・中退経験の関係については、「地方・農家・農園」の地域において統計的に有意であり¹³⁴、生活環境のレベルの違いにより子どもの留年・中退経験に違いがあることがわかった。「都市」については、サンプル数の関係で統計的検証はできなかった。全体的特徴としては、生活環境が良い世帯出身の子どもの方が留年・中退経験割合は低く、生活環境があまり良くない世帯出身の子どもの方が留年・中退経験割合は高いことである。また、生活環境が同じレベルの場合、世帯が「低」と「高」に属する場合には、サンプル数の関係で統計的検証できなかったが、その他のレベルにおいては統計的に有意であり、居住地域によって相違がみられた。特筆すべき点は、「農園」や「農家」では、「低」レベルの世帯の子どもたちの留年・中退経験は38%前後となり、「都市」の0%や「地方」の25%に比べ高いことである。そして、各地域間の違いを比較した場合には、すべてのレベルで「農園部」在住の子どもたちの留年・中退経験の割合が他の居住地域と比較してかなり高いことである。

表3-11は子どもを取り巻く環境と子どもの留年・中退状況のカイ2乗検定の結果である。本分析では5%水準を基準とし、「×」としている変数は有意ではなく、「—」はサンプル数の関係から統計的検証ができなかったことを示している。

表3-11 居住地域における各変数と留年・中退経験

居住地域	世帯収入	世帯主学歴	住環境	生活環境
都市	正	正	×	—
地方	正	正	正	正
農家	×	正	正	正
農園	×	正	∩	正

上記の表からわかることは「地方」では各変数における状況が良くなる、または高くなることにより留年・中退の経験をしていない子どもの数が増えるが、その他の地域では、留年・中退の経験

134 1%水準で有意。

をしているこどもの傾向が異なっていることである。

3.5.3 こどもの活動と教育状況

図3-18は各居住地域におけるこどもの経済活動状況である。ここでは対象となるこどもは「無回答」を抜いた5,907名であり、経済活動に従事しているこどもの数は766名であるが、居住地域によってこどもの労働人口割合に違いがある。

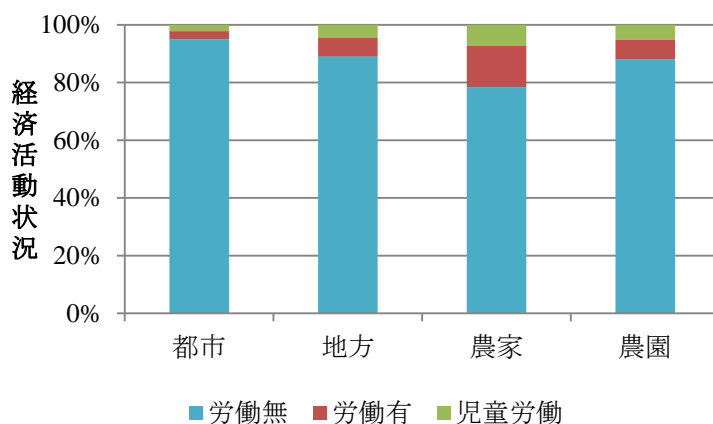


図3-18 各居住地域におけるこどもの経済活動

こどもたちが経済活動に従事している割合が最も高いのは「農家」で、21.6%のこどもたちが経済活動に従事している。一方、「都市」では5.0%、「地方」では11.0%、「農園」では12.0%のこどもたちが経済活動に従事しており、割合的には「農家」のこどもたちよりも少ない。『こどもの活動調査』ではこどもを経済活動に従事させている理由を聞いており、766名中670名のこどもについて回答を得ている。「地方」と「農家」では66.0-69.2%の世帯がこどもにスキルを習得して欲しいと回答しており、「農園部」の42.7%や「都市」の52.4%と比較して高い。一方、「都市」と「農園部」では経済的理由からこどもを経済活動に従事させる世帯が35.9-38.1%となり、「地方」や「農家」の20%前後と比較すると高い。経済活動に従事しているこどもの居住地域の特徴として、「農園部」における経済活動の理由と労働時間が挙げられる。「農園部」ではこどもたちに教育は不要であると思っている世帯主が14.6%おり、他の居住地域の3.4%-6.5%と比較しても高い¹³⁵。また、経済活動に従事しているこどもの割合は「農家」のこどもが多いが、労働しているこどもたちの労

135 当該児童に教育不要と回答した数は都市では1名(4.8%)、地方では20名(6.5%)、8名(3.4%)、15名(14.6%)となる。教育不要と回答した44名中40名が不在籍。

働時間は「農園部」に居住している子どもの方が長時間の経済活動に従事している割合が高い。

UNICEF(2014)の4か国(パキスタン、インド、バングラデッシュ、スリランカ)の国際比較では、スリランカでは子どもが経済活動に従事していても、学校に通学している子どもたちが多くと述べている。しかしながら、長時間にわたる経済活動は子どもたちを学校から遠ざけるだけでなく、本来、子どもたちが子どもとして経験すべきための時間を奪い、また、経済活動の場所や内容によっては、子どもたちの健康や健全な成長にも影響する。本項では子どもたちの活動が教育達成に影響を与えているのか否かについて考察する。

表 3-12 こどもの経済活動と在籍状況

経済活動	在籍	不在籍	合計
労働無	91.2%	8.8%	100%
労働有	84.0%	16.0%	100%
児童労働	60.2%	39.8%	100%
合計	89.0%	11.0%	100%

表 3-13 こどもの経済活動と留年・中退経験

経済活動	経験無	経験有	合計
労働無	87.9%	12.1%	100%
労働有	82.7%	17.3%	100%
児童労働	61.2%	38.8%	100%
合計	86.1%	13.9%	100%

表 3-12 と表 3-13 はこどもの経済活動とこどもの在籍状況および留年・中退経験との関係である¹³⁶。上記の表からもわかるとおり、経済活動に従事していない子どもたちの方が経済活動やそれを超えた児童労働している子どもたちと比較して、在籍率が高く、また留年・中退経験がないこどもの割合が高い。特に児童労働のレベルまで経済活動している子どもたちの不在籍率や留年・中退経験は 39%前後と高いことがわかる。そこで、各居住地域において、こどもの経済活動により、子どもたちの教育達成がどのように異なるのか考察する。

図 3-19 は各居住地域におけるこどもの経済活動状況と在籍状況を示しており、図 3-20 は留年・中退経験との関係である。こどもの経済活動状況と在籍状況および留年・中退経験の有無との関係はすべての地域において統計的に有意であり、どの居住地域においてもこどもの経済活動の有無や時間によってこどもの在籍状況や留年・中退経験の有無に違いがあることがわかった。

136 こどもの経済活動と在籍状況で対象となるこどもの数は 5,778 名。内 469 名はなんらかの経済活動に従事しており、294 名はスリランカで定義する児童労働に従事している。

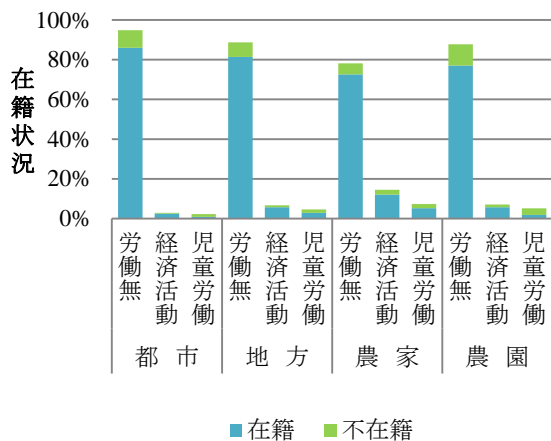


図 3-19 こどもの経済活動状況と在籍状況

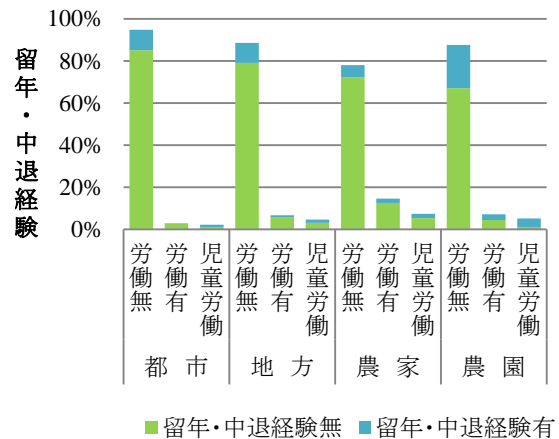


図 3-20 こどもの経済活動と留年・中退経験

在籍状況の全体的な特徴として、こどもが経済活動に従事する時間が長くなるほど不在籍傾向にある。特に経済活動が児童労働と定義した時間以下であれば、15%前後の不在籍傾向であるのに対して、児童労働に従事している場合には、「地方」と「農家」では 29-37%と高く、また「都市」と「農園」ではこどもの不在籍割合が 60%を超える。留年・中退経験の全体的な特徴は、在籍状況と同様にこどもが経済活動に従事する時間が長くなるほど留年・中退経験の傾向にある。特に経済活動時間が児童労働未満の時間であれば、「農園」以外は 14%以下の留年・中退経験割合であるのに対して、児童労働と定義した時間、経済活動に従事している場合には、「都市」で 50%、「農園」では 77%のこどもが留年・中退の経験をしている。

『こどもの活動調査』ではこどもの不在籍理由について調査しており、不在籍のこども 633 名中 533 名のこどもについての回答を得ている。主な理由は学業不振または教育不要で 24%となっており、次に経済的理由が 15%となる¹³⁷。しかし、『こどもの活動調査』からはこどもが経済活動しているから教育達成状況が良くないのか、またはこどもの学業達成が良くないために経済活動に従事しているかについては明らかでなく¹³⁸、明らかなのはこどもの経済活動の違いにより、こどもの教育達成に違いがあるということである。こどもの労働に関する問題は「都市」や「農園」でしばしば指摘されているが、『こどもの活動調査』では経済活動(労働)に従事しているこどもの割合は「農家」で最も高いことがわかっている。一方、こどもの不在籍率や留年・中退経験率は

137 不在籍理由:「その他」が 55%、「学業関係」が 24%、「経済的理由」が 15%、「身体障害」が 5%、「遠距離」が 1%である。

138 533 名 128 名が成績不振または教育は不要と回答し、経済的理由は 80 名、身体障害が 28 名、安全性が 4 名、その他が 293 名であった。

「農園」に居住するこどもの方が高いため、単に「労働＝学業への支障」となるわけではないことがわかる。なお、児童労働はかならずしも経済活動による労働だけではなく、家庭内における家事手伝いも含み、一定の時間以上従事していた場合には児童労働と定義されることは上述の通りである。スリランカではこどもたちが家庭内で家事手伝いをするのはよくあることであり、悪いことであるとは考えられていない。こどもは家族の手伝いすることにより、スキルを習得するとともに、共同して作業することにより、協調性やコミュニケーションスキル、忍耐など、社会に出て必要なスキルを学ぶことができる。下記の図 3-21 は各居住地域におけるこどもの家事手伝い状況である。

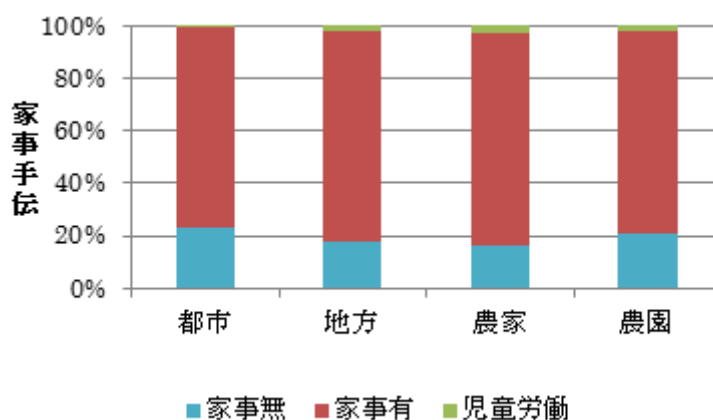


図 3-21 各居住地域におけるこどもの家事手伝い状況

どの居住地域においても多くのこどもたちが、家事手伝いをしている。家庭における主な家事は居住地域によっても異なるが、都市以外では水汲みや薪拾い、兄妹の世話や家の掃除などである。特に「地方」と「農家」では家事手伝いをするこどもの割合は 85%となり、「都市」や「農園」のこどもたちよりも両親や家族の手伝いをしていることがわかった¹³⁹。前述したとおり、生活環境については、「地方・農家・農園」では、「都市」と比較して、社会基盤が整っていない。そのため、両親を手伝うために、「都市」に比べればより多くの時間を家事手伝いに割いている可能性が高い。一方、「農園」では生活環境の状況は他の居住地域と比較して良いとはいえないが、家事手伝いに従事しているこどもの割合が他の居住地域と比較して決して高いわけではない。この家庭における家事手伝いが教育達成とどのような関係にあるのかを考察してみる。

139 「都市」では約 80%、「農園」では 76%のこどもが家事手伝いに従事している。

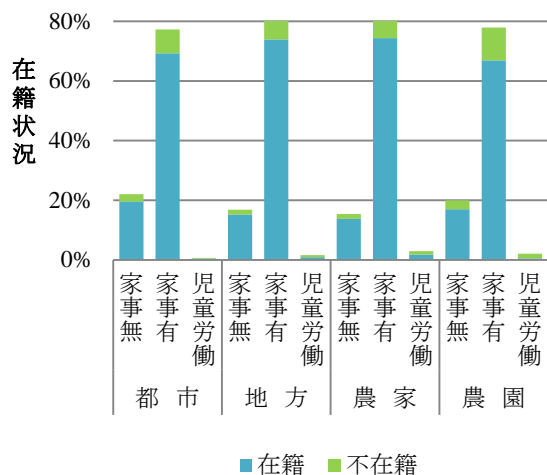


図3-22 家事手伝と在籍状況

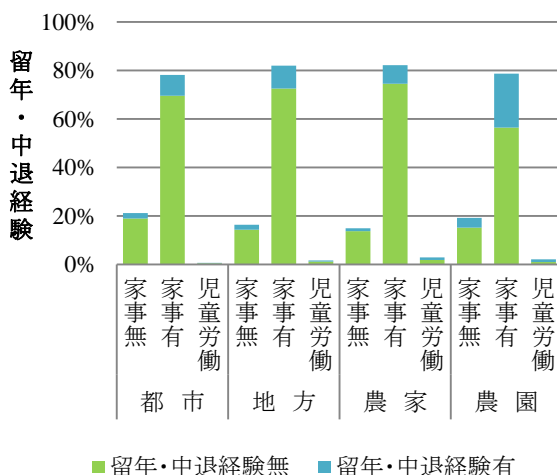


図3-23 家事手伝と留年・中退経験

図3-22は各居住地域による家事手伝状況と在籍状況との関係を示したものであり、図3-23は留年・中退経験との関係を示したものである。

各居住地域においてこどもの家事手伝状況と教育達成状況との関係は、こどもの経済活動との関係とは異なるところがある。まず、「都市」であるが、こどもが児童労働に達するほど家事手伝している場合には約3分の1のこどもが不在籍または留年・中退経験があるが、統計的には有意ではなかった¹⁴⁰。このことはこどもが家事手伝をしていた場合でも、していない場合でも、また、児童労働の場合でも、こどもの教育達成については違いがないことを示している。一方、「地方・農家・農園」は、在籍状況および留年・中退経験の有無については統計的に有意であり、こどもの家事手伝の時間によって在籍状況や留年・中退経験の有無に違いがあるということがわかった。

全体の傾向として、家事手伝をしていないこどもと家事手伝をしているこどもでは、在籍割合や留年・中退経験の有無にあまり違いが見られないが、児童労働のレベルに達した場合には不在籍率が高くなる¹⁴¹。特に「農園部」では前者の場合には不在籍状況が15%前後であるのに対して、後者の場合には74%となり、児童労働しているこどもの4分の3が在籍していないこととなる。留年・中退経験の有無については、前者の場合には21-28%の留年・中退経験割合であるのに対して、後者の場合には53%となる。

140 「都市」では10%水準で有意ではない。他の居住地域は1%水準で有意。

141 「農家」ではこどもが家事手伝に従事していない場合や児童労働未満の場合、不在籍割合が7.5%と14%であるのに対し、児童労働の場合には29%が不在籍である。また、前者の場合の留年・中退経験割合は10%弱であるのに対し、後者の場合には37.1%となる。

3.5.4 親の意識と教育達成

こどもの教育達成への影響を与える要因として、世帯の背景も考えられる。貧困や親の学歴、親や家族のこどもの教育に関する考え (Coleman 1966、Kuroda 1998) はこどもの教育の機会や教育達成に大きな影響を与える。特に、自身で自立できていないこどもたちにとって、養育者である親や世帯の考えは、こどもの人生を左右する。親の意識がこどもたちの在籍状況に影響を与えていることはいくつかの先行研究でも述べられている。Chandrabose and Sivapragasam (2011) や Wickramasinghe (2005) によれば、農園に居住し、農園の労働に従事している親の中には、農園で労働するのであれば、教育は不要であると考えている。特に、茶摘みを行う仕事の場合には、教育は必要ないと考えている傾向があると指摘している (Chandrabose and Sivapragasam 2011、Wickramasinghe 2005)。

そこで、本項では、こどもの教育とこどもの活動に対する世帯主の意識について考察してみる。『こどもの活動調査』には、「こどもを働かせない理由」と「こどもを働かせる理由」という質問項目が含まれている。「こどもを働かせない理由」は 10 択¹⁴²となっており、「労働希望」「学業専念 or 親の意志」「その他」の 3 区分に分けた¹⁴³。また、「こどもを働かせる理由」は 8 択からなっており¹⁴⁴、こちらは「労働」「労働+学業」「学業のみ」「その他」の 4 区分に分けた。ここで対象となるこどもは 5,873 名で経済活動に従事していないこどもとしているこどもを含み、「労働 or 労働希望」「労働+学業」「学業のみ」「その他」の 4 つの категорияをもつ「親の意識」変数を生成した¹⁴⁵。図 3-23 と図 3-24 はこどもの活動に対する親の意識とこどもの教育達成の関係を示したものである

142 『こどもの活動調査』「B34.こどもを働かせない理由」の10選択肢:

1. Found a job but waiting to start, 2. Believes no suitable work is available, 3. Discouraged, not able to get a job, 4. Has no skill or training, 5. Student (Engaged in studies), 6. Engaged in housekeeping activities, 7. Family/parents does not allow, 8. Unable to work (illness/disability), 9. No need to work, 10. Other (specify)

143 上述の 10 項目の内、「経済活動に従事している」又は「経済活動して欲しいが、現在従事していない」場合には「労働 or 労働希望」とした。「学業に専念して欲しい、働いて欲しくない」など親の意志で学校に行っている場合は「学業 or 親の意志」とした。それ以外は「その他」とした。

144 『こどもの活動調査』「D2.こどもを働かせる理由」1. Work for income only, 2. Assist family business, 3. Assist with housekeeping activities, 4. Attend school only, 5. Attend school and assist with family business, 6. Attend school and assist with housekeeping activities, 7. Combine work for income and schooling, 8. Other (Specify).

上述の8項目の内、「1-3」は「労働or 労働希望」とした。「4」は「学業のみ or 親の意志」とした。「5-7」は「労働+学業」とし、「8」は「その他」とした。

145 「B34.こどもを働かせない理由」と「D2.こどもを働かせる理由」の変数を合せて、「親の意識」という変数を作成。「B34.こどもを働かせない理由」で「学業専念 or 親の意志」とした変数を「学業のみ」とした。

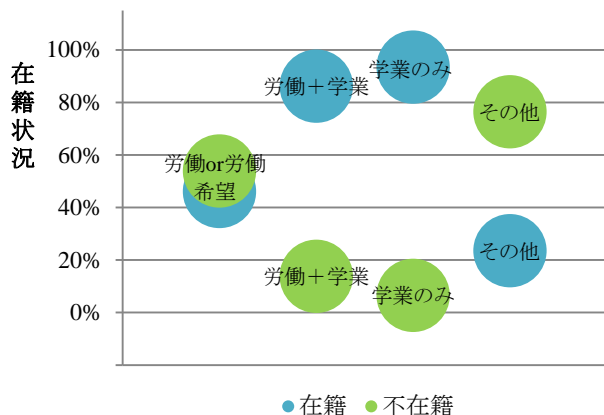


図 3-24 親の意識とこどもの在籍状況

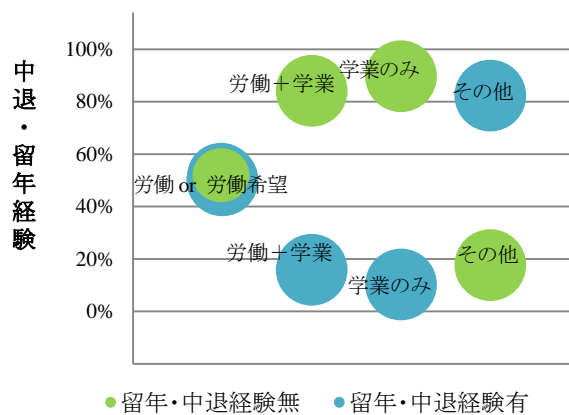


図 3-25 親の意識とこどもの留年中退経験

図 3-23 と図 3-24 から、親がこどもに労働して欲しいと考えている場合には、こどもの不在籍や留年・中退経験の割合が高くなる。しかし、親がこどもの「学業」に対する意識が徐々に高くなり、「労働と学業」、「学業のみ」となると、こどもの在籍率や留年・中退の経験無の割合が高くなっていることがわかった。

3.6 居住地間の教育格差とその要因

3.6.1 在籍状況格差とその要因

『こどもの活動調査』データ分析から、研究対象とした茶葉主産地域 9 県のこども 6,119 名中、調査時に学校に在籍しているこどもは 84.1%であり、10.3%は不在籍であることがわかった¹⁴⁸。居住地における在籍状況は、先行研究でも指摘されているように農園部に居住しているこどもたちの状況が良いとはいえず、こどもたちの 15.5%は不在籍であった¹⁴⁹。留年・中退経験については 9 県全体で 14.2%のこどもが留年・中退経験をしているが、都市・地方・農家では 10-13%弱のこどもが留年または中退を経験しているのに対し、農園部に居住しているこどもは 4 分の 1 以上である 28.7%が留年または中退を経験していた。

こどもたちの教育達成については、本人の学力だけではなく、環境や家庭などの様々な要因の影響によって決まる。一般的にこどもの教育には、世帯所得や親の学歴が影響していると考えられる。世帯収入が高ければ、こどもは勉学に集中することや塾に通う費用を支出することができ、進学しやすくなる。学歴の高い親は良い学歴のために高収入の職業に就きやすく、こどもにも良

148 5.5%は無回答。無回答者以外の 5,780 名中 5,147 名 (89%) が在籍、633 名 (11%) が不在籍。

149 3.2%は無回答。無回答者以外の 5,922 名中 505 名 (8.5%) が留年・中退の経験無、866 名 (14.6%) が経験有。

い職業につけるように、こどもにより良い教育を受けさせようとする傾向がある。また、社会文化的な背景もこどもの教育に影響すると考えられる。スリランカではこどもが家族のために経済活動や家事手伝いをすることは一般的である。経済活動や家事手伝いもある一定の範囲内であれば、スキルを学ぶ、働くことの大変さを知る、親の手伝いをする、助け合いの大切さを学ぶ、知識を得るなどの効果があると考えられるが、一定の範囲を超えた場合には学校に通学できないだけでなく、健康に悪影響を与えるなどの負の効果もある。そこで、前節までは各居住地域において、世帯状況、生活環境、こどもの家庭における状況の違いによって、教育達成状況に違いがあるかについて比較分析をおこなった。

本節では、居住地域間における教育達成の格差が、どのような要因と関係あるのかを比較分析する。表 3-14 は『こどもの活動調査』から、こどもの在籍状況を従属変数とし、各変数を独立変数として 2 項ロジスティック回帰分析を行ったものである¹⁵⁰。

150 「居住地域」もこどもを取り巻く環境変数として、投入(モデル 1)。

表 3-14 在籍状況格差とその要因

	モデル(1)	モデル(2)	モデル(3)	モデル(4)	モデル(5)	モデル(6)	モデル(7)
居住地域 (基本: 農園)							
都市	0.423 *						
地方	0.498 **						
農家	0.486 **						
世帯収入 (基本: 低所得(≦10KR))							
中所得(20K ≦ 10K)		0.165					
高所得 (>20K)		0.686 **					
教育 (基本: 低学歴)							
高学歴			0.567 **				
住環境(基本: 低)							
中低				0.624 **			
中				0.711 **			
高				0.781 **			
生活環境 (基本: 低)							
中低					0.259		
中					0.526 **		
中高					0.771 **		
高					1.139 *		
経済活動 (基本: 無)							
労働有						-0.680 **	
児童労働						-1.925 **	
家事手伝(基本: 無)							
家事手伝有							0.093
児童労働							-2.003 **
Constant	1.700 **	1.883 **	1.905 **	1.494 **	1.546 **	2.339 **	2.095 **
-2log Likelihood	3972.566 ^a	3958.994a	3954.836a	3953.330a	3960.974a	3793.816a	3879.785a
Cox & Snell R-Sq	0.004	0.006	0.007	0.007	0.005	0.034	0.017
Case number	5780	5778	5780	5779	5769	5778	5756

*p<.05 ; **p<.01

モデル(1)は居住地域間の在籍状況を比較したもので、農園部の在籍状況に比べ、都市では1.53($e^{0.423}$)倍高く、地方では1.65($e^{0.498}$)倍、農家では1.63倍($e^{0.486}$)高いことがわかった。本モデルは農園部に居住していた場合と比較して、他の地域の在籍状況がどのように異なるかを示しており、農園部に居住しているこどもの方が、在籍状況が悪いことがわかる。モデル(2)は世帯収入の違いによる在籍状況の比較であり、高所得層の場合には1.99($e^{0.686}$)倍在籍状況が良くなっている。モデル(3)は、世帯主の学歴の違いによるこどもの在籍状況であり、世帯主の教育歴が高

学歴であれば、低学歴の場合に比べて、 $1.76(e^{0.567})$ 倍在籍状況が良いことを示している。モデル(1)とモデル(2)からは世帯収入や世帯主学歴の良さは在籍状況が良いことと関連していることがわかる。

モデル(4)と(5)は子どもたちの生活の中心となる住環境と生活環境であり、世帯状況と同様に子どもの意志によって変えることができない要因である。モデル(4)は住環境の良さによって、子どもの在籍状況がどのように異なるのかを示したものである。住環境の低区分を基準とした場合、中低区分の場合には在籍状況が $1.87(e^{0.624})$ 倍よく、中区分では $2.04(e^{0.711})$ 倍、高区分では $2.19(e^{0.781})$ 倍、在籍状況が良くなる。モデル(5)は生活環境の違いにより子どもの在籍状況がどのように異なるのかを示したもので、生活環境の低区分を基準として他の区分を比較したものである。中低区分は低区分に比べ、在籍状況が $1.3(e^{0.259})$ 倍良いが有意ではなく、低区分と中区分の間では在籍状況に違いがあるとはいえない。しかし、中区分以上になると $1.69(e^{0.526})$ 倍、中高では $2.16(e^{0.771})$ 倍、高区分では $3.12(e^{1.139})$ 倍になり、生活環境が良くなるにつれ、在籍状況もよくなっていることがわかる。生活環境および住環境と在籍状況の関係では、生活環境や住環境の良さは、子どもの在籍状況が良いことと関連していることがわかる。

モデル(6)と(7)は在籍状況と子どもの家庭内における状況である経済活動変数および家事手伝変数との関係を示している。スリランカでは子どもが家族の手伝をすることは社会的にも文化的にも許容されてきている。しかしながら、一定の時間を超えた場合には子どもの健全な成長に影響を与える可能性の高い児童労働に当たる。モデル(6)は子どもが経済活動に従事していない場合を基準とし、労働に従事しているが児童労働に当たらない場合と児童労働に当たる場合に在籍状況がどのように異なるのかを示している。子どもが経済活動に従事していない場合と比較して、子どもが労働しているが児童労働にまで達しない場合には子どもの在籍状況は $0.51(e^{-0.680})$ 倍と悪くなり、また児童労働に達する時間労働している場合には、 $0.15(e^{-1.93})$ 倍となり、労働時間が増えるごとに在籍状況が悪くなっていることがわかる。モデル(7)は子どもが家事手伝をしていない場合と比較して、家事手伝をしているが児童労働にまで達していない場合、および児童労働の場合の在籍状況を示している。子どもが家事手伝をしていない場合と比較して、家事手伝をしている場合には、統計的には有意ではない。しかしながら、児童労働に達する時間まで家事手伝をしていた場合には $0.14(e^{-2.003})$ 倍となり、在籍状況が悪くなっている。

本ロジスティック回帰分析から、居住地域間に在籍状況の格差があること、子どもを取り巻く環境の良さと在籍状況の良さが関連していることがわかった。次に、居住地域間における在籍状況が各変数の区分の違いによってどのように異なるのかを考察する。表3-15は子どもの在籍状況

を独立変数とし、居住地域変数とその他のこどもを取り巻く環境変数を従属変数として2項ロジスティック回帰分析を行ったものである。

表3-15 居住地域間在籍状況格差とその要因

	モデル(1)	モデル(2)	モデル(3)	モデル(4)	モデル(5)	モデル(6)	モデル(7)	モデル(8)
居住地域(基本:農園)								
都市	0.423 *	0.164	0.198	-0.181	0.263	0.307	0.389 *	-0.516 *
地方	0.498 **	0.383 **	0.355 **	-0.132	0.351 **	0.504 **	0.503 **	-0.206
農家	0.486 **	0.329 *	0.325 *	-0.190	0.320 *	0.649 **	0.546 **	-0.075
世帯収入(基本:低所得(≦10KR))								
中所得(20K≦10K)		0.121						0.001
高所得(>20K)		0.617 **						0.251
教育(基本:低学歴)								
高学歴			0.505 **					0.313 **
住環境(基本:低)								
中低				0.720 **				0.649 **
中				0.846 **				0.766 **
高				0.924 **				0.756 **
生活環境(基本:低)								
中低					0.192			0.159
中					0.373			0.113
中高					0.574 **			0.154
高					0.927 *			0.087
経済活動(基本:無)								
労働有						-0.734 **		-0.723 **
児童労働						-1.967 **		-1.947 **
家事手伝(基本:無)								
家事手伝有							0.073	0.310 **
児童労働							-2.038 **	-1.845 **
Constant	1.700 **	1.633 **	1.656 **	1.507	1.423 **	1.925	1.704	1.417
-2log Likelihood	3972.566 ^a	3946.532a	3944.309a	3952.397a	3952.139a	3767.298a	3857.373a	3614.451a
Cox & Snell R-Square	0.004	0.008	0.009	0.007	0.006	0.038	0.020	0.060
Case number	5780	5778	5780	5779	5769	5778	5756	5745

*p<.05 ; **p<.01

モデル(1)は前述したとおり、農園部の在籍状況に比べ、他の居住地域のほうが在籍状況は良い。ここでは、居住地域間の在籍状況の差がどのように異なっているのかを比較分析し、モデル(1)と他のモデルにおける居住地域間の効果を比較分析する。

モデル(2)とモデル(3)は、世帯状況を示す世帯収入変数と世帯主学歴変数をモデル(1)に追加したものである。モデル(2)では世帯収入をコントロールした場合の居住地域間の在籍状況を示している。本モデルでは農園部と比較した場合、地方では1.47($e^{0.383}$)倍、農家では1.39

($e^{0.329}$)倍と農園部との差は縮小したものの、地域間格差は残っている。モデル(3)では、世帯主学歴をコントロールし、地方・農家と比較した場合には、地方では1.43($e^{0.355}$)倍、農家では1.38($e^{0.325}$)倍となり、農園部との差はモデル(1)に比較して縮小するが、地域間格差が残っている。前述のとおり、一般的には、世帯収入が高い世帯の方が、子どもたちが学業に集中できやすい環境を整えることができ、また教育歴が長い世帯主の方が教育の重要性などを認識する傾向にあるため、世帯状況の良さと子どもの在籍状況の良さの間には関係があると考えられる。そのため、世帯状況をコントロールすると居住地域間の効果が減少したものと推察できる。モデル(4)とモデル(5)は子どもが日々の生活を送る中で重要となる住環境と生活環境をモデル(1)に追加したものである。モデル(4)では住環境をコントロールすると、農園部に比べて都市・地方・農家ともに有意ではなくなり、居住地域間における在籍状況格差がなくなる。生活環境変数を導入したモデル(5)では、生活環境をコントロールするとモデル(1)に比べ、地方では1.42($e^{0.351}$)倍、農家では1.38倍($e^{0.320}$)倍となり農園部との格差は縮小したものの、まだ格差は残る。スリランカに限らず、住居所有や住居空間は人びとの生活の安定性と密着している。生活が安定している場合にはリスクのある転居よりも当該住居に留まりたいと思う気持ちの方が強くなり、定住または長期に居住する可能性が強くなる。長期の居住は子どもたちに転校や新しい環境への適応を強いる可能性を小さくし、子どもたちの教育の機会や達成する可能性を高くする。このため、住環境をコントロールすると、住居地域間の効果がなくなるのは、このような背景があるのではないかと推察する。また、生活環境の安全性は子どもたちが安心して学ぶ環境を整え、勉強に集中できやすくさせる。生活環境が整わない環境では、子どもたちが怪我をしたり、病気になったりする可能性を高め、勉学を中断させる可能性がある。そのため、生活環境をコントロールすると、住居地域間の効果が減少したものと推察する。モデル(6)とモデル(7)は子どもの活動変数である経済活動変数と家事手伝変数をモデル(1)に追加したものである。モデル(6)では、経済活動をコントロールするとモデル(1)に比べ、地方では1.66($e^{0.504}$)倍、農家では1.91倍($e^{0.649}$)倍となり農園部との格差は拡大している。モデル(7)では、家事手伝活動をコントロールするとモデル(1)に比べ、都市では1.48($e^{0.389}$)倍、地方では1.65($e^{0.503}$)倍、農家では1.73倍($e^{0.546}$)倍となり、都市以外の地域では農園部との格差は拡大し、特に農家では格差が広がっている。経済活動に従事している子どもの比率は農村世帯の子どもの方が高いが、長時間労働に従事している子どもの比率が高かったのは農園部であった⁽¹⁵¹⁾。このことは子どもの活動をコントロールすると居住地域間の効果

151 6,119名中5,292名が回答。回答者の内、約10%に当たる603名が経済活動に従事しており、経済活動に従事している子どもの約3分の1に当たる194名が児童労働にあたる週当たり15時間以上の労働に従事している。

が大きくなることと関係があると推察される。居住地域をコントロールした場合には、こどもたちが経済活動や家事手伝いに従事していない場合と比較して、活動時間がある一定を超える¹⁵²とこどもたちの不在籍が高くなる。モデル(8)はすべての変数を導入したものである。他の変数をコントロールした場合、世帯収入と生活環境変数による在籍状況の違いはみられなくなった。また、農園部と他の居住地域との格差は、統計的には有意ではなく、居住地域間における在籍状況に違いがなくなった。

本ロジスティック回帰分析では、モデル(1)において農園部と他の居住地域における在籍状況の違いを考察し、他のモデルでは居住地域の違いがどのような要因により説明されるのかを分析した。特に、居住地域間の教育格差を最も説明しているのが住環境変数であり、モデル(1)に投入すると居住地域間の効果がなくなった。このことから、住環境変数が教育達成に大きな影響を与えており、居住地域とも強く関連していることがわかる。

3.6.2 留年・中退経験の格差とその要因

スリランカでは5歳になると就学前教育を受け、6歳になると小学校に入学するのが一般的ではあるが、様々な理由によって学齢期とは異なる学年に在籍していることもしばしばみることができる。表3-16は学齢期に当該学年に在学していないこども、あるいは調査時に在籍していないこどもを中退・留年経験有とし、「0」のダミー変数とした。また、中退・留年経験無のこどもたちを「1」とし、各変と留年・中退経験との関係を2項ロジスティック回帰分析によって考察したものである。

152 スリランカでは、5-11歳のこどもの場合、5時間以上の経済活動、または15時間以上の家事手伝いは児童労働と定義されている。また、12-15歳までのこどもの場合、15時間以上の経済活動、または25時間以上の家事手伝いは児童労働と定義されている。本研究では、上記の指標を用いるとともに、16-17歳のこどもについても12-15歳と同じ基準を用いた。

表 3-16 留年・中退格差とその要因

	モデル(1)	モデル(2)	モデル(3)	モデル(4)	モデル(5)	モデル(6)	モデル(7)
居住地域 (基本: 農園)							
都市	1.171 **						
地方	1.028 **						
農家	1.264 **						
世帯収入 (基本: 低所得(≤10KR))							
中所得(20K ≤ 10K)		0.414 **					
高所得(>20K)		0.793 **					
教育 (基本: 低学歴)							
高学歴			0.942 **				
住環境(基本: 低)							
中低				0.646 **			
中				1.187 **			
高				1.826 **			
生活環境 (基本: 低)							
中低					0.402 *		
中					1.072 **		
中高					1.593 **		
高					1.691 **		
経済活動 (基本: 無)							
労働有						-0.416 **	
児童労働						-1.525 **	
家事手伝(基本: 無)							
家事手伝有							-0.041
児童労働							-1.281 *
Constant	0.908 **	1.429 **	1.475 **	0.776 **	0.707 **	1.982 **	1.892 **
-2log Likelihood	4764.234a	4862.550a	4797.525a	4703.289a	4754.423a	4481.941a	4561.787a
Cox & Snell R-Square	0.027	0.011	0.022	0.037	0.027	0.022	0.006
Case number	5922	5920	5922	5921	5911	5718	5696

*p<.05 ; **p<.01

モデル(1)は居住地域間におけるこどもの留年・中退経験を比較したもので、農園部を基準とした場合、都市では3.23 ($e^{1.171}$)倍高く、地方では2.8 ($e^{1.028}$)倍、農家では3.54 ($e^{1.264}$)倍となり、農園部よりも留年・中退経験のないこどもが多いことがわかる。モデル(2)は世帯収入の違いによる留年・中退経験を比較したものであり、低所得層と高所得層を比較した場合には、高所得者層の方が2.21 ($e^{0.793}$)倍、留年・中退経験のないこどもが多くなり、中所得層の場合では1.51 ($e^{0.414}$)倍多くなる。モデル(3)は、世帯主の学歴の違いによるこどもの留年・中退経験を考察したものであり、世帯主の教育歴が高学歴であれば、低学歴の場合に比べて、2.57 ($e^{0.942}$)倍留年・中退の経

験のない子どもが多いことを示している。世帯収入や世帯主学歴の良さは、子どもの留年・中退の経験無と関係していることがわかる。モデル(4)と(5)は住環境と生活環境を統制変数として導入した。モデル(4)は住環境と留年・中退経験との関係であり、住環境区分の違いにより子どもの留年・中退経験がどのように異なるのかを示したものである。住環境の低区分と中低区分を比較した場合には留年・中退経験が 1.91 ($e^{0.646}$) 倍となり、中区分では 3.28 ($e^{1.187}$) 倍、高区分では 6.21 ($e^{1.826}$) 倍となり、住環境が良くなるにつれ、留年・中退経験をした子どもの数が少なくなっている。モデル(5)は生活環境の低区分を基準として、他区分を比較したものである。生活環境区分がよくなるにつれて留年・中退経験がない子どもが多くなり、中低区分の場合には 1.5 ($e^{0.402}$) 倍、高区分では 5.43 ($e^{1.691}$) 倍も低区分に比べて多い。住環境および生活環境と子どもの留年・中退経験の関係では、住環境や生活環境が良くなるにつれて、留年・中退経験をしている子どもの数も減少していることがわかる。モデル(6)とモデル(7)は子どもの家庭内における活動状況と子どもの留年・中退経験との関係を示している。在籍状況と子どもの経済活動時間との関係では、経済活動に従事しているか否かによって在籍状況に違いがみられたが、家事手伝については児童労働未満の時間の場合には差がなく、留年・中退経験についても同様の傾向を示していることがわかる。モデル(6)は子どもが経済活動に従事していない場合を基準とし、労働に従事しているが児童労働に当たらない場合と児童労働に当たる場合に留年・中退経験がどのように異なるのかを比較している。子どもが経済活動に従事していない場合と比較して、子どもが短時間労働している場合には 0.66 ($e^{-0.416}$) 倍となり、また児童労働の場合には、0.22 ($e^{-1.525}$) 倍となり、労働時間が増えるごとに留年・中退経験をしている子どもが増えていることがわかる。モデル(7)は子どもが家事手伝をしていない場合と比較した場合を基準とし、家事手伝に従事しているが児童労働に当たらない場合と児童労働に当たる場合に留年・中退経験がどのように異なるのかを比較している。子どもが家事手伝に従事していない場合と比較して、子どもが家庭内の手伝いを短時間している場合には統計的に有意ではないが、児童労働に達する時間まで家事手伝をしていた場合には 0.28 ($e^{-1.281}$) 倍となり、留年・中退経験をしていない子どもが少なくなっている。

表 3-16 に示すとおり、留年・中退経験と各変数との 2 項ロジスティック回帰分析から、居住地域間において、子どもの留年・中退経験の違いがあること、子どもを取り巻く環境の良さと子どもの留年・中退経験の違いが関係していることがわかった。次に、居住地域間における留年・中退経験の違いが各変数によってどのように異なるのかを考察する。表 3-17 は子どもの留年・中退経験を独立変数とし、居住地域変数と子どもを取り巻く環境変数を従属変数として 2 項ロジスティック回帰分析を行ったものである。

表 3-17 居住地域における留年・中退経験格差とその要因

	モデル(1)	モデル(2)	モデル(3)	モデル(5)	モデル(4)	モデル(6)	モデル(7)	モデル(8)
居住地域 (基本: 農園)								
都市	1.171 **	0.957 **	0.864 **	0.546 **	0.826 **	1.042 **	1.093 **	0.135
地方	1.028 **	0.922 **	0.832 **	0.348 *	0.720 **	1.036 **	1.028 **	0.178
農家	1.264 **	1.128 **	1.049 **	0.411 *	0.917 **	1.364 **	1.256 **	0.344
世帯収入 (基本: 低所得(≤10KR))								
中所得(20K≤10K)		0.277 **						0.082
高所得 (>20K)		0.490 **						-0.037
教育 (基本: 低学歴)								
高学歴			0.736 **					0.507 **
住環境(基本: 低)								
中低				0.396 **				0.353 *
中				0.850 **				0.697 **
高				1.479 **				1.196 **
生活環境 (基本: 低)								
中低					0.251 **			0.133
中					0.712 **			0.350
中高					1.118 **			0.615
高					1.183 **			0.546
経済活動 (基本: 無)								
労働有						-0.511 **		-0.444 **
児童労働						-1.624 **		-1.531 **
家事手伝 (基本: 無)								
家事手伝有							-0.082	0.037
児童労働							-1.365 **	-1.138 **
Constant	1.700 **	0.788 **	0.846 **	0.745 **	0.439 **	1.125 **	1.073 **	0.664 **
-2log Likelihood	3972.566a	4741.561a	4693.978a	4694.442a	4684.446a	4328.560a	4417.013a	4160.561a
Cox & Snell R-Sq	0.004	0.031	0.039	0.039	0.039	0.048	0.031	0.072
Case number	5780	5920	5922	5921	5911	5718	5696	5685

*p<.05; **p<.01

モデル(1)は表 3-16 のモデル(1)と同じである。農園部に比べ、他の居住地域のほうが留年・中退経験のない子どもが多い。モデル(2)では世帯収入をコントロールした場合の居住地域間における子どもの留年・中退経験との関係が示されている。農園部と他の居住地域を比較して、留年・中退経験のない子どもは都市では 2.61 ($e^{0.957}$) 倍多く、地方では 2.51 ($e^{0.922}$) 倍、農家では 3.09 ($e^{1.128}$) 倍と多いが、モデル(1)と比較して農園部との差は縮小している。モデル(3)では、世帯主学歴をコントロールすると、農園部と他の 3 居住地域との子どもの留年経験無の格差はモデル(1)に比較して縮小したものの、留年・中退経験のない子どもは都市では 2.38 ($e^{0.864}$) 倍多く、地方では 2.3 ($e^{0.832}$) 倍、農家では 2.86 ($e^{1.049}$) 倍となり、地域間格差は残っている。モデル(4)とモデ

ル(5)は住環境と生活環境をモデル(1)に追加したもので、モデル(4)では、住環境をコントロールすると、農園部と他の3居住地域とのこどもの留年経験無の格差は、都市では1.73($e^{0.546}$)倍となり、また地方では1.42($e^{0.348}$)倍、農家との関係においても1.51($e^{0.411}$)倍とモデル(1)に比べ地域間格差がかなり縮小されるが、こどもの留年・中退経験無の地域間差は残る。モデル(5)は生活環境をコントロールした場合であり、都市では2.29($e^{0.826}$)倍となり、また地方では2.06($e^{0.720}$)倍、農家との関係においても2.50($e^{0.917}$)倍となり、モデル(1)に比べ地域間格差が縮小されるが、こどもの留年・中退経験無の地域間差は残る。

モデル(6)とモデル(7)はこどもの経済活動変数と家事手伝変数をモデル(1)に追加したもので、モデル(6)ではこどもの経済活動をコントロールすると、農園部と比較して、都市では2.84($e^{1.042}$)倍、農園よりも留年・中退経験のないこどもが多く、地方では2.82($e^{1.036}$)倍、農家では3.91($e^{1.364}$)倍となり、モデル(1)に比べて地域間格差が縮小されたとはいえない。また、モデル(7)ではこどもの経済活動をコントロールすると、都市では2.98($e^{1.093}$)倍、留年・中退経験のないこどもが多く、地方では2.79($e^{1.028}$)倍、農家との関係においても3.51($e^{1.256}$)倍となり、モデル(1)に比べて地域間格差が縮小されたとはいえない。モデル(8)はすべての変数を投入したものである。他の変数をコントロールした場合、居住地域間における格差が見られなくなった。

本ロジスティック回帰分析のモデルにおいて、留年・中退経験変数を従属変数とし、居住地域変数を説明変数とした場合には、居住地域変数の効果がなくなるモデルはモデル(8)であるが、モデル(1)と他のモデルを比較した場合に、モデル(4)も居住地域間におけるこどもたちの留年・中退経験の格差を説明している。

3.7 まとめ

『こどもの活動調査』データを用い、(1)居住地域間における教育達成格差、(2)居住地域内(都市・地方・農家・農園部)における教育達成格差とその要因、(3)居住地域間における教育達成格差の要因について比較分析を行った。

本2次分析から、研究対象とした茶葉主産地9県のこども6,119名中、調査時に学校に在籍しているこどもは84.1%であり、また10.3%は不在籍であることがわかった¹⁵³。における在籍状況は、先行研究でも指摘されているように農園部に居住しているこどもたちの状況が良いとはいえず、こどもたちの15.5%は不在籍であった。留年・中退経験については、全体で14.2%のこどもが留年・中退経験をしているが、都市・地方・農家では10-13%弱のこどもが留年・中退を経験してい

153 5.5%は無回答

るのに対し、農園部のこどもの4分の1以上である28.7%が経験していたことがわかった。各居住地域におけるこどもの教育達成の違いは、居住地域によってその要因が異なり、教育達成状況が比較的良くない農園部では、「住環境」「こどもの経済活動」「こどもの家事手伝い」の違いと教育達成が関係していることがわかった。

居住地域間における教育達成格差が生じている要因を考察するため、教育達成を従属変数として、「居住地域」を独立変数として、「その他の各変数」を統制変数として2項ロジスティック回帰分析を行った。在籍状況については、住環境をコントロールすると、農園部に比べて都市・地方・農家ともに有意ではなくなり、居住地域間における在籍状況格差がなくなることがわかった。また、こどもの留年・中退経験についても、住環境を統制変数として投入すると、モデル(1)と比較して居住地域間の効果が最も減少し、居住地域間におけるこどもの留年・中退経験の格差が小さくなった。

『こどもの活動調査』データ2次分析から、居住地域間の教育達成格差を最も説明しているのが住環境変数であることがわかった。第4章以下は本分析を踏まえて、紅茶産業における経営形態の違いによりこどもを取り巻く環境がどのように異なり、経営形態の違いによりこどもの教育達成にどのような違いがあるのか、また、経営形態間の教育格差の要因について、現地調査におけるアンケート調査とインタビューから比較分析をする。

4. 紅茶産業におけるこどもを取り巻く環境—南部マタラ県コタポラ郡

植民地時代に開拓されたプランテーション作物は 1948 年に英国から自治領として独立した後にもスリランカ経済にとって重要な地位を占めている。1972・75 年土地改革により、50 エーカー以上の農園は国営化されたが、1992 年に大規模農園の経営は国営から再び民営へと転換された。1977 年以降、それまでの社会主義的経済政策に代わり市場型経済政策が導入され、紅茶産業における小規模経営による紅茶栽培も推進され、2002 年の時点における紅茶栽培面積の 44% が小規模生産者により耕作されている (MPI 2011)。紅茶は世界中で好まれて飲料される嗜好品の 1 つであるが、スリランカでの本格的栽培は中央高地のキャンディにある Loolecondera 農園が初めてであるといわれている¹⁵⁴。スリランカは熱帯性に属し、季節風(モンスーン)の影響が強い高温多湿な気候のもと、17 世紀のオランダの占領下で、農園部は珈琲農園として開拓され、発展していった。しかし、19 世紀後半、さび病による珈琲栽培が困難になると紅茶栽培が行われるようになった。

現在のスリランカでは紅茶は人びとの間で欠かせない習慣の 1 つとなっているが、一般の人びとが紅茶を飲むようになったのは第 1 次世界大戦後であるといわれており、大衆文化としては 100 年未満の歴史である(中村 1992a)。しかし今日のスリランカ人の生活は紅茶から始まるといっても過言ではない。まず起床直後にモーニング・ティーから始まり、午前 10 時、午前 2 時から 3 時ごろ、そして夕方 6 時ごろにも紅茶を飲む(杉本 1998)。この習慣は現在でも引き継がれ、調査地における起床は「Good Morning, daughter! Tea is ready」¹⁵⁵という声から 1 日が始まる。なんらかの理由で調査に出かけることができない場合には宿泊先の農家で 1 日の大半を過ごす。朝のモーニング・ティーの後に朝食を食べ、朝の 10 時ごろにプレン・ティーを飲み、1 時ごろに昼食を取り、3 時ごろに紅茶とケーキ、6 時ごろに紅茶と軽食、そして夜の 8 時から 9 時の間に夕食を食べる。夕食時間が遅いには諸説あるようだが、昔から空腹で就寝しないようにという理由だからと滞在先の農家の方が教えてくれた。このように毎日 4 回は飲料されている紅茶だが、紅茶の味は産地によって異なる。

スリランカの産地は主に 6 つ¹⁵⁶あり、地域や地形、標高によって異なる気候が紅茶の生産に

154 1867 年に英国人のジェームズ・テイラーによって設立された農園。

155 直訳すると「おはよう、娘よ。紅茶の用意ができているわ」だが、「紅茶の用意ができていますわ早く起きなさい」という意図のほうが強い。

156 6 大産地: Sri Lanka Tea Board によれば、ヌワラエリヤ、ディンブラ、ウバ、ウダプセラワ、キャンディ、ルフナ。ヌワラエリヤは海拔約 20,000m に位置し、さわやかな空気とイト杉のふくよかな匂いに満ち、ユーカリプテスと野生のミントの芳香する紅茶を産出する。ディンブラは海拔 1,200—1,700m の高地に位置しており、南西モンスーンの影響を受け、毎年 1 月から 3 月までの冷たい乾燥する気候により適度な渋みと力強い香味のある紅茶産出する。ウバは海拔 1,000m から 1,700m の中央山岳地帯の東斜面で栽培され、独特の風味を持ち、いろいろな種類のブランドに用

恩恵をもたらし、個性的な紅茶の味が生まれている。最近、日本でも様々な産地の紅茶を目にするが、好まれて飲まれるのは(スリランカ)高地の紅茶が多い。

4.1 調査地域の特徴

スリランカの紅茶農園部における研究では、中央高地に焦点を当てていることが多いが、本研究では、同様の自然環境、社会基盤環境、経済・政治環境である地域において、半公営農園・民間農園・個人農家(以下、「農家」と記述する。)におけるこどもの教育状況と教育達成の格差の要因を考察する。紅茶の栽培は標高 1,200m 以上を高地、600–1,200m までを中地、600m 未満を低地と区分され、中地・高地の紅茶が良質とされ、低地では低質といわれている(杉本 1998)。本研究での調査地は中・低地に位置するルフナ産地であるマタラ県コタポラ郡で行った。コタポラ郡における紅茶栽培は、広大な栽培面積を有するプランテーション会社の半公営農園、大中小の民間経営農園、そして家族経営農家の人びとが携わっており、3 つの経営形態の違いにより生活環境と教育達成状況の比較を行うことができる。

スリランカの農園は 50 エーカー以上の大規模農園と 50 エーカー未満の小規模経営に大別される¹⁵⁷。1970 年代の土地改革により 2 つのプランテーション公社によって運営されていた農園だったが、1992 年には経済構造調整の一環として 2 大公社が運営管理していた 502 農園のうち 499 農園を 22 のプランテーション経営会社(Regional Plantation Company) (以下、「RPC」と記す。)に分割し、経営権のみを民間会社に委譲した(Ameresekere 2011)¹⁵⁸。RPC は 12 から 29 の農園から成っており、15,000 から 25,000 エーカーの栽培地を運営管理しているが、資産をもっていないため、新規投資のための資金調達などができず、経営面において困難が生じていた(Ameresekere 2011)。長期的視野に立った農園部門の経営改善のため、1995 年には利益の出ている公企業の株式 51%を農園主と投資家に売却した。その後は赤字の RPC の株式を売却し、民営化をはかったが、土地については国有のままであり、50 年間のリース契約で貸し出されている。このような背景から、本研究では RPC 所有の農園を半公営農園と記述する。現在では 286 の

いられている。ウダプセラワは北東モンスーンの影響を受けており、とくに高地では冷たくて乾燥した気候の影響を受けて付加価値の高い紅茶が産出されている。キャンディは中高産地として知られており、海拔 700–1,400m の地域であり、コクの強い紅茶を産出している。ルフナは海拔 700m の低地が主で、南部地域では独特な強さと芳香を与えるものになる黒い茶葉の紅茶を産出している。

157 大規模、小規模などの定義は様々である。本研究では、50 エーカー以上の栽培面積の場合は大規模農園、10–20 エーカーの栽培面積の場合には中規模農園、10 エーカーの栽培面積の場合には小規模農園とする。なお、個人農家と小規模農園の違いは、ライン・ハウスを労働者に提供している場合を「農園」とし、それ以外を「農家」としている。

158 RPC は 14 地域(Puttalam, Kurunegala, Matale, Kandy, Nuwera-Eliya, Badulla, Monaragala, Kegalle, Ratnapura, Gampaha, Colombo, Kalutara, Galle, Matara)に所在する。

農園が 23 の RPC によって運営・経営されている(MPI 2012)。RPC では複数の大規模農園を所有し、各々の農園はいくつかのディビジョンにわかれている。紅茶農園はもともと珈琲農園であり、珈琲の収穫時期は季節的なもので、農園内の居住は人手の必要な珈琲収穫時に、南インドより渡航してきた人びとのために建てられた建物である。一年中収穫することができる紅茶栽培に変わった後は、人びとの働き方にも変化ができ、定住することとなったが、一時的な住居設備を、定住用に建て替えるということにはなかった。そのため、農園部における生活環境については最低限であるなどの指摘がされることがある。これらの農園で働く人びとの多くは主に作業をするディビジョンの近くにある居住地区に住んでおり、ディビジョンの地形や範囲によっては、居住地区が分かれていることもある。近年では居住しているラインルームの増築も認められるとともに、戸建ての住居も増えており、調査地においても部屋の増築や設備の整ったラインルームや戸建ての住居があった。1992 年の民営化後、農園居住者の生活に関する社会福祉については、スリランカ政府と RPC による拠出金により設立された PHSWT¹⁵⁹によって行われることとなった。

半公営農園は広大な紅茶栽培地を運営管理しているが、スリランカには民間や個人によって経営されている農園も多く、2009 年時点ではスリランカ全土において紅茶農園は 88,624 ある(MPI 2012)。農園の定義はいくつかあり、The Tea Control Act によれば 10 エーカー(4 ヘクタール)以上となるが、スリランカ統計局¹⁶⁰の定義によれば 20 エーカー(8 ヘクタール)未満を小規模経営とし、それ以上を農園としている。また、紅茶局(Tea Board)¹⁶¹では 50 エーカー以上を農園と定義している。スリランカ政府は 1975 年に Tea Small Holding Development Act No.35 を制定し、1977 年に The Smallholders Development Authority (TSHDA) を設立した。小規模経営はこの TSHDA の管轄下にあり、すべての小規模生産者は Tea Shakthi として知られる Sri Lanka Federation of Tea Smallholder Development Societies に所属している。この連邦の管轄下には、村レベルのソサエティがあり、幅広い支援をメンバーに行っている¹⁶²。小規模生産者の紅茶生産における貢献は年々増加し、低地域における生産量の 95% は小規模生産者によって栽培されており、中地域においては 59%、高地においては 15% となる。スリランカ統計局のデータによると 1983 年の調査では 159,865 だった小規模経営は 2005 年には 397,223 と増加しているが、そのうちの 88% は 1.25 エーカー以下の栽培面積であり、個人農家によって栽培されている(TSHDA

159 現在は、Plantation Human Development Trust (PHDT) という名称に変更。

160 Census of Agriculture – 2002. Agriculture and Environment Statistics Division, Department of Census and Statistics, Sri Lanka.

161 1978 年 1 月に The Hon Minister of Plantation Industries が 10–50 エーカー以下で茶葉栽培している生産者も TSHDA において管轄するとしたことから、50 エーカー以下も小規模経営とされることもある。

162 辺鄙な村はこれらの支援にアクセスする機会が限られているとしている(Perera 2014)。

2005、2013)。調査地であるコタポラ郡では 11,579 が小規模経営であるが、84%に当たる 9,729 の小規模経営が 1.25 エーカー以下の栽培農地である¹⁶³。このことから、本研究における民間農園の規模は 10 エーカー以下を小規模農園、10–50 エーカーを中規模農園、50 エーカー以上を大規模農園と定義する。

4.2 調査方法

本研究では 2013 年 8 月に調査地を訪問し、予備調査を行った。予備調査では当該地域の農園や農家の所在地や生活環境を把握するとともに、調査するに当たりどのような手続きが必要であるかを確認した。アンケート調査やインタビューを行う場合、農家では世帯主の許可が必要であり、農園に居住している労働者を行う場合には農園主の許可が必要であった。半公営農園では、許可を得るためには所属する研究科よりの調査許可願書(レター)が必要であり、本調査を開始する前に調査許可願書を持参し、管理運営会社の許可を得た。本調査は 2013 年 12 月 15 日から 2014 年 1 月 14 日、2014 年 2 月 28 日から 3 月 16 日の約 1.5 か月間において、デニヤヤ近郊にある 5 つの半公営農園 12 ディビジョンで 103 世帯と、モロワカおよびデニヤヤ地域にある民間企業が経営する 19 の大中小農園(大規模:6 農園、中規模:9 農園、小規模 4 農園)で 100 世帯¹⁶⁴およびデニヤヤからキリワラガマ(Keeriwalagama)村間の 11 村で紅茶栽培に従事する 5 村の農家約 99 世帯の合計 302 世帯を対象に行った。『こどもの活動調査』データは 2014 年 7 月にスリランカ統計局から提供いただき、2014 年度の(日本の)夏と冬には補足調査を行い、半公営農園のマネージャーや社会福祉士・保育士、学校(7 校)、村役場(5 か所)、健康管理施設、および 5 世帯でインタビューを行った。2015 年 7 月にはキリワラガマ地域に住むこどもたち 10 名にインタビューをした。また 2016 年 2 月には 36 世帯でその後の家族状況や生活環境を伺うとともに、民間農園のマネージャーに労働者やその家族が居住する居住地区の運営管理者として話を伺った。2016 年度までに実施した現地調査では、人びとの生活環境やこどもの教育状況判断や主観的考えの聴取であり、必ずしも生活環境の衛生状態が科学的に一致しているとはいえないことから、経営形態間における居住地区の衛生状況の比較を行うため、2017 年 12 月に以前現地調査に協力してくれた世帯も含み農家 20 世帯、民営農園 12 世帯、半公営農園 16 世帯、半公営農園学校 1 校、デニヤヤ市内 1 か所の計 50 か所で 4 サンプルをとり大腸菌と大腸菌群

163 マタラ県では、2005 年の TSHDA のデータによれば、67,613 が小規模経営で、1.25 エーカー以下の小規模経営が 86%にあたる 58,470 になる。

164 民間農園については、農園主の許可を得たが、すべての農園主に農園の概要を伺えなかったため、大中小規模の数については前後する可能性がある。

の状況を調べた。

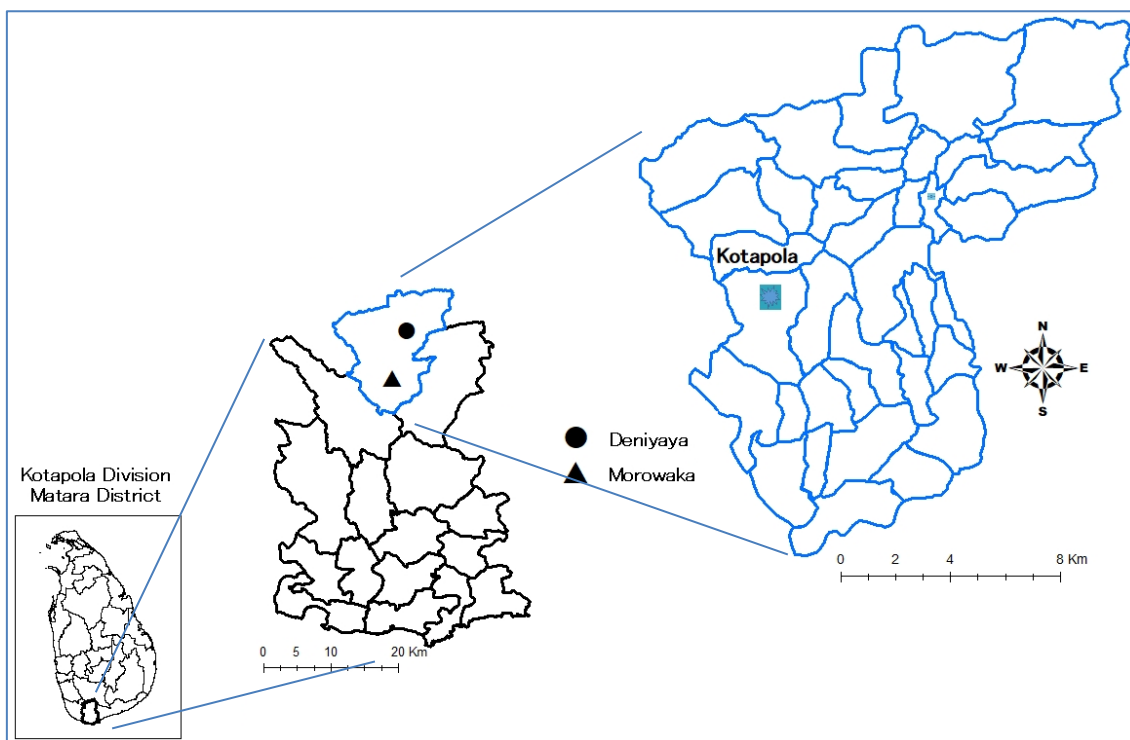
調査方法としては、農園では仕事の休憩中またはランダムに住居を訪問し、農家ではランダムに住居を訪問し、世帯主および回答できる大人がいるかを尋ね、回答できる大人がいた場合には、5-17歳の子どもまたは学校に通学している子どもが家族にいるのかを確認した¹⁶⁵。5-17歳の子ども、または通学している子どもがいる場合には世帯主に話を伺い、世帯主が不在の場合には伴侶、両者とも不在の場合には世帯主または伴侶のご両親、誰もいない場合には16歳以上の在住者にインタビューを行った。世帯の置かれている状況のほかに、プランテーション会社で労働する人びととその家族567名、民間農園で労働する人びととその家族578名、農家476名、計1,661名に関する情報を収集した。なお、本調査では5-17歳の子どもを対象としているが、学校に通学している17歳以上の子どもがいる世帯も調査に含み、本報告において、世帯を対象として記述している場合には、全世界帯を対象として分析した。

4.3 調査対象の特徴

コロンボから調査地までは、高速道路が開通されており、コロンボ北端にあるマハラガマ(Maharagama)という場所から高速バスに乗り、世界文化遺産の1つであるゴール(Galle)まで約1.5時間、料金は500ルピー程度である。しかし、ローカルバスに乗れば、一般道を走り、いくつものバス停で止まるため、その2.5倍から3倍近くの時間がかかる。ゴールでバスを乗り継ぎ、滞在先であるデニヤヤまで向かう。ゴールから調査地の中心となるデニヤヤまでの約75キロの道のりであるが、山沿いの道路のため時間がかかり、車で2-3時間くらいの所にある。ゴールから1時間半から2時間程度で調査対象地域の1地域であるモロワカを通過し、クタボラ郡の行政役所を通り過ぎると半公営農園会社の農園の1つであるRPC^(D)農園にたどり着き、デニヤヤ警察署を経て終点デニヤヤのバスターミナルに到着する。モロワカやデニヤヤはマタラ県クタボラ郡に所属する。マタラ県の大きさは1,283km²で、陸域面積1,270km²のうち森林面積が187km²、加えて13km²の水域から構成される。マタラ県における主要な天然資源はシンハラジャ自然保護区における多様な生物と海岸沿いの豊かな海の産物である。また、おもな産業は紅茶やココナッツ、ゴムなどの農園で生産される農産物であり、特に紅茶産業が経済的にも雇用の創出にも重要な地位を占めており、89の紅茶工場がある。この県にはスリランカ人口の約4%である約814,000(男性約39万人、女性42.4万)居住している。マタラ県に居住する人びとの多くは農村または地方に在住しており、都市に居住する人びとは11.9%であり、農園内に居住する人びとはわずか

165 平日の昼間は不在の家庭が多かった。

2.8%しかない。数値だけを見ると農園内に居住する人びとは少なくいが、調査地域においては、半公営の広大な農園が広がり、そこには多くの人びとが居住している¹⁶⁶。そして、民営の農園と紅茶栽培農家も入り組みながら紅茶畑が広がっている。コタポラ郡の大きさは 176km² で、約 63,000 人の人びとが居住している (DCS 2013)。

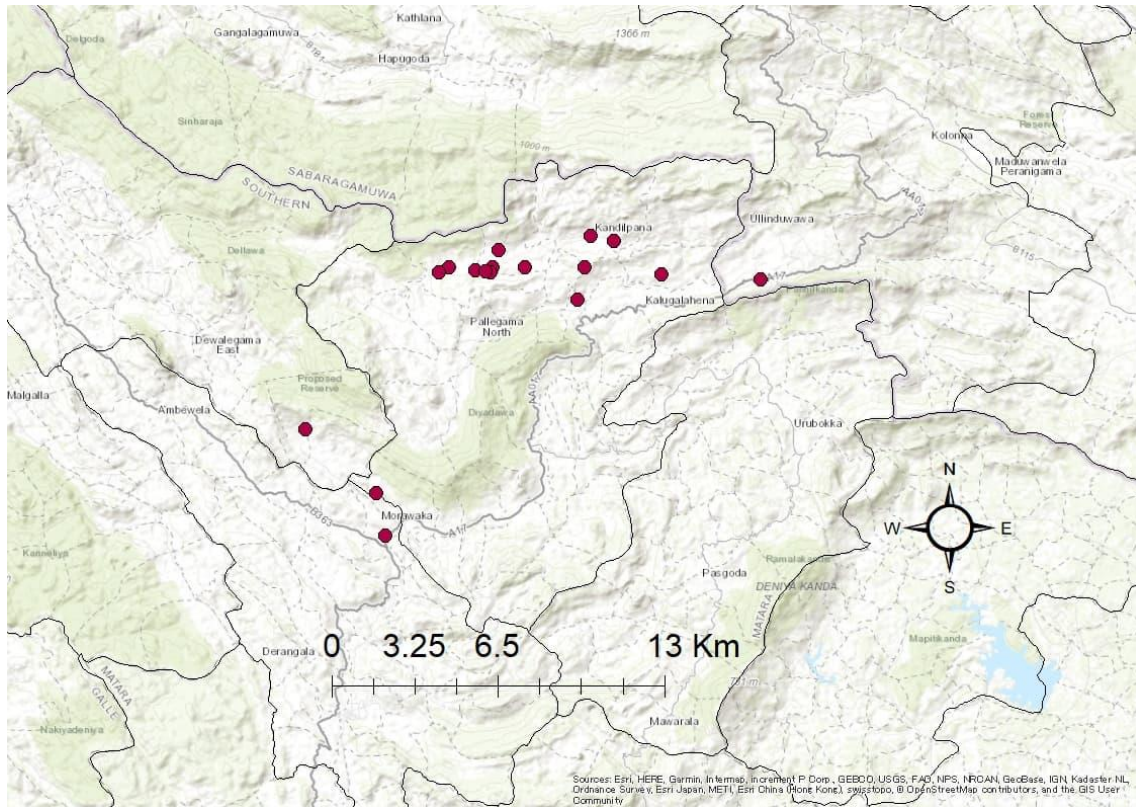


地図 2 マタラ県コタポラ郡

調査地の人びとの生活を知るため、調査中はキリウェドラ (Kiriweldola) 村の有機紅茶を栽培する農家に滞在した。この村の先に別の調査地であるキリワラガマ村がある。これらの村への公共交通手段はバスであり、デニヤヤのバスターミナルでキリワラガマ行のバスに乗り、20 ルピーを支払い、W Tea Factory を通り過ぎキリウェドラ、キリワラガマへと向かう。最終バスは 17:00 頃である。調査で訪問した農家の多くは、胡椒、シナモン、バナナ、米などの農作物を作ったり、他の仕事に従事しながら紅茶栽培をしている。近年の収穫量は以前に比べて減少しており、収入が低下しており、紅茶栽培だけで生活することができないというのが現状のようである。本調査では、5-17 歳のこどもの教育達成状況を経営形態間で比較を行うことから、各経営形態の居住地区

166 民族比率はスリランカ全体ではシンハラ人が 69%なのに対して、マタラ県では 94.3%を占めている。他の民族をスリランカ全体で見ると、スリランカ・タミル人が 11%、インド・タミル人が 12%、ムーア人が 6%であるのに対して、マタラ県ではスリランカ・タミル人は 1.1%、インド・タミル人は 1.5%、ムーアは 3.1%しかない。

からこどものいる 100 世帯を選定しようと試みた。しかし、農家については 10 村で各村 10 世帯のアンケート調査を行う予定だったが、対象年齢のこどものいる世帯が少なかったことと世帯主の許可が必要だったため、結果として訪問時に調査を行えない世帯もあり、最終的には 11 村 99 世帯での調査となった。なお、訪問については事前にアポイントメントは取らず、道すがらこどものいる紅茶栽培農家を訪問する方式で行った。また、紅茶産業では民族間の格差も指摘されているため、複数の民族の世帯で調査を行う予定だったが、調査対象地域における農家はシンハラ人のみであることがわかった。当該地域の行政官によると、政府の政策として国有農地を少数民族へ譲渡することが決定されているものの、農地がないために実現に至っていないとのことだった。デニヤヤ近郊には、2 企業が運営管理している半公営農園があり、調査は 5 農園でおこなった。各農園は広大で複数のディビジョンがあり、居住地区の環境も様々で、公道に近い居住地区もあれば、公道に出るまでに時間のかかる地区もある。同農園での労働者雇用条件については一律ではあるが、住環境や生活環境は同農園内でも異なるため、11 ディビジョンの居住地区の 103 世帯を訪問した。調査地域における半公営農園は広大ではあるものの、近郊には民間企業や商店、農園、農家もあり、且つ、いくつかの居住地区は公道に接しているため人びとの往来が、ヌワラエリヤのような高地に比べ、しやすい環境にある。半公営農園は歴史的な背景からタミル人の労働者が多く、103 世帯のうち 87 世帯はタミル人であった。調査地域における民間農園の規模は大小様々であり、小さい規模の農園については 10 エーカー以下の農園もある。The Tea Control Act の農園の定義によれば、10 エーカー以下は小規模経営となるが、本調査では農園主が農園であるという認識を持ち、かつ住居を労働者に提供している場合は小規模な民間農園とした。調査に協力してくれた民間農園は、大小さまざまで、1 つの大きい農園を所有している農園主もいれば、小規模の農園を複数所有する農園主もいる。本調査では 10 エーカー以下の小規模農園主もあわせ 22 農園に許可をもらい調査を行った。調査地域の民間農園では常に労働者不足であり、労働者側の事情と相俟って、労働者の出入りが頻繁で、労働力の移動が比較的容易に行われている。半公営農園は紅茶工場を所有しているが、民間農園については大規模農園、または紅茶工場を主としている農園のみが紅茶工場を所有していた。主な調査地域の位置は次の地図の通りである。



地図 3 調査地域

表 4-1 は調査対象である世帯と 5-17 歳のこどもの概要である¹⁶⁷。対象としたこどもの人数は 534 人であり、男女比はどの居住地区においてもほぼ同じである。また、世帯人数については民間農園部に居住する世帯では 6 人以上の世帯人数は 33 世帯であるが、農家では 8 世帯と少ない。そのため、農家のこどもたちの人数は他の居住地区に比べ少ない。民族については上述の通り、経営形態によって異なる傾向が見られ、農家ではどの世帯もシンハラ人であったが、半公営農園と民間農園ではタミル人が多かった。特に半公営農園では世代を超えて居住している世帯も多く、労働者の流動性が高い民間農園と比較しても、タミル人の居住者が多かった¹⁶⁸。

なお、本調査ではタミル人をインド・タミル人とスリランカ・タミル人と分けず、タミル人とした。その理由としては、多くの世帯では現在はスリランカ・タミル人であるとの認識が高く、アンケート調査においてもインタビューでもスリランカ・タミル人であるとの回答であったためである¹⁶⁹。人

167 302 世帯中、5-17 歳のこどものいる世帯は農家で 91 世帯、半公営農園では 97 世帯、民間農園は 100 世帯であるが、14 世帯(農家 8 世帯、半公営農園 6 世帯)には学校に通学している、または、進級をめざしているため、本調査の世帯を分析する際の対象とした。

168 民間農園ではシンハラ人の世帯主も半公営に比べて多く、100 世帯のうち 34 世帯がシンハラ人の世帯であった。

169 農園部に居住する多くの労働者やこどもがスリランカ・タミル人と回答する一方で、農園マネージャーや行政官によると彼らの起源はインド・タミル人という回答を得た。川島(2006)によれば、インド・タミル人たちがスリランカ国籍

びとの居住期間については、農家の人びとの親世代から同地域の居住であるのに対して、農園部では期間に違いが見られた。

表 4-1 調査地域の概要

	半公営農園 (RPC)	民間農園 (PE)	農家 (IF)
対象世帯数	103 世帯	100 世帯	99 世帯
対象人数	491 名	480 名	424 名
こどもの数	196 名	205 名	133 名
性別	男の子(106人 54.1%) 女の子(90人 45.9%)	男の子(117人 57.1%) 女の子(88人 42.9%)	男の子(72人 54.1%) 女の子(61人 45.9%)
家族構成	5人以下(84世帯) 6人以上(19世帯)	5人以下(67世帯) 6人以上(33世帯)	5人以下(91世帯) 6人以上(8世帯)
民族	シンハラ(16世帯) タミル人(87世帯)	シンハラ(34世帯) タミル人(66世帯)	シンハラ(99世帯)

「半公営農園」では、親の世代から居住しつづけている世帯が多く、15年以上居住しつづけている世帯は41世帯なのに対して、「民間農園」では4世帯しかあてはまらない。「民間農園」では多くの世帯が短期間しか滞在せず、数か月で次の農園に移動する労働者も多い。当初はこどもの教育達成の要因として、居住年数は考慮していなかったため2013年12月から2014年1月の調査では居住年数については質問していなかった。そのため、居住年数については、2014年の2月末以降から従来の質問に追加することとした。補足調査時に、2013年の12月15日から2014年1月14日までに協力してくれた「民間農園」の仕事に従事していた労働者のうち、100世帯中32世帯はすでに引っ越しており、居住年等については聞くことができなかった。半公営農園は、居住地区が広範囲のためすべての世帯に訪問して調査することはできなかった。

4.4 こどもたちと取り巻く環境

4.4.1 世帯収入と世帯主学歴

第2章に記述したとおり農園部では貧困率も減少してきている。マタラ県では1990/91年時は29.2%の貧困率であったが、2007/8年以降は10%台となっており、2009/10年には11.2%水準と

や選挙権を取得する中で、彼らの意識やアイデンティティが変化してきているとし、若い世代のなかでは、彼らの故郷は中央高地であり、「インド・タミル人」ではなく、「高地タミル人」とみなしつつあるとしている。この背景としては多くの人びとがスリランカを一時的な滞在地としてではなく、永住地であると見做しているとしている。

なった。しかし、この水準は農園の貧困率 11.4%とほぼ同じであり(DCS 2011)、全国レベルと比較するとマタラ県が豊かということはない。

農園に働く人びとの給与は職種によって異なり、管理職や事務職は月極めであるが、農園で茶摘みやメンテナンス、紅茶工業で働く人びとのお給与は日給月給となる。半公営農園の茶葉栽培や茶摘みに従事する人びとの給与や労働日数は労働組合と紅茶農園運営会社合同体との合意によって決まる。労働時間は週 40 時間であるが、茶園のメンテナンスの仕事の場合には 40 時間未満のこともある。茶摘みの仕事は朝 8 時間ごろから午後 4 時ごろまでで、昼食の 1 時間を入れて 1 日 7-8 時間程度であり、1 日当たり 20 キロ前後の茶葉を収穫している。半公営農園では茶葉が収穫できない状況でも取決め労働日数を労働者に保障しなければならない。1 日当たりの収穫量が決められた重さを超えた場合は 1 キロ当たりのインセンティブが支払われるとともに、皆勤の場合には手当を支払っている。2014 年時点の賃金は 1 日 620 ルピー(賃金 450 ルピー+その他)¹⁷⁰となる。昔は、家族のほとんどが大人になると農園における仕事に従事していたが、近年では農園に在住しながらも農園外に仕事を見つけて働いている者も増えている。調査に協力してくれた世帯は 103 世帯で、労働している人びとは 252 名で、内 23 名が副業も行ってた。収入を得ている世帯当たりの労働者数は 2.5 名となるが、22 名は家庭内労働者として何らかの労働に従事しており、これらの人びとも含むと 2.7 名が労働していることになる。

調査に協力してくれた民間農園(19 農園)では、1 日当たりの給与や収穫ノルマは農園によって異なる。P₁₀農園では 1 日当たりの給与は 500 ルピーで、ノルマは 25kgであった。民間農園で調査に協力してくれた世帯は 100 世帯で、労働している人びとは 226 名で、内 19 名が副業を行っていた。収入を得ている世帯当たりの労働者数は 2.3 名となるが、23 名が家庭内労働者として何らかの労働に従事しており、これらの人びとも含むと 2.5 名が労働していることになる。

本調査に協力してくれた農家は 99 世帯であった。調査した地域では多くの農家が茶葉以外の作物も栽培しており、バナナや胡椒、ココナッツなどによる収入や他の労働によっても収入を得ているのが一般的である。農家で収入を得ている人びとは 142 名となるが、82 名は家庭内労働に従事しており、世帯当たりの労働者は 2.3 人となる¹⁷¹。表 4-2 は調査地域の貧困状況と家族が従事している経営形態による平均収入である。また表 4-3 は経営形態による世帯所得の分布状況と世帯主の学歴状況である。

先行研究では、農園部内に居住する人びとの収入が低く、生活環境も良くないと指摘されるこ

170 労働者によれば 620 ルピー以下の収入であると話す人もいる。

171 農作の仕事に従事することもあるが、収入とした場合、個人換算することは困難であるため、個々では家庭内労働とした。

とがしばしばある。表 4-2 からわかるとおり、本調査世帯数を母集団とした場合、5,511 ルピーが貧困ライン¹⁷²となり、半公営農園では 9 世帯、民間農園では 6 世帯、農家では 16 世帯の計 31 世帯が貧困ライン以下の生活をしている。貧困率¹⁷³は約 10%であり、経営形態ごとに考察すると半公営農園では 10%、民間農園では 6%であったが、世帯平均収入が高かった農家が 17%と高くなった。このことは農家における所得格差が大きいことを示しているといえよう。また、貧困層の深刻さを示す貧困ギャップも、貧困ラインを 5,511 ルピーと基準にした場合には農家が高く、最も低いのは民間農園であり、農家における低所得層が最も貧困状態であることがわかる¹⁷⁴。

表 4-2 調査地域の貧困と平均収入

		半公営農園	民間農園	農家
世帯平均収入		26,970ルピー		
		25,151ルピー	26,534ルピー	29,303ルピー
貧困ライン		5,511 (31世帯)		
		9世帯	6世帯	16世帯
		5,722ルピー	5,590ルピー	6,250ルピー
		10世帯	6世帯	17世帯
貧困率		10%		
		10%	6%	17%
貧困 ギャップ	全体	1.7%		
	全体vs居住地域	1.92%	1.36%	2.25%
	居住地区内	1.7%	1.74%	3.93%

表 4-3 から調査地における世帯当たりの平均収入をみた場合には農家の所得が高く、29,303 ルピーであったが、分布をみると 20K未満の低所得世帯のこどもの割合は半公営・民間農園よりも高く、中所得である 20-30K未満の世帯のこどもが少ないことがわかる。一方、半公営農園では平均所得は 25,151 ルピーで、中所得の世帯出身のこどもの方が多いが、どの所得層

172 経済協力開発機構(OECD)は相対的貧困率について「等価可処分所得(世帯全体の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した数値)の中央値の半分(貧困ライン)に達しない世帯員の割合」と定義し、この計算式に従って相対的貧困率が国際比較されることが多い。

$$FGT_1 = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^H \left(\frac{z - y_i}{z} \right)$$

173 FGT 1 = 貧困ギャップ (Poverty Gap Ratio: P1)、
H = 貧困者の数 (Poverty Headcount) N = 総人口 (Number of Population)、
Z = 貧困線 (Poverty Line) Y = 家計 (Income/Consumption)

174 スリランカ政府が行っている Household Income 調査によると 2012 年から 2013 年時のスリランカにおける農園部の平均収入は 30,220 ルピーであり、1 人当たりの平均収入は 7,100 ルピー(1 人当たり) 149 (HIES 2013p9) であり、本研究の調査地域における貧困状況が低いことがわかる。

の出身割合も平均している。民間農園では平均所得は半公営農園よりも高く 26,543 ルピーであり、20K 以下の低所得層出身のこどもの割合が 27% (56 名) と低い。農園の労働者は給与制であり、半公営農園では 1 日 620 ルピーで、民間農園では農園による異なるが 500 ルピー前後である。世帯当たりの労働者数も、半公営農園では世帯当たりの労働者が 2.7 人、民間農園では 2.5 人であることから、同日数働けば、半公営農園労働者の方がより多い給与になるはずであるが、世帯内における労働者人数は世帯によって異なり、こどもたちの出身所得層も異なってくる。302 世帯を対象に、世帯収入と経営形態のクロス集計分析したところ、統計的に有意ではなく、経営形態の違いによって、収入に差があるとはいえなかった。しかし、スリランカ政府が行っている家計収支調査 (Household Income and Expenditure) によると 2012 年から 2013 年時のスリランカにおける農園部の平均収入は 30,220 ルピーで、1 人あたりの平均収入は 7,100 ルピーであり、スリランカ全体と比較すると調査地域の収入が低いことがわかる。

表 4-3 世帯収入と世帯主学歴

		半公営農園	民間農園	農 家
世帯収入	<20K)	30% (58名)	27% (56名)	34% (45名)
	20K<30K	37% (73名)	35% (72名)	29% (38名)
	>30K	33% (65名)	38% (77名)	38% (50名)
世帯主学歴	教育歴無	29% (57名)	50% (102名)	5% (6名)
	低学歴	57% (111名)	43% (89名)	47% (63名)
	高学歴	14% (28名)	9% (14名)	48% (64名)

各経営形態の特徴として、どの経営形態においても世帯所得の分布には差がなかったが、世帯主の学歴については経営形態によってその分布に違いがみられる。世帯単位で世帯主の学歴をみた場合、「半公営農園」では、学校に通っていない世帯主は 27.2% だが、「民間農園」では 50% と高く、「農家」では 4% となる¹⁷⁵。一方、高学歴にあてはまる世帯主は「農家」が一番高く 50.5% となり、次いで「半公営農園」の 17.5%、「民間農園」の 10% となり、「農家」と「両農園」との差が大きい。統計的にも有意であり、「農家」の世帯主と比較して、「半公営農園」や「民間農園」の世帯主の方が教育年数は低い。この背景としては、当時の社会情勢と経営形態によって人びとに求められる知識が異なるものと推察する。

175 こども 534 名に対する世帯主の学歴として見た場合、「半公営農園」では 29%、「民間農園」では 50%、「農家」では 5% のこどもの世帯における世帯主が教育を受けた経験がない。

スリランカでは、1948 年以降に社会基盤の充実化、経済・社会発展がなされてきており、教育も義務教育・無償教育となっていたが、内戦などの影響もあり、全国の実施は困難であった。祖父母世代は、英国の自治領として独立以後の発展を支えてきたが、農園部における教育問題は認識されつつも、民間経営である農園において労働者の家族の教育のことまで、強制することは困難であったと推察できる。また、親世代の時代には、国は経済成長をしつつも地域間格差と LTTE (Liberation Tigers of Tamil Eelam)¹⁷⁶との内紛をかかえており、全国において義務教育を実施することはできていなかった。特に小規模・中規模農園では農園内部に学校がないという事情もあり、子どもたちは当該農園外部の学校に通学しなければならないが、社会基盤が整っていない環境や通学路での安全性の確保という点から、当時の子どもたちが学校に通学することは現代よりも困難であったことは間違いないだろう。

また、労働力を必要とする紅茶農園では、生活する上での最低限の知識と、茶摘みや栽培地のメンテナンスについてのスキルを身につけていれば、教育歴がなくとも農園部で働くことができる。一方で、農家では茶葉育成のための知識や経営の知識を身につけることも必要であるとともに、家業を継がない子どもたちは家や地域社会以外においての職を見つけるために教育は重要であった¹⁷⁷。

4.4.2 住環境と生活環境

農園部に居住する人びとの課題は貧困だけではない。農園で働く労働者の多くは農園主が提供する農園内の居住地区にあるライン・ハウスという長屋に住んでいるが、水道やガスの設備が農園外部に比べ普及しておらず、安全な水の確保が困難かつ衛生上の問題も指摘されている (Oxfam 2002)。また、トイレや台所などを共有するような環境で生活しており、子どもの置かれている生活環境は他の居住地域と比較してもより劣悪であるといわれている。しかし、20 世紀後半以降、国際機関や外国政府、NGO の支援を受け改善されてきている。

(1) 住環境

表 4-4 は各居住地区における子どもたちの住環境と生活環境の状況である。住環境は第 3

176 スリランカ北部と東部を拠点にしていたタミル人のテロ組織。

177 調査票 E16 の「職業選択の機会」があるか否かについて、「有」と回答した人びとの理由として「教育」と回答した家庭は半公営農園では 70% であり、民間農園では 93% であるのに対して、農家では 49% であった。また、「無」と回答した人びとの主な理由は「教育」と「経済的事情」であった。「教育」が理由で職業選択の機会がないと回答した回答者は半公営農園では 50% であり、民間農園では 74%、農家では 59% があてはまると回答した。複数回答であるため、「無」と回答した 109 世帯のうち、39 世帯は「教育」および「経済的理由」の両方をあげていた。

章と同様に「住居の所有の有無」「住居のタイプ」「1人当たりの部屋数」の3変数から生成した。

表 4-4 住環境と生活環境

		半公営農園	民間農園	農家
住環境	低	75% (140名)	72% (140名)	—
	中低	22% (41名)	10% (9名)	—
	中	4% (7名)	14% (281名)	78% (104名)
	高	—	4% (8名)	22% (29名)
生活環境	低	2% (3名)	—	1% (1名)
	中低	7% (13名)	14% (28名)	2% (2名)
	中	62% (120名)	66% (135名)	61% (81名)
	中高	30% (58名)	20% (41名)	37% (49名)
	高	0.5% (1名)	—	—

表 4-4 の住環境はウェイトをつけずに 3 変数を足したものであり、結果として農家では住環境は中レベル以上に属する子どもたちが多く、半公営農園と民間農園では低レベルの世帯に属する子どもが多くなっている。特に、半公営農園では、96.3%の子どもたちが低レベルの住環境の下、生活している。

住居を所有していると回答した人びとは半公営農園では 15%となり、民間農園では 28%となる。調査に協力してくれた農家の中には、所有者が世帯主のものではなく両親のものであるという世帯もあり、この場合にも自己所有とした。このように、農家の場合、居住する家のタイプは一戸建てが通常であり、住居も所有しているため、住環境変数では中レベル以上の住環境に属することになる。一方、半公営農園では土地は国のものであるが、住居は農園の所有となる。したがって、住居の所有権は企業に属するが、長期にわたり当該住居に所有している場合には住居者の居住権を認め、農園の仕事に従事していなくても居住を認めていると農園マネージャーは話していた。半公営農園内に居住する人びとに、家の所有権について聞いたところ、所有権を持っていると話してくれた人びとが 14 世帯いた¹⁷⁸。そこで、所有権を持っていると話してくれた人びとに、所有権を転売できるのか伺ったところ、住居を当該農園内の人であれば売ることができるかと回答してくれた。民間農園では農園が住居を提供しているが、半公営農園とは異なり、当該民間農園での仕事を辞めたら、住居から退去しなければならない。しかし、民間農園は農家と農家の間に点

178 実際には所有権は有しておらず、居住権である。ただし、農園内に居住する人びと間では売買ができることから、所有権を持っているという認識が 1 部の人びとに持たれている。

在していることも多く、農園の近所に住居を所有している人びとが農園での茶摘みや工場での労働に従事することがある。そのため、民間農園の労働に従事している人びとの住居所有率は半公営農園より高くなっている。

また、戸建の場合には部屋数が1部屋だけということは少ないが、長屋の場合には1間ということも多い。農家では1人当たり1部屋未満の世帯は7世帯だけであるが、半公営農園では35世帯、民間では38世帯が1間で生活していた。近年、長屋に住む人びとの住居改善策の1つとして、半公営農園では戸建を建てたり、戸建の住居に住むことを希望する労働者への支援を国や農園が行っている。しかしながら、提供側の戸建建設費用負担の課題に加えて、労働する農地までの利便性や戸建の維持費自己負担などの労働者側の事情もあり、農園では住環境計画を立て、整備はしているものの、すべての労働者に提供はできていないと社会福祉士は話してくれた。

(2) 生活環境

生活環境変数は『こどもの活動調査』同様に「飲料水の安全性」「照明」「トイレ設備」と「料理のエネルギー源」の4つの変数を導入して生成した。本研究では生活環境はウェイトを付けず、4変数を足したものであり、中レベル以上の世帯に所属している子どもたちは半公営農園と農家では90%以上であるのに対し、民間農園では84%となり、若干、民間農園の生活環境レベルが低かった。

2013年にスリランカ統計局が行った生活環境調査によれば、マタラ県の生活環境は5段階評価¹⁷⁹では「非常に高い」とされており、マタラ県16郡のうち14郡が「非常に高い」と評価されている。コタポラ郡も生活環境の評価は「高」であるが、小さい単位であるコタポラ郡にある37郡卿のうち、22郡卿が「低」または「非常に低い」という評価となっている。調査に協力してくれた農家がある村々の多くは、生活環境評価ではコタポラ郡の中では最低と位置付けられている。調査者が拠点としていたキリウェラドラ村のある郡卿はマタラ県にある650郡卿の中でも下から2番目となっており、必ずしも生活環境が良いということはない¹⁸⁰。

179 「非常に高い、高い、平均、低い、非常に低い」の5段階評価であり、指標は項目ごとに異なる。

180 統計局調査では、生活環境の評価を飲料水、照明、トイレ、住居の建築資材という4つの基準を用いて総合的に評価しており、各基準を確認することができない。なお、コタポラ郡の調査では建築資材についてはインタビューを行っていないため、本稿では全国・県・郡との比較に留める。

安全な飲料水へのアクセス⁽¹⁸¹⁾:

統計局の調査結果によれば、最高評価は 94.1%の普及率以上であり、マタラ県における安全な飲料水の普及率は 86.3%であり、スリランカ全体の中では平均レベルであるが、マタラ県の評価にマイナスの寄与をしているのがコタポラ郡における普及率である。コタポラ郡における安全な水の普及率は 64.2%である。上述したように、コタポラ郡は紅茶の産地であり、山の傾斜に沿って多くの紅茶畑を見ることができる。茶畑は農家、農園によって管理され、農園の多くは労働者が住むことができる長屋(ライン・ハウス)を持つことが多い。農園の居住地区の規模はさまざまであるが、インフラ整備が整っていない居住地区では井戸や水道を共有する。調査者が訪問した農園では、ライン・ハウスの裏に 1 つのホースが引かれており、それにラインルームの数と同じ蛇口が付いていた。また、農家では、住居が 1 軒屋であるため、多くの家では上水道があるが、山から流れる源流や湧出る水を飲料水としている世帯も多く、意外にも室内ではなく野外に上水道が設置されている家も多かった。このような上水道のインフラ状況のため、生活環境調査の基準に基づくと「非常に低い」という評価結果になったものと推察する。

2013 年に実施した現地調査では、安全な水の定義をどのようにするのかで結果が異なるが、ここでは生活環境調査の基準を準用し、「Protected Well」「Tube well Tap」を安全とし、「Unprotected well」「Stream water」「River/Tank/Streams」「Others」を安全でないとした。本現地調査の結果、半公営農園では 33%、民間農園では 26%、農家では約 31%の世帯が安全な飲料水を口にすることができるということがわかった。特に、民間の農園で働く労働者の安全な水へのアクセス状況が悪いことがわかる。しかしながら、統計的に 10%で有意ではなく、各居住地区によって安全な飲料水を得られることに差はないといえる。

このように調査地域における安全な水へのアクセスについては生活環境評価よりも低い環境にあるが、これらは人びとの生活状況による評価であり、生活環境の衛生状態が科学的に必ずしも一致しているとはいえない。そのため、その補足調査として 2017 年 12 月後半に現地を訪れ、飲料水の大腸菌検査を行った。経営形態間の比較を行うため、本調査に協力してくれた半公営農園 16 ヶ所、半公営農園内学校 1 校、民営農園 15 ヶ所、農家 20 世帯、デニヤヤ地域 1 か所、

181 飲水の源として 11 の指標が用いられており、安全な飲料水とみなされる指標は 9 つ(「Protected well within premises」「Protected well outside premises」「Tap within premises but outside unit」「tap outside premises」「Rural water supply protect」「Tube well」「Bowser」「Bottled water」で、安全でないとされているのは「Unprotected well」「River/Tank/Steam/Spring and other」から得ている水である。

5 段評価の基準は、非常に高い=94.1-98.2%、高い=90.2-94.0、平均=81.6-90.1、低い=72.4-81.5、非常に低い=62-72.3

モロワカ地域公道の水供給施設の計 54 か所で 4 サンプル¹⁸²をとり大腸菌と大腸菌群の状況を調べた。民営農園や半公営農園では、飲料水を共有の場所から得ていたりする世帯も多いため、世帯数の数が少なくなったが、本実験から、経営形態によって安全な飲料水へのアクセスが異なるとはいえ、また、飲料水の共有という理由だけでは不衛生な状態であるとはいえないということが明らかになった。

居住宅における照明の源⁽¹⁸³⁾:

統計局の調査では照明の源として、「電気」がどの程度普及しているのかで評価しており、最高評価は 89.3－97.8%の普及率であり、スリランカ全体の平均は 90.2%であるが、マタラ県の電気照明の普及率は 94.1%であり、「非常に高い」レベルである。現地調査の地域はシンハラジャ森林保護地区に隣接している紅茶産業を対象としているため、山間や山の傾斜に紅茶が栽培されていることが一般的であり、大都市のように街が整備されていない。そのため都市や比較的平坦、または傾斜が緩やかな地域よりも電気設備を整備することは困難であると予想していた。しかしながら、統計局調査結果ではコタポラ郡における普及率は非常に高いという評価にはならないまでも、最高基準に近い 88.19%普及しており、「高い」の評価を得ている。現地調査では、統計局調査よりも若干良い結果となっており、半公営農園では 90%の世帯が電気照明のもと生活を営み、民間農園では95%の世帯が、また農家では約98%の世帯が家庭内での照明として電気により光を得ていることがわかった。電気普及率は農家が一番高く、次いで民営農園、最後に半公営農園となるが、その1つの理由としては、農家の方が比較的電気にアクセスしやすい場所に建てることのできるからであると推察する。調査地域では、かなり山奥にあっても、1軒また1軒とあり、電線が引かれていた。

民間農園には大中小規模の農園が含まれているが、訪問した住居の多くは比較的公道に近いところに居住地区があることが多かった。いくつかの居住地区は紅茶畑が広がるさらに奥にあり、アクセスが厳しい場所もあるが、公道からの距離という点では半公営農園よりも近いと感じた。一方で、広大な半公営農園内は複数のディビジョンにわかれており、ディビジョンごとに居住地区があり、公道に接している居住地区もあれば、農園内の中をひたすら奥へとはいったところに居住地区があるところもあった。農園内の居住地区では電気は農園主より提供されている。そのため、不具合があった場合には農園の担当部署が修繕に当たるが、時期や場合によってはすぐ

182 54 か所中 4 か所は 2 サンプル

183 照明 5 段評価の基準は、非常に高い=89.3－97.8%、高い=85.0－89.2%、平均=73.5－84.9%、低い=23.7－73.4%、非常に低い=10.2－23.6%

に対応ができないこともあり、農園外部からの専門家を呼ぶ必要がある場合には、公道から離れている居住地区まで行くのが困難な時もある。近年では居住者にある程度の改築を認めており、居住者によって増築され、建てられた部屋では電気設備が整っていないこともあった。このような様々な理由が普及率に影響を与えていると考えられる¹⁸⁴。

居住宅におけるトイレ設備⁽¹⁸⁵⁾:

日本のトイレは世界において評価が高く、機能も多く、また非常に清潔感に溢れている。しかしながら、すべての国で日本のような設備がどこにでも備わっているとはいえない。

統計局が公表しているデータでは、スリランカ全体では各世帯がトイレを占有できている比率は 89.9%であるが、マタラ県ではスリランカの平均率を超えて 90%の普及率であり「非常に高い」という評価を得ていた。コタポラ郡は 83.45%であり、「高い」評価のカテゴリーに属する。現地調査では半公営農園では 89%の世帯がトイレを占有しており、民間農園では 87%の世帯が、農家では 98%の世帯がトイレを占有できている。調査中は訪問宅でトイレをお借りすることもあるが、どの世帯においても綺麗に清掃されている。しかしながら、トイレが住居外に設置されている場合には、自然あふれる環境の中で珍しい鳥や昆虫、爬虫類が生き生きとトイレの中で生活していることも多い。宿泊先の農家は 2 階建てであり、現在は 1 階と 2 階にトイレがあるが、昔は庭先にあるトイレを使用していた。住居内のトイレであるため、比較的虫は少なかったが、1 階のトイレには小さいカエルがいつも 2 匹いた。2 階にあるトイレは自動水洗ではなく、用を足した後に蛇口から水をバケツにため、流す方式である。入り口が外に接しており、夜になるとトイレの光に誘われた虫たちがトイレの中に集うとともに、いろいろな虫を見かけることができた。一方、農園内の居住地区では各世帯にトイレがあったとしても、室内に設置するスペースがないこともある。そのため、居住地区内の空き地に世帯数と同じだけのトイレが設置されており、共有されているということもあった。トイレについては科学的根拠を示せないが、自然環境が豊かな場所では、管理状況によって、目に見えない雑菌やばい菌が繁殖し、使用する人びとの健康に影響を与える。このように各家がトイレを占有していたとしても、管理の仕方によっては衛生的な環境とはいえないことがわかる。

184 家庭内での電気による照明が普及しているからといって、自宅外での道路における照明は限られており、日が落ちた後の道のりには懐中電灯が必要なほどである。山奥の居住地域における暗闇は人びとの生活や安全性に影響を与えている。

185 トイレ 5 段評価の基準は、非常に高い=87.6-90.9%、高い=83.0-87.5%、平均=77.5-82.9%、低い=62.7-77.4%、非常に低い=62.1-62.6%

料理のためのエネルギー源:

『生活評価調査』には料理のためのエネルギー源については含まれていないが、本研究ではこどもを取り巻く環境の1つとして考察する。日本では電気やガスも普及し、薪による釜飯は美味しいが、安全の観点からは電気コンロを使用する家庭が多い。スリランカではいまでも薪をくめる竈で料理する家庭が多く、電気やガスの普及率が高いコロomboでも竈がある家が多い。調査地域では料理をする際にガスを使った台所器具を使用する家庭は少なく、1日4回から5回の紅茶に注ぐお湯も竈の火で沸かしている。調査地域は山間でもあり、コロomboに比べると涼しいが、昼間はいつでも暑い。そのため、風呂場がない家庭もあり、川で体を洗う人びとも多い。しかし、夜には肌寒くなることもあり、寒暖の差で体調を壊す人びともいる。この場合には、竈の火でお湯を作るが、やはり火を使うため、電気やガスに比べて管理が簡単ではない。そこで、料理のための資源としてガスと電気を使用している場合には「安全」とし、それ以外の場合には「安全でない」とした。調査の結果、電気またはガスの調理機器が備えてあった世帯は、半公営農園では9%であり、民間農園では2%だけであった。農家でも25%の普及率であり、多くの世帯では照明に比べて調理機器の源が電気やガスではなく、薪や灯油などの資源であることがわかった。

生活環境は住環境と同様に、日々の生活の中でこどもに影響を与える重要な要素の1つである。安全な飲水や衛生的なトイレはこどもたちの健康状態に直結する。電気による照明は灯油による火事の危険を少なくし、こどもたちを火から守るとともに、ランプやローソクよりも明るく、家の中での仕事や勉強することを容易にする。また、電気やガスを用いた料理器具は、火事の危険性を低くするだけでなく、母親やこどもを薪拾いから解放し、家庭内労働を減少させる。本変数については、科学的根拠が伴っていないという制限はあるが、一般的傾向として低い住環境や生活環境はこどもの学業だけでなく、こどもの体や精神の育成にも影響を与えると考えられる。そこで住環境および生活環境と教育達成の関係について第5章で考察していく。

(3)生活水準の満足度

上述のとおり、調査地域では、世帯収入は統計的に経営形態による差があるとはいえなかったが、世帯主学歴や住環境、生活環境は、経営形態による違いがあった。われわれは同じ収入で、また同じような環境でも、その環境をどのように感じているのかは人によって異なる。同じ収入を得ていても、こどもたちの教育費を支出するのか、アルコールや遊興費に支出するのかは、その世帯が何を重要に思い、考えているのかによって異なる。そこで、人びとが(1)現在の世帯収入について満足しているのか否か、(2)現在の生活水準にどのように思っているのか、また(3)過去

と比較して現在の生活状況をどのように感じているのかを質問するとともに、(4)他の世帯と比較して自分の家族の生活水準は平均以上と思っているのか否かについて考察分析してみる。

(1)の現在の世帯収入については2択とし、満足していない場合には「0」とし、満足している場合は「1」とした。また、社会経済的地位における自分たちの位置づけは自尊心や尊厳とのかかわりにおいても重要である。そこで、回答者が他の世帯との比較において自分たちをどのように位置付けをしているのかを考察するため、現在の世帯所得が近隣の世帯と比較して平均以上か以下かについて質問をした。平均以下と回答した場合には「悪い」とし、平均と回答した場合には「同じ」とし、平均以上と回答した場合には「良い」とした。世帯収入に満足していると回答した世帯は、農家では28.4%となり、半公営農園の22.4%や民間農園の17.2%と比較して若干高い。また、近隣の世帯との関係においては、世帯収入満足度と同様の傾向を示しており、平均以上と考える農家が36.2%に対して、半公営農園では20.6%となり、民間農園では8.1%であった。

このことから、農家では世帯収入が近隣平均より高いと思っている人びとは3分の1であるが、収入に満足している人びとはその比率よりも低いことがわかる。逆に半公営農園では世帯収入は近隣の平均よりも高いと思っている人びとと、世帯収入に満足している世帯はほぼ同じであることがわかった。一方、民間農園で働く人びとの世帯平均収入は半公営農園よりも高かったが、世帯収入が近隣より高いと考えている世帯は11人に1人と低く、収入に満足している人びとの割合は6人に1人であった。前述の考察から経営形態間において世帯収入格差があるとはいえなかったため、世帯収入と収入の満足感については関連性があると推測していたが、相関は13%であり、あまり関連性が強いとはいえなかった。また、他の世帯と比較した場合、実際の収入が高くても、他の世帯よりも低いと感じている人びとが多く、実際の所得と意識の間には乖離があることがわかった。

(2)現在の生活水準満足度については、世帯収入だけではなく世帯状況や住環境、生活環境も含めて総合的にどのように感じているのかについて質問した。生活満足度の選択肢は4択で、生活水準が低く大変であると回答した場合には「0」とし、改善が必要と考える場合には「1」とし、おおむね満足の場合には「2」とし、大変満足している場合には「3」とした。現在の生活水準に最も満足していたのは半公営農園の労働に従事する人びとで、「満足」または「大変満足」と回答した割合は58%となり、次いで農家の50.5%となる。民間農園では43.4%と半公営農園や農家に比べて低いが、「大変」であると回答した世帯の割合については、どの経営形態においても13%前後となり、あまり差があるとはいえない。生活水準満足度については、従事する経営形態によって、差が存在するように思われたが、統計的には有意ではなく、働いている経営形態の違

いによって生活水準満足度に違いがあるとはいえなかった。図 4-1 は各経営形態において過去と現在の生活状況に対して、自分達の生活水準をどのように評価しているのかを示している。

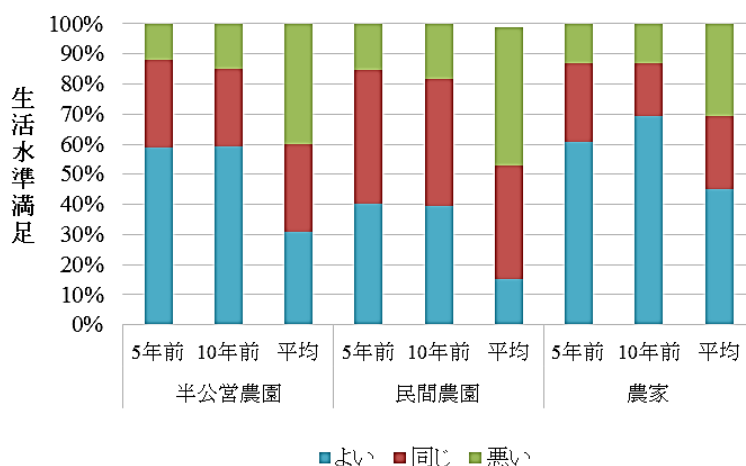


図 4-1 生活満足度

半公営農園:

調査地域の農園は半公営農園以外では大小さまざまであるが、大きな農園では行政やTPHDによる指導があり、以前に比べ、経営者や管理者も労働者の生活にも注意を払うようになってきている。また、半公営農園では労働組合との話し合いにより毎年給与も増額されてきており、社会的基盤や社会福祉事業も外国政府や UNICEF などの国際機関、Save the Children (国際 NGO) などのような海外からの支援も受け、住環境や生活環境も改善されてきている。このような背景から、自分たち家族を取り巻く環境については 10 年前や 5 年前より「改善されている」、または「同程度」であると感じている世帯が 86-88 世帯と多くなったものと推察する。一方、近隣地域と比較した場合には「平均より良い」、または「同じで程度」であると思う世帯は 69 世帯となる。

半公営農園の平均収入は 25,151 ルピーであり¹⁸⁶、平均よりも低い世帯は 67 世帯である。実際の平均以下の世帯数と近隣の平均よりも悪いと意識している世帯はほぼ同じであり、102 世帯のうち、34 世帯が平均より収入がよくないと感じていた。所得が十分でないと感じられる理由の1つとして、近年の物価高騰と所得の低さがあげられた。近年、スリランカの経済は成長を続け、人びとの所得も上昇しているが、インフレーションによる物価の高騰は所得の上昇率より高く、働き手の少ない世帯では給与で賄うことができないと回答してくれた世帯もあった。半公営農園では農園の労働に正規雇用者として登録した場合には、1 ヶ月当たりの労働日数が保障されており、

186 無回答の世帯は除く。

雇用者側の都合により休業となった場合には給与が保障される。しかし、有給制度はないため、様々な理由で欠勤する場合には給与が減額される。また、農園で働いていた人びとが、定年後に収入を得る機会がかなり限られているのも 1 つの理由であると考えられる。スリランカでは平均寿命は高いものの、定年する年齢は男性が 55 歳、女性が 50 歳と早く、農園の労働にのみ従事していた労働者が農園外で仕事を見つけることは困難である。定年後には、退職金と年金を受け取ることができるが、それらは生活するのには十分ではないと彼らは話す。2012 年に中央高地の農園を訪問した際、外国人観光客を相手に茶摘みの写真を撮らせて、お金を受け取っている元ブッカー（茶摘みをする人びと）の女性達がいた。彼女たちに話を聞いたところ、定年後の生計を立てるために、観光客と一緒に写真を撮って、収入を得ているとのことだった。

半公営農園では 60 世帯が近隣と同程度以上の生活水準であると考えており、「世帯収入や子どもの教育に満足している」、または「幸せ」であると回答してくれた。とくに満足していると回答した 31 世帯では、3 分の 2 の世帯が「現在の収入で生活できる」とし、3 分の 1 は、「こどもに良い教育をすることができている」と回答している。

民間農園：

中小規模の農園では大農園ほど政府の目は行き届きにくく、労働者の移動も頻繁であることから、農園主にとっては短期労働者が最低限の生活ができる施設を提供できればよいと考えている農園も多い。しかし、民間農園の所得は半公営農園と比較して、必ずしも低いわけではない。しかしながら、現地調査の結果によると 10 年前や 5 年前と比較して生活水準が良いと思うと回答した世帯は 39 世帯であり、近隣に居住する人びとと比較した場合よりも高い水準にあると回答している世帯は 16 世帯である。

平均より生活水準が良くないと回答した世帯の主な理由は「低所得」であることであった。低所得であると話してくれた世帯の中には、もっとお金が必要であると話してくれた。一方、近隣の平均より良いと考えている世帯では、3 世帯が「こどもに良い教育ができる」とし、4 世帯が「十分な収入であり、ローンもない」と話してくれた。しかし、同じレベルであると回答した 37 世帯では、生活水準は近隣と同じであるが、世帯収入では十分でないと言ってくれた。

民間農園における 1 つの課題として、労働者の意識が人びとの生活水準満足に影響を与えているのではないかと推察する。農園での栽培地における労働力不足は世界銀行(2007)よっても報告されており、農園主やマネージャーは労働者の確保のために、労働者の借金を肩代わりし、自分の農園で働いてもらうことが多い。労働者はその農園で働きながら、借金を返済していくシス

テムであるが、労働しない時は給与が支払われず、また茶葉の収穫量が基準量を超えない時は低賃金であるために、労働者のなかには思っていたほど稼げない労働者もいる。そのため、より良い賃金を提示してくれる農園に移動するが、同じことが繰り返されることが多い。2014年の調査時にモロワカの農園で働いていた労働者は、穏和な顔と口調で、農園主が借金を肩代わりしてくれたし、とても親切で優しいと話してくれた。しかし、農園主の彼らに対する扱いと経済的な問題とは別のもので、2016年にその農園を訪問した時には彼らはすでに移動していた。農園主によれば、なにも言わずに夜逃げしてしまったとのことであった。

2017年12月に再びこの農園主を訪問し、お話を伺った。農園主によれば、人びとの課題は「抱えている借金や、嫌なことから逃げてしまう傾向が強い」からであるという。彼は「労働者が自尊心を高め、長期的視点で自分たちやこどものことを考えられるようにしなければならない。また、何に対しても誠実であることの大切さを学んで欲しい」と語り、働く人びとが周囲の信頼を得ること、頼られるような人材になることの大切さ、またそのことにより自己肯定をし、自尊心を高めるための啓蒙活動を実践していた。彼は一緒に働くすべての人びとが大切な同僚、働き手であることを理解してもらいたいと言う。そのために、彼と一緒に働く人びとは、スリランカでは低カーストのイメージが強い「Labour」という呼び方を改め、「Worker」または「Staff」と呼ぶようにしていると説明してくれた。さらに、雇用している労働者だけでなく、近隣の人びと意識を高めるため、農園主自らが自宅や道路を掃除し、道路にごみ箱を設置し管理していた。このように労働者の意識を高める活動を試みているが、長期間滞在して働く労働者は数少なく、なかなか長期的視点に立って物事を考えてもらうのは難しいという。

農 家:

前述のとおり、調査地域は生活環境評価調査でもあまり良い評価を得られていない。他の社会基盤も良いとはいえ、2013年から2014年の本調査期間中に、道路の陥没、地滑り、大雨による川の水が橋を覆い隠すなどの状況を目の当たりにするとともに、たびたび起こる停電では何も見えず、ローソクを恐る恐る手元に持っていたのを経験した。このように道路の修繕や電気の安定供給の課題があったが、農家の人びとは行政やNGOのおかげで国道も整備されつつあり、生活状況は以前に比べ改善されつつあるという。しかしながら、近年の物価高騰に加えて、茶葉の収穫量が減り、結果として収入が少なくなっているのが最近の悩みであると話してくれる世帯が多かった。

アンケート調査の結果によると、10年前または5年前より良い生活水準であると回答した農家

は 60-68 世帯であり、農家の人びとの多くは以前よりは生活水準が向上していると思っているようである。一方、デニヤヤ地域の人びとの生活水準と比較して、平均以上であると回答したのは 44 世帯であり、平均以下であると思っている世帯は 30 世帯であった。平均以下と思っている世帯の多くは世帯収入について語ってくれた。農家の人びとによると、「近年、デニヤヤ地域のお茶の木(有機栽培以外)に、寄生虫が発生しており、収穫量を減らしている。原因は不明だが、数年前に比べると 3 分の 2 程度の茶葉しか収穫できない。茶葉の買い取り料は以前よりも良いが、収入は減り、物価は高騰している。支出に収入が追い付いていない。」とのことだった。平均以下と回答してくれた世帯のうち 13 世帯が「支出が多いが、低収入である」と話してくれた。一方、平均以上と回答した世帯では、半分以上の世帯が所得には満足するとともに、その他の理由として「現在の社会的地位」や「幸福な現状である」、「こどもたちの教育の満足している」と話してくれた世帯も多くあった。

本分析から、10 年前や 5 年前に比較して生活水準が同じレベル以上であると感じている世帯は、どの経営形態においても 81-88% であることがわかった。しかしながら、近隣の平均と比較すると少なくとも同じレベル以上と感じている世帯は 65-70% となり、調査地域の人びとが以前よりは生活水準が上がっていると実感しつつも、他者との比較では平均以下であると考えている世帯があることがわかった。生活水準が平均以上、または平均以下と回答した人びとの主たる理由として挙げられたのは「収入」であり、調査地域の人びとにとって「収入」が生活水準の重要な要素であることもわかった。しかしながら、「収入」だけが生活水準を決める決定的な要素ではなく、「こどもの教育」も人びとにとって、生活水準を判断するに重要な要素であった。こどもの教育を理由としてあげた世帯割合が半公営農園で多かったことは、こどもの教育に対する意識が半公営農園の世帯にあることを示している。教育に対する親の意識と教育環境に対する満足度の関係については次章で論じることとし、本章では論じない。

4.5 こどもの健康と 1 日のながれ

4.5.1 こどもの健康状態

心身ともに健康であることによって、われわれは日々の生活を平穩に過ごすことができ、体や心がひとたび不調となると日常生活に支障をきたすことになる。科学や医学が発展した現代においても、健康であることは重要である。日本では東洋医学と西洋医学といわれる言葉をよく耳にするが、スリランカには伝統医療と西洋医療がある。伝統医療はアユールバーダと呼ばれ、スリラ

ンカで採ることができる自然の薬草や伝統的な治療方法によって人びとの病気がけがの治療を行う。一方、西洋医療は海外において開発された薬や技術、治療方法に基づく治療である。

中央高地では病院の機能を持つ広大な農園や、救急車を備えている農園もある。調査に協力してくれた半公営農園では、総合病院は備えていないものの、医務室があり、医者や看護師が定期的に来ているということだった。コタポラ郡のモロワカやデニヤヤ地域では紅茶生産者だけでなく、お米や穀物を作る農家もあれば、宝石、衣料関係の小さい町工場やさまざまな商店もあり、郡卿の中心街近郊には比較的大きめの警察署や郵便局、総合病院などがある。しかしながら総合病院は高度の技術を備えた様々専門分野の医者や技術者、看護師が必要となり、いたるところに大きな病院があるわけではなく、深刻な病気やケガでない場合には、「Dispensary」という医院に行く。この「Dispensary」は日本で言うところの町医者であり、デニヤヤ郡卿の中心街にはいくつかあった。地元の人びとのことをよく把握しているが、副業でいくつもの「Dispensary」を掛け持ちするため、必ずしも毎日同じ時間帯に同じ医院にいるとは限らない点が地元民にとっては少し困るようである。また、各地域には保健所が設置されており、助産婦さんが派遣されており、近隣の妊婦さんや産後の母親の指導、こどもの健康管理の指導、栄養不足のこどもに対して栄養価の高い食料の配布などをしていた。

学校では健康診断や予防接種を行っている。RPC_(B)農園内にある学校を訪問した際には、UNICEF から派遣された医師や看護婦と思われる人びとがこどもたちに予防接種をしていた。スリランカでは公共の医療機関では医療費は無償であるが、薬代や手当をする医療品の一部は自分で購入しなければならない。薬代の単価は市販のものであれば、市販価格で一定であるが、病院の処方に従い、薬剤師から購入する場合には薬などはほぼ言い値のようである。調査中は接骨専門のアユールベーダ医師(紅茶栽培と兼業)の自宅に滞在していたが、治療費は患者さんの支払い能力に応じて異なっていた。医師によれば、薬草の費用を支払って欲しいとは思っているが、収入のない世帯では治療費を払えないことが多いという。そのため、裕福な世帯からは高めの治療費をもらい、貧しい世帯からは支払える分だけ受けとることにしているとのことだった。公共の医療機関では、診察してもらうことや入院については無償であるが、それらの病院でもらうことはできない薬などは自己負担になるという。

スリランカではしばしばこどもの低体重や栄養不足が指摘されている。磯邊(2010)によれば農園部のこどもは都市や地方のこどもたちと比較して低体重の傾向にあると指摘している。また、農園では殺虫剤や化学肥料なども散布されており、紅茶工場では紅茶の粉塵が大量に発生し、風に流されて農園地内の居住地区にまでその影響を与えているという(OXFAM 2002)。キリウェ

ラドラ村に滞在中、昼間は非常に暑いが夜には寒くなる季節があった。通常はシーツ1枚が掛布団の代わりをしていたが、寒い夜には毛布が必要な夜もあり、12月～1月にかけての調査では日本で来ていたダウンコートが毛布代わりとなったときもある。しかしながら、寒い夜は減多にないため、子どもたちはいつも通りのシーツ1枚で眠ってしまい、風邪をひくことが時折あるようだ。子どもたちの健康状態について質問した結果が表4-5である。健康状態については、「1. 非常に健康である(エネルギーがみなぎっている)」「2. 健康である」「3. 疲れ気味である」「4. 病気である」「5. けがをしている」「6. その他」の6択からなり、1から2を「健康」とし、3から6を「体調不調」とした。世帯主の健康状態は経営形態間による格差はないものの、半公営農園の仕事に従事している家族の世帯主は19%が体調不良であり、民間農園における仕事に従事している家族の世帯主と農家の世帯主は約13%が体調不良であった。子どもの健康状態は世帯主よりもよく、体調不調の子どもたちは最も高い半公営農園でも7%であった¹⁸⁷。

表4-5 子どもたちの健康状態

健康状態	半公営農園	民間農園	農家
不健康	7% (13名)	1% (2名)	3% (4名)
健康	93% (179名)	99% (199名)	97% (123名)

子どもたちの健康状態とともに気になるのは子どもの発育状態である。2013年から2014年にかけて行った調査では子どもの発育状態まで質問することができなかった。そこで、2014年の夏に行った補足調査に体重計とメジャーを持参し、子どもたちの身長と体重を計らせてもらった。持参した体重計には脂肪率や水分率、筋力率、骨密度も測れる機能がついており、その数値を知りたくて補足調査に協力してくれた人びとは合計で173名であるが、本調査で協力してくれた人びとの中で体重や身長を測ることができたのは大人24名と子ども23名の計47名であった。半公営農園では本調査で協力してくれた子ども7名のうち5名が痩せすぎの категорияにあてはまった¹⁸⁸。また、民間農園でも13名中7名が痩せすぎであり、農家の子どもたち3名中2名も痩せすぎであった。本調査で対象としていない子どもたちも含めた発育状態を考察すると、51-56%前

187 しかしながら、2015年7月に行った補足調査では、農家の子どもの10名に健康状態を聞いたところ、10名中4名がアレルギーで呼吸ができず薬を服用しており、1名は頭痛がすると回答してくれた。本調査との結果の違いは、本調査は2013年12月から2014年3月までの時期であり、2015年は7月だったため、季節が異なることや、または病気に対する意識が異なるなどの理由が考えられる。

188 日本肥満学会の指標に基づく。

後の子どもたちが痩せすぎの категорияにあてはまった。調査人数が少ないため、断定することは困難ではあるが、どの経営形態においても子どもたちの約半数以上が痩せすぎの状態にあるのではないかと推察できる。発育不良の1つの原因として、肉や魚などの生鮮食品の流通と保存・保管の課題がある。調査地域であるデニヤヤは海外沿いから北の内陸地80kmあり、冷凍保管設備を備えた車での運搬は費用がかかり、また冷凍保管の設備がないお店では、肉や魚などを適切に管理することが難しい。大きな農園では、小さなお店はいくつかあるが、肉や魚などを扱っているお店は見たことがなく、魚を乗せた車が、拡声器から宣伝し、その車から購入しているのを時折見かける位だった。また、世帯においても冷蔵庫のない世帯も多く、そのため、必要なたんぱく質が摂取できていないのではないかと推察する。

図4-2は人びとが近隣の医療機関に対する満足感を表している。医療機関にアクセスへのしやすさは人びとの健康に直結する。近隣に医療施設があっても、高額であれば治療を受けることは難しく、良い医療施設があっても医師や看護師、技術者がいなければ機能しないし、衛生的に保たれていなければ感染症などを引き起こす。逆に医師や看護師がいても、治療するための機器や医療品、薬がなければ十分な手当でもできない。

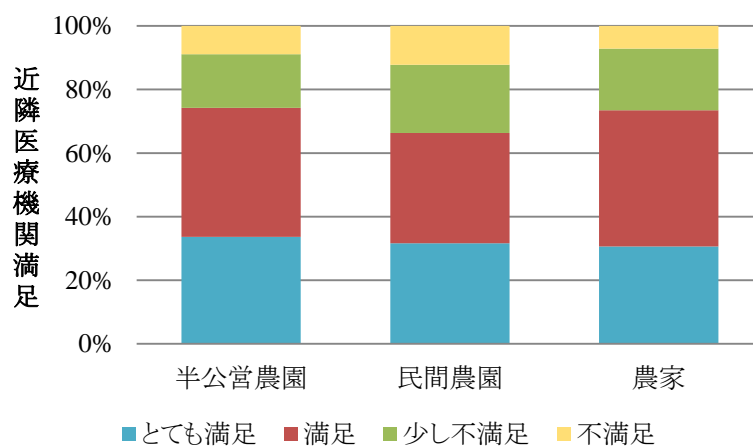


図4-2 近隣の医療機関に対する満足度

農園または街における医療システムの満足感については、「とても満足している」「満足」「少し不満足」「不満足」である。「とても満足している」または「満足している」の4択からなり、半公営農園では74世帯であり、民間農園では66世帯、農家では73世帯となり、経営形態の違いによって

「近隣にある医療機関の満足感」に大きな違いがあるとはいえなかった¹⁸⁹。しかしながら、近隣の医療機関に対して「どのような問題」があるのか質問したところ、302世帯中120世帯が問題点について話してくれた。最も回答してくれた割合が高かったのが半公営農園の仕事に従事する人びとであり、50世帯であった。また、農家では43世帯が回答してくれたが、民間農園では27世帯にとどまった。主な理由について、人びとの声を紹介したい。

「(徒歩圏内の)近所には適切な医療機関がなく、また、医者もおらず、必要な薬も手に入れることができません。ちゃんとした医者に診てもらうためには郡卿の街まで、(車やバス、などの)交通機関を利用して、行かなければならないのが大変です。」

「近隣には私立の医療機関がありますが治療や薬は有料です。無償で診てくれる政府の(総合)病院は街から離れすぎていて、通院することができません。」

「交通手段が大きな問題です。医療機関で診察をしてもらうためには、自宅から距離がありすぎるうえに、道は舗装されておらず、(道路)状態が悪すぎます。」

インタビューから、調査地域では医療施設があっても設備は十分ではない、または医療施設には医者が常時おらず、薬も十分に準備されていないという課題があることがわかった。また、居住地区によるが、自分たちの住む村には医療施設はないと話してくれた世帯もあった。スリランカでの社会保障は無償教育および無償医療を市民に提供していることで評価をされることが多い。しかしながら、私立の医療施設は有料であり、総合病院で無償治療を受けるためには政府系の病院に行かなければならないが、長距離や悪路に加えて、医療機関までの交通手段が課題としてある。

上述した通り、郡卿の中心となる街にはいくつかの医院があり、また半公営農園にも医務室がある。現地調査中には、郡卿中心街の医院を訪問する機会や、郡や大都市の総合病院にも訪れる機会があった。宿泊先の世帯主が伝統医療の医師のため、毎日訪れる患者さんにも会うが、開業時間は決まっておらず、患者さんが朝早く来ることもあれば、夜遅く来ることもあった。郡卿の医院も同様に開業時間は入口に書かれていたが、実際にはかなりフレキシブルなうえ、多くの患者さんが待っている。調査期間中に砂利と岩の坂道から滑り落ちたり、自然の中ならではの怪我

189 統計的には有意ではない。

や病気になり、宿泊先のアユールベータ医師に治療してもらった経験もしばしばあった。アレルギー反応が悪化した際には伝統医療では対処できなくなり、日が落ちた夕方にバイクを走らせ、西洋医学の医院に向かったが、すでに開業時間のはずの医院には、まだ医師が着いておらず、数名の患者さんが外で待っていた。彼らによれば、時間に大様なスリランカでは、診療時間が定まっていますが、あまりあてにはならないとのことだ。医師到着後、比較的早く診察してもらえたが、薬はその場ではもらえず、処方箋をもらった。薬局は同じ建物の中にあり、処方箋を出すと、先ほど診察してくれた医師が薬をくれ、3日間分の薬、250ルピーを支払った。宿泊先から三輪タクシーで郡卿の街、デニヤヤ・タウンまでは500-600ルピーかかる。バスのある時間帯であれば10-20ルピー程度であるが、夕方5時を過ぎる頃にバスが無くなる。医院は街の中心地にあり近かったが、それでも世帯収入の低い世帯にとっては、交通費を支払い、薬代もとなると高額であるのではないかと感じた。

4.5.2 こどもの1日の活動

表4-6はこどもの1日の過ごし方である。こどもの学校時間は朝7時50分ごろから13:30頃までで、10:30-10:50の間が休憩時間となる。昼食は授業の後に自宅に帰り、食べるのが普通である。対象となったこどもの1日の過ごし方を、学校登校時間以外では、大まかに「経済活動」「家事手伝」「睡眠」「食事」「テレビ」「友人との時間」とした。質問は選択方式とし、各質問項目について「1日当たり」または「1週間当たり」を選んでもらい、その活動に費やしている時間数について回答をもらった。「30分」の場合と「ときどき」という回答の場合には、「0.5」と換算した。表4-6では各項目の平均時間と各項目の時間3区分におけるこどもの割合を示した。「経済活動」は、経済活動に従事していない場合には「なし」とし、経済活動に従事している場合には「労働」とし、児童労働に当てはまる時間、経済活動に従事している場合には「児童労働」とした。「家事手伝」は、家事手伝していない場合には「なし」とし、家事手伝している場合には「労働」とし、児童労働に当てはまる時間を家事手伝している場合には「児童労働」とした。

表 4-6 こどもの1日

	睡眠			食事			テレビ		
	7時間42分			1時間6分			1時間48分		
	≤6H	6H≥8H	>8H	<1H	1H-2H	>2H	TV無	≤2H	>2H
半公営農園	18.2%	65.2%	16.6%	11.7%	80.6%	7.8%	27.6%	49.2%	23.2%
民間農園	20.7%	63.7%	15.5%	5.2%	84.9%	9.9%	18.7%	44.6%	36.8%
農家	19.2%	51.5%	29.2%	19.2%	63.8%	16.9%	15.4%	48.5%	36.2%

	友人			経済活動			家事手伝い		
	1時間42分			1時間12分			1時間20分		
	<1H	1H-2H	>2H	なし	労働	児童労働	なし	家事手伝い	児童労働
半公営農園	17.3%	53.8%	28.9%	95.6%	4.4%	0.0%	25.4%	59.7%	14.9%
民間農園	26.0%	44.6%	29.4%	87.6%	6.2%	6.2%	24.9%	56.6%	18.7%
農家	46.7%	32.0%	21.3%	76.2%	19.2%	4.6%	26.2%	56.9%	16.9%

睡眠時間:

日々の活動を行うための必要な睡眠時間がどの程度なのかは人によって異なる。睡眠時間は多ければ良いというわけではなく、また睡眠の質によっても体の回復は異なるといわれている。National Sleep Foundation (2015)によれば6-13歳のこどもは9-11時間の睡眠が必要であり、14-17歳のこどもたちは8-10時間必要である。調査地域におけるこどもの睡眠時間の平均は7時間42分であり、多くのこどもたちが6時間を超える睡眠をとっているが、上記の時間を基準とすると少ない。半公営農園と民間農園ではこどもたちの睡眠時間に違いがあまり見られないが、農園と農家のこどもたちを比較した場合には、農家のこどもたちの方が8時間以上の睡眠をとっている。どの経営形態においても、こどもたちの年齢が高くなるに従い、睡眠時間は少なくなっていく、16-17歳で6時間以下の睡眠時間のこどもは、農家では57%、半公営農園では36%、民間農園では41%となっている。農家のこどもは半公営農園や民間農園のこどもに比べ、睡眠時間が短い割合が高かった。短時間の睡眠時間の背景には、こどもの教育状況などがあることが推察されるが、本アンケートからは因果関係はわからない。

食事時間:

スリランカでは朝・昼・晩ともにカレーをご飯やパン、麺と一緒に手で食べるのが普通である。1日3回の食事に費やす時間は平均して1時間6分であり、1回あたり22分の計算となる。経営形態別に食事時間の違いをみると半公営農園・民間農園の子どもたちは1-2時間程度の食事時間が80-85%であるのに対して、農家の子どもたちは64%程度であり、約19%の子どもは1時間未満であるが、2時間以上かけて食事をする子どもも17%近くいる。

食事時間が健康と直結しているということは不明だが、夕食は寝る前は良くなく、また食事は良く噛んで食べた方が良く聞く。調査中の滞在先周辺の子どもたちは学校に行く前に朝食をとり、昼食は学校から戻って自宅で食べる子どもが多い、夕食は8-9時頃で、10-11時頃に就寝する。食事と食事の間にはおやつのある時間があり、砂糖たっぷりの紅茶と一緒に飲む。調査地の人びとによると、スリランカでは糖尿病予備軍の人が多く、就寝前の夕食やスプーン4-5杯の紅茶がその要因の1つではないのかと推測していた。

テレビ鑑賞時間:

テレビは1昔前の日本では娯楽の代表的なものであったが、スリランカでは子どもだけでなく、大人たちにとっても重要な娯楽である。調査地域では電波状態もあまり良くないためか、番組を見るチャンネルはあまりない。しかしながら海外で行われているクリケットやサッカーの実況中継、ディズニー、インド、日本のドラマも見る事ができる。スリランカでは日本の「おしん」が好まれており、人びとはよく視聴している。スリランカの精密機械の生産状況は高性能の自国製品を生産できないために輸入品が主である。そのため、日本では旧型となるテレビの(旧型の)値段は日本で購入する新製品の値段とほぼ同じであり、スリランカの人びとの年収から考えるとかなり高額であるという印象を受けた。それでも、テレビの普及率は高く、農家では94%、民間農園では85%前後、半公営農園でも75%の世帯がテレビを所有している¹⁹⁰。子どもたちのTV観賞時間は平均1時間48分であり、2時間以下のテレビ視聴が多いことが表4-6からわかる。テレビ視聴時間は各経営形態や年齢によって傾向が異なる。半公営農園では2時間を超えてテレビを視聴している比率が5-15歳までの子どもたちが18-25%なのに対して、16-17歳の子どもたちは36%と高くなる。民間農園では2時間を超えた視聴は5-15歳までは37-40%となるが、16-17歳になると24%程度に下がる。農家では5-10歳までの2時間を超えた子どもの視聴割合は46%

190 調査票c106の所有の有無でテレビの所有している世帯は農家では94%が、民間農園でも85%前後、半公営農園では75%とである。一方、テレビが欲しいとした世帯は半公営農園と農家で2%前後、民間農園では0%となり、ない世帯にとって必要な生活用品ということはない。

と非常に高いのに対して、11-15歳では30%と減少し、16-17歳の子どもたちは14%まで減少する。半公営農園では年齢が高い子どもの方が長時間、テレビを視聴する傾向にあるが、農家や民間では減少する傾向にある。テレビの視聴と健康との関係については、多くの研究においてなされている。2011年に発表された研究によるとテレビ視聴と糖尿病との間には関係があるとのことである(Andres 2011)。

友人との時間:

放課後や休日に友人と過ごす時間はいろいろなことを学ぶという意味において重要なことである。先入観があまりない5-10歳の子どもたちは同年齢の友人たちと遊ぶことで、コミュニケーション能力や適応性、状況に応じた判断能力や信頼関係など、様々なことを学ぶことができる。本調査では、子どもたちが友人と過ごす平均時間は1日あたり1時間42分である。交流時間を子どもの年齢ごとに考察すると、年齢が高くなるにつれて、交流時間が減っている。しかしながら、交流時間の傾向は各経営形態によって異なることがわかった。

半公営農園では農園内の居住地区には複数の世帯があり、多くの場合にはドッチボールができるくらいのスペースがあり、交流がしやすい。半公営農園では、5-10歳の子どもたちの約90%が友人と過ごす時間があると回答している。しかしながら、1-15歳では20%となり、16-17歳の子どもたちは36%となり、年齢が高くなるにつれて、友人との交流時間がないと回答した子どもたちが増えた。一方、友人と過ごす時間を年齢別に考察すると、5-10歳の子どもたちで2時間を超えて友人と過ごす割合は23%であったが、11-15歳では34%となり、16-17歳でも27%となった。民間農園でも、5-10歳の子どもの82%は友人と過ごしていると回答したが、11-17歳の子どもたちは約33%が友人と過ごす時間がないと回答している。交流時間については半公営農園と同じく、低年齢の子どもたちの方が友人たちと過ごす時間が長く、2時間を超えて過ごす子どもたちは5-10歳の34%であるが、年齢が高くなると26%前後となる。農家では農園と比較すると、友人たちと過ごす子どもたちの割合が低い。最も友人たちとの時間を過ごしている5-10歳でさえ、43%は友人との時間はないと回答しており、11-17歳になると50%以上の子どもたちは友人と過ごす時間がないということだった。

子どもたちの友人との時間が経営形態別に比較すると、半公営農園の子どもたちが最も友人との交流を持っており、次いで民間農園の子どもたちとなり、農家の子どもたちが最も交流時間を持っていないことがわかる。この地域では社会文化的習慣として、女の子は大きくなると家族以外の男の子と1人で会うことはよくないとされている。そのため、住居の目の前や横に交流空間があ

る半公営農園や大中規模民間農園に比べて、小規模農園や農家では友人たちとの交流を持つために「家」という空間から外にでることが回避され、友人と過ごすこどもが少ないのではないかと推察する。現地に滞在中には、農家の未婚のお嬢さんたちは、学校や職場から帰宅後に1人で友人宅に行くことはほとんどないとのことだった。また、もう1つの背景として、農家のこどもは後期中等教育になるとA Level Testでの合格や高得点を獲得して上位を狙うこどもたちも多い。イギリス式学校制度を導入していたスリランカでは、こどもたちは後期中等教育(13学年)を修了した後にA Level Testを受けるのが通常である。このA Level Testは人生において3回しか受験できず、一定のレベルに達すると高校卒業レベルの認定を受けられ、また高得点を取得すると大学へ進学できるという大事なテストである。そのため12-13学年の学生はA Level Testに合格すべく、一生懸命に勉強している(またはすることを家族から期待される)。

こどもの経済活動:

こどもの経済活動について回答を得ることができたのは534名中504名であった¹⁹¹。『こどもの活動調査』データ2次分析では経済活動に従事しているこどもの割合は少なかったが、居住地間比較においては農家のこどもが多く、一方、長時間の労働に従事しているこどもは農園のこどもたちが多かった。本調査においても同様の傾向で、経済活動に従事しているこどもは半公営農園では4.4%、民間農園では12.4%、農家では23.8%である。全体としてはこどもの87.5%は経済活動に従事していないため、平均労働時間は1時間12分であった。

一方、経済活動に従事している時間を経営形態ごとに考察すると、本研究で児童労働と定義した時間以上を経済活動に費やしているこどもの割合が最も高かったのは民間農園であった。表4-7は経済活動をこどもの年齢別に示したものであり、半公営農園では児童労働をしているこどもはおらず、農家では6名(4%)であったが、民間農園では6.2%に当たる12名が児童労働にあてはまる時間を経済活動に費やしていた。

191 半公営農園では15名、民間農園では12名、農家では3名のこどもについて無回答だった。

表 4-7 こどもの経済活動(年齢別)

経営形態	5-10歳				11-15歳				16-17歳				総計
	なし	労働	児童労働	無回答	なし	労働	児童労働	無回答	なし	労働	児童労働	無回答	
半公営	71	1	0	10	81	6	0	2	21	1	0	3	196
民間	86	3	1	3	72	9	5	5	11	0	6	4	205
農家	56	6	4	3	35	13	2	0	8	6	0	0	133
総計	213	10	5	16	188	28	7	7	40	7	6	7	534

こどもの経済活動状況と年齢との関係を各経営形態において考察すると、半公営農園では年齢区分による大きな違いはなく、経済活動に従事していないこどもの割合は 85-91%になる。民営農園と農家では年齢が上がるに従い、経済活動に従事しているこどもの割合が増えるが、民営農園と農家の違いは民営農園では児童労働にあてはまるこどもの半分以上が 16-17 歳であるのに対して、農家では 16-17 歳のこどもは児童労働していないことである。

児童労働にあてはまる活動は経済活動だけではない。家事手伝も一定の時間を過ぎれば児童労働となる。調査地域では洗濯機や冷蔵庫がない世帯も多い。兄弟姉妹がいる世帯では年上の姉や兄は弟や妹の面倒を見るのが当たり前であり、まだ舗装されていない道路を裸足で歩くために家の中が汚れやすく、こどもたちも 1 日に何度も掃除をする。料理は薪を使ってすることが多く、料理用の薪を得るために、薪を拾いに行く。水源が家の中になく場合には、飲み水や必要な水を水源に汲みに行く手伝をし、時には家の修繕作業も手伝うこともある。スリランカ全体として家族や親の手伝が一般的であり、どの経営形態においても 75% 前後のこどもたちが手伝っている。こどもたちの平均家事手伝時間は 1 日 1 時間 14 分であるが、全体の 15-19% は児童労働と定義される時間を家事手伝に費やしている。表 4-8 こどもたちの年齢とこどもの家事手伝を示している。

表 4-8 こどもの家事手伝活動(年齢別)

経営形態	5-10歳				11-15歳				16-17歳				総計
	なし	家事手伝	児童労働	無回答	なし	家事手伝	児童労働	無回答	なし	家事手伝	児童労働	無回答	
半公営	30	32	10	10	14	62	11	2	2	9	4	3	189
民間	34	43	13	3	14	54	18	5	0	12	5	4	205
農家	24	29	13	3	8	34	8	0	2	11	1	0	133
総計	88	104	36	16	36	150	37	7	4	32	10	7	527

年齢区分とこどもの家事手伝状況を考察すると、どの経営形態においても年齢が上がるに従い、こどもが家事手伝に従事している割合が増える。5-10歳のこどもは64%前後が家事手伝をしているが、11-15歳のこどもは84%前後になり、16-17歳になると家事手伝をすることの割合が増えてくる。児童労働と定義される時間、家事手伝をしているこどもたちの割合は5-10歳では農家が19%となり、半公営・民間農園の13%前後に比べて高いが、11-15歳では民間農園のこどもたちの割合が高い¹⁹²。16-17歳では半公営・民間農園では24%前後のこどもが児童労働しているが、農家では7%と低い割合となった。

4.6 こどもの教育状況と教育環境

4.6.1 在籍状況

1948年以降のスリランカでは世界銀行やアジア開発銀行、ユニセフやユネスコ、国際NGOや現地NGOとともに社会開発や人間開発分野の発展のための調査や政策を策定し、実施を行っている。特に教育分野においては、紀元前からの歴史とともに教育の分野は広がりを見せ、西洋による植民地化以降、より良い社会的・経済的地位を得るための1つの手段となった。19世紀以降、教育は社会経済的地位の獲得だけのためではなく、人びとが日常生活において必要な知識を得るために重要な役割を果たすようになった。教育に対するスリランカの意識は高く、20世紀の早い段階から、教育の無償化や義務教育化の政策を打ち出し、1990年代以降は農園における教育も国の責任とするなど、こどもたちの教育に力を注いでいる。独立以前のスリランカでは、エリート層は英語で授業を行う学校にこどもを通学させる家庭も多く、母国語であるシンハラ語やタミル語を話すことができないスリランカ人もいた。独立以降は、シンハラオンリー政策による影響で、公用語をシンハラ語にするなどの政策が一時期とられ、学校教育もその影響を受けたが、大学の講義における公用語は英語であった。現在では高等教育未満の学校教育ではシンハラ語による教育とタミル語による教育の両方を行っており、大学は英語で講義を行っている。近年、経済発展をしているスリランカではあるが、主たる産業は第一次産業や観光業であり、高学歴を得た人びとを吸収できるような産業市場はまだ出来上がっていない。近年では中東や韓国などに出稼ぎの仕事も増え、英語ができると雇用の機会が広がり、一般大衆における英語の重要性は独立以前よりも重要になってきていると推測する。

本調査では302世帯において534名のこどもたちの教育状況についてアンケートと面接調査

192 11-15歳区分では、半公営農園では12.4%のこどもが児童労働をしており、民間農園では19.8%、農家では16%となる。

方法で、聞き取りをおこなった。302 世帯中、5-17 歳のこどものいる世帯は農家で 91 世帯、半公営農園では 97 世帯、民間農園は 100 世帯であった¹⁹³。教育状況については、調査時点での在籍状況と留年・中退経験の有無およびその理由について質問を行った。こどもの対象数は 534 名であったが、無回答が 23 名あてはまったため、本分析での対象者数は 511 名となる。図 4-3 は調査地域における家族が従事する経営形態ごとのこどもの在籍状況である。

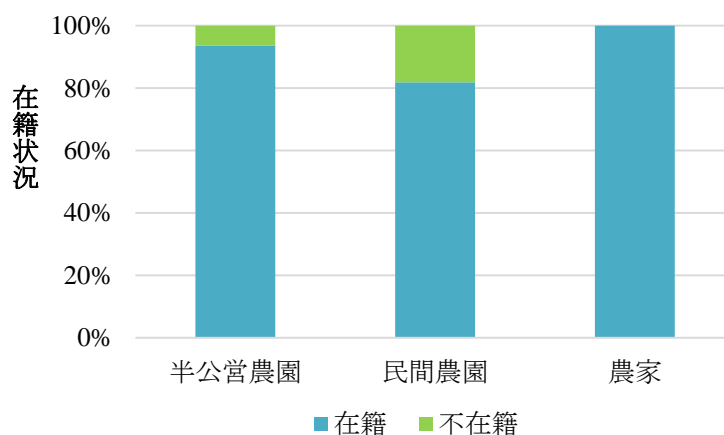


図 4-3 こどもの在籍状況

2008/9 年の『こどもの活動調査』では、対象となるこどもの不在籍率は 11%であったが、調査地域全体では、こどもの在籍状況は 511 名の内、89%に当たる 455 名のこどもたちが学校に在籍しており、11%に当たる 56 名が不在籍で、2008/9 年当時のスリランカ 9 県の不在籍割合と同じであった。また、『こどもの活動調査』では、農家のこどもの不在籍割合が 10%であるのに対し、農園のこどもたちは 15.5%であった。コタポラ郡の現地調査において経営形態の違いによる学校在籍状況を考察してみると、農家のこどもたちは全員在籍しているのに対し、農園のこどもたちは 14.7%が不在籍となり、『こどもの活動調査』よりは、0.8%低いことがわかった。農園のこどもたちの不在籍割合が高いという傾向は現地調査においても『こどもの活動調査』においても同じであった。しかしながら、経営形態別に考察すると、半公営農園では 6.9%の不在籍率であり、民営農園の場合には 22.4%と 5 人に 1 人が不在籍であり、農園部門においても経営形態の違いにより、教育達成に違いがあることがわかった。

193 5-17 歳のこどもがいない世帯は合計 14 世帯(農家 8 世帯、半公営農園 6 世帯)で、9 世帯(農家 7 世帯、半公営 2 世帯)のこどもは 18 歳以上であるが学校に通学している。また、残りの 6 世帯では 18-21 歳のこどもがおり、進級をめざしているため、本調査の世帯を分析する際の対象とした。

4.6.2 留年・中退経験状況について

図 4-4 は子どもたちの留年・中退経験の割合を示している。調査時には「留年のため学歴年のクラスに在籍していないのか」、「過去に中退した経験があるから学年が遅れたのか」、「入学が遅れたため学齢年に在籍していないのか」については質問していないため、ここでは留年・中退経験状況とした。留年・中退経験状況では、子ども 534 名中 514 名が対象となり、30.7%に当たる 158 名が年齢本来の学年に何らかの理由で在籍していないことがわかった。学齢年に在籍していない子どもの割合は経営形態によって異なり、最もその割合が高かったのが民間農園に家族が従事している世帯の子どもで、47.4%が適齢学齢年に在籍していなかった。次いで、半公営農園の子ども内、33.2%が留年・中退の経験をしていた。最も割合が低かったのが農家の子どもたちであり、2.3%だった。

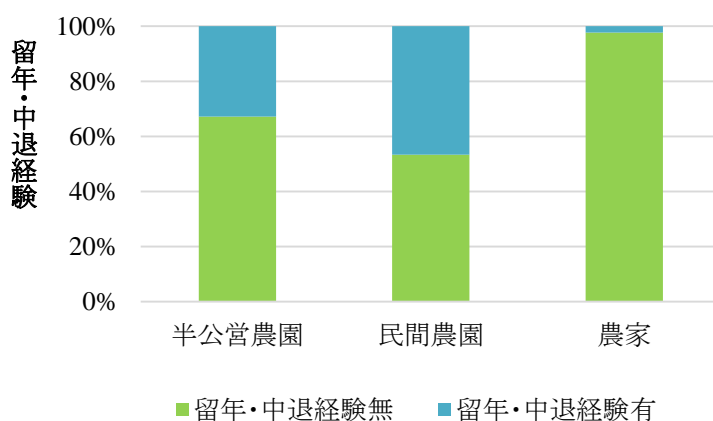


図 4-4 留年・中退経験状況

4.6.3 教育環境について

(1) マタラ県の教育状況

マタラ県には中等教育までの学校が 353 校あり、内 5 校がタミル語で教える学校である。農園部の学校に在籍している学生数は男子 968 名、女子 952 名の計 1,920 名であり、マタラ県全体の学生数の約 1.2%が通学している (DSM 2013)。2018 年の学校リストによればデニヤヤ郡卿には 17 の学校があり、13 校がシンハラ語による教育であり、4 校¹⁹⁴がタミル語による教育である。タミル語による教育を行っている学校の名称はすべて実在する農園名と同じであるが、3 校は農園内にある (Sri Lanka Army 2018)。

194 マタラ県には 5 つのタミル語で教える学校があるが、内 4 校はデニヤヤ地域にある。4 校の名称は左記のとおり。

①Handford T.K.V. ②Beverly Tamil K.V. ③Enselwatta T.K.V. ④Anningkande T.K.V.

(2) 調査地の学校とタイプ

補足調査として 2014 年 8 月と 2015 年 2 月にデニヤヤとモロワカ近郊の学校 7 校を訪問し、インタビューを行った。1 校は半公営農園内にある学校 A で 1-11 学年であり、2 校は農園近郊にある 5 学年までの小学校 B と 6-13 学年の学校 C を訪問した。また、農村地域にもいくつかの学校があり、村の学校 1 校(学校 D) (1-11 学年)を訪問するとともに、デニヤヤ中心地にある 1-13 学年までである学校 3 校(学校 E、学校 F、学校 G)を訪問した。

半公営農園内にある学校 A は当該農園内と系列農園内に居住する子どもたちが通学しており、教員の定員は 30 名であるが 17 名しかおらず、学生数は男の子 250 名と女の子 246 名の計 496 名であった。学校 A の教員によれば、子どもたちが学校 A 以外に通学する場合には 5 学年終了時の奨学金試験で良い成績を収めることが必要で、前回は 23 名受験して 0 名の合格結果であったが、11 学年の後に行われる O Level Test には 19 名が挑戦し 8 名が合格したと説明してくれた。なお、学校 A には 11 学年までであるが、卒業生の中には 13 学年まで修了し、現在では 12 名の学生たちが教員養成学校に通学していると話してくれるとともに、まだ当該校の卒業生から大学まで進学できた子どもはいないが、将来期待していると語ってくれた。農園近郊にある小学校 B では、校長先生にインタビューした際には 80 名の子どもたちが在籍しており、前回の奨学金試験を受験した子どもが 5 名いたが、だれも合格することはできなかったため、6 学年以降は近隣の学校に通学すると話してくれた。農園近郊にある中等・高等教育学校 C では、訪問時にコンピューター室を増築していた。当該校 C の校長先生によれば、学生数は 311 名で、本来であれば 30 名の教員を必要とするが 22 名しか教員がいなかったことだった。そのため、NGO の支援を得て 2 名のボランティアに補助をお願いし、5,000 ルピー/月を支払っているとのことであった。A 校と C 校ではタミル語で授業を行っており、B 校ではシンハラ人とタミル人の子どもが在籍している。

Ke 村にある学校 D はシンハラ語による学校であり、学生はタミル人が 3 分の 1 で、シンハラ人が 3 分の 2 であるとのことだった。当該校には 17 名の教員がおり、140 名の学生が学んでいる。教員の欠員はいないため、ボランティア教員はいないと話してくれた。前回の奨学金試験では 8 名が受験したが、合格したものはいなかったが、O Level Test は 8 名が受験し、5 名が合格したとのことである。D 校は 11 学年までだが、以前の卒業生で前回の A Level Test で大学に進学できた子どもが 1 名おり、今後も多くの学生に大学へ進学して欲しいと話してくれた。

デニヤヤ郡卿の中心地にある 3 校は 13 学年までであり、学生数や教員数も多く、コンピューター室や理科の実験室、音楽教室なども整っている。E 校では 1,360 名、F 校では 2,850 名、G 校では 1,285 名が在籍している。教える言語はシンハラ語である。E 校では教員 83 名が定員であるが、

73名しかおらず、2名のボランティア教員を採用しており、NGOの支援を得て5,000ルピー/月支払っているとのことだった。前回の奨学金試験では受験者91名中10名が合格し、O Level Testでは受験者61名中49名が合格し、A Level Testについては19名が受験し、全員が合格したとのことだった。19名のうち2名は大学に行くことができたと話してくれた。F校では教員の定員が112名であるが、6名の欠員があるため、4名のボランティア教員を雇用し、月当たり6,000ー7,000ルピーを支払っているとのことだった。前回の奨学金試験では受験生210名中34名が合格、O Level Testでは受験生225名中190名合格し、A Level Testについては140名受験し、100名が合格したとのことだった。大学へ進学したのは6名であると話してくれた。G校は、教員定員は60名であるが、訪問時には8名の欠員があり、1名の方に月5,000ルピーでボランティア教員をお願いしているとのことだった。前回の奨学金試験の実績としては87名が受験したが、合格した学生はいなかったとのことであった。しかし、O Level Testでは112名の受験生中83名が合格し、A Level Testでは受験生43名中28名が合格し、内7名は大学に進学したとのことだった。

スリランカでは上述したとおり、多数民族であるシンハラ人はシンハラ語で教える学校に通い、タミル人である子どもはタミル語で教える学校に通学することが多い。しかしながら、調査地域では、タミル人とシンハラ人が同地区に居住しており、多くのタミル人の子どもはシンハラ語を理解できるため、シンハラ語で教える学校が自宅から近い場合にはその学校に通学を希望することもいる。子どもたちが学校への通学を決める際の重要な要素の1つとして、自宅から学校までの距離がある。都会では人口密度も高く、(私立を含めた)学校の数も多いため、自宅と通学を希望する学校の距離は比較的短距離であると推測するが、調査地域では必ずしも近距離に希望する学校があるとは限らないという印象であった。そこで、アンケート調査から子どもたちが通学している学校までの通学距離と交通手段を表4-9に示した¹⁹⁵。

195 自宅から学校までの距離は実際の距離ではなく、アンケート調査に回答した人びとが感じている距離である。

表 4-9 こどもを取り巻く教育環境

		半公営農園	民間農園	農家
通学手段	徒歩	51% (87 名)	57% (89 名)	18% (23 名)
	バイク・車	9% (16 名)	1% (2 名)	10% (13 名)
	バス・スクールバス	40% (69 名)	42% (66 名)	72% (92 名)
通学距離	<1km	35% (58 名)	28% (44 名)	10% (13 名)
	1≦3km	29% (48 名)	53% (82 名)	20% (25 名)
	3≦5km	26% (43 名)	15% (23 名)	11% (14 名)
	>5km	11% (19 名)	5% (7 名)	59% (75 名)

表 4-9 から半公営農園や民間農園では徒歩で通学しているこどもは 2 人に 1 人であるが、農家では 5 人に 1 人であることがわかる。通学手段は通学距離とも一般的には連動しており、半公営農園や民間農園では、64-81%のこどもたちは 3km 未満の通学距離であるのに対して、農家のこどもたちは 30%となる。3km 以上の距離を通学しているこどもたちは半公営農園では 38%となり、民間農園では 20%と少なくなるが、農家では 70%となる。3km の通学距離は平坦な道でも徒歩で約 45 分かかかるが、山道である場合にはそれ以上かかり、気候が厳しい中、舗装や社会基盤が整っていない山道を徒歩で通学することは困難であることは容易に想像が付き、何らかの交通手段を利用する必要がある。そのため、半公営農園のように農園部(近郊)に学校があり、学校の近くの居住地区に住んでいるこどもたちは徒歩で通学できるが、農家や民間農園のように初等教育修了後はモロワカやデニヤヤ地域の中心地にある学校に通っているこどもたちも多いため、交通機関を利用する割合が高くなるものと推察する。

(3) 教育環境に対する親の意識

こどもの通学する学校に対する親の意識:

現地調査から、半公営農園や民間応援のこどもたちは比較的、自宅から近距離の学校に通学しており、農家のこどもたちは自宅から遠方の学校に通学していることがわかった。特に、中心地には比較的設備の整っている国立の学校があり、当該校にこどもを通学させたいと話している農家のこどもたちの親たちもいた。近年、通学していないこどもたちを学校に行かせるためには、こどもたちが行きたいと思うような学校であることが重要であるとされ、教育の質が注目されている

(UNICEF 2014)。そこで、こどもたちの通学している学校に対して、こどもたちの世帯ではどのように思っているのか考察してみる。図4-5はこどもたちの通学する学校に対する親の満足感を示したものである。

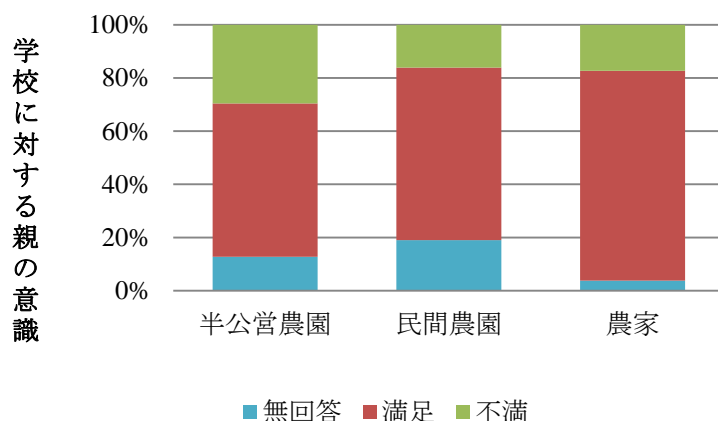


図4-5 学校に対する親の意識

調査方法はアンケート調査による4択と聞き取り調査によるもので、本調査に協力してくれた回答者に、1)こどもたちが通学する学校全般に対する満足感と、2)各項目に対する満足感を質問した。選択肢は「非常に満足している」「満足している」「改善が必要である」「悪い」から回答してもらい、1)の学校全般に対する満足感については「非常に満足している」と「満足している」と回答した場合には「満足」とし、「改善が必要である」または「悪い」と回答した場合には「不満」とした。アンケート調査の結果、こどもたちの通学する学校に対して満足感が高かったのは農家の78.9%であり、次いで、民家農園の64.9%となり、半公営農園では57.7%であった。不満があると回答した割合が多かったのは半公営農園で働く世帯であり、こどもが通学する学校に対して、29.6%が不満であるとし、無回答としたこどもの世帯も入れれば40%以上となった。

生活満足度の調査結果では、近隣の世帯平均より良いとした理由として、教育をあげた世帯も多くいたが、一方で学校そのものに対する本調査からは、不満とする世帯が多いこともわかった。農家のこどもたちは小学校(5学年)までは居住近くの学校に通学することも多いが、モロワカやデニヤヤ地域の中心街にあるより良い学校に通学させている世帯も多いため、地域における学校と比較して、こどもたちの通学している学校に対する満足感が高かったと推察できる。

こどもの教育環境と親の意識:

図4-6はこどもを取り巻く教育環境7項目(下記)について、経営形態ごとに「大変満足してい

る」場合には「4」とし、満足している場合には「3」、「改善が必要」と回答した場合には「2」、「悪い」と回答した場合には「1」とし、総数を回答者数で割り、平均値を示したものである。教育環境については、通学環境である自宅から学校までの「通学距離」、「通学時間」、「通学手段」と「学校設備環境」、「学校時間帯」、および教育の質である「教員の質」「授業内容」の7項目とした。

農園の生活環境や教育に焦点を当てた先行研究では、農園における学校の設備状況や教員の質が低いと指摘されてきている。また、調査に協力してくれた世帯の子どもたちの学校全般に対する世帯の意識から、当初の仮説では比較的設備環境がよく、教員数や質の高い教員がいる学校に通学している農家のこどもの親の方が教育環境に対する満足度が高いものと推察してきた。しかしながら、アンケート調査からは通学や学校設備については民間農園の世帯の方が農家や半公営農園よりも満足度が高く、教育の質については半公営農園の方が農家や民間農園部の世帯よりも高かった。また、より良い学校に通学させたいと思っている農家の親は学校における授業では不十分であり、学校での勉強時間を増やして欲しいと要望があるかと推測していたが、学校時間帯については農家の世帯の方が民間農園部や半公営農園よりも満足度が高かった。

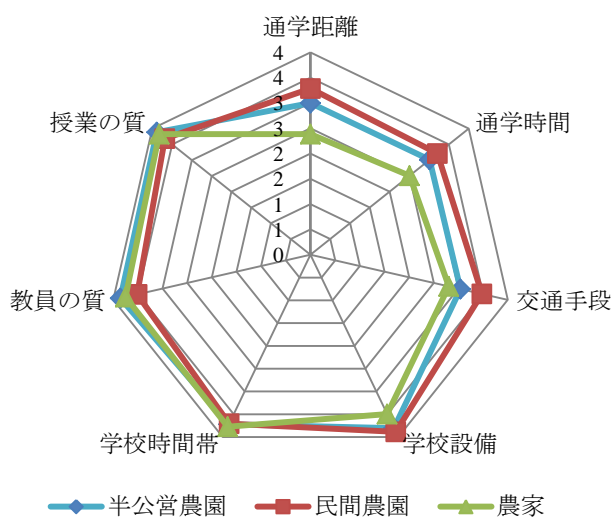


図 4-6 教育環境と親の満足度

1) 学校設備と通学環境

学校全般に対する質問では農家の世帯が高く、次いで民間農園、半公営農園の世帯であった。しかしながら、項目ごとのアンケート調査では「学校設備」と「通学環境」については農家が最も低かった。その背景としては、半公営農園では農園内の学校や近隣の学校に通学するが、

農園内の居住地区から園内の学校が遠い場合には、スクールバスなどが手配されている場合もある。そのため、概ね満足であるという回答が多かったため平均値が「3」になったと推測する。また、民間農園の子どもたちは比較的近い学校に通学しているため、距離や時間、また交通手段も必要としない。距離・通学時間・交通機関すべてにおいて満足傾向にあると推察でき、平均値は「3.2以上」と高かった。しかし、農家では子どもを良い学校に通学させたい世帯では、自宅から少し離れた中心地にある設備や教員が整った学校に通学させる。そのため、通学に時間がかかるとともに、距離があるために交通機関を利用することになる。子どもたちの多くは通学手段として公共機関であるバスを利用するが、調査地域のバス終了時刻は早く、デニヤヤからキリウエラドラ、キリワラドラマまでのバスは夕方5時ごろまでであり、その後の帰宅には他の交通手段を利用しなければならない。このように通学には徒歩以外の交通手段を利用することになるため、学校通学には交通費がかかると話してくれた。上記の理由から、農家の世帯の方が半公営・民間農園の世帯よりも満足度が低かったのではないかと推察する。

また、学校設備に関しては、聞き取り調査では、どの経営形態においても基本的な学校設備が十分ではないと回答する世帯が高かったが、学校の規模が大きく、設備もより整っている学校に子どもたちが通学している農家の世帯は満足度が最も高いと推測していた。しかし、最も設備に満足していたのは民間農園の世帯で、平均値は「3.89」となり、次いで半公営農園では「3.8」となった。農家の平均値は他の経営形態の世帯と比較すると低いが、それでも、「とても満足している」「満足している」と回答した世帯も多く、平均値は「3.5」であった。

民間農園の世帯へのインタビューでは、33名の子どもについて回答してくれており、3分の1である世帯が学校設備に問題があるとしている。具体的には、「学校設備のメンテナンスがされておらず、設備のレベルが低い」や「衛生面も含めてもう少しメンテナンスした方が良い」とのことだった。このように問題があると指摘しているにもかかわらず、学校設備に満足している理由の1つとして、民間農園の人びとや子どもが、以前通学していた学校と比較ができるからではないかと推察する。前述したとおり、農家や半公営農園内に居住する人びとは親の世代から当該地域に居住していることも多い。一方、民間農園では労働の流動性が高く、新たな農園に移動するに伴い、学校も転校することが多い。

本調査においては、実証的根拠は示せないが、このような農園間の移動に伴う複数地域の学校経験から、以前の学校と比較し、調査時点に子どもが在籍している学校に対して満足できたのではないかと推測する。また、半公営農園の世帯では196名のこどものうち58名のこどもの世帯が聞き取り調査に応じてくれ、約3分の1が学校設備について話してくれた。具体的には「コンピュ

ーートルームの改善」「スポーツする設備や勉強する場所の欠如」や「衛生や安全な飲料水」の課題が挙げられた。そこで、学校の衛生状態や飲料水について、2017年12月、農園内にあるA校で、飲料水の大腸菌実験を行ったところ、100mlあたり114個の大腸菌が見つかった。加熱して飲料すれば問題はないが、上水道から生水を飲料した場合には、お腹をこわす可能性が高い。また、コンピューター設備や自習室などについては、規模の大きな学校と比較して十分な設備が整えられていなかったことが1つの理由として考えることができる。農家では、133人中23名のこどもの学校について話してくれ、3分の1が「学校のトイレや上水道」、「クラスルーム数の不足」、「コンピューター室」について整備されていないと語ってくれた。訪問した学校の教員によれば、都会に比べ地方や農園にある学校の設備については政府の援助が十分に行き渡っていません、十分な設備が整えられないとのことであった。

2) 学校時間帯と教育の質

調査地域の学校は朝8時前から午後の1時ごろまでで、自宅に帰宅後に昼食をとることが一般的であった。その後、近くの塾や学校の教員が私的に開講している(有料)補講で学ぶこどもたちもいる。特に農家でのインタビューでは、学校の授業だけでは不十分であるという話す世帯も多く、現在の学校時間帯に対しては満足していないと推測していたが、平均値は「3.77」と高かった。また、半公営農園でも民間農園でも平均値に大きな違いはなく、「3.72」と「3.71」であった。スリランカでは一般的にはこどもは結婚すると独立するが、調査地域では末子が両親と一緒に住むことが多く、また、同地域に長く居住している農家や半公営農園では、定年した祖父母世代も同居している世帯も多くあった。さらに、調査地域では、近隣に居住している親戚やご近所がこどもたちの世話をするなど、互いに助けあう相互扶助が普通であり、このような社会的習慣が機能しているため、学校時間帯自体には満足している世帯も多かったものと推察する。調査地の滞在先は職業柄もあるかもしれないが、毎日、ご近所や親戚、友人が訪れる。年末年始や自宅でのイベントの際には、これらの人びとが手伝いに来てくれ、必要に応じて1晩中、準備の手伝いをしてくれる。こどもがいる家庭でこのようなイベントでは、手伝いに来た人びとが面倒を見てくれ、こどもたちが早く帰宅しても、あまり困ることはない。

教員の質や授業の内容については比較的満足度が高く、半公営農園では平均値が「3.9 弱」であり、民間農園でも「3.52-3.68」であり、農家でも「3.8 前後」であった。しかしながら、聞き取り調査では半公営農園および民間農園では回答してくれた世帯の内3分の2以上が教員不足や教員の質・授業内容について問題があると指摘している。半公営農園ではコンピューターや英語、

いくつかの科目の知識を備えた教員がおらず、教員によっては農園内の学校に長期間赴任せずに、短期間でより都会にある学校に異動してしまう」との課題や、「1人の教員が何科目も教えるために知識が十分ではなく、また教え方を含めて授業内容のレベルが低い」などの課題を語ってくれた。民間農園では「子どもたちがシンハラ語による授業についていけないが、補助コースが開校されていない」、また「いくつかの科目については担当教員がおらず、ボランティア教員しかいない」などが課題として指摘された。学校によっては、親の職業や民族が理由で、教員から差別を受け、転校を促されたということももいた。農家では4分の1程度が教育の質について課題があると指摘し、半公営・民間農園と同様に「教科によっては専門知識のある教員がおらず、授業の内容や教え方も効果的ではない。また教員が子どもたちの面倒を十分に見切れていない。」とし、教育の質を改善すべきだと指摘する世帯もいた。

4.7 まとめ

第4章では紅茶産業の経営形態に着目し、スリランカ南部に位置するマタラ県コタプラ郡での現地調査におけるアンケートとインタビューをもとに紅茶産業内の経営形態の違いにより、子どもたちを取り巻く環境がどのように異なるのか、また教育状況が異なるのかを考察した。

スリランカの農園作物を代表する紅茶産業内を現地調査に基づき、子どもを取り巻く環境について考察すると、「世帯収入」と「子どもの家事手伝時間」については、経営形態の違いによって大きな違いはなかった。しかし、「世帯主学歴」や「住環境」、「生活環境」、「子どもの経済活動」については、経営形態間でレベルが異なる傾向にあった。子どもたちの教育環境の特徴は、半公営農園や民間農園では農園内や近隣の学校に通学しているが、農家では中心地の学校に通学している子どもたちが多ことがわかった。これらの変数において、共通している点は3経営形態のうち、民間農園の状況が良くないということである。

また、子どもの教育達成についても、民間農園の労働に従事している世帯の子どもの方が不在籍・中退経験率が高い傾向にあることもわかった。第5章では、子どもの教育達成について、子どもを取り巻く環境や子どもの活動状況から考察するとともに、子どもの教育に対する親の意識についても考察していく。

5 紅茶産業:経営形態における教育達成の違い

第3章では『こどもの活動調査』データを用いて「居住地域間の教育達成格差」について比較分析を行なった。また、格差の要因の1つと考えられるこどもを取り巻く環境に注目し、「こどもの世帯状況」「こどもの生活環境」および「こどもの活動」という3つの視点から、居住地域における教育達成格差の要因を考察した。本分析からは居住地域間においては農園部に属するこどもの教育達成状況が良くないことと、その要因として住居環境の違いが教育達成の相違と関係していることがわかった。また、居住地域間における教育達成の格差は「住環境」が関係していることがわかった。第4章では、本研究課題の焦点である「紅茶産業の経営形態」に着目し、経営形態間においてこどもの取り巻く環境にどのような違いがあるのかを述考察するとともに、教育環境や教育達成、こどもの1日の生態について記述した。

本章では、こどもの教育達成とこどもを取り巻く環境との関係について、経営形態によってどのように異なるのかを比較考察することにより教育格差の違いがどのような要因と関係あるのかについて明らかにし、その要因の背景を考察する。第5章の「5.1」では、こどもを養育する世帯がこどもたちの将来にどのような職の希望をいだいているのか比較考察するとともに、こどもたちに期待する職に必要な教育について記述する。「5.2」では、こどもの教育に大きな影響を与える世帯収入と世帯主の学歴がこどもの教育達成とどのような関係にあるのかを経営形態の違いによって考察する。「5.3」ではこどもを取り巻く環境の重要な構成要素である住環境や生活環境とこどもの教育達成との関係を考察する。「5.4」ではこども自身に着目し、こどもの活動と教育達成状況との関係を考察する。「5.5」では、アンケート調査や聞き取り調査における回答をもとに教育格差の要因の背景について考察する。「5.6」では「5.2」から「5.5」でおこなった考察を比較分析することにより、経営形態間における教育格差が生じる要因について明らかにすることを試みる。

5.1 こどもに望む教育歴と将来

5.1.1 教育の重要性とこどもに望む学歴

人びとが自分のしたいこと、なりたい状態を実現するためには、さまざまな能力(機能)が必要であり、教育がそれらの機能を育成する力の源の1つとなりえる。また、教育は日々の生活における衛生問題や健康問題を対処する際などにおいて大きな影響を与えるだけでなく、社会における権利や人権という文脈においても重要である。センは基礎教育の重要性を訴え、基礎教育の欠如は、人間の法的権利を理解することや訴える能力を制限することとなり、また自分たちの要求を効果的に訴える能力を制限することとなると述べている(セン 2000)。

(1) こどもの教育に対する世帯の意識

スリランカでは紀元前より上流階層によって教養の重要性が認識されており、教育をとおして学ばれてきた。西洋人の到来、特にオランダによる統治以降は英語を身につけることが、一般の人びとにとって社会経済的地位を獲得することができる重要な要素となった。1948年の独立以降は多くの国際機関や先進国、NGOの援助により社会基盤や社会も発展し、さまざまな社会開発や人間開発プログラムによって、学ぶことの意義や多様な分野のことを学べる機会に触れることも多くなってきた。21世紀に入り、いままで特定の地域圏(間)や2国間の視点で考えられてきた経済や社会が、世界の潮流やITの発展により、多地域や多国間での視点で考えることが求められるようになってきており、語学力に加え、コンピューターに関する知識やその他の専門知識・技術などを身につけることも、良い職業を見つけるためには必要な知識と能力になってきている。現在では「字が読め、理解できる」や日々の生活における「基礎的知識」を身につけるだけでなく、より高度な内容の知識や技術とともに、考える力が必要とされるようになってきており、人びとにおいて教育はますます重要な要素であると認識されつつある。

1997年の義務教育に関する法律に基づいた義務教育委員会でも、人びとの気づきを通して、すべてのこどもの義務教育の施行を試みている(UNICEF 2013)。図5-1はこどもたちの教育の重要性に対して、世帯がどのように思っているかを示したものである。本質問はアンケート調査と聞き取り調査でおこなった。アンケート調査は、こどもの教育の重要性について、「重要」か「重要でない」かの2択から回答をしてもらった。また、聞き取り調査では、なぜ教育が重要であるのか、また重要でないかと思うのかについて質問した。

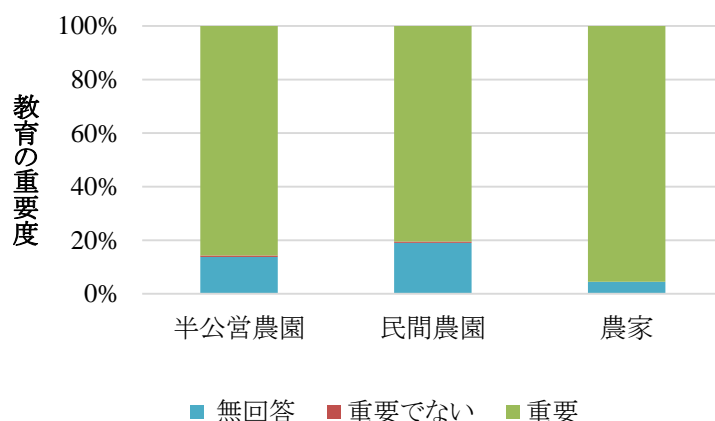


図5-1 こどもの教育に対する世帯の意識

質問対象としたこどもはすべてのこどもで 534 名だったが、回答を得られたのは 460 名だけであつた。アンケート調査の結果、「教育が重要である」と回答した割合が最も高かつたのは農家の 95.5% だつた。半公営農園では 85.7% となり、民間農園では 80.5% だつた¹⁹⁶。回答者によっては、教育は重要ではないとは思わないが、重要であるかどうかはよくわからないとのことだつた。

教育に対する意識はこどもたちの教育の機会だけでなく、教育達成に影響を与える。UNICEF (2013) によれば、こどもの在籍状況や教育達成に影響を与える要因の 1 つとして、家族の気づきが重要な要素であるとしている。半公営農園や 1 部の民間農園でも、児童労働によるこどもへの影響や義務教育の重要性については、こどもを養育している人びとに指導していると農園マネージャーや農園主が語ってくれた。しかしながら、教育の重要性や将来のことよりも、目の前にある日々の生活に目が行ってしまうとことが多く、日々の疲れやストレスを発散させるために給与を酒や遊興費に費やしてしまうと説明してくれ、労働者自身の将来やこどもたちの教育の重要性を理解してもらうことが 1 つの課題であると話してくれた。

こどもたちにとって「なぜ教育が重要であると思うのか」という質問に対する主な回答は、半公営・民間農園では 3 分の 1 以上が「良い職業に就くためである」とし、次いで「良い将来を得るため」、または「良い生活のため」であると話してくれたのが 4 分の 1 以上であつた。3 番目に多かつたのは、「教育を受けることにより、国にとって良い市民となり、社会に貢献して欲しいという願いがある」という回答だつた。一方、農家では約 3 分の 1 がこどもたちに「良い将来または生活を送って欲しい」と思っており、次いで約 4 分の 1 が「良い職業に就いて欲しい」との回答であつた。また、農家における 3 番目の理由も、「国にとって良い市民になって欲しい」という回答をした世帯が 10 人に 1 人いた。回答者にとって、こどもたちの教育を重要であると思う主な理由は、親、または家族としては「こどもに幸せになってもらいたい」という個人的便益からの願いと、スリランカ国民としては「母国や社会に貢献して欲しい」と考える社会的便益の 2 つがどの経営形態においても主な理由であつた。

また、「より良い人生をおくるために、教育は重要な要素であるのか否か」ということを人びとはどう思っているのかを明らかにするため、人生において重要と思われる要素について回答してもらつた¹⁹⁷。教育が重要である回答した世帯は半公営農園では 69 世帯 (58.3%)、民間農園では

196 アンケート調査 F3 で「教育はこどもにとって重要ですか」と質問し、無回答だつた世帯主は農家では 4.5% だつたのに対し、半公営農園では 13.7%、民間農園では 19% と高かつた。本質問に対し、農家では重要でないと回答した世帯はいなかつた。

197 質問票 E27 「良い人生を送るためには、貴方にとって何が重要ですか」と質問し、次の 7 項目について回答してもらつた。1. 周囲の人びとからの尊敬、2. 自信、3. コミュニティへの帰属、4. 家族、5. 教育、6. (現在の職場における) 昇進、7. 良い仕事、9. その他 (自分や家族にとって重要であると思われること)。

59 世帯(59%)となり、農家では 52 世帯(52.5%)であった。両質問から、こどもの教育そのものの重要性の認識と、より良い人生における教育の重要性の認識は必ずしもリンクしていない世帯もあるということがわかった(教育は重要であるが、より良い人生をおくるための要素としては重要とは思っていない世帯もある)。

次に、親のこどもに望む教育レベルについて、経営形態によって違いがあるかを考察する。

(2) こどもに望む教育レベル

こどもたちに望む教育レベルはアンケート調査における選択方式で、534 名のこどもたちに修了して欲しい学歴を回答してもらった。回答方式は、「大学未満」と「大学以上」から選んでもらい、「大学未満」の場合には修了して欲しい学年まで回答いただく予定だった。しかし、回答者のなかには大学のイメージがつかない、または、どの学年でどの程度のことが学べるのかイメージがつかないと話してくれる世帯も多く、修了希望学年を全世帯から聞くことができなかった。図 5-2 は各経営形態における世帯のこどもに対する望む教育レベルである。

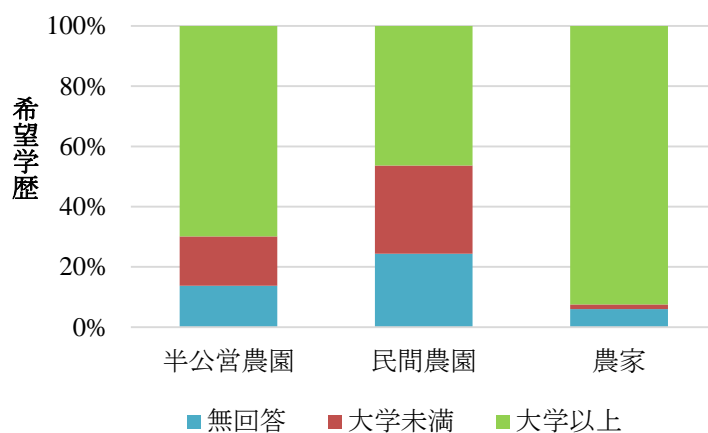


図 5-2 こどもに望む教育レベル

本アンケート調査からは、こどもに高等教育(大学)以上に進学して欲しいと思っている世帯の割合は農家が最も高く、92.5%となり、次いで半公営農園が 69.9%となるが、民間農園では 46.3%と低くなる。無回答は民間農園が一番高く、24.4%が回答をしなかった。こどもの「教育の重要性」とこどもに「望む教育歴」との関係について考察したところ、農家では「教育は重要である」と回答した割合と「高等教育以上の教育歴を望む」と回答した割合が同じであった。一方、半公営農園では 85.7%が「教育は重要」と回答しつつも、こどもに「高等教育以上の教育歴を望む」世帯は

70%であり、「教育は重要」と回答しているからといって、こどもに望む教育歴が「高等教育(大学)以上」ということではないことがわかった。また、民間農園では、80.5%が「教育は重要」と回答したが、こどもに望む教育歴については、「高等教育(大学)以上の学歴」を望んだ世帯は46%となり、「教育の重要」＝「高等教育(大学)以上」ではないことがわかった。

スリランカでは大学は15校しかなく、A Level Testを受験し、高順位でなければ国立の大学には入学ができない。また、このA Level Testは人生において3回しか受けることができず、大学進学は狭き門である。世界銀行(2010)の報告によれば、若者やこどもの教育歴は年々長くなる一方で、より良い教育歴を受けた若者たちは過酷な肉体力労働や社会的地位が低いと見なされる職業には就きたくないと考えているが、高学歴の若者を吸収できるほどの産業がなく、失業状態に陥っていると報告している(WB 2010)。本調査におけるインタビューからも、教育と職業との関連について、話してくれた人びともいる。教育と職業の関係について話してくれた農園部の人びとは自分自身のおかれている状況とこどもたちの将来について次のとおり語ってくれた。「私の教育歴と現在の仕事の内容の関係を考えると、もっと良い職業に就けるはずですが、(農園では)自分の教育歴に見合った仕事に就くことは困難であり、その点が不満です。」「教育歴が高いと良い仕事に就くことができます。(収入の)良い職業に就くためには教育(学歴)は重要であり、こどもたちが(親世代より)良い将来や生活を得るためにも教育は重要であると考えます。」と述べ、教育歴が良い仕事に就くために重要であることや、農園では教育歴に合った仕事がないと農園部での労働に従事する人びとが感じていることがわかった。しかしながら、上述したように、教育のイメージがつかないため、「こどもたちに望む教育歴」を回答できないという世帯も多かった。また、回答してくれた世帯でも、「どの学年で何を学べるのか、また、どの教育歴でどのような職業を得られるのかについてイメージがつかない」と話してくれる人びともいた。調査者は「教育が重要」であるから「高等教育(大学)」に行くべきだとは考えていない。しかし、調査地域における農園の「教育の重要性の認識」と「こどもに望む教育歴」の乖離については、教育のイメージがつかないというのも1つの理由であると考え。このようなことから、農家では、教育は重要であると考える世帯の多くは、こどもに望む教育歴として「高等教育(できれば大学)以上」を希望しているが、農園の人びとは「教育が重要」であることを認識しているが、「重要」であるからといって、「高等教育(大学)以上」の教育歴を望んでいるわけではないという相違がでたのではないかと推察する。

5.1.2 こどもの将来と教育

教育が重要であると回答した人びとは、その理由として子どもたちにはより良い職業について欲しい、またはより良い将来や生活を送って欲しいと考えている。子どもたちに願っている将来の職業について、534名のこどものうち490名について回答を得ることができた。しかし、現時点ではこどもが幼い、またはイメージが湧かないなどの回答により、490名中81名が具体的な職業名は言わなかった¹⁹⁸。子どもたちに期待する職業として、約40種あげられ、職種によって高卒レベルが必要な職業はA Level以上とし、その他についてはA Levelとした。子どもたちに就いて欲しい職業は必ずしも世帯主だけの希望ではなく、子どもたちの希望も含まれている。

(1) こどもに期待する職業に必要な教育歴

図5-3は子どもたちに期待する職業に必要な教育レベルである。

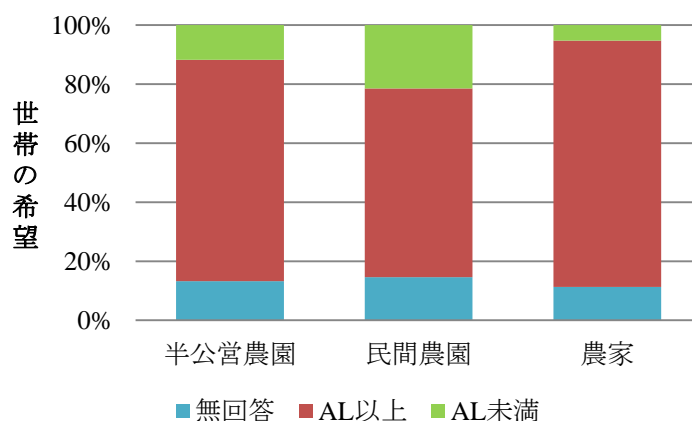


図5-3 こどもに期待する職業と必要とされる教育レベル

経営形態における比較分析から、A Level以上の教育歴が望ましいと思われる職業を望んでいる割合はどの経営形態においても高く、農家では83.5%となり、半公営農園でも75%で、最も低かった民間農園でも63.9%となった。

最も人気だった職業は教員で、半公営農園では68名のこどもに対して、また民間農園では55名、そして農家では46名、計170名のこどもたちに期待する職業として挙げられた。歴史的に、農園内にある学校には教員が不足していたという背景もあり、教員になる最低資格はO Level以上とされている。しかし、近年では農園における教員に求められるレベルとしては不十分であ

198 調査時にこどもがおり、回答できる年齢であればこどもが回答することもあった。

るとされており、かつ子どもたちにのぞむ教員の職場は農園とは限らないため、本調査においてはA Level 以上のカテゴリーとした。次いで挙げられたのは政府関係の仕事である。政府関係のしごとには軍人も含まれているが、99名(半公営農園:39名、民間農園:44名、農家:16名)の子どもたちに政府関係の仕事に就いて欲しいと望んでいた。また、世帯によっては子どもに医者やエンジニアなどの専門職について欲しい世帯もあった。これらの職業に就くためにはA Levelの資格が必要となる。このようなことから、子どもに期待する職業に必要とする教育レベルがA Level以上で高くなったと考えられる。

高度な教育レベルがなくてもできる可能性の高い職業としてはドライバーで、21名の子どもたちにドライバーになって欲しいと話していた。農園での仕事に就いては、回答を得られた490名のこどもの内12名のこどもにのみ希望しており、1名のこどもには管理職になって欲しいと話す世帯があったが、その他11名の子どもたちに対しては農園での仕事に就くことを希望していた。このことから、子どもたちの親の多くが子どもたちを農園で働かせたくないと考えていることがわかる。

本節では、「教育の重要性」と「こどもに望む教育歴」、そして「こどもに期待する職業」について、経営形態ごとに比較考察してきた。この3つの比較考察からわかることは、こどもに望む教育歴とこどもに期待する職業に必要な教育歴の乖離が、民間農園では大きいことである。農家では将来ついて欲しい職業に必要な教育歴の割合(83.5%)よりも大学以上の教育歴を目指して欲しいと思っている割合(93%)の方が高く、半公営農園では若干の乖離はあるものの、半公営農園では将来ついて欲しい職業に必要な教育歴の割合(75%)と大学以上の教育歴を目指して欲しいと思っている割合(70%)の差は5%であった。しかし、民間農園では将来ついて欲しい職業に必要なA Level以上の教育歴の割合は63.9%であるが、こどもに大学以上の教育歴を目指して欲しいと思っている割合は46%となっており、社会の中で求められている教育歴についての認識と民間農園の人びとの間にある認識とのずれがあることがわかった。農園では人手不足であり、必要とされるのは茶摘みの技術と毎日仕事にくること(収穫量)であり、このことはある意味、農園の仕事にはいつでも就けるため、必ずしも教育は必要ないことを意味している。民間農園では、農家のように所有権や半公営農園のような居住権はなく、民間農園での仕事を辞めたら、住居を退去する必要がある。本来であれば、教育は職探しをする際に重要な指標となるため、重要である。しかしながら、民間農園の人びとが教育は重要であると認識しつつも、こどもに望む教育歴が低い背景には教育へのイメージが農園の人びとにはつかないことや農園での人手不足が背景にあることが、インタビューからわかった。

(2) こどもの通塾状況と理由

良い職業の資格要件として、しばしば義務教育以上の学歴や技術が要求される。大企業でのオフィスワークでは、高卒以上の学歴が要求されることは普通であり、大学以上(又は同等のレベル)の学歴がないと幹部の道へはなかなか進むことができなくなっている。JETRO(2015)の報告によると、スリランカでは「学校での学習では不十分である。また、親が子どもたちに教えられない。」などの事情により子どもたちを塾に通わせることが多いとしている(JETRO 2015)。

図5-4は調査対象とした子どもたちの通塾状況である。

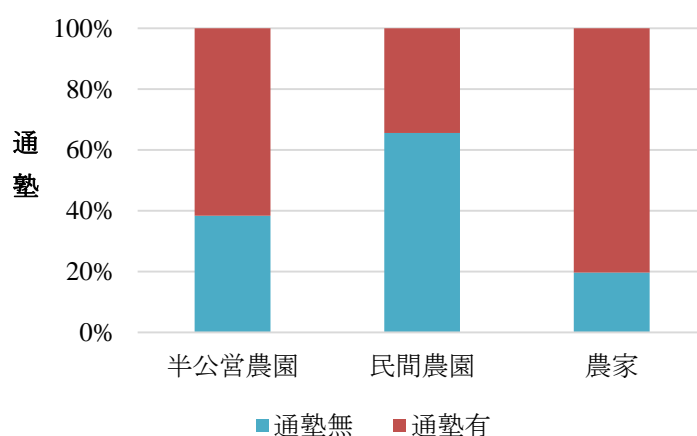


図5-4 こどもたちの塾通学状況

調査時には534名のこどもの内261名が放課後に有料の塾に通っており、192名が通塾していなかった(81名は無回答)。「こどもに望む教育歴」の質問において、農家では93%以上のこどもに対して高等教育(大学)以上の教育歴を希望しており、半公営農園では70%、民間農園では40%のこどもたちに対して望んでいた。しかしながら、通塾しているこどもたちを考察したところ、農家では103名(76.7%)、半公営農園でも102名(54.1%)が通塾しているが、民間農園のこどもたちは53名(25.9%)だった。前述のとおり、本調査地域では、経営形態間に大きな世帯所得の格差はみられないものの、農家では貧困格差が大きく、低所得の世帯も多かったが、塾に通っているこどもの割合は半公営農園や民間農園よりも高いことがわかった。

現地調査では、通塾している261名中257人のこどもの世帯が塾に通う理由について回答してくれた。質問方法は選択方式とし、1) 大学進学のためか否か、2) 良い成績のためか否か、3) その他から選択してもらい、3) その他を選択した場合には理由を伺った。その他の回答も含めると通塾の理由は主に3つであった。図5-5はからも分かる通り、通塾している主な理由として挙げられたのは、「学校で良い成績を修める」ため、または「授業についていく」ためで、136名

(52.9%)のこどもに対しての回答であった。次に、「高等教育(大学)進学」のため通塾しているこどもたちは108名(42.0%)であった。また、その他の理由としては、「知識の獲得」をあげ、257名中61名(23.7%)のこどもの通塾の目的として回答してくれた。

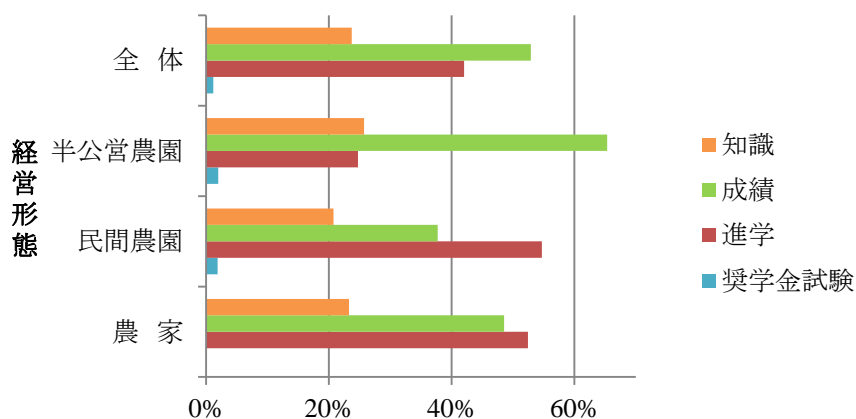


図5-5 通塾する理由

前述したとおり、スリランカでは5学年の修了後には奨学金試験があり、11学年の後にはO Level Test、13学年の後にはA Level Testがある。近隣の学校ではなく、より質の高い学校に入学するためにはこれらの試験で良い成績を修める必要がある。大学進学を希望する学生はA Level Testで上位の成績を修める必要があるが、大学進学に至らなくてもA Level Testに合格することにより「後期高等教育」の学位が授与されるとともに、専門学校や職業訓練校などへの道が開ける。また、これら高等教育の学校に進まなくとも、A Levelの取得が就職する際の条件であったり、就職する際に優位となったりすることも多い。そのため、塾に行く理由として「良い成績」または「高等教育(大学)進学」の質問に対して2人1人があてはまると回答したことは不思議ではない。しかしながら、2人に1人があてはまるということは、2人に1人があてはまらないと回答していることになる。「良い成績」または「高等教育(大学)進学」ではなく、「知識を得るため」のみと回答した割合は23.7%(61名)であり、5人に1人は「成績」や「大学進学」のためではないとしている。このことから、学ぶことは必ずしも「良い成績を修める」や「大学進学」ではなく、さまざまなことに対する教養としての「知識」を得ることだと考えている世帯もいるということがわかった。

こどもに望む教育歴として、高等教育(大学)以上の教育歴を希望する世帯は上述のとおりだが、必ずしも全員が塾に通っているわけでない。そこで、通塾していない理由について考察したところ下記のことがわかった。本調査では534名のこどものうち192名のこどもの世帯がこどもたち

は塾に通っていないと回答し、内 62 名がその理由を述べてくれている。塾に通わない主な理由は次の 3 つとなる。

1. 「塾は必要ない」(42.0%)
2. 「経済的理由」(35.5%)、
3. 「塾がない・機会がなかった」(14.5%)

最も多かった回答は「こどもは塾に行く必要がない」の 42%であったが、経済的理由をあげたこどもたちの親も 35.5%となる。経営形態別の特徴としては、半公営農園や民間農園では経済的理由を挙げたのが 32.1%と 50%であるのに対して、農家では 10%となる。世帯所得は、半公営農園より民間農園の世帯の方が高いが、経済的理由により通塾が困難であると判断した世帯も民間農園の方が高いことがわかった。無償教育と謳われているスリランカではあるが、学費や制服、教科書は無償でも、実際には学校の維持費や活動費など、学校に納めなければならない費用があり²⁰⁰、塾費用も家計の負担になっていると推察する²⁰¹。

本節では「教育」に対する世帯の意識と、こどもに望む教育歴と職業の関係を考察し、こどもたちが教育達成するために世帯がサポートをしている 1 つの例として「通塾状況」を考察した。このことからわかったことは、教育に対する意識や実際のサポート状況は農家では高く、民間農園では農家や半公営農園に比較して低いことだった。教育に対する意識の違いが経営形態ごとに異なる 1 つの理由として、本研究の対象とした各経営形態における生活構造が異なるからであると推察する。スリランカでは、法律的に相続は平等分配であるが、調査地域では末子相続であることと複数のこどもたちに分配できるだけの農地面積を所有していない。そのため、農地を相続できないこどもたちが独立できるようにさまざまな知識や技術を身につけさせるために、教育に力を注いでいると推察できる。教育が重要であるという世帯の認識は、放課後にこどもたちが塾に

200 A 校:年間の学校修繕費として 150 ルピー、施設費として 100 ルピー、その他の費用として 20 ルピーの計 270 ルピーかかる。

B 校:学校修繕費として 300 ルピー、施設費として 60 ルピーの計 360 ルピー。

C 校:学校修繕費として 100 ルピー。

D 校:学校修繕費として 650 ルピー、施設費として 1-5 学年は 36 ルピー、6-11 学年は 60 ルピーを納める。

E 校:学校修繕費として 600 ルピー、施設費として 60 ルピーの計 660 ルピー。

F 校:学校修繕費として 600 ルピー、施設費として 36 ルピーの計 636 ルピー。

G 校:学校修繕費として 300 ルピー、施設費として 60 ルピーの計 360 ルピー。

201 塾の月謝はコロンボで 300~500 ルピー程度である(JETRO 2015)。デニヤヤで塾を開講している先生によれば、この地区でも 300 ルピー程度が一般的であるとのことであった。

通う割合からも推測できる。一方、農園では、必ずしも学歴を必要とされているわけではない。歴史的には、農園で働く上で求められているのは、体力と茶摘みや栽培地メンテナンスの技術であり、農園の労働者には教育は必要であるとは考えられていなかった。実際に農園で出会った人びとの中には、農園の労働に従事するために教育は必要ではないと回答する者も多くいた。近年、農園では人手不足であり、農園の仕事にはいつでもつけるため、農園内に居住し、農園内の労働に従事しようと考えている場合には、高学歴の教育は必要ないと考えるのは普通かもしれない。そのため、交通費のかかる遠方の良い学校や有料の塾に通わせる必要はないと判断するのではないかと推察する。

5.2 世帯状況とこどもの教育達成

『こどもの活動調査』データ 2 次分析ではこどもの不在籍率は 11%であったが、本調査でも 11%の不在籍率であった。しかしながら、『こどもの活動調査』では農園部のこどもたちの不在籍率は 15.5%であるのに対して、現地調査では 14.7%となり、『こどもの活動調査』よりは、0.8%農園部に居住するこどもたちの在籍状況が良いことがわかった。また、こどもの留年・中退経験については、『こどもの活動調査』では 82.6%のこどもたちが留年・中退の経験をしておらず、866 名 (14.2%) が留年・中退の経験をしていたが、現地調査では 29.6%のこどもたちが留年・中退の経験していた。しかしながら、農園部に着目すると『こどもの活動調査』では 28.7%のこどもたちが何らかの理由で留年・中退を経験しており、現地調査では 40.5%のこどもたちが留年・中退を経験の経験をしており、『こどもの活動調査』よりも、現地調査のこどもたちの方が留年または中退の経験をしているこどもたちの割合が多いことがわかった。

本調査で対象とした農園を半公営農園と民間農園という経営形態から考察すると、半公営農園では 6.9%の不在籍率であり、民間農園では 22.4%の不在籍率となり、経営形態間において違いがあることがわかった。また、こどもの留年・中退経験についても、経験率が最も高かったのは民間農園であり、47.4%のこどもたちが適齢学年暦に在籍していない²⁰²。

本節では、こどもの世帯状況に着目し、経営形態の違いによって、こどもの教育達成にどのような違いや傾向があるのかについて明らかにする。こどもの教育達成については、1) 在籍状況と、2) 留年・中退の経験の 2 つの指標を用いて考察する。第 1 項である「5.2.1」では、世帯収入とこどもの教育達成との関係について経営形態間比較分析し、第 2 項の「5.2.2」では世帯主学歴とこどもの教育達成との関係について比較考察する。

202 次いで、半公営農園のこどもたちで、33.2%となり、農家のこどもたちは 2.3%である。

5.2.1 世帯所得とこどもの教育達成

アンケート調査から、民間農園の世帯は半公営農園の世帯よりも世帯収入が高いが、こどもの教育達成が良くないことがわかっている(第4章)。本項では、不在籍率の高い民間農園に焦点をあて、世帯収入の違いによる教育達成の状況を比較分析する。図5-6は各経営形態におけるこどもの在籍状況である。対象となるこどもは534名中511名で、半公営農園では188名中13名(6.9%)が不在籍で、民間農園では192名中43名(22.4%)が不在籍となり、農家では回答を得た131名のこども全員が在籍していた。図5-7は各経営形態におけるこどもの留年・中退経験で、対象となるこどもは534名中514名である。半公営農園では187名中62名(33.2%)、民間農園では196名中93名(47.4%)、農家では131名中3名(2.3%)のこどもが中退・留年の経験をしていた。世帯所得は3区分とし、ここでは20K未満の世帯を低所得、20K-30K未満の世帯を中所得、30K以上所得の世帯を高所得世帯とした。なお、本節では農家のこどもたちは全員在籍のため、在籍状況については記述を最小限とする。

(1) こどもの在籍状況

図5-6は各経営形態における世帯収入と在籍・不在籍の関係である。半公営農園では、約3割弱のこどもが低所得層に属し、4割弱が中所得層、3割強が高所得層に属していた。低所得の世帯で生活するこどもは56名(29.8%)おり、6名(3.2%)が不在籍であった。中所得の世帯で生活するこどもは70名(37.2%)中4名(2.1%)が不在籍となり、高所得層の世帯では、62名中(33%)3名(1.6%)が不在籍であることがわかった。半公営農園の場合にはサンプル数の関係から、統計的に分析することはできなかったが、世帯の所得が高くなるに従い、こどもたちの在籍状況がよくなる傾向にある。

民間農園では高所得層に属するこどもは約4割で、中所得層の世帯で生活するこどもは3割強、低所得層の世帯で生活するこどもは3割弱であり、半公営農園よりも高所得に属する世帯が多いことがわかる。民間農園における在籍傾向は半公営農園の在籍傾向と異なる。不在籍割合が最も高いのは低所得世帯(20K以下)のこどもで、53名中(27.6%)16名(8.3%)が不在籍であり、次に不在籍が高かったのは高所得世帯で、75名中(39%)17名(8.9%)だった。不在籍割合が最も低かったのは中所得層の世帯で生活するこどもで、64名中(33.3%)10名(5.2%)であった。民間農園では半公営農園とは異なり、世帯収入の差によって、こどもの在籍状況に違いがあるとは

いえず、また、世帯収入が高くなるにつれ、在籍状況がよくなる傾向にあるとはいえない²⁰³。

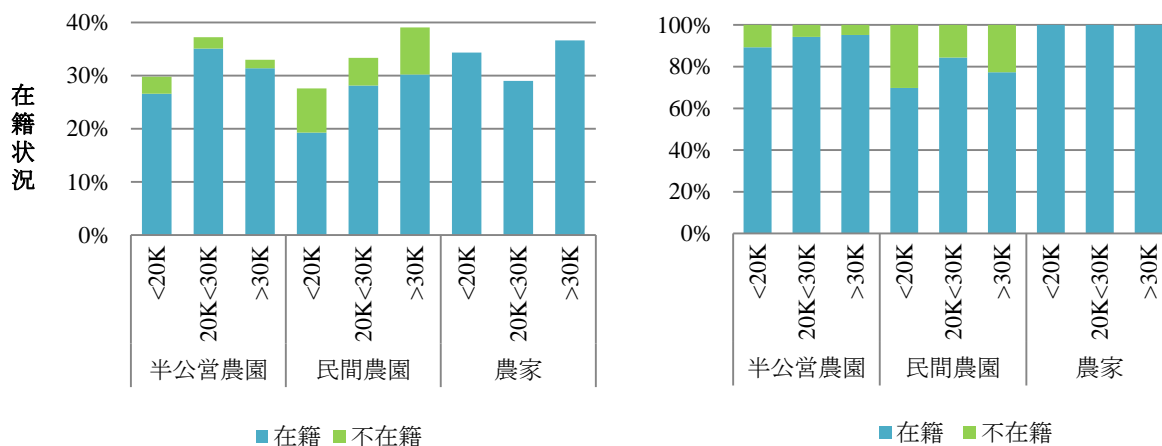


図 5-6 各経営形態における世帯所得と在籍状況

世帯所得ごとに半公営農園と民間農園を比較した場合には、中間所得層では統計的には有意ではなかったが、低所得層と高所得層では有意であり、農園の経営形態によって在籍状況に違いがあるとわかった。図 5-6 から、世帯所得と在籍状況の関係は、半公営農園では世帯所得が高くなるに従い、こどもの在籍状況がよくなるのに対し、民間農園では統計的には世帯所得に関係なく不在籍状況が変わらないことがわかる。しかし、民間農園では中間所得層の在籍状況が他の所得層よりも少し良いことから、中間所得層においては半公営農園と民間農園のこどもたちの在籍状況が統計的に有意ではないという結果となった。

(2) こどもの留年・中退経験

図 5-7 は各経営形態における世帯とのこどもの留年・中退経験の状況である。対象となるこどもは 534 名中 514 名で、留年・中退の経験をしているこどもは、半公営農園では 187 名中 62 名 (33.2%)、民間農園では 196 名中約半数の 93 名 (47.4%)、農家では 131 名中 3 名 (2.3%) であり、民間農園のこどもが最も留年または中退の経験をしていることがわかる。

半公営農園では 20K 未満の低所得で生活することも 53 名中 (28.3%) 24 名 (12.8%) が留年・中退の経験をしており、中所得層では 71 名中 (38%) 20 名 (10.7%)、高所得層では 63 名中 (33.7%) 18 名 (9.6%) が留年または中退の経験 (28.6%) をしている。統計的には有意ではなく、

203 半公営農園ではサンプル数の関係から正確な統計結果ができず、民間農園では 10%水準で有意ではない。

世帯所得によって子どもたちの留年・中退経験の違いがあるとはいえないが、低所得層の子どもたちの方が留年・中退の経験をよりしていることがわかった。

一方、民間農園では低所得層の子どもは 54 名 (27.6%) であるが、26 名 (13.3%) が留年または中退の経験をしており、中間所得層では 67 名中 (34.2%) 32 名 (16.3%) が留年・中退を経験していた。高所得層でも 75 名中 (38.3%) 35 名 (17.9%) が留年・中退を経験していた。民間農園においても、統計的には有意ではなく、どの世帯所得層でも、2 人に 1 人の子どもが留年または中退の経験をしていた。農家では低所得層に 1 名、高所得層に 2 名の子どもが留年・中退の経験をしていた。

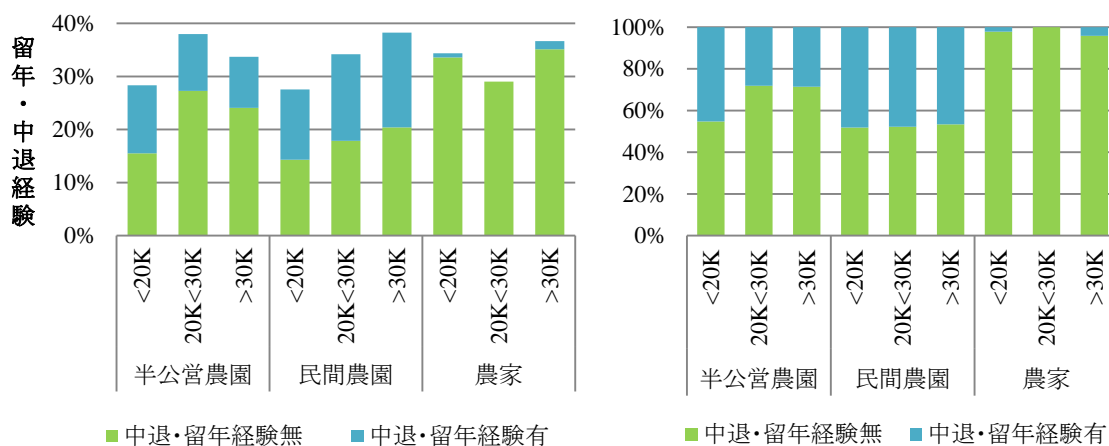


図 5-7 各経営形態における世帯収入と子どもの留年・中退経験

世帯所得層ごとに半公営農園と民間農園を比較した場合、低所得層では有意ではなく、中間所得層と高所得層では有意であり²⁰⁴、経営形態の違いにより留年・中退の経験に相違があることがわかった。世帯所得と留年・中退経験との関係については、半公営農園では低所得世帯では 2 人に 1 人が経験をしているが、中所得と高所得になると 5 人に 1 人と経験者の割合が低くなる。一方、民間農園ではどの世帯収入レベルにおいても、子どもたちの留年・中退の経験割合に違いがみられないが、経験をしている子どもの割合が 2 人弱に 1 人 (40% 台後半) と高い。

本比較から、半公営農園では世帯所得が高くなるに従い教育達成の改善がされているが、民間農園では世帯所得による教育達成の違いがあるとはいえず、世帯収入ではない要素が子どもたちの教育達成 (在籍状況および留年・中退の経験) と関係していることが推察できる。

204 低所得層においては 10% 水準で有意でないが、中間所得層と高所得層では 5% 水準で有意。

(3) 家計管理と貧困

半公営農園と比較して民間農園ではこどもたちの在籍状況は低い。しかしながら、上記の分析から、半公営農園と民間農園において、世帯所得による教育達成に違いはないことがわかった²⁰⁵。各経営形態における世帯収入については第4章で比較したとおり、農家の所得が高く、最も低かったのは半公営農園であった。1人当たりの所得は下記の表5-1のとおり、農家では6,885ルピーであるが、民間農園では1,000ルピー以上低い5,737ルピーとなり、半公営農園ではさらに低い5,282ルピーであった。半公営農園では民間農園よりも世帯所得または1人当たりの所得が低いにもかかわらず、こどもたちの在籍状況は民間農園よりも良好である。

表5-1 各経営形態における世帯所得と1人当たりの所得

	全体平均	半公営農園	民間農園	農家
世帯所得	26,970	25,151	26,534	29,303
1人当たりの所得	5,958	5,282	5,737	6,885

(ルピー)

半公営農園では不在籍のこどもは13名おり、民間農園では43名の計56名であったが、各経営形態において、世帯所得の違いによる教育達成の格差があるとは統計的にはいえなかった。しかし、聞き取り調査からは世帯所得による影響がこどもたちの教育に影響を与えていることが推察できる。学校を中退した直接的な理由について、経済的理由をあげたのは半公営農園では3名のこどもの世帯であり、民間農園では7名のこどもの世帯であった。また、半公営農園では8名のこどもの世帯が所得に関する問題について触れている。そこで、DEさんの世帯でのインタビューを紹介する。DEさんは11人家族の大所帯で3世代が一緒に生活しており、収入は56,000ルピーで、1人当たり5,600ルピーの世帯である。1人当たりの所得は半公営農園の平均よりも高いが、調査地域平均よりは低い。最も高齢の女性は教育を受けたことがなく、こどもたち世代5名のうち3名は教育を受けておらず、2名は初等教育以下の教育歴がある。孫世代は学齢期に達しないこども1名をいれ5名いる。孫世代4名のうち一番年上の孫(19歳)は学校に在籍したことはなく、2番目の孫(15歳)は3年生でやめてしまった。13歳と8歳になる孫たちは学校に通っている。3年生で学校に在籍することを辞めてしまった孫は調査時には15歳の女の子

205 半公営農園の在籍状況については、期待度数5%未満が20%を超えている。

で、名前は Avis(仮名)さんという。彼女が学校を辞めてしまった理由について、彼女は下記の通り話してくれた。

「私は、小学校3学年で学校に在籍するのを辞めました。将来は農園の工場で働きたいと思っています。私は学校が好きではありません。そのため、学校を辞めることにしました。また以前に住んでいた農園の工場で働いていた経験があり、農園の工場の仕事はとても簡単です。農園の工場で働くのであれば、教育は必要ないと思います。」

Avis さんは学校を辞めてしまった直接の理由として、将来の仕事と教育との関係について、上記のように語ってくれた。しかしながら、世帯主である祖母はご自身も含めておとなたちは子どもたちに良い教育を受けさせることが家族の夢であると話してくれ、一方で、安定した職ではないため、お金がもっと欲しいと話してくれた。そして、お金を稼ぐために、Avis さんのお母さんは中東に出稼ぎに行っており、Avis さんはお母さんの不在に悲しみに耐えながらも、家事手伝をこなしてくれていると説明してくれた。

本調査では不在籍率が高かった民間農園では、学校に在籍するのを辞めてしまった直接の理由として経済的理由あげたのは7名の子どもたちの世帯であったが、家計が苦しいという話をしてくれたのは24名の子どもたちの世帯であった。ここでは、中規模農園である P_(L)農園の1世帯と小規模農園の P_(N)農園の1世帯について紹介したい。P_(L)農園は調査時には約70Haの規模の農園で、農園主の以前の職業はアメリカの大学で教授をしていたと話してくれた。現在はスリランカの大学で教鞭をとるとともに、シンハラジャ・フォーレスト保護のために紅茶農園を購入し、有機栽培紅茶を生産し、且つ紅茶産業で働く人びとの支援にも力を入れている。労働者の多くは近隣の村から通ってきており、自宅をもたない人びとには農園内のラインルームを提供している。ライン・ハウスは2棟あり、1棟は2世帯が入れるようであり、もう1棟は5-6世帯が居住できる仕切りであった。農園内の住居に住む人びとは6か月未満で他の農園に移動してしまうと説明してくれ、2014年3月の調査時にインタビューに答えてくれた世帯は補足調査の際にはすでに他の農園に移動していた。P_(L)農園に居住していた Nan さんは4人家族で、祖母と夫婦とその子どもの世代がいっしょに居住し、所得の稼ぎ手は夫婦で、世帯所得は22,000ルピーであった。子どもの母親によると、子どもは6歳であるが学校に行かせていないという。

「子どもは学校に入学する年齢ですが、学校が離れているため、どこの学校にも行っていません。いまは、収入が低く、所得は不安定で、貯蓄もできません。それに、もっとお金を稼ぎたいの

で多くの日数を働きたいのです。しかし、この農園での仕事は大変で、決められたルールも厳しいため、他の農園へ移動することを検討しています。」

この Nan さんは識字のために教育は重要であると考えており、将来、子どもには商店で働いて欲しいと願っている。世帯は貧しく、そのため何も所有しておらず、将来は自分たちの家を建てたいと話していた。しかしながら、生活費をまかなうために、借金を抱えており、日々の生活は大変だという。農園主によれば学校は近くにはあるとのことだが、6 歳の子どもが徒歩で通学するには厳しい距離であり、公共交通機関では費用がかかる。また、農園をすでに移動する計画を立てていると話してくれ、調査時には学校に通わせるつもりはなかったものと推察する。

また、別の P_(N)農園は小規模農園で、農園主は労働者の移動が平均すると 1 ヶ月であると話してくれた。農園の移動が頻繁であるため、子どもたちは学校に在籍していないことが多く、子どもたちも農園での仕事を良く手伝っているとのことだった。P_(N)農園で働いている SW さんの世帯は両親と子どもの 3 人家族であった。調査時に両親は不在で、インタビューに答えてくれたのは調査時に子どもの面倒を見ていた親戚と子ども本人だった。子どもの名前は Ivar さん(男の子)で、調査時には 15 歳だった。両親が不在の理由は、母親を中東に送り出すための手続きに父親とともに都市に行っているとのことだった。Ivar さんは学校を 6 年生のときに辞めており、学校に行くよりもお金を稼ぎたいと話してくれた。下記は Ivar さんが話してくれた世帯状況である。

「僕は 10 歳の時に学校を辞め、約 5 年間学校に行っていません。この農園では月あたり 22 日以上働いたら 500 ルピー(1 日)もらえますが、その日数以下の場合には 380 ルピー(1 日)になります。借金とその利子 10%を返済しなければなりません。農園主からお金を前借することが多く、日々の生活ができない状況です。両親は働きっぱなしで、どこにも行くことができません。父親はお酒が好きで、所得のうち 4,000 ルピーをお酒に消費してしまったり、その他のものを購入してしまったりします。お酒を飲むと叫んだり、暴れたりして近所の人びとと喧嘩をします。僕はそれがすごく嫌です。また、この農園では電気代は自分で支払わなければなりません。毎月、約 30,000 ルピーの収入ですが、生活がとても苦しく、学校に行くよりも働いて稼ぎたいです。」

Ivar さんのご両親が働く農園は調査時の滞在先の近くにあるため、当該調査時に顔を合わすことがあったが、挨拶を交わす時の屈託のない笑顔とは異なり、家族の話をする時の Ivar さんは沈痛の面持ちで、生活の大変さや家族を思う気持ちが伝わってきた。彼は学校よりもお金を稼ぎ、両親を助けたいと話していた。本調査の次の日、個人の農家から回収した茶葉を荷台に山積み

にしたトラックが目の前を走っていた。荷台からこぼれんばかりの茶葉を抑えるように数名の男の人たちが荷台に乗っていた。その荷台から 1 人、こちらに手を振る男の人がおり、よく見てみると昨日インタビューに答えてくれた Ivar さんだった。15 歳のこどもの労働はスリランカでは禁じられていないが、回収した茶葉を農家に取りに行き、荷台に乗せる作業は大変である。また、道路の舗装状況が悪いなかを走るトラックは揺れ、茶葉が荷台から落ちないように茶葉の上に乗ることは、自分たちが振り落とされないように気を付ける必要がある。こどもでも仕事を手伝えば、収入を得ることができる。Ivar さんは両親が不在の間も、家計のために手伝っていたものと推測する。

本調査では補足調査として調査対象地域で話のできた 5 名の行政官うち 4 名が農園の人びとの収入について話してくれた。GS_(K)は 2,600 人が居住する地域の行政官であり、この地域には学校が 1 校ある。この地域のおもな職業は紅茶栽培農家と紅茶農園であり、行政官の主な仕事として、地域の安全を守り、土地に関する問題を解決するとともに、ID や所得などの書類を発行し、地域開発プロジェクトのサポートをすることであると説明してくれた。GS_(K)行政官によれば「農園で働く労働者は、大きな借金を農園主に負っており、より良い給与を求めて農園間を移動する。農園の労働者は親から受け継ぐ土地を所有しておらず、また収入も十分ではない。また貯金額も少ないため、土地や家を購入することは困難である。」とのことであった。教育との関係については述べられてはいないが、農園で従事する人びとが借金を農園主に負っていること、またより良い給与を求めて農園間を移動することが読み取ることができる。

農園関係者の話から低収入の理由と家計管理の課題が見えてくる。半公営農園の社会福祉士(2 名)や児童福祉士の話によると、労働者が抱える諸問題の 1 つとして「貧困」または「低収入」をあげた。

RPC_(B)社会福祉士によると「労働者の世帯では収入に対して、家族の人数が多いうえに、お酒に使ってしまうため、貧困に陥りやすいです。また、農園ではこどもたちに良い教育を受けさせることができず、特に低収入の世帯ではこどもを進学させる気を起こさせないのが現状です。」と話してくれた。

RPC_(B)児童福祉士は「労働者の世帯は収入が低く、貧困に陥りやすい状況です。より良い学校に進学するためには農園外の学校に行かなければならないのですが、こどもたちを取り巻く厳しい環境がこどもたちの在籍状況や進学に影響を与えています。」とし、続いて「こどもの健康や

教育の重要性について親や家族など大人たちの意識を高めることが重要であると私は考えています。」と話してくれた。

3 名の話からは、得た所得をお酒などに費やしてしまい家計が苦しくなる様子と農園外への進学のコストを支出できない困難さを感じた。所得について半公営農園のマネージャー(2 名)によれば、上記と同じ問題点を指摘するとともに、低収入の別の点を挙げる。

RPC_(B) マネージャーによれば「日々の日当は決まっているが、1 日の基準収穫量を超えて茶葉を収穫した労働者には超えた分の給与が支払われるとともに、毎日出勤すれば勤務手当も支給している。また、農園では年金や雇用保険のサポート、無償の医療サービスや託児所のサービスを行い、住居・トイレ・学校などの設備を提供するとともに、水・電気の供給も行っている。農家であればこれらの負担は自己負担であるが、農園に居住する人びとはこれらのサービスが農園から提供されており、家計の負担は少ないはずである。しかしながら、得た所得をうまく管理できず、アルコールになるほどお酒を飲む世帯も多く、栄養価のある食事もとらないため大人も子どもも体調を壊す傾向がある。教育に関しては、農園内にある学校に在籍するためのバス・サービスを提供するとともに、農園の親会社のサポートとして子どもたちを大学に行かせる支援を行っているプログラムがある。」とのことだった。

また、RPC_(D) 農園 マネージャーは労働日と日当が保障されているにも関わらず、農園内に居住する多くの労働者が農園の仕事に毎日来ないことを指摘した。彼によれば、世帯のほとんどが2 人以上の働き手があり、日当は 620 ルピーである。毎月 25 日出勤すれば 31,000 ルピーの給与と皆勤手当が支給され、この地域における農家よりもずっと安定した給与を受け取ることができるが、働きに来ないことが多いという。また、農園では1 月当たり 500g の茶葉を無料で支給しており、経済的には農家よりも恵まれているが、お酒や遊興費、不要なものに給与を費やし、子どもたちの教育にあまり興味がなく、また貯金をしたりすることもない。貯蓄や教育だけでなく、多くのことについていろいろな指導をしているが、労働者の意識を変化させることはなかなか困難であると話してくれた。つぎに、世帯状況のもう1 つの変数である「世帯主の学歴」と子どもの教育達成について各経営形態間の相違を考察する。

5.2.2 世帯主学歴とこどもの教育達成

こどもの教育達成は親(世帯主)の階層によって異なることが指摘される。前章の考察から、特に民間農園におけるこどもが教育達成が良くないことが明らかになった。また、農家の世帯主と比較して、農園に属している世帯主の方が低学歴傾向であり、半公営農園と民間農園との比較においても世帯主学歴に違いがあった。高学歴世帯主は半公営農園では 14.3%、民営農園では 6.8%となり、農家は 48.1%であり、教育歴の低い世帯主が農園に多い(第 4 章)。本項では世帯主学歴に焦点をあて、経営形態においてこどもたちの教育達成に違いがあるのかを比較分析する。

(1) こどもの在籍状況

図 5-8 は各経営形態における世帯主学歴によるこどもの在籍状況である。対象となるこどもは 534 名中 511 名で、半公営農園では 188 名中 13 名(6.9%)が不在籍であり、民間農園では 192 名中約 43 名(22.4%)で、計 56 名(11%)が不在籍である。

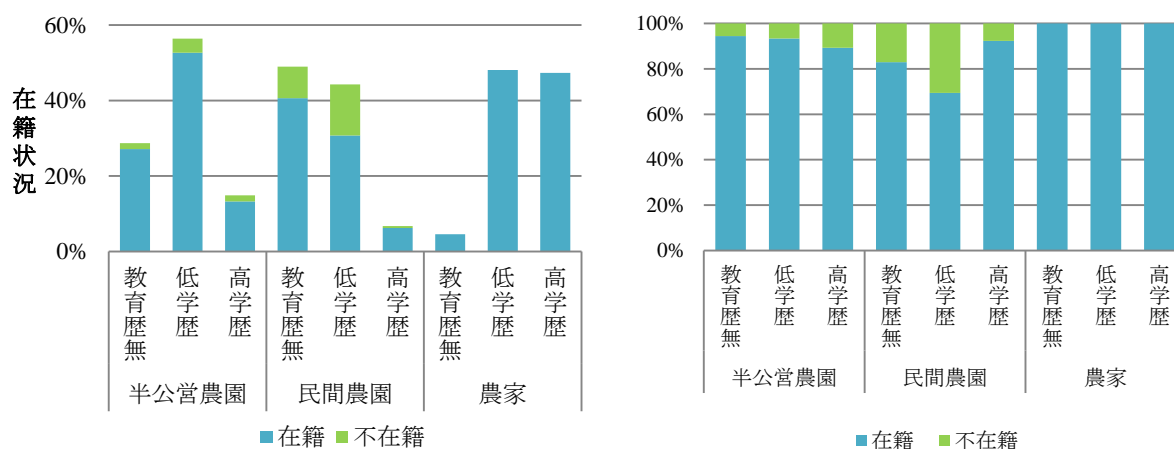


図 5-8 世帯主学歴とこどもの教育達成(在籍)

半公営農園では、世帯主に教育の経験がまったくないこどもは 54 名(28.7%)で、内 3 名(1.6%)が不在籍であり、また世帯主が義務教育以下の経験しかない低学歴(1-9 学年)のこどもは 106 名(56.4%)があてはまるが、内 7 名(3.7%)が不在籍となる。また、約 14.9%に当たる 28 名の世帯主が義務教育以上(10 学年以上)の高学歴であり、こどもの不在籍は 28 名中 3 名(1.6%)となる。しかしながら、統計的には有意ではなく、世帯主の学歴の違いによって、こどもたちの在籍状況に違いがあるとはいえない。民間農園では、こどもの約 2 人(49%)に 1 人が世帯主

に教育を受けた経験(記憶)がなく、94名中(49%)16名(8.3%)が不在籍であり、また世帯主が低学歴のこどもは85名(44.3%)があてはまるが、内26名(13.5%)が不在籍となる。民間農園では世帯主が高学歴であるこどもの人数は13名(6.8%)であるが、世帯主が高学歴の場合には不在籍のこどもはいない。民間農園の場合には、統計的に有意であり、世帯主の学歴の違いによって、こどもたちの在籍状況に違いがあった。

世帯主の学歴レベルが同じ場合に経営形態間の違いがあるのか考察してみると、(農家を含めた)経営形態間のこどもの在籍状況は、世帯主が教育歴無の場合には、経営形態の違いによって、こどもの在籍状況に差があるとはいえないが、半公営農園と民間農園との比較においてはこどもの在籍状況に違いがあることがわかった。また、半公営農園および民間農園では世帯主の学歴が高くなるに従い、こどもたちの在籍状況が改善されると推測していたが、世帯主学歴が高くなるに従い、こどもたちの在籍状況が改善されるという正の関係ではなかった²⁰⁶。特筆すべき点は、世帯主が低学歴レベルの場合には経営形態においてこどもたちの在籍状況に違いがみられ、特に民間農園では在籍状況が良くない点である。このことから、世帯主が同様の教育歴の場合²⁰⁷でも、半公営農園と民間農園の違いによってこどもの在籍状況の傾向に違いがあることがわかった。

(2)こどもの留年・中退経験

図5-9は各経営形態における世帯主学歴レベルごとのこどもの留年・中退経験である。対象となるこどもは534名中514名で、半公営農園では187名中62名(33.2%)が留年・中退経験をしており、民間農園では196名中約半数の93名(47.4%)が留年・中退の経験をしている。農家では131名中3名(2.3%)のこどもが留年・中退の経験をしていた。

206 農家のこどもを含めたカイ2乗検定では、世帯主に教育経験がない場合には5%水準で有意ではない。低学歴の場合には0%水準で有意。高学歴の場合にはサンプル数の関係で正確な分析結果を得ることはできない。半公営農園と民間農園を比較した場合には教育歴がない場合と低学歴の場合には有意だが、高学歴の場合は正額な分析結果を得ることはできなかった。

207 世帯主が高学歴の場合は除く(サンプル数が少ないため、正確な統計結果が出ていないため)。

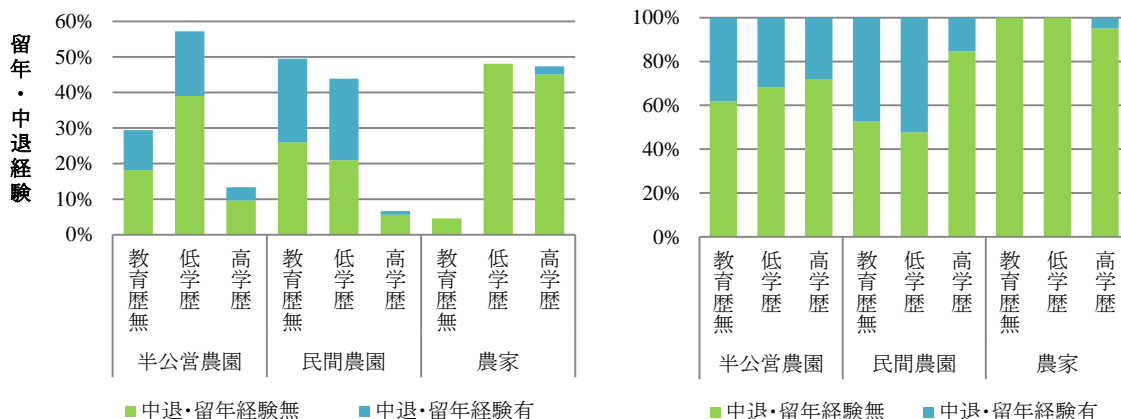


図 5-9 世帯主学歴とこどもの教育達成(留年・中退経験)

半公営農園では、世帯主に教育歴がないこども 55 名 (29.4%) 中 21 名 (11.2%) が留年・中退の経験があり、また世帯主が低学歴のこども 107 名 (57.2%) 中 34 名 (18.2%) が留年・中退の経験をしている。世帯主が高学歴の場合には 25 名 (13.4%) 中 7 名 (3.7%) のこどもが留年または中退の経験をしていた。民間農園では、世帯主に教育歴がないこどもは 97 名 (49.5%) であるが、内 46 名 (23.5%) が留年・中退の経験をしており、世帯主が低学歴の場合には 86 名 (43.9%) の半数である 45 名 (23%) が留年・中退経験者であることがわかった。半公営農園では統計的に有意ではなく、世帯主の学歴によってこどもの留年・中退経験に違いはなく、民間農園では統計的に有意な違いがあることがわかった。

世帯主の学歴が同じ場合に、こどもの留年・中退経験が各経営形態によってどのように異なるのかを考察してみたところ、世帯主に教育歴がない場合や低学歴の場合には、半公営農園に比べて民間農園の方が留年・中退経験をしているこどもたちの割合が多かった。なお、半公営農園では世帯主の教育歴に関係なく、留年・中退経験のこどもの割合は変わらないが、民間農園では低学歴以下(教育歴無または 9 学年以下)に比べ、中等教育後期(10 学年以上)では、留年・中退経験をしていないこどもの割合が増えるという正の関係にあった²⁰⁸。

第 2 項の「5.2.2」では世帯主学歴とこどもの教育達成の関係を経営形態によってどのように異なるのかを比較考察してきた。農家では不在籍者はおらず、留年または中退の経験をしているこ

208 農家のこどもを含めたカイ2乗検定では、世帯主が低学歴の場合には0%水準で有意。教育歴がない場合や高学歴の場合には正確な分析結果を得られなかった。半公営農園と民間農園の比較では、世帯主に教育歴がない場合には有意ではなく、低学歴の場合には 0%水準で有意となった。高学歴の場合には正確な分析結果を得られなかった。

どもは3名であり、この3名の世帯主の教育歴は高学歴であった。半公営農園のこどもたちは、世帯主が低学歴と教育歴無を比較すると、世帯主が低学歴の世帯の方が教育達成はよくないなど、世帯主の学歴が高くなるに従い、教育達成が良くなっているとはいえない。民間農園では世帯主の学歴によってこどもたちの教育達成が異なるという分析結果であったが、こどもたちの教育達成は世帯主学歴が低学歴の場合に良くなく、最もよかったのが高学歴のレベルであった。

世帯主や親の教育歴とこどもの教育に関して、インタビュー中によく耳にしたのが農園のこどもたちの親や家族は教育歴がないために教育の重要性を理解していないということであった。現地調査では「より良い生活を送るために教育は重要であるか」と「教育の重要性」について質問をし、302世帯中298世帯が回答してくれた。農家の世帯では「より良い生活を送るために教育は重要であるか」の質問に対して、「はい」と回答したのは99世帯中52世帯(52.5%)であり、「いいえ」と回答したのは47世帯(47.5%)であった。「いいえ」の回答をした世帯のうち世帯主の学歴が低学歴以下の割合は57.4%であり、高学歴者の割合は42.6%であった。一方、半公営農園では、「はい」と回答したのは100世帯中60世帯(60%)であり、「いいえ」と回答したのは40世帯(40%)であった。「いいえ」の回答をした世帯のうち世帯主の学歴が低学歴以下の割合は87.5%であり、高学歴者の割合は12.5%であった。民間農園では、「はい」と回答したのは99世帯中59世帯(59.6%)であり、「いいえ」と回答したのは40世帯(40.4%)であった。「いいえ」の回答をした世帯のうち世帯主の学歴が低学歴以下の割合は95%であり、高学歴者の割合は5%であった。世帯主の学歴レベルごとに「より良い生活のために教育は重要であるか」の問いに対する回答を考察すると、教育歴の低い世帯主より高い世帯主の方が「重要である」と回答した割合が高かった²⁰⁹。また、経営形態別に考察すると、どの経営形態においても世帯主の学歴が高くなるに従い、「より良い生活のために教育は重要である」と回答する率が高くなっている。特に、民間農園ではその率が高く、半公営農園と農家では高学歴でも60-69%であるのに対して、民間農園では80%となっている²¹⁰。民間農園では10名(世帯主100名)が高学歴であるが、そのうち9名が世帯所得が高く、8名が教育は重要であると回答している。

農園部に居住する人びとについて、学校の教員(4名)や農園主(管理者)が親の認識が低いと話してくれた。民間農園P_(M)のマネージャーは農園で労働する人びとについて下記のとおり話をしてくれた。P_(M)農園主はこの地域に2つの農園を所有しており、1つは22エーカー、もう1つは19エーカーの農園であり、各農園には20人前後の労働者を雇用している。農園部の居住地

209 E27「良い生活を送るためには教育は重要か」の問いに対して、世帯主の教育歴が「無」の場合には53.1%(43名)が、低学歴の場合には56%(79名)が、高学歴の場合には(64.5%)49名が重要であると回答。

210 E27「良い生活を送るためには教育は重要か」という問いと「世帯主学歴」との相関は0.145。

区には 12 世帯が居住し、9 世帯が近隣から通勤している。インタビューに応じてくれたマネージャーUP 氏はインタビュー当時 60 歳で、P_(M)農園に働き始めてから 9 年目であると話してくれた。

UP 氏によれば、「こどもの親は学校に行かせる世帯もありますが、こどもたちを学校に在籍させることができるにもかかわらず、学校に行かせない世帯もあります。彼らは教育を受けた経験がないか、または教育を受けていても、低いレベルです。労働者の中には字を読むこと、書くことができず、計算もできない者も多くいます。教育歴が低いため、教育の重要性についての認識が全くなく、教育の重要性についてのイメージも付きません。両親はこどもたちが学校に在籍するよりも、家族のために貢献して欲しいと思っています。」と話してくれた。

UP 氏は上記のように親の教育歴と教育に対する意識について説明してくれたが、一方で労働者が置かれている生活環境についても説明してくれた。UP 氏によればこどもたちが在籍する学校は少し農園から離れており、在籍には交通機関が必要であること、また P_(M)農園には保育所や託児所がないため、小さなこどもがいる世帯では姉や兄たちが弟妹の面倒をみざるをえない状況にあることも併せて説明してくれた。親世代と教育との意識について、具体的に語ってくれたのは UP 氏だけだったが、労働者の中にはなぜ学校に行かなかったのかの理由について語ってくれた人もいる。親の教育とこどもの教育との関係を説明するものではないが、親世代の教育状況として紹介したい。

Sun さんは 60 歳でインタビュー当時、民間農園である P_(A)農園の居住地区に妻と孫 2 名の 4 名で暮らしていた。こどもたち夫婦はナトナプラにあり、経済的理由からこどもたちは祖父母と暮らしている。孫は 14 歳と 2 歳の女の子で、14 歳の孫娘は小学 5 年生で学校に行くのを辞めてしまった。SUN さんは自身と家族の状況について非常に悲観的になっており、自分たち夫婦の行く末とともに、孫たちの将来が心配であると語ってくれた。

Sun さんは「わたしは学校を 4 年生までしか出ていません。妻は学校に行った経験がありません。孫の両親はいまナトナプラに住んでいますが、経済的理由からこどもを養育することができず、孫たちは祖父母である私たちと一緒に住んでいます。孫たちの親からの仕送りはなく、私の収入 31,000 ルピーで生活をしています。自分たちのこどもは学校に在籍していません。なぜなら 1983 年に始まったシンハラ人とタミル人の内戦により、私たちが所有していたものや書類(出生証明書)がすべてなくなってしまったからです。雇用保険や年金に関する書類もなくなってしまいま

した。わたしたちは何も持っていません。・・・しかし、教育は重要であると考えています。・・・」

Sun さんは内戦のために子どもたちを学校へ行かせることができなかったことを語ってくれる一方で、孫たちの教育については重要であり、14 歳になる孫娘も再び学校に戻りたがっていることを語ってくれた。スリランカでは特定の書類がなくとも、再発行できる書類がほとんどである。しかしながら、Sun さんは、そのことを長い年月知らず、また誰も教えてくれなかったという。そこで、学校手続きに必要な方法や、年金に関する書類の再発行方法を伝えたが、補足調査時に P_(A) 農園に訪れたときにはすでに家族とともに違う農園に移動していたため、その後の話を聞くことはできなかった。このように、インタビューからは子どもを養育する世帯の教育歴が低いために教育の重要性を認識できないことや、生活する上で重要な情報を入手する方法を知らないことが読み取れる。

第 2 節の「5.2」では子どもの世帯状況と子どもの教育達成の関係について、アンケート調査とインタビューをもとに比較考察してきた。半公営農園では世帯所得が高くなるにつれて教育達成が良くなっていたが²¹¹、民間農園では、世帯所得の違いによって、子どもの教育達成に違いがあるとはいえなかった。しかし、インタビューからは「所得の低さ」、「農園間移動」、「家計管理」、「子どもの労働」などが子どもの教育達成の課題として挙げられた。

また、世帯主学歴と教育達成との関係については、世帯主の学歴により子どもたちの教育達成に違いがあることが考察できた。しかし、半公営農園では世帯主学歴の違いにより、子どもの教育達成の違いがあるとはいえず、一方、民間農園では、子どもたちの教育達成に違いがあった²¹²。インタビューからは、教育歴が低いために「教育の重要性」を認識できない世帯主もおり、子どもたちを学校に通学させるよりは家族に貢献してほしいこと、また、情報を得る方法を知らないために、いろいろな手続きができないことがあることがわかった。次に、子どもたちが生活する住居と居住生活空間と子どもの教育達成について経営形態間における比較分析を行う。

211 半公営農園では、世帯収入と在籍状況については、期待度数 5 未満が 20%を超えるため、正確な統計結果を得ることができなかった。また、世帯収入と中退・留年経験との関係においては 5%水準では有意ではなく、10%水準で有意であった。

212 半公営農園では、世帯主学歴と在籍状況については、期待度数 5 未満が 20%を超えるため、正確な統計結果を得ることができなかった。また、中退・留年経験との関係においては 10%水準では有意ではなかった。

5.3 生活環境とこどもの教育達成

第 2 節の「5.2」では、こどもを取り巻く環境の中でも重要な要素である世帯状況に着目し、こどもの教育達成を世帯所得という経済的視点と世帯主学歴という知識的視点から比較分析した。第 3 節の「5.3」では、こどもたちを取り巻く環境のうち住環境や生活空間の安全性に着目し、こどもの教育達成をこどもたちの居住空間である住環境という視点とこどもたちが日々の生活をする中で安全・衛生的な設備を家庭内で利用できているかという安全性の視点から比較考察する。第 1 項ではこどもの住環境とこどもの教育達成について経営形態間の比較分析を行い、第 2 項では住居の設備の安全性に着目した生活環境とこどもの教育達成について比較考察する。

5.3.1 住環境とこどもの教育達成

第 1 項の「5.3.1」ではこどもたちが日々の生活している住居状況とこどもたちの教育達成との関係を考察する。「住環境」変数は前述したとおり、3 つの変数（「住居の所有」、「住居の形態」、「1 人あたりの部屋数」）から構成されている。住環境は 4 区分となり、ここでは住環境構成要素が 1 つも当てはまらない場合には「低」とし、1 つあてはまる場合には「中低」、2 つあてはまる場合には「中」、すべてあてはまる場合には「高」とした。農家ではすべての世帯が戸建の住居を所有していたため住環境は「中」レベルか「高」レベルに属している。また、民間農園では近隣に（戸建）居住している人びとが働きにきていることも多く、調査対象の多様性分布が広いため、半公営農園の世帯の方が民間農園よりも住環境レベルが低くなった。本項では、各経営形態において住環境のレベルの違いによる在籍状況や留年・中退経験の状況を比較分析する。

図 5-10 は各経営形態における住環境によるこどもの在籍状況である。対象となるこどもは 534 名中 494 名で、半公営農園では 180 名中 13 名 (7.2%) が不在籍であり、民間農園では 183 名中約 38 名 (20.8%) が不在籍であることがわかった。図 5-11 は各経営形態におけるこどもの留年・中退経験で、対象となるこどもは 534 名中 496 名である。半公営農園では 179 名中 59 名 (33.0%) が留年・中退の経験があり、民間農園では 186 名中約 87 名 (46.8%) のこどもが留年・中退の経験があることがわかった。なお、農家では 131 名中 3 名 (2.3%) のこどもが留年または中退の経験をしていた。

(1) こどもの在籍状況

図 5-10 は各経営形態における、各住環境レベルとこどもの在籍状況である。半公営農園では、住環境「低」レベルの世帯に属するこどもは 4 分の 3 に達し、133 名 (73.9%) おり、内 7 名 (3.9%)

が不在籍で、「中低」レベルに属するこどもは 40 名 (22.2%) であるが、内 6 名 (3.3%) が不在籍となる。住環境が「中」レベルに属しているこどもは 7 名しかいないが、これらのこどもは全員学校に通学している。民間農園ではこども 134 名中 131 名 (71.6%) が「低」レベルの住環境のもとに生活し、32 名 (17.5%) が不在籍である。住環境が「中低」レベルに属するこどもは 18 名 (9.8%) であるが、内 2 名 (1.1%) が不在籍となる。住環境が「中」レベルに属しているこどもは 26 名しかいないが、これらのこどものうち不在籍のこどもは 2 名 (1.1%) である。また、住環境が「高」レベルに属しているこどもは 8 名しかいないが、これらのこどもは全員学校に通学している。

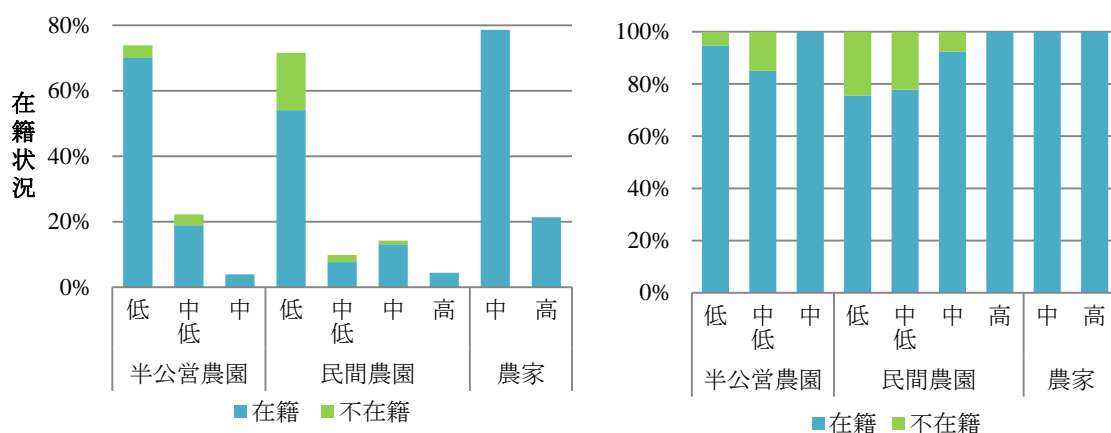


図 5-10 住環境とこどもの教育達成(在籍)

住環境は、農園部では中低レベル以下で生活するこどもたちが大半であるのに対して、農家では中レベル以上の住環境の中で生活しているという違いがあった。また、半公営農園では住環境レベルが良くなるに従いこどもの在籍状況が悪くなるという負の関係にあるが、民間農園では住環境が良くなるにつれて、こどもの在籍状況がよくなるという正の関係にある。ただし、統計的には、半公営農園および民間農園においても正確な統計結果を得ることができなかった。

各住環境レベルにおいて、各経営形態におけるこどもの在籍状況の違いを考察してみる。農家のこどもを含めたカイ 2 乗検定では、住環境が「低」レベルの場合において、統計的に有意であり、経営形態の違いによる在籍状況の違いがある²¹³。農園経営形態間の比較においても同様の結果であった。住環境については統計分析をすることはできなかったが、最も不在籍割合が高い民間農園では、住環境が良くなるにつれて、こどもの在籍状況が改善されることから、住環境の違いがこどもの在籍状況と関係していることが推察できる。

213 その他のレベル区分では、サンプル数の関係で正確な統計結果がでなかった。

(2)こどもの留年・中退経験

図5-11は各経営形態における住環境レベルごとのこどもの留年・中退経験である。対象となるこどもは534名中496名で、半公営農園では179名中59名(33.0%)が留年・中退経験をしており、民間農園では186名中約半数の87名(46.8%)が留年・中退経験をしている。農家では131名中3名(2.3%)のこどもが留年・中退経験をしていることがわかった。

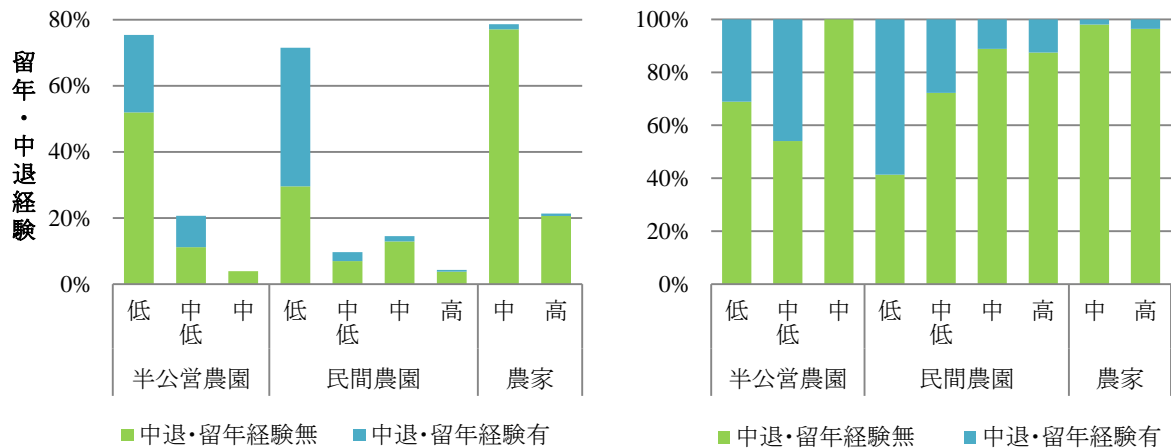


図5-11 住環境とこどもの教育達成(留年・中退経験)

半公営農園では、住環境が「低」レベルで生活するこどもは135名(75.4%)おり、内42名(23.5%)が留年・中退経験がある。また、「中低」レベルの住環境下で生活するこどもは37名(20.7%)があてはまるが、内17名(9.5%)が留年または中退の経験をしている。「中」レベルの住環境で生活するこどもは7名(3.9%)で、全員が留年も中退も経験をしていない。民間農園では、住環境が「低」レベルで生活するこども133名(71.5%)中、その半数以上の78名(41.9%)が留年または中退の経験をしており、また「中低」レベルの住環境下で生活するこども18名(9.7%)中5名(2.7%)が留年または中退の経験をしている。住環境が比較的高いレベルの中で生活しているこどもの割合は少ないが、「中」レベルの住環境で生活するこどもは27名(14.5%)おり、内3名(1.6%)、「高」レベルの住環境のもとで生活するこどもは8名(4.3%)となる内1名(0.5%)が留年または中退の経験があった²¹⁴。

半公営農園と民間農園におけるこどもの留年・中退経験状況の傾向は、在籍状況と同様に、半公営農園では「中低」レベルの方が「低」レベルの住環境で生活しているこどもたちよりも留年・

214 半公営農園および民間農園とも、サンプル数の関係から正確な統計結果が出なかった。

中退経験をしている割合が高く、民間農園では住環境のレベルが高くなるにつれて留年・中退の経験をしている子どもが多くなるという正の関係にあることがわかった²¹⁵。住環境レベルごとに、各経営形態間のこどもの留年・中退経験状況を考察してみると、農家の子どもを含めたカイ 2 乗検定では、住環境が「低」レベルの場合には、経営形態の違いによって子どもたちの留年・中退経験に違いがあるという分析結果になったが、「中低」レベルにおいては、経営形態の違いによって子どもたちの留年・中退経験に差はないという分析結果となった²¹⁶。なお、「中」レベルと「高」レベルについては、サンプル数の関係から正確な分析ができなかった。半公営農園と民間農園を比較した場合にも、同様の分析結果となり、「低」レベルでは統計的に有意であったが、「中低」レベルにおいては経営形態の違いによって、子どもたちには留年・中退経験の差はないという分析結果となった。

(3) 住環境 3 変数とこどもの教育達成

第 3 章における『こどもの活動調査』データ 2 次分析では、農園部におけるこどもの教育達成状況の違いは「住環境」の違いと関係していることがわかった。住環境変数を構成する要素は「住居の所有」「住居のタイプ」と「1 人あたりの部屋数」という 3 つの変数である。

これらの 3 変数と在籍状況と関係については、半公営農園では正確な統計結果を得ることができなかった。民間農園では「1 人あたりの部屋数」については正確な統計結果を得ることができなかったものの、「住居の所有」と「住居のタイプ」については、これらの変数の違いによってこどもの在籍状況に違いがあることがわかった。

また、3 変数と留年・中退経験の関係については、半公営農園では「1 人あたりの部屋数」については正確な統計結果を得ることができなかったが、「住居の所有」と「住居のタイプ」については、統計的に有意ではなく、これらの変数の違いによってこどもの留年・中退経験に差がないという統計結果だった。しかし、民間農園では「1 人あたりの部屋数」については正確な統計結果を得ることができなかったものの、「住居の所有」と「住居のタイプ」の違いによってこどもの留年・中退経験に違いがあることがわかった。

本比較から、民間農園では住環境の違いによって、特に「住居の所有」と「住居のタイプ」という 2 つの要素において、教育達成に違いがあることがわかった。スリランカでは学区が決められており、通常はその学区内にある学校に通学する。本調査地域には複数の学校があり、親たちは

215 各経営形態におけるカイ 2 乗検定はサンプル数の関係で正確な統計結果がでなかった。

216 住環境「低レベル」区分では 0%水準で有意、「中低レベル」区分では 10%水準で有意でなかった。

これらの学校から自分たちのこどもに適した学校に入学・通学させようとするため、住居を所有しているとこどもの教育計画(それに伴う所得管理)が立てやすい。本調査地域においては住居所の有無によって比較すると、住居を所有している世帯のこどもの方が教育達成状況は良かった。半公営農園と民間農園を比較すると、半公営農園では住居を所有している世帯は 103 世帯中 15 世帯²¹⁷、所有していない世帯は 87 世帯²¹⁸であった。民間農園では 100 世帯中 28 世帯²¹⁹が住居を所有していると回答し、71 世帯²²⁰が所有していないとの回答だった。農家では 99 世帯すべてが戸建の住居を所有していると回答してくれた。

半公営農園では不在籍者 13 名中 9 名(4.8%)のこどもが住居を所有していない世帯に属していると回答し、民間農園では不在籍のこども 43 名中 40 名(20.9%)の世帯が住居を所有していないことがわかった²²¹。また、半公営農園では留年または中退の経験のあるこども 61 名中 52 名(28.0%)のこどもの世帯が住居を所有していないと回答し、民間農園では留年・中退の経験があるこども 93 名中 88 名(45.1%)のこどもの世帯が住居を所有していないことがわかった²²²。本比較分析から、半公営農園および民間農園においても、住居を所有していない世帯の方がこどもの在籍状況がよくないことがわかった。

また、住居のタイプについては、半公営農園では不在籍のこども 13 名中 11 名(5.9%)のこどもがライン・ハウスに居住し、民間農園では 43 名の不在籍のこどもの内 39 名(20.4%)がライン・ハウスに居住している。また、半公営農園では留年・中退の経験のあるこども 61 名中 51 名(22.4%)がライン・ハウスに居住し、民間農園では留年・中退の経験のあるこども 93 名中 86 名(44.1%)がライン・ハウスに居住していることがわかった。本比較分析から、ライン・ハウスに居住しているこどもたちの教育達成状況がよくないことがわかった。

アンケート調査からは農園の仕事に家族が従事する 201 世帯の内 158 世帯が住居を所有おらず、また、ライン・ハウスに居住する世帯は 154 世帯であった。ライン・ハウスに居住する人びとに

217 15 世帯中 8 世帯がラインルームを所有していると回答し、7 世帯が戸建を所有していると回答した。

218 87 世帯中 75 世帯がラインルームに居住していると回答し、12 世帯が戸建に居住していると回答した。

219 28 世帯中 4 世帯がラインルームを所有していると回答し、24 世帯が戸建を所有していると回答した。

220 71 世帯中 67 世帯がラインルームに居住していると回答し、4 世帯が戸建に居住していると回答した。

221 半公営農園では住居を所有していない世帯のうち不在籍であるこどもは 5.5% (9 名)であり、所有している世帯のこどもは 16.7% (4 名)であり、住居を所有している世帯のこどもの方が不在籍傾向にあった。民間農園では住居を所有していない世帯のうち不在籍であるこどもは 26.7% (40 名)であり、所有している世帯のこどもは 7.3% (3 名)であり、住居を所有していない世帯のこどもの方が不在籍傾向にあった。

222 半公営農園では住居を所有していない世帯のうち留年・中退経験のあるこどもは 32.1% (52 名)であり、所有している世帯のこどもは 37.5% (9 名)であった(10%水準で有意でない)。民間農園では住居を所有していない世帯のうち留年・中退経験のあるこどもは 57.5% (88 名)であり、所有している世帯のこどもは 11.9% (5 名)であった(1%水準で有意)。

「ラインルームの所有を希望するか否か」と「どのような理由で所有したいのか」について質問したところ²²⁴、半公営農園 55 世帯と民間農園 48 世帯の計 103 世帯がラインルームを所有したいと回答した。所有したい主な理由を述べてくれたのは、半公営農園では 52 世帯、民間農園では 33 世帯の 85 世帯であり、主な理由は、「所有権をもち、自立したい」が 44 世帯(半公営農園 28 世帯、民間農園 16 世帯)で、次いで「住居をリフォームしたい」が 29 世帯(半公営農園 20 世帯、民間農園 9 世帯)であった。それ以外にも半公営農園で「他に行く場所がない」と回答したのが 2 世帯で、民間農園では「自由を獲得できる」が 5 世帯いた。さらに、ラインルームを所有したい理由の背景として、こどもの将来や環境について語ってくれたのは半公営農園では 51 世帯中 24 世帯であり、民間農園の世帯では 32 世帯中 8 世帯である。このように、アンケート調査からは他人に依存することなく、自分たちの意志で決めることができる決定権と居住している住環境の改善を希望していることがうかがえ、その背景の1つには「子ども」が関係していることが窺えた。住居を所有したい理由の背景について、インタビューに答えてくれた半公営農園の2世帯と民間農園の3世帯の状況や考えについて紹介する。

半公営農園内の住居に居住する AR さんと MI さんのお話を紹介する。AR さんは RPC_(E)農園会社が経営する農園内の居住地区に居住している。RPC_(E)農園は中心地であるデニヤヤ・タウンから車で15分程度いったところにあり、RPC_(E)農園の親会社は3つの農園²²⁵をこの地域に所有している。3つの農園のうち2つは隣接しており、各農園内に学校を有している。AR さんは男性で、インタビュー当時は37歳であった。家族構成は妻と子ども2人の4人家族で RPC_(E)農園が提供するラインルームに住んでいる。夫婦ともに教育歴はない。子どもたち2人も学校に在籍している。MI さんは T 会社の経営する RPC_(D)農園内の居住地区に居住している。RPC_(D)農園の T 会社はこの地域に2つの農園²²⁶を有しており、MI さんが居住する居住地区は公道に近く、デニヤヤ・タウンにアクセスしやすい場所にある。MI さんは女性で世帯主の妻である。家族は5人家族で子どもたちが3人いる。子どもたちはこの農園に移動してから学校に通学し始めている。

AR さんによれば、「私たちはラインルーム、または戸建を所有したいと考えております。もし、これらを所有していれば、法的に居住することが保障されます。子どもたちには自由な環境が必要

224 質問票 C C4. “Do you want to own Line room? Why?”

225 3つの農園は RPC_(E)農園、RPC_(B)農園、RPC_(A)農園。RPC_(A)農園とRPC_(B)農園は隣接しており、RPC_(A)農園はデニヤヤ・タウンを超えた側に位置する。

226 2つの農園は RPC_(D)農園とH農園。位置的にはマタラからモロワカ、モロワカからデニヤヤ・タウンに到着する手前にある。

で、そのような環境を整えてあげたいです。」と語ってくれた。

MIさんは、「私たちは別の農園からこの農園に移動してきました。何故なら、以前の農園には学校がなく、また近くにも学校がありませんでした。兄より、この農園は子どもを学校に通学させる機会があり、給与面においても、住居の設備の面でも良いと勧められ、この農園に移りました。19歳になる長女も学校に通学できるようになりました。私たちはラインルームまたは戸建を所有したいと思っています。何故なら他のひとに依存しないで生活できるからです。戸建を所有できれば、子どもたちにとって非常に良いです。」と話してくれた。

このように、半公営農園の労働に家族が従事する世帯では、「ラインルーム」または「戸建」を所有し、子どもたちに引き継ぎたいと思っている世帯は多い。また、世帯の中には、「先祖代々ここに住んでいるため、法的に住居を所有し、居住したい」と語ってくれた世帯もあり、親から自分たち、そして、子どもへ法的に保障された住居を自分たちの意志で引き継いでいきたいと思っている世帯が多いことがインタビューからわかる²²⁷。

民間農園では住居を所有したい理由について、8名の世帯のみが子どもに関する話を話してくれたが、このことは子どもに対する関心が薄いからではないことがインタビューから読み取れる。例えば、民間農園では家族一緒に定住したいと話してくれた世帯は33世帯中7世帯あり、住み心地の良い住居に改装したいと話してくれた世帯も8世帯あった。また、ラインルーム所有を希望する理由を述べてくれた33世帯のうち、「自由があると感じる」と回答してくれた世帯は5世帯であるが、一方でラインルームを所有したくない14世帯中4世帯が「自由がない」ことを理由として挙げており、長屋タイプのライン・ハウスでの居住には少なからず、他人の目を気にしなければならないことがわかる。ここでは民間農園の4世帯の例を紹介したい。THさんはP_(M)農園に居住している。P_(M)農園主は上述した通り、比較的小さめの農園を複数所有している。P_(M)農園に居住のTHさんは男性で、妻と子ども4人の6人暮らしである。THさんの教育歴は6年間であるが、妻は学校で教育を受けたことはなかった。この農園には2011年から居住しており、補足調査時には7年間過ごしていると話してくれた。子どもたちは留年することなく、学校に通学している。14歳になる長男と12歳になる長女は、寄宿舎に入り学校に通っている。世帯収入は20,000ルピーだが、生活に必要な支出は30,000ルピーとなり、教育への支出は2,000ルピーである。

227 5.3.1で記述したとおり、半公営農園の場合には長期間当該農園で働いていたなどのある一定の要件を満たせば居住権が認められ、また農園内居住の人びと間での転売権が認められているが、所有権は認められていない。半公営農園では14世帯が住居を所有していると認識しているが、この認識の背景には長期間、当該農園内の居住地区に居住しているからと考えていると推察する。

THさんによるとラインルームを所有したい理由は「もし、農園主が私たち家族に、ここを立ち去れと言った場合に、私たちはここを退去しなければなりません。しかし、ラインルームを所有していれば、退去する必要はありません。私たちは土地を持っておらず、近隣の平均的な世帯より良いとはいえません。…」と語ってくれ、居住権がないために不安定な生活を送らざるを得ず、近隣の人びとよりも良くない生活水準にあり、自由な気持ちでいられないことが推察できた。

P_(L)農園のSM氏は妻と5人の子どもと一緒にラインルームに居住している。子どもたちは長男と長女が学齢年であるが学校に通学していない。世帯の収入は夫婦で34,000ルピーであり、THさんの世帯よりは多い。週に5日間働いており、労働はかなり大変だが、借金を抱えているため、もっと働き、早く借金を返済したいとのことだった。SMさんはラインルームおよび戸建の所有希望の有無について、次のとおり話してくれた。

SMさんによれば、「わたしたち家族はラインルームの所有権を欲しいと思っています。なぜなら、自分たちの家を改装し、改築することが自由にできるからです。でも、戸建は欲しいとは思いません。戸建を所有するということは、農園外に住むこととなり、さまざまな理由により収入が安定しないからです。」と語ってくれるとともに、子どもたちの教育については、「いま、長男は9歳で、長女は6歳ですが、子どもたちは学校に通っていません。農園内に学校はありませんが、P_(L)農園主は学ぶ場所を提供してくれようとしています。学校は農園から離れており、交通費は非常に家計の負担です。子どもたちには学校に通学しながら、家族を助けて欲しいと思っています。」

NIさんは、借金の返済が大変であり、子どもたちを学校に通学させたいという意思はあったが、学校の位置的問題と通学にかかる交通費などの負担のため、子どもたちを学校に通学させていなかった。また、安定的な収入とより良い快適な生活環境を得るために、ラインルームを所有したいと語ってくれたが、戸建を所有したいかという問いには所得が不安定になるとの理由で、欲しくないと語った。NIさんの話から、NIさん家族にとっては誰にも邪魔されることない居住する権利は大切だが、必ずしも居住する家が戸建である必要ではないことや、所有権を得ることにより生活環境を改善できることができ、安定的な収入を得ることにより生活計画が立てやすいということが読み取れる。ここで、大規模民間農園の居住地区に在住するSUさんの例も紹介したい。SUさんはP_(W)農園の居住地区に在住している。調査開始時は、P_(W)農園は独立した農園であるが、調査途中で別の農園会社の傘下の農園となった。P_(W)農園の居住地区には小さい小川があり、

公道に近い側には4-5家族が住むライン・ハウスがあり、小川の向こう側には横にライン・ハウスが数棟あった。SUさんは男性で妻と子ども2人の4人家族である。夫の教育歴は2年であり、妻の教育歴は8年であった。長女は9歳で、インタビュー当時は5年生であったが、長男は7歳であったが学校に通学していなかった。通学していない理由は長男の出生証明書がないからであるという。SUさんはラインルームや戸建を所有したいと話してくれた。

SUさんによれば、「私は今住んでいるラインルームを所有したいです。何故ならこの農園での仕事に従事しようが、従事しまいが、この場所に住むことができるからです。」と語り、戸建が欲しいですかという質問に対して「より自由を得ることができるので、戸建に住みたいです」と回答してくれた。

住居所有希望の理由について、こどものことに直接触れた世帯が多かったのは半公営農園のこどもたちであったが、民間農園でもラインルームを所有することで、安定した定住先を得ることができ、農園で働かない自由や住居の改装・増築の自由をより獲得できると考えていることがインタビューからわかる。住居の所有とこどもの教育達成について、直接的な因果関係は本インタビューから説明することは困難であったが、住居所有を希望する理由の背景を考察すると、住居を所有する(または居住権を得る)ことにより誰かの意志に翻弄されることが少なくなり、定住先における自身や家族の将来像を描きやすくなることは、安定した生活設計や生活環境を整えることができ、こどもたちの教育達成に影響を与えるものと推察する²²⁸。

5.3.2 生活環境とこどもの教育達成

次に、本項ではこどもの生活空間における必要最低限設備の安全性に着目し、生活空間の設備の状況(ここでは生活環境とする。)とこどもの教育達成がどのような関係にあるのかについて比較考察する。

生活環境変数は「安全な飲料水」「照明源」「料理器具のエネルギー源」「自宅内トイレ設備」の

228 2012年夏に高地のハットンにあるRPCを訪問する機会があった。この農園のアシスタント・マネージャーは労働者の居住について次のように語ってくれた。「現在、戸建を建設しており、農園内のライン・ハウスに住む人々が引越してできるように計画している。しかし、なかなか上手くいかない。その理由の1つとしては、ライン・ハウスでは設備等は農園から支給されるが、戸建は自分たちで管理しなければならず、また光熱水料なども含めて自分たち負担である。そのため、労働者の多くは戸建には移住したくない。また、ライン・ハウスに住む人々は戸建を所有しつつ、ライン・ハウスに居住したいと思っている。何故なら、ライン・ハウスには畑から近く、便利であり、また戸建を所有すれば、それを貸すことによって収入を得ることができるからである。

4つの変数からの生成し、生活環境レベルを「低」「中低」「中」「中高」「高」の5段階とした。前章から、安全性のレベルが高い生活環境で生活しているこどもは農家が最も高く、次いで半公営農園となり、民間農園のこどもたちは安全性が比較的低い環境で生活していることがわる。本項では、各経営形態において生活環境のレベルの違いによるこどもの教育達成がどのように異なるのかを比較分析する。

(1) こどもの在籍状況

図5-12は各経営形態における生活環境と在籍状況の関係である。対象となるこどもは534名中509名で、半公営農園では187名が対象で13名が不在籍であり、民間農園では191名中約43名が不在籍である。

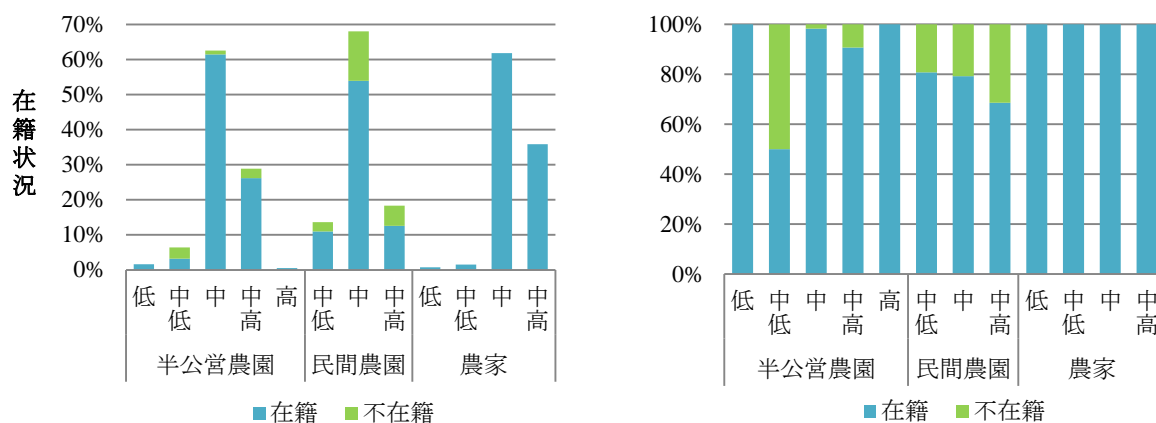


図5-12 生活環境とこどもの教育達成(在籍)

半公営農園では、生活環境「低」レベルに属するこどもは3名(1.6%)で全員在籍している。「中低」レベル世帯のこどもは12名(6.4%)で、6名(3.2%)のこどもが不在籍である。「中」レベルの生活環境下で生活するこどもが最も多く、117名(62.6%)おり、内2名(1.1%)が不在籍である。「中高」レベルには28.9%に当たる54名のこどもが属しているが、内5名(2.7%)のこどもが不在籍であった。民間農園のこどもたちは「中低」「中」「中高」の3レベル区分の生活環境下で生活している。「中低」レベルには26名(13.6%)のこどもが属し、内5名(2.6%)が不在籍である²²⁹。民間農園では「中」レベルの生活環境に属しているこどもが多く、130名が(68.1%)属し、これらのこどものうち不在籍のこどもは27名(14.1%)である。「中高」レベルの生活環境では35名(18.3%)の

229 半公営農園では、サンプル数の関係で正確な統計結果を得ることができなかった。

子どもたちが属しているが、11名(5.8%)が不在籍であった。統計的にも有意ではなく、民間農園では住環境レベルの違いにより、子どもの在籍状況に違いがあるとはいえない。

農家の子どもを含めたカイ2乗検定では、生活環境が「中」レベルの場合には経営形態の違いによる子どもたちの在籍状況に違いがあるという分析結果になったが、それ以外のレベルにおいてはサンプル数の関係から正確な分析ができなかった。半公営農園と民間農園を比較した場合には、有意であったのは「中」レベルと「中高」レベルの区分であり、同じ生活環境レベルでも農園の経営形態によって子どもたちの在籍状況に違いがあることがわかった。子どもの在籍状況と生活環境については統計的分析ができず、また、半公営農園も民間農園においても、生活環境のレベルが高くなるに従い、在籍状況が改善されるわけではなかった。

(2) 子どもの留年・中退経験

図5-13は生活環境と子どもの留年・中退経験との関係である。対象となる子どもは534名中512名で、半公営農園では186名中61名(32.8%)が留年・中退経験をしており、民間農園では195名中93名(47.7%)が留年・中退経験をしている。農家では131名中3名(2.3%)の子どもが留年・中退経験をしていることがわかった。

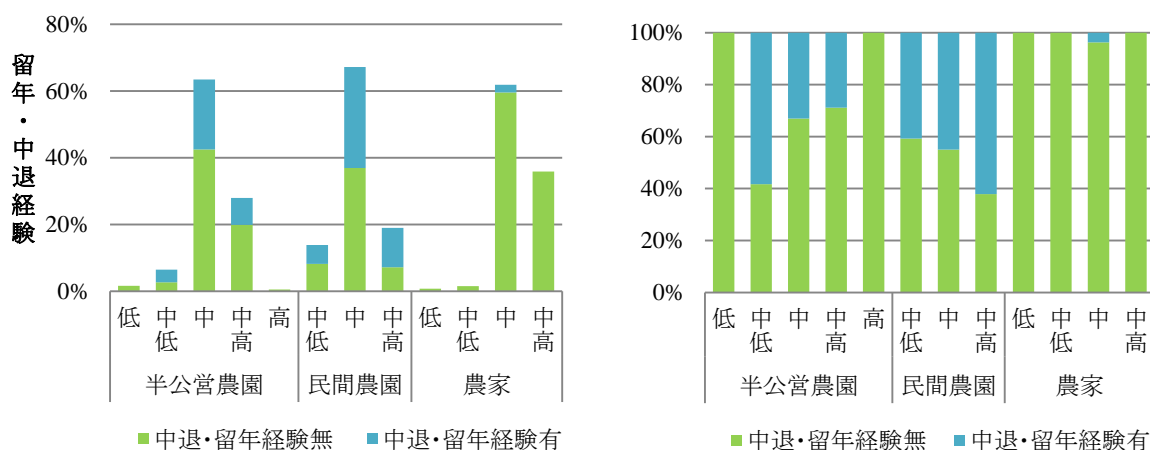


図5-13 生活環境と子どもの教育達成(留年・中退経験)

半公営農園ではサンプル数の関係から正確な統計結果がでなかったが、「低」レベル世帯に属する子どもは3名(1.6%)で、全員に留年・中退の経験はない。「中低」レベルの世帯の子どもは12名(6.5%)で、半分の7名(3.8%)が留年・中退の経験をもっており、「中」レベルの生活環境下で生活する子どもの数が最も多く、118名(63.4%)だが、留年・中退経験がある子どもは39名

(21.0%)であった。「中高」レベルには 28.0%に当たる 52 名のこどもがあてはまるが、内 15 名 (8.1%)のこどもが留年・中退の経験者である。民間農園では、生活環境「中低」「中」「中高」の 3 レベルで、「中低」レベルには 27 名 (13.8%)のこどもが属し、内 11 名 (5.6%)が留年・中退の経験をしている。また、「中」レベル生活環境に属しているこどもは 131 名 (67.2%)だが、留年・中退経験のあるこどもは 59 名 (30.3%)であり、「中高」レベルには 37 名 (19.0%)のこどもたちが属しているが、半数以上である 23 名 (11.8%)に経験があった。民間農園では在籍状況と同じく、統計的にも有意ではなく、住環境レベルの違いにより、こどもの留年・中退経験の状況に違いがあるとはいえない。

生活環境レベルが同じ場合に、留年・中退の経験をしているこどもの割合に違いがないか考察したところ、農家のこどもを含めたカイ 2 乗検定では、「中」レベルおよび「中高」レベルにおいて、経営形態の違いによりこどもたちに留年・中退経験の違いがあるという分析結果になった²³⁰。半公営農園と民間農園を比較した場合には、生活環境が「中低」レベルおよび「中」レベルの場合には統計的に有意ではなく、「中高」レベルについては有意であり、農園の経営形態の違いによりこどもたちの留年・中退経験の違いがあることがわかった²³¹。生活環境については、半公営農園では統計的に分析することは困難であるが、生活環境レベルがよくなるに従い、留年・中退経験をしていないこどもたちの割合が増え、民間農園では生活環境レベルがよくなるに従って、留年・中退の経験をしていないこどもの割合が減るという負の関係にあった。

(3) 生活環境 4 変数とこどもの教育達成

『こどもの活動調査』データ 2 次分析においては、スリランカ全体では生活環境の違いによってこどもたちの教育達成に違いはみられたが、農園部においては生活環境の違いによってこどもの教育達成に違いがあるとはいえなかった。生活環境変数を構成する要素は「安全な飲料水」「照明源」「料理器具のエネルギー源」と「自宅内トイレ設備の有無」という 4 つの変数から成る。

現地調査データに基づき、これらの 4 変数とこどもの教育達成について考察したところ、半公営農園では「飲料水」以外はサンプル数の関係で正確な統計結果がでなかった。半公営農園における「飲料水」とこどもの在籍状況の関係については、「安全な飲料水」にアクセスできているこどもたちの方が不在籍割合は高かった。しかし、統計的には有意ではなく、「安全な飲料水」へのアクセスの違いによって、こどもたちの在籍状況に違いがあるとはいえなかった。民間農園で

230 それ以外の区分についてはサンプル数の関係で正確な統計結果がでなかった。

231 それ以外の区分についてはサンプル数の関係から正確な分析はできなかった。

は「安全な飲料水」へのアクセスと「自宅内におけるトイレ設備の有無」以外は正確な統計結果を得ることができなかった。また、民間農園における「安全な飲料水へのアクセス」および「自宅内のトイレ設備の有無」とこどもの在籍状況の関係については、統計的には有意ではなく、「安全な飲料水」へのアクセスや「自宅内におけるトイレ設備の有無」の違いによって、こどもたちの在籍状況に違いがあるとはいえないことがわかった。

また、4 変数と留年・中退経験の関係については、半公営農園では「照明源」との関係のみ有意であり、照明源が電気であるか否かにより、こどもたちの留年・中退経験が異なることがわかった。民間農園では「照明源」および「安全な飲水へのアクセス」との関係が有意であり、「照明源」が電気であるか否か、また「安全な水」にアクセスできているか否かにより、こどもたちの留年・中退経験が異なることがわかった。

生活環境を構成している各変数とこどもの在籍状況との関係は、サンプル数の関係から分析が困難であり、統計的に分析できた飲料水については有意ではなく、「安全な飲料水へのアクセス」の違いにより在籍状況が異なるとはいえなかった。また、留年・中退経験の状況については、半公営農園および民間農園ともに、「照明源」が電気であるか否かの違いによって、留年・中退の経験をもつこどもたちの割合が異なることがわかった。さらに、本分析で特筆すべき点は、各経営形態において、教育達成の傾向が異なり、且つ教育達成の指標であるこどもの在籍状況と留年・中退経験の傾向が同じでないことである。生活環境については『こどもの活動調査』で用いられている基準を準用したが、適切ではなかった可能性がある。

本分析では、生活環境と教育達成との関係を考察したが、教育環境とは異なり、生活環境が直接的に教育達成に影響を与えるわけではなく、生活環境の状況によって健康が損なわれるなどの関係を通して、教育達成に影響を与える。そこでアンケート調査のデータ結果を基に、「安全な飲料水」「照明源」「料理器具のエネルギー源」「トイレの住居内設備」がこどもの健康との関係を考察したが、健康については前述のとおり、認識の違いにより、正確な情報を得ることができなかったことと、サンプル数の関係から考察することは難しかった。照明源が電気ではなく、灯油やローソクを使っている世帯では、誤って灯油をひっくり返してしまい、油が洋服や顔に付いたために、火が点火し、やけどを負ったこどもや女性たちに出会った。半公営農園のある男の子は当時のことを次のように話してくれた。

「当時は電気がなく、光は灯油ランプから得ていた。日が暮れ、夕食前に食卓テーブルで学校の宿題をしているときに、腕がランプにぶつかり、ランプが倒れてしまった。ランプの火が顔や肩、

腕に、顔や肩に移り、ひどいやけどを負った。」まだ、あどけない笑顔のこの男の子は、彼が話す通り、顔や腕にやけどの跡がみられた。

いまでは多くの世帯では電気照明を使用しているが、停電などの時にはランプやローソクを用いて明かりを得ることが多い。調査時にもたびたび停電があり、夕方や夜の停電時にはランプにて光を得た。調査者は東京に暮らしており、東京では電気のスイッチを入れれば照明は点くのが普通であるため、ランプに灯油を入れ、火を灯すことは怖いと感じたことをいまでも覚えている。特に、日本では電気を用いたLED照明は明るく、そのような照明下で生活している調査者にとっては、灯油やローソクを用いて得た明るさは不十分であり、十分な明るさを得るために、灯油ランプやローソクを手元におけば、倒すことや落とすことは想像に難くない。2011年3月11日の震災の際に、東京23区においても計画停電があり、1度か2度ほど、短時間の停電があった。しかしながら火事ややけどを起す危険性を考えると、ローソクなどの火事が起こりやすい照明源を用いることは非常にためらいがあり、結局、懐中電灯を用いた。電気による照明は十分な明かりを得ることができ、また安全である。こどもがけがをすることなく、十分な光のもとで勉強できることはこどもの教育達成に影響を与えるのではないかと推測したが、インタビューからはそのような関係を推察できるほどの結果は得られなかった。

料理をする際に用いる焔炉の源については、日本であればガスや電気を用いて料理することが通常である。しかしながら、調査地では調理をする際には薪を用いて行うことが多い。コロンボなどの大都市では、日本人が居住するような住居では電気やガスを用いることができるが、調査者が滞在したコロンボやガンパハのお宅では、薪を用いて料理をしていた。焔炉の源が薪であることが、こどもの教育達成と直接関係があるわけではなく、薪の調達がこどもたちによってなされることの結果としてこどもたちの教育達成に影響が出てくる。薪による食事はとても美味しいと思う。デニヤヤの滞在先では台所には窯とガスコンロが置かれている。お湯やスープなどはもっぱら窯で作られ、あげものも窯に火を灯し、手提げ鍋を鉤に吊るして作るが多かった。しかし、滞在先のお嬢さんたちがガスコンロで料理していたのを覚えている²³²。滞在先のお家は農業と伝統医学を行う兼業農家である。伝統医学の治療に使う薬は自然のものばかりで、多くの薬剤を長時間かけ自分たちで作っていた。また、ご夫婦がベジタリアンであるため、さまざまな野菜をローカル・マーケット²³³で購入、または住居のまわりから採取し、化学調味料はほぼ使わず料理を

232 窯でも料理することもあるが、窯よりはガスコンロは簡単で、より安全だと話していた。

233 デニヤヤ・タウンにおいて、週に定期的に開かれる。

作るのが普通であった。そのため、常に台所には人がおり、窯には火がともされていた。

滞在先は山の中を通るキルウェラロード沿いにあり、あたり一面は自然に覆われている。裏庭や家のバルコニーから見渡す景色は、桃源郷を思わせるほど素晴らしい。多様な彩りを持つ緑の森林と青い空、気候にふさわしい花が咲き乱れ、スリランカ独特のシロップが取れる木やヤシの木、そして目の前に広がる茶畑はこの地を調査地域に選んでよかつたと思わせる。滞在先のお宅では、窯に入れる薪は裏庭から拾い上げていた。調査地域では、薪拾いをしているこどもの数は農家で 23 名、半公営農園で 37 名、民間農園では 64 名の計 124 名であった。薪集めの時間は子どもたちによって異なり、1 週間当たり 30 分程度のこどももいれば、21 時間も薪集めをしているこどもたちもいた。103 名のこどもたちは 1 週間当たり 30 分からから 3 時間程度であった。しかし、こどもたちの中には週当たり 14 時間から 21 時間の薪拾いをするこどもたちがあり、4 名のこどもは 14 時間行っており、2 名のこどもは 21 時間の薪拾いをしていた。6 名のうち、4 名(2 名は 14 時間、2 名は 21 時間)は民間農園に在住しているこどもたちであった。UNICEF(2014)などによると、スリランカではこどもたちは経済活動や家事手伝いに従事しているものの、在籍状況は良いと報告されている。次節ではこどもたちの活動状況と教育達成の南アジア間における比較考察をするとともに、これらの活動によって調査地域の経営形態間におけるこどもの教育達成に違いがあるのかを比較考察する。

5.4 こどもの活動とこどもの教育達成

前節まではこどもを取り巻く環境に焦点を当て、こどもを育てる世帯の状況やこどもたちが住む居住環境、住環境設備の安全性の視点から、家族が従事する経営形態の違いにより、こどもたちの教育達成にどのような違いがあるのかについて比較分析した。こどもを取り巻く環境については、経営形態の違いによってこどもの教育達成は異なつた傾向を示していた。

本節ではこども自身に着目し、日々の生活に焦点を当て、こどもの活動がこどもの教育達成とどのような関係にあるのかを考察する。前章から、学校在校時間、食事時間、余暇の時間、睡眠時間、そして経済活動や家事手伝いの時間を考察した。それぞれの平均時間は在校時間 6 時間、食事時間:1 時間 6 分、TVや友人との時間:1 時間 42 分、睡眠時間:7 時間 42 分、経済活動:1 時間 12 分、家事手伝い:1 時間 20 分であった。その他の時間としては放課後の学習塾や自宅での勉強時間などがあげられる。本節における比較分析では、こどもの経済活動と家庭内における家事手伝いに着目し、第 1 項ではこどもの教育達成と経済活動の関係について、また第 2 項ではこどもの教育達成と家庭内における家事手伝いとの関係を考察する。本分析ではこどもの経済活動

は、経済活動に従事していない場合には「労働無」とし、経済活動をしているが児童労働と定義した時間数に満たしていない場合には「労働」とし、児童労働の定義とした時間数以上を経済活動に従事していた場合には「児童労働」とした。本研究で用いる児童労働の定義は下記のとおりである。

児童労働の定義

5-11 歳:

- ・経済活動:収入の有無とは関係なく、週 5 時間を超えて労働している場合。
- ・家事手伝:週 15 時間を超えて家事手伝をする場合。

12 歳以上:

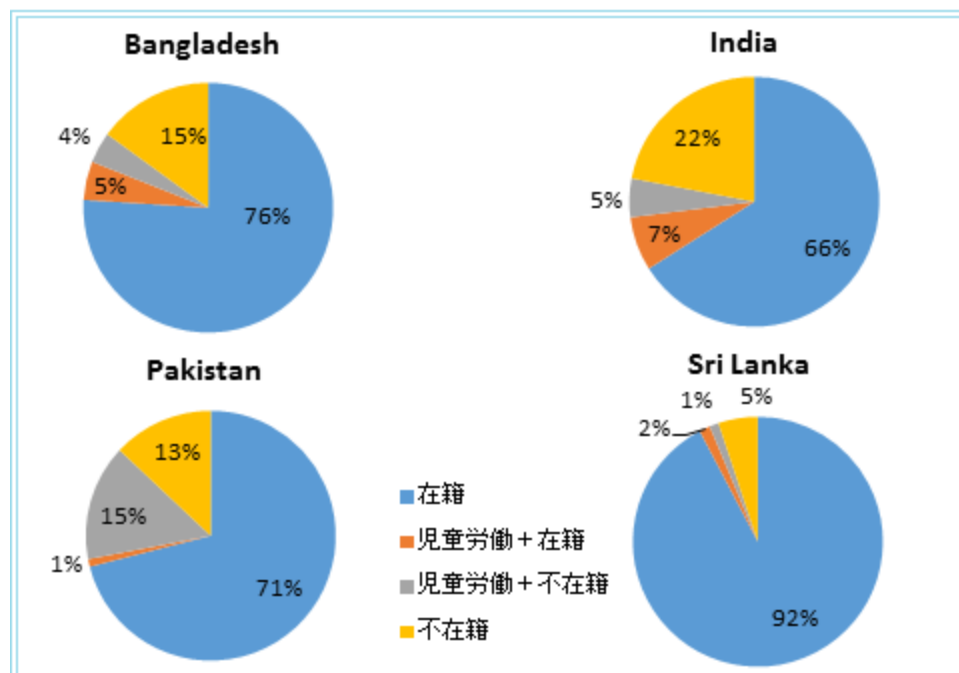
- ・経済活動:収入の有無とは関係なく、週 15 時間を超えて労働している場合。
- ・家事手伝:週 25 時間を超えて家事手伝をする場合。

5.4.1 こどもの活動と教育達成—南アジア 4 国比較—

長時間にわたる経済活動や家事手伝はこどもたちの学校に通学する機会や学業達成に影響を与えるだけでなく、こどもの健康状態にも影響を与える。スリランカでは 14 歳以下の児童労働を禁止しているが、こどもたちの家族農業や技術トレーニングなどの場合には 14 歳以下でもこれらの活動に従事できるとしている。そのため、これらの活動に従事している割合はスリランカでも高いものの、ある一定の時間を超えた長時間の児童労働に従事するこどもの割合は少ない。また、スリランカでは初等教育に入学した大半のこどもたちが修了でき、在籍者の 98%が前期中等教育に進学しており、南アジア諸国のなかでも教育達成が良いと報告されており、こどもたちが労働に従事していてもこどもたちの通学状況や教育達成は良いといわれている (UNICEF 2014)。

図 5-14 は南アジア主要 4 国 (バングラデッシュ、インド、パキスタン、スリランカ) の不在籍状況を示している。バングラデッシュでは 81%のこどもたちが在籍しており、内 5%が児童労働している。また、19%のこどもたちが不在籍ではあるが、内 4%が児童労働している。インドでは 73%のこどもたちが在籍しており、内 7%のこどもたちは児童労働しながらも在籍している。インドのこどもたちの不在籍率は 27%となり、内 5%が児童労働している。児童労働の割合が最も高いのはパキスタンで 16%のこどもが児童労働し、内 15%は学校に在籍していない。スリランカでは不在籍率は 6.3%であり、内 1.2%が児童労働による不在籍となっており、バングラデッシュ、インド、パキス

タン²³⁴と比較して、児童労働の比率や不在籍率は低いことがわかる。一方、不在籍率に占める児童労働従事者の比率はパキスタンでは2人に1人以上ではあるが、他の3か国においては5人前後に1人の割合であった。



出典 UNICEF (2014). Global Initiative on Out-of-School Children – South Asia Regional Study: All Children in School by 2015, covering Bangladesh, India, Pakistan and Sri Lanka. 2014 UNICEF Regional Office for South Asia, Kathmandu

図5-14 南アジア4か国における不在籍状況

『こどもの活動調査』から抽出した9県における5-17歳のこどもの不在籍状況は全体で11%であり、留年・中退の経験をしているこどもは14.6%であったが、5歳から14歳のこどもの不在籍状況は3.2%で、また、留年・中退の経験をしているこどもは9.9%であったことから、15歳以上のこどもたちの留年・中退率が高いことがわかった。また、現地調査では5歳から17歳までの不在籍率は11%で、留年・中退の経験は30.7%であったが、5歳から14歳の不在籍率は7.1%であり、留年・中退の経験をしているこどもは28%であり、『こどもの活動調査』と同様に15歳以上のこどもたちの不在籍率と留年・中退の経験率が高いことがわかった。また、図5-14に示されているとおり、9県を対象とした場合でも、こどもたちが労働に従事していても学校に通学しているこどもの

234 出典: バングラデッシュ: Bangladesh Labour Force Survey (LFS) 2005-2006。インド: NFHS-3 2005-2006。パキスタン: LFS 2007-2008。スリランカ: Child Activity Survey 2008-2009。本データで対象としている年齢はスリランカでは5-17歳、パキスタンでは10-14歳、インド・バングラデッシュは5-14歳。(UNICEF 2014, p28)

比率は高く、児童労働しているからといって必ずしも学校に通学していないとはいえないことがわかる。

図5-15から図5-18はこどもの経済活動や家庭内労働である家事手伝いの関係について、どのような傾向にあるのかについて教育達成変数を(1)在籍状況と(2)留年・中退経験に分けて考察する。

5.4.2 こどもの経済活動

図5-15と図5-16はこどもの経済活動と教育達成との関係を示している。調査地域では、経済活動に従事しているこどもの比率が最も高いのは農家のこどもたちで、経済活動に従事しているこどもは24.1%²³⁵となり、半公営農園の4.5%や民間農園の12.6%と比較すると農園部のこどもたちに比べて高いことがわかった。また、農家では4.7%のこどもが児童労働に達する時間、経済活動に従事していても、不在籍者はいない。半公営農園では4.5%のこどもたちが何らかの経済活動に従事しているが、児童労働に達する時間までは労働していない。一方、民間農園では6.0%に当たるこどもたちが児童労働に達する時間、経済活動に従事していたことがわかった。

(1) こどもの在籍状況

図5-15は各経営形態におけるこどもの在籍状況である。対象となるこどもは534名中488名で、半公営農園では177名が対象となり、内9名(5.1%)が不在籍となる。民間農園では182名が対象となり、39名(21.4%)が不在籍であることがわかった。農家では129名のこどもについて回答を得たが、全員在籍していた。

半公営農園では児童労働の基準に達するレベルの経済活動に従事しているこどもはおらず、経済活動しているこどもは8名(4.5%)中1名(0.6%)が不在籍であり、また、経済活動していないこどもは169名(95.5%)中8名(4.5%)が不在籍状況であることがわかった。民間農園では児童労働しているこどもは11名(6.0%)おり、内10名(5.5%)は在籍していない。経済活動しているこどもも12名(6.6%)おり、3名(1.6%)のこどもたちが不在籍である。経済活動していないこどもは159名おり、内26名(14.3%)が不在籍であることがわかった。一方、農家では24%に当たる31名が労働または児童労働しているが、すべてのこどもが在籍中である。

235 農家:129名のこどもの内31名が経済活動に従事。半公営農園:177名中8名が経済活動に従事。民間農園:182名中23名が経済活動に従事。

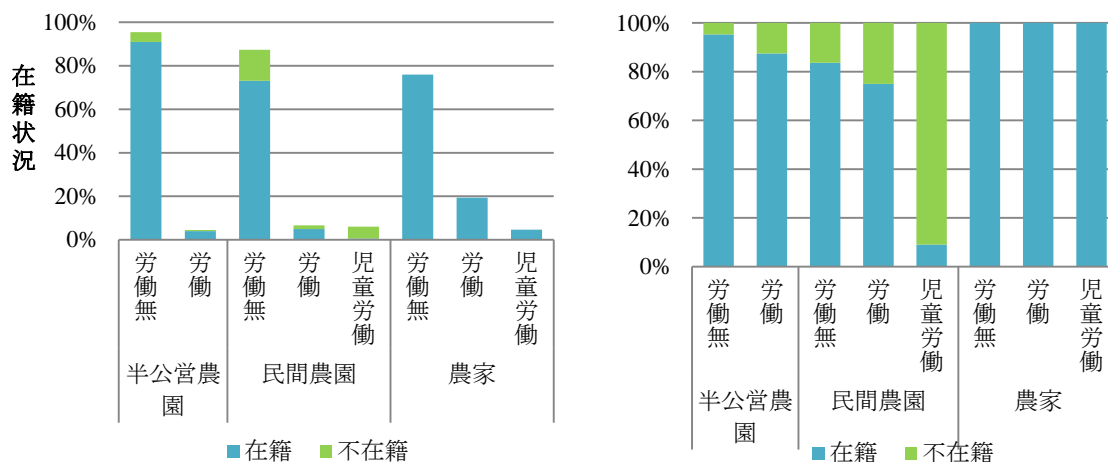


図 5-15 こどもの経済活動と教育達成(在籍)

農家の子どもを含めたカイ 2 乗検定では、サンプル数の関係で正確な統計結果がでなかった。また、経済活動状況ごとの経営形態間における不在籍状況の違いについても、経済活動していない子どもたちの間では、経営形態間に違いがあったが、経済活動に従事している子どもと児童労働している子どもの在籍状況については、経営形態間の違いは見ることはできなかった。公営農園と民間農園間を比較した場合にも、上記と同様の分析結果だった。

各経営形態において、こどもの経済活動と在籍状況については、統計的な結果を得ることはできなかった。しかし、半公営農園および民間農園においても、経済活動している時間が長い子どもの方が不在籍傾向にあった。農家では児童労働にあてはまる時間、経済活動に従事している子どもたちがいるが、すべての子どもが在籍している。一方、民間農園では 90%の子どもたちが不在籍である。このことから、経済活動時間が長いからといってこどもの在籍状況が悪くなるとはいえないことがわかった。

なお、経済活動とこどもの在籍状況との関係については児童労働に従事しているから不在籍なのか、不在籍だから労働しているのかについては不明である。しかし、『こどもの活動調査』では、農園部においては経済活動時間が増えることにより、不在籍率が高くなっており、現地調査からは、特に民営農園の子どもたちの労働時間については農家の子どもたちよりも経済活動時間が長く、そのため在籍状況に影響を与えている可能性があるかと推察できる。次に、こどもの経済活動と留年・中退経験との関係について経営形態間でどのように異なるのか比較考察する。

(2) こどもの留年・中退経験

図 5-16 は各経営形態におけるこどもの留年・中退経験の状況である。対象となるこどもは 534 名中 487 名であり、半公営農園では 174 名で、内 55 名(31.6%)が留年・中退の経験をしており、民間農園では 184 名の内 84 名(45.7%)が、農家では 129 名中 3 名(2.3%)が経験していた。

半公営農園では、上述した通り、児童労働しているこどもはおらず、経済活動に従事していないこどもは 166 名(95.4%)であり、内 53 名(30.5%)が留年・中退の経験をしている。また、経済活動に従事している 8 名中、留年・中退の経験をしているこどもは 2 名(1.1%)となることがわかった。民間農園では経済活動していないこどもは 160 名(87%)であり、内 70 名(38%)は留年・中退の経験をしている。また、経済活動に従事している 12 名(6.5%)中 3 名(1.6%)、児童労働しているこども 12 名(6.5%)中 11 名(6%)は調査時には留年または中退の経験をしていた。

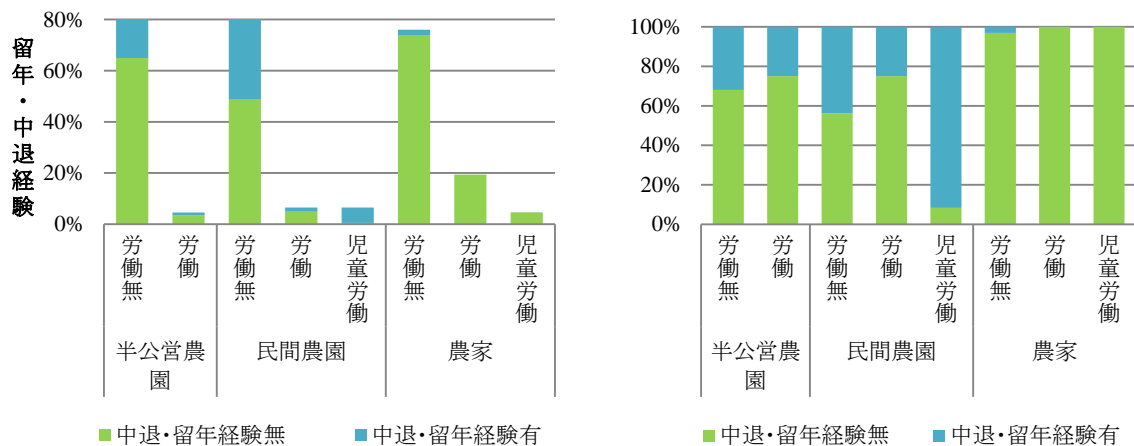


図 5-16 こどもの経済活動と教育達成(留年・中退経験)

農家のこどもを含めたカイ 2 乗検定では、半公営農園ではサンプル数の関係で正確な統計結果がでなかったが、民間農園では有意²³⁶であり、経済活動に従事する時間によって留年・中退経験に差があることがわかった。経済活動の時間が同じ場合に、経営形態の違いによるこどもたちの留年・中退経験の状況が異なるのか比較したところ、経済活動に従事していないこどもたちについては統計的に有意であり、経営形態の違いによりこどもたちの留年・中退経験に違いがあることがわかった。しかし、経済活動に従事している場合や、児童労働に達している場合については、サンプル数の関係から正確な分析結果は出なかった。公営農園と民間農園間の比較考察

236 1%水準で有意。

をすると、経済活動に従事していない場合には、統計的に有意であり、半公営農園のこどもの留年・中退経験の率が32.7%なのに対して、民間農園のこどもたちの留年・中退経験の状況の率が43.8%であり、民間農園のこどもたちの方が経験率は高かった。しかしながら、経済活動に従事している場合と児童労働している場合には、正確な統計結果を得ることができなかった。

こどもの経済活動における留年・中退経験の傾向については、すべての経営形態において、経済活動していないこどもの方が経済活動に従事しているこどもよりも、留年・中退の経験をしている率が高く、在籍状況とは異なる傾向を示している。

5.4.3 家事手伝とこどもの教育達成

図5-17と図5-18はこどもの家事手伝と教育達成との関係を示している。こどもの家事手伝は、家事手伝に従事していない場合には「家事無」とし、家事手伝をしているが児童労働と定義した時間数に満たしていない場合には「家事手伝」とし、児童労働の定義とした時間数以上を家事労働に従事していた場合には「児童労働」とした。対象となるこどもは「こどもの経済活動」と同じく488名であるが、家庭において家事手伝をしているこどもの数は経済活動に従事しているこどもの数よりは多い。

半公営農園では177名中43名(24.3%)のこどもは家事手伝をしておらず、4分の3以上の134名(75.8%)に当たるこどもは家事手伝をしている。児童労働に達する基準まで家事手伝をしているこどもは134名中27名(15.3%)である。民間農園においても182名中43名(23.6%)のこどもは家事手伝をしておらず、139名(76.4%)が家事手伝をしている。児童労働に達する基準まで家事手伝をしているこどもは36名(19.8%)となる。こどもの家事手伝と教育達成の関係について、具体的にどのような傾向にあるのかについて教育達成変数を(1)在籍状況と(2)留年・中退経験に分けて考察する。

(1)こどもの在籍状況

図5-17は各経営形態におけるこどもの家事手伝と在籍状況の関係を示している。対象となるこどもは534名中488名で、半公営農園では177名が対象となり、内9名(5.1%)が不在籍となる。民間農園では182名が対象となり、39名(21.4%)が不在籍であった。農家では129名のこどもについて回答を得たが、全員在籍していた。

半公営農園では家事手伝をしていないこどもの数は43名(24.3%)で、内1名(0.6%)が不在籍であり、家事手伝しているこどもは107名(60.5%)となり、内7名(4%)が不在籍である。児童労働

しているこどもの数は 27 名 (15.3%) で、内 1 名 (0.6%) が不在籍である。民間農園では家事手伝いに従事していないこどもは 43 名 (23.6%) であるが、内 6 名 (3.3%) は不在籍であり、家事手伝いしているこどもは 103 名 (56.6%) であるが、21 名 (11.5%) が不在籍となる。また、児童労働しているこどもは 36 名 (19.8%) おり、内 12 名 (6.6%) が在籍していない。

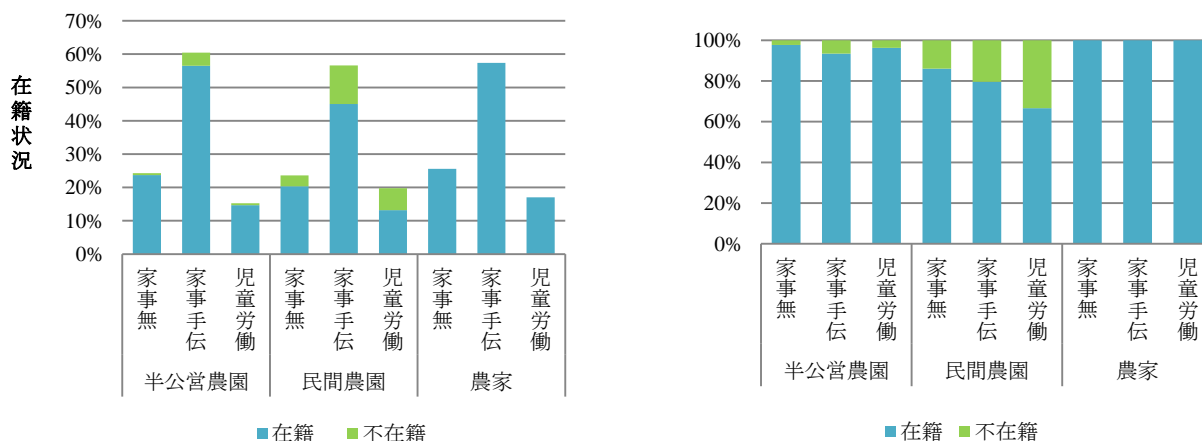


図 5-17 こどもの家事手伝いと教育達成(在籍)

農家のこどもを含めたカイ 2 乗検定では、半公営農園はサンプル数の関係で正確な統計結果がでなかったが、民間農園では統計的に有意ではなく、こどもたちの在籍状況は家事手伝い時間に関係ないことがわかった。こどもの家事手伝い時間ごとに、経営形態間においてこどもたちの在籍状況が異なるのか分析したところ、こどもたちが家事手伝いをしていない場合には統計的に有意であり、経営形態の違いによる在籍状況は異なるという分析結果になった。しかしながら、家事手伝いをしている場合や、児童労働と定義した基準以上の時間の家事手伝いをしている場合には、サンプル数の関係から正確な分析結果を得ることはできなかった。

半公営農園と民間農園間を比較した場合、家事手伝いをしていないこどもたちの在籍状況は半公営農園では 4.7% であるのに対して、民間農園では 15.9% であり、家事手伝いをしているこどもたちは半公営農園では 6.6% であるのに対して、民間農園では 15.5% であった。また、児童労働と定義した時間以上の家事手伝いをしている場合には、半公営農園では 3.7% のこどもの不在籍率であるのに対して、民間農園では 33.3% となり、どの家事手伝いレベルにおいても民間農園のこどもの不在籍率が高くなっている。統計的には家事手伝いや児童労働の場合にはサンプル数の関係から正確な分析はできなかったが、家事手伝いをしていないこどもは経営形態の違いによってこどもの在籍状況が異なっている。

半公営農園では家事手伝いのレベルにかかわらず不在籍率は 2.3%－6.5%であり、家事手伝いの時間が長いからといって、不在籍率が高くなるとは限らないことがわかった。逆に、民間農園では、家事手伝っていない場合には 14.0%の不在籍率であるが、家事労働レベルの場合には 20.4%、児童労働レベルの場合には 33.3%と、家事手伝い時間が長くなると不在籍傾向が高くなっていることがわかった。

(2) こどもの留年経験または中退経験

図 5-17 は各経営形態における家事手伝いとこどもの留年・中退経験との関係を示している。対象となるこどもはこどもの経済活動と同様に 534 名中 487 名である。半公営農園では 174 名中 55 名 (45.7%) が留年・中退経験をしており、民間農園では 184 名中 84 名 (31.6%) が留年・中退の経験をしている。農家では 129 名中 3 名 (2.3%) のこどもが留年・中退の経験をしていた。

半公営農園では、家事労働に従事していないこどもが 43 名 (24.7%) おり、内 10 名 (5.7%) が留年・中退経験しており、また家事手伝いをしているこどもは 104 名 (59.8%) がいるが、内 40 名 (23.0%) が留年・中退の経験をしている。児童労働しているこどもは 27 名中 (15.5%) 5 名 (2.9%) となることがわかった。民間農園では、家事労働に従事していないこどもが 44 名 (23.9%) おり、内 18 名 (9.8%) が留年・中退経験であり、また家事手伝いをしているこどもは 104 名 (56.5%) がいるが、内 48 名 (26.1%) が留年・中退の経験者となる。児童労働しているこども 36 名中 (19.6%)、留年・中退の経験をしているこどもは 18 名 (9.8%) となる。

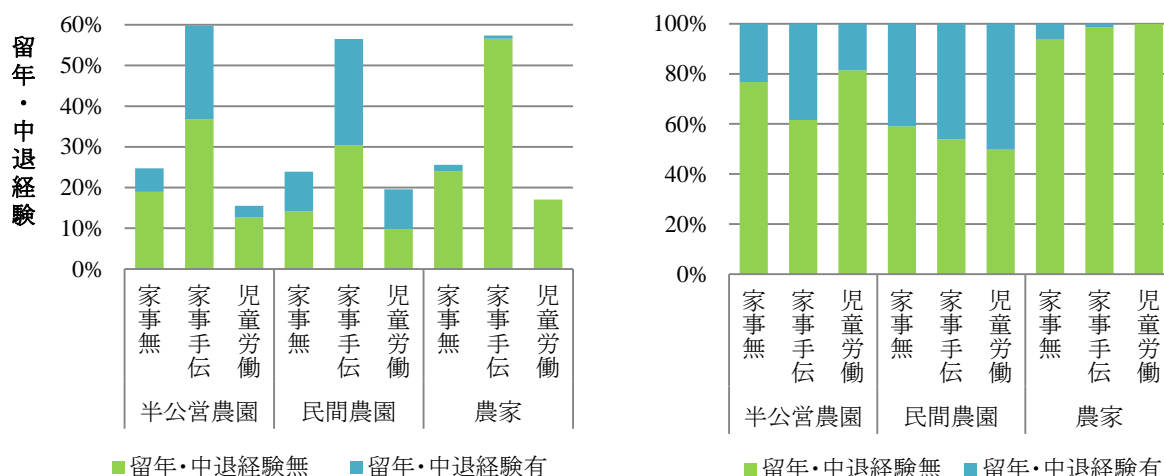


図 5-18 こどもの家事手伝いと教育達成(留年・中退経験)

農家のこどもを含めたカイ 2 乗検定では、半公営農園および民間農園では統計的に有意では

なく、家事手伝時間の違いによって子どもたちの留年・中退経験において違いがないということがわかった。統計的には有意ではなかったが、半公営農園の特徴として、家事手伝の時間が増えることによって留年・中退の経験割合が大きくなるわけではない。一方、民間農園では家事手伝の時間が増えることによって留年・中退の経験割合が高くなっている。

家事手伝の時間区分ごとに経営形態間における子どもの留年・中退経験状況を比較してみると、家事手伝をしていない子どもと児童労働している子どもは正確な統計結果を得ることができなかったが、家事手伝をしている子どもたちは統計的に有意であり、経営形態の違いにより留年・中退経験の状況は異なるという分析結果になった。民間農園と半公営農園間を比較した場合には、家事手伝していない場合には正確な分析結果を得ることができなかったが、家事手伝していた場合と児童労働をしていた場合には有意であった。このことから、子どもたちが家事手伝をしていた場合と児童労働に従事していた場合には、農園経営形態間に違いがあることがわかり、民間農園の子どもたちの方が留年・中退の経験をしている率が高かった。

5.4.4 こどもの活動と親の意識

スリランカでは 14 歳以下のこどもの児童労働は禁止されており、半公営農園では子どもたちを労働させることを禁止するポスターを社会福祉士がいるオフィスに貼って、指導している。インタビューでもこどもの労働について、禁止されていることを知っている世帯は多かった。しかしながら、「児童労働」にあてはまる子どもたちの経済活動時間を確認したところ、農家の 6 歳から 11 歳のこどもの平均経済活動の時間は 13.5 時間で、12 歳以上のこどもの平均経済活動の時間は 21 時間であったのに対し、民間農園では 6 歳から 11 歳のこどもの平均経済活動の時間は 19.5 時間で、12 歳以上のこどもの平均経済活動の時間は 37.8 時間であり、農家の子どもたちよりも長時間労働に従事している。

調査地域におけるこどもの活動(睡眠・食事・余暇・学校・家事手伝)の平均時間を合わせると約 20.5 時間であった。1 日 24 時間から 20.5 時間を引いた場合には 3.5 時間で、この時間を超えた経済活動は他の活動に影響を及ぼし、場合によっては通学に影響を与えている可能性もあったのではないかと推察する。このことは、前述のこどもの活動状況と教育達成との関係からもわかるとおり、こどもが児童労働していた場合にはこどもの教育達成に差がみられることからわかる。一方、この傾向は経営形態間によっても異なり、農家では児童労働していた場合でもこどもの教育達成はよく、半公営農園では労働や家事手伝をしているこどもの方が児童労働している場合よりも教育達成は良くないが、民間農園では児童労働していた場合には教育達成が悪くなってい

る。こどもは多くの場合、養育者である人びとの影響を受ける。そこで、こどもたちの経済活動と学校との関係について、アンケート調査から考察する。

こどもの経済活動と親の意識に関するアンケート調査の結果は下記の表5-2のとおりである。表5-2は親がこどもに望む通学状況と家庭内での活動と実際のこどもの活動状況である。親がこどもに望む通学状況と家庭内での活動は「学校のみ」「経済活動のみ」「家での仕事の手伝」「家事手伝」「学校と経済活動の両立」「学校と家の仕事の手伝」「学校と家事手伝の両立」と「その他」の8選択肢から選択してもらった。また、こどもの活動については、「経済活動」と「家事手伝」を併せたもので、両活動をしていない場合には「労働・家事無」とし、どちらかの活動または両方の活動に従事している場合には「労働・家事有」とし、児童労度に達する時間まで、どちらかの活動または両活動に従事していた場合には「児童労働」と記述した。また、こどもにのぞむ通学状況と家庭内での活動に回答を得たものの、こどもの実際の活動についての回答を得られなかった場合は無回答とした。

表5-2 こどもの活動に対する世帯主の意識とこどもの活動状況

こどもの活動と親の意識	経営形態															総計
	半公営農園					民間農園					農家					
	労働・家事無	労働・家事有	児童労働	無回答	計	労働・家事無	労働・家事有	児童労働	無回答	計	労働・家事無	労働・家事有	児童労働	無回答	計	
学校のみ	7	22	7	0	36	3	5	3	0	11	8	10	3	0	21	68
経済活動のみ	9	15	3	0	27	6	7	3	0	16	8	2	0	0	10	53
家の仕事	0	0	0	0	0	2	2	1	0	5	0	0	0	0	0	5
家事手伝	0	2	0	0	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3
学校と経済活動	2	5	0	0	7	0	0	0	1	1	0	1	0	0	1	9
学校と家の仕事	1	3	0	0	4	1	3	1	0	5	0	2	1	0	3	12
学校と家事手伝	21	58	16	0	95	30	78	31	2	141	14	60	19	0	93	329
その他	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
小計	41	105	26	0	172	43	95	39	3	180	30	75	23	0	128	480
			*0 **27					*11 **36					*6 **22			
無回答	4	4	1	15	24	5	6	5	9	25	1	0	1	3	5	54
総計	45	109	27	15	196	48	101	44	12	205	31	75	24	3	133	534

*経済活動における児童労働のこども数 **家事手伝における児童労働のこども数

アンケート結果から、こどもに「学校のみ」に集中して欲しいと回答した場合でも、家庭内においてなんらかの活動に従事させていることも多く、経済活動にのみ従事して欲しいと回答した

場合でも、実際には経済活動や家事手伝をしていない場合も多いことがわかる。また、児童労働に達する長時間を経済活動または家事手伝に従事しているこどもは、「学校と家の仕事」または「学校と家事手伝」のように、学校と両立しているこどもも多かった。前述したとおり、スリランカでは家族の手伝をすることは日常生活の 1 部である。また、「女性・青少年・児童の雇用法」(1956 年制定)では、14 歳以下の労働は禁じているが、家族経営農業や技術トレーニングの場合には 14 歳以下でも従事できる。そのため、農村地帯ではこどもたちが親や弟妹のために長い時間を費やすことも日常の一部として受け容れがちであり、結果として、こどもたちの教育達成に影響を与える可能性がある。表 5-3 はこどもの活動に対する親の意識とこどもの実際の在籍状況の関係である。

表 5-3 こどもの活動に対する世帯主の意識と在籍状況

こどもの活動と親の意識/在籍状況	経営形態												総計
	半公営農園*				民間農園				農家				
	在籍	不在籍	無回答	計	在籍	不在籍	無回答	計	在籍	不在籍	無回答	計	
学校のみ	35	0	1	36	9	2	0	11	21	0	0	21	68
経済活動のみ	27	0	0	27	12	4	0	16	10	0	0	10	53
家の仕事	0	0	0	0	1	4	0	5	0	0	0	0	5
家事手伝	0	2	2	2	0	1	0	1	0	0	0	0	3
学校と経済活動	7	0	0	7	1	0	0	1	1	0	0	1	9
学校と家の仕事	4	0	0	4	5	0	0	5	3	0	0	3	12
学校と家事手伝	88	4	3	95	114	17	10	141	93	0	0	93	329
その他	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
小計	162	6	4	172	142	28	10	180	128	0	0	128	480
無回答	13	7	4	24	7	15	3	25	3	0	2	5	54
総計	175	13	8	196	149	43	13	205	131	0	133	133	534

こどもの不在籍は、半公営農園では 13 名のこどもたちが不在籍であり、民間農園では 43 名であったことがわかっている。こどもの不在籍状況とこどもの活動に対する親の意識との関係について考察したところ、表 5-3 にあるとおり、半公営農園では家事に関することに従事してもらいたいと思っている世帯での不在籍者が多く、民間農園でも「家の仕事の手伝」「家事手伝」に従事して欲しいと思っている世帯や「学校と家事を両立」してもらいたいと思っている世帯において不在

籍傾向にあった。

特筆すべき点は無回答のこどもに占める不在籍者の多い点である。半公営農園では 13 名中 7 名のこどもについて無回答であり、民間農園では 43 名中 15 名のこどもについて無回答であるが、無回答のこども 22 名中 11 名が家事手伝または労働しており、内 7 名は給与を受け取っている。次節ではこどもの活動と教育達成との関係における背景をインタビューから考察する。

5.5 経営形態間における教育格差とその要因

教育は質が十分に高ければこどもの知識やスキルを身につけさせてくれるだけでなく、道徳や自信をつけさせ、こどもの内面も発達させてくれる。教育の効果については、多くの研究がなされているが、必ずしも教育の良い面だけをとらえているわけではない。バートランド・ラッセルが「ひとは生まれたときは無知であってばかではない。教育によってばかになるのだ」と述べたが、この言葉から、人間形成や成長における教育の影響力を伺うことができる。スリランカは社会政策のおかげで、その経済規模に比べて社会指数や人間開発指数が、同程度の収入国の平均を上回っている²³⁷。Isenmann (1980)によれば、この達成は独立する以前の環境も大きく貢献しており、独立時の識字率や寿命は大英帝国やセイロンの人びとによる政治的貢献によるところが大きいと指摘するとともに、政府支出の約半分が社会政策である食糧配給や医療、教育プログラムに使われていることによるものだとしている。そして、Isenmann (1980)はユニバーサルな初等教育レベルの知識や寿命の長さを得るためには時間がかかるとし、スリランカにおけるこれらの健康長寿や教育、その他のプログラムは前世代による基礎教育のたまものであるとし、基礎教育が果たしている役割について述べている。近年の経済・社会の発展の中で、いままで以上に教育が重要な役割を果たすようになってきている。農園部を代表する作物であり、スリランカ経済にとって外貨をもたらしてくれる紅茶セクターでは、経営形態の違いにより、こどもを取り巻く環境が異なり、こどもの教育達成も異なっていた。また、こどもを取り巻く環境によりこどもの教育達成も異なっていた。本節では教育達成の格差の要因にどのような背景があり、どのように関係しているのかを考察する。

237 GDP per capita 2014 (IMF 2018)によれば、190か国中 117位であるが、人間開発レポート (UNDP 2014)によれば、人間開発指数は 185か国中 73位である。

5.5.1 調査地域における教育格差とその要因

本章では「5.1」から「5.4」までは経営形態におけるこどもの教育達成と各要素との関係について考察するとともに、インタビューとアンケートに基づき、格差の要因の背景を考察した。アンケート調査では、『こどもの活動調査』と同じく、調査地域において「世帯状況(世帯収入と世帯主学歴)」「生活環境(住環境と生活環境)」「こどもの活動(経済活動と家事手伝)」について回答してもらうとともに、「教育に対する親の意識」という4つの視点から、経営形態の違いによって、どのような教育格差があるのかを比較考察した。本研究における分析から、スリランカにおいてはこどもたちの多くが学校に在籍していることがわかったが、在籍状況を経営形態間で比較すると、農家のこども全員が学校に在籍しているにも関わらず、農園部に居住するこどもたちのなかには在籍していないこどももあり、その傾向は民間農園で高い²³⁸。また、こどもの留年・中退経験についても、民間農園のこどもたちは約半数は経験があることがわかった。

こどもの不在籍理由についてインタビューしたところ、不在籍者56名中39名が回答してくれ、最も多かった理由は経済的理由の10名で、次いで農園間移動をあげたこどもが9名おり、3番目に「学校・勉強が好きではない」が7名であった。その他としては「こどもの障害と世帯の経済的理由」「書類不備や手続き不備」「学校側の受け入れ拒否」などにより在籍できず、また、働いているこどももいた。特に民間農園では経済的理由(7名)と農園間移動(7名)を理由とする世帯が多く、農園主や教員などへのインタビューからも「低所得」「農園間移動」「社会基盤」「親の意識(低学歴)」「適切な環境整備」などがこどもの教育達成を阻害している要因になっていることがわかった。このことから、アンケート調査では、教育達成と関係しているとはいえなかった所得や生活環境も教育達成と関係があることがわかった。また、アンケートとインタビューから、こどもを取り巻く環境が単独ではこどもの教育達成と関係しているのではなく、各要素が相互に関係しあって、こどもの教育達成に影響を与え、経営形態間の教育格差を生じさせている。

5.5.2 教育格差の要因とその背景

前述のとおり、紅茶産業の経営形態において民間農園の教育達成が良くないことがわかり、その直接的理由としては「経済的理由」や「農園間移動」が挙げられるとともに、インタビューからも同様の理由がこどもの教育達成と関係していることがわかり、アンケート調査だけではわからなかった所得や生活環境も関係していることがわかった。また、先行研究やインタビューからは、経営形態の違いは経営形態の母体や紅茶栽培面積の規模だけではなく、各々が有する特徴的

238 半公営農園では196名中13名が不在籍であり、民間農園のこどもは205名中43名が不在籍であった。

な生活構造も直接的理由の背景にあることがわかった。そこで、本項では、経営形態の構造、世帯状況や生活状況、そしてこどもの活動がどのように関係しあっているのかについて、各要素からその構造を考察する。

(1) 世帯状況(世帯所得と世帯主学歴)

世帯所得:小原と大竹(2009)はアメリカのパネルデータを用いて所得とこどもの教育効果の分析をおこなった Blau(1999)と Leibowitz(1974)を引用し、所得の間接的効果について記述している。小原によれば Blau(1999)の研究では、所得が高い家計は教育成果にとって価値の高い教育支出や時間配分を行う可能性があるために所得と子どもの教育の間に強い相関がみられるとしており、また Leibowitz(1974)の研究では、親の所得が高いこと自体はこどもの能力も学歴も高めないが、家庭内での教育時間、とくに親と質の高い時間を過ごすことはこどもの能力を高めることを指摘している(小原、大竹 2009 p70)。また、スリランカの小学校におけるこどもの学業達成について報告している Aturupane(2007)によれば、世帯所得は教育への投資をとおしてこどもの学びに間接的に影響を与える可能性があるとしている。

現地調査では、農家のこどもは全員在籍しており、また留年・中退の経験のあるこどもは3名であったが、半公営農園では13名の不在籍者がおり、62名のこどもが留年・中退の経験をしていた。また、民間農園では43名のこどもが不在籍であり、93名のこどもたちが留年・中退の経験をしていたが、統計的に有意ではなく、世帯収入の違いによってこどもたちに教育達成(在籍状況および留年・中退経験)に差があるとは言えない。一方、インタビューでは世帯所得が低いことがこどもの不在籍理由として挙げられるとともに、低所得のために教育費用が支出できないことや農園間移動を繰り返すこと、また、家族のためにこどもに働いてほしいと思う世帯もあり、教育に影響を与えていると語ってくれた世帯もいた。特に、インタビューから農園間移動がこどもたちの教育達成に大きな課題となっていることが明らかとなっているが、農園で働く人びとが農園間移動する背景には、より多くの所得や、働きやすい場所を求めて移動しているにも関わらず、様々な理由から十分な収入を得られず、また厳しい労働条件や生活規則のために、農園間の移動を繰り返す構造がある。そのため、こどもは転校を余儀なくされるとともに、転校に伴う手続きだけでなく、学校にかかる費用や交通費などの間接経費がより必要となることもあり、低所得の世帯では家計管理が困難となる。

スリランカでは公立の学校は無償教育であり、制服に必要な布や教科書なども無償で配布される。しかしながら、調査したところ、こどもの学校にかかる費用がかかり、かつ交通費などの

教育費用が必要であることがわかった。表 5-4 は調査地域にある 7 つの学校の概要である。インタビュー回答者は校長先生、またはシニアの教員で、当該校には 7 年から 40 年働いているとのことだった。

表 5-4 学校の概要と費用

学校名	B 校	H 校	M 校	K 校	DC 校	DR 校	S 校
言語	タミル語の学校		シンハラ語の学校				
Grade	1-11	6-13	1-5	1-11	1-13	1-13	1-13
学生数	496	311	80	140	2,850	1,285	1,360
学校にかかる費用							
修繕費	150	100	300	650	600	300	600
施設費	100	0	60	36 (G1-5)	36	60	60
				60(6-11)			
その他	20	0	0	0	0	0	0
計	270	100	360	686-710	636	360	660

RPC_(E)農園と RPC_(B)農園に在住しているタミル人の子どもたちは標高 700m の所にある RPC_(B)農園内部にある学校に通学しており、シンハラ人の子どもたちは農園外の公立の学校に通学している。本インタビューに対応してくれたのは学校の校長先生と比較的若い先生であった。当該校は、昔ながらの窓格子だけの大きな 2 教室に、真新しい教室とコンピューター室、教員の部屋などもあり、UNICEF などの支援なども得ていた。インタビュー当時には 496 名の子どもたちが通学しており、子どもたちの両親は年間 150 ルピーの修繕費と 100 ルピーの施設費、そしてその他の費用として 20 ルピーを学校に納めているとのことだった。H 校はデニヤヤ地域においてタミル語で 13 学年まで学ぶことができる唯一の学校である。学生数は 311 名で、訪問時には国際機関の援助により学校の設備拡大が行われていた。インタビュー一応じてくれたのは学校の校長先生で、当該校では修繕費として 100 ルピーを両親たちは学校に納めているとのことだった。M 校は Morowaka にある学校で、1-5 年生までのシンハラ語で教える学校である。話を聞くことができたのは校長先生である。生徒は 80 人程度の小さな学校で、子どもたちの両親は 1 人当たり年間 300 ルピーと施設費 60 ルピーがかかるとのことだった。K 校は調査地時に宿泊していた村のキリウェラドラとキリワラガマ地域にある学校で、タミル人の子どもたちも在籍しているが、シンハラ語を話

す農家のこどもたちが主に通学している学校である。インタビューは校長先生のご自宅で行った。学校の規模は小さく、在校生は 140 名であった。修繕費用が比較的高く 650 ルピーを年間に納めなければならない。また、施設費として 1-5 学年は 36 ルピー、6-11 学年は 60 ルピーを納めなければならない。DC 校、DR 校、S 校はデニヤヤ・タウンにあり、1-13 学年まで学ぶことができる比較的大きな学校である。近隣のシンハラ語で学ぶこどもたちの多くはこの 3 校で学んでいる。学校に納めなければならない費用は 360 ルピーから 660 ルピーの間であった。

表 5-5 1 ヶ月当たりの教育費

	半公営農園	民間農園	農家
平均値	1,730	1,771	2,808
中央値	1,000	1,000	2,000
最頻値	1,000	2,000	2,000

上述した通り、スリランカでは無償教育であるが、調査地域において訪問した学校では、何らかの費用を学校に納める必要があった。これらの費用が学校を転校した場合に発生する費用であり、短期間に学区外に引っ越すということは、転校のたびにこれらの費用が発生するということである。表 5-5 は各経営形態における支出に占める教育費の平均値と中央値、そして最頻値である²³⁹。この教育費支出には、文具品や参考書、交通費が含まれ、また寄宿費用なども含まれている場合もある。家計支出に占める教育費支出の割合は農家が最も高く、2,808 ルピーであり、次いで民間農園の 1,771 ルピー、最後に半公営農園の 1,730 ルピーとなる。1,000 ルピー未満の世帯は半公営農園では 33.3%に当たる 34 世帯で、民間農園では 40%に当たる 40 世帯であり、農家では 13%に当たる 13 世帯であった。家計に占める教育費用が最も高かった世帯は 8,000 ルピーであり、半公営農園では 2 世帯、民間農園では 1 世帯、農家では 3 世帯が支出していた。教育費の支出が 0 ルピーであると回答してくれた世帯は、半公営農園では 4 世帯、農家では 1 世帯であったが、民間農園では 26 世帯であった²⁴⁰。

世帯所得と教育支出との関係を考察すると低所得の世帯の方が教育費支出額は低い傾向にあり、学校に納める費用は年間 100-700 ルピー程度であったが、毎月の家計における教育費の

239 支出に占める教育費については、半公営農園 102 世帯、民間農園 99 世帯、農家 98 世帯が対象。

240 教育費の支出が 0 ルピーではあるが、農家の世帯では在籍しており、また、半公営農園でも 4 人中 3 人は在籍している。しかしながら、民間農園では 26 名中 23 名が不在籍である。

支出からは、教育にお金がかかることが読み取れ、世帯によっては教育にかかる費用が支出できないことも推察できる。無償教育といわれているスリランカではあるが、現実には学校における設備費や文具品などの教育間接経費が必要となり、さらに、農園内における学バスはあるものの、バスは公共交通機関であるために交通費が必要となる。特に、後期高等教育(12 学年以上)以上のことを学ぶ場合にはデニヤヤ地域にはタミル語で教える学校は1校しかなく、居住地区の場所によってはそこまでバスを乗り継いで通学しなければならず、通学時間や交通費を考慮した生活設計が必要となる。アンケート調査からは所得によって教育達成は異ならなかったが、インタビューからは所得と教育達成は「農園間移動」や「教育費負担」などを通して、こどもの教育達成に影響を与えていることがわかった。なお、アンケート調査で所得の違いにより教育達成に違いをみることはできなかった理由の一つとして、こどもの経済活動が挙げられるものと推察する。本調査では明らかに所得を得ているこどもは農園部に所属する13名だけであったが、13名全員が在籍していない。農園における所得とこどもの教育達成の関係には、こどもの経済活動による貢献が考えられ、そのためにこどもが在籍していないために世帯所得レベルにより在籍状況に相違がでなかった可能性がある。次に世帯主学歴と他の要素との関係について分析する。

世帯主学歴:

現地調査のアンケート結果から、世帯主の学歴が高いほどこどもの在籍状況が良いことがわかった。その背景には高学歴の世帯主の世帯では低学歴の世帯主の世帯よりも所得や世帯所得が高く、家計からより教育費を支出できるため、良い学業成績を修めたり、通学費用を支出できたりするために、学校を中断することなく通学できたりし、こどもの教育達成が高くのなるのではないかと考えられる。また、世帯主が高学歴の場合には自らの経験からこどもたちがより良い将来のため、より高い教育歴が重要であると認識しており、こどもたちの教育達成に影響を与えているのではないかと推察する。農園主や教員、役人へのインタビューから、親の教育達成が低いために、教育の重要性やこどもの教育について考えることができないということが指摘され、一方で、農園の人びとからは教育のイメージがつかないために、こどもに望む学歴について想像もつかない、または回答できないと話す人びとも多くいた。表 5-6 は世帯主学歴とこどもに期待する職業に対して必要とされている教育歴である。

表 5-6 世帯主学歴と教育の重要性

	重要でない	重要	無回答	合計
教育歴無	1 .6%	139 84.2%	25 15.2%	165 100.0%
低学歴	0 0.0%	222 84.4%	41 15.6%	263 100.0%
高学歴	1 .9%	99 93.4%	6 5.7%	106 100.0%

表 5-7 世帯主学歴と子どもに期待する職業に必要なとされる教育歴

	≦AL	≧AL	無回答等	合計
教育歴無	29 17.6%	114 69.1%	22 13.3%	165 100.0%
低学歴	39 14.8%	185 70.3%	39 14.8%	263 100.0%
高学歴	6 5.7%	90 84.9%	10 9.4%	106 100.0%

20 世紀の中ごろ、人を投資の対象として考える人的資本論という概念が知られるようになってきた。資本とは投資することによってその価値を増加させることであり、この考え方に従えば、われわれが生み出す経済的価値を投資によって高めるということである。ひとが生み出す経済価値は、個々人がもつ能力によって生み出されると考えるのが一般的であろう。この能力を高めるものの1つが人生経験や知識なども含めた学んだことである。もちろん、経験や知識を得たから、経済的価値を生み出すわけではない。会得した技術や学んだ知識をどのように応用できるのかを考え、実行できる資質などが重要となる。技術の取得、知識の獲得、資質の向上などを高めるのに教育が重要な要素となり、人はより高い教育歴をもつことにより高い収入や良い生活を送ることができると考え、教育に投資し、より良い教育歴を得ようとする。教育歴が高いほど所得が高いというのは一般論であり、例外も多数存在する。しかしながら、高い能力や技術を要求する職を得ようとする場合に、学歴や資格が1つ要件として要求されるのは先進国、途上国など問わずよくあることである。

『こどもの活動調査』から、どの居住地区においても高学歴の世帯主の世帯の方が世帯収入は高い傾向にあることがわかっている。そこで、調査地域においては世帯主の学歴と個人所得の関係を考察してみる。本研究で対象としている人びとは、農園で茶摘みや栽培地のメンテナンスをしている人びとと、紅茶栽培を行っている農家の人びとである。スリランカでは貧困率が高いと指摘されているのは農園部の人びとであり、貧困者が多いとされているのは農村の人びとであることは前述したとおりである。表 5-8 は農園の経営形態別に世帯主の学歴と(個人)所得との関係を比較したものである。

表 5-8 世帯主学歴と所得

所属	教育歴	個人収入			合計
		<10K	10K ≤ 20K	>20K	
半公営農園	教育歴無	8	15	4	27
		29.6%	55.6%	14.8%	100.0%
		8.3%	15.6%	4.2%	28.1%
	低学歴	3	8	3	14
		21.8%	67.3%	10.9%	100.0%
		12.5%	38.5%	6.3%	57.3%
	高学歴	15	33		48
		21.4%	57.1%	21.4%	100.0%
		3.1%	8.3%	3.1%	14.5%
民間農園	教育歴無	15	33	0	48
		31.3%	68.8%		100.0%
		15.3%	33.7%		49.0%
	低学歴	12	28	0	40
		30.0%	70.0%		100.0%
		12.2%	28.6%		40.8%
	高学歴	0	10	0	10
			100%		100.0%
			10.2%		10.2%
農家	教育歴無	1	2	0	3
		33.3%	66.7%		100.0%
		1.4%	2.8%		4.2%
	低学歴	13	7	13	33
		39.4%	21.2%	39.4%	100.0%
		18.1%	9.7%	18.1%	45.9%
	高学歴	4	12	20	36
		11.1%	33.3%	55.6%	100.0%
		5.6%	16.7%	27.8%	50.1%

表 5-8 からは各経営形態によって教育歴と所得の傾向が違うことがわかる。半公営農園では、教育歴が高学歴の場合には、教育歴無や低学歴の世帯主よりも、高所得の割合が高いが、絶対数が少ない。そのため、全体として見た場合には教育歴が高いから所得が高いという印象を得ない。高学歴でも所得があまり高くない背景としては半公営農園という構造が影響しているものと考えられる。半公営農園では日給月給であり、茶摘みの仕事場合、1日のノルマを超えた場合には出来高に応じて賃金が上乘せされ、月25日間出勤すれば皆勤賞が上乘せされる。しかしながら、それ以上を稼ぐことはできない。茶摘みの仕事では、効率よく良い茶葉を摘むためにはいままで培った経験や知識が役立つと推測されるが、手作業でやる以上は時間や体調、栽培地の状況や茶摘み時の環境が重要となる。また、半公営農園は大会社の傘下農園が主であり、労働法や労働者管理には農園会社は注意を払っており、多くの場合は労働者が残業を課されることはな

い。そのため、半公営農園において茶摘みの仕事や栽培地のメンテナンス、工場に従事する場合には、所得は限られてしまうという現状がある。

一方、民間農園では世帯所得をみると半公営農園よりも平均は高いが、世帯主の個人所得においては高所得者がいないことがわかる。また、高学歴の場合には低所得者はいないが、教育歴無と低学歴の場合を比較すると、学歴による所得差を見て取ることは難しい。民間農園では半公営農園とは異なり、賃金やノルマなどは各農園が決めることができる。また、スリランカの法律では労働法などによって労働者の雇用条件などは決められているが、法律の目は半公営農園と比較して行き届きにくく、労働日数や労働時間、最低賃金なども半公営農園よりは厳しい条件が課せられることもある。

農家では教育歴と所得の関係が、半公営農園や民間農園と比較して異なっている。農家では教育歴がない場合は高所得者がいないが、低学歴から高学歴になるに従い、高い所得を得ている傾向があることが表 5-8 からわかる。多くの先行研究では教育歴と所得の直接的因果関係については議論されているが、本データからも、教育歴と所得の関係については直接的因果関係にあると説明するのは困難である。しかしながら、教育歴が高い世帯主の所得は低学歴以下の世帯主よりも高所得を得ている割合が高い傾向であることがわかる。

両親の学歴と子どもの教育達成については社会学の分野においても多く研究されており、父親や母親の学歴が子どもの教育達成と関係のプロセスの1つのポイントとして理解されている。学歴の高い両親は、子どもがより良い生活を送るためには経済的に豊かで、かつ社会的地位を得た方がよく、これらを得るためにはより良い職業に就いた方が達成しやすいと認識しており、そのためには教育が重要であると考えからである。教育が子どもたちの将来に影響を与える重要な要素であると考えられる両親たちは子どもたちの教育に係る費用を家計から捻出する。そこで、本調査地域において、世帯主の学歴の違いによって、子どもの教育に世帯がどの程度の支出をしているのかを比較してみる。表 5-9 は各経営形態における子どもの教育費用支出を世帯主学歴ごとに比較したものである。

表 5-9 世帯主学歴と家計に占める教育支出

所属	教育歴	個人収入				合計
		0-999	1,000-1,999	2,000-4,999	≥5,000	
半公営農園	教育歴無	8	11	6	2	27
		29.6%	40.7%	22.2%	7.4%	100%
	低学歴	20	19	15	3	57
		35.1%	33.3%	26.3%	5.3%	100%
	高学歴	6	5	3	4	18
		33.3%	27.8%	16.7%	22.2%	100%
民間農園	教育歴無	24	9	11	5	49
		49.0%	18.4%	22.4%	10.2%	100%
	低学歴	14	8	15	3	40
		35.0%	20.0%	37.5%	7.5%	100%
	高学歴	2	1	4	3	10
		20.0%	10.0%	40.0%	30.0%	100%
農家	教育歴無	1	0	3	0	4
		25.0%		75%		100%
	低学歴	7	9	18	11	45
		15.6%	20.0%	40.0%	24.4%	100%
	高学歴	5	13	18	13	49
		10.2%	26.5%	36.7%	26.5%	100%

表 5-9 より、半公営農園と民間農園では、世帯主が教育歴無と低学歴の場合では、こどもの教育費への支出に差はあまりないが、世帯主が高学歴の場合にはその支出額は高くなるのがわかる。一方、農家では世帯主が低学歴でも、高学歴の場合でも、こどもの教育に支出する額が 5,000 ルピー以上の世帯の割合はあまり変わらない。

現地調査のアンケート調査から、世帯主の学歴が高いほどこどもの教育達成が良いことがわかっていて、その背景には高学歴の世帯主の世帯では低学歴の世帯主の世帯よりも所得や世帯所得が高く、家計からより教育費を支出できるため、良い学業成績を修めたり、通学費用を支出できたりするために、学校を中断することなく通学できたりし、こどもの教育達成が高くのなるのではないかと考えられる。また、世帯主が高学歴の場合には自らの経験からこどもたちがより良い将来のため、より高い教育歴が重要であると認識しており、こどもたちの教育達成に影響を与えているのではないかと推察する。インタビューとアンケート調査からは世帯主学歴が低いほど、教育は重要な要素とは考えられていない傾向にあることがわかった。調査地区の行政官や農園

管理者から、多くの労働者は教育歴が低いために、教育の重要性についての具体的イメージを持つことができないことがこどもの教育状況に影響を与える1つの要因であり、世帯主の中には、教育が重要であることはわかっているものの、教育レベルについて具体的にはイメージできないと回答する世帯主もいた。また、世帯主の教育歴が高いと教育が重要であるという認識が高く、高い教育歴を必要とする職業をこどもに望む傾向が強いことがわかった。

世帯所得と教育達成の関係では、より良い収入と生活を求めて、人びとは農園を渡り歩き、また低所得のために教育費を支出することが困難であり、こどもは家族のために経済活動や家事手伝いを行うことがあり、これらの要因が相互に作用し、結果としてこどもたちの教育達成に影響を与えるという構造がある。また、世帯主の教育歴は、世帯の収入と関連があるとともに、こどもを養育する世帯の教育に対する意識や考えに影響を与え、こどもの教育に最優先順位を与えるよりも、日々の生活や世帯の考える重要な事柄に優先順位を置くこととなり、結果としてこどもの教育達成に影響を与えることとなる。下記の図5-19は世帯状況と教育格差の構造である。

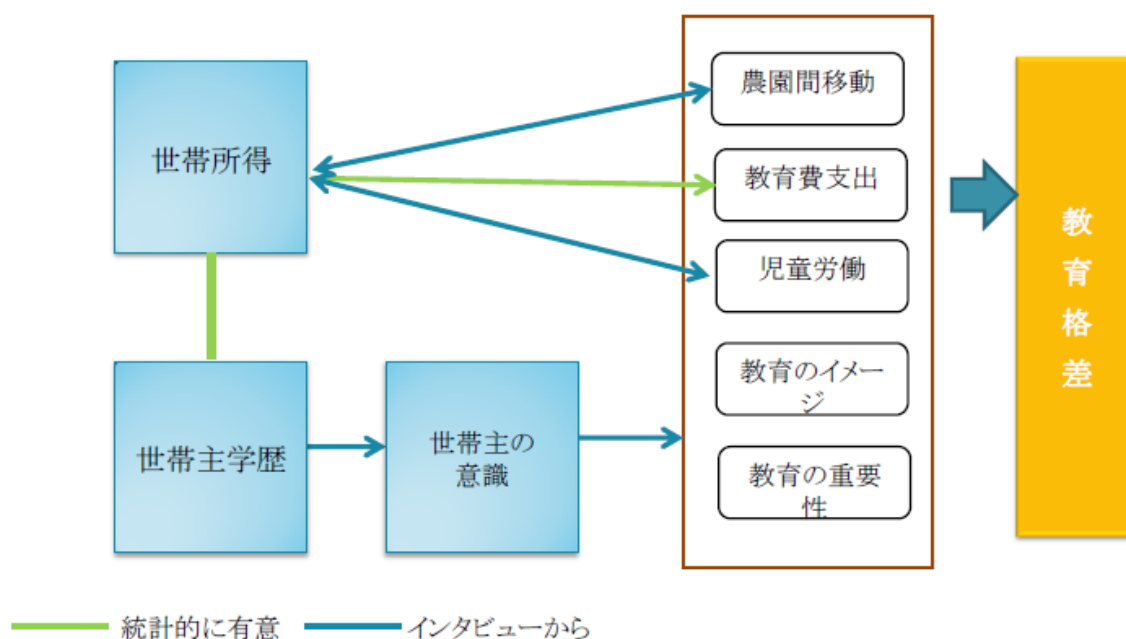


図5-19 世帯状況と教育格差の構造

(3) 住環境と教育環境

『こどもの活動調査』データ 2 次分析から教育格差を説明する変数として住環境が1つの要素であり、特に農園部では住居所有の有無と教育達成格差が関係あることがわかった。また、アン

ケート調査では、調査地域全体では統計的に有意であり、住環境の違いにより教育格差があった。特に教育達成が良くない民間農園では、住環境を構成する「住居の所有」「住居の構造」「1人あたりの部屋数」と教育達成をカイ2乗検定したところ、「住居の所有」「住居の構造」の違いによりこどもの教育達成に違いがあることがわかった。

スリランカでは地方出身で、都市にある会社に勤める多くの人びとは、平日は職場に通勤できる範囲の場所を間借りし、週末には自宅に帰宅する人びとが多い。住居を所有するということは、一般的には当該住居に居住することを意味しており、定住しやすく、こどもたちはそこで育つことが想定される。一方、農園部では住居の所有権とは農家の人びとの意味合いと異なる部分があり、農園部の人びとが認識している「住居の所有権」については、居住する住居を役所で登記し、所有権を有するという事と同じであるとはいえないということが今回の調査でわかった。農園部では歴史的背景から農園主が労働者に提供するライン・ハウスと呼ばれる長屋に居住しているのが一般的であったが、近年では農園部の生活環境に対する海外の支援を受け、戸建の建設も進められている²⁴¹。訪問したいくつかの半公営農園では住環境計画に従い、戸建を建設しているとのことであったが、そこに居住する人びとが行政や農園の支援を受け建設する場合もある。時折、労働者が勝手に家を建ててしまうことがあり、農園としては困っていると話すフィールドオフィサーもいた。

ライン・ハウスに居住する世帯の中には、住居の所有者であると回答している世帯があった。民間農園の労働に従事している人びとの中には、一部の農園ではラインルームの所有権を与えており、自分たちも住居の所有権が欲しいと話す世帯もあった。そこで、農園主や管理者に話を伺ったところ、農園部では「住居の所有」については、実際に住居の所有権を有しているわけではなく、長い年月農園内に居住していた場合には居住する農園の仕事に従事していなくても農園から提供された住居に居住する権利を有していることを意味しているとのことだった。住居自体は農園の所有ではあるが、居住に対する権利を有しており、農園内に居住する人びとの間でのみ譲渡できるとのことだった。

アンケート調査から農園の仕事に従事する201世帯のうち158世帯が住居を所有していないと回答し、内154世帯はライン・ハウスに住んでいることがわかった。154世帯のうち、ラインルームを所有したいと回答した世帯は99世帯で、その他は無回答かまたは所有したくないとの回答であった。住居を所有したい理由としては農園での雇用に関わらず安定した定住先を得ることがで

241 戸建の場合、所有権を有することもあるが、農園の人びとが所有権と居住権や借家権と混同している可能性が高いことが、農園管理者やフィールドオフィサーたちの話から伺えた。

きるということと、農園で働かない自由や住居の改装・増築の自由をより獲得できると考えていると推察できた。安定した定住先を得られないということは、居住先が転々とする可能性が高くなり、子どもたちも親の転居に伴い引越しを余儀なくされる可能性が高くなる。アンケート調査からも、子どもたちの不在籍の直接理由の1つとして農園間の移動があげられている。

民間農園(14農園)、学校の教員(7名)や地区の行政官(5名)にインタビューしたところ、教員7名中5名は子どもたちが抱える課題について話をしてくれた。4名の教員によればタミル人(おもに農園の子ども)とシンハラ人のこどもの能力差は同じであると話してくれた。しかし、農園の子どもたちは経済的に困っており(4名)、また親の教育に対する意識が低く(4名)、農園間の移動により子どもたちの教育が中断してしまう(2名)と話してくれた。また、行政官(5名)や農園(6農園)によれば、農園の労働者、特に民間農園の労働者は様々な理由により、農園間を移動することが多いため、こどもの転校手続きや授業に追いつけず、途中で通学を止めてしまうケースがあることがわかった。ここで、半公営農園である RPC_(E)農園と民間農園の P_(L)農園の仕事に従事していた2世帯と農園主の話を紹介したい。

Auさんは妻と子ども3人の5人家族で、RPC_(E)農園の仕事に従事している。時間のある時には運転手の仕事をしているが、妻は働いておらず、月の生活費は10,000ルピーである。長男は12歳で、二男は6歳であるが、2人とも学校はやめてしまった。三男は調査時には生後1ヵ月であった。所得は低く、ラインルームは狭いと感じていた。子どもたちが学校に通学しない理由について下記のとおり話してくれた。

Auさんによれば、「私たちの夢は子どもたちに良い教育を与えることです。日々の給与は22kgの茶摘みをして650ルピーです。子どもたちは以前通学していた学校が好きではありませんでした。そのため、いまは学校に通学していません。この農園はRPC_(B)農園の隣にあり、RPC_(B)農園には学校があります。できれば、来年には子どもたちをこの学校に行かせたいと思っています。」と家族の状況を語ってくれた。

Auさんの家族の場合、世帯の所得が十分ではなく、且つ以前の農園に居た際に通学していた学校が好きではなかったため、引っ越し先での学校に通学をまださせていないことを説明してくれたが、来年は学校に行かせる予定である。ここから、学校に行かせる予定であるが、引っ越し

た後にすぐには学校に通学していないことがわかる²⁴²。次に民間の P_(L)農園で働く Ku さん一家の紹介をしたい。インタビューに応じてくれた Ku さんは夫といっしょに P_(L)農園で働いている。夫は6年生まで学校に行っており、Ku さん自身は学校に通学したことがないそうだ。こどもは16歳の長男を筆頭に15歳の次男、11歳の長女と次女がいる。長男と次男はそれぞれ、7年生と3年生で学校を中退しており、調査時には P_(L)農園で働いていた。世帯所得は37,500ルピーである。Ku さんの夢は何もなく、現在学校に通学していない娘たちにも農園で働いて欲しいと思っている。こどもたちが通学していない理由について、Ku さんは下記のように話してくれた。

「この P_(L)農園には1か月半前に移動してきました。給与は1日615ルピーです。私たちは家族全員でいつまでも一緒に暮らしたいと思っています。娘たちは以前の農園では学校に通っていました。しかし、この農園に移動してからは、私たちの娘たちは学校に通学していません。教育は良い仕事を見つけるのに重要であると思います。」と話してくれた一方で、こどもたちの仕事については「娘たちにも農園で働いて欲しいと思っていますと語ってくれた。

P_(L)農園には学校がないが、農園主によれば近隣にあるとのことであった。しかしながら、Ku さんの世帯では引っ越し後にこどもたちを学校に通学させてはいなかった。教育は重要であると思いつつも、現実には学校に通わせていない様々な理由があると考えさせられた。調査地域では農家は先祖代々の耕地を引継いでいるため、農家の人びとが居住する住居は親や家族が所有しているが、農園で働く人びとの場合には、正式な所有者は農園主である。特に民間農園では、半公営農園とは異なり、居住権は認められておらず、農園をやめた場合には退去しなければならない。インタビューした民間農園14農園のうち、勤務平均年数が2年未満の回答したのは9農園だった。P_(N)農園とP_(H)農園の農園主へのインタビューによると両農園での労働者の平均労働期間は1か月から3ヶ月とのことだった。

P_(L)農園主は労働者の労働期間について左記のように話してくれた。「私の農園ではライン・ハウスを2棟持っています。1日の給与は350ルピーです。ノルマは25Kgですが、月22日以上働いた場合には給与を多く払います。しかしながら、労働者の勤務期間は概ね1か月で、長期間働く労働者はいません。ライン・ハウスは公道の近くで、比較的交通の便は良いですが、労働者たちは農園間の移動が多いために、こどもたちを学校に通学させることはできません...」。また、

242 学校の転校手続きしていないのか、学期途中で入学できなかったのかは不明。

P_(H)農園主は「労働者の移動が激しいことが本農園の問題です。労働者は平均して2.3か月で次の農園に移動しています。労働者のなかには借金をしたまま、夜逃げしてしまうものも多く、そのため、子どもたちには穏やかな生活管居を整えることができず、子どもたちは心穏やかに過ごすことができません。また、移動が多いため、子どもたちを学校に通学させない親も多いです。」と話してくれ、農園としても、また労働者の子どもたちにとっても短期間の農園間移動は課題であると話してくれた。

頻繁に農園間を移動することは子どもたちに不安定な生活をもたらすだけでなく、新たな居住地区によっては住居先から学校までの通学が困難な場合もありうる。半公営農園では歴史的背景から、農園内に学校施設がある農園も少なくなく、また農園の近郊にはタミル語で学べる学校があることなどが多い。しかしながら、小中規模の民間農園の場合には、学校施設を備えることは難しく、また、もともと個人の所有であった近隣耕地を購入することによって栽培地を拡大している農園もあり、場合によってはタミル語で学ぶことのできる学校が農園の近隣にない場合もある。表5-8は調査地域における住居から学校まで通学距離と通学手段のアンケート結果である。

表5-10 通学距離と通学手段

		半公営農園	民間農園	農家
通学距離	<1km	35% (58名)	28% (44名)	10% (13名)
	1≦3km	29% (48名)	53% (82名)	20% (25名)
	3≦5km	26% (43名)	15% (23名)	11% (14名)
	>5km	11% (19名)	5% (7名)	59% (75名)
通学手段	徒歩	51% (87名)	57% (89名)	18% (23名)
	バイク・車	9% (16名)	1% (2名)	10% (13名)
	バス・スクールバス	40% (69名)	42% (66名)	72% (92名)

上記の表から、半公営農園や民間農園では、子どもたちの半数以上が徒歩で通学しており、住居と学校との通学距離は3km未満が多い。一方、農家では82%の子どもたちがバス等の交通手段を用いており、70%の子どもたちが3km以上の距離を通勤していることがわかった。表5-8から、農家の子どもたちは公共交通機関等を用いて、近隣の学校ではなく、デニヤヤ・タウンにあるシンハラ語で教える学校に通学していることが本アンケートから推察できる。しかしながら、タミ

ル語で教える学校は本調査地域では限られており、デニヤヤ地域近郊には4校しかない²⁴³。さらに、13 学年まであるタミル語で教える学校は 1 校しかなく、半公営農園会社の RPC_(B)農園や RPC_(B)農園、また調査した多くの農園から当該校に通学するためには、デニヤヤ・タウン行のバスに乗り、デニヤヤ・タウンで乗り換えて通学しなければならず、学校への道のりは遠い。さらに主な通学手段であるバスは無料でないため、乗り換えするとなるとバス代金が2倍かかることになる。

スリランカでは、学校のカリキュラムは全国一律ではあるが、教える言語が異なる。どの言語で学ぶかは子ども自身が選択できるシステムである。そして、多くの子どもは母国語がタミル語であっても、シンハラ語を話せる子どもが多い。しかしながら、シンハラ語で教える学校では、タミル語を母国語とする子どもを受入れるのには消極的なところも多い。学校に通学していない理由として、学校の受け入れ拒否もあった。受け入れ拒否にあった子どもたちと両親によれば、前年度まではデニヤヤ・タウンにあるシンハラ語で教える学校でも、タミル人の子どもを受入れていた。しかしながら、本年度になって学校が方針を変更し、入学を希望するタミル人の子どもと両親に、タミル語で教える学校に入学するように説得されたとのことである。子どもによれば、当該校のレベルはデニヤヤ・タウンにある学校よりもレベルが低く、またスリランカ社会はシンハラ人による社会が一般的であるため、よりレベルの高い高等教育機関に進学するためにはシンハラ語の学校で教えるレベルの高い学校に通学したかったと語ってくれた。結果として、遠距離で、かつ交通費のかかるタミル語で教える学校には行かず、学校自体に行くことを断念したと話してくれた。なお、この子どもが自宅から学校に通学したい場合にはキリウェラドラからデニヤヤ・タウンまでの山道をバスで行き、デニヤヤ・タウンでバスを乗り継ぎ、街中を通り過ぎて RPC_(D)農園の手前を曲がり、また再び山沿いを走りたどり着く。時間的には片道 1 時間以上かかり、12 歳くらいの子どもを1人で通学させることに両親がためらうのは納得がいく距離と時間であり、また道路状態である。さらに、バスは公共の交通機関であるため、いろいろな人びとが乗り込む。調査者自身も何度か利用したが、酔っ払いに絡まれることもあったし、乗客間で差別的な対応をされているひとも目の当たりした。さまざま状況と危険性を考慮に入れた場合に、子どもたちを遠方の学校に通学させることができないという事情もあるのではないかと推察する。

アンケート調査とインタビューから、定住先を持たない世帯は短期間で農園を移動しがちであ

243 公式な名称は①Handford T.K.V. ②Beverly Tamil K.V. ③Enselwatta T.K.V. ④Anningkande T.K.V.であり、すべて半公営農園会社が所有する農園名であるが、必ずしも農園内にあるわけではない。なお、調査時に半公営農園内にある学校は②のみであった。Enselwatta 農園内に居住する子どもの多くは②の学校に通学していた。また、Anningkande 農園の子どもは公道にある④の学校に通学しているとアシスタント・マネージャーからうかがった。

り、農園間の移動は子どもたちの通学に影響を与えていることがわかった。調査時当初は、子どもの教育達成に影響を与えると思われた直接的要因として農園間の移動を想定していなかったため、2013年12月から2014年1月の調査では、農園間の移動や居住年数については、質問項目に含んでいなかった。そのため、農園間の移動や居住年数については、対象となる子ども401名のうち247名からのみ回答を得ることができ、学歴期中の移動無が179名であり、移動があったのは68名である。68名中3名は半公営農園の子どもたちで、65名は民間農園の子どもたちであった。民間農園では農園間の移動をしていた子どもたちのうち、学校に在籍していない子どもは65名中20名であり、39名は通学しており、6名は無回答であった。このことから、民間農園では不在籍者43名のうち、約半数の20名が農園間移動を経験していることがわかった。図5-20は住環境の違いにより生じる教育達成格差の構造を示している。

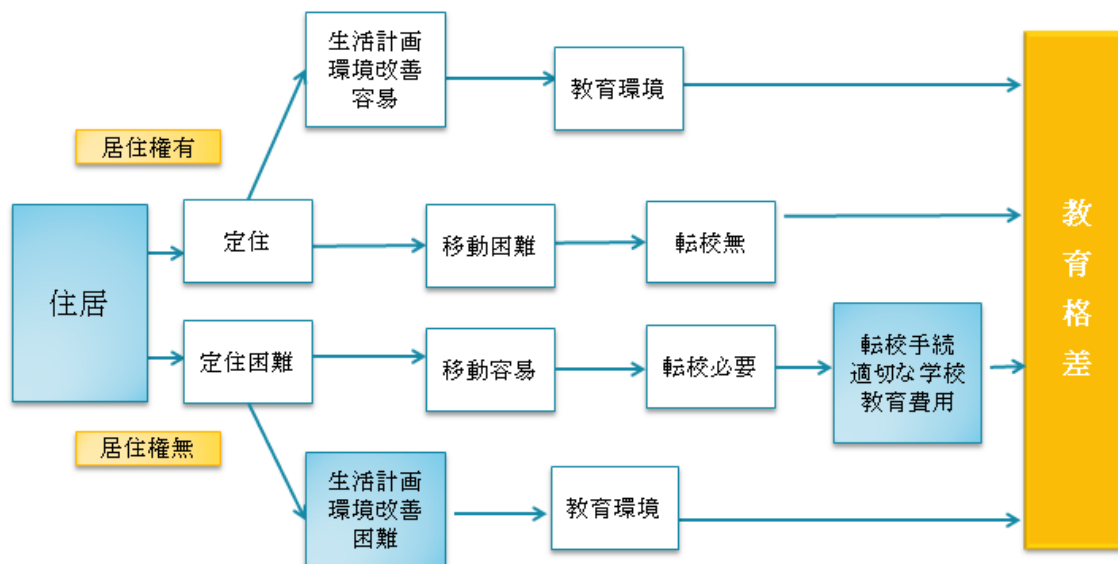


図5-20 住環境と教育格差の構造

アンケート調査から、民間農園では住環境変数を構成している3変数のうち「住居の所有権」「住居のタイプ」の違いによって教育達成に違いがあることがわかり、また、農園主・マネージャー、学校の教員、行政官などへのインタビューから、子どもたちの不在籍理由について、短期間による農園間の移動が指摘された。補足調査で行った「居住年数」(農園における対象者数約223名)と在籍状況について考察したところ、居住年数が子どもの学年暦以下の場合の方が不在籍であることがわかった。農園の労働者への住居の所有権(または居住権)についてのインタビューからは、住居の所有権がないために(農園主や管理者)他の人の意向に左右される不安があると

語ってくれた世帯が多く、所有権(居住権)を所有することにより生活環境が整えられ、子どもたちにも良い環境を整えることができると思っている世帯もいることがわかった。さらに、農園部ではタミル人の子どもたちが多く、タミル語で教える学校はシンハラ語で教える学校数より数が少なく、農園や農地が広がる地域で適切な学校を見つけることが困難であり、交通が都市や街に比較して不便であるため交通機関の問題や通学費用の問題があることがわかった。このように、短期間で農園間を移動することにより、子どもたちは転校を余儀なくされるが、転校する適切な学校が見当たらない、転校手続きが適切に行えない、転校にともなう学校施設費用や通学費用が支払えないなどの課題や、安定した生活ができないことにより、生活環境や教育環境を整えたくても、整えられず、結果として子どもの教育達成に影響が出るという構造があることがわかった。

(4) 生活環境

Oxfam(2002)によれば、労働者の多くはプランテーション内のライン・ハウスに住み、水道やガスの設備が都市に比べ普及しておらず、安全な水の確保が困難かつ衛生上の問題があるような生活環境(トイレや台所などを共有)で生活しており、労働者や子どもの置かれている生活環境は他の地域と比較してもより劣悪であると考えられるとしている。第3章で行った『子どもの活動調査』データ2次分析から、農園部における生活環境は都市や地方、農家と比較すると、低いレベルの環境であることがわかった。子どもの教育達成と生活環境の関係は、統計的に有意であり、生活環境の違いによって子どもの教育達成が異なっていたが、農園部では統計的には有意ではなく、生活環境のレベルの違いによって子どもの在籍状況に相違をみるができなかった。傾向としては、農家や地方では、生活環境が良くなるにつれて、子どもの教育達成も良くなるが、都市と農園部では生活環境のレベルと子どもの教育達成の傾向を考察することが困難であった。現地調査では、サンプル数の関係で正確な統計結果を得ることができず、また、各経営形態において統計的な傾向を分析することは困難であったが、農園主や農園管理者へのインタビューからは、農園部に居住する人びとが上下水道、トイレや照明の設備が適切に扱うことができず、公衆衛生の問題や病気の問題などが発生していると伺った。また、子どもが家の手伝いをすることも多いため、各家に上水道がない場合には水汲みのために子どもたちが手伝に行ったり、料理のために必要な薪を山に取りに行ったりし、事故に遭うこともあるという。

表5-9は2013年にスリランカ政府が全国を対象に調査をした住居設備環境評価から調査地域について抽出したものである。住居設備環境は「y飲水へのアクセス」「照明の電気普及率」「住居におけるトイレ設備の有無」の3項目からなっており、郡卿単位での調査結果となっている。本

調査によれば、マタラ県では比較的住居の設備環境評価が高い郡卿が多いが、対象地域としたコタポラ郡は評価が低く、さらに、調査をおこなった 4 つの郡卿の評価は非常に低い評価と低いという評価を受けていた(DCS 2013)。

表 5-11 住居における設備環境評価

	最低	低	中	高	最高
スリランカ	538	1,598	3,052	4,500	4,344
マタラ県	31	86	177	216	140
コタポラ郡	10	12	14	1	
調査対象地域	3	1			

出典:DCS, Government of Sri Lanka, 2013.

現地調査では、『住居における設備環境調査』で用いられている指標「安全な飲水へのアクセス」「照明の電気普及率」「住居におけるトイレ設備の有無」に加え、『こどもの活動調査』で調査している「料理をするエネルギー源」を準用し、経営形態ごとに比較考察した。調査地域は平坦な場所に栽培や居住している人びとではなく、山沿いに紅茶を栽培している人びとが多い。政治的にも、経済的にも、また社会インフラ的にも同様な地域環境であり、自然環境も同じであるが、同じ地域に居住する人びとでも、農家の住居の設備の安全性が若干良いことがわかった。全体として「安全な飲水へのアクセス」については、民間農園の 25.8%から半公営農園の 33.3%の世帯のみが安全な飲水にアクセスできるという状況であったが、「照明の電気普及率」は高く、農園部でも 90%の世帯が電気照明を使用していた。また、「料理をするエネルギー源」については、調査地域では電気やガスがあまり普及しておらず、農家においても 74.5%の世帯しかガス/電気焔炉が備わっていない状況であり、半公営農園では 91.1%の世帯が、また民間農園では 98.0%の世帯は薪を利用しており、「トイレの設備」状況についても、半公営農園では 10.8%、民間農園では 13.3%の世帯が個別に所有しておらず、トイレを共有していた。

生活環境を構成する 4 要素とこどもの教育達成の傾向を考察したところ、アンケート調査では傾向をつかむことが困難であったが、インタビューからは公衆衛生が課題であるという話を伺ったため、本研究で用いた基準が適切であるかどうか実証するため、2017 年 12 月に半公営農園、

民間農園、農家、学校、デニヤヤ・タウンにおける NGO オフィスなどで、飲料水に含まれる大腸菌の実験を 54 カ所で行った。実験の結果、『こどもの活動調査』や『住居における設備環境調査』で安全とされている設備状況を備えた住居においても、安全な飲料水を飲んでいるとはいえなかった。表 5-10 は 2013 年 12 月から 2014 年 3 月にかけて行った本調査対象世帯の飲料水の調査結果である。

表 5-12 調査地域における大腸菌調査結果

経営形態	村/農園名	安全な飲料水*	大腸菌調査結果 (100ml に含まれる大腸菌の加須)	Boil or not
民間農園	P _(M) 農園	安全	102	Yes
民間農園	P _(M) 農園	安全でない	46	No
民間農園	P _(M) 農園	安全でない	64	Yes
半公営農園	RPC _(D) 農園	安全でない	>450	No
半公営農園	RPC _(D) 農園	安全でない	6	No
半公営農園	RPC _(D) 農園	安全でない	5	No
農 家	Ki 村	安全でない	36	No
農 家	Ki 村	安全でない	23	Yes
農 家	A 村	安全	0	No
農 家	A 村	安全でない	0	No
農 家	D 村	安全でない	14	Yes
農 家	D 村	安全でない	0	No
農 家	D 村	安全でない	>300	こどものみ
農 家	D 村	安全でない	12	Yes
農 家	Ke 村	安全でない	45	Yes
農 家	Ke 村	安全でない	125	No

* 『こどもの活動調査』『住居における設備環境調査』の定義に基づく安全な飲料水

飲料水の採取場所本調査で協力してくれた半公営農園 16 カ所、半公営農園内の学校 1 校、民間農園 15 ヶ所、農家 20 世帯、デニヤヤ・タウンの NGO オフィス、モロワカ郡卿公道の水供給施設の計 54 カ所で 4 サンプルをとり、大腸菌と大腸菌群の数を調べた。民営農園や半公営農園では、飲料水を共有の場所から得ていたりする世帯も多いため、世帯数の数が少なくなった。当初は、世帯主が比較的高学歴である農家や、居住内に水道がある方が大腸菌の数が少ない

ものと推測していたが、実験結果では農家や、住居内水道だからといって大腸菌の数が少ないとは言えなかった。WHO 飲料水水質ガイドラインによれば、100ml 中に大腸菌または大腸菌群は検出されてはならないが、米国EPA第一種飲料水基準によれば、100ml 中 5%内の大腸菌群（大腸菌含）であれば安全な水であるという定義であった²⁴⁴。スリランカは発展途上国であり、先進国であるこの数値を用いることが適切でないかもしれないが、ここでは米国 EPA 第1種飲料水基準を準用して経営形態別の居住地区における飲料水の安全性の違いがあるのかを比較してみる。半公営農園 16カ所では 5%以下の大腸菌だった、つまり安全な水を飲むことができるのは3カ所(19%)であり、10%以下の世帯は5箇所(31%)であった。また、民間農園では15ヶ所中、5%以下の場所は4カ所(27%)で、10%以下では5カ所(33%)であった。農家では20ヶ所中5世帯(25%)で、10%以下の8世帯(40%)であった。半公営農園内の学校では100以上の大腸菌が観察されたが、休暇の季節であり、水が水道管内で滞留していたため、気温の高いスリランカでは水温もあがり、菌が増殖していた可能性もある。また、デニヤヤ郡卿の街やモロワカ郡卿の街では100ml 中 5%内の大腸菌数であった。また、飲料水を共有しているから大腸菌が多いとはいえず、同じ源泉であっても、世帯により、大腸菌の数にはかなり違いがみられた。また、一見衛生的に見えなかった湧き水には大腸菌が少なく、大腸菌の数は水源そのものというよりは飲料水の管理が重要な要因であることが推測できる。

54カ所のうち本調査でアンケート調査やインタビュー調査を行っていた世帯は25世帯のみであったが、25世帯のうち2世帯は『こどもの活動調査』『住居における設備環境調査』の定義では安全な水を得ることができることとされていたが、1世帯は大腸菌が含まれない水を飲料していたが、別の世帯では102個の大腸菌が含まれていた。一方、上記の調査では安全な飲料水を得ることができないと定義されていた世帯でも100ml 中5個以下の大腸菌結果である世帯は3世帯あった²⁴⁵。本実験からわかったことは、経営形態によって安全な飲料水へのアクセスが異なるとはいえず、また、飲料水の共有という理由だけでは不衛生な状態であるとは言えないということである。ここで民間農園主と半公営農園のマネージャーが労働者の住居についてどのように感じているのかについて紹介したい。

半公営農園であるRPC_(E)農園は前述したとおりである。RPC_(E)農園のマネージャーはRPC_(E)農園だけでなく、RPC_(E)農園の親会社が管理する5つの農園の統括マネージャーでもある。調査者が滞在した当該農園のバンガローはイギリス統治時代に建設された英国風の建物であり、建物

244 平成14年11月8日の第4回厚生科学審議会生活環境水道部会水質管理専門委員会 参考資料2

245 WHO では100ml 中大腸菌は検出されてはならないとしており、米国 EPA 第一種飲料水基準では5%未満とされている。 <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2002/11/s1108-5g.html>

のまわりには英国風の庭には様々な花が咲き乱れ、バンガローと庭の下を見渡すと、英国統治時代に使われていたであろうと思われるプールの跡があり、また反対側には清流が流れている。このバンガローに数日滞在し、R氏にお話を伺った。

R氏によれば、「親会社であるM会社は労働者たちの生活向上や福利厚生に取り組んでいる。ラインルームの居住権も労働者には与えており、農園に居住する人びとの間における売買は容認している。また、ラインルームの設備状況は農家よりも良い場合もあり、比較的良い設備を提供しているが、インフラの適切な使い方を知らないうえに、清潔にしないため、公衆衛生状況が良くない。」と話してくれた。

また、RPC_(D)農園では飲料水の安全性の確認は毎年行っているが、大腸菌は検出されていないという。そこで、上記以外の場所とRPC_(D)農園のバンガローを含めて8箇所ですべて飲料水の大腸菌実験を行ったところ、バンガローでは大腸菌の数が100ml中2個であったが、他の場所では検出された数は異なっていた。大腸菌が多く検出された世帯では室内の蛇口から飲料水を得ていたが、大腸菌が比較的少なかった世帯では、ライン・ハウスの近くにある湧き水から飲料水を得ていた。RPC_(D)農園のマネージャーによると飲料水の安全性は労働者やその家族の健康に影響を与え、結果として仕事への影響が出てくる。そのため、労働者の健康のためには安全な飲水を提供する努力を農園がするとともに、労働者自身が健康や衛生管理を理解するように指導し、飲料水の際には沸騰させるなどの指導をしていきたいと話してくれた²⁴⁶。下記の図5-20は生活環境と教育格差の構造である。

246 農園では、水は沸騰してから飲料するように指導しているが、水の中には何かあるようには見えず、なかなか居住者に理解してもらえないとのことであった。調査結果サンプルを労働者に見せて、実施していきたいとのことだった。

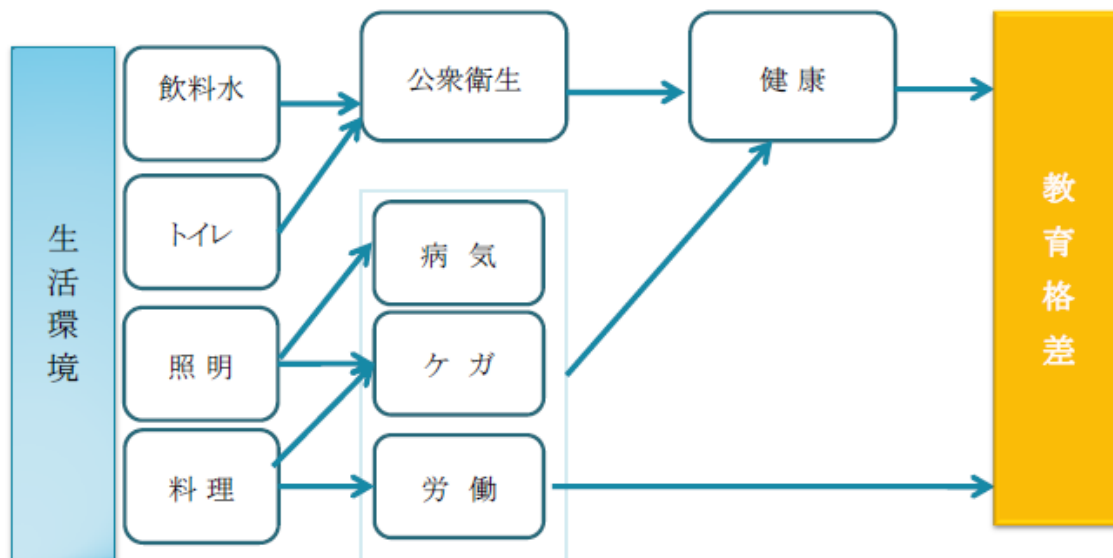


図 5-21 生活環境と教育格差の構造

アンケート調査からは、経営形態によって生活環境は異なる部分があった。しかし、生活環境と教育達成については、どの経営形態においても生活環境の違いによって教育達成が異なるといえるほどの差があるとはいえなかった。しかしながら、インタビューからは生活空間における衛生状況が病気やケガの原因であること、また、生活に必要な資源を得るために子どもたちが時間を取られていることなどが明らかとなった。子どもの手伝は直接的に教育達成に影響を与えるものではないが、このような生活環境のもとでは子どもたちの健康にも影響を与え、学業を中断せざるをえない要因ともなりうることがわかった。

(5) こどもの活動

こどもは生活と切り離された学校の教室という空間で抽象的な知識を覚えるだけでなく、大人と一緒に暮らす社会生活のなかで大人のやり方を吸収し、それを自分なり会得していく。実践で役立つ技術や経験を身につけることは将来の労働市場において有利となるため、両親の手伝や近隣における経済活動を行うことはよくあることである。しかしながら、長時間の労働は教育の機会を奪うだけでなく、こどもの健全な成長を妨げるとともに、場合によっては健康に影響を与えることもある。『こどもの活動調査』ではこどもの経済活動や家事手伝はこどもの教育達成に負の影響を与えており、子どもたちの活動が一定の時間を超えた場合には、在籍状況が悪くなり、また留年・中退の体験をしているこどもの割合も増えた。

また、アンケート調査からは、こどもの活動と教育達成については、サンプル数の関係で経済活動とこどもの在籍状況については正確な統計結果を得ることができなかったが、明らかに所得を得ている13名のこどもの全員が不在籍であった。民間農園では児童労働しているこども12名のうち、11名が不在籍であることから、統計的には正確な結果を得ることができないが児童労働とこどもの教育達成は関係があるものと推察する。インタビューからはこどもの活動に対する話をあまり聞くことはできなかったが、半公営農園から1名のこどもについてと、民間農園から2名のこどもについてのインタビューを紹介したい。

半公営農園で働くDRさん一家は夫妻とこども2名の4名家族である。DRさんはRPC_(D)農園で紅茶栽培地のメンテナンスをしており、妻のEKさんは茶摘みをしている。調査時には、こどもは10歳になる長女と4歳になる長男であった。インタビューに答えてくれたのは妻のEKさんである。夫妻はまだ30歳前後であるが、2人とも教育を受けたことがない。長女は調査時には10歳で、母親のEKさんによれば6年生であるという。世帯所得は決して高くなく、夫婦合わせて月20,000ルピーである。

EKさんによれば「教育は良い仕事を得るために重要であり、塾にも通学させている。学校は家から5kmから10kmの距離にあり、スクールバスがないため公共交通機関であるバスで通学している。長女は女の子なので、将来は看護師さんになって欲しい。長女は毎日1時間程度家の掃除をしてくれており、それ以外の経済的活動などには従事していない。こどもに望む活動はよくわからないが、お金を稼いで欲しい。」と話してくれた。

EKさんにこどもたちの経済活動や家事手伝いについて質問したところ、アンケート調査の質問には回答をしてもらえなかったが、上記のようにインタビューには回答してくれた。EKさんはこどもにお金を稼いで欲しいと話しつつも、こどもの教育は重要であるとも話し、遠方にある学校に通学させ、塾にも通わせていた。また、家事手伝いは1日1時間させているが、経済的活動等には従事していなかった。次に、P_(M)農園で働いているSEさんを紹介する。SEさんは女性で民間農園であるP_(M)農園に20年間居住している。世帯主は67歳になる祖父で、夫はいない。こどもは21歳の長男を初めに、16歳の二男と15歳の三男の5人暮らしである。3人のこどもたちは中退しており、長男は4年生で、二男は9年生で、三男は6年生でやめてしまい、3男以外は皆、農園で紅茶栽培地のメンテナンスか、茶摘みの仕事に従事している。収入は家族4名で毎月28,000ルピー程度である。収入が非常に低いと語ってくれた。

SEさんは、「子どもたちには学校と家の家事をして欲しいと考えています。もし、子どもたちが学校に行ってくれるのであれば、学校に行つて欲しいと思います。しかしながら、学校は家から遠く、子どもたちは勉強が好きではないというため、子どもたちを学校に行かせていません。子どもたちは3男を除き、皆、農園で働いています。」と話してくれた。

P_(M)農園は中心地のデニヤヤ・タウンからキリワラガマ行のバスに乗り、その最終バス停のまだ奥にある。バス停からは歩いてかなりの距離があり、学校に通学するためには何らかの通学手段が必要である。お金がかからない方法としては自転車があるが、P_(M)農園は山の中にあり、道路は平坦ではなく、坂道が多い。また、一部の道路は急斜面であったり、陥没していたり、自転車で通学は現実的ではない。雨季の時期には大量の雨により急斜面を徒歩で歩くことは危険である。P_(M)農園で調査をしているときにスクールが何度かあり、雨が止んだ後にバスの最終地点に向かうと、バス停の横にある川は氾濫し、コンクリートで簡易に造られた小さな橋の上を覆うほどであった。ある時は、急斜面の坂からは水が滝のように流れ、石畳の坂を登ろうとしたさいには滑り落ちたことを覚えている。インタビューから、SEさんの子どもたちが働いているのは、子どもたちが学校や勉強が好きではないからという理由であるが、SEさんの望みは人並みの生活であるということから、子どもたちが家族のために働くためにやめた可能性もある。民間農園P_(H)で働くVMさんの世帯も紹介したい。

P_(H)農園は個人農園であり、VMさんは1日400ルピーで働いている。家族は妻と子ども4人の6人家族であり、VMさんは7年間教育を受けたが、妻は教育を受ける機会がなかった。また、子どもたちは19歳の長女は教育歴がなく、15歳の次女も5年生で中退している。8歳になる長男は3年生であるが、6歳になる次男はまだ学校に通わせていない。19歳になる長女は家を出ている。住居はP_(H)農園が提供されたフラットに住んでおり、夫婦共にP_(H)農園で働き、かつ、別の農園でも働いている。世帯の収入は月に16,000ルピーであるが、十分でないと言ってくれた。子どもたちの活動については下記の通り話してくれた。

VMさんによれば、「この農園での仕事は一時的なものです。収入は十分ではありません。15歳になる次女には働いて欲しいと思っています。教育は社会における次のステージに行くために、重要だとは思いますが、勉強だけすることは子どもたちにとって意味はありません。子どもは仕事の機会を得るために、もっと学ぶべきです。この子(次女)は下の弟たちの面倒を見る必要があります。...8歳の長男には学校に通学するとともに家の手伝をして欲しいと思っています。こ

の子(長男)にとっても教育は重要で、生活環境を良くするために必要です。」と話してくれた。

VMさんはシンハラ人であるが、農園で働いている。自分の家を建てるのが夢であると話してくれた。子どもたちは親たちの仕事を手伝、家事手伝をしている。15歳になる次女は1日3時間の茶摘みを手伝、家の掃除や洗濯、食事を作るのに1日4-5時間程度を費やして家事をこなす。そして買い物、家の修繕や衣服の縫物をしており、学校に行く時間がなさそうであった。長男は学校に通学しているが、毎日家の掃除と食事の手伝をしているとのことであった。

こどもの経済活動や家事手伝と子どもたちの教育達成の格差については統計的には考察することが困難ではあったが、児童労働と定義した時間を超える経済活動をしていた場合には、民間農園では不在籍率が高く、留年・中退経験をしているこどもの割合も高くなっている。また、インタビューからは世帯主は教育が子どもたちにとって重要であるとはわかりつつも、教育の具体的なイメージがつかめず、且つ、不安定な所得と日々の生活の中で、経済的貢献や子どもたちに弟妹の世話や家事手伝を期待してしまう世帯が多く、世帯状況や子どもたちのさまざまな事情と家事手伝の結果、子どもたちが学校をやめてしまったことが推察できた。

5.6 まとめ

本章では、第4章で考察した紅茶産業における経営形態の相違による子どもたちを取り巻く環境の比較に基づき、経営形態の違いによる教育達成との関係をアンケート調査とインタビューに基づき比較分析した。

アンケート調査の結果、経営形態の違いによって教育達成に違いがあることが明らかとなった。特に、農家の子どもたちは全員が学校に在籍しているにも関わらず、農園部の仕事に家族が従事している世帯の子どもたちのなかには不在籍の子どももおり、その傾向は民間農園で高いことがわかった。また、こどもの留年・中退経験についても、民間農園の子どもたちは約半数に経験があることがわかった。特に、世帯主学歴が低学歴、住居所有権無、長屋住まいの場合には、統計的にも有意であり、不在籍割合が高くなっていることがわかった。世帯収入や生活環境、こどもの活動はこどもの在籍状況と関係があるという分析結果を得ることはできなかったが、本調査の対象者、農園主またはマネージャー、学校の教員や地区行政官へのインタビューからはこれらの要素も子どもたちの教育達成に影響を与えていると推察できた。

世帯所得との関係では、半公営農園、民間農園、農家における世帯収入には大きな差がなく、また教育達成にも大きな違いがあるといえなかったが、不在籍理由を回答してくれた39名中10

名のこどもの世帯主は経済的理由をあげた。また、家計における教育費の負担ができないという理由も伺えたことから、教育費の平均支出、中央値、最頻値を計算したところ、月当たり 1,800 ルピーから 2,800 ルピーかかることがわかった。また、世帯主の学歴については、調査地区の行政官や農園管理者から、労働者の教育歴が低いために、教育の重要性についての具体的なイメージを持つことができないことがわかった。そこで、世帯主の学歴と家計における教育支出との関係を見たところ、各経営形態において傾向は異なるものの、高学歴世帯主の方が比較的高い支出をしていることがわかった。住環境については、農園主・マネージャー、学校の教員、行政官などへのインタビューからは、農園間の移動がこどもたちの不在籍要因の1つであることが指摘されるとともに、農園の労働者へのインタビューからは、定住先がないことへの不安があることがわかった。補足調査からは「居住年数」(農園における対象者数約 223 名)がこどもの学年暦以下の場合の方が不在籍が多いことがわかった。さらに、農園や農地が広がる地域では適切な学校を住居周辺から見つけられないこともあり得、また交通機関事情や交通費用、手続き、入学時期などの関係でこどもたちを転校させることが簡単にできないこともわかった。生活環境については、インタビューからは、不衛生な環境や安全でない環境下で生活しているこどもたちもいることがわかった。このような環境下における生活はこどもたちの健康に影響を与え、学業を中断せざるを得ない要因ともなりうることを推察できた。こどもの経済活動や家事手伝については、インタビューからは学校と家の手伝を共有して欲しいと思っている世帯が多く、世帯状況やこどもたちのさまざまな事情と家事手伝の結果、こどもたちが学校をやめてしまったことが推察できた。

上述のとおり、マタラ県コタポラ郡モロワカとデニヤヤ地域における現地調査からは民間農園のこどもたちの教育達成がよくないことがわかった。一方で、こどもたちの教育達成の違いには様々な要因が重なり合っていることも推察できた。第6章では『こどもの活動調査』データによる2次分析結果と現地調査結果に基づき、スリランカ紅茶セクターにおけるこどもの教育格差を生みだしている要因の背景にある課題を考察するとともに、それらの課題に対する対応策をいくつか提言したい。

6 終章

本研究では紅茶セクターの経営形態に着目し、こどもの教育格差とその要因について、量的研究手法と質的研究手法を用い分析を試みた。『こどもの活動調査』データを用いた2次分析とマタラ県コタボラ郡で行ったフィールド調査に基づき、1) 居住地域間の教育格差、2) 紅茶産業における経営形態の違いによるこどもを取り巻く環境の相違、3) 経営形態の相違によるこどもの教育達成格差、また、4) 経営形態間の教育格差の要因の背景について分析を試みた。

本章では2次分析結果と現地調査結果から、こどもの教育達成を阻害している要因の比較分析と、スリランカ紅茶セクターにおけるこどもの教育格差の要因の背景にある課題を明らかにし、これらの課題に対する対応策の提言を行う。

6.1 分析結果と考察

本研究では居住地域間および経営形態間の教育格差の要因として、こどもを取り巻く環境とこどもの活動に着目した。具体的には、こどもを養育する世帯単位に着目した「世帯状況」、こどもが居住する「住環境」、こどもが居住する自宅が安全な環境であるかに着目した「生活環境」、こども自身がどのような活動をしているのかに着目した「活動状況」、そしてこれらの環境下のなかで生活する人びとがこどもの教育達成にどのような意識をもっているのかに着目した「親の意識」である。これらの環境や活動状況が異なることで、こどもの教育達成が異なるのではないかと推察し、データ2次分析と現地調査を行った。

本章では、『こどもの活動調査』データ2次分析と現地調査から明らかになった点を記述するとともに、経営形態間における教育格差の要因の背景について記述する。また、比較分析からわかったこどもの教育達成を改善するための課題を記述するとともに、課題に対する対応策を提言する。

6.1.1 居住地域間教育達成格差と農園部における課題—2次分析—

『こどもの活動調査』データ2次分析では、(1) 居住地域間における教育達成格差、(2) 居住地域内(都市・地方・農家・農園部)における教育達成格差とその要因、(3) 居住地域間における教育達成格差の要因について比較分析を行い、こどもたちを取り巻く環境や活動状況が良いほどこどもの教育達成状況が良いことがわかった。

(1) 居住地域間における教育格差

『こどもの活動調査』データを用いて、都市・地方・農家・農園部におけるこどもの教育達成を比較したところ、先行研究と同じく、農園部に居住しているこどもの方が教育達成(在籍状況および留年・中退経験)は低いということがわかった。

(2) 各居住地域におけるこどもの教育達成格差の要因

居住地域間を比較した場合、農園部に居住しているこどもの教育達成(在籍状況および留年・中退経験)が低いことわかったが、各居住地域における教育格差と関係ある要素は必ずしも同じではないことがわかった。教育達成状況が良くない農園部内では、他の居住地域では世帯状況や生活環境の区分の違いにより、こどもの達成状況が異なったが、農園部内では違いがあるとはいえず、農園部内のこどもたちの教育達成が異なる「住環境」や「こどもの活動」状況の違いにより教育達成状況に違いがあることがわかった。

(3) 居住地域間における教育達成格差の要因

『こどもの活動調査』データ 2 項ロジット分析を行い、居住地域間における教育達成と関係ある要素の考察を行った²⁴⁷。本分析では「居住地域と教育達成」との関係を基礎モデルとし、その他の各独立変数を統制変数として投入したモデルで分析を試みた。

本分析から、こどもの在籍状況については、「住環境」変数をコントロールすると、居住地域間における在籍状況格差がなくなり、住環境の違いが居住地域間における在籍状況格差を最も説明しているといえることがわかった。また、こどもの留年・中退経験についても、「住環境」変数をコントロールすると居住地域間における在籍状況格差が小さくなり、各変数のうち「住環境の違い」が居住地域間における在籍状況格差を最も説明しているといえることがわかった。

6.1.2 経営形態におけるこどもを取り巻く環境 — 現地調査 —

スリランカの紅茶セクターは 1970 年代の経済構造の変化以降、小規模経営の推進、国有化²⁴⁸、再民営化²⁴⁹と、紅茶栽培の経営形態が多様化するとともに、経済や社会の変化により様々な

247 教育達成(在籍状況と留年・中退経験)を従属変数として、「居住地域」「世帯収入」「世帯主学歴」「住環境」「生活環境」「こどもの経済活動」「こどもの家事手伝活動」を独立変数として 2 項ロジスティック回帰分析を行ったところ、各独立変数において教育達成に違いがあるという結果となった。

248 1972 年・75 年の土地改革。

249 1990 年代の公営農園経営の民営化。

人々が関わりを持つようになってきている。そこで、本研究では同様の自然環境、社会基盤環境、経済・政治環境にある地域において、多様な経営形態が混在する地域を選定し、アンケート調査とインタビューを行った。現地調査では紅茶セクターの「経営形態」に着目し、「子どもを取り巻く環境と教育達成」に焦点をあて、紅茶産業における経営形態の違いにより、子どもを取り巻く環境と教育達成にどのような違いがあるのかを考察分析を試みた。また、教育環境について比較分析した。

(1) 調査対象の特徴と調査方法

半公営農園、民間農園、農家という 3 つの経営形態²⁵⁰の違いにより、子どもを取り巻く環境と教育達成状況の比較考察を試みるため、できるだけ同条件が揃っている調査地域としてマタラ県コタポラ郡で調査を行うこととした。コタポラ郡は中・低地²⁵¹に位置するルフナ産地に属し、広大な栽培面積を有するプランテーション会社の半公営農園、大中小の民間経営農園、そして家族経営農家の人びとが携わっている。

本調査は 2013 年 12 月 15 日から 2014 年 1 月 14 日、2014 年 2 月 28 日から 3 月 16 日の約 1.5 か月間において、半公営会社が経営する 5 つの農園 12 ディビジョン(103 世帯)、大中小規模の 19 の民間農園(100 世帯)、11 農村の農家(約 99 世帯)における合計 302 世帯を対象にアンケート調査とインタビューを行った。対象とすることもの数は半公営農園で 195 名、民間農園で 205 名、農家で 133 名となり、計 534 名である。現地調査から、経営形態によって、子どもを取り巻く環境と教育達成がどのように違うのかが下記のとおりわかった。

(2) 子どもたちを取り巻く環境と教育達成

世帯状況(世帯収入と世帯主学歴):

「家計収支調査 2012/13」によると、スリランカ農園部の平均収入は 30,220 ルピーであったが(DCS 2014)、本調査地域の世帯当たりの平均収入は 26,970 ルピーで、平均収入が最も高い農家でさえ 29,303 ルピーであり、2013 年当時のスリランカ農園部平均所得よりも低いことがわかる。先行研究では農園では貧困率が高く、農家では貧困層が多いと指摘されていたが、本調査地でも同様の傾向が見られた。平均収入が最も低かったのは半公営農園であるが、本調査全体

250 調査地:紅茶産業の経営形態(半公営農園:RPC、民営農園:PE、(個人)農家:IF)。

251 紅茶の栽培は標高 1,200m以上が高地、600-1,200mまでが中地、600m未満が低地と区別される。

を母集団とした場合、5,511 ルピーが貧困ライン²⁵²となり、半公営農園では9世帯、民間農園では6世帯、農家では16世帯の計31世帯が貧困ライン以下の生活をしており、農家における所得格差が大きいことを示している。

世帯主の学歴については経営形態によってその分布に違いがみられ、半公営農園では、教育歴がない世帯主は27.2%であり、民間農園では50%と高いが、農家では4%となる。高学歴の世帯主は農家が一番高く50.5%、次いで半公営農園の17.5%、民間農園の10%となり、民間農園の労働に家族が従事する世帯の世帯主の学歴が低いことがわかった。

人びとへの生活水準満足度アンケート調査から10年前や5年前に比較して少なくとも同じレベルであると感じている世帯は、どの経営形態においても高い。しかし、当該地域の平均と比較してよくないと感じている世帯が多いこともわかった。特に民間農園では、世帯所得は半公営農園より高いものの、当該地域の平均よりも悪いと感じている世帯が多く、実際の所得と感じ方には乖離があることがわかった。

生活環境(住環境と生活環境)：

経営形態における住環境と生活環境については、農家の方が良い環境にあった。より良い住環境である農家では一戸建てに居住しているが、農園部における住居の多くは長屋タイプである。住環境は「住居の所有権」「住居の構造」「1人あたりの部屋数」の3要素から構成したが、「住居の所有権」という概念に対して特筆すべき点は、農園で働く人びとの多くは農園が提供する長屋に居住しているが、半公営農園では歴史的背景から、長年働いていた労働者と家族には「居住権」を与えており、居住する農園の仕事に従事していなくても居住できる。一方、民間農園では農園を移動するとともに転居しなければならない。このように、農家では住居の「所有権」を持ち、半公営農園では「居住権」が与えられているが、民間農園では仕事を辞めるということは当該農園の住居からの退去しなければならないことを意味する。

生活環境は、「住居設備環境—全国調査 2013」では、調査をおこなった地域(4つの郡卿)の評価は「非常に低い」および「低い」という評価を受けていた。現地調査では、全国調査と同じ指標を用いて調査したところ、中レベル以上の世帯に所属している子どもたちは半公営農園と農家では90%以上であるのに対し、民間農園では90%未満となり、民間農園の生活環境が良くないことがわかった。このことは、民間農園の生活環境がスリランカの中においても最も整っていない

252 経済協力開発機構(OECD)は相対的貧困率について「等価可処分所得(世帯全体の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した数値)の中央値の半分(貧困ライン)に達しない世帯員の割合」と定義し、この計算式に従って相対的貧困率が国際比較されることが多い。

環境であるといえる。

こどもの活動状況(経済活動と家事手伝い):

先行研究や『こどもの活動調査』では、経済活動に従事しているこどもの数は少なく、農家のこどもの方が従事している割合が高く、農園のこどもの方が長い時間、従事していた。本現地調査においても、同様の傾向で、経済活動に従事しているこどもの割合は農家で最も高く 23.8%、次いで、民間農園の 13.4%、半公営農園では 4.6%であった。一方、長時間労働しているこどもの数が多かったのは民間農園のこどもたちであった。スリランカでは家族や親の手伝いは一般的であり、親の仕事の手伝いや弟妹の世話、家事手伝いをしている。調査地域でも、どの経営形態においても 75%前後のこどもたちが手伝っており、経済活動により収入を得ているこどももいる。

(3)こどもの教育達成と教育環境:

本研究では教育達成をこどもの在籍状況と留年・中退の経験という 2 つの指標から考察した。

在籍状況は、現地調査でも、『こどもの活動調査』では、対象となるこどもの不在籍率は 11%であったが、現地調査でも 11%に当たる 56 名が不在籍であった。農園のこどもたちの不在籍割合が高いという傾向は現地調査においても同じ傾向にあったが、経営形態別に考察すると、半公営農園では 6.9%の不在籍率であり、民営農園の場合には 22.4%と 5 人に 1 人が不在籍であり、農園部門における教育達成が良くないことがわかった。こどもの留年・中退経験状況も同様で、最もその割合が高かったのが民間農園のこどもで、47.4%が適齢の学齢期に在籍しておらず、次いで半公営農園の 33.2%のこどもたちが留年・中退の経験をしていた。本調査からは、特に民間農園におけるこどもの教育達成が良くないことがわかった。

こどもたちの教育環境に対する満足度アンケート調査では、満足と回答した割合が最も高かったのが農家で 78.9%が満足と回答だった。一方、半公営農園および民間農園では不満足・無回答を合すると 42.3%と 35.1%となった。しかしながら、項目ごとのアンケート調査では「学校設備」と「通学環境(時間や交通手段)」については農家が最も低かった。その背景としては、半公営農園では農園内の学校や近隣の学校に通学するが、農家のこどもたちはデニヤヤ中心地にある学校に通学するため、自宅から遠く、時間や費用もかかるため、農家の世帯の方が半公営・民間農園の世帯よりも満足度が低いであろうことが推察できた。徒歩で通学しているこどもの割合は半公営農園や民間農園が多く、51%と 57%であり、一方、農家では 18%となる。通学手段は通学距離とも一般的に連動しており、半公営農園や民間農園のこどもたちの通学距離は 3km 未満がそれ

ぞれ 64%と 81%であるのに対して、農家では 70%の子どもたちが 3km 以上の距離を通学している。そのため、半公営農園や民間農園では交通機関を利用する割合がそれぞれ 49%と 43%であるのに対して、農家では 82%の子どもたちが徒歩以外の方法で通学している。このことから農園の子どもたちは近くの学校に通学しているのに対し、農家の子どもたちは遠方の学校に通学していることがわかった。

6.1.3 半公営農園と民間農園における教育格差の要因－現地調査－

『こどもの活動調査』データ 2 次分析から、農園に居住しているこどもは都市・地方・農家と比較して教育達成が低いということがわかった。現地調査からは農家のこども全員が学校に在籍しているが、農園部では在籍していないこどももあり、その傾向は民間農園で高いことがわかった²⁵³。また、こどもの留年・中退経験についても、民間農園の子どもたちは約半数は経験があることがわかった。

こどもの不在籍の直接的理由について、56 名中 39 名のこどもに対して回答を得ることができ、主な理由が①学校・勉強が好きではない、②経済的理由、③農園間の移動、④書類不備や手続き不備であることがわかった。また、こどもの中には、学校側の受け入れ拒否などにより在籍できず、働いているこどももいた。

上記の直接的不在籍理由を踏まえ、こどもを取り巻く環境の違いによって、どのように教育達成が異なるのかを比較分析するとともに、インタビューでは対象世帯だけではなく、農園主や管理者、学校教員や当該地区の行政官にも話を伺い、教育達成の格差要因の背景を考察した。

世帯状況(世帯所得と世帯主学歴):

第 5 章での世帯所得と教育達成との関係では、半公営農園ではサンプル数の関係から正確な統計結果が得られず、また民間農園では世帯収入により教育達成に違いはないという結果であったが、インタビューからは経済的理由と「農園間移動」や「教育(間接)費用」、「児童労働」が関係あることがわかった。このことは、不在籍理由を回答してくれた 39 名中 10 名のこどもの世帯主が経済的理由をあげたことからわかる。スリランカの公立学校は無償教育であるが、学校にかかる費用や間接的な経費が掛かることが現地の学校訪問調査からもわかった。教育費の負担がでない世帯がいることもインタビューで伺えた。教育費の平均支出を計算したところ、月当たり

²⁵³ 半公営農園では 196 名中 13 名が不在籍であり、民間農園内の仕事に従事する人びとのこどもは 205 名中 43 名が不在籍。

1,800 ルピーから 2,800 ルピーを支出しており、家計における教育費の負担という課題が大きいということがわかった。

世帯主学歴について、調査地区の行政官や農園管理者へのインタビューによると、インタビューから農園の人びとの教育歴が低く、「教育の重要性」についての認識があまりもてないこと、生活のために子どもも家族に貢献してほしいことなどが分かった。アンケート調査からは、農園の人びとでも子どもに教育は重要であると考えており、また人生においても重要であると考えている。しかしながら、教育は重要であると考えているものの、子どもに望む教育歴と子どもに期待する職業に必要な教育歴との間には乖離があり、教育の具体的なイメージがついていないことがわかった。また、高学歴の世帯主ほど、子どもたちは学校に在籍しており、教育費への支出も多くなっている。世帯主の学歴と子どもの教育達成の直接関係については、調査に応じてくれた人びとからはあまり声を聞くことができなかったが、アンケート調査とインタビューから、世帯主の学歴は「世帯所得」と関係がある生活構図であり、「世帯主の意識」や「教育に対する意識」に影響を与え、これらの意識が「教育費支出」や「子どもの労働」「農園間移動」などにも影響を与えているという思考の構図があることがわかった。

生活環境(住環境と生活環)：

アンケート調査から、子どもの不在籍率が最も高かった民間農園では「住居の所有」「住居の構造」の違いにより子どもの教育達成に違いがあることがわかり²⁵⁴、農園の労働者へのインタビューからは定住先がないことへの不安があることがわかった。農園主・管理者、学校の教員、行政官などへのインタビューからは農園間の移動が子どもたちの教育達成に影響を与えていると指摘され、定住先を持たないことが子どもの教育達成が良くないことの 1 つの要因ではないかと推察できた。調査地域における紅茶産業の経営形態は半公営農園、民間農園、農家であるが、農家は戸建を所有し、半公営農園では長期に働いた労働者に居住権を認めているが、民間農園では労働者に居住権を認めていない。「居住年数」(農園における対象者数約 223 名)と子どもの在籍状況を考察したところ、子どもの学年暦年数よりも短期間の場合の方が不在籍が多かった

また、教育環境と住居の位置との関係では、農園や農地が広がる地域では適切な学校を住居先近郊に見つけることが困難であること、また交通機関事情や交通費用の関係で子どもたちを転校先に通学させることが簡単にできないこともわかった。これらの考察から、「住居の所有」自体

²⁵⁴ 教育達成のうち在籍については、農家ではすべての子どもが在籍しており、半公営農園ではサンプル数の関係から正確な統計結果を得ることができなかった。また、民間農園では 5%水準で有意ではなかった。子どもの留年・中退状況については、どの経営形態においても、サンプル数の関係で正確な統計結果がでなかった。

がこどもの教育達成と直接関わりがあるのではなく、定住先がないことによる農園間の移動や転居先における学校との関係が背景にあることがわかった。

農園における生活環境は劣悪であるとしばしば指摘されるが、どの経営形態においても生活環境の違いによって教育達成が異なるといえるほどの差があるとはいえなかった。このことは飲料水の大腸菌検査実験からも分かる通り、本研究で用いた基準が適切でない可能性があるからである²⁵⁵。しかしながら、インタビューからは飲料水やトイレなどの衛生状況、危険のある照明による火傷などの危険性や、火を得るための燃料となる薪の収集による事故の可能性はこどもたちにとって安全でない生活環境を作り出していることが推察でき、生活空間における安全性を確保することもこどもたちの教育達成には重要な課題であることが推察できた。

こどもの活動状況:

スリランカでは親の手伝いをすることは社会的・文化的習慣であり、多くのこどもたちが手伝いをする。『こどもの活動調査』では経済活動や家事手伝いの違いにより、こどもたちの教育達成に違いが見られた。現地調査からは在籍状況はサンプルの関係から正確な統計結果が得られなかったが、中退・留年経験においては差がある。児童労働と定義した時間を超える経済活動をしていた場合には、教育達成は良くなく、不在籍率の高い民間農園では、90%以上のこどもが不在籍であった。傾向として、半公営農園では家事手伝いに従事してもらいたいと思っている世帯のほうが、経済活動に従事して欲しいと思っている世帯よりも不在籍者が多かった。また、民間農園では「経済活動のみ」「家の仕事の手伝い」「家事手伝い」に従事して欲しいと世帯が思っている場合には、学校を不在籍としているこどもがいた。また、学校と家事を両立してもらいたいと思っている世帯においても、17名(12.1%)のこどもが不在籍であった。インタビューからは教育が重要であるとはわかりつつも、学校と家の手伝いを共有して欲しいと思っている世帯が多く、世帯状況やこどもたちのさまざまな事情と家事手伝いの結果、こどもたちが学校をやめてしまったことが推察できた。

6.1.4 仮説の検証

本研究では、スリランカ紅茶セクターにおけるこどもの教育格差とその要因を考察するため、『こどもの活動調査』データ2次分析と現地調査を行い、下記の仮説と目的を検証した。

255 なお、本研究で用いた生活環境の各変数の安全性の基準は、『こどもの活動調査』の基準を準用したが、「飲料水」における大腸菌検出の実験結果から、本基準が適切でないことがわかった。そのため、『こどもの活動調査』データ2次分析や現地調査におけるデータ傾向からはこどもの教育達成の傾向がつかめなかったものと推察する。

第1の目的は「居住地域間の教育格差を明らかにする」であり、仮説として「居住地域における教育達成の格差に着目すると、農園部の子どもたちの教育達成が他の地域と比較して最も低い」と「農園部の子どもたちの教育達成が低いのは、子どもたちを取り巻く環境(世帯状況・生活環境・こどもの活動)が他の居住地域の子どもたちよりも悪いからである」を立てた。

『こどもの活動調査』データ2次分析から、居住地域によって教育達成に違いがあり、特に農園部のこどもの教育達成が良くないことが明らかになった。また、子どもを取り巻く環境(世帯状況・生活環境・こどもの活動)は農園部が良くないことがわかった。2項ロジスティック分析から、居住地域間の教育格差は「住環境」変数を統制すると消えることから、教育達成の良さと住環境が関係していることがわかった。

第2の目的は「紅茶産業における経営形態の違いにより子どもを取り巻く環境がどのように異なるのかを比較考察する」であり、現地調査で行ったアンケート調査から考察した。農家では子どもを取り巻く環境は良かったが、「経済活動」に従事しているこどもの割合は高かった。半公営農園では「世帯収入」や「住環境」があまり良くない傾向にあり、民間農園では「世帯主学歴」「生活環境」が低く、「こどもの経済活動時間」が長いという特徴があることが考察できた。

第3の目的は「経営形態の相違によりこどもの教育達成にどのような違いがあるか」であり、仮説として「経営形態の違いによる教育達成の格差に着目すると、民間農園の子どもたちの教育達成が半公営農園や農家と比較して低い」を立てた。現地調査におけるアンケート調査から農家の子どもたちの教育達成が最も良く、次に半公営農園の子どもであり、民間農園の子どもたちの教育達成が最も良くないことがわかった。

第4の目的は「経営形態間の教育格差の要因の背景について考察する」であり、仮説として「民間農園の子どもたちの教育達成が低いのは、子どもたちを取り巻く環境が農家や半公営農園の子どもたちよりも悪いからである」を立てた。アンケート調査から、子どもたちを取り巻く環境は農家が最も良く、半公営農園と民間農園との関係では、各要素によって状況が異なることがわかった。教育達成の良くない民間農園では、「世帯所得」と「生活環境」についてはこどもの教育達成と関係がなく、「世帯主学歴」「住居の所有とタイプ」「こどもの活動」が関係していることがわかった。しかしながら、インタビューからは「世帯所得」や「生活環境」もこどもの教育達成と関係があることが指摘された。「世帯所得」と教育達成の関係については、「世帯所得」には子どもたちが得た所得が含まれており、これらの子どもたちの教育が中断されていることが教育達成に影響を与えている可能性が高い。また、生活環境については、飲料水の大腸菌検出実験から用いた基準が正しくない可能性があることがわかった。

先行研究や現地調査のインタビューから、スリランカの紅茶産業は社会構造に相違があること、また、各経営形態における生活構造にも違いがあることがわかった。教育達成と関係のある要因は各要素が単独で関係があるのではなく、それぞれの要素が複雑に絡み合い、子どもたちの教育の機会が阻害され、教育達成が低くなっているところがわかった。教育達成と関係のある要素がどのように絡み合い、教育格差の構造が形成されているのかについて、第 2 項の「6.2」において記述する。

6.2 教育格差の構造

植民地時代におけるプランテーション経済の形成過程から 20 世紀後半の改善までは画一的な生活環境であったが、産業構造変革の中で、紅茶産業における生活環境を 1 つのものとして語ることは難しくなっていることが先行研究から推察できる。農園部における人びとの職業選択の幅は拡大し、農園を離れて生活をする上で教育達成は重要となってきたが、教育へのアクセスが他の居住地域と比較して発展していないことが指摘されている(ADB 2008)。教育はこどもの将来に重要なケイパビリティを育成することに貢献し、こどもの教育達成はスリランカ政府の社会政策の 1 つの課題となっている。家族が従事する紅茶産業の経営形態の違いによって、こどもを取り巻く環境やこどもの家庭内での状況がどのように異なり、また、これらの違いによりこどもの教育状況がどのように異なるのかについての比較研究はあまりなされていなかった。そこで、本研究では、紅茶産業内に着目し、経営形態の視点によるこどもの生活環境と教育達成の関係の分析を試みたところ、同様の自然環境、社会基盤環境、経済・政治環境である地域でも、紅茶セクターの経営形態によってこどもを取り巻く環境が異なり、こどもの教育達成が異なることがわかった。半公営農園、民間農園、農家の 3 経営形態のうち、民間農園の労働に家族が従事している世帯の子どもたちの教育達成がよくないことがわかったが、子どもたちの教育達成の違いには様々な要因が重なり合っていることも考察できた。

6.2.1 紅茶産業の社会活構造

半公営農園は 1970 年代の土地改革による大規模農園の国有化、1900 年代の再民営化により形成されたもので、植民地時代に形成されたプランテーション・コミュニティが色濃く残っており、広大な栽培面積を有する「農園」には食料や雑貨を販売する商店、簡素な医療施設、託児所や学校、宗教行事ができる場所もある自己完結型の 1 つのコミュニティである。広大な紅茶農園(土地)は現在でも国の所有であるが、住居の所有権は企業に属する。しかし、長期にわたり当

該住居に所有している場合には住居者の居住権や農園内に居住する人びと間での居住権の売買を認め、農園の仕事に従事していなくとも居住を認めている。農園で働く人びとの多くは居住地区にあるライン・ハウスという長屋に居住している。先行研究では「農園部」の居住地区では「都市」と比較して、水道やガスの設備が普及しておらず、安全な水の確保が困難であり、かつ衛生上の問題があるような生活環境(トイレや台所を共有)で生活しており、労働者や子どものおかれている生活環境は良いとはいえないといわれているが、調査地域の半公営農園ではどの居住地区にある家も清掃されており、家によっては良い家具・テレビ・テーブルなどがあり、民間農園居住地区の家々よりも充実していた。また、学校も義務教育レベルではあるが、年々設備は充実し、2017年当時にはコンピューターが何台も備えられている教室ができていた。

民間農園はその成り立ちの背景や規模の大きさによるが、調査地域においては半公営農園とは異なり、民間農園コミュニティ内において生活を完結することは困難である。民間農園では、50 エーカー以上の大規模農園でも、宗教行事ができる場所や、小さな商店、医療品箱などは備えているが、多少の設備のある医務室、託児所や学校を農園内で開講しているところはなかった。モロワカ地区の農園では園内におけるスペースを利用して、労働者やその子どもたちに文字や勉強を教える勉強教室も試みたことがあったが、長期に滞在するつもりのない労働者の多くは勉強に興味がなく、学ぶことに興味がない家族の子どもたちもあまり教室に来ず、失敗したと話してくれた。また、中規模や小規模の農園がある地域は村落の中にあり、民家や農家が近隣しており、農園で働く人びとの多くは農園が提供するライン・ハウスに多く居住するが、人びとの生活は農園外のコミュニティとの関わりを多く持ち、子どもたちは近隣の学校に通学し、病気やケガをした場合には近隣にある医院に行くことになる。村落内にある学校の設備は充実しているとはいえないが、デニヤヤ・タウンやモロワカタウンなどの少し大きめの街には教育施設や専門の教員を備えた学校がいくつかある。

一方、農家は村落にあり、家の所在地は家々によって様々である。現地調査では11村にて調査を行ったが、農家の家々が一定の距離を保ちながら在している地域もあれば、山の傾斜に沿って建てられている家々もある。距離を一定に保って建てられている地域ではある程度舗装された道の左右に沿って家々があり、山の傾斜に沿って建てられている家の場合には、舗装された道の脇にある坂道を登ったり、下りたりして行くが、わき道の道路状態は様々である。農家の子どもたちは学区内にある学校に通学するが、調査した地域では中心地であるデニヤヤ・タウンなどにある学校に通学している子どもも多かった。また、病気やケガをした場合には、村落や街中の医院や病院に行くのが通常であり、行けない場合には薬局などで薬を購入している。農家の人

びとの生活は近隣の村落の人びとと密接しており、村落内には日々の雑貨や食料などを購入できる小さな商店や、紅茶や軽食が食べられるカンティーンと呼ばれるお店もある。また、農家の人びとはほとんどが仏教を信仰しており、夕方6時になると村にある寺院に行きお祈りする人びとが多い。

本調査では、同様の自然環境、社会基盤環境、経済・政治環境である地域で実施したが、生活コミュニティには各々特色があり、適用される法律も同じではあるが、その実施効力はコミュニティによっても違いがある。特に半公営農園では親会社がいくつもの農園を所有し、各農園には農園管理者たちが派遣されており、これらの管理者たちの下で茶葉の生産や質の向上などの経営面だけでなく、労働者の労働環境や生活環境も管理されている。行政官はこれらの農園を定期的に視察し、農園が適切に衛生環境を保っているのか、労働者や家族に対する法律が遵守されているのか、また人びとが遵守できているのかなどが上級官庁に報告される。これらの視察で、問題が発見された場合には、親会社に指導がなされることもあり、当該農園における農園管理者の責任が問題になることもある。そのため、農園管理者たちは当該農園で働く人びとの意見も聞きつつ、日々の生活の相談にもものる一方で、厳しく指導もしている。一方、民間農園はその規模も様々であり、大規模農園では行政の目も届きやすい。訪問した大規模農園では農園主たちにお話を伺え、実際に労働者と対話したり、法の順守や生活計画・改善などを促す指導をしている姿を見ることができた。しかしながら、半公営農園と民間農園の大きな違いは、労働者の在職期間であり、結果として居住期間が労働者に法律を遵守させることができない大きな課題であるという。

6.2.2 経営形態における生活構造

スリランカでは高学歴層による失業率が高いことが世界銀行などによって指摘されており、必ずしも教育歴の高さが良い職業を得ることにはならないが、教育の意義は職業や良い所得を得ることだけではない。子どもたちが将来において望む人生を選択するためには、子どもたち自身が必要な技術や知識を身につけ、適切な選択を行う判断力を養う必要がある。教育は技術や知識、理論的な考え方や、適切な判断力などの力を養う役割の一部を果たしており、子どもたちの将来のケイパビリティのためには教育の意義は大きいものと考えられる。

『こどもの活動調査』データ 2 次分析から、「世帯所得」「世帯主学歴」「住環境」「生活環境」「こどもの経済活動」「こどもの家事手伝」の違いによりこどもの教育達成に違いがあり、特に農園で

は「住環境」と「こどもの活動」がこどもの教育達成と関係があった。また、居住地域間における教育達成の格差の効果は住環境変数を投入するとなくなることから、住環境が居住地域間の教育達成をもっとも説明していることがわかった。現地におけるアンケート調査からも、民間農園においては不在籍率が高い要因の背景として「住居の所有」「住居の構造」の違いがあることがわかった。農園関係者、学校関係者、居住地区の行政官などへのインタビューからは、農園間の移動が子どもたちの教育達成に影響を与えていること、また「低所得」「社会基盤」「親の意識(低学歴)」「適切な環境整備」が指摘された。農園の労働者へのインタビューからは住居を所有し、住居の改築や子どもたちに良い教育をさせることが夢であり、農園での仕事に従事しなくなった場合でも住居に居住しつづけたいたいという気持ちが強いことがわかった。そこで、本研究では住居の所有を軸に他の要素との関係を考察した。

「住居の所有」は一般的な世帯では、住居のある地域においての定住を意味している。子どもたちは両親と共に住居のある地域で育ち、成長していく。両親の都合等により転居を余儀なくされる場合には、学齢期の子どもたちは転居先の地域にある学校に転校するのが一般的である²⁵⁶。現地調査では農家の子どもたちは両親や家族が住居を所有しており、農園の仕事に家族が従事する世帯の子どもたちの多くは農園が提供する住居に居住していた。半公営農園では歴史的な背景もあり、農園での仕事に従事できなくなった場合でも農園が提供する住居に居住することができる。しかしながら、民間農園では勤務する農園を移動することにより、農園から提供されている住居を退去しなければならず、新たな雇用先の住居に転居しなければならぬ。そのため、子どもたちは新たな転居先の学校に転校しなければならなくなる。

スリランカでは多くの学校は政府によって運営されており、公立の学校ではカリキュラムや教科書²⁵⁷なども規定されているが、授業の質や教員の知識やスキルなどは学校によって異なっている。転校するためには行政手続きが必要となり、適切な手続きを怠ると新たな学校への転入が遅れることとなる。また、学校は住居近くの学校に通学することになっているが、学期途中で引越した場合には、必ずしも最も近い学校に空きがあるとは限らない。特に、短期間で保護者の引越しにより学校を移動している子どもたちは適切な受入校がなかったり、授業の進捗状況や新しい友人関係に馴染めなかったりすることがあり、こどもの教育達成に影響を及ぼす可能性が高い。定住できる住居を所有していることにより、流動的な生活を選択することができなくなる可能性は高くはなるが、安定した定住先を得ることにより、近隣の人びとの人間関係の構築や中断されな

256 住居のある学区の学校に通学している場合を指し、私立学校などに通学している場合は除く。

257 公立学校では、同じカリキュラムで同じ教科書を使うことになっている。

い学業内容はこどもたちの生活環境を安定化するとともに、精神面においても安心感を与えることになり、こどもたちの将来の潜在能力の発達にも影響を与える。

紅茶の栽培はスリランカ全体では南部のウェットゾーンと呼ばれる地域でされているが、ウェットゾーンにおいては広大な農園が広がる高地と中高地、農家と農園が混在する低地とにわかれている。調査地域は中地と低地に属し、広大な農園や中小規模の農園、農家が混在する地域である。しかしながら、茶葉畑が広がる地域は郡卿の都市や街ではないため、通学できる学校数が限られている。調査対象地域であるモロワカ郡卿とデニヤヤ郡卿には 30 の公立学校があるが、タミル語で教える学校は4校であり、モロワカ郡卿に至ってはタミル語で教える学校はない。また、デニヤヤ郡卿においても 13 学年まで教える学校は 1 校しかなく、通学できる学校へのアクセスが限られているということがわかった。また、調査地域の紅茶畑は平坦な場所にあるわけではなく、山の斜面に広がっており、道路の整備も追いついていない。そのため、アンケート調査ではタミル人のこどもが多い農園では近隣の学校に通学はするものの、遠方にある学校に通学するためには、整備状況が悪い道路を公共交通機関で通学しなければならない。カーストや民族問題を抱えるスリランカでは若いこどもを公共交通機関に 1 人で乗車させることは、安全性の問題にもかかわってくる。さらに、公共交通機関はこどもでも無料ではなく、交通運賃が家計の負担となっている。

このようにデータから得た知見である住環境とこどもの教育達成の関係の背景には、農園間移動による転校にともない、転校手続、授業の進捗、交通手段、費用の課題があり、農園移動の背景には定住できないことや低所得があり、教育の経験が少ない人びとは教育のイメージがつかず、日々の生活のために農園移動を繰り返すという構造がある。短期間で農園間移動を繰り返す人びとが定住しやすい環境や制度を整えることが 1 つの課題である。

移動の背景には、定住できる住居がないという理由以外にも低所得という要因がある。現地調査では、農園の仕事に従事している人びとが抱える課題の 1 つとして、貧困があげられた。上述したとおり、世帯平均は農家が高いものの、経営形態間における収入区分の分布には大きな違いは見ることができなかった。しかしながら、農園主や労働者へのインタビューから、世帯収入は同じでも、世帯所得が低いと感じている世帯は農園の仕事に従事している世帯に多かった。また、半公営農園のマネージャーからは農園労働者の給与は出勤さえすれば保障されており、住居や光熱水は農園から提供されているため、農家よりも安定した生活ができるはずであるが、多くの労働者は借金を抱えており、また得た所得を適切に管理できず遊興費に費やしてしまうとのことであった。不在籍の直接的理由を話してくれた 39 名のこどもの内、「経済的理由」をあげたこどもが 10 名であり、また、近隣の平均よりも世帯所得が低いと感じる人びとも農園部では多かった。

インタビューした農園主(管理者)の多くは労働者の実働労働日数と収入との関係や、経済的理由による「農園間の移動」についても話してくれ、「経済的理由」により「農園間の移動」を繰り返すことがわかった。また、当事者も含めた多くの人びとから、低収入のために教育(間接)費用を支出できないことや、家族のために経済活動をするこどももいることがわかり、経済的理由により、世帯の「農園間移動」が頻繁であることや、教育費を捻出できないこと、また、家庭を助けるためにこどもたちが経済活動に従事しているという生活構造があることがわかった。農園の人びとが安定した収入を得られる仕組みを構築することも1つの課題である。

UNICEF によれば、スリランカではこどもたちが労働をしていた場合でも多くのこどもは学校に在籍しており、こどもの労働は大きな課題ではないとしている。確かに、現地調査では、労働に従事しているこどもたちの割合は半公営農園や民間農園のこどもたちよりも農家の方が高かったが、不在籍なこどもはいなかった。一方、これらの活動に従事しているこどもたちが農家と比較して少ない民間農園では、学校に在籍していないこどもが多かった。特に、一定の時間を超える労働に従事している場合には、学校に在学していなかった。『こどもの活動調査』では、こどもたちの活動時間帯についても調査しており、学校時間帯に労働をしているこどもたちは学校に在籍していない割合が高かった。学校時間帯に労働をしているこどもたちは学校に通学できないことは当然である。その背景には、こどもの教育と社会・文化的に当たり前である家事手伝(労働)とのバランス感覚がこどもを養育する人びとの間で培われていないことが1つの要因として考えられる。

教育達成があまり良くない民間農園では「経済活動のみ」「家の仕事の手伝」「家事手伝」に従事して欲しいと世帯が思っている場合には、学校を不在籍しているこどもがいた。学校に在籍していないから労働をしているのか、労働するために在籍していないのかは本調査からは断定できなかったが、世帯状況やこどもたちのさまざまな事情と家事手伝の結果、こどもたちが学校をやめてしまったことが推察できた。もし、コミュニティにおいて、こどもたちの経済活動や家事手伝が当然であり、こどもたちの両親がこれらをこどもたちに期待するならば、低所得または生活に満足していない大人たちがこどもたちに求めるものはお金を稼ぐことではないかと推察する。過度な労働をさせないようにこどもを養育する家族の認識を高めることも、こどもの教育の機会や達成を高めるための1つの課題である。下記の表は調査地における半公営農園、民間農園、農家の特徴と課題をまとめたものである

表 6-1 各経営形態の特徴

居住地域の特徴	農園部		農 家
	半公営農園	民間農園	
耕作面積	≧50 エーカー	大規模 ≧50 エーカー 中規模 50-20 エーカー 小規模 <20 エーカー	個人農家
生活圏	自己完結型コミュニティと近隣村落	村 落	村 落
生活環境	・医療施設 ・学校(教育)	・医療・学校→街に出る	・医療・学校→街に出る
	・住居(長屋) - 農園が提供居住権・改装などが認められている	・住居(長屋): 居住権・改装は原則認められない	・住居: 戸建や土地を所有
	・商店(食料・生活必需品)	・食糧・生活必需品→街に出る	・食糧・生活必需品→街に出る
	・託児施設 ・社会福祉士など配備 ・宗教行事する場所	・保育園-近隣の保育園 ・宗教行事-農園内	・保育園-近隣の保育園 ・宗教行事-村落の仏教寺院
労働条件	・賃金: 労働組合と半公営交渉団体との交渉	・賃金: 農園により異なる。	・収入: 収穫量による
	・労働環境: 労働組合と半公営交渉団体との交渉	・労働環境: 農園により異なる。	・生産費用をかけられないため、労働時間が長時間にわたる
	・労働時間(8時間) ・定年制(55歳)	・小規模農園では、労働監督官などの監視が行き届きにくい ・雇用保険・年金: ない場合もある	・労働監督官下でない ・年金・雇用保険無
	・雇用保険 ・年金		
支援と課題	・ADB、UNICEF、JICA などの国際機関や NGO などによる支援。 ・働く人びとや家族に対する行政指導がしやすい。	・行政や NGO との連携。	・調査地域ではパルニック(日本)やセワランカ(スリランカ)の NGO などが有機栽培農家の支援。 ・副収入: 他の作物や酪農を同時に行う場合もある
	・労働者不足	・各農園主によって取組が異なる。 ・小規模農園では行政の目が届きにくい。 ・短期間での農園間の移動	・収穫量の低下(低収入)
人びとの課題	・所得: 低所得(日給月給) ・生活環境(インフラやプライバシーなど) ・教育: 教育費・進学先の学校 ・教育の質 ・親の意識	・所得: 低賃金・低所得 ・定住先(農園間移動) ・生活環境(インフラやプライバシーなど) ・教育環境: 教育費・通学距離 ・児童労働 ・親の意識	・所得: 低収入 ・労働時間: 長時間 ・住環境: 自費 ・教育環境: 通学距離・教育費 ・教育の質
人びとの利点	・基礎インフラ設備は農園主負担 ・農園内に学校がある ・コミュニティ内で生活できる	・移動の自由がある。 ・移動により、近隣からの干渉を避けられる。	遠方ではあるが、成績等により学校を選択できる場合がある。

6.3 課題と提言

『こどもの活動調査』データ2次分析と現地調査におけるアンケート調査やインタビューにおける考察から、下記の課題がこどもたちの教育達成に影響を与えていると考えられる。教育達成の格差の要因がこれらの課題によって、すべて説明しているわけではないが、こどもたちの教育達成を改善するための対応策を提言したい。

6.3.1 教育達成における課題

(1) 農園間の移動

こどもたちが学校に在籍していない理由や勉学を中断している理由として、短期間での農園間の移動があげられる。定住先を持たない場合には、居住先を選べるという自由がある一方で、農園間の移動により転居することにより、こどもたちが転校を余儀なくされる。そのため、次のような課題が生じていることがわかった。

課題： 一短期間における農園間の移動による適切な転校の手続

一転校にともなう教育環境や授業への適応

一適切な教育環境

(2) 交通機関と教育費用

大学まで無償教育ではあるが、通学費用や学校に納める費用も掛かることがわかった。紅茶畑は多くの場合が山の斜面で栽培されていることが多く、労働者の居住する地区はバスなどの公共交通機関が運営されているような公道から離れていたり、学校から距離のある場合が多い。また、居住地区までの道程は私有地内であることも多く、限られた人びとしか使用しない場合も多い。そのため、道路が整備されておらず、交通機関の利便性もよくない。また、公共交通機関利用における費用の負担や安全性の問題などもある。このような農園や農地が広がっている地域では、安全な交通機関の確保をすることがこどもたちの教育機会や達成を高めるための課題であることがわかった。

課題： 一道路の整備状況

一交通機関の利便性と安全性

一教育費用の家計の負担

(3) 所得管理

調査対象地域では、農家の世帯所得は半公営農園や民間農園によりも高いものの、貧しい世帯も多かった。また、アンケート調査の結果からは世帯所得の分布に大きな違いがあるとはいえなかった。一方、インタビューからは農園での仕事供給は農家と比較して安定しており、世帯収入についても予測がしやすく、計画を立てやすいという話をしばしば聞いた。しかしながら、農園の仕事に従事している労働者の世帯では、所得を遊興費に費やすなどし、家計における所得管理ができていないという話も伺えた。教育にかかる費用と他の項目への支出に関するバランスをどのように管理するのが重要な課題である。

課題： ー遊興費(アルコール、友人と付き合い)への支出
ー家計における所得管理

4) 親の意識

現地調査から、農園の仕事に従事する世帯主の教育に対するイメージや、子どもたちの活動による教育への影響などの認識が農家の世帯に比べ低いことがわかった。また、農園の世帯主の方が農家の世帯主と比較して、教育歴が低く、教育に対するイメージが湧かないなどのことがインタビューからも伺え、子どもを養育する世帯に教育の具体的なイメージを得てもらうことが課題の1つであることがわかった。また、子どもに経済活動や家事手伝を長時間させることによる子どもたちへの影響について認識してもらうことも1つの課題である。

課題： ー教育に対するイメージ
ー一定時間を超えた経済活動と家事手伝

上記のとおり、紅茶セクターにおける子どもの教育達成を改善するには、「農園間の移動」や「交通機関や教育費用」、また「世帯の経済状態と家計管理」や「親の意識」などが課題として挙げられる。これらの課題により、学業の継続が困難になることや、子どもたちの転校が困難になっていることの1要因として推察できる。子どもたちの教育達成を改善するためには、人びとの文化的背景も多様性の1つとして考慮にいれつつ、子どもたちが教育達成しやすい環境を世帯内および社会において構築していくことが必要であると考え。そこで、これらの課題に対していくつかの提言をしてみたい。

6.3.2 提言

本研究では、様々な要素が相互に関連して、経営形態間の教育格差を生じさせていることがわかった。特に、『こどもの活動調査』データ2次分析や現地アンケート調査から「住居所有の有無やタイプ」とこどもの教育達成とが関係していることがわかり、本研究では「住居所有の有無やタイプ」を軸に、各要素がどのような関係になっているのかを考察することにより、教育格差の構造を考察した。

教育達成の格差の要因が紅茶産業の社会構造や各経営形態における生活構造、また世帯内における考えや価値観から派生する上述した課題によって、すべて説明しているわけではないが、こどもたちの教育達成を改善するための対応策を提言したい。

行政:

課題1) 農園間移動

提言1:適切な転校の手續の雇用主の義務化と行政官による定期的な見回り²⁵⁸

小規模農園などの場合、雇用主に対して義務を課しても手續きを行わない場合などが起こりうる。雇用主の意識を高めるために定期的に小規模農園の訪問を行う。

提言2:転校にともなう教育環境や授業への適応

①目安箱制度の整備

言語等による受入意拒否のような課題に対処するべく、行政などに目安箱などを設置し、誰でも住民の課題を提議できることにすることにより、受入拒否などの課題に対応する²⁶⁰。

②補講制度の確立

副業している教員の活用し、通常の授業時間帯はこどもたちを対象とし、放課後は大人も含め、希望者に対する授業を行う。1部および2部を受け持つ教員には給与を倍支払うなどの対応をする²⁶¹。

258 農園間の移動が短期間で行われる理由の1つとして、定住先がないことや給与面などの課題がアンケート調査とインタビューからわかったが、「〇〇年働いていた場合には居住権を与える」、または「民間農園も半公営農園と同じ給与額を保障する」などは、民間農園の負担を増大させ、実行が困難であるためここでは提案しない。

260 スリランカでは大学の講義は英語が公用語ではあるが、後期中等教育まではシンハラ語かタミル語による教育システムである²⁶⁰。こどもたちの選択により教育言語を選べるが、母語以外の学校への通学を希望した場合、非公式に受け入れ拒否をされることがある。

261 母語と異なる言語で学ぶ場合には、勉学についていけないなどの問題が起こっている。各学校では、母語としないこどもたちのための言語クラスや補講などを設けているが、教員がいないなどの課題がある。一方、多くの教員たちは副業として、放課後に塾を開講している。

③:チューター制度の確立

新しい生活環境や学校環境に慣れないこどもたちのために、高学年や同学年の児童が転校生の面倒を見られるようなシステムの構築をする。チューターとなった児童には、証明書などを発行し、これらのこどものインセンティブを奨励する。

課題 2) 交通機関と教育費用

提言 1:家計負担軽減

①:免除制度の確立

転校前の学校で設備費等を支払っていた場合には、転校先での設備費等、学校に納める費用を免除する。

②:公共交通機関の無料化

住居から学校までの交通経路については公共交通機関を使用する場合には、無料定期券などを行政機関が支給する。

③:文具品等の支給

貧しい世帯のこどもたちに対しては、学校で用いる文具品等を最低限支給する。

提言 2:道路の整備状況²⁶²

①:居住地区から公道までの道路整備²⁶³

少なくとも悪天候の時でも、安全に歩くことができる道路状態を保つような道路整備を行うとともに、道路のまわりが草花などに被われないように整備する。道路が農園主の所有の場合には、行政のサポートを農園主にする。

課題 4) 親の意識

提言 1:社会人教育制度の確立

農園の世帯では親世代の教育歴が低い、または教育歴がない人びともいた。学びたいと考える大人に対して、教育を受けることができる場所を提供する。また、こどもたちの教育に関するセミナーや相談会を開催し、こどもたちの世帯主や両親の意識を高める。

262 近年では、セワランカ(スリランカのNGO)や海外機関、スリランカ政府の努力により道路状況が整備されつつある。

263 道路などのインフラ整備費用は莫大である。しかしながら道路の安全性は、人びとのケガからの危険性を減らし、また犯罪などの危険性も防ぐうえで重要である。

雇用者:

課題 1: 短期間における農園間の移動による適切な転校の手続²⁶⁴

提言 1: 雇用主に対する行政等に対する届け出の義務化

雇用する労働者が働く場所がある地区の出身者ではない場合には、雇用主による行政への届け出(転居届および転校手続きなど)を義務化する。または、雇用する際には被雇用者より、転居届と転校届などの控えを雇用主が保管しておく義務を課す。怠った場合には雇用主に対する罰則規定を設ける。

課題 4: 適切な教育環境

提言 : 農園における勉強空間の確保

農園内の居住地区に在住する世帯の多くはラインハウス(長屋)に居住している場合が多い。ラインルームの構造は多くの場合が1間であり、子どもたちが静かな環境で勉強する空間がない。そこで、子どもたちがいる世帯を雇用する場合には、居住地区内に子どもたちが静かに勉強できるような空間を設ける。

課題 1: 道路の整備状況

提言 2: 居住地区の転居

道路が整備できない場所に住居地区がある場合には、労働者の住居地区を転位するなどし、対応する。

課題 2: 交通機関の利便性と安全性

提言 1: 適切な交通機関がある旨の証明を義務化

農園内の居住地区から学校まで適切な交通機関がない場合には、子どもがいる世帯を当該居住地区に居住させてはならない。農園主は、適切な交通機関がある旨の証明書を行政機関から得なければならない。

提言 2: 通学支援の確立

公共交通機関を用いた通学には様々な危険が伴う。集団登校・下校ができない場合には大人が付き添うなどの通学支援体制を整える。

264 農園間の移動が短期間で行われる理由の1つとして、定住先がないことや給与面などの課題がアンケート調査とインタビューからわかったが、「〇〇年働いていた場合には居住権を与える」、または「民間農園も半公営農園と同じ給与額を保障する」などは、民間農園の負担を増大させ、実行が困難であるためここでは提案しない。

課題1:遊興費(アルコール、友人と付き合い)への支出および、課題2:家計における所得管理

提言1:半公営農園における学資保険制度の確立

半公営農園で働く労働者の多くは、長期間当該農園で働いている。そこで、子どもたちの教育関連費用が将来的に賄えるように、学資保険システムを構築し、子どもたちのいる世帯については、社会保険同様に給与から学資保険料を差し引く。引き出しに関しては、費用を説明できる書類の提出により行えることとするなどの制限を設ける。

提言2:農園における所得管理

本分析から、子どもの教育費用は月当たり 2,000 ルピー前後である。子どもがいる世帯については本費用を給与から差し引き、本費用の管理を農園でおこなう。また、勉学に必要な文具品等については、農園で購入し、教育費用から支出するなどの管理を行う。

課題2:一定時間を超えた経済活動と家事手伝

提言2:農園主による支援

世帯内における家事手伝のため学校への通学が困難な場合には、農園主が支援を行うことを義務付ける。

6.3.3 まとめ

本研究は『こどもの活動調査 2008/9』データを用いた2次分析と事例研究としてマタラ県コタポラ郡で行ったフィールド調査の2段構成で分析を行った。『こどもの活動調査』データ2次分析では、先行研究と同じく、農園部の子どもの方が教育達成(在籍状況および留年・中退経験)が低いということ、また、居住地域間の不在席状況の格差を最も説明している要素が「住環境」であることがわかった。経営形態に着目した事例研究では、できるだけ同条件が揃っている調査地域としてマタラ県コタポラ郡で調査を行った。半公営農園、民間農園、個人農家におけるアンケート調査から、不在籍率が高い要因の背景として「住居の所有」「住居の構造」の違いがあることがわかった。また、関係者へのインタビューからも農園間の移動が指摘され、一方、当事者である農園労働者へのインタビューからは住居所有、住居改築の自由や子どもたちに良い教育をさせ

ることが夢であり、農園での仕事に従事しなくなった場合でも住居に居住しつづけたいという気持ちが強いことがわかった。

「住居の所有と構造」については、それ自体がこどもの教育達成の直接的理由ではない。そこで、本研究では住居の所有を軸に他の要素との関係を考察したところ、「世帯所得」と「世帯主学歴」と「農園間移動」は相互に関係していることがわかった。世帯主は低所得や教育のイメージがつかないために、農園間の移動をし、子どもたちは転校を余儀なくされるという生活構造があり、さらに、転居した先には、近隣に適切な学校があるとは限らず、また、適切な手続き、教育の質、交通費や交通手段などの教育環境のために、経営形態間の教育格差を生みだしている。また、転校した先の学校における授業の進捗状況の違いや、新たな人間関係に適応できないこともある。住居の所有を通して、家族は安心して定住できる地を得ることができ、自分たちの将来設計を描くことができ、子どもたちの未来を描くことができることにより、生活環境や子どもたちの教育環境を整えることができるのである。このためには、安定した生活ができるような制度設計や環境をつくりだすことが課題となっていることがわかった。そこで、アンケート調査及びインタビューから見えてきた課題に対して上記の提言を行った。

人が人生の岐路に立った時に、自身になりたいと思う選択肢を選べるためには、どれだけの選択肢を持っているかが重要であると考え。しかしながら、自身で選びたい選択肢やその組み合わせは、自然と目の前にあるものではなく、自らが獲得していかなければならないものも多い。子どもたちは自ら獲得したものは少なく、生来からの親や民族、富、外部的要因である生活環境や近隣の人びとによって与えられた範囲の中のものが多い。子どもたちが将来の選択肢とその組み合わせを増やすためには、教育は枢要であり、学ぶ機会や教育達成の制限は、子どもたちの将来に必要なケイパビリティを奪うことになる。子どもたちの教育達成を改善するためには、子どもたちが自ら教育について判断できるまで、子どもたちが教育達成をしやすい環境を社会や産業内、世帯において構築していただくことが必要であると考え。

参考文献

青木 保

(1985) 編著 『聖地スリランカ』 日本放送出版協会。

赤澤正敏

(1969) 「序章」 アジア・エートス研究会編 『アジア近代化の研究－精神構造を中心にして－』 3－40 頁，御茶の水書房。

アジア経済研究所

(1972, 1973, 1974, 1975, 1976) 「スリランカ」 『アジア動向年報』 アジア経済研究所。

[財]アジア・太平洋人権情報センター

(1999) 『アジアの文化的価値と人権』 現代人文社。

足立 明

(1987) 「風土と農業」 杉本義男編 『もっと知りたいスリランカ』 2－23 頁，弘文堂。

(1988) 「シンハラ農村の労働交換体系」 13(3):517－581 頁，国立民族学博物館研究報告。

アーナンダ・クマーラ

(2005) 「スリランカにおける貧困問題，若者の失業と教育の関わりに関する考察～真の解決を求めて」 『鈴鹿国際大学紀要』 12，鈴鹿大学。

(2006) 「スリランカの教育制度の歴史と現状及びその問題点について」 『鈴鹿国際大学紀要』 13，鈴鹿大学。

阿部 彩

(2008) 『子どもの貧困－日本の不公平を考える』 岩波新書。

荒井悦代

(1992, 2002, 2004, 2006, 2013, 2015) 「スリランカ」 『アジア動向年報』 アジア経済研究所。

池田長三郎

(1969) 「セイロンの歴史的・風土的性格」 アジア・エートス研究会編 『アジア近代化の研究－精神構造を中心にして－』 403－419 頁，御茶ノ水書房。

池本幸生

(2006) 「アジアの貧困」 『アジアの開発と貧困／松井範惇・池本幸生』 明石書房。

(2007) 「ケイパビリティから見た貧困削除のための観光開発」 『人文科学研究所紀要』 89: 113－146 頁，立命館大学。

池本幸生・松井範惇

(2015) 『連帯経済とソーシャル・ビジネス－貧困削減，富の再分配のためのケイパビリティ・アプローチ』 明石書房。

石井貞修

(1969) 「セイロンにおける言語問題の政治的展開」 アジア・エートス研究会編 『アジア近代化の研究－精神構造を中心にして－』 319－349 頁，御茶ノ水書房。

石田 浩

(1999) 「学歴取得と学歴効用の国際比較」 『日本労働研究雑誌』 472:46－58 頁。

井関敦子・石井久美子

(2010) 「スリランカ民主主義共和国の紅茶農園とティープランターの状況」 『三重看護学誌紀要』 12:85－88 頁，三重大学。

磯邊厚子

- (2006)「労働と女性—スリランカ農園部のブラッカーの女性たち—」『国立女性教育会館研究ジャーナル』10:95—100頁, 国立女性教育会館。
(2008)「彷徨えるアイデンティティから民族を超えたアイデンティティへの要求—スリランカ農園部のインド人移民の異なりと自由」生存学研究センター報告。
(2009)「スリランカ社会福祉の現状と課題—福祉政策の光と影—」『京都市立看護短期大学紀要』34:23—33頁, 京都市立看護短期大学。
(2010)「スリランカの農村・農園部の妊婦の健康と潜在能力」『Core Ethics』6:497—508頁。

伊藤信也

- (2008)「男女平等とケイパビリティ・アプローチ—アマルティア・センをてがかりに」『大阪薬科大学紀要』2:27—37頁, 大阪薬科大学。

英国国境局

- (2008)「スリランカ-COUNTRY OF ORIGIN INFORMATION REPORT」英国国境局

絵所秀紀

- (1999)『「スリランカ・モデル」の再検討』『アジア経済』40(9・10):38—58頁, アジア経済研究所。
(1994)『開発と援助:南アジア・構造調整・貧困』同文館出版。

絵所秀紀・穂坂光彦・野上裕生

- (2005)『シリーズ国際開発第1巻 貧困と開発』第2刷 日本評論社。

絵所秀紀・山崎幸治

- (2005)『アマルティア・センの世界』第2刷 晃洋書房。

大内 力

- (1978)「スリランカの米と稲作」『経済学論集』第44巻第2号:63—87頁, 東京大学経済学会。

大森元吉

- (1999a)大森元吉編著『スリランカの女性, 開発, 民族意識』国際基督教大学社会科学研究所地域研究シリーズ I:3—4頁, 11—12頁, 明石書店。
(1999b)「南部農村の稲作と紛争」大森元吉編著『スリランカの女性, 開発, 民族意識』国際基督教大学社会科学研究所地域研究シリーズ I:157—177頁, 明石書店。

小笠原春菜

- (2008)「ケイパビリティ・アプローチの再検討—自由と必要」『人文社会科学研究』17:165—180頁, 千葉大学。

岡本弘子

- (2005)「スリ・ランカの就学前教育: 貧困者居住区における実態調査」『東洋英和女学院大学人文・社会科学論集』22号:57—76頁, 東洋英和女学院大学。

尾嶋史章

- (1986)「教育機会の地域間格差と教育達成」『人間科学部紀要』12:97—116頁, 大阪大学。

小原美紀・大竹文雄

- (2009)「子どもの教育成果の決定要因」『日本労働研究雑誌』588:67—84頁, 労働政策研究・研修機構。

外務省(FOMA)

- (2008, 2010)『政府開発援助(ODA) 国別データブック スリランカ』外務省。

鹿毛理恵

(2012)「海外出稼ぎ女性家事労働者の経済的背景:スリランカのハンバントタ県における実態調査を中心にして」『佐賀大学経済論集』44(3):89-126頁,佐賀大学。

金子元久

(1980)「教育経済学の20年-教育の社会科学総合の観点から-」『教育社会学研究』35:123-133頁,東京大学大学院教育学研究科。

川島耕司

(2006)「スリランカと民族-シンハラ・ナショナリズムの形成とマイノリティ集団」『明石書店』

(2008)「スリランカ・タミル人社会におけるカーストと民族」『国土舘大学政経論叢』4:31-56頁,国土舘大学。

辛島昇

(1976)『インド史における村落共同体の研究』東京大学出版会。

川田侃

(1978)「スリランカ経済の現状と問題点」『経済学論集』第44巻第1号91-110頁,東京大学経済学会。

黒田一雄

(2000)「発展途上国における女子教育の教育経済的考察」『国際教育協力論集』3(2):133-141頁,広島大学教育開発国際協力研究センター。

河本大地

(2006)「スリランカにおける有機農業の展開とそのメカニズム」『地理学評論』79(7):379-397頁。

(2008)「スリランカ茶業の構造変化と有機農法導入の影響-プランテーション部門を中心に-」『地学雑誌』117(3):617-636頁。

クスマ・カルナラトナ

(1999)「低地シンハラ農村の女性と工場労働」大森元吉編著『スリランカの女性,開発,民族意識』国際基督教大学社会科学研究所地域研究シリーズI:17-32頁,明石書店。

グローバル・キャンペーン・エドケーション

(2002)宮崎絵里子,三宅隆史,松本知子訳「万人のための教育の質:途上国政府とドナー,市民社会が優先すべき行動」Global Campaign for Education。

国際協力銀行

(2001)『貧困プロファイルスリランカ民主社会主義共和国』国際協力銀行。

国際農林業協力協会

(2004)「スリランカの農林業-現代と現状の課題-」国際農林業協力協会。

阪本公美子

(1997)「人間開発と社会開発」西川潤編『社会開発:経済成長から人間中心型発展へ』113-136頁,有斐閣。

佐藤信雄

(1969)「セイロンにおける教育近代化の過程」アジア・エートス研究会編『アジア近代化の研究-精神構造を中心にして-』351-373頁,御茶の水書房。

佐々木宏

(1998)「現代の児童労働と学校教育」『教育福祉研究』4:70-83頁,北海道大学。

澤田康幸,他

(2006)「貧困削減におけるインフラの役割-スリランカ・パキスタンにおけるJBIC灌漑事業のインパクト評価」『開発金融研所報』第32号34-69頁,国際協力機構。

執行一利

(1987)「ラージャ・ラタードライブーンの村落」杉本義男編『もっと知りたいスリランカ』191-204頁, 弘文堂。

(1998)「シンハラ村社会のネットワーク」杉本良男編『スリランカ』48-55頁, 河出書房新社。

(2003)「農村の暮らし」澁谷利雄・高桑史子編著『スリランカー人びとの暮らしを訪ねて』78-101頁, 段々社。

重松伸司

(1986)編著『現代アジア移民—その共生原理をもとめて—』名古屋大学出版会。

庄野 護

(1996)『スリランカ学の冒険』南船北馬舎。

澁谷利雄

(1987)「大衆文化」杉本義男編『もっと知りたいスリランカ』278-297頁, 弘文堂。

(1988a)『祭りと社会変動:スリランカの儀礼劇と民族紛争』同文館。

(1998b)「映画とテレビ メディアの抱える困難」杉本良男編『スリランカ』5-22頁, 河出書房新社。

(2010)『スリランカ現代誌』彩流社。

(2003)「コロンボで暮らす」澁谷利雄・高桑史子編著『スリランカー人びとの暮らしを訪ねて』66-77頁, 段々社。

シューマツハー・エルンスト・F.

(1973/2015)酒井 懋『スモール イズ ビューティフル 再論』第8刷2012年, 講談社学術文庫。

新城優子

(2010)「こどもの教育達成プロセスに関する理論的検討—社会関係資本論の視点から—」ソシオロギス 34。

杉原 薫

(1981)「インド人移民とプランテーション経済—19世紀末~第1次大戦期の東南・南アジアを中心に—」『社会経済史学』47(45):58-375頁, 社会経済史学会。

鈴木慎一

(1997)「スリランカ」『アジア動向年報』アジア経済研究所。

鈴木晋介

(2004)「スリランカにおけるインド・タミルという「民族」—その「想像の仕方」—に関する考察」『筑波大学 地域研究』22:177-195頁, 筑波大学。

鈴木正崇

(1987)「サバラガムワ」杉本義男編『もっと知りたいスリランカ』95-126頁, 弘文堂。

(1997)『スリランカの宗教と社会—文化人類学的考察』春秋社。

鈴木睦子

(2008)「スリランカ紅茶産業の農園タミル人の社会開発—市民社会の役割—」『早稲田大学大学院アジア太平洋研究科』博士学位論文。

(2015)『スリランカ 紅茶のふる里~希望に向かって一歩を踏み出し始めた人々~』アールイー。

杉本良男

(1987a)「民族と国家」杉本良男編『もっと知りたいスリランカ』25-50頁, 弘文堂。

(1987b)「伝統と変化」杉本良男編『もっと知りたいスリランカ』51-72頁, 弘文堂。

(1998)「輝ける島の虚実」「一杯の紅茶が語ること」「歴史世界の現代への投影」「カースト仏教社会のカースト制」杉本良男編『スリランカ』5-22頁, 河出書房新社。

スロチャナ・ナイール

(2006) 松井範惇・池本幸生訳「開発と女性」『アジアの開発と貧困』明石書店。

関根康正

(1987)「ジャフナと東海岸」杉本良男編『もっと知りたいスリランカ』146-172頁, 弘文堂。

セン・アマルティア

(1970) 志田基与師訳『集合的選択と社会的厚生』2刷, 2000年, 勁草書房第。

(1981) 黒崎卓/山崎幸治訳『貧困と飢饉』第2版, 2000年, 岩波書店。

(1985) 村興太郎訳『福祉の経済学:財と潜在能力』1988/2000年, 岩波書店。

(1992) 池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の検討』1999年, 岩波書店。

(1988) 細見和志訳『アイデンティティに先行する理性』2003年, 関西学院大学出版会。

(1999a) 石塚雅彦訳『自由と経済開発』2000年, 日本経済新聞社。

(1999b) 大石りら訳『貧困の克服—アジア発展の鍵は何か』0127A 集英社 第2刷
2002年, 集英社新書。

(2000, 2002, 2003, 2004) 東郷えりか訳『人間の安全保障』2006年, 集英社新書。

(2002) 加藤幹雄訳『グローバリゼーションと人間の安全保障』2008年, 日本評論社。

暉峻淑子

(1989)『豊かさとは何か』第18刷, 岩波新書。

高桑史子

(1987)「コロンボと西海岸」杉本義男編『もっと知りたいスリランカ』173-190頁, 弘文堂。

(2014)「第6章 スリランカにおける二つのカタストロフィと向き合う—内戦と津波の経験から」『西山雄二 カタストロフィと人文学』167-191頁, 勁草書房。

高橋 彰

(1978)「スリランカ・ウェットゾーン農村の経済構造」『経済学論集』第44巻第3号 45-68頁, 東京大学経済学会。

田中雅一

(1998)「伝統の顔と近代の顔」杉本良男編『スリランカ』56-62頁, 河出書房新社。

谷口佳子

(1982)「低地シンハラ人の伝統, 村落, 工場労働: スリランカ南部農村調査予報」『民族学研究』47(1): 102-116頁。

(1987)「社会関係」杉本良男編『もっと知りたいスリランカ』73-94頁, 弘文堂。

(1999a)「低地シンハラ農村の女性と工場労働」大森元吉編著『スリランカの女性, 開発, 民族意識』国際基督教大学社会科学研究所地域研究シリーズ I: 51-68頁, 明石書店。

(1999b)「農村女性の地域社会活動—ジェンダー, 労働, エンパワーメント」大森元吉編著『スリランカの女性, 開発, 民族意識』国際基督教大学社会科学研究所地域研究シリーズ I: 87-108頁, 明石書店。

チャンドラ・ロドリゴ

(1999)「労働市場への女性の参入—日本とスリランカの比較」大森元吉編著『スリランカの女性, 開発, 民族意識』国際基督教大学社会科学研究所地域研究シリーズ I: 69-83頁, 明石書店。

ディスシルワ サーリエ, 武田 淳, 白武 義治

(2015)「スリランカにおける産業化と農業発展におよぼす社会文化的要因—アジア三国間の比較分析」佐賀大学農学部彙報, 佐賀大学。

永井義男

(1969)「第2部セイロン 西欧的理念の移入と屈折」アジア・エートス研究会編『アジア近代化の研究—精神構造を中心にして—』215-249頁, 御茶ノ水書房。

中村尚司

(1989, 1990, 1993)「スリランカ」『アジア動向年報』, アジア経済研究所。

(1964)「セイロン島におけるプランテーション農業の成立」『アジア経済』5(1):2-19頁, アジア経済研究所。

(1965)「西南セイロンの農村経済」『アジア経済』6・4:20-32頁, アジア経済研究所。

(1976)「南インドの村落社会と海外移住」辛島昇編『インド史における村落共同体の研究』269-294頁, 東京大学出版会。

(1977)「スリランカ農村における労働力の存在形態とその特質—イングルワッタ村の経済調査報告を中心に—」『アジア経済』18(6-7):97-110頁, アジア経済研究所。

(1978)「スリランカ憲法と社会」大内穂編『インド憲法の基本問題』No.263 271-296頁, アジア経済研究所。

(1979)「スリランカ・ドライゾーン農村経済-スリランカの稲作農村-」『経済学論集』第44巻第4号, 66-93頁, 東京大学経済学会。

(1987)「政治と経済」杉本義男編『もっと知りたいスリランカ』258-276頁, 弘文堂。

(1992a)「スリランカー社会変容と外食産業」岩崎輝行・大岩川嫩編『たべものやとくらし: 第三世界の外食産業』アジアを見る眼 85:109-211頁, アジア経済研究所。

(1992b)「スリランカー多民族社会で暮らす人々の多様な文化」矢内原勝・山形辰史 編『アジアの国際労働移動』145-161頁, アジア経済研究所 研究双書。

(1994a)「スリランカー交錯する多民族・多宗教文化, 植民地支配の歴史」松本修作・大岩川嫩編『第三世界の姓名-人の名前と文化』206-211頁, アジア経済研究所 明石書店。

(1994b)『人びとのアジア—民俗学の視座から—』岩波新書。

(1999)「日本の経済協力と参加型農村開発」大森元吉編著『スリランカの女性, 開発, 民族意識』国際基督教大学社会科学研究所地域研究シリーズ I:139-152頁, 明石書店。

(2003)「参加型学問としての民俗学と開発・差別」佐藤寛編『参加型開発の再検討』経済協力シリーズ:199頁。

(2005)「スリランカにおける貧困削減政策の問題点」『龍谷大学経済学論集』44(5):153-166頁, 龍谷大学。

西川 潤

(1974)『飢えの構造-近代と非ヨーロッパ世界—』ダイヤモンド社。

(1997)西川潤編『社会開発: 経済成長から人間中心型発展へ』113-136頁, 有斐閣。

(2000)『人間のための経済学開発と貧困を考える』岩波書店。

西村教子

(1999)「スリランカにおける出生率低下と社会経済環境の変化」『国際協力論集』7(1):165-180頁。

ヌスバウム, マーサ・C・

(2000)池本幸生・田口さつき・坪井ひろみ訳『女性と人間開発』2005年, 岩波書店

野上 修市

(1985)「スリランカの教育法制と教育改革」『法律論叢』57(5):1-52頁。

服部範子・黒川衣代

(2010)「スリランカ女性の教育と労働」『兵庫教育大学研究紀要』36:79-87頁, 兵庫教育大学。

橋本憲幸

(2008)「貧困と国際教育協力・援助—ケイパビリティ・アプローチの視点から」『日本教育学会第67回大会発表要旨集録』152-153頁。

(1999)「シンハラとタミルの対立」大森元吉編著『スリランカの女性, 開発, 民族意識』国際基督教大学社会科学研究所地域研究シリーズ I:195-210頁, 明石書店。

パウロ・フレイレ

(1970) 小沢有作, 他訳『被抑圧者の教育学』1979年, 亜紀書房。

パルシック

(2011)「スリランカ:紅茶園で働く人々の支援計画立案のための調査」報告書 パルシック。

古田弘子

(1999)「補章:スリ・ランカの子どもの教育・保健・福祉の概要」『発展途上国の聴覚障害児早期教育への援助に関する研究:わが国のスリ・ランカに対する援助を中心に』筑波大学博士(心身障害学) 学位論文:289-311頁。

樋口まち子

(2006)『もうひとつの島国・スリランカ』星雲社。

平島成望

(1989)「開発戦略とプランテーション作物—スリランカにおける紅茶生産の事例—」平島成望編『一次産品問題の新展開—情報化と需要変化への対応—』229-268頁, アジア経済研究所。

廣里恭史

(2006)「発展途上国の教育開発に関する政治経済学試論-自立発展的教育開発モデルの構築に向けて—」『国際教育協力論集』9(2):37-49頁, 広島大学教育開発国際協力研究センター。

フォスター・ジェームズ, セン・アマルティア

(1973) 鈴木興太郎, 須賀晃一訳『不平等の経済学』2000年, 東洋経済新報社。

馬上美知

(2006)「ケイパビリティ・アプローチの可能性と課題」『教育学研究』73(4):420-429頁。

(2009)「ケイパビリティ・アプローチにおける「自由」及び「平等」の概念について—教育における公共性概念の再考のために」『東京大学大学院教育学研究科紀要』35:23-32頁, 東京大学大学院教育学研究科。

前田恵学

(1969)「近代化をむかえるセイロン仏教の対応」アジア・エートス研究会編『アジア近代化の研究—精神構造を中心にして—』285-318頁, 御茶の水書房。

松井範惇

(2006)「開発の再検討—概念と計測」「可能性(ケイパビリティ)と豊かさ」『アジアの開発と貧困/松井範惇・池本幸生』明石書店。

松下敬一郎・西村教子

(2002)「スリランカ都市部の世帯構成の特徴」『経済論集』52(2):177-190頁, 関西大学。

松田 哲

(2010)「スリランカ:連邦党の結成とタミル・ナショナリズム—1956年選挙までの展開」『京都学園法学 2010 第2号』京都学園大学。

宮崎隆志

(2009)「ソーシャル・キャピタルとケイパビリティ:移行過程支援との関連で」『社会教育研究』27:15-30頁, 北海道大学。

ミュルダール,G.

(1970) 大来佐武郎監訳『貧困からの挑戦 上・下』1971年, ダイヤモンド社。

(1971) 板垣興一監訳小浪充/木村 修三訳『アジアのドラマ上 諸国民の貧困の一研究』1977年, 東洋経済新報社。

ルイス,W. アーサー

(1985) 益戸欽也・勝俣誠訳『人種問題のなかの経済』産業能率大学出版, 1988年。

揚井克己

(1943)『東印度會社研究』生活社。

山内乾史

(2007)『開発と教育協力の社会学』ミネルヴァ書房。

山口博一, 中村尚司

(1985)「社会の変化」辛島昇編『民族の世界史7 インド世界の歴史像』377-424頁, 山川出版社。

山崎 幸

(2013a)「スリランカの雇用システム—低地シンハラ人社会の伝統的権益の保全」『ソシオサイエンス』19:33-46頁。

(2013b)「スリランカのインド系タミル人の労働環境」『社会学論集』21:72-85。

山崎元一

(1985)「社会の構造—カースト社会に住む人びと」辛島昇編『インド世界の歴史像』63-94頁, 山川出版社。

山田千春

(2006)「スリランカにおける貧困と教育:教育費への活用を中心としたサムルディ計画の成果と課題」教育福祉研究 12:11-23頁, 北海道大学。

(2008)「貧困世帯の教育費調達におけるマイクロクレジットの役割と課題:スリランカのサムルディ計画の調査を中心に」教育学研究院紀要 105:91-109頁, 北海道大学。

山田英世

(1969)「古代シンハラ族の精神構造と近代化の展望」アジア・エートス研究会編『アジア近代化の研究—精神構造を中心にして—』251-283頁, 御茶の水書房。

ユネスコ

(2008)「格差の克服—ガバナンスはなぜ重要か」EFAグローバルモニタリングレポート2009概要, UNESCO。

ロールズ・ジョン

(1957)J田中成明編訳『公正としての正義』1979年, 木鐸社。

Walgama, Siri

(1987)「スリランカのプランテーションにおける労働組合運動の歴史」(1987年12月30日, コロンボの社会・宗教センターにより刊行された論文の邦訳『アジア労働運動資料』第42号, 1985年, アジア労働運動研究所) 119-171頁, アジア研究所。

- Ahluwalia, Montek S.
(1976) Inequality, poverty, and development. *World Bank*, 307-342.
- Ahmed Ilyas H.
(2014) Estate Tamils of Sri Lanka – a socio economic review. *International Journal of Sociology and Anthropology*, 6 (6):184-191.
- Amali Philips.
(2003) Rethinking culture and development: marriage and gender among the tea plantation workers in Sri Lanka. *Gender & Development*, 11(2):20-29.
(2005) The kinship, marriage and gender experiences of Tamil women in Sri Lanka's tea plantations. *Contributions to Indian Sociology*, 39(1):107-142.
- Amerasinghe, Y.R
(1993) ed. *Recent Trends in Employment and Productivity in the Plantation Sector of Sri Lanka with Special Reference to the Tea Sector*. Asian Regional Team for Employment Promotion (ARTEP), ILO.
- Anders Grøntved, MPH, MSc and Frank B. Hu.
(2011) Television Viewing and Risk of Type 2 Diabetes, Cardiovascular Disease, and All- Cause Mortality A Meta-analysis. *JAMA: the journal of the American Medical Association*, 305(23):2448-55.
- Appiah, Kwame Anthony and Henry Louis Gates, Jr.
(1992). Editors' Introduction: Multiplying Identities. ed. by Anthony & Gates, The University of Chicago Press, *IDENTITIES*, 18 (4):625-629.
- Appiah, Kwame Anthony.
(1994) Race, Culture, Identity: Misunderstood Connections. *The Tanner Lectures on Human Values* delivered at University of California, 51-136.
(1998) *Color Conscious– The Political Morality of Race*. ed by Appiah, K. Anthony Any Gutman, Princeton University Press, 30-105.
- Asian Development Bank (ADB).
(1999) Women in Sri Lanka. *Country briefing Paper*, 1999, ADB.
(2008) *Country Partnership Strategy Sri Lanka 2008-2009*. ADB.
- Balachandirane, G.
(2007) Gender Discrimination in Education and Economic Development: A study of Asia. Institute of Development Economies, Japan External Trade Organization, *VRF Serious*, No.426 (Mar): 1-64 and 96-100.
- Becker, Gary S.
(1993) *Human Capital: A Theoretical and Empirical Analysis with Special Reference to Education*. Third Edition, Chicago: The University of Chicago Press.
- Biyawila, Janaka.
(2006) Trade unions in the Sri Lankan tea plantations: Women worker struggles and ethnic identity politics. *TASA Conference 2006*, University of Western Australia & Murdoch University.
- Blau, David M.
(1999) The Effect of Income on Child Development, *The Review of Economics and Statistics*, 81(2):261-276.
- Bourdieu, Pierre.
(1986) The Forms of Capital. ed by John G. Richardson, J.G., *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, 47-58, Westport, Connecticut; NY: Greenwood Press.
- Bratt, Rachel G.
(2001) Housing and Family Well-being. *Housing Studies*, 17(1).

- Bronkhorst, Johannes.
(2008) *From Coffee to Tea Cultivation in Ceylon, 1880-1900 An Economic and Social History*. Brill's Indological Library.
- Burra, Neera.
(1989) Child Labour and Education - Issues Emerging from the Experiences of Some Developing Countries of Asia. *Digest 28*, UNESCO-UNICEF.
- Cave, Henry W.
(1900/1901) *Golden Tips: A Description of Ceylon and Its Great Tea Industry*. New Edition, Sampson lo, Marston and Company, Ltd.
- Central Bank of Sri Lanka (CBSL).
(2012a) *Sri Lanka Socio-Economic Data 2012*. Statistics Department, Central Bank of Sri Lanka.
(2012b)(2015) *Economic and Social Statistics of Sri Lanka*. SDC: www.cbsl.gov.lk.
(2018) *Sri Lanka Socio-Economic Data 2018*. Statistics Department, Central Bank of Sri Lanka.
- Centre for Women's Research.
(2001) *Sri Lanka Shadow Report*. Centre for Women's Research.
- Centre on Integrated Rural Development for Asia and the Pacific (CIRDAP)
(2005) *Rural Development Report 2005*. CIRDAP.
- Center for Poverty Analysis (CEPA).
(2005) *Moving Out of Poverty in the Estate Sector in Sri Lanka: Understanding Growth and Freedom from the Bottom Up*. CEPA.
- Chandrabose, A.S. and Sivapragasam, P.P.
(2011) *Red Colour of Tea-Central Issues that Impact the Tea Plantation Community in Sri Lanka*. Human Development Organization (HDO).
- Chandrabose, A.S.
(2015) Outgoing Labour and its impact on the tea plantation sector in Sri Lanka. *5th International Symposium 2015*, South Eastern University of Sri Lanka:
<http://www.seu.ac.lk/researchandpublications/symposium/5th/religiousandculturalstudies/51.pdf>.
- Coleman, James S.
(1988) Social Capital in the Creation of Human Capital. *American Journal of Sociology*, 94 (Supplement):95-120.
- Coleman, J. Cambell, E. Hobson, C. McPartland, J. Mood, A. Weinfeld, F and York, R.
(1966) *Equality of educational opportunity*. Department of Health, Education and Welfare, USA.
- Craig, J. Edwin, Jr.
(1970) *Ceylon Tropical Development 1880-1913*. ed. by Lewis, A.W., George Allen & Unwin Ltd.:221-249.
- CARE International UK.
(2013) A Different Cup of Tea: The Business Case for Empowering Workers in the Sri Lankan Tea Sector. Briefing Paper, *Learning & Policy Series*, CARE International UK, Issue 04, 2013.
- Daily Mirror.
(2010) Sri Lanka in Violation of Rights. *Daily Mirror, November 3*.
(2011) The case of Labour rights as human rights-bonded labour and modern slavery. *Daily Mirror, February 26*.
(2015) Child labour in the tea plantation in Sri Lanka. ed by Barret-Browning, Elizabeth, *Daily mirror September 29*.
- Data Management Branch, Ministry of Education, Sri Lanka.
(2007) *School Census Preliminary Report 2007*. Ministry of Education, Sri Lanka.
(2015) *School Census Preliminary Report 2015*. Ministry of Education, Sri Lanka.

- Datt, Gaurav and Dilen, Gunewardena.
(1997) Some Aspects of Poverty in Sri Lanka: 1985-1990. *Policy Research Working Paper*, 1738, The World Bank.
- Deepananda, HERATH and Alfons, WEERSINK.
(2007) Peasants and plantations in the Sri Lankan tea sector: causes of the change in their relative viability. *The Australian Journal of Agricultural and Resource Economics*, 51:73-89.
- Dent D.L. and Goonewardene L.K.P.A.
(1993) RESOURCE ASSESSMENT AND LAND USE PLANNING IN SRI LANKA: A CASE STUDY. The Environmental Planning Group, *The International Institute for Environment and Development*.
- Department of Census and Statistics, Government of Sri Lanka (DCS)
(1974) *The Population of Sri Lanka*. DCS.
(2003) *Census of Agriculture 2002-Small Holding Sector*. Agriculture and Environmental Statistics Division. DCS.
(2004) *Poverty Statistics / Indicators for Sri Lanka*. DCS.
(2005)(2012) *Census of Tea Small Holdings in Sri Lanka*. Tea Small Holdings Development Authority, DCS and ADB.
(2009a) *Poverty in Sri Lanka* (Based on Household Income and Expenditure Survey 2006/07). DCS.
(2009b) *The Child Activity Survey 2008/09*. DCS.
(2010) *Household Income and Expenditure Survey-2009/10-Poverty Indicators*. DCS.
(2011) *Poverty Statistics/Indicators -Household Income and Expenditure and Planning*. DCS.
(2013) *Classification of Administrative Divisions by Quality of Housing*. DCS.
(2014) *Poverty in Sri Lanka* (Based on Household Income and Expenditure Survey 2012/13). DCS.
(2015) *Census of population and Housing 2012*. DCS.
- De Silva, K. M.
(1981) *A History of Sri Lanka*. London; C. Hurst & Company & Berkeley/Los Angeles; University of California.
- De Silva, W.
(2002) *The Family: Continuity and Change Women in post-independence Sri Lanka*. Thousand Oaks New Delhi: Sage Publications.
- Dhananjayan Sriskandarajah
(2005) Socio-economic inequality and ethno-political conflict: some observations from Sri Lanka. *Contemporary South Asia*, 14(3): 341-356.
- Diamond, Nancy K and Gajanayake, Jaya.
(2004) *Gender Assessment for USAID/Sri Lanka*. U.S. Agency for International Development.
- Dilshan, Annaraj.
(2012) Sri Lanka: Conflict Mitigation Through Community-Based Water Resource Management-A case study of tea plantation community Sri Lanka. *CPCS Peace practitioners' Research Conference 2012*.
- District Secretariat of Matara
(2013) *Performance Report and Accounts of District Secretariat of Matara for the year 2012*. District Secretariat of Matara.
- Emerson, Patrick M.
(2009) *Section 1. Understanding Child Labor – The Economic View of Child Labor*. edited by Dinman Hugh, The World of Child Labor-On historical and regional survey. M.E.Sharpe Inc, 4-23.

- Gaminda, Ganewatta and G. W. Edwards.
 (2000) The Sri Lanka Tea Industry: Economic Issues and Government Policies. *44th Annual Conference of Australian Agricultural and Resources Economics Society*, University of Sydney.
- Goonsekere, S.W.E.
 (1983) *Child Labour in Sri Lanka*. ILO.
- Grove, De. John.
 (2010) Educational attainment and socio-economic mobility within ethnic groups. *Ethnic and Racial Studies*, 4(4): 466-475.
- G. Findlay Shirras.
 (1931) Indian Migrations. *International Migrations*, 2: 591 - 616.
- Gunasekera, Tamara.
 (1994) *Hierarchy and Egalitarianism-Caste, Class and Power in Sinhalese Peasant Society*. London of School Economics.
- Halil, Dundar., Benoit, Millot., Yevgeniya, Savchenko., Harsha, Aturupane., and Tilkaratne, A. Piyasiri.
 (2014) *Building the Skills for Economic Growth and Competitiveness in Sri Lanka-Direction in Development*. World Bank.
- Hansamali, Amarasinghe and Piyadasa, Ratnayake.
 (2009) Role of Education in Economic Development: The Experience of Sri Lanka. *68th Annual Meeting of the Japan Society of International Economics*.
- Herath, Deepananda and Weersink, Alfons.
 (2009) From Plantations to Smallholder Production: The Role of Policy in the Reorganization of the Sri Lankan Tea Sector. *World Development*, 37(11):1759–1772.
- Harsha Aturupane, Paul Glewwe, Suzanne Wisniewski.
 (2007) *The Impact of School Quality, Socio-Economic Factors and Child Health on Students' Academic Performance: Evidence from Sri Lankan Primary Schools*. World Bank.
- Hayes, Davis.
 (2010) Education Is All About Opportunities, Isn't It? A Biographical Perspective on Learning and Teaching English in Sri Lanka. *Harvard Educational Review*, 80 (4).
- Hobsbawm, E.J.
 (1968) Industry and Empire—An Economic History of Britain since 1750. Review by: W. A. Cole, *The Economic Journal*, 78(312): 947-949.
- Hon Kam & John T. Jackson.
 (2003) Sri Lanka's Plantation Sector: A Before-And-After Privatization Comparison. *Journal of International Development*, 15:727-745.
- Hollup, Oddvar.
 (1991) Trade Unions and Leadership among Tamil estate workers in Sri Lanka. *Journal of Contemporary Asia*, 21(2):195-211, Manila.
 (1993) Caste Identity and Cultural Continuity Among Tamil Plantation Workers in Sri Lanka. *Journal of Asian and African Studies*, 28(1):67-87.
- Institute of Policy Studies (IPSS).
 (2010) *Millennium Development Goals Country Report 2008/09*. IPSS and UNDP.
 (2015) *Millennium Development Goals Country Report 2014*. IPSS and UNDP.
- International Dalit Solidarity Network.
 (2008) Caste-Blind does not mean Casteless. *Indian Institute of Dalit Studies*.
- International Labour Office (ILO).
 (1976) Housing, Medical and Welfare Facilities and Occupational Safety and Health on Plantations. *Committee on Work on Plantations*, Seventh Session, Report III, Programme of Industrial. ILO.
 (1994) Recent developments in the plantation sector. *Report I, Sectoral Activities Programme, Tenth Session*. ILO.

- (1995) Committee on Work on keelss-Conclusions and resolutions. Adopted by *the Committee on Work on Plantations*, 1950-1994, Sectoral Activities Programme, ILO.
- (2003) Social Dialogue as a Means of Enhancing Productivity and Quality of Work Life: A Case Study of the Maha Oya Group of the Bogawantalawa Plantations Company. ILO.
- ILO –IPEC
- (2010) Situation Report on Child Labour (Plantation, Fire-Works Industry, Tile Industry, Coir Industry & Fishery). *Final Report*. IPEC.
- IOM
- (2009) *Gender and Labour Migration* in Asia. IOM.
- Isenmann, Paul
- (1980) Basic Needs: The Case Study of Sri Lank. *World Development*, 8:237-258.
- Jayawardena,K.
- (1984) The Plantation Sector in Sri Lanka: Recent Changes in the Welfare of Children and Women. *World Development*, 12(3): 317-328.
- Jayawardena,K. and De Alwis,M.
- (2002) *The Contingent Politics of the Women's Movement in Sri Lanka after Independence*. Women in post-independence Sri Lanka.
- Jayaweera, Swarna.
- (2002) *Women in Education and Employment*. Women in post-independence Sri Lanka.
- Jayaweera, Swarna and Chandra Gunawardena.
- (2007) *Social Inclusion: Gender and Equality in Education SWAPS in South Asia*. UNICEF.
- Japan International Cooperation Agency (JICA)
- (2002) *Country WID Profile-Sri Lanka*. JICA.
- (2010) *Country Gender Profile*. JICA
- Jegathesan Mythri.
- (2013) *Bargaining in a Labor Regime: Plantation Life and the Politics of Development in Sri Lanka*. Ph.D thesis, Graduate School of Arts and Sciences. Columbia University.
- John Keells PLC.
- (2012) *Annual Report 2010/11*. John Keells PLC.
- Kannangara Nayomi, Silva H.D, Parndigamage N.
- (2003) *Sri Lanka Child Domestic Labour: A Rapid Assessment*. IPEC.
- Kegalle Plantation.
- (2013) Annual Report. Kegalle Plantation
- Kevin Watkins.
- (1995) *The Oxfam Poverty Report*. Oxfam GB.
- Kurian Rachel.
- (1982) *Women Workers in the Sri Lanka Plantation Sector - An historical and contemporary analysis*. ILO.
- Kurian Rachel and Jayawardena Kumari.
- (2013) Plantation Patriarchy and Structural Violence: Women Workers in Sri Lanka. *Conference on Bonded Labour, Migration, Diaspora and Identity Formation in Historical and Contemporary Context*, June 2013.
- Kurihara,S.
- (2011) Tea Estate Plantation Community in Nuwara Eliya District of Sri Lanka: An Introductory Overview of Social Issues and Poverty among Residents Living Under the Conventional Plantation System. *Yokohama Journal of Social Sciences*, 15(6):123-135.
- (2012) *From Labor to citizen: Governance over Estate Tamils in the tea plantation community of the upcountry Sri Lanka- Policy and practice for structural poverty-*. Ph.D Thesis. Yokohama National University.

- Kulasabanathan Romeshun and Geetha Mayadunne.
 (2011) Appropriateness of the Sri Lanka poverty line for measuring urban poverty: the case of Colombo. *Human Settlements Working Paper Series*, Poverty Reduction in Urban Areas 35, International Institute for Environment and Development
- Kazuo Kuroda.
 (1998) Educational Productivity Research in the Contexts of Developed and Developing Countries. *Journal of International Cooperation in Education*, 1(1):79-85, Hiroshima University.
 (1999) Setting priorities across levels of education in developing countries. *Journal of International Cooperation in Education*, 2(2), Hiroshima University.
- Lampietti, Julian A. & Stalker, Linda.
 (2000) *Consumption Expenditure and Female Poverty: A Review of the Evidence*, World Bank.
- Leach, E.R.
 (1961) *PUL ELIYA: A VILLAGE IN CEYLON: A Study of Land Tenure and Kinship*. Cambridge at the University Press.
- Leibowitz, Arleen
 (1974) Home Investments in Children, *Journal of Political Economy*, 82(2):S111-S131.
- Lewis, W. Arthur.
 (1970) ed. *Tropical Development 1880-1913*. London: London George Allen & Unwin Ltd.
- Little, A.W.
 (1999) *Labouring to Learn: Towards a Political Economy of Plantations, People and Education in Sri Lanka*. London: Palgrave Macmillan Press.
 (2000) *Primary Education Reform in Sri Lanka*. Educational Publications Department Ministry of Education and Higher Education
 (2007) Labouring to Learn: educational change among the Indian Tamil minority in Sri Lanka. *Comparative Perspectives, Deshkal Society conference on Education, Pluralism and Marginality*, India.
 (2010) The Politics, Policies and Progress of Basic Education in Sri Lanka – Create pathways to access-. *Research Monograph No.38*
 (2011) Education policy reform in Sri Lanka: the double-edged sword of political will. *Journal of Education Policy*, 26(4): 499-512. Routledge, Taylor & Francis Group.
- Mendis, G.C.
 (1957/1995) *CEYLON Today and Yesterday – Main Currents of Ceylon History*. Colombo: Lake House Investments Ltd.
- Meyer Eric.
 (2003) *Sri Lanka Biography of an Island*. Paris: Viator Publications Ltd.
- Ministry of Education, Government of Sri Lanka (MESL).
 (2004) *The Development of Education*. MESL.
 (2006) *Inclusive approach for EFA and national survey on the implementation of inclusive education in Sri Lanka*. Powerpoint. MESL.
 (2008) *School Sensus-2007 Preliminary Report*. MESL.
 (2013) *Education First Sri Lanka*. MESL.
 (2015) *School Sensus-2015 Preliminary Report*. MESL.
- Ministry of Environment.
 (2012). Sri Lanka's Middle Path to Sustainable Development through Mahinda Chintana- vision for the Future. *Country Report of Sri Lanka*, United Nations Conference on Sustainable Development June 2012, Sustainable Development Division, Ministry of Environment Sri Lanka.
- Ministry of Finance and Planning, Government of Sri Lanka.
 (2011) *Annual Report 2010 – Beyond Boundaries*. Ministry of Finance and Planning, Government of Sri Lanka.

- Ministry of Health, Nutrition & Welfare (MOH) and Japan International Cooperation Agency (JICA).
 (2003) *Final Report, Health Master Plan*. Analysis, Strategies and Programmes. MOH in the Democratic Socialist Republic of Sri Lanka and JICA.
- Ministry of Plantation Industries (MPI).
 (2011) *Statistical Information on Plantation Crops-2009*. MPI.
 (2013) *Statistical Information on Plantation Crops-2012* MPI.
- Ministry of Labour Relations and Productivity Promotion, Government of Sri Lanka.
 (2010) *Sri Lanka's Roadmap 2016 on the Worst Forms of Child Labour*. Ministry of Labour Relations and Productivity Promotion Government of Sri Lanka, IPEC.
- Mills, Lennox A.
 (1933) *Ceylon under British Rule 1795-1932: With an Account of the East India Company's Embassies to Kandy 1762-1795*. London: Humphrey Milford, Oxford University Press.
- Moldrich, Donovan
 (1988) *Bitter Berry Bondage: The nineteenth century coffee workers of Sri Lanka*. Co-ordinating Secretariat for Plantation Area, Kandy, Sri Lanka.
- National Sleep Foundation
 (2015) NATIONAL SLEEP FOUNDATION RECOMMENDS NEW SLEEP TIMES, National Sleep Foundation, February 2.
https://www.otsuka-plus1.com/shop/g/g54071/?utm_source=google&utm_medium=remarketing&utm_campaign=google_gdr_54071&waad=A3TG2sFz&ugad=A3TG2sFz
- Narayan, Dee y pa.
 (1999) Bonds and Bridges: Social Capital and Poverty, *World Bank Policy Research Working Paper*, No 2167. Washington, D.C.: World Bank.
- Nihal, Sri Ameresekere.
 (2011) *IMF, World Bank & ADB agenda on privatization*. Bloomington: Author House, Ind.
- Nisha, Arunatilake.
 (2004) Education Participation in Sri Lanka—Why All are Not in School. *International Journal of Education Research*, 45: (3) 137-152.
 (2008) Will Formula Based Funding and Decentralized Management Improve School Level Resources in Sri Lanka?, SSRN Electric journal
https://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=1270980.
- Ole Salomonsen and Hubert Gunasekera.
 (1995) *Housing Cooperatives for Plantation workers in Sri Lanka*. ILO.
- Ortiz Isabel and Cummins Matthew.
 (2011) Global inequality: Beyond the bottom billion-A rapid review of income distribution in 141 countries. *Working Paper*, UNICEF.
- Oxfam.
 (2002) *The Tea Market: A Background Study*. Oxford: Oxfam Publications.
- Perera Prasanna
 (2014) Tea Smallholders in Sri Lanka: Issues and Challenges in Remote Areas. *International Journal of Business and Social Science*. 5(12) Center for Promoting Ideas, USA.
- Porter J. R. and Washington R. E.
 (1993) Minority Identity and Self-Esteem. *Annual Review of Sociology*, 19:139-161, Annual Reviews.
- Ramani Gunatilaka, Guanghua Wan, and Shiladitya Chatterjee.
 (2009) *Poverty and Human Development in Sri Lanka*. ADB.
- Remnant Fiona and Cader A.A.
 (2008). *The Multiple Dimensions of Child Poverty in Sri Lanka*. National Library of Sri Lanka

- Rousseau.J.J
(1762) *Emile*. Republic of Geneva and France
- Sabaratnam, T.
(1990) *Out of Bondage: A Biography - The Thondaman Story*. The Sri Lanka Indian Community Council, Colombo: Duminda Drandha (Pvt.) Ltd.
- Salih Rozana.
(2000) *Privatization in Sri Lanka*. 175-208, International Labour Organization.
- Samarasinghe, Daya.
(2002) *Women's Health, Population and Quality of Life, Women in post-independence Sri Lanka*. Thousand Oaks New Delhi: Sage Publications.
- Samarasinghe Vidyamali.
(1993) Women's Wage Work and Empowerment among Female Tea Plantation Workers of Sri Lanka. *The Journal of Developing Areas*, 27(3):329-340, College of Business, Tennessee State University
- Sen, Amartya.
(1981) Public Action and the Quality of Life in Developing Countries. *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, 43(4).
(2010) *The idea of Justice*. London: Penguin Books
- Senaratne, D. M. A. H.
(2003) Three Decades of Sustainable Agricultural Systems (SAS) in Sri Lanka: A Review of Institutional and Policy Issues. *Journal of Sustainable Agriculture*, 21(3): 61-83.
- Shastri, Amita
(1999) Estate Tamils, the Ceylon Citizenship Act of 1948 and Sri Lankan politics. *Contemporary South Asia*, 8(1):65-86, Carfax Publishing, Taylor & Francis Ltd
- Silva, K.T., Sivapragasam, and P.P., Thanges,P.
(2009a) Caste Discrimination and Social Justice in Sri Lanka: An Overview. *Working Paper Series*, 3(6), Indian Institute of Dalit Studies.
(2009b) *Casteless or Caste-blind-Dynamics of Concealed Caste Discrimination, Social Exclusion and Protest in Sri Lanka*. Indian Institute of Dalit Studies.
- Sivaram, B.
(1996) Productivity Improvement and Labour Relations in the Tea Industry in South Asia. *Working paper*, Sectoral Activities Programme, ILO.
(2001a) Labour Situation in Tea. *Economic Review July/August*, 27(4 & 5):21-22.
- Sivananthiran,A. and Ratnam, C.S.V.(eds.) .
(2002) *Labour and Social Issues in Plantations in South Asia: Role of Social Dialogue*. ILO. Centre for Research on Multinational Corporations (SOMO)
(2006) *Sustainable Tea-The Dutch Tea Market and Corporate Social Responsibility*. SOMO, ProFound & India Committee of the Netherlands
- Sri Lanka Army
(2018) *School Code Number 2018*. Sri Lanka Army, Government of Sri Lanka.
- Sri Lanka State Plantations Cooperation.
(2010) *Annual Report 2010*. Colombo. Sri Lanka State Plantations Cooperation.
- Sri Lanka Tea Board.
(2011). *Statistical bulletin-2010*. Sri Lanka Tea Board.
(2012). *Statistical bulletin-2011*. 1st Edition, Sri Lanka Tea Board.
- Streeten, Paul.
(1994) Human Development: Means and Ends. *American Economic Reviews* 84(2):232-237, American Economic Association.
- Sunday Times Sri Lanka
(2016) Education compulsory for children between 5 and 16 years. *The Sunday Times Sri Lanka*, May 01,2016.

- Suren Peter, E. J. De Bruijn & Kami Rwegasira.
 (2010) Performance of Privatized Enterprises and Impact of Partial Privatization in a Developing Country: Case of Sri Lanka. *Journal of Transnational Management*, 15(1):46-68.
- Swarna Rajagopalan.
 (2007) National integration in India, Sri Lanka and Pakistan: Constitutional and élite visions. *Nationalism and Ethnic Politics*, 3(4):1-38.
 (1997) *The Vanyan Tree: Overseas Emigrants from India, Pakistan, and Bangladesh*. London: Oxford University Press.
- Thondaman, S.
 (1994) *Tea and Politics An Autobiography Vol.2; My Life and Times*. Co-Publishers Navrang, Vijitha Yapa Bookshop.
- UNICEF
 (2011) *UNICEF ANNUAL REPORT for Sri Lanka- unite for children*. UNICEF
 (2013) *Country Study: Out-of-School Children in Sri Lanka, Summary Report*. UNICEF Sri Lanka.
 (2014) *Global Initiative on Out-of-School Children-South Asia Regional Study: All Children in School by 2015, covering Bangladesh, India, Pakistan and Sri Lanka*. 2014 UNICEF Regional Office for South Asia, Kathmandu
- UNDP (United Nations Development Programs)
 (1998) *National Human Development Report 1998 Regional, Dimensions of Human Development*. UNDP.
 (2006) *Human Development Report*. UNDP.
 (2007) Regional Dimensions of Development of Sri Lanka. *Sabaragamuwa University Journal*, 7(1):22-36 United Nations Development Programme (UNDP)
 (2010). *Human Development Report*. UNDP.
 (2012). Bridging Regional Disparities for Human Development. *Human Development Report*, UNDP.
 (2015). Achieving Development Results in Asia and the Pacific. *Annual Human Development Report*, UNDO
- United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization (UNESCO) .
 (2002). *Gender equality in Basic Education-Education for all*. UNESCO
 (2011). *World Data on Education. 7th edition, 2010/11*, UNESCO.
- Wal, S.V.D.
 (2008). *Sustainability Issues in the Tea Sector: A Comparative Analysis of Six Leading Producing Countries*. Amsterdam: SOMO.
- Wenzlhuemer, Roland.
 (2007a) Indian Labour Immigration and British Labour Policy in Nineteenth-Century Ceylon. *Modern Asian Studies*, 41 (3): 575-602, Cambridge University Press.
 (2007b) The Sinhalese Contribution to Estate Labour in Ceylon, 1881-1891. *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 41(3): 442-458. BRILL.
- Wickramasinghe, Nira.
 (2001) *Civil Society in Sri Lanka - New Circles of Power*. Colombo: Sage Publication.
- Williges, U.
 (2004) *Status of Organic Agriculture in Sri Lanka with Special Emphasis on Tea Production System*. Ph.D. thesis, University of Giessen.
- Wickramasinghe, A. D. and Cameron, D. C.
 (2003) Economies of scale paradox in the Sri Lankan Tea Industry: A Socio - Cultural Interpretation. *Perth, Western Australia, 16th International Farm Management Congress*, University of Queensland.

- Wickramasinghe, Anand Cameron, D.
 (2005) Human and Social Capital in the Sri Lankan Tea Plantations: A Note of Dissent. *Critical Management Studies Proceedings 4th International Critical Management Studies Conference*, University of Cambridge, Cambridge, UK, 4-6 July 2005.
- Wijesiriwardane, Panini and Amaranath, Sujeewa.
 (2009) Inadequate schooling in Sri Lanka's plantations. World Socialist Web Site April 17.
- World Bank.
 (1993) *The East Asian Miracle: Economic Growth and Public Policy*. World Bank Policy Research Reports. Oxford University Press.
 (2000) *Sri Lanka—Recapturing Missed Opportunities*. Report No. 20430-CE, Poverty Reduction and Economic Management South Asia Region, World Bank.
 (2005) Treasures of the Education System in Sri Lanka: Restoring performance, Expanding Opportunities and enhancing prospects. World Bank.
 (2007a) (2008) The Road Not Traveled- Education Reform in the Middle East and North Africa Executive Summary. *MENA Development Report*, World Bank.
 (2007b) Sri Lanka Poverty Assessment: Engendering Growth with Equity. World Bank.
 (2010) *The Challenge of Youth Employment in Sri Lanka*. Ramani Gunatilaka, Markus Mayer, Milan Vodopivec, World Bank.
- WTO and Labour Standards.
 (2004) Internationally recognised core labour standards in Sri Lanka. Report for the WTO general council review of the trade policies of Sri Lanka, *International Confederation of Free Trade Union*, Geneva.
- Yalman, Nur.
 (1971) *Under the Bo Tree: Studies in Caste, Kinship, and Marriage in the Interior of Ceylon*. University of California Press. The Regents of the University of California First Paperback Printing 1967.

謝 辞

本研究を遂行する上でご指導、ご鞭撻を頂いた東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学研究系国際協力学専攻(東洋文化研究所)の池本幸生教授に心より感謝申し上げます。池本教授には調査を遂行するにあたり、多くの教えを賜りました。

本論文をまとめるにあたり、東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学研究系国際協力学専攻の山路永司教授には暖かい激励とご指導、ご鞭撻を頂きました。山路教授には、2017年より指導教員をお引受け下さり、論文の構成から、書き方まで細かく指導くださるとともに、多くのご助言を賜り、感謝の気持ちを表す言葉もございません。

東京大学社会科学研究所石田浩教授におかれましては、筆者が博士課程を始める以前より、本研究の構想からデータ分析、論文作成に至るまで、終始一貫して暖かい励ましとご指導、ご助言を賜りました。深く心より感謝申し上げます。

学位論文審査において、貴重なご指導とご助言を頂いた東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学研究系国際協力学専攻の本田利器教授、鈴木綾准教授、坂本麻衣子准教授に心より感謝申し上げます。

実験の実施にあたり、ご指導を頂いた東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻の片山浩之准教授には心より感謝いたします。実験経験がない筆者に、飲料水の実験方法や実験する上での注意点など丁寧に教えてくださり、現地で適切に実験を行うことができました。また、同研究室の中川美和子様にも実験器具の扱方などのご助言を頂きましたこと、厚く御礼申し上げます。

本研究にあたり、コロンボ大学 W. A. Sajitha Dishanka 博士にはご助言を賜りました。深謝申し上げます。また、アフラシア文化社の草野孝久様には多文化共生に関するご助言を賜りました。心より感謝いたします。明治大学農学部 Ishwar Pun 研究員には学会発表や現地調査地域の地理学的情報取得方法などご助言を頂きました。こころより感謝申し上げます。スリランカ研究をされております鈴木睦子様から調査に先立ち現地の事情についてご教示を賜りました。ここに深謝の意を表します。東京大学社会学研究所の増田里香日本学術振興会特別研究員から、現地での助言や心温まる励ましを賜りました。深謝申し上げます。

現地調査にあたり、特定非営利活動法人パルシックの高橋智里様には民間農園、農家の人びとをご紹介いただくだけでなく、現地における調査のご支援も賜りましたこと心より感謝申し上げます。高橋様のご尽力なくして、現地調査は行えませんでした。また、特定非営利活動法人

パルシックのスタッフの方々にもご支援を頂きましたこと、厚く御礼申し上げます。また、デシルワ P.H.P 様、デシルワ順子様ご夫妻におかれましては、本研究の比較分析を行う上で重要な半公営農園を経営する企業のご紹介を賜りました。心よりに深謝の意を表します。

スリランカ統計局からは研究に必要なデータの提供を賜りました。厚く御礼申しあげるとともに、感謝申し上げます。

半公営農園での調査では各農園の管理者の方々にご配慮を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。特に Wasanthi Meegahawatte 様におかれましては、調査を遂行するに当たりご配慮を賜りました。心よりお礼申し上げます。また、調査地域におきましては、H.K Weerasena 様にはご自宅に宿泊させていただき、現地の習慣だけでなく、多くの方との交流の機会を賜りました。令夫人やご令嬢方にも度重なるご配慮を頂きました。K. Sarath 様には中小規模の民間農園を訪問するにあたり、調整役を務めてくださり、感謝申し上げます。

また、本研究におきましてアンケート調査及びインタビューにご協力くださいました世帯の皆様、行政官の皆様、教員の皆様、その他の多くの皆様にご心より感謝申し上げます。また、本調査にあたり通訳や調査補助をしてくださいました W.M Ajith Kumara Wijekoon 様、H.A.A.Y. Buddhika 様、A.B.K.T.K. Dilhan 様、W.C.M.S. Madushanka 様、Madu Basha 様、H.A Yasiru Buddhi Prabath 様にも深謝の意を表します。

また、池田貞雄氏には多大なるご支援を賜り、研究と仕事を両立することができました。心より感謝申し上げます。職場の同僚の皆様におかれましては、ご多用にもかかわらず筆者をご支援くださり、感謝の気持ちで一杯です。深謝の意を表します。そして、本研究のために惜しみなく支援くださいました各方面の関係者の方々と友人、研究の道を励まし合いながら共に学んだ学友たちに、心よりお礼をお申し上げます。

最後に、私事で恐縮ではありますが、いつも心の支えになってくれた家族や親戚に心から感謝します。

2019年1月

福田 祐子

付 録

1. 現地調査日程表

	日 程	調査対象		調査地域
調査地訪問	2013年 4月26日—5月13日	農園	ヌワエリヤ・ナトナブラ・ベルマドラ・デニヤヤ の農園地帯を訪問	
予備調査	2013年 8月3日-8月20日	半公営農園	2農園	デニヤヤ地域近郊
		民間農園	3農園	デニヤヤ・モロワカ地域
		農家	10世帯	キルウェラドラ キルウェラガマ
本調査	①2013年12月15日 -2014年1月14日 ②2014年 2月28日-年3月16日	半公営農園	5農園12区画 103世帯	デニヤヤ地域近郊
		民間農園	19農園100世帯	デニヤヤ・モロワカ地域
		農家	11農村 99世帯	キルウェラドラ キルウェラガマ デニヤヤ バティヤヤ
補足調査①	2014年 7月12日—7月28日	半公営農園	農園管理者 2名 ・RPC(D)(H) :同列系会社 ・RPC(A)(B)(E) :同列系会社 Child Development Officer (RPC(E)) 社会福祉士 2名 (RPC(D) & (E)) 学校教員(RPC(B))	デニヤヤ地域近郊
		(調査対象)農家 (調査対象外)農家	26世帯 Health Survery (2農家6名) Health Survery (57名)	キルウェラドラ キルウェラガマ
補足調査②	2014年12月23日 - 2015年1月11日	行政地区役場	5行政地区	Upper Millawa地区 Kiriwaldola地区 Kiriwalagama地区 Thanipita (RPC(D)) Kandilpana (RPC(E))
		学校	6校 ①シンハラ語(5校) ②タミル語(1校)	①キルウェラガマ デニヤヤ(3校) モロワカ ②RPC(B)内 PRC(H)近郊
		保健所	3箇所	キルウェラドラ RPC(D)近郊 PRC(E)近郊
補足調査③	2015年 7月22日-7月27日	農家	こども10名	キルウェラドラ キルウェラガマ
補足調査④	2016年 2月17日-29日	民間農園	12農園	
		農家	36世帯	
補足調査⑤	2017年 12月20日-12月31日	半公営農園	16ヵ所	キルウェラドラ キルウェラガマ デニヤヤ バティヤヤ モロワカ
		民間農園	15ヵ所	
		農家	20世帯	
		他	学校1校 デニヤヤ市内 1ヵ所 モロワカ水配給所 1ヵ所	

2. 調査票 (本調査) (2013年12月 - 2014年3月)

Section A: Family Detail: අ කොටස අ. පවුලේ තොරතුරු

○Name: නම ○Sex: ස්ත්‍රී / පුරුෂභාවය ○Age: වයස ○Education: අධ්‍යාපනය
○Income: ආදායම

A1. Ethnicity: ජන වර්ගය

1. Sinhala: සිංහල 2. Sri Lanka Tamil: ශ්‍රී ලාංකික දෙමළ 3. Indian Tamil: ඉන්දියානු දෙමළ
4. Sri Lanka Moors: ශ්‍රී ලාංකික මුවර් 9. Other: වෙනත්

A2. Religion: ආගම

1. Buddhist: බෞද්ධ 2. Hindu: හින්දු 3. Islam: ඉස්ලාම් 4. Christian: ක්‍රිස්තියානි
9. Other: වෙනත්

A3. Relationship: සම්බන්ධකම

1. Head: පවුලේ ප්‍රධානි 2. Spouse: කලත්‍රයා (බිරිඳ හෝ සැමියා) 3. Parents: දෙමාපියන්
4. Child: දරුවන් 5. Relatives: ඥාතීන්

A4. Documentations: ලියකියවිලි

1. Birth Certificate: උප්පැන්න සහතිකය 2. National ID Card: ජාතික හැඳුනුම් පත
3. Marriage Certificate: විවාහ සහතිකය 4. EPF/ETF: සේවක අර්ථසාධක අරමුදල හා සම්බන්ධ ලේඛන
5. Bank Account: බැංකු ගිණුම 6. Poll Card: ඡන්ද කාඩ් පත
7. Passport: ගමන් බලපත්‍රය 9. Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

A5. Occupation (Main Job): රැකියාව: (ප්‍රධාන)

1. Tea cultivator: තේ වැවිලිකරු 2. Paddy farmer: වී වැවිලිකරු
3. Tea plucker: තේ දළු නෙලන්නා/ නෙලන්නි 4. Factory worker: කර්මාන්තශාලා සේවක
5. Field maintain worker: බිම් නඩත්තු සේවක 6. Shopper: ගැනිලිකරු
7. Family worker: පවුලේ කටයුතු වලට උදව් කරන්නා 8. Driver: රියදුරු
9. Students: සිසු 10. Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

A5. Occupation (Part time job): රැකියාව: (අමතර)

1. Tea cultivator: තේ වැවිලිකරු 2. Paddy farmer: වී වැවිලිකරු
3. Tea plucker: තේ දළු නෙලන්නා/ නෙලන්නි 4. Factory worker: කර්මාන්තශාලා සේවක
5. Field maintain worker: බිම් නඩත්තු සේවක 6. Shopper: ගැනිලිකරු
7. Family worker: පවුලේ කටයුතු වලට උදව් කරන්නා 8. Driver: රියදුරු
9. Students: සිසු 10. Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

A7. Health: සෞඛ්‍ය තත්වය

1. Very Healthy (Energetic): ඉතා නිරෝගීයි (ශක්තිමත්)
2. Healthy (No problem on health): නිරෝගීයි (සෞඛ්‍යය පිළිබඳව ගැටළුවක් නැත)
3. Feel tired: වෙහෙසක් දැනෙයි 4. Sickness or Illness: අසනීපයි
5. Injuries: තුවාල ලබා සිටී 6. Other problems: වෙනත් ගැටළු තිබේ

A8. Living Place: ජීවත් වන ස්ථානය : 1. Home: නිවසේ 2. Outside home: නිවසෙන් පිට

Section B: Income & Expenditure: ආ කොටස: ආදායම සහ වියදම

B1. Do you receive any subsidies?: ඔබ යම් ආකාරයක සහනාධාර ලබන්නේද?

1. Samurdhi: සමෘද්ධි 2. Tea Shakti Fund: තේ ශක්ති පදනම
9. Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

B2. Source of household income per Month: නිවසේ මාසික ආදායම් මූලය

1. Tea farming: තේ වගාව Rs. _____ 2. Paddy farming: වී වගාව Rs. _____
3. Vegetable farming: එළවලු වගාව Rs. _____ 4. Dairy farming: කිරි ව්‍යාපාරය Rs. _____
5. Banana: කෙසෙල් වගාව Rs. _____ 6. Pepper: ගම්මිරිස් වගාව Rs. _____
7. Coconuts: පොල් වගාව Rs. _____
8. Salary from your employer: භාමිපුතාගෙන් ලැබෙන වැටුප Rs. _____
9. Part time job: අමතර Rs. _____ 10. Other: වෙනත් Rs. _____

B3. Category of household expenditure per Month: නිවසේ මාසික වියදම්

1. Alcohol: මධ්‍යසාර Rs. _____ 2. Food: ආහාරපාන Rs. _____
3. Clothes & Shoes: ඇඳුම් සහ සපත්තු Rs. _____ 4. Utilities: විදුලි, ජල, ගෑස් බිල් ආදිය Rs. _____
5. Transportation: ගමන් වියදම් Rs. _____ 6. Education: අධ්‍යාපනය Rs. _____
7. Health Care : සෞඛ්‍ය කටයුතු Rs. _____ 8. Saving: ඉතුරුම් Rs. _____
9. Telephone & Internet: දුරකථන සහ අන්තර්ජාල පහසුකම් Rs. _____
10. Wedding or funeral (Per Year) විවාහ උත්සව හෝ අවමංගල උත්සව (වසරකට) Rs. _____
11. Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න) Rs. _____

B4. Are you satisfied with your income? : ඔබගේ වැටුපෙන් ඔබ සැතීමට පත්වන්නේද?

YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

B5. Do you think your income is higher than average income in Deniyaya area?

ඔබගේ ආදායම දෙතියාය ප්‍රදේශයේ සාමාන්‍ය ආදායම් තත්වයට වඩා ඉහළ යයි ඔබ සිතන්නේද?

YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

B6. Did your household members obtain a loan during the last 12 months?:

පසුගිය මාස 12 ඇතුළත ඔබගේ නිවසේ සාමාජිකයින් ණය ලබාගත්තේද?

YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

B7. What was the main reason for your loan?: එම ණය ලබාගැනීමට මූලික හේතුව කුමක්ද?

1. To meet essential household expenditures (foods, clothes, education, etc):
එදිනෙදා ජීවිතයේ වියදම් සඳහා (ආහාරපාන, ඇඳුම්, අධ්‍යාපන ආදී)
2. To buy vehicles: වාහන මිලදී ගැනීම සඳහා
3. To purchase / remodel / repair / construct a house:
නව නිවසක් මිලදී ගැනීම/ නිවස අලුත්වැඩියා කිරීම/ නිවසක් ගොඩනැගීම සඳහා

- 4.To meet health related expenditure for household members (Medicine, Doctor or Hospital fees):
 නිවැසියන්ගේ සෞඛ්‍ය වියදම් පියවාගැනීම සඳහා (ඖෂධ, වෛද්‍යවරුන් සඳහා හෝ රෝහල් ගාස්තු)
- 5.To meet the following ritual expenditures (Birth, Funeral and Wedding):
 පහත දැක්වෙන වත් පිළිවෙත් වියදම් සඳහා (උපන්, මරණ හා විවාහ)
- 6.To open / increase business : නව ව්‍යාපාරයක් ආරම්භ කිරීමට හෝ තිබෙන ව්‍යාපාරයක් වැඩිදියුණු කිරීම සඳහා
- 7.To pay previous loan : පැරණි ණය පියවීම සඳහා 9.Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

B7.Where did the household obtain the loan?:

ඔබ/ ඔබගේ නිවසේ සාමාජිකයින් එම ණය ලබාගන්නේ කොහෙන්ද?

- 1.Banks (Government / Private) : බැංකුව (රාජ්‍ය/ පෞද්ගලික)
- 2.Money lenders : ණය ලබා දෙන්නෙක්ගෙන්
- 3.Sales assets (Land, House, Jewellries, etc.): වත්කම් විකිණීමෙන් (ඉඩම්, නිවාස, ආභරණ ආදිය)
- 4.Finance companies / Leasing companies : මූල්‍ය ආයතන/ බදු හෝ ණයදෙන ආයතන
- 5.Own place of work (Departments, Boards, Private companies etc.):
 තමා රැකියාව කරන ස්ථානය (දෙපාර්තමේන්තු, මණ්ඩල, පෞද්ගලික ආයතන ආදියෙන්)
9. Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

Section C: Housing Information: ඇ කොටස: නිවාස පිළිබඳ තොරතුරු

C1.Type of structure: නිවසේ ආකෘතිය

- 1.Single House : තනි නිවාස 2.Flat : ෆ්ලැට්
- 3.Attached house / Annex : සම්බන්ධිත නිවාස/ අනෙක්සි
- 4.Line room / Row house : ලයින් කාමර/ ජේලි නිවාස
- 5.Slum / Shanty : මුඩුක්කු
- 9.Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

C2.Owner of your dwelling: ඔබගේ නිවසේ අයිතිකරු

- 1.Owned : ඔබට අයිති
- 2.Provide free by employer : භාමිපුතා විසින් නොමිලේ ලබාදෙන ලද
- 3.Rent from private owner : පෞද්ගලික අයිතිකරුවෙක්ගෙන් කුලියට ගත් නිවාස
- 4.Rent from Government : රජයේ කුලී නිවාස 5.Public ownership : පොදු අයිතිය
- 6.Subsidized by employer : භාමිපුතා විසින් සහනාධාර ලබාදෙන ලද
- 9.Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

C3.How many rooms does the household occupy? : ඔබගේ නිවසේ කාමර කීයක් තිබේද?

C4.Do you want to own Line room? Why? YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

ඔබගේම ලයින් කාමරයක අයිතිය ලබාගැනීමට කැමතිද? ඔබ එසේ කැමති ඇයි ?

C5.Do you want to own a single house? Why? : ටනනි නිවසක හිමිකාරිත්වය දැරීමට ඔබ කැමතිද?

YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

C6.Principal Source of lighting : ආලෝකය ලබාගන්නා ප්‍රධාන ආකාරය

- 1.Electricity : විදුලි බලය 2.Kerosene oil : භූමි තෙල් 3.Solar energy : සූර්ය බලය
- 9.Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

C7.Principal Source of Cooking : කෑම පිසීමට ප්‍රධාන වශයෙන් භාවිත කරන්නේ

- 1.Fire wood : දර 2.Gas : ගෑස් 3.Kerosene oil : භූමි තෙල්
- 4.Electricity : විදුලි බලය 5.Saw dust / Paddy husk : ලී කුඩු / වී කුඩු
- 9.Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

C8.Principal Source of drinking water : පානීය ජල මූලය

- 1.Protected well : ආරක්ෂිත ලීඳ 2.Unprotected well : අනාරක්ෂිත ලීඳ
- 3.Tube well Tap (main line) : නළු ලීඳ (ප්‍රධාන මාර්ගය)
- 4.Stream water collected & distributed by pipe lines : නළු මගින් ලබාදෙන ගංගා ජලය
- 5.River / Tank / Streams : ගඟ/ වැව/ ඔය 9.Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

C9.Toilet facilities : වැසිකිළි පහසුකම්

- 1.Exclusive for the household : නිවසටම වෙන් වූ වැසිකිළියක් තිබේ
- 2.Sharing with other household : වෙනත් නිවෙස් හා එක්ව භාවිත කෙරේ
- 3.Public convenience : පොදු වැසිකිළිය
- 4.None : වැසිකිළියක් නැත 9.Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

C10.Does the household own any of the following items (Please circle if you have):

ඔබගේ නිවැසියන් සතුව පහත දැක්වෙන දේ තිබේද? (නිබේ නම් රවුම් කරන්න)

- 1.Motor car / Van : මෝටර් රථයක්/ වෑන් රථයක්
- 2.Motor cycle / Scooter : මෝටර් සයිකලයක්/ ස්කූටර් රථයක් 3.Bicycle : පා පදියක්
- 4.Three wheelers : ත්‍රිරෝද රථයක් 5.Bus / Lorry : බස් රථයක්/ ලොරියක්
- 6.Television : රූපවාහිනියක් 7.Radio / Cassette Player : රේඩියෝ/ කැසට් යන්ත්‍රයක්
- 8.Sewing machine : මහන මැෂිමක්
- 9.Washing machine : රෙදි සෝදන යන්ත්‍රයක් 10.Refrigerator : ශීතකරණයක්
- 11.Personal Computer : පරිගණක යන්ත්‍රයක් 12.Telephone (Domestic, Mobile) : දුරකථනයක් (ගෘහ/ ජංගම)
- 13.Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

C11.Do you want to have following items? (Please circle what you want):

පහත දැක්වෙන දේ ලබාගැනීමට ඔබ කැමතිද? (ඔබට අවශ්‍ය දේ රවුම් කරන්න)

- 1.Motor car / Van : මෝටර් රථයක්/ වෑන් රථයක්
- 2.Motor cycle / Scooter : මෝටර් සයිකලයක්/ ස්කූටර් රථයක් 3.Bicycle : පදියක්
- 4.Three wheelers : ත්‍රිරෝද රථයක් 5.Bus / Lorry : බස් රථයක්/ ලොරියක්
- 6.Television : රූපවාහිනියක් 7.Radio / Cassette Player : රේඩියෝ/ කැසට් යන්ත්‍රයක්
- 8.Sewing machine : මහන මැෂිමක් 9.Washing machine : රෙදි සෝදන යන්ත්‍රයක්
- 10.Refrigerator : ශීතකරණයක් 11.Personal Computer : පරිගණක යන්ත්‍රයක්
- 12.Telephone (Domestic, Mobile) : දුරකථනයක් (ගෘහ/ ජංගම)
13. shower room : නාන කාමරයක් 14.well protected water system : ආරක්ෂිත ජල පද්ධතියක්
- 15.Electric system : විදුලි පද්ධතියක් 16.Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

Section D Land Detail: ඉ කොටස ඉඩමේ විස්තර

D1. Who is the owner of your agriculture land?: ඔබගේ වගා ඉඩමේ අයිතිකරු කවුරුද?

- 1. Yourself : ඔබ
- 2. Your parents : ඔබේ දෙමව්පියන්
- 3. Rent from Government : රජයෙන් ණයට ගෙන ඇත
- 4. Rent from others : වෙනත් අයකුගෙන් ණයට ගෙන ඇත
- 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

D2. Total area of agricultural land (Acre): වගා ඉඩමේ සම්පූර්ණ විශාලත්වය (අක්කර)

- 1. Traditional Tea cultivation : සම්ප්‍රදායික තේ වගාව
- 2. Organic Tea cultivation : කාබනික (ඔගනික්)
- 3. NON Tea cultivation : තේ නොවන වෙනත් වගා : 1: Paddy: වී වගාව _____
- 2. Pepper: ගම්මිරිස් වගාව _____ 3: Banana: කෙසෙල් වගාව _____
- 4: Coconuts: පොල් වගාව _____ 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

D3. Tea Production : තේ නිෂ්පාදනය (මාසික)

- 1. Total amount of Traditional tea : සම්පූර්ණ සම්ප්‍රදායික තේ ප්‍රමාණය _____
Average price/Kg : කිලෝවක සාමාන්‍ය මිල _____
- 2. Total amount of Organic tea : සම්පූර්ණ කාබනික (ඔගනික්) තේ ප්‍රමාණය _____
Average price/Kg : කිලෝවක සාමාන්‍ය මිල _____

D4. Do you hire any workers for tea farming?: YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

තේ වගාව සඳහා ඔබ මුදලට වෙනත් අන් උදව්කරුවන් යොදාගන්නවාද?

D5. How many workers do you hire? එසේ යොදාගන්නේ නම්, කී දෙනෙක් ද?

D6. What is their ethnicity?: ඔවුන් කුමන ජන වර්ගයට අයත් ද?

- 1. Sinhala : සිංහල
- 2. Sri Lanka Tamil : ශ්‍රී ලාංකික දෙමළ
- 3. Indian Tamil : ඉන්දියානු දෙමළ
- 4. Sri Lanka Moors : ශ්‍රී ලාංකික මුවර්
- 9. Other: වෙනත්

D7. How many days do/did they work per week?:

ඔවුන් සතියකට පැය කීයක් වැඩ කරන්නේද? කළේද?

D8. How many hours do/did they work per day?:

ඔවුන් දිනකට පැය කීයක් වැඩ කරන්නේද? කළේද?

D9. How much wage do/did you pay per hour?:

ඔබ ඔවුන්ට කොපමණ වේතනයක් ලබාදුන්නේද (පැයකට)?

D10. Do they have other main job? What it is?:

ඔවුන්ට වෙනත් ප්‍රධාන රැකියාවක් තිබේද? එසේ නිබේ නම් කුමක්ද?

Perception of Living Conditions: ජීවන තත්වය පිළිබඳ අදහස්

E1. Are you satisfied with your living?: ඔබගේ ජීවන තත්වය පිළිබඳව ඔබ සැහීමට පත්වී සිටින්නේද?

- 1. Very Satisfactory : ඉතා සැහීමට පත්ව සිටිමි
- 2. Satisfactory : සැහීමට පත්ව සිටිමි
- 3. Would like to improve : තවත් දියුණු කරගැනීමට කැමතියි
- 4. Hard : සැහීමට පත්වීමට අපහසුයි

E2. Is your current living better than 5 years ago?:

ඔබගේ වර්තමාන ජීවන තත්වය දැනට වසර 5 කට පෙර තත්වයට වඩා දියුණු වී ඇත්ද?
1. Better : දියුණු වී ඇත

2. Same : වෙනසක් නැත

3. Worse : අයහපත්

E3. Is your current living better than 10 years ago?:

ඔබගේ වර්තමාන ජීවන තත්වය දැනට වසර 10 කට පෙර තත්වයට වඩා දියුණු වී ඇත්ද?
1. Better : දියුණු වී ඇත

2. Same : වෙනසක් නැත

3. Worse : අයහපත්

E4. Do you think your living is better than average in Deniyaya area? YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

දෙතියාය ප්‍රදේශයේ සාමාන්‍ය ජීවන තත්වය හා සසඳා බලන විට ඔබගේ ජීවන තත්වය හොඳ යයි ඔබ සිතන්නේද?

E5. Are you satisfied with the medical system at estate or town?

ඔබගේ නගරයේ හෝ වත්තේ වෛද්‍ය ක්‍රමය පිළිබඳව ඔබ සැහීමට පත්වන්නේද?

1. Very Satisfactory : ඉතා සැහීමට පත්ව සිටිමි

2. Satisfactory : සැහීමට පත්ව සිටිමි

3. Would like to improve : තවත් දියුණු කරගැනීමට කැමතියි

4. bad : සැහීමට පත්වීමට අපහසුයි

E6. What is the problems of medical system?: වෛද්‍ය ක්‍රමයේ ඔබ දකින ගැටළු මොනවාද?

E7. Did you want to have more education? : YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

ඔබට තව දුරටත් අධ්‍යාපනය හැදෑරීමට අවශ්‍යතාවය තිබුණේද?

E8. If yes, Why do you think so?: එසේ අවශ්‍ය වූණේ ඇයි?

I could have had more: මට තවත් අවස්ථාවන් හෝ පහත සඳහන් දේ ලබාගැනීමට හැකියාව තිබිණි

1. Chances to choose jobs : රැකියාවන් තෝරාගැනීමට අවස්ථා

2. Chances to have promotion : රැකියාවේ උසස්වීම් ලබාගැනීමේ අවස්ථා

3. Chances to enjoy life : ජීවිතය සතුටු වීමට අවස්ථා

4. Knowledge to manage family finance : පවුලේ මූල්‍ය කටයුතු කළමනාකරණය කරගැනීමේ දැනුම

5. Knowledge on sanitation : සනීපාරක්ෂාව පිළිබඳ දැනුම

6. Knowledge to advice children on Education or Jobs :

අධ්‍යාපනය හෝ රැකියාව පිළිබඳ දරුවන්ට උපදෙස් ලබාදීමේ හැකියාව

7. Knowledge on solving family issues : පවුලේ ප්‍රශ්න විසඳාගැනීමේ හැකියාව

8. Contributions to society : සමාජයට දායකත්වයක් ලබාදීමේ හැකියාව

9. Contribution to my work or estate : මගේ රැකියාව හෝ වත්තේ කටයුතු වලට දායකත්වය ලබාදීමට අවස්ථා

අවස්ථා

10. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

E9. What jobs did you want to do when you?

ඔබ ළමා කාලයේදී කුමන රැකියාවක් කිරීමට කැමැත්තෙන් සිටියේද?

E10. If could not be what you wanted, why not? :

නොඑසේ නම්, ඔබට එම තත්වයට යාමට නොහැකි වූයේ

1. Financial Problem : මූල්‍ය ප්‍රශ්න

2. Need to take care of family : පවුලේ කටයුතු නිසා

3. Not enough education or skill : අවශ්‍ය තරම් අධ්‍යාපන සුදුසුකම් හෝ හැකියාවන් නොතිබුණු නිසා

4. Don't know how to find a way : ඒ සඳහා මාර්ගයක් සොයාගන්නේ කෙසේද යන්න නොතේරුණු නිසා

- 5. None help : ඒ සඳහා උපකාරයක් නොලැබුණ නිසා
- 6. Caste issue : කුලයේ ගැටළුවක් නිසා
- 9. No nationality at that time : ඒ වන විට ජාතිකත්වයක් ලැබී නොතිබුණු නිසා
- 8. Political problem : දේශපාලන ප්‍රශ්න
- 10. Estate does not allow : වත්තේ පාලනාධිකාරය එයට ඉඩ නොදුන් නිසා.
- 11. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

☆Job Opportunity : රැකියා අවස්ථා

E11. Are you satisfied with your job? : ඔබ ඔබගේ රැකියාව පිලිබඳ සැහීමට පත්වන්නේද?

- 1. Very Satisfactory : ඉතා සැහීමට පත්ව සිටීම
- 2. Satisfactory : සැහීමට පත්ව සිටීම
- 3. Would like to improve : තවත් දියුණු කරගැනීමට කැමතියි
- 4. bad : සැහීමට පත්වීමට අපහසුයි

E12. How many days do you work per week? : ඔබ සතියකට දින කීයක් වැඩ කරන්නේද?

E13. Do you feel hard to work all day? : YES(ඔව්) / NO(නැහැ)
මුළු දවස පුරාම වැඩ කිරීමට අපහසු යයි සිතෙන්නේද?

E14. Do you want to change your job? : ඔබට රැකියාව මාරු කිරීමට අවශ්‍යද? YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

E15. What do you like to do if you could change? :
එසේ මාරු කිරීමට හැකි නම්, ඉන් අනතුරුව කරන්නට කැමති කුමක්ද?

E16. Did you have a chance to choose your job? : YES(ඔව්) / NO(නැහැ)
කැමති රැකියාවක් තෝරාගැනීමට ඔබට හැකියාව තිබුණේද?

E17. If yes, Why do you think so? : එසේ අවස්ථාවක් තිබුණා යයි ඔබ සිතන්නේ ඇයි ?

- 1. Enough Education or Skills : අවශ්‍ය තරම් අධ්‍යාපන සුදුසුකම් සහ හැකියාවන් තිබෙන නිසා
- 2. Enough financial support from family : පවුලේ අයගෙන් මුල්‍යමය සහයෝගය තිබුණු නිසා
- 3. Someone's support : වෙනත් අයෙකුගෙන් සහයෝගය ලැබුණු නිසා
- 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

E18. If NO, why not? : එසේ අවස්ථාවක් නොතිබුණේ නම්, ඒ ඇයි ?

- 1. Not enough education or knowledge or skills : අවශ්‍ය තරම් අධ්‍යාපනය, දැනුම හෝ හැකියාවන් නොමැති නිසා
- 2. Financial problem : මුල්‍ය ගැටළු
- 3. Not enough information : අවශ්‍ය තරම් තොරතුරු නොලැබුණු නිසා
- 4. Afraid of going outside the home : නිවසින් ඉවතට යාමට බය නිසා
- 5. Never thought about choosing jobs : රැකියාවන් තෝරාගැනීම ගැන කවදාවත් සිතා නැති නිසා
- 6. Caste : කුලය නිසා
- 7. Ethnicity : ජන වර්ගය නිසා
- 8. No documents : අවශ්‍ය ලියකියවිලි නැති නිසා
- 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

E19. Do you want to promote your status? : ඔබගේ තත්වය ඉහළ නංවාගැනීමට ඔබට අවශ්‍යද?
YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

E20. If YES, why? : එසේ අවශ්‍ය නම්, ඒ ඇයි?

- 1. Money : මුදල් ලැබෙන නිසා
- 2. Having power : බලය ලැබෙන නිසා
- 3. Receiving respect from others : අනෙකුත් අයගෙන් ගෞරවය ලැබෙන නිසා
- 4. Having dignity : අභිමානය ලැබෙන නිසා
- 5. Getting self-confidence : ආත්ම විශ්වාසය ඇතිවන නිසා
- 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

E21. If Not, why not? : එසේ අවශ්‍යතාවක් නැතිනම්, ඒ ඇයි ?

- 1. No chance to promote : ඒ සඳහා අවස්ථාවක් නැති නිසා
- 2. Not enough education : අවශ්‍ය තරම් අධ්‍යාපනයක් නොමැති නිසා
- 3. Not enough skills or knowledge : අවශ්‍ය තරම් හැකියාවන් සහ දැනුම නැති නිසා
- 4. Other workers do not follow me : අනෙකුත් සේවකයන් මා කියන දේට ඇහුම්කන් නොදෙන නිසා
- 5. Estate not gives me a chance : වත්තේ පාලනාධිකාරය එයට ඉඩ නොදුන් නිසා
- 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

E22. If no working, why not seeking a job? :

ඔබ රැකියාවක් නොකරන්නේ නම්, එසේ නොකරන්නේ ඇයි ?

- 1. Discouraged to get a job : රැකියාවක් ලබාගැනීමට උනන්දුවක් නැති නිසා
- 2. No suitable work available : ගැළපෙන ආකාරයේ රැකියාවක් නැති නිසා
- 3. Has no skills or training : අවශ්‍ය හැකියාව සහ පුහුණුව නැති නිසා
- 4. Engaged in house work : නිවසේ වැඩ කටයුතු තිබෙන නිසා
- 5. Engaged in studies : ඉගෙනීමේ නිරතව ඉන්න නිසා
- 6. Retired or unable to work : විශ්‍රාමික හෝ වැඩ කිරීමට නොහැකි නිසා
- E9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

E23. Do you want to work more than the fixed amount of work? : E24. Why: ඒ ඇයි?
නියමිත ප්‍රමාණයට වඩා වැඩි ප්‍රමාණයක් වැඩ කිරීමට ඔබ කැමතිද ? YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

E25. For improving the amount of plucking, what is necessary for you? :

නෙලන දළ ප්‍රමාණය වැඩි කරගැනීමට ඔබට අවශ්‍ය මොනවාද?

- 1. Need to improve soils and bushes : පස සහ පළුරු වැඩිදියුණු කිරීමට අවශ්‍යයි
- 2. Change the place to collect leaves : දළ එකතු කරන ස්ථානය වෙනස් කිරීමට අවශ්‍යයි
- 3. Reduce the long cue to check the amount of leaf : කැපු නේ දළ ප්‍රමාණය පරීක්ෂා කිරීමට ඇති දිග පෝලීම අඩු කළ යුතුයි
- 4. Making the walking street between bushes for easy plucking : පහසුවෙන් දළ කැඩීමට හැකිවන සේ පළුරු අතරින් පාරක් සෑදිය යුතුයි
- 5. Providing shoes : පාවහන් ලබාදිය යුතුයි
- 6. Providing or eating lunch at the plucking place :
නේ දළ කඩන ස්ථානයේදී දහවල් කෑම ගැනීමට හෝ ලබාදීමට පහසුකම් සලසා දිය යුතුයි
- 7. Communication with boss : ප්‍රධානියා සමඟ සාකච්ඡා කළ යුතුයි
- 8. Respect from boss or field manager : ක්ෂේත්‍ර කළමණාකාරවරයා හෝ ප්‍රධානියාගෙන් ගෞරවය ලැබිය යුතුයි
- 9. Improving working conditions : වැඩ කරන පරිසරය වැඩිදියුණු කළ යුතුයි

★Life & Society: ජීවිතය සහ සමාජය

E26.Can you express your opinion to : ඔබට ඔබගේ අදහස් හෝ යෝජනා පහත සඳහන් අයට පැවසිය හැකිද?

If Yes, Please circle. ඔබගේ පිළිතුර ‘ඔව්’ නම්, අදාළ අංකය රවුම් කරන්න.

- | | |
|--|---|
| 1.Kanganice : කන්කානම් මහතා | 2.Field Officer : ක්ෂේත්‍ර නිලධාරී මහතා |
| 3.Welfare Officer : සුභ සාධන නිලධාරී මහතා | 4.Midwife : වින්නශ්‍රී මාතාව |
| 5.Factory worker : ෆැක්ටරියේ සේවකයන් | 6.Assistant manager : උප කළමනාකාර මහතා |
| 7.Estate manager : වත්තේ කළමනාකාර මහතා වෙත කීමට හැකිද? | |

E27.For having a good life, what is important for you?

යහපත් ජීවිතයක් ගෙන යාම සඳහා, ඔබ වැදගත් යැයි සලකන්නේ මොනවාද?

- | | |
|--|--|
| 1.Respect from others : වෙනත් අයගෙන් ලැබෙන ගෞරවය | 2.Self-confidence : ආත්ම විශ්වාසය |
| 3.Belong to the community : ප්‍රජාවට අයත් වීම | 4.Family : පවුල |
| 5.Education : අධ්‍යාපනය | 6.Promotion : රැකියාවේ උසස්වීම |
| 7.Good Job : හොඳ රැකියාවක් | 9. Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න) |

E28.Do you think you have freedom to choose your life such as in below?:

ජීවිතයේ පහත දැක්වෙන අවස්ථාවලදී, තෝරාගැනීමේ නිදහස ඔබට තිබේ යයි ඔබ සිතන්නේද?

- | | |
|---|---|
| 1. School : පාසැල | 2.Educational Level if you have ability: ඔබට හැකියාව ඇත්නම්, අධ්‍යාපන මට්ටම |
| 3. Jobs : රැකියා | 4. Marriage: විවාහය |
| 5.Going outside your village: ඔබගේ ගමෙන් පිටතට යාම | |
| 6. Living outside your village: ගමෙන් පිටත ස්ථානයක ජීවත් වීම | |
| 7. Express your opinion: ඔබගේ අදහස් ප්‍රකාශ කිරීම | |
| 8. Join in Social activity outside your village: ඔබගේ ගමෙන් පිටත සමාජ ක්‍රියාකාරකම්වලට සම්බන්ධ වීම | |
| 9. Interacting with those who in the city: නගරයේ ජීවත් වන අය සමඟ අන්‍යෝන්‍ය ක්‍රියාකාරකම් වල නිරත වීම | |
| 10.Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න) | |

E29.Do you have any dreams now? : ඔබට යම් සිහිනයක්, ඉදිරි බලාපොරොත්තුවක් තිබේද?

E30.What is your dream? : තිබේ නම් එම සිහිනය, බලාපොරොත්තුව කුමක්ද?

E31.Does your caste affect on your freedom of choice such as in blow?:

පහත දැක්වෙන අවස්ථාවලදී, නිදහස් ව කටයුතු කිරීම කෙරෙහි ඔබගේ කුලය බලපාන්නේ යැයි ඔබ සිතන්නේද?

- | | |
|---|--|
| 1.School choice: පාසලක් තෝරාගැනීම | 2.Educational opportunity: අධ්‍යාපනයට ඇති අවස්ථා |
| 3.Jobs chances: රැකියා අවස්ථා | 4.Marriage: විවාහය |
| 5.Living area: ජීවත් වන ප්‍රදේශය | 6.Express your opinion: අදහස් ප්‍රකාශ කිරීම |
| 7.Interaction outside your community: ඔබගේ ප්‍රජාවෙන් පිටත අන්‍යෝන්‍ය ක්‍රියාකාරකම්වල යෙදීම | |
| 8.Foods: ආහාරපාන | 9.Clothes: ඇඳුම් |
| 10.House: නිවාස | 11. Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න) |

E32.If you join in social activity, why?: ඔබ සමාජයීය ක්‍රියාකාරකම්වල යෙදෙන්නේ නම්, එසේ යෙදෙන්නේ ඇයි?

- | | |
|--|---------------------------------|
| 1.Important for family: පවුලට එය වැදගත් නිසා | 2.Obligation: එය වගකීමක් බැවින් |
| 3.Help each other: එකිනෙකාට උදව් කළ යුතු බැවින් | |
| 4.Religious reason (Believe it): ආගමික හේතුවක් නිසා (ඒ පිළිබඳ විශ්වාසයක් ඇති නිසා) | |
| 5.Sharing Information: තොරතුරු හුවමාරු කරගැනීමට | |
| 6.Avoid isolation from the community: ප්‍රජාවෙන් කොන්වීමට ලක්වන නිසා | |
| 9. Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න) | |

TIME Spending : කාලය ගත කිරීම (විවේක කාලය ගත කරන ආකාරය)

- | | |
|--|--|
| 1.Tea cultivation: තේ වගාව | 2.Paddy Farming: වී වගාව |
| 3.Other Crops Farming: වෙනත් හෝඟ වර්ග වගා කිරීම | 4.Caring live Stocks: සත්ව පාලනය |
| 5.Making fertilizer: පොහොර සෑදීම | 6.Sleep: නිදාගැනීම |
| 7.Eating Meals: ආහාර ගැනීම | 8.Taking care of children: ළමයින් බලාගැනීම |
| 9.Cleaning House: නිවෙස පිරිසිදු කිරීම | 10.Washing Clothes: රෙදි සේදීම |
| 11.Making Meals: කෑම පිසීම | 12.Watching TV: රූපවාහිනී නැරඹීම |
| 13.Getting water: වතුර ගෙන ඒම | 14.Firewood: දර ගෙන ඒම |
| 15.Shopping: කඩේ යාම | |
| 16.Construction or Repairing: නිවස හෝ යම් ගොඩනැගිල්ලක් සෑදීම | |
| 17.Other Activities: මිතුරන් සමඟ කාලය ගත කිරීම | |
| 18.Being with friends: මිතුරන් සමඟ කාලය ගත කිරීම | |
| 19.Being with farmers: වෙනත් ගොවියන් සමඟ කාලය ගත කිරීම | |
| 20.Attending meetings: රැස්වීම්වලට යාම | |
| 21.Joining in religious activities: ආගමික කටයුතුවල යෙදීම | |
| 22.Social activities: සමාජ කටයුතුවල යෙදීම | |

Perception of Children දරුවන් පිළිබඳව

F1.Are you satisfied with children school in blow? :

ඔබගේ දරුවන්ගේ පාසැල සම්බන්ධ පහත සඳහන් දේ පිළිබඳව ඔබ සැහීමට පත්වන්නේද?

- | | |
|--|--|
| 1.Facilities: පහසුකම් | 2.Distance from home: නිවසේ සිට පාසලට ඇති දුර |
| 3.Time from home: නිවසේ සිට පාසැල දක්වා ගතවන කාලය | |
| 4.Transportation from home: නිවසේ සිට පාසැල දක්වා ප්‍රවාහන පහසුකම් | |
| 5.School hours: පාසැල් කාල වේලාව | 6.Quality of teachers: ගුරුවරුන්ගේ ගුණාත්මක භාවය |
| 7.Contents of class: පන්තියේ උගන්වන දේ පිළිබඳව | 9. Other(Specify): වෙනත් (සඳහන් කරන්න) |

F2.Do you have any complaints about school? : බට පාසැල පිළිබඳව පැමිණිලි කිබේද?

YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

F3.Do you think Education is important for her/him? Why? YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

ඔබගේ දරුවාට අධ්‍යාපනය වැදගත් දෙයක් යැයි ඔබ සිතන්නේද? එසේ සිතන්නේ ඇයි?

F4.What grade is necessary for your child?: ඔබගේ දරුවා කුමන ශ්‍රේණියට ඇතුළත් කළ යුතු යයි ඔබ සිතන්නේද?

1.Grade (ශ්‍රේණිය)_____ 2.College/ University: පාසැල/ විශ්ව විද්‍යාලය

F5.Distance to school from home: නිවසේ සිට පාසැල දක්වා ඇති දුර

- (1)Less than 1 km (කි. මී. 1 කට අඩුයි) (2)1km < 3km (3)3km<5km (4)5km<10km
- (5)10 km or more than 10 km (කි.මී. 10 හෝ ඊට වැඩි)

F6.How does he/she go to school?: ඔබගේ දරුවා පාසලට යන්නේ කෙසේද?

- 1.Walking: පයින් 2.Bicycle : බයිසිකලයෙන්
- 3.Motor bicycle / Three wheeler / Car : මෝටර් බයිසිකලයෙන්/ ත්‍රිරෝද රථයෙන්/ කාර් එකෙන්
- 4.Bus / Train : බස් රථයෙන්/ කෝච්චියෙන්, 5.School Van : පාසල් වෑන් රථයෙන්
- 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

F7.How long does it take from home to school? : නිවසේ සිට පාසැල දක්වා කොපමණ වෙලාවක් ගත වේද?

- (1) Less than 15 min (විනාඩි 15කට වඩා අඩුයි) (2)15 min to less than 30 min(විනාඩි 15ත් 30ත් අතර)
- (3)30 min to less than 45 min (විනාඩි 30ත් 45ත් අතර).
- (4)45 min to less than 60 min(විනාඩි 45ත් 60ත් අතර)
- (5).more than 60 min (විනාඩි 60කට වඩා) (9) Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

F8.If takes 60 min or More, why?: විනාඩි 60කට වඩා ගතවන්නේ නම්, එයට හේතුව කුමක්ද?

- 1.Bad condition of the road : පාර අබලන් වී තිබීම
- 2.Up and down of the road : කඳු නැගීමට හා පල්ලම් බැසීමට සිදුවීම 3.Long distance : දුර වීම
- 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

E9.Does s/he go to the additional school?: ඔබේ දරුවා අමතර පන්ති යනවාද?
YES(ඔව්) / NO(නැහැ)

E10: If Yes, Why?: එසේ යන්නේ ඇයි?

- 1.Go to College/University : උසස් පාසලට / විශ්ව විද්‍යාලයට යාම සඳහා
- 2.For having a good grade : හොඳ ප්‍රතිඵල ලබාගැනීමට 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

E11.Did he/she miss any school days during the last Semester? : YES(ඔව්) / NO(නැහැ)
පසුගිය පාසල් වාරය තුළ ඔබේ දරුවාට පාසල් යාමට නොහැකි වූ දින කිබුණාද?

E12.How many days did s/he miss?: දින කීයක් පාසැල පාඩු වුණාද?

E13.What were the main reasons?: : ඊට ප්‍රධාන හේතු මොනවාද?

- 1.Teacher was absent : ශුරුවරයා නොපැමිණීම 2.Bad weather conditions : අයහපත් කාලගුණය
- 3.To help family business : පවුලේ ව්‍යාපාරයට උදව් කිරීමට සිදුවීම
- 4.To help at home with housekeeping activities : නිවසේ කටයුතු වලට උදව් වීමට සිදුවීම
- 5.Illness / Injury / Disablement : අසනීප වීම/ තුවාල වීම/ අබාධිත වීම
- 6.Awaiting G.C.E. (O/L) results :
අ.පො.ස. සාමාන්‍ය පෙළ විභාගයේ ප්‍රතිඵල බලාපොරොත්තුවෙන් සිටින්නට සිදුවීම
- 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

E14.What kinds of Job do you want s/he will do in future? :

ඔබගේ දරුවා අනාගතයේ කුමන ආකාරයේ රැකියාවක් කරනවාට ඔබ කැමතිද?

E15.What do you prefer s/he to be doing now?: ඔබේ දරුවා වර්තමානයේ කුමක් කරනවාට ඔබ කැමතිද?

- 1.Work for income only : මුදල් ඉපයීම සඳහා පමණක් වැඩ කිරීම
- 2.Assist family business : පවුලේ ව්‍යාපාරයට උදව් කිරීම
- 3.Assist with housekeeping activities : නිවසේ වැඩවලට උදව් කිරීම
- 4.Attend school only : පාසල් යාම පමණක් කිරීම
- 5.Attend school and assist with family business : පාසල් යන අතර පවුලේ ව්‍යාපාරයට උදව් කිරීම
- 6.Attend school and assist with households activities : පාසල් යන අතර නිවසේ වැඩවලට උදව් කිරීම
- 7.Combine work for income and schooling : මුදල් ඉපයීමට වැඩ කිරීම සහ පාසල් යාම
- 9. Other(Specify) : වෙනත් (සඳහන් කරන්න)

3. 予備調査 (2013年4月26日-5月13日)

Perception of Children

ID

1. Name : 2. Age 3. Sex Male / Female 4. Education Level
5. Where does s/he live if s/he is not with you.....

6: What is the distance to school which he/she currently attending

- Less than 1 km1
 1 km to less than 3 km2
 3 km to less than 5 km3
 5 km to less than 10 km4
 10 km or more than 10 km5

7: How does he/she go to school?

- Walking1.
 Bicycle2
 Motor bicycle /
 Three wheeler / Car3
 Bus / Train4
 School Van5
 Other6

8: How long does it take from home to school?

- Less than 15 min-----1
 15 min to less than 30 min-----2
 30 min to less than 45 min -----3
 45 min to less than 60 min-----4
 60 min or more than 60 min-----5

9: If takes 60 min or More, why?

- Bad condition of the road-----1
 Up and down of the road-----2
 Long distance-----3
 Other-----4

10: Does s/he go to the additional school?

- Yes-----1 No-----2

If yes, why ?

- Go to College/University-----1
 For having a good grade-----2
 Other-----3

If other, please specify.

11: Did he/she miss any school days during the last month?

- Yes-----1 No-----2

How many days did s/he miss?

_____ days

12 :What are the main reason he/she did not attend school during the last week?

- Teacher was absent1
 Bad weather conditions2
 To help family business3
 To help at home with housekeeping activities
 Illness / Injury / Disablement4
 Awaiting G.C.E. (O/L) results5
 Other (Specify)6

13: Has he/she ever attended school? What is the main reason he/she has never attended school ?

- Disabled / Illness1
 School too far away2
 Financial problems3
 Not interested in school / poor academic progress....4
 Education not considered valuable5
 School not safe / Civil disturbance6
 To learn a job7
 To work for pay as employee or as own account worker or as unpaid family worker in family business.....8
 Help at home with housekeeping activities9
 Other10

4. 補足調査(2014年7月12-28日)

(4-1) 世帯主

Additional Households Survey

※How long your family lived in this estate?

※Why do you decide to work for this estate?

※How many estates do you worked before?

※What were the reasons for shifting a new estate?

※Can you go out anytime outside of estate?

What limitations?

※Can anyone come to your house anytime from outside of estate?

What limitations? If they stay couple of days should informed to estate.

1. Social Freedom:

1. Do you satisfy your children social status in states? Reasons:
2. Do you have a freedom to your religious or social activities?
3. Do you think your ethnicity or religion negatively affected children's present life status? Reasons:
4. Do you think caste negatively affect children's human development? How?
5. Have your children ever faced social neglect because of their cast or ethnicity?
6. Do your children have a freedom to choose of followings:
 - Believe and follow any religion as you like: Yes / No
 - Speak: Yes / No
 - Join social activities: Yes / No
 - Access to education: Yes / No
 - Access to Medical care or Hospital: Yes / No
 - Choose occupation: Yes / No
 - Choose life partner: Yes / No
 - Visit any places of country: Yes / No
 - Live in any areas of country: Yes / No
7. How often does your family visit outside of province in the last year?

2. Health

1. How distance between your house and nearest hospital is? Yes / No
2. Can you get free vaccinations for your children? Yes / No
Vaccination's Name:
3. Are you satisfied about midwifery service in your area? Yes / No
※ What kind of service they provide?
 - Vaccination to baby and mother
 - Monitoring pregnancy and nutrition of mother and baby
 - House visits
 - Giving family health advices
 - Other.....
4. What are the main problems of medical system in your area?

3. Education

1. How distance between your house and nearest school is?
2. How education is important for children's future life?
3. Do you satisfy education facilities in your area?
Reasons to your answer? :
4. How much do you spend on education? For what;
5. Which school do you want to go, Sinhala or Tamil school?
6. Can children choose their preferable school or not? Reasons;
7. Do your children enjoy school or not? Reasons:
8. What are main issues in your children school or education?
9. What are main problems your children face to get good education?

4. Life in Estate

1. Do you think children should support to family income? Reasons:
2. Do you think both mother and father working affect children's life? How
3. What factors do obstruct children's dreams?

(4-2) 半公營農園管理者

Estate Manager

1. Management System:

(1) What are your strategies to manage the estate?

2. Human Resource:

(1) How many people in one family can you hire?

(2) How can you decide who work for factory or who work for plucking?

(3) Do you have any regular meetings with estate union or estate workers? Yes / No

(4) Are there any restrictions to change worker's line rooms? Yes / No

(5) Are there any activities does your estate have been taken for developing children education?

3. Can anyone from outside of estate visit or stay in a line room? Yes / No

4. What are main problems of workers for estate?

5. Do you think estate worker can be independent outside of estate? Yes / No

6. Others

(4-3) Child Development Officer

Child Development Officer

1. How many hours do you spend with children per day? From.....to.....

2. What age of children has been in your day care? And how many children in a day?

3. Are there any curriculums for day care education? If yes, what is that?

4. What are the main current issues estate children faced?

5. How is level of children nutrition in estate?

6. Are there any child abuse incidence happened in your estate in recently?

7. What are the main health and sanitary issues which children faced?

8. Do you receive enough funds for maintaining day care from estate?

9. Are there any suggestions for developing children education, health and quality of life? .

(4-4) 社会福祉士

Welfare officer

1. Housing

- (1) How many rooms do each line-room has?
- (2) Who can stay in line-room?
- (3) If lack of line-room, how do you allocate the house to workers?
- (4) Any financial support if workers live in outside of estate?
- (5) Do you have any plans to provide a single house to workers?

2. Life in Estate

- (1) Are there any supports in below for workers?
 - ※Marriage: Pay day off days • Subsidies Rs • Other
 - ※Funeral: Pay day off days • Subsidies Rs • Other
 - ※Child Birth: Pay day off days • Subsidies Rs • Other
 - ※Medical check:
 (Content)
 - ※Child Support:
- (2) Who does deal with living condition issues in estate?
 - ※What kinds of problems in living condition do workers have?
- (3) How they can get food? Vegetable:
 Fish:
 Meat:
- (4) Are there any curfew? If yes, why need curfew?

3. Health

- (1) How many days in a week does medical center open? days/w
 How long does medical center open?
 How many staffs are working for medical center?
- (2) Are there any medical programs which concerning children health?
 If yes what are they?

- (3) Do you satisfy about parent's involvement and attitudes for children education?
- (4) What are the main health and sanitary issues which children faced?
- (5) If family has many children, does estate give a free operation?
 If yes, how many children does family have?

4. Education

- (1) Does estate provide any education to children (5-17 years old)? Yes
 If yes, what kinds of education?
 *Vocational education *Computer literacy *English literacy
 *Other
- (2) What kinds of supports does estate provide for maintaining children education?
- (3) How distance is between your estate and the nearest school? 01 Km.
- (4) What kinds of support does estate offer to school age children?
- (5) Does family or children can choose the school?
- (6) Do you satisfy about parent's involvement and attitudes for children education?

5. Safety

- (1) What are main issues for children's and female's safety in estate?
- (2) Are there any child abuse incidence happened in your estate in recently?
- (3) What are the main current issues estate children faced?

6. Your ideas

Are there any suggestions for developing children education, health and quality of life?

School Information

1. How long have you been working in this school?

- (1) How long do teachers work in this school?
- (2) How many teachers are required for your school?
- (3) Are there any teacher shortage? If yes how many?
Which subjects?

- (4) How many voluntary teachers in school?
 - ① If they are, what qualification does your school require?
 - ② How much does your school pay to them? Parents

2. School Information

- (1) Which administration control your school?
 - How many students:
 - How many grades are conducted:
 - Science laboratories:
 - Computer labs:
 - Play ground or Sport unit:

3. Access to Education

- (1) To start school or enroll, what documents do children need?
- (2) If they don't have necessary documents, can children not go school?
Any solution:
- (3) Can children choose their preferable school?
- (4) If students have some difficulties to understand language, is there any special program?

- (5) How many students were participated in following exams and how many passed in last year?

	Participation	Passed
--	---------------	--------

- Grade 5 certificate examination
- Grade 11 GCE O/L examination
- Grade 13 GCE a/L examination
- How many students were passed to university?

- (6) How much students should pay for followings per year?

I: School development fees:	II: Facilities fees:
III: Maintenance, Electricity, and repair:	IV: Other fee:

- (7) Do you satisfy about the level of education in this area?

Reasons:

4. Access to medical

- (1) Are there any medical clinic/ program in school?
- (2) Are there any accident happened on student during school time?
- (3) How far is the nearest hospital?
- (4) Are there any psychological counseling programs for students in school?
- (5) Are there any special training programs on teacher for illness or accidents?
- (6) Are there any vaccination programs for student?

5. Access to outside society

- (1) Are there any programs which students can be involving with villages?
- (2) What are the functioning student societies in school?

5. 補足調査(2014年12月23日－2015年1月11日)

(5-1)行政官

Local village government officer (Grama Sewaka)

Name of Village: Cover Area:

Main Services:

1. What is the population size of following each category
Total population Population under 17 years old
- Male population Female population
2. What percentage of ethnicity and their main occupations?
Sinhala: %.(Occupation:)
Tamil: %.(Occupation:)
Others: %.(Occupation:)
3. What is the distribution of occupations in this area?
4. How many new identity cards did issue through your office in last year? _____
5. How many?
 - Schools Temples
 - Complete houses Line-rooms
 - Shops Praja shaala (community place)
6. What is the level of adult literacy?
7. How many children do not attend school in your area?
8. Are there any social societies within this community?
 - Community development society Welfare society
 - Funeral supporting society Youth society
 - Children society
9. Are there any social awareness programs focused on education, health and social development?
10. Are there any government projects such as Gama naguma, Divi naguma conducting in this area?
11. How many households do migrate from other places in last year?
12. Which ethnicity is more likely to migrate? And do you know why?

(5-2)助産婦

Family Health Officer/ Mid Wife

1. How often do you visit to a line room or a home? I
2. How many pregnant mothers and newly born children you need to take care?
3. Does family have enough knowledge of sexual education and family planning in this area?
4. Is there any permanent family planning program among this community?
If Yes, what is it?
5. What programs do government conducts for improving children health and nutrition?
6. Is there any proper vaccination program for children?
Vaccination Name:
7. What is the percentage of child mortality in your area?
8. How many pregnancy incidents/ mothers under 17 years recorded in your area in last year?
9. Are there any health education programs conducting in your area?
If yes what are they?
10. What are the condition/ status of children nutrition in your area?
11. Do you satisfy about the sanitary conditions of line rooms?
If no, what are the problems they have?
12. What are the frequent health problems they faced?
13. What are the remedies, actions you / Government have been taken?
What are the difficulties you have been facing when reaching to those people?

6. 補足調査 (2015年7月22-27日)

(5-3) 民間農園

(6-1) 子ども

Private Estate

Owner

Name: Sex: Age:

Ethnicity: Sinhala / Sri Lanka Tamil / Indian Tamil / Moore / Others

Respondent

Name: Sex: Age:

Ethnicity : Position:

Working Years: Education:

Estate Areas:

History of Estate:

1) From when and whom:

2) Reason to own estate:

Number of Workers: Tamil = Sinhala =

(1) Estate Manager (1) Factory Manager:

(2) Assistant Manager. (2) Factory Officer:

(3) Field Officer (3) Factory Worker:

(4) Kanganee

(5) Workers

(1) Office Manager: (2) Welfare Officer:

(3) Office Staff: (4) Child Development Officer:

No of Line - room: No of households in line-house:

No of people in line-house:

Average Year to stay in this estate:

Ethnicity of workers:

Caste of workers:

Issues of workers:

Issues of children:

Any support for workers:

For Children

1. What is your name?

2. How old are you?

3. What is your grade?

4. Do you have any problems on your health?

5. Do you like to school?

6. Do you like?

1) Friends 2) Teachers 3) Neighborhood 4) Parents

7. Can you speak freely to?

1) Parents 2) Teachers 3) Friends 4) Neighborhood

8. Do you like to study?

1) at school 2) at home

9. Which do you like most to go to school? 1) in city 2) in Village

10. Would you like to pass grade 5th exam? Why?

11. In your school are there any other ethnicities?

12. If yes, do you play with them?

13. Is there any difference among other ethnicities and you?

1) by teachers 2) facilities 3) others

14. What problem or issue in your school?

15. Do you help any house works at home?

1) cleaning 2) taking care of young sisters or brothers

3) correcting fire woods 4) carrying water

5) plucking 6) others

7.補足調査(2月12－29日)

(7-1)世帯主/子ども

Additional Survey

Section A: Family Detail

○Name: ○Sex : ○Age :

○Education: ○Name of Village or Estate:

A1.Ethnicity:

A2.Family Detail: (If mother or father is missing, please ask reasons)

1.With whom do you live in now?

2.How do you think about your family finance? Why do you think so?

1) Very Good. 2) Good. 3) Average. 4) Poor. 5) Very Poor

A3.Health:

1. Do you have any problems on your health in the past 1 year? Why?

2. Can you go to see doctors as you like? Yes / No

3. Any problems in medical conditions in your area?

Section B: Perception of Living Conditions

B1. Living Area

1. How long do your family live there?

2. Do you have enough space for study or for yourself? Yes/ No

3. Are you satisfied with your living? Why?

1) Very satisfactory. 2) Satisfactory. 3) Not really. 4) Bad

4. What kinds of problems does your home or living area have?

B2. Do you feel safe in below? If not, why?

1) School. Yes / No 3) Commuting. Yes / No

2) Living area Yes / No 4) Town. Yes / No

B3. Have you ever been discriminated or abused in below?

(If yes, what kinds of and why?)

1) School Yes / No 4) Hospital or clinic Yes / No

2) Living area. Yes / No 5) Government office Yes / No

3) Other area. Yes / No 6) Neighbors Yes / No

Section C: Perception of Education

C1. School: 1. Do you like school? Why?

2. Can you choose your preferable school? No Why?

3. What grade is necessary for you? Why?

C2. Are you satisfied with your school in blow? Why?

(1) Very satisfactory (2) Satisfactory (3) Not really (4) Bad

1) Facilities : Satisfactory. 4) Transportation from home : Satisfactory.

2) Distance from home : Satisfactory. 5) School hours : Satisfactory.

3) Time from home : Satisfactory. 6) Contents of class : Not really.

C3. How long do you study at home or additional school?

1) at home:

2) at additional school:

C4. Disparity

1. In your school are there any other ethnicities? Yes / No.

2. If yes, do you play with them?

3. Is there any difference between you and other ethnicity?

If yes, what kinds of difference?

C5. How many days did you miss during the last semester? Why?

C6. If parents cannot pay the required money, what happen on you?

C7. Issues: 1. Are there any issues at school? What kinds of issues?

2. Have you ever been neglected in school or society? Why?

3. Do you have any complaints about school? What kinds of?

Section D: Life & Society

D1. Can you speak freely to? Yes/No

1) Parents: 2) Friends: 3) Teachers: 4) Neighborhood:

D2. What is your dream in your future? Want to find a job in outside of this estate.

1. For dream come true, what kinds of efforts you are doing?

2. What are factors to stop your dream?

3. What are elements to support your dream?

D3. Do you have freedom to choose your life after school graduation? If not, why?

1) Jobs Yes / No. 3) Living outside your village Yes / No.

2) Marriage Yes / No 4) Expressing your opinion. Yes / No.

D4. Do you help your parents at home? What kinds of help do you do? Why?

Confidential

The information collected in this survey will be confidential and individual level information will not be divulged to any person or agency



Survey Round	Name of District	PSU Number	SSU Number	Household Number
Survey Group Number				

Child Activity Survey - 2008

Sri Lanka

Survey Schedule

Department of Census & Statistics

Ministry of Finance & Planning

Sri Lanka



Sponsored by :- International Labour Organisation

IDENTIFICATION INFORMATION

1. Address (Location) :-

.....

2. Province :-

3. District :-

4. DS Division :-

5. Name of MC / UC :-

(If urban sector only)

Ward No :-

6. GN Division : Number :- Name :-

7. Name of Village :-

(If rural sector only)

8. Name of Estate :-

(If estate sector only)

9. C.B. No. :-

*** Result Code**

Completed 1

Deferred 2

Not competent respondant at home 3

Refused 4

Household is temporarily closed 5

Household is demolished / Vacant 6

Other (Specify) 7

10

District		Sector		DS Division		

11

Survey Round		PSU Number			SSU Number		Household Number	

12

Number of Households in this unit

13

Result

*

14

Name of the Head of the Household :-

.....

15

Interviewer's

Name :-

16

Supervising Officer's

Name :-

Signature :- Date :-

Codes for Section A

Col. 3 - Relationship to head of the household

Head of the household-----1
Wife / Husband-----2
Son / Daughter-----3
Parents-----4
Other Relative-----5
Domestic Servants-----6
Boarder-----7
Other-----9

Col. 4 - Sex

Male-----1
Female-----2

Col.7 - Ethnicity

Sinhala-----1
Sri Lanka Tamil-----2
Indian Tamil-----3
Sri Lanka Moors-----4
Malay-----5
Burgher-----6
Other-----9

Col. 8 - Religion

Buddhist-----1
Hindu-----2
Islam-----3
Roman Catholic /
Other Christian-----4
Other-----9

Col. 9 - Attendance at School or Other Education Institution

Pre School-----1
School-----2
University-----3
Other educational institution-----4
Vocational / Technical Institution-----5
Pending result-----6
Does not attend-----7

Col. 10 - Level of Education

Studying in Grade 1-----00
Passed Grade 1-----01
Passed Grade 2-----02
Passed Grade 3-----03
Passed Grade 4-----04
Passed Grade 5-----05
Passed Grade 6-----06
Passed Grade 7-----07
Passed Grade 8-----08
Passed Grade 9-----09
Passed Grade 10-----10
Passed G.C.E.(A/L) or
equipment-----11
Passed Grade 12-----12
Passed G.C.E.(A/L) or
equipment-----13
Passed GAQ/GSQ-----14
Passed Degree-----15
Passed Post Graduate Degree / Diploma-----16
No Schooling-----19

Col. 11 - Marital Status

Never Married-----1
Married-----2
Widowed-----3
Divorced-----4
Separated-----5

Col. 12 - Current Activity

Employed-----1
Unemployed-----2
Student-----3
Household work-----4
Unable / Too old work-----5
Other-----9

SECTION B : ACTIVITY STATUS OF CHILDREN (FOR CHILDREN 5 - 17 YEARS OLD)

B1. Name of the child					
Serial Number	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>	<input type="text"/>
B2. Is he/she currently attending school	1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B3 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B9	1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B3 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B9	1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B3 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B9	1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B3 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B9	1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B3 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B9
B3. What Grade is he/she currently attending school	Grade <input type="text"/>	Grade <input type="text"/>	Grade <input type="text"/>	Grade <input type="text"/>	Grade <input type="text"/>
B4. What is the distance to school which he/she currently attending					
1. Less than 1 km	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2. 1 km to less than 3 km	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3. 3 km to less than 5 km	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4. 5 km to less than 10 km	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5. 10 km or more than 10 km	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
B5. How does he/she go to school					
1. Walking	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
2. Bicycle	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
3. Motor bicycle / Three wheeler / Car	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
4. Bus / Train	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
5. School Van	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
6. Other	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
B6. Did he/she miss any school days during the last week					
1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B7 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B13	1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B7 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B13	1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B7 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B13	1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B7 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B13	1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B7 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B13	1. Yes <input type="checkbox"/> → Go to B7 2. No <input type="checkbox"/> → Go to B13
B7. How many school days he/she miss during the last week	Days <input type="text"/>	Days <input type="text"/>	Days <input type="text"/>	Days <input type="text"/>	Days <input type="text"/>

Serial Number																																																												
B8. What are the main reason he/she did not attend school during the last week 1. School vacation period 2. Teacher was absent 3. Bad weather conditions 4. To help family business 5. To help at home with housekeeping activities 6. Illness / Injury / Disablement 7. Civil disturbance 8. Awaiting G.C.E. (O/L) results 9. Other (Specify)	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> </table> } Go to B13	1	2	3	4	5	6	7	8	9	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> </table> } Go to B13	1	2	3	4	5	6	7	8	9	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> </table> } Go to B13	1	2	3	4	5	6	7	8	9	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> </table> } Go to B13	1	2	3	4	5	6	7	8	9	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> </table> } Go to B13	1	2	3	4	5	6	7	8	9										
1																																																												
2																																																												
3																																																												
4																																																												
5																																																												
6																																																												
7																																																												
8																																																												
9																																																												
1																																																												
2																																																												
3																																																												
4																																																												
5																																																												
6																																																												
7																																																												
8																																																												
9																																																												
1																																																												
2																																																												
3																																																												
4																																																												
5																																																												
6																																																												
7																																																												
8																																																												
9																																																												
1																																																												
2																																																												
3																																																												
4																																																												
5																																																												
6																																																												
7																																																												
8																																																												
9																																																												
1																																																												
2																																																												
3																																																												
4																																																												
5																																																												
6																																																												
7																																																												
8																																																												
9																																																												
B9. Has he/she ever attended school 1. Yes 2. No	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table> → Go to B11 → Go to B10	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table> → Go to B11 → Go to B10	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table> → Go to B11 → Go to B10	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table> → Go to B11 → Go to B10	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table> → Go to B11 → Go to B10	1	2																																													
1																																																												
2																																																												
1																																																												
2																																																												
1																																																												
2																																																												
1																																																												
2																																																												
1																																																												
2																																																												
B10. What is the main reason ,why he/she has never attended school 1. Too young (not eligible to enter school) 2. Disabled / Illness 3. School too far away 4. Financial problems 5. Not interested in school / poor academic progress } 6. Education not considered valuable 7. School not safe / Civil disturbance 8. To learn a job 9. To work for pay as employee or as own account worker or as unpaid family worker in family business } 10. Help at home with housekeeping activities 11. Other	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>11</td></tr> </table> } Go to B13	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>11</td></tr> </table> } Go to B13	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>11</td></tr> </table> } Go to B13	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>11</td></tr> </table> } Go to B13	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>10</td></tr> <tr><td>11</td></tr> </table> } Go to B13	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1																																																												
2																																																												
3																																																												
4																																																												
5																																																												
6																																																												
7																																																												
8																																																												
9																																																												
10																																																												
11																																																												
1																																																												
2																																																												
3																																																												
4																																																												
5																																																												
6																																																												
7																																																												
8																																																												
9																																																												
10																																																												
11																																																												
1																																																												
2																																																												
3																																																												
4																																																												
5																																																												
6																																																												
7																																																												
8																																																												
9																																																												
10																																																												
11																																																												
1																																																												
2																																																												
3																																																												
4																																																												
5																																																												
6																																																												
7																																																												
8																																																												
9																																																												
10																																																												
11																																																												
1																																																												
2																																																												
3																																																												
4																																																												
5																																																												
6																																																												
7																																																												
8																																																												
9																																																												
10																																																												
11																																																												

Serial Number					
B11. At what age did he/she leave school	Age <input type="text"/> <input type="text"/>	Age <input type="text"/> <input type="text"/>	Age <input type="text"/> <input type="text"/>	Age <input type="text"/> <input type="text"/>	Age <input type="text"/> <input type="text"/>
B12. What are the main reason for leaving school 1. Further schooling not available or too far away 2. Disabled/ Illness 3. Financial problems 4. Poor in studies / Not interested in school 5. Education not considered valuable 6. School not safe / Civil disturbance 7. To learn a job 8. To work for pay as employee or as own account worker or as unpaid family worker in family business 9. Help at home with housekeeping activities 10. Other (specify)	<input type="text"/> 1 <input type="text"/> 2 <input type="text"/> 3 <input type="text"/> 4 <input type="text"/> 5 <input type="text"/> 6 <input type="text"/> 7 <input type="text"/> 8 <input type="text"/> 9 <input type="text"/> 10	<input type="text"/> 1 <input type="text"/> 2 <input type="text"/> 3 <input type="text"/> 4 <input type="text"/> 5 <input type="text"/> 6 <input type="text"/> 7 <input type="text"/> 8 <input type="text"/> 9 <input type="text"/> 10	<input type="text"/> 1 <input type="text"/> 2 <input type="text"/> 3 <input type="text"/> 4 <input type="text"/> 5 <input type="text"/> 6 <input type="text"/> 7 <input type="text"/> 8 <input type="text"/> 9 <input type="text"/> 10	<input type="text"/> 1 <input type="text"/> 2 <input type="text"/> 3 <input type="text"/> 4 <input type="text"/> 5 <input type="text"/> 6 <input type="text"/> 7 <input type="text"/> 8 <input type="text"/> 9 <input type="text"/> 10	<input type="text"/> 1 <input type="text"/> 2 <input type="text"/> 3 <input type="text"/> 4 <input type="text"/> 5 <input type="text"/> 6 <input type="text"/> 7 <input type="text"/> 8 <input type="text"/> 9 <input type="text"/> 10
B13. Has he/she ever received or are receiving any skills training 1. None 2. Formal apprenticeship 3. Informal apprenticeship 4. Other (specify).....	<input type="text"/> 1 → Go to B15 <input type="text"/> 2 <input type="text"/> 3 } Go to B14 <input type="text"/> 4	<input type="text"/> 1 → Go to B15 <input type="text"/> 2 <input type="text"/> 3 } Go to B14 <input type="text"/> 4	<input type="text"/> 1 → Go to B15 <input type="text"/> 2 <input type="text"/> 3 } Go to B14 <input type="text"/> 4	<input type="text"/> 1 → Go to B15 <input type="text"/> 2 <input type="text"/> 3 } Go to B14 <input type="text"/> 4	<input type="text"/> 1 → Go to B15 <input type="text"/> 2 <input type="text"/> 3 } Go to B14 <input type="text"/> 4
B14. Describe the subject of training <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> * <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> * <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> * <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> * <input type="text"/> <input type="text"/> <input type="text"/> *
B15. Did he/she spend leisure activities during the last week 1. Yes 2. No	<input type="text"/> 1 → Go to B16 <input type="text"/> 2 → Go to B17	<input type="text"/> 1 → Go to B16 <input type="text"/> 2 → Go to B17	<input type="text"/> 1 → Go to B16 <input type="text"/> 2 → Go to B17	<input type="text"/> 1 → Go to B16 <input type="text"/> 2 → Go to B17	<input type="text"/> 1 → Go to B16 <input type="text"/> 2 → Go to B17
B16. Time spent on leisure activities during the last week	Hours <input type="text"/> <input type="text"/>	Hours <input type="text"/> <input type="text"/>	Hours <input type="text"/> <input type="text"/>	Hours <input type="text"/> <input type="text"/>	Hours <input type="text"/> <input type="text"/>

* For office use

SECTION B1 : ECONOMIC ACTIVITY (For children 5 - 17 years old)

Serial Number					
B17. Did he/she engage in any work at least <u>one hour</u> during the last week (As employee, own account worker, employer or unpaid family worker)	1. Yes	1 → Go to B19	1 → Go to B19	1 → Go to B19	1 → Go to B19
	2. No	2 → Go to B18	2 → Go to B18	2 → Go to B18	2 → Go to B18
B18. Even if he/she was not working last week, did he/she have a job, business or enterprise from which he/she was temporarily absent	1. Yes	1 → Go to B19	1 → Go to B19	1 → Go to B19	1 → Go to B19
	2. No	2 → Go to B30	2 → Go to B30	2 → Go to B30	2 → Go to B30
B19. Main occupation/economic activity				
	[][][][] *				
B20. Main Industry				
	[][][][] *				
B21. Where did he/she carryout his/her main job	1. At (his/her) family dwelling	1	1	1	1
	2. Employer's house	2	2	2	2
	3. Formal office	3	3	3	3
	4. Factory	4	4	4	4
	5. Plantations / Farm / Garden	5	5	5	5
	6. Construction sites	6	6	6	6
	7. Quarrying sites	7	7	7	7
	8. Shops / Markets / Boutiques	8	8	8	8
	9. Different places (Mobile)	9	9	9	9
	10. On the street (fixed place)	10	10	10	10
	11. Restaurants / Hotels	11	11	11	11
	12. Other (specify)	12	12	12	12

* For office use

Serial Number																																																							
B22. What is his/her employment status 1. Regular employee 2. Casual employee 3. Own account worker 4. Employer 5. Unpaid family worker	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> </table> } Go to B23 } Go to B24	1	2	3	4	5	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> </table> } Go to B23 } Go to B24	1	2	3	4	5	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> </table> } Go to B23 } Go to B24	1	2	3	4	5	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> </table> } Go to B23 } Go to B24	1	2	3	4	5	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> </table> } Go to B23 } Go to B24	1	2	3	4	5																									
1																																																							
2																																																							
3																																																							
4																																																							
5																																																							
1																																																							
2																																																							
3																																																							
4																																																							
5																																																							
1																																																							
2																																																							
3																																																							
4																																																							
5																																																							
1																																																							
2																																																							
3																																																							
4																																																							
5																																																							
1																																																							
2																																																							
3																																																							
4																																																							
5																																																							
B23. What are the benefits did he/she receive his/her main work other than salary/wages etc... (Multiple answers can be circled) 1. Nothing 2. Weekly rest days 3. Medical expenses 4. Assistance with schooling 5. Free accommodation 6. Food/ Meal 7. Paid leave 8. Clothing 9. Transportation 10. Other	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>10</td></tr> </table>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>10</td></tr> </table>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>10</td></tr> </table>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>10</td></tr> </table>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> <tr><td>5</td></tr> <tr><td>6</td></tr> <tr><td>7</td></tr> <tr><td>8</td></tr> <tr><td>9</td></tr> <tr><td>10</td></tr> </table>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1																																																							
2																																																							
3																																																							
4																																																							
5																																																							
6																																																							
7																																																							
8																																																							
9																																																							
10																																																							
1																																																							
2																																																							
3																																																							
4																																																							
5																																																							
6																																																							
7																																																							
8																																																							
9																																																							
10																																																							
1																																																							
2																																																							
3																																																							
4																																																							
5																																																							
6																																																							
7																																																							
8																																																							
9																																																							
10																																																							
1																																																							
2																																																							
3																																																							
4																																																							
5																																																							
6																																																							
7																																																							
8																																																							
9																																																							
10																																																							
1																																																							
2																																																							
3																																																							
4																																																							
5																																																							
6																																																							
7																																																							
8																																																							
9																																																							
10																																																							
B24. What is his/her average monthly income from the main work (Wages and salaries, income inkind, profits, etc...)	<table border="1"> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>						<table border="1"> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>						<table border="1"> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>						<table border="1"> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>						<table border="1"> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>																														
B25. In addition his/her main work did he/she do other work 1. Yes 2. No	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2 → Go to B27</td></tr> </table>	1	2 → Go to B27	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2 → Go to B27</td></tr> </table>	1	2 → Go to B27	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2 → Go to B27</td></tr> </table>	1	2 → Go to B27	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2 → Go to B27</td></tr> </table>	1	2 → Go to B27	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2 → Go to B27</td></tr> </table>	1	2 → Go to B27																																								
1																																																							
2 → Go to B27																																																							
1																																																							
2 → Go to B27																																																							
1																																																							
2 → Go to B27																																																							
1																																																							
2 → Go to B27																																																							
1																																																							
2 → Go to B27																																																							
B26. Number of hours work during the last week	Hours <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table>			Hours <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table>			Hours <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table>			Hours <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table>			Hours <table border="1"><tr><td></td><td></td></tr></table>																																										

Serial Number					
B27. During the last week when did you mostly carry out these activities 1. During the day (between 06:00 and 18:00) 2. During the evening (after 18:00) 3. Day and evening full time (all day) 4. Week-end 5. After school 6. Other (specify)	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">6</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">6</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">6</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">6</div>	
B28. What is the mode of payment 1. Piece rate 2. Daily 3. Weekly 4. Monthly 5. Other	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div>	
B29. What did he/she do with his/her earnings 1. Give all/part of money to the parents or guardians ... 2. Pay school fees / buy things for school 3. Buy things for household 4. Buy personal effects 5. Save 6. Other (specify)	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">6</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">6</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">6</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 2px; text-align: center;">6</div>	

SECTION B2 : UNEMPLOYMENT (AGED 10 YEARS AND OVER)

If the child age is below 10 years then go to Section B3 (Question B40)

Serial Number					
B30. Was he/she seeking work during the past week 1. Yes 2. No	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> → Go to B31 <input type="checkbox"/> → Go to B33	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> → Go to B31 <input type="checkbox"/> → Go to B33	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> → Go to B31 <input type="checkbox"/> → Go to B33	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> → Go to B31 <input type="checkbox"/> → Go to B33	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> → Go to B31 <input type="checkbox"/> → Go to B33
B31. What steps did he/she take to seek work during the last 4 weeks (mark at most 4 boxes) 1. Registered at employment agencies 2. Applied to employment office/prospective employer .. 3. Placed/answered job advertisements 4. Sought help from friends/relatives 5. Checked at farms, factories, estates, markets, } work sites, etc 6. Tried to obtain equipment, credit and a } workplace to establish his/her own business 7. Other steps taken (specify)	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
B32. How long has he/she been seeking work.	Months <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	Months <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	Months <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	Months <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	Months <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
B33. If opportunity to work had existed, did he/she want to work or able to start work during the last week 1. Yes 2. No	<input type="checkbox"/> → Go to B35 <input type="checkbox"/> → Go to B34	<input type="checkbox"/> → Go to B35 <input type="checkbox"/> → Go to B34	<input type="checkbox"/> → Go to B35 <input type="checkbox"/> → Go to B34	<input type="checkbox"/> → Go to B35 <input type="checkbox"/> → Go to B34	<input type="checkbox"/> → Go to B35 <input type="checkbox"/> → Go to B34

Serial Number					
B34. What is the main reason why he/she not available or did not want work 1. Found a job but waiting to start 2. Believes no suitable work is available 3. Discouraged, not able to get a job 4. Has no skill or training 5. Student (Engaged in studies) 6. Engaged in housekeeping activities 7. Family/parents does not allow 8. Unable to work (illness/disability) 9. No need to work 10. Other (specify)	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12345678910 </div> <div style="margin-top: 20px;">} Go to B35</div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12345678910 </div> <div style="margin-top: 20px;">} Go to B35</div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12345678910 </div> <div style="margin-top: 20px;">} Go to B35</div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12345678910 </div> <div style="margin-top: 20px;">} Go to B35</div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12345678910 </div> <div style="margin-top: 20px;">} Go to B35</div> </div>
B35. During the last 12 months did he/she engage for a substantial period of time in any work (As employee, own account worker, employer or unpaid family worker) 1. Yes 2. No	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12 </div> <div style="margin-top: 10px;">→ Go to B36</div> <div style="margin-top: 10px;">→ Go to B40</div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12 </div> <div style="margin-top: 10px;">→ Go to B36</div> <div style="margin-top: 10px;">→ Go to B40</div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12 </div> <div style="margin-top: 10px;">→ Go to B36</div> <div style="margin-top: 10px;">→ Go to B40</div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12 </div> <div style="margin-top: 10px;">→ Go to B36</div> <div style="margin-top: 10px;">→ Go to B40</div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12 </div> <div style="margin-top: 10px;">→ Go to B36</div> <div style="margin-top: 10px;">→ Go to B40</div> </div>
B36. Occupation	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * * </div>	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * * </div>	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * * </div>	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * * </div>	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * * </div>
B37. Industry	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * * </div>	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * * </div>	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * * </div>	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * * </div>	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * * </div>
B38. What is his / her employment status 1. Regular employee 2. Casual employee 3. Own account worker 4. Employer 5. Unpaid family worker	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12345 </div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12345 </div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12345 </div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12345 </div> </div>	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center;"> <div style="display: flex; justify-content: space-between; width: 100%;"> 12345 </div> </div>
B39. Number of days worked during the last 12 months	days <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * </div>	days <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * </div>	days <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * </div>	days <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * </div>	days <div style="border: 1px solid black; width: 30px; height: 20px; display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> * * * </div>

* For office use

SECTION B3 : HOUSEKEEPING ACTIVITIES (For children 5 - 17 years old)

Serial Number					
B40. Did he/she attend to housekeeping activities during the last week 1. Yes 2. No	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
	1 → Go to B41 2 → Go to B43	1 → Go to B41 2 → Go to B43	1 → Go to B41 2 → Go to B43	1 → Go to B41 2 → Go to B43	1 → Go to B41 2 → Go to B43
B41. What were the housekeeping activities did he/she engage during the last week. (Multiple answers can be circled) 1. Cooking 2. Shopping for household 3. Cleaning the hosedhold 4. Washing clothes 5. Caring for children / old / sick 6. Other (specify)	1	1	1	1	1
	2	2	2	2	2
	3	3	3	3	3
	4	4	4	4	4
	5	5	5	5	5
	6	6	6	6	6
	6	6	6	6	6
B42. Time spent on housekeeping activities during the last week	Hours <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> → Go to B44	Hours <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> → Go to B44	Hours <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> → Go to B44	Hours <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> → Go to B44	Hours <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> → Go to B44
	B43. Reason for not doing any housekeeping work 1. Engaged in studies 2. Infirm / disable 3. Dislike 4. Parents / Guardians do not allow 5. No need to do so 6. Other (specify)	1	1	1	1
2		2	2	2	2
3		3	3	3	3
4		4	4	4	4
5		5	5	5	5
6		6	6	6	6
6		6	6	6	6

SECTION B4 : USUAL RESIDENCE OF CHILD'S PARENTS (For children 5 - 17 years old)

Serial Number					
B44. Where is his / her father live 1. Among the household 2. Away from the household } (Living elsewhere in the country) } 3. Away from the household } (Living outside the country) } 4. Dead 5. Not known	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5
B45. Where is his / her mother live 1. Among the household 2. Away from the household } (Living elsewhere in the country) } 3. Away from the household } (Living outside the country) } 4. Dead 5. Not known	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5

SECTION C: HEALTH AND SAFETY (All children 5-17 years who have worked at any time during the last week or during the last 12 monthys)

<p>C1. Name of the child Serial Number</p>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>
<p>C2. Has the child ever been hurt at work / workplace or suffered from illness / injuries due to his / her work.</p> <p>1. Yes-----</p> <p>2. No-----</p>	<p>1 → Go to C3</p> <p>2 → Go to C8</p>	<p>1 → Go to C3</p> <p>2 → Go to C8</p>	<p>1 → Go to C3</p> <p>2 → Go to C8</p>	<p>1 → Go to C3</p> <p>2 → Go to C8</p>	<p>1 → Go to C3</p> <p>2 → Go to C8</p>
<p>C3. How often he / she hurt or did suffer from illness / injuries</p> <p>1. Often / frequently-----</p> <p>2. Occasionally-----</p> <p>3. Seldom / rarely-----</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p>
<p>C4. Did he / she have any of the following that was related to work in the last 12 months (Multiple answers can be circled)</p> <p>1. Eye / Ear infection-----</p> <p>2. Skin infection-----</p> <p>3. Breathing problems-----</p> <p>4. Back / muscle pains-----</p> <p>5. Body ache / fatigue-----</p> <p>6. Stomach problems-----</p> <p>7. Body injuries (Wounds / deep cut)-----</p> <p>8. Loss of limbs-----</p> <p>9. Headache / Fever-----</p> <p>10. Others (specify)-----</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p> <p>10</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p> <p>10</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p> <p>10</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p> <p>10</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p> <p>10</p>

<p>C5. Referring to the most serious accident / illness / injuries , how serious was it</p> <p>1. Not serious - no treatment required-----</p> <p>2. Serious- Had to get medicine or treatment (at clinic, doctor,hospital) }</p> <p>3. Stopped work temporarily-----</p> <p>4. Could not work permanently-----</p>	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>→ Go to C8</td></tr> <tr><td>2</td><td rowspan="3">} Go to C6</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> </table>	1	→ Go to C8	2	} Go to C6	3	4	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>→ Go to C8</td></tr> <tr><td>2</td><td rowspan="3">} Go to C6</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> </table>	1	→ Go to C8	2	} Go to C6	3	4	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>→ Go to C8</td></tr> <tr><td>2</td><td rowspan="3">} Go to C6</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> </table>	1	→ Go to C8	2	} Go to C6	3	4	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>→ Go to C8</td></tr> <tr><td>2</td><td rowspan="3">} Go to C6</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> </table>	1	→ Go to C8	2	} Go to C6	3	4	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>→ Go to C8</td></tr> <tr><td>2</td><td rowspan="3">} Go to C6</td></tr> <tr><td>3</td></tr> <tr><td>4</td></tr> </table>	1	→ Go to C8	2	} Go to C6	3	4
1	→ Go to C8																																		
2	} Go to C6																																		
3																																			
4																																			
1	→ Go to C8																																		
2	} Go to C6																																		
3																																			
4																																			
1	→ Go to C8																																		
2	} Go to C6																																		
3																																			
4																																			
1	→ Go to C8																																		
2	} Go to C6																																		
3																																			
4																																			
1	→ Go to C8																																		
2	} Go to C6																																		
3																																			
4																																			
<p>C6. Had he / she been admitted to hospital due to his / her injuries / accident/ illness</p> <p>1. Yes-----</p> <p>2. No-----</p>	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>→ Go to C7</td></tr> <tr><td>2</td><td>→ Go to C8</td></tr> </table>	1	→ Go to C7	2	→ Go to C8	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>→ Go to C7</td></tr> <tr><td>2</td><td>→ Go to C8</td></tr> </table>	1	→ Go to C7	2	→ Go to C8	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>→ Go to C7</td></tr> <tr><td>2</td><td>→ Go to C8</td></tr> </table>	1	→ Go to C7	2	→ Go to C8	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>→ Go to C7</td></tr> <tr><td>2</td><td>→ Go to C8</td></tr> </table>	1	→ Go to C7	2	→ Go to C8	<table border="1"> <tr><td>1</td><td>→ Go to C7</td></tr> <tr><td>2</td><td>→ Go to C8</td></tr> </table>	1	→ Go to C7	2	→ Go to C8										
1	→ Go to C7																																		
2	→ Go to C8																																		
1	→ Go to C7																																		
2	→ Go to C8																																		
1	→ Go to C7																																		
2	→ Go to C8																																		
1	→ Go to C7																																		
2	→ Go to C8																																		
1	→ Go to C7																																		
2	→ Go to C8																																		
<p>C7. If hospitalized number of days spent at the hospital</p>	<p>Days <table border="1"><tr><td> </td><td> </td></tr></table></p>			<p>Days <table border="1"><tr><td> </td><td> </td></tr></table></p>			<p>Days <table border="1"><tr><td> </td><td> </td></tr></table></p>			<p>Days <table border="1"><tr><td> </td><td> </td></tr></table></p>			<p>Days <table border="1"><tr><td> </td><td> </td></tr></table></p>																						
<p>C8. Do you carry heavy loads at work</p> <p>1. Yes-----</p> <p>2. No-----</p>	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table>	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table>	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table>	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table>	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table>	1	2																				
1																																			
2																																			
1																																			
2																																			
1																																			
2																																			
1																																			
2																																			
1																																			
2																																			
<p>C9. Do you operate any machine / heavy equipment at work</p> <p>1. Yes-----</p> <p>2. No-----</p>	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table>	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table>	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table>	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table>	1	2	<table border="1"> <tr><td>1</td></tr> <tr><td>2</td></tr> </table>	1	2																				
1																																			
2																																			
1																																			
2																																			
1																																			
2																																			
1																																			
2																																			
1																																			
2																																			

C10. Are you exposed in any of the following
(Multiple answers can be allowed)

- 1. Dust / Fumes----- 1
- 2. Fire / Gas / Flames----- 2
- 3. Loud noise----- 3
- 4. Extreme cold or heat----- 4
- 5. Dangerous tools (knives etc)----- 5
- 6. Work underground----- 6
- 7. Workplace too dark----- 7
- 8. Insufficient ventilation----- 8
- 9. Work at height----- 9
- 10. Chemicals (preicide etc)----- 10
- 11. Explosives----- 11
- 12. Other (Specify)----- 12

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12

- 1
- 2
- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12

SECTION D: Perception of Parents / Guardians or other relatives of the currently working child in the age group 5-17 years

D1. Name of the child Serial Number	_____ [][]	_____ [][]	_____ [][]	_____ [][]	_____ [][]
D2. What do you prefer the child to be doing at this time 1. Work for income only----- 2. Assist family business----- 3. Assist with housekeeping activities----- 4. Attend school only----- 5. Attend school and assist with family business }----- 6. Attend school and assist with house keeping activities }----- 7. Combine work for income and schooling----- 8. Other (Specify)-----	[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]	[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]	[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]	[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]	[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]
D3. What problems does the child have faced of his / her work 1. Injuries / illness / poor health----- 2. Poor grades in school----- 3. Physical abuse----- 4. Emotional abuse----- 5. Sexual abuse----- 6. Fatigue----- 7. No play time----- 8. No time to go to school-----	[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]	[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]	[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]	[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]	[1] [2] [3] [4] [5] [6] [7] [8]

<p>D4. What are the main reason for letting the child work</p> <p>1. Suppliment family income-----</p> <p>2. Help pay family debt-----</p> <p>3. Help in household enterprise-----</p> <p>4. Schooling not useful for future-----</p> <p>5. School too far-----</p> <p>6. Cannot efford school fees-----</p> <p>7. Child not interested in school -----</p> <p>8. Learn skills-----</p> <p>9. To temporarily replace someone } unable to work</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p> <p>7</p> <p>8</p> <p>9</p>
<p>D5. If the child stops working what will happen</p> <p>1. Household living standard decline-----</p> <p>2. Household cannot afford to live-----</p> <p>3. Household enterprise cannot operate-----</p> <p>4. Fully and other labour unaffordable-----</p> <p>5. Does not affect anyway-----</p> <p>6. Other (Specify)-----</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>6</p>
<p>D6. If the child is working for someone how was his / her relationship with the employer</p> <p>1. Good-----</p> <p>2. Bad-----</p> <p>3. Indifferent-----</p> <p>4. Not relevant-----</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>→ Go to D7</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>→ Go to D7</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>→ Go to D7</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>→ Go to D7</p>	<p>1</p> <p>2</p> <p>3</p> <p>4</p> <p>→ Go to D7</p>

D7. If “Bad” give the main reason

1. Wants to much work done-----

1

1

1

1

1

2. Wants work done for long hours-----

2

2

2

2

2

3. Pays poorly-----

3

3

3

3

3

4. Does not pay in time-----

4

4

4

4

4

5. Abuse physically-----

5

5

5

5

5

6. Abuse verbally / Emotionally-----

6

6

6

6

6

7. Other (Specify)-----

7

7

7

7

7

SECTION E: All children 5-17 years who are living away from household / family

<p>E1. Name of the child</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>Serial Number</p>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; margin: 0 auto;"></div>
<p>E2. What is the main reason he / she is living away</p> <p>1. Due to work-----</p> <p>2. Looking / Searching for a job-----</p> <p>3. Attend school-----</p> <p>4. Attend training / Training institute-----</p> <p>5. Run away from home-----</p> <p>6. Don't know-----</p> <p>7. Other (Specify)-----</p>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">6</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">7</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">6</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">7</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">6</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">7</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">6</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">7</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">3</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">4</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">5</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">6</div> <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">7</div>
<p>E3. How long ago did he / she leave this household</p>	<p>Months <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; display: inline-block;"></div></p>	<p>Months <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; display: inline-block;"></div></p>	<p>Months <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; display: inline-block;"></div></p>	<p>Months <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; display: inline-block;"></div></p>	<p>Months <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; display: inline-block;"></div></p>
<p>E4. Does he / she send cash remittance to this household</p> <p>1. Yes-----</p> <p>2. No-----</p>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> → Go to E5 <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> → Go to E5 <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> → Go to E5 <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> → Go to E5 <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div>	<div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">1</div> → Go to E5 <div style="border: 1px solid black; width: 20px; height: 20px; margin: 0 auto; text-align: center;">2</div>
<p>E5. If "Yes" what is the amount he / she send to the household</p>	<p>Rs <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; display: inline-block;"></div></p>	<p>Rs <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; display: inline-block;"></div></p>	<p>Rs <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; display: inline-block;"></div></p>	<p>Rs <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; display: inline-block;"></div></p>	<p>Rs <div style="border: 1px solid black; width: 40px; height: 20px; display: inline-block;"></div></p>

SECTION F: LABOUR FORCE STATUS (For persons 18 years and over)

Serial Number					
<p>F1. What was (s) he doing last week?</p> <p>Working for pay profit or family gain ----- 1</p> <p>Did not work due to off season, illness etc but had an enterprise ----- 2</p> <p>Did not work due to vacation, sickness etc.but had a job } ----- 3</p> <p>Retired from previous employment and engaged in work for pay, profit or family gain } ----- 4</p> <p>Available or looking for work----- 5 → Go to F4</p> <p>Doing household work----- 6 } - Go to next person</p> <p>Engaed in studies----- 7 } - Go to next person</p> <p>Other (Specify)----- 9 } - Go to next person</p>					
<p>F2. (a) His / Her (Principal) occupation -----</p> <p>(b) His / Her (Principal) Industry / Economic Sector-----</p>	<p>-----*</p> <p>-----*</p>	<p>-----*</p> <p>-----*</p>	<p>-----*</p> <p>-----*</p>	<p>-----*</p> <p>-----*</p>	<p>-----*</p> <p>-----*</p>

* For office use

SECTION G - Housing Information

G1. Type of structure

Single House-----	1
Flat-----	2
Attached house / Annex-----	3
Line room / Row house-----	4
Slum / Shanty-----	5
Other (Specify)-----	9

G2. Tenureship status of household dwelling

Owned-----	1	} Rs:----- } Monthly Rental } Value
Provide free by employer-----	2	
Rented from private owner-----	3	
Rented from Government / Public ownership }-----	4	
Subsidized by employer-----	5	
Ohter (Specify)-----	9	

G3. How many rooms does the household occupy-----

G4. Total floor area (sq.feet)

Less than 100-----	1
100 - Less than 250-----	2
250 - Less than 500-----	3
500 - Less than 750-----	4
750 or more than 750-----	5

G5. Principal material used for the house

G5.1 Walls

Brick-----	1
Cabook-----	2
Cement block-----	3
Pressed soil blocks-----	4
Mud-----	5
Plank / Metal sheet-----	6
Cadjan / Palmyrah-----	7
Other (Specify)-----	9

G5.2 Floor

Cement-----	1
Terrazo / Tile-----	2
Mud-----	3
Other (Specify)-----	9

G5.3 Roof

Tile-----	1
Asbestos-----	2
Concrete-----	3
Metal sheet-----	4
Cadjan / Palmyrah etc-----	5
Other (Specify)-----	9

G6. Principal Source of lighting

Electricity-----	1
Kerosene oil-----	2
Solar energy-----	3
Other (Specify)-----	9

G7. Principal Source of Cooking

Fire wood-----	1
Gas-----	2
Kerosene-----	3
Electricity-----	4
Saw dust / Paddy husk-----	5
Other (Specify)-----	9

G8. Pricipal Source of drinking water

Protected well within premises-----	1
Protected well outside premises-----	2
Unprotected well-----	3
Tube well-----	4
Tap within unit/Premises (main line)-----	5
Tap outside premises (main line)-----	6
Stream water collected & distributed by pipe lines-----	7
River / Tank / Streams-----	8
Other (Specify)-----	9

G9. Toilet facilities

Exclusive for the household-----	1
Sharing with another household-----	2
Public convenience-----	3
None-----	4

G10. Does the household own any of the following items?

Motor car / Van-----	1
Motor cycle / Scooter-----	2
Bicycle-----	3
Three wheelers-----	4
Bus / Lorrt-----	5
Television-----	6
Radio / Cassette Player-----	7
Sewing machine-----	8
Washing machine-----	9
Refrigerator-----	10
Personal Computer-----	11
Telephone (Domestic)-----	12
Telephone (Mobile)-----	13

G11. Does the household own any land?

Yes-----	1	→ Go to G13
No-----	2	

G12. How many land area does the household own?

	A	R	P
Land area with occupied household			
Paddy land			
High land			

G13. Does the household own any livestock?

Yes-----

1

No-----

2

 → Go to G15

G14. How many?

In Number

Cattle / Buffaloes	
Goats / Sheep	
Swine (Pigs)	
Poultry	
Other	

G15. Did your household members obtain a loan during the last 12 months?

Yes-----

1

No-----

2

G16. What was the main reason for obtaining a loan?

To meet essential household expenditures (Buying foods, child education, etc) }	1
To buy vehicles-----	2
To purchase / remodel / repair / construct a house-----	3
To meet health related expenditure for household members (Medicine, Doctor or Hospital fees) }	4
To meet the following ritual expenditures (Birth, Funeral and Wedding) }	5
To open / increase business-----	6
To pay previous loan-----	7
Other (Specify)-----	9

G17. Where did the household obtain the loan?

Banks (Government / Private)-----	1
Money lenders-----	2
Sales assets (Land, House, Jewelleries, etc)-----	3
Finance companies / Leasing companies-----	4
Own place of work (Departments, Boards, Private companies etc)-----	5
Other (Specify)-----	9

G18. What is the household's average monthly expenditure?

--	--	--	--	--	--

 Rs

G19. What is the household's average monthly income?

--	--	--	--	--	--

 Rs

G20. Living standard of the household according to the enumerator

Very good-----	1
Good-----	2
Satisfactory-----	3
Bad-----	4
Very bad-----	5